

俺、ツインテールになります。 The Another Red Hero

IMBEL

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

丹羽光太郎はツインテールという一つの少女向けの髪型に心を奪われた男。

しかしそんな自分がどこか変だと気づいた光太郎は、そのことを誰にも打ち明けないまま高校生へと成長してしまった。

自分の思いをひた隠しにし続けた彼は、ある一人の少女との出会いをきっかけに空想装甲（テイルギア）を纏い、異世界の怪物・エレメリアンと戦う羽目になってしまう。光太郎はツインテール戦士「テイルファイヤー」として今日も侵略者と戦うのだ。：女体化というオマケつきで。

これは自分のツインテール愛を隠してきた男の、愛と正義の物語なのかもしれない。

※この小説はラノベ「俺、ツインテールになります。」をベースにした2次小説です。キャラ崩壊、原作破壊、ご都合主義などの要素を含んでおりますので、お読みになる際にはご注意ください。

目次

第1巻

プロローグ 男は愛していた | 1

第1話 春、時々ツインテール | 4

第2話 ツインテールは好きですか？ | 11

第3話 怪人はツインテールが好き？ | 18

第4話 目覚めよ、ツインテール | 26

第5話 赤と焔のツインテール | 35

第6話 ツインテールが必要な訳 | 47

第7話 万歳、ツインテール | 58

第8話 ツインテール、出陣 | 68

第9話 ツンデレとツインテール | 77

第10話 裏方とツインテール | 89

第11話 青のツインテール | 98

第12話 共闘、ツインテール | 110

第13話 波紋、ツインテール | 122

第14話 ツインテールの静けさ | 133

第15話 決戦、ツインテール 前編 | 142

第16話 決戦、ツインテール 後編 | 153

第17話 決着、ツインテール | 167

番外編 設定資料集（1巻終了時点） | 175

第2巻

第18話 始まりのツインテール？ | 180

第19話 それぞれの夜 | 192

第20話 うなじとツインテール | 203

第21話	飢婚者とツインテール	218
第22話	巨乳とツインテール	231
第23話	休日とツインテール	246
第24話	下着とツインテール	257
第25話	胸囲とツインテール	269
第26話	秘密とツインテール	289
第27話	変身とツインテール	303
第28話	砲撃とツインテール	317
第29話	前夜とツインテール	336
第30話	赤殺しとツインテール	350
第31話	助っ人とツインテール	367
第32話	共闘とツインテール	386
第33話	爆発とツインテール	401
第34話	解放とツインテール	415
番外編	設定資料集（2巻終了時点）	428
第35話	眼鏡とツインテール	434
第36話	再会とツインテール	451
第37話	処刑人とツインテール	475
第38話	助言とツインテール	495
第39話	唇とツインテール	509
第40話	喪失とツインテール	527
第41話	約束とツインテール	542
第42話	宴とツインテール	564
第43話	過去とツインテール	581

第44話	誕生とツインテール	603
第45話	布石とツインテール	629
第46話	擦り傷とツインテール	645
第47話	疑惑とツインテール	664
第48話	理事長とツインテール	679
第49話	三つ首とツインテール	703
第50話	露見とツインテール	721
第51話	ライブとツインテール	742
第52話	有線とツインテール	762
第53話	火傷とツインテール	778

第1巻

プロローグ 男は愛していた

ツインテールという髪型を知っているだろうか。

簡単に説明すればツインテールとは、髪を左右で縛った髪型の俗称であり、数ある髪型の中でも比較的メジャーな部類に入るものだ。この髪型は髪のを右と左で縛るだけという簡単な髪型なのでその歴史はかなり古い。

少なくとも18世紀のヨーロッパでは既にツインテールという髪型は存在したと言われる文献が確認されており、それより昔の時代にも似たような型をしていた者もいたそうだ。19世紀のアメリカでもチアリーダーの髪型はツインテールが多く、シンプルな髪型が故に数多くの派生の髪型を生み出している。

アニメや漫画などを見てもツインテールのキャラは調べればごろごろ出て来るし、昔は「少女がするような髪型」の象徴だったツインテールも、近年では「好意を寄せているが、本人の前では強がってしまふ」所謂ツンデレ系のキャラにも多用されている。

そう、ツインテールとは時代を変え、その意味を変えながらも、多くの人々に愛されている髪型なのだ。それこそ、数世紀の時を超えた現代にまで。

そのように長い間愛されてきたこの髪型には、何か大きな力が宿っているのではないだろうか？ それこそ、世界を変えてしまうほどの強大な力が。

…さて、ここで一人の男の話をしよう。ある男をこの髪型を愛していた。それもとびつきりに、ツインテールという髪型に心を奪われてしまったほどこに。

だが、その男は…愛しているが故にその愛に大いに苦しんだ。

これはそんな男の物語である。

※

俺はツインテールが好きだ。

幼き頃、自分と同年代の少女が、その2つに別れた髪を揺らしながら歩く姿に、ときめいた。ポニーテールのように一本に纏めていないので、左右で違った動きをするあの独特なスタイル。三つ編みのように編み込んでいないので髪の本一本が意志を持ったようにゆらゆらと動く美しさ…。

その髪型をツインテールだと知った時、俺の中の何かが変わった。ツインテールという髪型は愛おしい物になり、そして俺の光ともいうべき象徴へとなった。

俺にとつては単なる髪型とかそういう概念を超えた何かへと変わっていったのだ。

…でも、そんな俺でも年を重ねていく内に、自分の好みがどこか周りと違い、おかしいことに嫌でも気づいてきてしまう。

それがはつきりと知ったのが、俺が小学校3年生の時だ。

小学校中学年にもなつてくると、自然と好きな人への話や異性の話題で盛り上がるものだ。何かの弾みで俺にもその手の話題が回って来たことがあった。

誰だかは忘れたが、俺はある一人の女の子の名前を出した。確か一学年上の女の子だったはずだ。ツインテールが似合う綺麗な子だった。

話題を振った同級生は興奮して「その子のどこがいいのか？」と聞いてきた。俺は迷う事なく「あの子が優しく、髪がツインテールだから」と答えた。

その瞬間、聞いて来た同級生の顔がさつと変わったのを覚えている。期待していた答えと違い、驚いているのか、と俺は思ったが、どうやら違うようだ。

「お前、変だぞ」

この言葉だけを言って同級生はそそくさと去っていった。

…俺は途端に怖くなった。同級生が俺に向けながらいったその言葉は、俺を何か異物か何かを見ていったような発言だったからだ。ま

るで全否定するような目で俺を見てきた。あの目を、あの視線を、あの言葉を俺はきつと忘れることはできないだろう。

幸いにも同級生はそれ以上俺に突っかかることもなく、数日後には俺に言ったこともすっかり忘れて普通に接してくれた。このことが原因でイジメにでも…と心配していたがそのような事態に収まっただ嬉しかった。

けれども、心に深く刺さったその出来事は俺を苦しめることになった。同級生は忘れることが出来ても、俺には忘れられない。

自分が好きな物は気持ち悪い物なのか？ 俺のツインテール好きは他人から見れば異常な性癖なのか？ …ずぶずぶと何かに嵌っていくような事態になった。

それ以降、俺は人前でツインテールのことを口にするのではなくなった。自分の思いを、趣味嗜好を偽り、人受けの良い自分を演じた。…それこそ、友達や先生、親にすら。

自分の本当に好きな物を好きだとはつきり言えなくなってしまうた。

優等生を演じ、ツインテールという髪を愛する自分を心の奥底へと押しやった。

…そして、俺はその思いを閉じ込めたまま、俺は15歳へとなった。この春、高校生へなろうとしている今でも、誰にも話さないまま。

第1話 春、時々ツインテール

人、人、人、人。休日の繁華街は切れ目すら見えぬ程に行きかう大勢の人々で賑わっている。

その人の流れを縫うようにして、俺、丹羽光太郎（にわこうたろう）は一人歩いていた。

だがその足取りは重い。まるで迷子になった子供みたいに弱弱しく歩を進めている。はつきりいつて気分は最悪だ。人ごみで酔ってしまうし、見知らぬ街をあてもなく歩くことにも精神的な負担がかかっている。そんな俺の心情とは裏腹に町中の桜が綺麗に花を咲かしているのは何かの皮肉なのだろうか？

季節は4月。新たな始まりを意味する季節。明日から高校生へとなる光太郎は春休み最後の日を、近所を適当に歩き回ることでも過ごしていた。

しかし、その始まりが俺にとっては物凄く重い気分させている。これから始まる高校生活が自分に重くのしかかっている、そんな気がするのだ。

（あーあ、地元の奴らともなかなか会えなくなるんだよなあ…）

俺、丹羽光太郎はこの春からこの町にある『私立陽月学園』へと通うことになった高校生だ。それを気に地元を離れ、この町へと引越して来た。電車通学という手もあったのだけれど、実家と学園はかなり離れてて、とてもじゃないけど通えない。その為、親元を離れての一人暮らしとなったのだ。

…まあ、当然不安だらけだ。

小学校も中学校も皆と同じ場所に通うだけだったのに、学力という格付けで皆が別々の学校へと進むことになった現実、生まれ育った地元を離れての一人暮らし、仲が良かった友人との別れ。離れて暮らすことでの負担や迷惑など、心配事や不安事が押し寄せてくる。

（…はあ）

光太郎はため息をつきながら、繁華街の脇にあるベンチへと座った。

ああ、まだ何も始まってはいないのに、既に押しつぶされそうなこの気持ちはなんなのだろうか。こんなことになるのなら、地元に留まっていた方が良かったかも…。

まるでネガティブのバーゲンセールのように落ち込んでいく俺の心。：ああいや、そんなことを考えるな。ポジティブポジティブ。これ以上考え込んじゃうと鬱になっちゃういそうだから、とりあえず落ち着こう。

光太郎は深呼吸を数回し、胸いっぱい空気を吸い込む。そして肩に下げているバッグから家から持ってきた清涼飲料のペットボトルを取り出して、一気に口に呷った。

まだ冷たさが残っている中身が胃に落ちていく感触をしっかりと感じ、ようやく気分が落ち着いてくる。

：とりあえず、落ち着こう。俺は3年間：まあ、途中で学校を辞めるとかがなければ、この町に住むことになる訳だ。今住んでいる家には親も兄弟もいない、完全な一人暮らしだ。深夜遅くまで起きていても問題ないし、何をしようと怒られない。いつまで起きていても何をしようと誰にも注意されない、自由な時を過ごせる。

それにせつかく引越してきたんだ、これを機に何か新しいことを始めてもいいかもしれない。例えば、今まで出来なかったバイトをやってみるとか。

今、考え付くだけでもこれだけの事が出て来る。：何だ、案外、悪い事ばかりじゃないじゃないか？俺は少しだけ機嫌が良くなった気がした。

それよりも俺が本当に気を付けなければならないのはたった1つのことだけだ。幸いにも新しい街に引越してきたことで、俺のことを知っている人はこの町に一人もいない。自分のどこかおかしいこの性癖だけは周りにしつかりと隠さなければ。もし、ばれたりしたら…。

と自分の忌々しい性癖を頭に浮かべたその瞬間、さっと自分の横に誰かが座った。

(…ん?)

チラリと隣を見る。俺の横に座ったのは、小学生くらいの女の子だった。余所行ききの服装に身を包み、手には近くの売店で買ったと思われるアイスクリームが握られていた。ああ、きつとあの子は家族連れとかでここへ来たんだらうとかぼんやりと思い、すぐに顔を戻した。見たこともない赤の他人だったし、これ以上興味を示す必要もないだろう。

「…」

けれど少しだけ気になって、もう一度顔を動かした。俺はその子を…正確に言えばその子の髪型をもう一度見た。

隣に座っている女の子の髪型。それは長い髪をゴムで左右に縛って、綺麗に別れていた。

(ツイン…テール…だと?)

思わず目を見開いた。そして今度は女の子の髪型全体を冷静に見てみる。

左右を根元で縛っているので、ある程度の遊びを残しているその髪型。左右違う動きをし、まるで2つ別れた髪が別々の個性を持っているような髪型。

…ツインテールだ。あの髪型は！ 迷うことなき、ツインテールじゃないかあ!!

光太郎がそれをツインテールだと認識した瞬間、まるで止まっていた歯車が大きな音を立てて動き出すような感覚がした。体中に何かが漲って来るような感覚が光太郎の体を襲う。

ああ、なんて美しい髪型、麗しい髪型!! 俺の心を奪い、俺の全てを変えたその髪型!

あの子の右側のツインテールはアイスクリームを舐めるたびにゆらゆらと揺れていた。まるで幼い子供特有の元気がそのまま具現化されたように大胆に動いている! 逆に左側のツインテールはその揺れに従わずに沈黙を保っている。ほう、シャイなのか。右側は大胆な思考で左側は乙女な思考を持っているのか? ああ、いいじゃないかいじゃないか!!

さあ叫べ、その心理の名を。愛の象徴を! 尊ぶべき名を! ツイ

ンテール！ ツインテール！ ツインテール！！ ツインテエエエル
!!!

感情の大波は光太郎の全身を揺さぶり、大声で叫びたい衝動を必死で堪えていた。右手にはペットボトルが握られていたままだというのに、両の拳に力が入っていることにも気づかないほど興奮していた。

そして、光太郎が正気に戻ったのは、強く握りしめたペットボトルの中身が漏れ、自分のズボンを濡らした時だった。

「うわあっ！」

太もも辺りが冷たい感覚がして、思わず声が出た。そして自分の出した声とズボンから滴り落ちる液体の感覚でハッと我に返る。

(…何やってんだ、俺!?)

我に返った瞬間、激しい自己嫌悪が光太郎を襲う。俺はまたあれをやったのか!? あまりにもあの子が素晴らしいツインテールだったから、正気を失ったのか!? 大体俺は何分くらいこうしていた!?

視線を動かすと、まだあの女の子がいた。…が、女の子の様子が明らかに変だった。

俺を見て、怯えている。まるでエイリアンか何かを見るような目で俺を見ている。さっきまであんなに楽しそうに笑っていた様子が微塵も見られない。彼女が舐めていたアイスクリームは足元に落ち、アイスの部分がコンクリートに溶け出していた。

一体何で怯えているんだ? と思い思考を巡らせて…俺は途端に自分が何をやらかしたか気付いて、ぞつとした。俺はあの子のツインテールを見ていただけだ。…でも、それは端から見れば、あの子から見て、俺は何をしている人間に見える?

『アイスクリームを舐めている幼女をジッと見つめて、興奮している高校生』これが示すものは?

…答えは簡単、変質者か、あるいはその予備軍。それにしか見えな
いだろう。どう見ても、犯罪者です、本当に、本当にありがとうございます
いました。

あ、女の子がとうとう泣き出した。泣き声に驚いて、通行人がこっ

ちを見ている…。あ、何人が携帯を取り出して…？ あ、やばい、やばい、ヤバい！

瞬間、俺は自分の荷物を手に取り、全速力でその場から離れた。女の子の泣き声にも大騒ぎしている通行人のことも気にしている余裕がなかった。

※

くそ、くそくそくそお！ あれほど表には出すなと誓った途端にこれか！

光太郎は人ごみの中を生涯で一番早い身のこなしで駆け抜けていく。人ごみの合間を縫って、時には人にもぶつかって。「気をつけろ！」という怒鳴り声が聞こえるが、気にしている余裕がなかった。

(あんな小さな女の子にも反応するなんて…俺は猿か!? ツインテールであれば幼女でも興奮する変態か!?)

俺の心は自己嫌悪と罪悪感でいっぱいだった。…いつもそうだ。自分にツインテールが絡むと、絶対に碌なことにならない。

自分の好きなことを胸の奥に封じ続けた結果、光太郎は時折あのような暴走を引き起こしていた。見事なツインテールを目にすると自分で自分を抑えられなくなるのだ。

(ああ、きつとあの子は俺に怯えてもうツインテールにすることができなくなるんじゃないか…)

一人の少女のツインテールへの未来を奪ってしまったかもしれないことへの罪悪感が光太郎の自己嫌悪を加速させる。

俺の好みはツインテール。それを何で隠すのか？ …それが世間一般から見るとそれは「おかしい」からだ。

如何に「ツインテールという髪型の素晴らしさ」を声高に叫んでも、世間は分ってくれない。遠目にヒソヒソされるか逃げられるか、警察呼ばれるのが関の山。裁判やっても負けるに決まっている。この日本で普通と違うことする、あるいはルールを外れるという行為は大変な孤独感と劣等感を味わう。俺はそれが怖かった。だから俺

は必死で自分の趣味を隠して、頭のいい生き方をしたかったのに…まるでツインテール好きという呪いが俺にかかっているみたいだ。

と自分への自虐で頭が一杯になって、前方への注意を怠った次の瞬間、誰かと思いつきりぶつかった。さっきまでの肩のぶつかりとは違い、正面衝突といつてもいいほどの衝撃が光太郎を襲い、無様に転んだ。光太郎とぶつかった人も同じように転び、ぶつかった相手の所持品とも思われる電子機器類が地面を滑った。

「ちよつと…気を付けてよね！」

倒れた女性からの声だった。その声色から、ぶつかった相手が女性だということを理解するのに数秒かかる。光太郎の頭の中はぶつかった時の衝撃と、地面に叩きつけられた痛みでいっぱいだった。

「あ、すいませんでした…」

そう言つて、よろよろと光太郎は体を起こす。そしてようやくぶつかった相手を見る。

ぶつかった相手はその声色から女性だと思っていたが…もつと幼かった。先ほどのベンチのツインテール少女並みの背丈であり、齡は二桁もいっていないかもしれない。女性というより少女といったほうが正しいだろう。髪は茶髪で腰に届きそうなほど長く、何故かジャンパー代わりに白衣を纏っていた。

「…ふん」

ぶつかってきた俺の謝罪の言葉に一応納得をしたのか、少女はそれ以上追及してこなかった。そして地面に落ちた電子機器を拾い、白衣を整えると、そのまま人ごみの中に消えていった。

(…悪い事したな)

俺は苦虫を噛みしめるような顔をした。今日1日で2回も女の子に迷惑をかけた。ついていない、そう感じた。少なくとも女の子に嫌な思いをさせてしまうのは男の風上にも置けない奴だ、という自論を持つ俺にとって今日の出来事はまさしく汚点とも言うべき恥ずべき行為だ。

(ああ、でも…さっきのあの子…)

自分の体の土埃を落としながら、光太郎はふと思った。あんなに長

い髪を持っている彼女ならば、ツイントールがさぞお似合いだっただろうに…。

(…ああ、いかんいかん。ツイントールの事は考えるな)

俺のツイントールがらみの悪い癖が出てしまうのを必死で堪えながら、光太郎はその場を後にした。

残ったのは2人の少女への罪悪感と、自分に対する自虐心だけだった。

第2話 ツインテールは好きですか？

今日は俺が3年間通うことになる私立陽月学園の入学式の日。

右も左も知らない顔ばかりの環境での入学式は正直緊張しまくりだったけど、入学式の後にすぐ行われた新入生オリエンテーションが俺の緊張感を上手い具合に緩和してくれた。

各部活が主催で行われるそれは素晴らしいクオリティで、ここでの学園生活を否が応でも期待してしまう。：どうやら、昨日までしこりのようにあった心配事が少しだけ無くなった、そんな気がする。

そしてオリエンテーションの興奮が冷め切らない中、俺たち新入生は教室へと戻り、担任からの諸注意を受けていた。学園での過ごし方、今後のスケジュール。でも、俺はその諸注意を完全に聞き逃していた。

勿論、あのオリエンテーションに浮き足立っていることも原因がある。でもそれ以上に俺にとって重要な事件があったからだ。：何故かって？ 今日のこの短い時間で素晴らしいツインテールの持ち主を見つけってしまったからだ。しかも2人も！

だから俺は必死で自分の思いを封じていた。今騒ぐのは不味い、昨日のようになりたくなくなったら落ち着け。血が滲むほどの強さで両手を握りしめる。自分の気持ちを押さえつける。

(：しかし、見れば見るほど、凄いツインテールだ)

凄まじいツインテールの持ち主の一人は光太郎の席の前方にいた。確か：津辺愛香(つべあい)さん、だっけ？自己紹介の時、そう言っていた気がする。

背丈も高く、すらっとしたスタイル。鮮やかな青色の髪を綺麗に2つに分け、凛とした空気を帯びている少女。それを例えるなら武士、とでもいうべきだろうか。

凛とした彼女の雰囲気と幼げな髪型のツインテール。このどこかギャップが見られる組み合わせは見事に成功している。まるで真逆な組み合わせが見事に噛み合って、絶妙なハーモニーを引き出している！

光太郎は数秒間彼女に見とれ：直ぐに目を逸らした。これ以上見ていると、自分自身、胸の高鳴りを押さえたいられるか分からない。そして光太郎が感激したもう一人の凄いツインテールの持ち主は今この場にはいない。それは光太郎にとって幸いだった。あんなに見事なツインテールを目のあたりにしたら俺はもう正気でいられるかどうか…。

「おい、早くしてくれよ」

と、前の席の男子が光太郎の机を叩く音で、我に返る。

「え？」

面食らった顔をしている俺に男子が「プリント」と苛立ちそうに言った。その言葉で俺はようやく理解する。

「あ、はいはい」

ごめんねと呟いて、先ほど渡されていた部活希望アンケートを男子に渡した。そうだそうだ、今の時間はこれの記入時間だったんだっけ。早めに書き終わって、ツインテールのこと頭が一杯ですっかり抜け落ちていた。

(…いかな)

光太郎はツインテールが関わると、暴走する自分を律した。とりあえず、今後はツインテールの事はあまり考えないようにしなければ。何せクラスメイトにツインテールが存在するのだ。あれに見とれてもしょうっかり暴走でも引き起こしたら…。

「あれ、名前が未記入のものがありませんね」

と、担任のどこか困ったような間延びした声が聞こえた。その声につられ、全員が視線を動かす。

「あ、それ多分俺です。慌てて」

前方にいる赤髪の男子生徒が名乗りを上げた。

「あ、観東君だったんですか」

どうやら観東(みつか)という生徒が名前を書き忘れていたらしい。…良かった、俺じゃあなかったらしい。

が、次の瞬間、耳を疑う言葉が聞こえた。

「…ツインテール部？ あら、この学校にツインテール部なんて部活

ありましたっけ?」

は?今:先生は何て言った? ツイン:テール:部?

「あ、新設希望の部活ですね!でしたら観束君、あとで職員室で申請の手続きを」

「え!?! いや、俺は、その:」

観束君は勝手にどんどん会話を進める先生の行動にテンパってしまっている。そりゃあそうだろう。聞き間違えじゃなければ今「ツインテール部」と先生は言ったはずだ。:つまり彼はさっきのプリントの部活新設の欄に「ツインテール部」って書いたのか?

(:何書いてんだよ、あいつ)

光太郎は戦々恐々といった様子でその光景を眺めていた。俺の他にもツインテール好きがいたことには驚きだが、それ以上に彼はいつたいどうなってしまうのか、それが問題だった。まさか俺にまで火の粉が飛んでくるなんてことはないだろうな:。

「そうですね、ツインテール部ですか。観束君はツインテールがとつても大好きなんですわね」

おい、その辺でもうやめましょうよ、先生! それ以上、観束君の心を抉るのはやめようぜ、おい! こっちもおつかなくてしようがないんだよ! 光太郎はキリキリ痛む心の中でそうツッコんだ。

「はい、大好きです!!」

それで観束(お前)はなんでそう答えた!? なんで条件反射でさも当然のようにドヤ顔で答えた!? もっと良い回答があったはずだぜ、なんで君は地雷を盛大に踏み抜いたんだい!?

そしてそれを言った瞬間の観束君の顔は、もう説明できないほど悲惨な顔をしていた。:ああ、こいつ絶対何にも考えないで勢いだけで言っちゃったな。

:今の観束君の心は目も当てられないほどの大惨事と化していると思う。先生の言葉のナイフが黒ひげ危機一髪の高くグサグサに観束君の心に刺されているに違いない。

「それでは皆さん、これを持ちましてHRを終わりますが、最近この辺りで不審者が増えていそうですから注意してくださいね♪」

しかも先生は最後に盛大な爆弾を置いていきやがった！ 終わる直前という気が緩んだ瞬間という最悪のタイミングで爆弾を起爆させやがった！

「そのタイミングでそれを言うことか!? 先生、待ってくれ！ 俺は本気でツインテールが大好きで!! あ…違…その」

あーあーあ…。光太郎は言い訳無用の大惨事を引き起こしてしまった男子生徒、観束君を憐れむような目で見つめた。

幸いにも自分に火の粉は降りかからなかったものの、彼の今後の3年間の高校生活を考えると、もう憐れ以外の言葉が見つからなかった。

※

同時刻、陽月学園から数キロ離れた路地裏。

子供どころか大人も近づくことを拒みそうな暗闇の世界に、一人の少女がいた。科学者の象徴の印である白衣を身に纏い、煤汚れた壁へと寄りかかる。

「…駄目、ね」

電子機器を動かしながら、少女は呟いた。彼女が持っている電子機器には何やら測定器みたいな目盛がついており、少女は不機嫌そうな顔で目盛とにらめっこを繰り返していた。

（何人かは反応があったけど、どれもこれも弱すぎる…あれを扱えるレベルじゃないわ）

ため息について電子機器を白衣のポケットに戻すと、その代わりに嚴重に梱包してある包みを取り出した。ガムテープを剥がし、何重にも巻いてある包装紙を丁寧に取り除く。その中から出て来たのは、小さな小箱。その側面にあるスイッチを押すと、そこには赤く煌めくベルトのバックルが収められていた。

（今思えば、昨日、大物を取り逃がしてしまったのが痛かったわね）

忌々しげに唇を噛む。そう、上手くいけば昨日、全ての方がついていたはずのだ。…あの忌々しい全速力の男にぶつかって、このベルト

を託すに値するほどの力を持つ人間を見失うまでは。

あれは迂闊だった。この広い街であれほどの属性力を持った人間にもう一度会えるとは思えないのに、自分は余裕を持ち過ぎていた。人前で騒いで余計な目をされるのを気にして、冷静にしていた行動が完全に裏目に出てしまった。

(とりあえず、あの男とぶつかった地点を捜査してみるしかないわね。運が良ければ会う事ができるかも…)

少女は小箱の蓋をそつと閉めると、路地裏から出るために歩き始めた。

そう、何としても見つけ出さなければならぬ。このベルトを扱える人間を、最強の属性力を持つ人間…ツイントールを愛する人間を探さなければ。

※

「都会って物が高いんだなあ」

この町一の大きさを誇る多目的ホール『マクシム空果』の屋外駐車場のベンチに腰掛けながら、光太郎は手元の紙袋を眺めた。街角の露店で買ったパンがそこには入っている。

入学式は午前中に終わり、特に用事がない俺にとって、午後は完全フリーの時間であった。お腹が減っていたし、どこか見晴らしが良い所でご飯が食べたかった光太郎は、高台にあるここへと立ち寄った。

「んじや、いただきますーす」

食べる前のいただきますを言って、アツアツのパンをモソモソと口に運ぶ。

ああ、ここに友達の一人でもいたらなあ…どこかアンニュイな思考でお腹を満たしていく。今日はこの景色が俺の友達か。ロマンチストかそうでないのか。

「に、してもあいつ…」

変な奴だったな。頭に浮かぶのは、最悪の高校生デビューを飾ったクラスメイトの観東君のことだ。

ツインテールが好き、ね。俺だって勿論大好きだけど、あそこまで公言出来るほどじゃあない。：やつぱり、ツインテールが絡むと碌なことにならない。彼の明日からの学園生活が少しだけ心配だ。

俺はあんならなくてよかったと光太郎はしみじみと思う。やはり世間一般から見るとツインテール好きとは「おかしい存在」だったのだ。あの全てが終わった後のみんなの視線は痛々しい物があった。

もしかしたら、あれは一種の警告じゃないだろうか？ 常識というレールを外れてしまった者の末路。もし、失敗してしまつたら、ああやってさらし者にされる。

しかし、ツインテール部、ね。どこまで観東君は本気なんだろう？ あれはただウケを狙いたかっただけなのか？ …それとも本気で書いたのか？

だとしたら、凄。俺にはそんな度胸はない。さらし者にされてまで、自分の好きな物を好きと言える自信はないのだ。俺は臆病だから、人当たりがいいように自分を常に偽ってしまう。

「あーあ…」

俺にも、彼みたいな度胸が少しでもあれば、少しは…。

と思つた次の瞬間。凄まじい轟音と共に、白い閃光が世界を一色に染め上げた。

「!？」

ドーン！という耳を裂くような爆音の後、光太郎は前のめりに吹っ飛んだ。凄まじい衝撃で手元にあつたパンが地面に転がった。

何があつた？ テロか、放火か？ 突然の出来事にそう考えるのが精一杯だった。

じんじんと痛む耳を押さえながら、必死に目を凝らして立ち上がる。：そして気付いた。粉塵の向こう側に誰かがいる。パツと期待したが：すぐに何かが変なことに気付く。

「何だ、あれ？」

のっしのっしと粉塵を横切りながら、人影はこっちに近づいてくる。が、それはどう見ても人とは言い難い何かだった。

そいつは2メートル以上の身長で爬虫類に分類されるのかよく分

からない何かの見た目をしていた。体重が相当重いのか、ただ歩くだけでも足元のコンクリートにヒビを入れている。更に恐竜のような鋭い牙と爪。極めつけは人間にはついていないはずがないトカゲのような尻尾。…どれを見ても、人と認識するのに無理がある。

それを一言で説明するならば：「怪人」。テレビやアニメで見ているお馴染みの奴らが、次元の壁を突破して、そのまま出て来たような姿だった。

これは何だ？ ドツキリかなんかか？ でも、カメラマンや仕掛け人が見当たらないんだけど…。

そして、頭の中がグチャグチャな光太郎を置いてけぼりにして、奴は開口一番にこう叫んだ。

「ふははははは!!この生きとし行ける全てのツインテールは我々の物だ!!」

…ああちくしょう、ツインテールが絡むと本当に碌なことにならない！光太郎は心の中でそう叫んだ。

第3話 怪人はツインテールがお好き？

『全てのツインテールを我らの手中に収める！』

開口一番、大声で世迷言を叫んだ怪人はその歩みを止め、パチンと指を鳴らした。

「モケモケー!!」

その合図でどこからともなく怪物の周りに全身黒ずくめの恰好をした奴らがわらわらと出て来る。全員同じ格好をしているこいつらは所謂、戦闘員って奴なのだろう。

「諸君！ 今から我々は先鋒部隊として初めての任務を開始する！ 体長殿の面子にかけて、絶対に失敗は許されぬ!!」

怪人は握りしめた拳を天高く突き上げ、戦闘員全員に向けて演説を始めた。

「まずは手始めに、この町にいるツインテールの女子全てをここへと連れてくるのだ！ この周辺に極上のツインテール属性が集中しているのは既に調べがっている、草の根分けても探し出せ！」

「モケケー!!」

怪人の演説に賛同するように戦闘員も次々と手を上げて、掛け声をあげている。その光景に満足したのか、怪人は「うんうん」と嬉しそうに頷いていた。

(…何これ、コント?)

目の前で繰り広げられている光景に光太郎はもう呆然とするしかなかった。こいつなんて流暢な日本語で犯罪ギリギリの発言を口走っているんだ。

「さあ行けえー！」

そして、戦闘員があちこちへと散らばっていくのを確認した後、怪人はうーむと顎に手をあてて悩み始める。

「ふむ…しかし、ツインテールの女子だけを集めるのはどうも、な。やはり私の好みであるうさぎのぬいぐるみを持った幼女も連れてこいと命じるべきだったな。よし、あやつらが帰ってきたら…む？」

「あ」

ぶつぶつと呟く怪人はふと何かの気配を感じ、ゆつくりと光太郎がいる方を向いて…互いの視線が交差した。

「…」

一体どれくらい見つめ合っていたんだろう？ 数秒、あるいは数分？ 初対面の怪人の知りたくもない好みを勝手に聞いてしまい、凄くきままずい空気が形成されていくのをはつきりと肌で感じる。

「…何だ貴様は」

先陣を切ったのは怪人だった。襲われてしまうのではと反射的に身構えていたので、怪人側からの対話に俺はテンパってしまう。

「あ、その、あなたは…さっきツインテールとか幼女とか、その…」

「ああ、言ったが？」

怪人はさも当然のような口調でそう言った。何だろうこの怪人、凄いだんディな声をしているのに、その声でツインテールとか幼女とかか混じっているだけで全てが台無しになっている気がする。人間と怪人、未知との遭遇の第一声がこんな会話で良いのだろうか？

色々と呆れる光太郎の気持ちなど知るわけもなく、怪人は光太郎の体を品定めするようにじろりと見て、ふんと鼻で笑った。

「なんだ、男か」

…何か無性に腹が立ってくるのは気のせいかな？ 何で俺は変態発言を繰り返す怪人なんか鼻で笑われなければならないんだろうか？

「我らが求めるのはツインテール属性を持つ女子とうさぎのぬいぐるみを持つ幼女のみ！ 男のお前になんぞ用はない！ 立ち去れ！」

光太郎は呆れるのを乗り越えて、頭が痛くなってきた。さつきから怪人は真面目な口調でとんでもない変態発言をズバズバ言っているし、それに…こいつのうさぎのぬいぐるみに対する並々ならぬこだわりは何なんだろうか。

「…早くここから立ち去れ」

いや、そんな唸るような声で立ち去れと言われても。俺は別に居たくてここに居るわけじゃないし、まだ昼食も全部食べてないし…。

「もう一度だけ言う」

怪人は自分の命令を聞かない光太郎に腹を立てたのか、ついに実力行使に出た。光太郎の目の前に駐車してある車をむんずと掴み、そのまま無造作に放り投げた。車はまるで見えないロープで吊るされているみたいに長い間空中を漂い、およそ数百メートル離れた地点に激突し、そのまま静止した。

「…とつとここから立ち去れえ!!」

最後通告だ、と言わんばかりに怪人は恐ろしい眼光で光太郎を睨みつけた。

「は、はいいい!」

俺は条件反射で飛び上がり、慌ててその場から離れた。

※

予想外。今の状況を説明するにはその一言に過ぎるだろう。奴らの行動が予想よりもあまりにも早かった。

「モケー!」

「きゃあああ!!」

慌しく走り抜ける幾つもの戦闘員の足音と時折聞こえてくるツインテールの女子たちの怒声と悲鳴。その中を少女は疾駆する。

茶髪を靡かせ、白衣を揺らしながら走る少女は、心の中で毒づいていた。

(ああもう、まだこっちはこれの適合者も見つけていないのに!)

手元に握られているベルトに視線を落として、舌打ちをする。結局の所、今に至るまでこいつを扱える人間が見つけれなかった。昨日、これを扱える人物を取り逃がしてしまったミスをますます責め立てる。

そしてさらわれていくツインテールの少女たちを放って逃げている自分。せつかく奴らに対抗できる力が手元にあるのに、何もできない。でも自分が捕まる訳にもいかないから逃げるしかない。

そんな自分の行動が情けなくて、悔しくて、泣きそうになる。

…こんな時、あいつならどうするだろうか? ふと、ここにはいな

いある人物の事を思う。あの無駄に良いスタイルと天才なのか馬鹿なのか良く分からない頭脳を持っているあいつならばこの状況でどうするだろうか？

ぼんやりと頭にその人物が浮かんだが…直ぐに振り払った。

あいつは今ここにはいない。いない人物を頼ったつてすがつたつて仕方ない。それに…仮にあいつに会ったところで何を話せばいいんだろう？

「…」

とにかく、今はこれを扱える人間を探し回るしかない。少なくとも彼女たちがツインテールが奪われても、短時間であればまだ取り戻せる。

だから、まだ諦めては駄目だ。少女は溢れようとする涙を引つ込めて、走るスピードを上げた。

※

『マクシーム空果』の屋外駐車場の一角。そこには戦闘員に捕えられたであろう女性たちが複数いた。年代は小学生から高校生まで様々で、彼女らに共通しているのはツインテールをしているということのみ。彼女らを囲むように戦闘員が待機しており、何人かにはバズーカとも見える武器を所持している。そんな彼女たちが怯えているその横で、コソコソと動く人影が一つあった。

犯罪者は必ず現場に舞い戻る。嫌な言葉を頭に浮かべながら、光太郎は怪人と遭遇した駐車場脇のベンチを目指して、音もなく駆け抜けていく。

(…ちくしょう)

さて、何で俺が怪人に追い払われてもこの現場へと戻って来てしまったか？ その答えは俺がとある忘れ物をしてしまったからだ。

ベンチ下にある小さなスペース。そこに俺の通学カバンをすっかりそのまま忘れてきてしまったのだ。別に通学カバンぐらい放っておいても…と思う人がいるかもしれないが、そうもいかない。なんせ

あそこには財布やケータイ、自宅の鍵や生徒手帳など今後の生活の必需品がこれでもかという程に入っている。あのカバンがなければ俺は買い物どころか家の中に入る事すらできないのだ。だから絶対にカバンを回収しなければならなかった。

「それにしても、ツインテールの少ない世界よー嘆かわしい！ これだけ電気と製鉄にまみれながらその実、石器時代で文明が止まってると見える!!」

もう何なんだろうな、あいつ。駐車場脇の茂みの陰に隠れて、匍匐前進をする俺は怪人の怒りの叫びを聞きながらつくづくそう思う。

もう、とことん意味が分からない。なんでそこまであんたらはツインテールを求めているのだとか、ツインテールを奪うだとか。ツッコミどころは探せばいくらでも出て来る。もう俺の中ではツインテールという単語がゲシユタルト崩壊を起こしていた。

さて、俺が荷物を回収するにあたって、一か所だけ危険な場所を通らなくてはならなかった。最後の砦、ベンチまで残りの数メートルの直線だ。茂みが無く、隠れる場所もない。さて、どうするか…。

「何、ぬいぐるみを持っている幼女がいない!? ふむ、女がぬいぐるみを持たぬなら、持たすが男の甲斐性よ！ 構わぬ、連れてまいれ!!」
また怪人の怒りの叫びが聞こえた。ああ、もう黙っていてくれ、怪人。

が、ここで光太郎にとって思いがけない幸運が回って来た。

「離しなさいー!」

誰かは分からないが、怪人が誰かと口論になっているのだ。それにつられて、戦闘員も女性たちも視線が口論へと向いていた。今や、俺の方を向いているのは誰もいない。どこかで聞いたことがあるような声のような気がしたけれども、今は気にしている余裕はない。

この千載一遇のチャンス、俺は身を屈めて、ベンチまでの数メートルを一気に詰め、ベンチ下にあるカバンを掴んだ。そしてそのままスライディング気味に地面を滑り、茂みへと戻る。その時間は僅か数秒、だが光太郎には数分にも数時間にも感じられたに違いない。

(…やったー!)

光太郎は手元にしっかりと自分の通学カバンが握られているのを確認する。よし、目的は達成した。後はさっさとここから退散するだけだ。

「他の子たちを解放なさい!!」

ここから立ち去ろうと歩を出そうとしたその時、俺の足が止まった。どこか幼げに聞こえるが、凜とした華やかなこの声。やはりそうだ、この声は聞き覚えがある。しかもつい数時間前に聞いたばかりじゃないか。

光太郎は茂みから少しだけ顔を出して、怪人との口論を繰り広げている少女の姿を捉える。そして疑惑は確信へと変わった。それは彼女の髪を見ればすぐに分かった。

(生徒会長…?)

そう、そこにいたのはオリエンテーションの最後に現れ、新入生に軽いスピーチをした生徒会長、神堂慧理那(しんどうえりな)その人だった。彼女は津辺愛香と並ぶか、それ以上の素晴らしいツインテールの持ち主であり、その美しさは怪人と口論している今も健在だった。

「ほほう、なかなかの幼な子! しかも、どうやらお嬢様のようだな!!」

金髪でお嬢様ツインテール…まさしく完全体に近い! 貴様が究極のツインテールか!!」

「究極…?!それよりあなた、何者なんですの!? 人間の言葉が分かりますのね!!」 他の子たちを解放なさい!!」

「わかるとも。こうして意思の疎通ができていないではないか。故に、解放はできぬと断ずる」

「では答えなさい、一体何の目的でこんな真似を!」

「いざれ分かる!まず、者のついでよ!」

意思の疎通はできても、共存はできない。そんな状況でも会長は怯むことなく口論を続けるが、怪人はそんな会長を無視して、ずっと彼女に大きなぬいぐるみを差し出した。

「貴様はこの子猫のぬいぐるみを持つがいい! 敵意もまた愛らしさと光る…わんぱくな幼女には、子猫のぬいぐるみがよく似合う!! さ

あ、抱けい!!」

戦闘員たちがどこから持ってきたのか、横幅3メートルほどのピンク色のソファアアを担いできた。

ぬいぐるみを持たされた会長は、怪人に無理矢理ソファアに座らされる。

「お前たち、この光景をしかと目に焼き付けよ！ ツインテール、ぬいぐるみ、そしてソファアにもたれかかる姿！ これこそが、俺の長年の修行の末導き出した黄金比よ!!」

「「モツケケケケー!!」」

なんとというアホな光景なんだろうか。会長のぬいぐるみを持つ姿に顔を真っ赤にして興奮している怪人に、それに賛同するように猿のような雄叫びを上げている多数の戦闘員。

眩暈すら覚える光景だが、同時にそこに座る会長の姿が神々しく見えてしまう。俺は肩を震わせながら、会長の姿をまじまじと見る。

(ちくしょう…可愛すぎる!!)

あの怪人！ 分かっているじゃないか、くそう！ 確かにこれは、会長の可愛さのツボをついている見事な組み合わせだ！

生徒会長という人の上に立つ立場上、真面目でお固くて、融通が利かないという先入観がどうしてもある。だが、ここにぬいぐるみという一つのアイテムを持たせるだけでどうなるだろうか？

表では凛とした表情で活躍する真面目な子、しかしその裏の顔はぬいぐるみなどの「可愛いもの」などが大好きで仕方がない、非常に女の子らしい子。この2つの顔が容易に想像できるんだ！

そしてここに出てくるピンクのソファアー！ このピンクというのがまた上手い！ ソファアが置いてあるということは恐らくは自室かまたはそれに準ずる空間にいるのだろう。その空間にぬいぐるみを抱きながら、女の子を象徴するピンク色のソファアに座る！ 誰にも見せないもう一つの顔、その空間にいる間だけ、彼女は女の子としての顔を見せてくれる！、そんな想像ができてしまう組み合わせ！

そして会長をますます輝かせるのはそのツインテールだ！ 津辺さんの直線的で思い切りのいいツインテールとは違い、ふわふわと丸

まっっているツイントール。それが会長の小学生ほどの背格好と見事にマッチしているのだ。どこか凜としながらも、お嬢様言葉を使い、頑張って背伸びをしている幼子のような空気がそこにある。

(グレートですよ、こいつはあ…!!)

俺はもう、感無量といった感じだった。この光景を見るために、俺はもしかしたらツイントールを愛していたのかもしれない。

本気でそんな思いがちらついたその時、誰かが茂みを蹴る音が聞こえた。

「？」

怪人が作り出した神々しい光景に見とれていたせいで、その音への反応が一瞬遅れてしまう。そして次の瞬間、いきなり俺は首根っこを掴まれて一気に茂みの中へと連れ戻された。

「!？」

いきなりの出来事に混乱する俺だが、次の出来事にますます混乱するになる。

「見つけた…」

そう呟き、嬉しそうな顔をしているのは、昨日街中でぶつかった白衣姿の女の子だった

第4話 目覚めよ、ツインテール

見つけたとは一体全体どういうことなのだろう？ 確かに昨日、俺はあの子とぶつかったけど、何か恨まれることでもしたのか？

混乱してしまっている俺を置いてけぼりにして、少女は俺へと近寄ってくる。尻餅をついている俺ににじり寄って来る少女。ますます訳が分からない。

「やっと、見つけた。これを使える人間が、ここに…。しかも昨日の内に会ってただなんて…」

少女はそんな俺の事を完全に無視して、じりじりと近寄ってくる。その姿はさながら獲物を見つけた狩人のようにギラギラしてて、それに恐怖を感じた俺は後さずりをするが、足がすくんでしまいすぐに追いつかれてしまう。

「ねえ、あんた…名前は何？」

少女は逃げられないように、俺の腹を跨いで座り、馬乗りの姿勢になった。所謂マウントポジションというやつだ。

「に、丹羽光太郎だけど」

「そう、私はレイチエルっていうわ。よろしくね」

マウントポジションを取られながら自己紹介をするという、恐らく世界初の体験をしながら、俺たちは互いの紹介を終える。

レイチエル、っていうのか。外人の名前みたいだけど、日本語がもの凄く上手い。光太郎はちらりとレイチエルの目を覗き込んだ。瞳の色はブルーであり、日本人ではあまり見られない。ハーフかなんかなのか？

「じゃあ、光太郎、一つ質問するわ。質問はイエスカノーではつきり答えよ」

するとレイチエルはごそごそとポケットから電子機器を取り出し、一呼吸置いてこう述べた。

「あんたさ、ツインテールは好き？」

…世界が静止した。そして俺の口からため息とあきらめが一つ飛び出る。ああ、君もなのかい。もう、今日だけでツインテールって単

語が何回出て来るんだろうね。ツインテールって日常生活でそんなに使わない単語のはずなんだけど、今日だけで20回以上は聞いた気がするんだ。

「い、いや…嫌い、だけど」

思わず、好きと言いかけて、あわてて口を閉じた。

ここで正直に答えてしまうと絶対にマズイと察した俺は、わざと本心と逆のことを言った。と、いかほど初対面の人にツインテールが好きだなんて言わないと思うんだけどな。

しかし、レイチエルは電子機器とにらめっこしながら、簡単に俺の嘘を見破った。

「嘘、つかないですよ」

別に嘘なんてついていない、と言いかけたがレイチエルは「ふーん」と呟いて、俺よりも先手を打った。

レイチエルはひよいと腰まで届くであろう長髪を二つに分けるように持ち、悪魔のような笑顔でニコリと笑ったのだ。2つに分けるようにできた髪型は迷うことなきツインテール。奇しくも昨日、「彼女がツインテールだったら」と妄想した光景が目の前にあった。

「!!」

そんな顔で、そんな眼で、そんな髪型で俺を見ないでくれ！ ツインテール絡みになると俺は自分を押しえられなくなるのにい！

「ちよろいわねー、あんた。やっぱツインテール好きなんじゃない」

「…」

ハッと気づいた時にはもう遅かった。ツインテール姿を見て、条件反射で興奮してしまった光太郎を指差しながらケラケラと笑うレイチエルがそこにはいた。

「うう…」

光太郎はさつと顔を手で覆ってうめき声をあげた。もう、情けなかった。ツインテールとなると見境もなく興奮してしまう自分もうみつともなくて言い訳をする気力も失せていた。

「…じゃあそんなに好きならさ、何にも言わないでちよつとこれを着けてくれない？」

「はっ！」

突然、レイチエルは白衣からベルトのバックルらしきものを取り出して、俺の腰につけようとしてきた。ススツと腹部をなぞられ、ぞわぞわと鳥肌が立つ。

「ちよ、ちよつと待て！」

身の危険どころか命の危機、いやもつと大事な物への危機を感じた光太郎は慌ててその手を振り払った。振り払った拍子にレイチエルの手首に手が当り、カチャンとそれが膝元に落ちた。その途端にレイチエルは分かりやすいくらい不機嫌に歪む。

「…何よ」

「話が見えない。なんでツインテールが好きならこれを着けてって話になるんだ？」

話しの順序が滅茶苦茶だ。三流のセールスマンでももう少し面白い具合に話を進められるぞ。支離滅裂もいいところじゃないか。

「あのね、私には説明している時間がないのよ。だから大人しくこれ着けて。大丈夫よ、人体には影響はないわ…多分」

「おい、最後ぼそつと言ったのは何だ。多分って何だ？」

レイチエルは光太郎の腹部にベルトを無理やり着けようとする。それを叩き落とす光太郎。拾うレイチエル、落とす光太郎。何度もそれを繰り返していき、それがようやく止まったのがあの怪人の大声がした時だった。

「さて、余興は十分に堪能した！ すぐに任務へと戻るぞ!!」

「モケ!!」

怪人の声を聞いた瞬間、弾かれたようにレイチエルは動いた。腹の上から体をどかして、思いつきり俺の体を踏んづけて、数分前の俺と同じように茂みから顔を出して様子を伺う。俺も踏まれた部分を擦りながら、先ほどのように様子を伺うことにした。

「…何だあれ？」

光太郎が茂みから顔を出して、目の前の光景を見た第一声がそれだった。

俺の目の前に広がる光景。それは惨劇といってもいいほどの物

だった。

まず駐車場のど真ん中あたりのスペースに何やらでかい金属のリングが宙に浮いていた。サーカスで火の輪潜りの時に使われるような人間なら余裕で通り抜けられる程の大きさで、その後ろには生贄を待つ子羊のように大勢の女子が並ばされていた。

そして、先頭に並ばされていた女の子がそのリングの中に通される。どうやら怖いのか、女の子は泣きじゃくっていた。が、戦闘員は気にする由もなく、女の子を無理やりリングの中へ放り込んだ。

すると、ツインテールに束ねていた髪が解け、がっくりと気を失ってしまった。よく見てみるとリングの周りには女の子と同じように横たわっている人が数人確認できる。

自然と体がグツと強張った。あれって、もしかして死んでいるんじゃない…。

「死んではいいいわ、奪われただけよ」

隣でレイチェルがぼつりと答えた。…一体、何を奪われた？　また、あいつは最初何て言っていた？　ゆっくりと、理解が兆していく。「…ツインテールを…奪われた？」

俺は半信半疑でそう呟いた。確かに怪人はツインテールを奪うと言っていた。でも、それって物理的な意味での奪うなのか？　例えば一度奪ったからって、髪型くらいは自分の好きに弄れるのに、何で？

「あんたが想像している『奪われる』とは訳が違うわよ」

またレイチェルが口を挟んだ。どこか偉そうな口調なので文句の一つでも言いたくなかったが、説明してくれるのはありがたい。光太郎は黙ったまま、レイチェルの言葉を待つ。

「文字通り全てを奪われるのよ。彼女たちがツインテールにかけていた思いも愛着も全てね。そして最後は…ツインテールを愛していたという事実さえ忘れてしまう」

光太郎は雷を受けたように硬直した。ツインテールを奪われる。話だけ聞くと馬鹿馬鹿しいが、これほど残酷な行為が果たして存在しているのだろうか。髪を切り取られるとかもうそういつたレベルじゃない、全てをねこそぎ奪われるのだ。そこにあった意志も、思い

出も、全て奪われてしまう。それがあの怪人が言っていた『奪う』という行為だったのだ。

それがどれだけ恐ろしい行為か、怪人がやっているのはどんなに非情なことなのか。それを理解した時、光太郎は自分でも気づかぬうちに拳を固く握りしめていた。

目の前では流れ作業のようにツインテールが奪われていく。淡々と、そのツインテールに秘めていた彼女たちの思いを踏みにじるように、あっけなく奪っていく。

「…だから、これがあるのよ」

レイチエルは先ほどから光太郎に必死で着けようとしていたベルトを掲げる。炎のように赤く輝くベルト、まるでそれは魔力のようなものが備わっているような気がするほど、熱く輝いていた。

「これは奴らに対抗するために作ったものよ。こいつはツインテールを愛するものが使えば、あいつらに対抗できる姿へと『変身』できる」

レイチエルは意味ありげにこちらを見ている。光太郎は、レイチエルの視線が自分の拳に向いていることに気がついて、慌てて拳を開いた。そして、レイチエルは光太郎に向かって、はつきりと言った。「あなたにこれを着けてあいつらと戦ってほしいの」

…耳を疑った。俺が怪人と戦う？ 対抗するためのベルト？ ツインテールを愛するものが使える？

「俺が、戦う…？」

これがテレビ番組のヒーローならば、すぐさま変身できるのだらう。目の前に飛び出して、かつこよく変身ポーズを決めて、名乗りをあげて。

「なんで、俺なんだ？」

声が掠れていた。どうして俺なのだ、と言わずにはいられなかった。

「あんたが人並み以上…いや、それ以上にツインテールを愛しているからよ」

どうしてそこにツインテールが関わってくるんだ？ 分からない、どうして？ こんな気持ち悪い趣味の俺が何故？ いつものツッコ

ミにもキレがない。それほどテンパっているのだろうか。

「確かに無茶苦茶な話よ、こんなこと信用しろってというのが無理あるわ」

でもね、とレイチエルは言葉を続ける。真剣な目で見つめる。

「あなたは戦える力を持っている。そして私は、あなたに戦ってほしい。これは、私の切実な願いよ」

遠くで、何か焦げる音やブレーキがかかる音、誰かの叫び声が聞こえる。でも、俺にはまるで遠い出来事のように何も聞こえなかった。どうすればいいんだ？ 誰かに助けを求めるように、俺は外を見渡した。だれでもいい、この出来事をどうにかしてくれ。

…そして俺は見た。俺のすぐ目の前、赤毛のツインテールの女の子が怪人に襲われそうになっている光景を。女の子は怯えているのか、その場で立ち尽くしていた。あのままでは瞬く間に襲われてしまうだろう。

「…」

それが分かった途端に、自分の中で何か動き出したような気がした。

あんな小さい子が、襲われる？ どうしたいんだ？ ここで逃げ出すのか、逃げてあの子を見捨てるのか？ 今動けば助けられるかもしれないの？ どうすればいい、どうする。俺は…俺は、俺は！

光太郎は、レイチエルの手を掴んでいるのに気がついた。

「どうすればいい？」

「え？」

「どうすれば…変身できる？ あの子を、ツインテールを助けられる！？」

俺は完全に吹っ切れてしまっていた。例え、気持ち悪くてもいい。あの子を、あの女の子を助けられるのなら、何だっていい！ ここで逃げたら、俺は今まで以上に自分が嫌いになる！

「だから、これの使い方を教えてくれ！」

俺のその態度が伝わったのか、レイチエルは力強く頷いて、俺の腰にベルトを当てた。するとバックルだけだったベルトがしつかりと

俺の腰に巻きついた。

「心の中で強く念じて。今から変身するって強い意志で念じて」

それだけでいいのか？ 拍子抜けしたが、この際どうでもいい。大切なのはあの子を助けられる力だ。あの子を助けられるのなら、俺は悪魔にだって…！

そして、ベルトが光り輝き、その光が全身を包んだ時、その『変身』は完了した。

そして、自分の姿が変わったことをしつかりと確かめなまま、光太郎は走り出していた。今は一秒でも時間が惜しい。そう感じたのだ。

…だがその焦りのせいで光太郎は気付かなかった。自分の髪を風でなびかせながら走っていたことを。その髪がツインテールだったということ。

※

観東総二は怯えていた。何にと言えば、目の前にいる怪人にだ。鼻息を荒くして、「そのツインテールでぺちぺちと俺の頬を叩いてくれ」などとほざいているそいつに全力で怯えていた。それは今の総二の姿と密接に関係していた。

今の自分の姿―、黒色のボディスーツに、甲冑のような赤色の装甲。短髪だったはずの髪は総二が愛してやまないツインテールへと変わり、160センチほどあった背も120センチほどに縮んでいた。低かった声も可愛らしいソプラノボイスに、そして股にいつもぶらさがっていたはずの男の証が綺麗さっぱり消えて、代わりに女性の証である小ぶりの乳房が胸に付いていた。

そう―、今の総二はどこからどう見ても完璧なツインテール幼女にしか見えないのだ。

どうしてこうなった？

それもこれもトウアールという女科学者に渡されたブレスのせいだった。目の前のツインテール狩りに激怒した総二は、このブレスを

使つて変身し、意気揚々と怪人の前に飛び出したはいいものの、怪人のリアクションに戸惑った。男のはずの自分に幼気だの究極のツインテールだのと抜かしたからだ。

…そして、車のフロントガラスにちらりと映つたこの姿に驚いた。そこには自分とも似ても似つかないツインテールの女の子が呆然とした顔つきでこちらを覗きこんでいたからだ。総二が手を振ると、ガラスの中の女の子も手を振った。首を傾げると、一緒になつて首を傾げる。

「や、やだあ…」

そして現在に至る。現実を受け止めきれずにうろたえる総二を怪人は怪しい笑みを持つて近づいてくる。

「むう、自ら我の物になる心づもりか、ありがたい！ さあ、丁重に」だが、怪人の言葉はそれ以上続かなかつた。…何故なら、この場に音もなく現れた何者かが怪人の右頬を思いつきりぶん殴つたからだ。怪人は骨が軋むような鈍い音とともに吹っ飛び、遠くの石垣へと激突した。

「!?」

この場にいる全員が目を見開いた。驚き？ 恐怖？ それは分からない。それは総二も同じだ。あいつは何者だ？ でも、その姿を総二はきつと忘れられないだろう。自分の目の前で悠然と立っているその人の事を。

「あ、ええと、その、君！ 大丈夫!？」

そう言うと、その人物は総二を心配そうに覗きこんだ。その姿を見て、表情が驚愕に染まった。

優しそうに微笑むその人は今の自分の姿と瓜二つだった。背丈こそ元の総二ほどあるが、同じような赤毛色のツインテールに同じような甲冑のような恰好。装飾品や装甲の色、声色こそ違うが、まるで生き写しのような恰好の美少女がそこに立っていた。

※

観束総二と丹羽光太郎。同じ学校に通う、同じクラスの男子。両者の愛する者はツインテール。彼らは互いの正体も知らないまま、戦士として出会うのだった。∴両者とも、女体化というオマケつきで。

第5話 赤と焰のツインテール

「……何、あれ?」

津辺愛香の眩きはまさにこの場にいる全員の思いを代弁したものだっただろう。

幼馴染である観束総二が幼女になってしまったことにも驚いたが、更にそこへ乱入してきた少女には流石の彼女でも絶句するしかなかった。

愛香は総二にテイルギアを託した科学者にして、唯一この状況を把握できそうなトウアールを伺うと、彼女も何が何だか分からないような渋い顔をしていた。

「あ、あれえ? こんな展開私の脚本には…追加戦士の登場はせめて1クールが終わってからが私の理想なんですがまさか初戦からの乱入は」

「とぼけんじやないわよお!!」

愛香はドゴオ! と全力の拳をトウアールの顔面にぶち込んだ。本日、幾度となく繰り返されてきたこのやり取りだったが、流石に顔面へのグーはまずかつたらしく、殴られたトウアールは数メートルを綺麗にきりもみ回転しながら舞い、そのまま落ちた。

「ほ、本当なんですよ。信じてくださいよ愛香さん。私あんなのがいるだなんて聞いていませんよ」

「いいや、もうあなたの言葉は信じないわ! あんなもの作れるのあんた以外にいてたまるか!」

ゴキブリのように地を這いながら弁明するトウアールをまるでゴミを見るような目で愛香は見下す。そしてビシツと総二の前に佇んでいる少女を指さした。

「あれ、どー見ても総二の恰好と同じじゃない! あんたでしょ、絶対あんたが何か企んでたんでしょ!!」

そう、謎の少女の恰好は、幼女と化した総二が纏っているのと同じようなアーマーを着ていた。総二のアーマーには見られない炎のようなマーク、ファイヤーシンドルのペイントが随所に見られているな

ど細かな違いはあるものの、その殆どが総二と同じ。さらにその子の見た目も幼女化した総二と瓜二つなのが決め手だった。こいつ、幼女だけじゃ欲求不満で、数年後の成長したパターンも作って、見知らぬ誰かに渡しやがった！

こんなことができ、更に実行まで移すのはもうこいつ（トウアール）くらいしかないじゃないか。まだ会って数時間しか経っていないが、僅か数時間の間に繰り広げられたトウアールの変態行動の数々に、確信を得た愛香はグイツと倒れているトウアールを持ち上げ、十八番の技を繰り出す体制へと入った。上半身を倒し、トウアールの背中に胸を密着、左手を地面とトウアールの首の隙間に潜り込ませ、手前に引く。首にぴったりと左手がぴったりと絡まったのを確認すると、右手で左手首を掴み、手前に引き絞るようにロックした。

通称『裸絞め』。この技は祖父が武術家で幼いころから稽古をつけられて育ったこともあり、格闘技や関節技の基礎は一通り学んだ愛香の得意技でもあった。

首を絞められてひいひい言っているトウアールの耳元で愛香が唸る。

「さあー！ とつとと白状したらどうなの!? あの子にも変なこと吹き込んで無理矢理変身させたんでしょ!？」

「だから、し、知らないって言って…!」

「いつまでとぼけてんのよあんたはあ——!!」

愛香の怒りの叫びが駐車場に響き渡った。

※

光太郎にとつての誤算は変身したこの姿の能力をしつかりと把握しないまま飛び出してしまったことだろう。全速力で走ろうと地面を踏み入れた瞬間、いきなり足が地面を踏み抜いた。

えっと驚いていると、一瞬で数十メートルの距離を詰め、怪人の目の前へと迫っていた。光太郎は訳も分からず、あたふたと拳を突き出した。それがたまたま怪人の顔面へとクリーンヒットした。

怪人との体格差は倍以上、格闘経験なしの光太郎の細腕一本から繰り出されたパンチなど効くわけがない。けれど、光太郎が纏っている鎧、『空想装甲（テイルギア）』の性能を持つてすれば、現実世界の常識など通用しなかった。その一撃は怪人を後方へ大きく吹っ飛ばし、彼が数分前にブン投げた車と同じように地面に叩きつけられた。

呆然としていた。そこら辺の小学生が放つような弱弱しいパンチ一発で、なんで怪人はあそこまで吹っ飛んだんだ？ 分からない、俺の体は何が起こっているんだ。改造人間にでもなってしまったのか？

あー、色々気になることはあるけど、今は時間がない！ 早くこの子を安全な所にまで避難させないと！ このことは後でまとめてレイチエルに聞けばいい。あいつの人体に影響は無いつて言葉を今は信じるしかない。

「あ、ええと、その、君！ 大丈夫!？」

少々テンパったが、俺はそのセリフと共に襲われそうになった女の子の顔を心配そうに覗き込み、そして衝撃を受けた。

（なんて幼い…）

何かに怯えているその女の子は幼いの一言に尽きた。身長は120センチか30ほど、髪は赤毛、年齢は小学生ほどか。こんな小さな女の子まで襲われていたのか…嫌でもツインテールの危機が迫っているのだと実感が湧いた。

（それにしても…）

ああ、なんて可愛いんだこの子は！ 顔もそうだけど、何よりもこの赤毛色のツインテールが可愛いなの！ 先っぽの色が朱色になっているのもポイントが高い。もしかしたら今日見た津辺さんや生徒会長を上回るツインテールかもしれないぞ。纏っている服がどこか変だが、それがなんていうのか、健全な女子小学生の色気というもの…。

（あああああー!!）

俺は何か踏み入れてはいけない世界に行こうとしているのを心の叫びで必死に踏みとどまった。…こほん、とにかくだ、これほど凄

ツインテールをあいつらがみすみす逃すわけがないだろう。一刻も早く安全な場所に避難させなくては。

「大丈夫？」

：ん？ そう言ったはずの自分の発した声にどこか違和感を覚える。何ていうのか：俺ってこんなに声が高かったっけ？ 声変わりはとつくの昔に済んでいるはずなのだが。

「う、うん」

疑問はあつたが、頷きと共に発した少女の声に安心した俺は、まあいいかと思う。

正体を隠すために声を変えるなんて最近のヒーロー物じゃ良くある話だし、きつとレイチエルが気を効かせてそんな機能でもくれたのだろう。

良かったと俺は笑い、女の子の手をそつと握った。

「じゃあね、君はここから早く逃げるんだ。お家に帰って、鍵を閉めて、お母さんと一緒にいるんだ、いいね？」

「え…」

女の子の顔が曇った。：そりゃあ、そうだよな。この状況で一人ぼっちは怖いに決まっている。でも、これも君の為なんだ。

「大丈夫、ここはなんとかする。だから君は…」

逃げて、そう言おうとした時、頭の中で警告を示すような鋭い反応が起きた。これは単純に何かがまずいとかそういう警告じゃない、もっとこう：何と言えればいいのだろうか。光太郎には自分の外の状況が全て見え、それを一度に見えるような錯覚、そんな状態に陥った。空気の流れが彼に警告を与え、そして後ろから自分めがけて突き出されている拳がはつきりと見えた。

光太郎はそのパンチをかわしながら、右手で女の子の腰を抱きかかえ、さつと振り向いた。

刹那、そこには先ほど吹っ飛ばした怪人が怒りの形相で地面に拳をめり込ませていた。

「ぬうう…貴様、先ほどの不意打ちは効いたぞ！」

まずい、完全に敵意むき出した。この子がまだいるのに！

「来い、アルティロイド！」

「モケー!!」

怪人の合図でアルティロイドと呼ばれる戦闘員がぞろぞろと俺の前に現れる。くそ、間違いなく戦闘は避けられない。この子を抱えて戦いなんてできるのか？

「やれえ！ そいつのツインテールもろとも、奪ってしまえ！」

この子のツインテールは…渡さない！ 渡してたまるか！

襲い掛かってくる戦闘員。前方にいる奴らが素早くパンチを繰り出してきた。普段だったら目で追えないようなその動きも今の光太郎にはひどく遅く見える。

右、左、上！ どれも常人が当ればノックアウトは免れないほど鋭いパンチのラッシュ。流石は侵略者、戦闘員の身体能力も並みの人間を超えている。でも、光太郎はパンチがどこにくるのか分かっているように軽々と避ける。

「モケー!」

戦闘員は焦ったのか、戸惑いの声を漏らす。はは、モケしか喋れないお前らでも焦る感情はあるらしいな。

すると、戦闘員の何人か後ろから飛びつこうとしてきた。攻撃を仕掛けようとしているのかはたまたまはがいじめにして動きを封じようとしているのか。

しかしその手には乗らなかった。後ろからの動きを簡単に察知して、きつと腰を落とす。そして体を起こすや空中で体を泳がせている間拔けな戦闘員数人をトンと突き、地面へと転がした。

と、ここで抱えていた女の子が腕の中でじたばたと暴れ出した。

「ちよ、ちよつと…暴れないで」

「離せー！ 俺だって戦えるんだ!!」

俺?! この子、この齡にして俺っ子なのか?! くそっ、この子どれだけの属性を持っているんだ?! 幼女で俺っ子にツインテール?! どんだけ欲張りなんだよお!!

女の子はどこから取り出したのか、赤色の剣を持っていた。うわ、そんな危ないもの闇雲に振り回しちゃ…!

振り回される剣に驚き、力が緩んだ瞬間を狙って、女の子は腕の中から抜け出し、後方で指示を飛ばしている怪人目がけて走り出した。

「あっ！ ちょっと!!」

慌てて追いかけてようとしますが、それを戦闘員が全力で防ぎに入る。ああもう、どうしてこういう展開になるんだ！

「そこを…どけえ!!」

光太郎は地面を勢いよく踏み、束になって壁を作る戦闘員目がけて飛び込んだ。

※

総二は謎の少女に抱えられながらずっと思っていた。俺は何をしているのだと。

俺はツインテールを守るために飛び出したのに、あいつらにビビッて足がすくんでしまった。俺のツインテールに興奮しているその姿に怯えた。

もしかしたらその怪人は、俺自身を映した鏡のような存在なのかもしれない。何も知らない人から見れば、俺はこう見えているのか？

他人から見れば、俺も怪人と同じ存在なのか？

「大丈夫？」

そう言ってくれた少女は見事な焰色のツインテールをしていた。今の俺の姿を更に成長させて、より美しくしたような彼女は「何も心配するな」と言わんばかりに優しく手を握りしめてくれた。

自分もツインテールの姿をしていることは敵に狙われることになる。それを承知の上で彼女は俺の前に姿を現してくれたのだろう。戦闘員の攻撃も完璧に見切ったような動きで全て避けていた…いや、それは違う。彼女は避けることしかできないんだ、俺を抱えているから。

幼馴染の愛香の祖父が開いている道場で、幾度となく鍛錬に付き合ってきた総二には理解できる。片手を使えない状態で戦うのがどれほど過酷で厳しいものかを。

悔しくなった、俺は何をしているのかと。このまま何もしないで、ただ抱えられているだけだなんて。愛香の静止も振り切つて飛び出してきたのに、このままじゃただのお荷物じゃないか！　ここで何もできなかつたら、それこそあいつらと同類じゃないか！

だから：俺に力を貸せ！　俺のツインテール!!　俺はあの子の足手まといになる為に変身したんじゃない!!

その瞬間、自分の脳裏に腕に装着しているテイルギアの情報が脳裏に刻まれていく感覚がした。僅か数秒の間に俺が使える武器やその取り出し方、必殺技のモーションまでを理解する。

そしてツインテールを束ねているリボンを叩き、そこから勢いよく噴出された炎が一振りの剣を生み出した。『ブレイザーブレイド』、総二の手には灼熱の炎を司る両刃の剣が握られていた。

よし、武器は持った。後は俺も戦線に加われば、あの子も反撃できる！

「ちよ、ちよつと…暴れないで」

じたばたと暴れる総二に困つたような声を出す少女。分かっている、ここにいれば、安全だつても彼女がそれを望んでいることも。でも、そんなこと俺は許せないんだ。俺はツインテールを愛し、彼女もまたツインテールを守るために戦っている。だからこそ、黙って見ているなんて、できない！

「離せ！　俺だつて戦えるんだ!!」

そして力が緩んだ一瞬の隙をついて腕の中から抜け、小柄な体を活かし、戦闘員の隙間を縫つて走り出した。

そして後ろでふんぞり返っている親玉めがけて、俺はブレイザーブレイドを振り下ろした。

「むっ!」

しかし、もう少しのところで斬撃はかわされた。だが剣から迸る炎は怪人の皮膚に斬撃型の火傷を負わせ、怪人は苦悶の表情を浮かべる。

「…おのれ!」

怪人は突き出した掌からビームを放つが、それを軽々と片手で受け

止め、ビームを四散させる。そして確信する。

(やつぱりだ……この膜みたいなのが俺の体を覆っているんだ!)

フォトンアブソーバー……総二たちが纏うテイルギアには、精神エネルギーの防護膜が覆われている。これがあることで、受けた衝撃を分子レベルまで分解し、極限まで殺しきる。これが全身を覆われている限り、テイルギアには攻撃は効かない。総二は先ほど読み取った情報から、これが体全体に覆われていることに気付いたので。

「ふ……」

ビームが消し去られたことに怪人は少しばかりのショックを受けたようだったが、すぐに切り返した。そして怪人は、笑う。

「ふははは、恐るべき奴らだ！ 我の顔面に拳を叩きこんだ女に、剣で火傷を負わせた幼女！ こんな強者に2人も出会えるとはなんたる幸運の日か！」

それは怪人の心からの叫びだった。今の一撃は直撃を避けただけでもこの威力だった。もし、これが当たっていたら？ そう思うと武人の血が騒ぐ！ そのような表情をしていた。

「我の名はアルティメギルの切り込み隊長、リザドギルデイ！ 少女がぬいぐるみを抱く姿こそが、もつともときめく瞬間だという信念のもとで戦う戦士！ 改めて聞く、貴様の名は何だ！」

「――テイルレッドだ！」

総二は自然と名乗っていた。吹っ切れた表情で、そう言っていた。

「……しかと聞いたぞ、貴様の名を！ ここからは顔とツインテールは傷つけぬように配慮するが、多少の怪我は覚悟せい!!」

そして戦いは再開される。怪人は背中中のヒレを分離させ、まるでミサイルのように総二めがけて放った。

……だが、その攻撃は駆けだした総二を、テイルレッドを止めるには至らなかつた。彼が持つブレイザーブレイドによって、瞬く間にヒレは切り刻まれ、灰になる。そしてその一撃がついにリザドギルデイの強固な皮膚を刻んだ。

「ぐうっ!!」

一閃、自分の鱗に綺麗に斬撃が入り、リザドギルデイは膝をついた。

体を見れば自慢の鱗が熱によって溶け出している。それほど高温が自分を襲っていたのだ、ぞつとした。そしてあの女の顔面に叩き込まれた一撃。あの一撃が今になって効いてきたのだ。

「とどめだー!」

レツドの声と共にブレイザーブレイドの力が完全開放され、刀身に炎が弾ける。それが見る見るうちにボール状へとなり、リザドギルティへと射出される。

その炎はリザドギルティの前で爆発し、螺旋状に取り付き、円柱に変化していく。それによつてリザドギルティは拘束され、身動きが一切できなくなる。

「うおおおおお!!」

そしてテイルレツドは、背中のアーマーから火を噴きだして、リザドギルティに向けて突撃する。剣もそれに応えるかのように、変形し、炎を最大限に纏つていく。そして、リザドギルティを捉えている円柱を剣が切り裂いた。

これこそがテイルレツドの奥義『グラウンドブレイザー』：極大の炎で相手を切り裂く必殺技である。

「ぐおおおおお!!」

切り裂かれた傷口からは炎が溢れ、全身は放電し、断末魔を上げる怪物。

「ふ、ふはははは…素晴らしい…：ツインテールに優しく頬を撫でられ果てる…：何の悔いがあるうか! 男子本懐の極みだ!!」

「待て、おいー!」

そして拘束している円柱が3倍以上に膨れ上がる。

「さらばだ——!!!」

そしてリザドギルティは爆発し、散った。その妙な断末魔を総二の耳に残して。

※

一方、光太郎と戦闘員の戦いも終わりを迎えようとしていた。

「はあっ！」

光太郎は群がる戦闘員を掌を使って、軽く押した。軽く押しただけなのだが、戦闘員はピンボールのようにまとめて吹き飛んで、そのまま光となって消えていった。どうやらある程度ダメージを与えると、勝手に消えてしまうようになっていらい。

辺りを見渡すと、もうあらかた片付いてしまったのか、戦闘員の姿が見当たらなかった。逃げたのか、それとも全部倒してしまったのか、それは分からない。ただ、喧嘩経験ほぼゼロの俺でもここまで戦えてしまうのだから、レイチエルが作ったこのベルトはとんでもない代物だということは分かってきた。

そしてあの怪人が何もしてこないのが少し気かりだった。あれほど自分に怒りを向けていたのだから、襲われる覚悟はあったのだが：手下と一緒に逃げてしまったのか？それが一番いい展開なんだけどな。

(とりあえず、あの子を探さないと…)

と、ここでレイチエルから『光太郎！』と通信がかかってきた。動かそうとしていた足を止めた。

『あのリングを破壊して！ あれに奪われたツインテールが収められているわ！』

あのリングとは駐車場にオブジェのように佇んでいる金属のリングのことだろう。しかし、光太郎は戦闘の最中に逃げ出した女の子の方がずっと気がかりだった。

「え、でも…俺、あの子が心配で…」

『あいつなら、大丈夫よ！ だからリングを破壊して！ やり方は怪人の時と同じよ、思いつきりぶん殴って！』

「…おう」

レイチエルの言葉に戸惑いはしたものの、とりあえず信じた。あの子が無事ならば、とりあえずはツインテールの安全を確保しなきゃなるまい。

俺は拳を振りかぶり、リングめがけて思いつきりぶん殴った。

「おりゃあー！」

バキツという金属特有の嫌な音がした後、リングは跡形もなく砕け散った。そのリングは光の粒子状となり、捕えられた少女達に降り注ぎ…彼女たちの髪型は元通りツインテールに戻っていった。奪われたツインテールを取り戻すことができたのだ。

良かった、とりあえずあいつらの作戦は阻止できたってことか。無我夢中だったけれど、俺はなんとか戦えていたらしい。

「…あのー」

と、俺は後ろから声をかけられた。「ん？」と振り返ると、あの赤毛色のツインテールの子が剣を抱えながら走ってきた。どうやら目立った外傷はないみたいだ。あの怪人、どうやら諦めて撤退したらしいな。あー、良かった良かった。

「あ、君…」

俺は大丈夫だったのか、と言おうとしたが言葉を女の子に奪われる。

「あの、ありがとうございますー！」

その子はぺこりと、俺に頭を下げてきた。俺は言葉を失った。

「その…俺、あ、いや私、あなたのおかげで立ち上がることができたんです。だから…」

女の子はありがとうと何度も言いながら頭を下げていた。その度にぷらぷらとツインテールが揺れる。うむ、良い光景だ。

(…ありがとうございます…うちのセリフだよ)

俺だって君が襲われていなかったら飛び出していなかったのに、お礼を言われるのはお門違いというのかなんというのか。けれども、その「ありがとう」の一言は光太郎の心にじわじわと染みわたっていくのははつきり感じていた。…そう、次の言葉が出るまでは。

「ありがとうございます、お姉さん！」

…？ お姉、さん？ その言葉に違和感を感じ、目を泳がせて…そして光太郎は見てしまった。自分の正面にある車のサイドミラーに映った自分の姿を。

(え…!?)

それが自分自身の姿だと認識できたとき—光太郎は絶句した。

何故ならそこには、元の光太郎とは似ても似つかない、可愛らしいツインテールな女の子が立っていたからだ。

そう、極度の緊張感に支配された光太郎は、緊張が解ける今の今になるまで、自分がツインテールの女の子になっていることに全く気付かなかつたのだ。

(…な、何だこりやあああああ!!!)

そして、それによろやく気づいた瞬間…心の中で絶叫した。

第6話 ツインテールが必要な訳

それから光太郎はいつ変身を解き、荷物を回収したのかすら思い出せなかった。今、光太郎はアパートの目の前にいるが、そこまでの道のりをどうやって移動したのか、何もかもを覚えていなかった。

いったいどうやって帰ったのだろうか？歩いて帰ったのだろうか、あるいは電車に乗ったのか、それともタクシーでも止めたのだろうか？

…でも、そんなことはどうでもよかった。光太郎はそつと制服のポケットを探り、悩みの元凶であるベルトを取り出した。それをじっと見つめながら、ため息をついた。

（ああ、俺、これからどうしたらいいんだろう…）

俺の心の中ではそればかりを考えている。このベルトが手元にあるということはあれが夢なんかじゃなかったということ。

変身アイテムがベルト、そのことから絶対に男の変身ヒーローだという確信で飛び出して、ノリノリでツインテールの女の子の助けに入った訳だけれども、まさか自分自身がツインテールになっているなんて。…こんな事、想像できるわけがないだろう。

しかも、俺が変身した女の子の姿はよりによってツインテール。あの赤毛色の女の子より数段劣るかもしれないけれど、大変綺麗なツインテールだった。あの柔らかな毛並に着色料を使っていない天然ものの色使い、そして女体化したことによる顔の変化。どこか平凡じみていた俺の顔は、その面影すらない美少女として生まれ変わってしまった。幸いにも変身が解かれた今は髪も顔も全てが元通りに戻ってくれたけれど、あんな体験をしまった以上、落ち着くことはできなかつた。俺の精神とかに異常はないだろうな？ これを機にオカマとかに目覚めたら洒落にならないぞ…。

それに頭痛の種はまだまだある。正体はばれていないだろうかとか、あいつらはまた来るのだろうかとか、このベルトを作ったレイチエルは何者なのだろうか。

はあ、ともう一度ため息をついて、俺は階段の上り、アパートの鍵

を開け、扉を引いた。とりあえずは心を落ち着かせて、事態を整理しなくては。

「あ、おかえりなさい」

その聞き覚えのある声にピタツと体が止まった。そして、ぎぎぎと錆びた歯車の如く首を回してリビングを見る。

そこには俺にベルトを託した少女、レイチエルが座布団に座りながら茶を飲み、呑気にくつろいでいる姿が見えた。

「ええと…何してんの、てめえ?」

恐ろしげなトーンで俺はレイチエルにそう吐き捨てた。なんでお前がここにいるのだとか、住所はどうやって知ったのだとか、鍵をどうやってこじ開けたんだとか、聞きたいことが色々あったが、きつとそれらの疑問が全てこの一言に集約されているだろう。多分、今の俺の顔は絶対にお茶の間に流してはいけなような恐ろしい顔になっているに違いない。

「それはごつちのセリフよ、いろいろ説明したかったのに勝手に帰っちゃって。でも良かったわよー、初陣にしては結構な活躍をしたし、何よりも素手だけで戦ってたというのがまた」

「そういうことを聞いているんじゃないよーんだよ!!」

手元の電子機器を動かして先ほどの戦闘映像を見せてくるレイチエルに、俺は怒りに駆られ、背負っていた通学カバンを壁に叩きつけて詰め寄った。

「お前、どっから入ってきた!? それで何我が家のような感覚でくつろいでんだてめえは! ここは俺の家だぞ!!」

「えーと、あんたのカバンの中に入っている生徒手帳? っていうやつからこの住所は確認できたわ。カギはまあ、私お手製の秘密の道具でちやちやっとな開けて…」

「ふざけんなよ、お前!!」

もう腹が立った。俺が人生最大クラスの悩みを抱えているこの状況で、その大半の原因を占めているこいつが呑気に俺の家に上がり込んで茶を飲んでいることだ。こいつに他人家に不法侵入するなという常識はないのか!?

「なんだあのベルト！ 変身して女になるだなんて聞いていないぞ！！」

「だからその説明をする前にあんたが勝手に飛び出しちゃったんじゃない？」

「それに！ なんで！ よりによってツインテールの女の子になるんだよ！！」

「ちよ、ちよっと待ってよ。一つ一つ説明するから…それに、あんたのツインテール姿、結構似合ってたて可愛かったわよ。 男であそこまでツインテールが似合う奴はなかなか」

「女になったことを褒められて嬉しくもなんともねえぞ！」

パツと笑顔になるレイチェルに腹が立つが、ギリギリと痛む心を擦りながら、俺は床に座る。ここで下手に騒いで、ご近所の注意を集めるようなことは避けたい。引越してからまだ数日しか経っていないのに、下手な注目は浴びたくはない。

「まあまあ、お茶でも飲んで落ち着いてよ」

どこから取り出したのか、急須と湯呑みを俺の前に置き、慣れた手つきで注ぐ。…それ本当は俺がお前にやることなんだけども。俺がお客様みたいになってるじゃないか。

「落ち着いた？」

「…おう」

胃の中に熱々のお茶が流れる感覚をしっかりと感じ、気分が落ち着くのをしつかりと確認する。そして湯呑みをテーブルに置き、質問へと移った。

「じゃあ、まず一つ目の質問。どうして変身すると女になるんだ？」

その質問にはレイチェルは待っていましたと言わんばかりの顔をする。ちくしよう、随分と嬉しそうな顔しやがって。

「まあ、理由なんていくらでもあるわ。身元バレを防ぐのもあるし、女の姿で敵を油断させるっていうのもある。それに男の姿だと急所への攻撃ですぐやられちゃうから、それを防ぐためっていうのもあるわね」

おお、なんかそれっぽい理由だ。確かに身元バレはヒーローにとつ

ての死活問題だからな。それ対策っていうのは非常に納得がいく。声が変わる理由、あれも一種の身元バレ対策なのか。

「それにね」

「それに？」

「それに、あんたが女の子になっちゃう一番の理由はね……私の趣味なのよ!!」

くわつと目を見開いて熱弁するレイチェルに俺は湯呑みの中にある熱々のお茶を彼女にぶっかけていた衝動に駆られたが、ギリギリのところで踏みとどまる。せつかく女の姿になることへの理由にそれなりの納得をしていたのに、その一言で全てが台無しになってしまった。

「だって、むさ苦しい男が戦ったって、ねえ？ 絵にならないっていうか、興奮しないっていうか……やっぱり戦士は可愛い女の子でなきゃ面白くないわよ」

「お前、全世界のヒーローマニアを敵に回すような発言をするなよ……」
だん！と拳をテーブルに叩きつけて叫ぶ。勿体ぶつた言い方をしたからもつと重要な何かがあると思つたのに、結局の所は趣味なのかよ！ やっぱり科学者の思考というものはどこか子供じみていて、オタクっぽくて、変な風にできているのかもしれない。

「あー、真面目に考えていた自分が馬鹿みたいに思えてきた」

「あらそう？ でもあんただってツインテールになれて嬉しかったんじゃない？」

その質問に俺は答えずに黙ってお茶を口に含んだ。……本当はちよつと、ほんのちよつとだけ嬉しかったのは秘密だ。

いくら俺がツインテールが好きだからといって、男の俺がツインテールになれる訳じゃない。いくら髪を伸ばしてそれを結わえたところで、それはツインテールじゃない。あくまでも「ツインテールに似た何か」であり「ツインテール」ではないのだ。ツインテールは女の子がするからツインテールと言えるのだ。

男と女。この性別という名の壁が、俺を本当のツインテールから遠ざけていた。でも、このベルトはその最大の壁を容易く超えてしまっ

たのだ。骨格も、声も、顔も全てがツインテールに似合うものへと変化してしまう夢のようなアイテム。女になるという羞恥心を差し引いても、ツインテールになれるということはメリットはあると思う。戦う相手があいつらみたいに変態じゃなければ。

「まあ、正体バレについてはそんなに心配しなくても大丈夫よ。あなたの場合は外見からガラツと変わるし、戦闘中に纏っている空想装甲（テイルギア）の首元にはフォトンサークルっていう認識攪乱装置がついているんだから」

「認識…？」

「早い話があんたをあんただって見抜けなくする装置よ。多分、あなたの実の親でも見抜けなくなるわ」

おお、なんて分かりやすい。小首を傾げた俺にレイチエルが噛み砕いて説明してくれた。そんな俺を見て、「今度からは難しい話は無しにするわ」とレイチエルは呟いた。

とりあえず話をまとめると、身元バレの心配はほとんどしなくてもいいのだそうだ。俺が纏うテイルギアは各パーツが相当な硬さを誇る金属でできているらしく、その上にフォトンアブソーバーという精神エネルギーの防護膜が全身に張られているので、生半可な攻撃ではびくともしない。そのおかげで首の装置が戦闘中に壊れる心配がないのだそうだ。ただし、変身する時と解除する時だけは注意してくれと言われ、少なくとも今日みたいはどこで変身解除したのか分からないなんてことは絶対に起こすなと念入りに指導を受けた。

もしこの場にいる以外の誰かにばれたりしたら…そんなことは考えたくないし、他の人間も知りたくはないだろう。

「じゃあ、次の質問にいくぞ。…これを作るお前は何者なんだ？」

テールの上にベルトを置き、とんとんと指でタップする。

「こんな物、今の技術で作れるとは思えない。お前がいくら天才だからって、それで説明できる領域を遥かに超えているぞ。…こんなもの作れるお前は何なんだ？」

性別を変えたり、精神エネルギーがどうたらこうたらとか、一つでも漏れたら世界中が大騒ぎになるに決まっているほどのオーバーテ

クノロジ―がこのベルトには詰まっている。こんなものを作れるこいつは何者なんだ？ ついでに言えばあの間抜けな侵略者：アルティメギルって言ったっけ？ あいつらの説明も欲しい。

「そうね…話は少し長くなるわ。だからできるだけ分かりやすく説明する、いい？」

俺は無言で頷いた。少なくとも、レイチエルの表情から、それは軽い話じゃなさそうだとということが分かったからだ。

※

侵略者アルティメギルの秘密基地。それは空とも海とも大地ともいえぬ異空間に存在していた。少なくとも、人間の技術では見つけられないような所にそれはあった。

その基地では、先鋒部隊が壊滅したという知らせを受け、上から下まで大変な騒ぎになっていた。

事前の情報と違う、そのことが多くの怪物、エレミアンへと波紋を広げていたのだ。この世界は文明レベルこそ小さいが、精神エネルギー『属性力』が高い世界。それは念入りに行った事前調査でも明らかだったはず。

精神エネルギーを糧として生きるエレミアンにとつてまさに理想的な狩場とも言える世界だった。

それが先鋒部隊として送り込まれたりザドギルティと戦闘員（アルティノイド）数十人が1日もしない内に倒された。しかも、たった2人の人間の手によって。

大ホールではてんやわんやの大騒ぎだった。我々が知らない何か大きな力をあいつらは隠し持っているのではないか、同胞に裏切り者がいるのではないか。予想外の展開に誰もが怯え、騒いでいた。

「静まれい！」

その騒ぎを一人のエレミアンが一喝する。その声で、騒乱が水を打ったように静まる。

「ド、ドラグギルディ隊長」

一人のエレメリアンが騒ぎを治めた戦士の名を呟く。ドラッグビルデイ、そう呼ばれた怪人は周りの物とは一線を超すような闘気を纏いながら立ち上がった。

「リザドギルデイは奴ら人間の手によって倒された。これは間違いではない」

その言葉にざわざわと他の怪人が騒ぎ出すが、机を叩いて黙らせる。

これが証拠だ、と呟いて前方モニターに映像を映らせた。そこには変身した総二、テイルレッドがりザドギルデイと戦う映像が流れる。

おおおお、と一斉に感嘆の声が上がった。

「あのような美しいツインテールの持ち主にやられたのか…」

「何という美しさよ…あれがこの星の守護神か」

すると次はテイルレッドの各方面から映し出された姿が映った。それにまた怪人は歓声を上げる。

「このような幼子が」

「可愛くて強いとな」

「ううむ…名前はテイルレッドというらしい」

「何歳くらいなのだ？」

「二桁はいつていないだろう、確認できる背丈から見て…一桁だろうな」

「ほほう、それはそれは」

「一桁といえばようやくランドセルを背負うことのできる年代ですぞ」

「ランドセルですか、また想像が進みますな」

「いや、まだ幼稚園児という可能性も捨てきれんぞ」

…何といえはいいのか、途中から単なるオタク同士の会話になっている気がするが、そのような会話にドラッグビルデイは満足そうに頷く。やはり彼らは自分と同じ戦士だ。この戦士を前に臆してなどいなかった。むしろこの戦士をもっと知りたいと、そう思っている。感無量と言わんばかりにドラッグビルデイは胸を震わせた。

「では、次の戦士に映る」

パツと映像が変わると、今度はテイルレッドから光太郎が変身した姿が映る。するとあんなに騒いでいたエレメリアンたちは嘘のようにシーンと黙ってしまった。

「…隊長、こいつはなんていうのですか？」

「それが…分からないのだ。リザドギルデイはこいつに名前を聞く前に逝ってしまったからな」

誰かが勇気を出して質問したが、ううむとドラグギルデイもそう唸るしかなかった。

何せ、こいつに関する情報があまりにも少ない。名前も不明、口調や仕草もどんな能力を持つのかも不明、テイルレッドとの関係も不明…。分からないことだらけで、話が膨らまないのだ。一応、リザドギルデイを拳一つで吹っ飛ばす、戦闘員相手に悠々に立ち回ることができるなど、身体能力はテイルレッドと同格ではあるのだが…。

「でも、姿はどこかテイルレッドに似てますよね。家族なんでしょうか？」

「「!?」」

どのエレメリアンが言ったか分からないが、その一言で彼らの燃料に火が点いた。

「うおおお、まさかの姉妹戦士だと!」

「いや、姉妹と決まった訳ではないぞ! 母親という関係もありえなくも無い」

「まさかの母親!? それなら人妻という可能性も無くは無いやな？」

「人妻で戦士とは、まさに私の理想…」

「いや裏をかいて、彼女が妹ということとは?」

「なに、テイルレッドが彼女のお姉さん!? その発想はなかったぞ!」

「いや、未来から来たテイルレッド自身という可能性もあるのでは」
もう馬鹿ばかりである。どいつもこいつも潔いのかなんていうのか。

結局の所、会議は大成功を収めた。その結果「この世界の侵略をし
ばらく続けてみる」という満場一致の意見で幕を閉じた。皆心は決

まっついているとばかりに満面の笑みを浮かべていた。

彼らの名はアルティメギル。世界を超越し、人類に仇なす非情な侵略者：と、一応認識されている。

※

つまり、分かりやすく噛み砕くところということになるのだろうか？
簡潔にいうと、レイチエルはこの世界ではなく、並行世界：SFでよく使われるような世界から来たらしい。無数に分岐した世界、俺たちが暮らす世界と限りなく似て、でもどこか違う世界。近くて遠い、そんな世界の住民だったらしい。そんな世界の住民はあるひとつの革新的な技術で、飛躍的な発展を遂げた。

それが『属性力』。俺の変身ベルト『テイルドライバー』にもその属性力が使われており、まさしくオーバーテクノロジーの結晶とも呼ぶべき技術。

属性力とは、人間のある事物に対する感情の高ぶり、情熱や興奮、愛着といった思い入れに相当する：所謂心の力。それを原料にすることで、エネルギー問題を解決してしまう程の莫大なエネルギー変換技術を生み出したのだ。

その中でも俺のベルトの中にある『ツインテール属性』は不思議なことに、全属性力の中でも、最大級のエネルギーを持つ属性らしい。

人の好みや職業、価値観、ありとあらゆるものに属性力は存在し、それを糧とすることでレイチエルたちの世界の人類は驚異的なスピードで文明を築いていく。

だが、ここに一つの侵略者がやってくる。その名もアルティメギル。彼らは属性力を糧とする生物で、奴らの手によって、レイチエルの世界は侵略されてしまったのだ。

全ての属性力を食い尽くし、レイチエルの世界を無機質な物へ変えてしまった彼らが次に選んだのはこの星、地球。即ち俺たちの世界つてことだった。

この星を故郷の二の前にするこだけでは絶対に阻止する。それだ

けの為に、レイチエルは奴らに対抗できる武器…テイルドライバーを作り、その適合者をこの世界で探していたらしい。

「そしてその適合者が俺だった…って訳か」

「そうよ」

レイチエルの身の上話が終わった。外はすっかり夕闇に包まれ、それが部屋にも漏れてくる。熱々だった湯呑みの中のお茶はすっかりと冷め、どれだけ長い会話だったのか、という実感が今更ながら湧いた。

「その…レイチエルのご両親は」

「生きているわ。…でも、あれを果たして生きているって分類しているのかしら」

遠い目をして、レイチエルはそう言った。文字通り、レイチエルの両親は『全て』の属性力を奪われた。それは彼らにとつての、全ての価値観や意志、生命の輝きを奪われたに等しいのだ。それは今日起こった、ツインテールを奪われることよりも、もっとつらくて残酷なことなのだろう。

軽々しく聞いてしまったことを後悔して、俺は「ごめん」とだけ言った。レイチエルは「気にしていないわ」と言っていたが、きつとそれは建前なのだろう。

話を聞いて、改めて思った。あいつらアルティメギルはどこか馬鹿そうに見えるけど、やっていることは洒落になっていない。まさに侵略者だ。そしてそれを防げるのは、ツインテール属性を持つ物だけ、ということだ。

「改めて、あなたにお願いするわ、丹羽光太郎」

すつと姿勢を正して、レイチエルはぺこりと光太郎に頭を下げた。

「私と協力して、あいつらと戦ってくれない？」

「…」

俺がどれだけ黙っていたのか分からない。けど、俺は頭を下げるレイチエルを制し、はつきりと言った。

「やって、みるよ。あいつらにどこまで立ち向かえるのか、分からないけど、それでいいのなら…」

自分でも情けない発言だと思う。でも、女の子にここまで話されて、アルティメギルの行動を見て、実際に戦って…断ることなんてできない。ツインテールを愛している、それだけでヒーローをやるというのも変な話だけど、それで世界を救えるならば…。

それを聞いたレイチエルはぱあっと明るくなった。ようやく彼女の顔に笑顔が戻ってきた。それに俺もどこか嬉しくなる。

「じゃあ、しばらくの間、ここに泊めて!」

「はっ!?!」

だから、彼女の突然のお願いに俺の声が裏返った。不意打ちと言わんばかりに俺は驚いた。

「いや、私、こつちの世界に住所がないのよ。着の身着のまま飛び出してきちゃったから。だから、しばらくの間だけでいいの、ここに泊めて?」

「いや、いきなりそんな事言われても…」

「…駄目?」

レイチエルはまた髪を二つに分け、ツインテールにして俺を見てきた。

不意打ち気味の行動に俺の心はブレーキが利かなかった。

(ああああ! ツインテールで上目使いは反則だろうがあああ!!)

そして数分後…俺は折れた。彼女の同居を認めてしまった。こんなにも情けない男はこの町を探しても見つからないだろうな、きつと。

こうして、高校生活初日、俺は異世界からの住人という奇妙な同居人と生活を共にすることになったのだった。

第7話 万歳、ツインテール

小鳥のさえずりが聞こえ、眩い日光が差し込む朝の目覚め。そんな中で光太郎はむくりと起きる。

(痛い…)

目覚めて、最初に感じたのは背中痛みだった。流石に座布団を敷布団がわりにして寝たのは軽率だったかもしれない。睡眠時間は多めに取ったはずなのだが、全然眠った気がしなかった。

(まあ、ベッドが一つしかないからなあ…)

本来なら俺がそこに寝るはずのベッドには、異世界からの住人で昨日からの同居人、レイチェルが寝息を立ててぐっすり休んでいた。どうやらベッドで眠るのは随分久しぶりらしく、何度も寝返りをうってそのまま眠る、という動きを繰り返していた。

昨夜から同居を始めた俺とレイチェルだったが、そこには結構な数の問題が立ち上がった。最大の問題だと思っていた着替えや食事の方はそこまで心配しなくてもよかった。食事は俺が作れば問題は無いし、レイチェルの身に纏っている白衣や私服はテイルギアのちよつとした応用技術が使われており、常に清潔な状態を保っているらしい。だから私の服や下着は買わなくていいわと言っていた。

しかしそこで立ちはだかった問題が睡眠スペースだった。元々この部屋は一人暮らしのため、ベッドが一つしかなく、どちらかがベッドで、どちらかが床で寝るしかないのだ。レイチェルは「一緒に寝ない？」なんて笑いながら誘ってきたけど、俺は断固拒否させてもらった。悪いが俺はロリコンじゃないのだ、幼女と一緒にベッドに寝る趣味は無い。座布団を敷いて、そのまま床で寝させてもらった。

更には食器の数が足りない、風呂はどうするんだとか…いろいろ問題はあったが、まあ、そこは週末にでも買い出しに行けばいいか。風呂はシャワーをメインに、暇な時間があれば銭湯にでも行けばいいか？ と対策は考えているが…こればかりは実際は生活してみないと分からない問題だろう。布団は…今日の帰りにでも色々見て回ってみるか？

俺は立ち上がり、ベルトを手にそつと足を忍ばせて洗面台へと向かった。：一つ確かめてみたいことがあるのだ。

光太郎は洗面台に立ち、鏡に映る自分の顔を見た。そこには何年も見てきた馴染のある顔が映っていた。まあ、少なくともそんなに嫌われるような酷い顔じゃないよな、と確認した後、持っていたベルトを腰に着け、囁くように言った。

「…変身」

ベルトから赤い光が迸ったかと思うと、鏡に映っているのは俺の姿ではなく、昨日変身したツインテールの美少女の姿があった。

「おお…」

思わず声が漏れる。鏡の中の自分は元の俺の面影がないというか：外見からは正体はまずばれないレベルまで変身している。これを見て、俺だと判断できる人間はまずいないんじゃないだろうか。

(よし、とりあえず、外見は問題ないな)

次は色々な角度から自分の体を見てみた。腕や足は強化アーマーのような装甲が装着されている。手を握ったり、肘を曲げたり、足をブラブラさせたりしてみたが、特に違和感を感じられない。ぴったりと俺の体にくっついて、俺の動きの邪魔にならないようにできている。：やっぱりレイチエルの世界の技術は凄いな、それぞれのパーツが接触を起こさないようになってるんだ。

(さて、次は…)

体の動きを一通り確認した後、俺はそつと焰色の髪、ツインテールに手をかけた。おお、これが女の子の髪の毛なのか…。なんていうのか、すべすべしていて柔らかくて：男の髪と全然違う。

片方のツインテールを顔に近づけて、匂いを嗅ぐと、変な笑いが出た。おおい、どうなってるんだよ、コレ。すっごい匂いがするぞ、お花畑の匂いっていうのか：女の子つてすげえ！

(か、体のほうは…どうなって)

「何してんの、あんた？」

自分の胸に手を伸ばそうとした瞬間、真横から声が聞こえ、俺の心臓が跳ね上がった。そこには、眠い目をしながらも何やら面白いもの

を見つけたような顔をするレイチエルがいた。

「…い、いや、これは」

「何？ 女の子になれてやっぱり嬉しいの？ いやあ、そこまで喜んでくれるのなら、あたしもそれを作った甲斐があるってものね」

レイチエルはニヤニヤとした顔で俺を見てきた。途端に、かあつと顔が熱くなる感覚がする。

「ち、違うって！ これはあくまで、他人からどう見られるのかを多角的にだな…」

「はいはい」

「いや、お前は誤解をしてるぞ！ 俺はただ」

「大丈夫大丈夫。それが若さだからねー」

あつはつはと笑いながらレイチエルは、朝食を食べている時も俺が家を出る時も母親のような暖かい目で俺をずっと見ていたが、俺はもうそれがたまらないほど恥ずかしかった。

※

殺風景な下駄箱の前で靴を脱ぎながら、時計の方へと目をやった。時間はまだまだ余裕はある。よし、遅刻はしなかったな。

一安心しながら上履きに履き替え、教室へと続く廊下を歩いていると、何人もの生徒がひそひそと話しているのが聞こえた。

「えー、嘘？」

「違うんだって、これ本物だよ」

「合成でしょ、これ？」

いったい何を話しているんだろう？ 教室に入り、机にカバンを置くと、教室内でも同様の現象が起きていた。

「これが噂の！」

「おー、この動画はまだ見たことが無かった！」

「だろ？ 今朝出たばかりなんだ」

ふとそんな声ができる方を向いてみると、何人かの男子がタブレット端末を弄りながら、熱く語っていた。辺りを見渡すと、クラス中そん

なことばかりしている連中がほとんどを占めていた。

このことを無視してもよかったのだが、どうしても気になってしまい、男子グループのタブレットを覗いてみることにした。

「何見てんの？」

彼らに話しかけるのは初めてだったが、フランクそうなノリで話す。すると男子グループはじろつと俺を見たが、嫌な顔一つしないで俺を話の輪に加えてくれた。どうやら今ある話題を誰でもいいから話したくて仕方ないらしい。

「いや、これなんだけどね」

俺はタブレットを持たされ、一つのサイトを見せられる。そこは光太郎もよく使う動画サイトにある一つの動画だった。投稿日は…今日の6時？ 再生数が…10万再生!? まだ2時間ちよつとしか経っていないのに何だその再生数!?

「何なんだよ？」

「いいからいいから」

数秒間のロード時間の後、動画は再生される。多少の手ブレが確認でき、そこからこれが撮影した動画であることが分かる。

何の動画なんだ？ と疑問に思ったが、次の映像に映った瞬間、光太郎は腰を抜かしそうになった。

『うおおおおお!!』

「え…？」

なんとタブレットの中には昨日俺が助けた、あの赤毛色の女の子が怪人と戦っている動画が再生されていたのだ。身の丈ほどの剣で怪人の皮膚を切り裂く瞬間、相手を拘束して、とどめの一撃を放つ瞬間。戦闘の一部始終がしっかりとそこに収められていた。

「まあ、驚くのは無理もないよ！ 僕も初めて見た時、そう思ったもん！」

「ああ、でもさ、やっぱり可愛いよな、テイルレッドたん」

「ああ、時代は遂に俺たちに追いついたんだよ」

呆然とする俺を「言いたいことは分かっているよ」と言わんばかりに肩に手を回す男子たち。いや、俺が茫然としているのはそういう意

味じゃないんだが……。本当にこの子が、怪人を？

「て、テイルレッド？」

「ああ、この子の名前だよ」

すると次の動画が再生され、そこにはテイルレッドと呼ばれた少女のスクリーン写真が次々と流れていった。

「ああ、可愛いなあ可愛いなあ可愛いなあ！」

その言葉を呪文のように連呼する男子たちをガン無視することに決め、タブレット内に映っている少女の姿に視線を落とす。

(確かにこの子は可愛いけどさ……)

まあ、よく色んな角度から撮ったもんだ。あたふたと慌てる姿、剣を持つ姿……確かに可愛い。昨日、彼女と生で触れ合ったから、その可愛さは十分に分かってる。

だが、そこは今重要じゃないんだ。

(俺と……同じなのか?)

気になったのはそこだ。俺の変身した姿と彼女の姿……共通点がありすぎる。今朝、鏡の前で見た姿とタブレット内の写真を照らし合わせてみる。

(テイルギア……だよな、これ)

腕や足の各パーツ、髪留め、そして……ツインテール。彼女の方が俺よりも1つか2つはレベルは上だが、似ているとかそういうレベルを超えている。たまたま？ いや、それにしたって……。でも、こんな小さい子が戦いに？

と、ここで俺のことはどう思われているのか気になった。一応、俺もあの場で戦っていた訳だし……もしかしたら動画にでも撮られていたのかも？ 少し怖い質問だったが、勇気をもって聞いてみた。

「あ、あのさ……テイルレッドの他にもう一人いたじゃん。あれって何なんだろうね？」

さりげなく、何ともないようにぽつりと言うと、俺の言葉を男たちはすぐに理解してくれた。

「ん？ ああ、これだろ？」

タブレットを弄り、関連動画へと飛ばしてくれた。そこには変身し

た俺が戦闘員と戦う姿が映し出される。

おお。俺、中々カメラ映りがいいんだな。じつと食い入るように見つめるが、待て待て待てとツツコミを入れる。…これ俺自身だぞ？自分自身の姿に見とれるだなんてそんな馬鹿な話があつて…。

「でもよく、この子本当に誰なんだろうな？」

「ああ…必要最小限の事しか喋らないし、口調も性格も分かんないもんなあ？」

「クーデレなのか？」

「うくん…この恰好からして、テイルレッドたん何らかの関係があることは分かるんだけどなあ」

「うくん…妹、姉？ でもそれじゃひねりが無いよな…大穴で娘とか？ でもそれじゃ見た目が…」

誰かが呟いたまさかの発言に俺は唾然としたが、男子たちは電流が走ったが如く驚き、「その発想は無かった！」を叫んだ。

「そうか…そういうことだったのか…」

そこである男子は全ての答えにたどり着いたと言わんばかりの顔をする。

「つまり、この子とテイルレッドたんは、親子関係なんだよ!!テイルレッドたんは未来の世界から若かりしお母さんを守るためにこの時代へとタイムスリップしてきたんだよ！」

「…」
「…」
「…」
「…」

お前らの頭の中では、俺とあの子はどんな設定になっているんだろう？ 気になって仕方ないが、では教えてあげようと言われても聞きたくもない。

とここで、ピンポンパンと校内放送のアナウンスが鳴り響いた。全員が条件反射でその放送に耳をすますと、一時間目を中止して、緊急の全校集会を行うので、体育館に集合してくれという内容の放送が聞こえた。

ああ、昨日生徒会長も事件に巻き込まれていたし、そのことでの放送かな？ あの後、安否も確認しないまま帰っちゃったから、大丈夫だったんだろうか？ 怪我とかしていなければいいんだけど。

「ま、このことは後でゆっくり話そうぜ、兄弟」

タブレットの持ち主と熱い握手をし、そいつは満足そうな顔をして去っていった。どうやら俺はいつのまにか彼らの仲間入りを果たしていたようだった。

こんなバカなことから始まる友情もあるんだなあと体育館に移動中、ぼんやりと思った。

※

陽月学園高等部体育館。昨日の入学式と同じように俺らはそこに集合していた。

壇の上には、昨日あの現場にいた生徒会長、神堂慧理那の姿があった。その後ろにはSPのように数人のメイドが護衛目的の為に控えていた。

新堂会長の外見には目立った外傷はなく、いたって健康そうであった。その自慢のツインテールも健在で、彼女が属性力を奪われる事態も避けられたようだ。ああ、よかった。

「皆さん。知っての通り昨日、謎の怪物たちが暴れまわり、町は未曾有の危機に直面しました」

そりゃあ、未曾有も未曾有だよ。金品や命とかを狙っているんじゃないからな。ツインテールをピンポイントに狙う怪物なんて、珍しいなんてもんじゃないだろうさ。まあ、その実態は洒落になっていないというのが、何とも言えない。

「実は、このわたくしも現場に居合わせ、そして狙われた一人なのです」

「なっ……!!」

「なんだってー!」

慧理那のその衝撃の告白は、多くの生徒に衝撃を与え、それが徐々に騒ぎへと発展し始めた。

「どこのごいっただ許せねえ!!」

「俺がぶっ潰してやるから出てこい!!」

怒りに身を包まれた生徒たちは暴徒の群れと化し始めていた。何人かの上級生はどこから取り出したのか、バットや竹刀を持っていつでも相手を殴れる体勢に入っていた。：ノリがいいのね、先輩たち。

「皆さんのその正しき怒り、とても嬉しく思いますわ。他人のために心を痛められるのは、素晴らしいことです。まして、わたくしのような先導者として未熟者のために」

慧理那はその小さな体を身振り手振りして、熱く語る。その姿に多くの生徒が賛同していく。

「しかし、狙われたのはわたくしだけではありません。この中にも何人かいらつしやるでしょう。まして目を学校の外に向ければ、さらに多くの女性が、危うく侵略者の毒牙にかかるところだったのです」

その発言に再び生徒たちはどよめくが、それをさえぎるように、しかしと慧理那は強めに言った。

「今こうしてわたくしは無事ここにいます。テレビではまだ情報は少ないですが、ネットなどで知った人も多いでしょう。あの場に、風のように颯爽と現れた……2人の正義の戦士に助けていただいたのです」

：正義の、戦士……？ 何か、おかしな流れになってきたぞ？ 猛烈に嫌な予感があるが、それは見事に的中してしまった。

「わたくしは、あの少女たちに、心奪われましたわ!!」

うおおおおお！ と喝采が起きる。いや、あんた！ 全校生徒の前で何言っているんだ!? 余計な騒ぎは控えててくれ！ 今後のエレミアンとの戦いに影響が出るからさあ！

「その言葉を待っていたんだ会長！」

「よかった：胸を張って小つちやい子はあはあペロペロと言うのに、正直引け目を感じていたんだ！ だけど、それは決しておかしな感情じゃなかったんだね！」

「私はもう一人の戦士が好きだわ！ あの美しいスタイルに軽やかな戦い方！ まさしくお姉さまと呼ぶにふさわしいお方！」

「お、お姉さまはノーマルなのかしら、それともアブノーマル、両刀：

？」

男子だけでなく女子の方も大騒ぎで、体育館は無法地帯と化していた。さながらアクション映画のラストシーンで作戦成功の知らせを受け、主人公たちが大喜びするシーンが脳裏に浮かぶが、この現状はそれらが与えてくれるような感動を全てぶち壊しにしてくれた。もう、日本の未来が心配になるような発言が次々と飛び出してくる。

「これをご覧あれ！」

慧理那が右手を挙げると、メイドの一人がスクリーンを準備する。

そして、そこに映し出されたのは、テイルレッドと変身した俺の姿だった。レッドだけではない、俺がテイルレッドを助けるシーンや手を握るシーン、話すシーンに至るまで最高画質と音声で再生されていた。

「「ウオオオオーツ!!」」

俺は周囲の歓声とは別の意味で叫びたくなった。俺は昨日の観束君の公開処刑以上の惨劇をこの身で味わっているからだ。…ああ、これもう、周りに絶対、正体をばらせなくなった。ばれたら社会的に、死んじやう。俺、学校に来れなくなっちゃう。

「神堂家は、あの方々を全力で支援すると決定しました！ 皆さんもどうか、わたくしと共に、新世代の救世主を応援しましょう！」

歓声は更に高まった。誰かが「ツインテール」のコールを始めたかと思えば、それがあつという間に数人に伝染し、ついには大合唱になった。

「「ツインテール！ ツインテール!! ツインテール!!!」」

(マジかよ…)

俺は新手の宗教が生まれる瞬間をこの目で見ているのかもしれない。そして半笑いになりながら横を見ると、俺と同じような顔をしているクラスメイト、観束総二がいた。

彼も俺に気付いたらしく、俺と同じようにどうすればいいのかわからないような顔をしていた。…昨日まで彼がとてつもない変人に見えたのだが、この状況下ではとんでもない常識人のように思えてくる。

俺はほつりとこう呟いた。

「もうやだ、この国」

その言葉に観束君は同意するように頷いてくれた。…どうやら、また一人、俺は仲間を見つけることができたらしい。

第8話 ツインテール、出陣

「ほんと、世の中馬鹿ばかりね」

「俺もそう思うよ……」

「以下同文です」

放課後、げんなりとした顔で歩く3人の生徒の姿があった。彼らの人生が始まってまだ15年程度だったが、これほどまで疲れた日は無いと言わんばかりの哀愁が体から滲み出ていた。この疲れに比べればまだ受験の方がマシだったと思えるくらいに今日は疲れた。

丹羽光太郎、観束総二、津辺愛香。この3人は今朝のバカ騒ぎについていけなくなった大変貴重な生徒たちであり、あの体育館での出来事がきっかけで彼らは知り合った。

あの騒ぎの後、学校は収拾がつかないほどの不法地帯と化した。ネットには俺とテイルレツドの画像や動画がガンガン拡散しているし、周りの生徒たちの発言も理性を振り切ったような世迷言だらけで、ぞわぞわと悪寒が走るほど酷いものばかり。

『俺巨乳好きだったんだけど、目覚めちゃった』

『その拳と剣で俺の体をバラバラにしてくれないだろうか』

『幼女が好き？ ……そんな恥ならとうの昔に受け入れた！ ……そして今俺はここにいます！』

『馬鹿ね、性別何て壁、愛の前では無力なのよ！』

『私のお尻を叩いて、いや舐めて！ ……愛しのお姉さま！』

これから日本の未来を背負う奴らがこんなことばかりほざいているのだ、まともな精神を持っている奴ならば疲れるのは当然だった。そうして気がついてみれば、クラスの隅で同じような顔をしている男女が3人。…俺たちが結束を深めるのは必然だったのかもしれない。

そして俺たちは互いの傷を舐めあうように、放課後も一緒に行動を共にしているのだった。

「あいつらには恥つてもものがないのかな」

「…多分恥ずかしいとか、そういう概念をもう飛び越えちゃっているのよ」

観東君の発言に頭を押さえて、げんなりとした顔をする津辺さんが見事な回答を出してくれた。どうやら彼女の女友達も変態発言をほざくようになってしまい、相当参っているらしい。

「帰ったらトウアールを締め上げて、ファイルを消させましょう。あいつならできるわ」

「お前は少し、暴力以外の解決手段を取れ！」

「まどろっこしいのは嫌いなよ、あたし」

シャドウボクシングをしながら何やら物騒なことを津辺さんは話している。結構武闘派なのね、彼女。トウアールという人の身が心配だ。

「…」

そんな愛香の姿を自然と目で追いながら、いつのまにか光太郎は会話の内容とは違う想念で占領されていた。

（ああ、それにしても。やっぱりいつ見ても凄いツインテールじゃないか）

シャドウボクシングでゆらゆら揺れるツインテールを目で追う。天然ものでそこまで凄いツインテールに仕上げられるとは…凄い、なんて凄いのだろう。

俺が変身すれば彼女に匹敵するほどのツインテールにはなれるが、彼女は変身前から既にレベルが高いツインテールを維持している。：髪のケアとかには気を使っているんだろうな、きつと。女の人は髪の洗う時間も凄くかかるって聞いたことがあるし、俺が今朝触った時の感触…。

「ねえー」

誰かがぐいっと通学カバンを引っ張られる感覚で、光太郎は現実的思考を戻される。またやってしまったと我に返ると、津辺さんが心配そうな顔で俺を見ていた。

「ねえ、あんた…大丈夫？」

「えっ!? ああ、いや、うんその…大丈夫! うん、大丈夫だよ!」

何だか俺を変人みたいな目で見始めている津辺さんに、俺は必死のフオローを入れる。違うよ、俺は変人じゃないよ、たまたま物思いに

耽っていたごく普通の高校生だよと云わんばかりのアピールが伝わったのかどうか分からないが、津辺さんは怪訝そうな顔をしながらも、それ以上何も言っただけで喋ってこなかった。

「いや、愛香。俺たちだけで喋っていたから、光太郎が会話に入っただけなだけでいいか？」

「…あ、そうだったの？」

ここで観束君のフォローが回ってきた。どうやら彼は俺が黙っていた理由を勝手に解釈してくれたようだ。観束君の言葉で津辺さんも俺が会話に加われなくて困っていたという風に解釈してくれたらしい。

ありがとう観束君、おかげで津辺さんの誤解も解けそうだよ。昨日、心のどこかで君を馬鹿にしていたことを謝りたい。

「あ、ええと、うん、そうなんだ。ごめんね、観束君」

この波に光太郎は乗った。怪しまれないように、少しだけ、腰を低くした。

「あーと、総二でいいぜ。名前で呼ばれるのは慣れないからさ。ついでに敬語も無しにしてくれ」

ここでフォローは完了した。これで俺は「津辺さんのツイントールを見ている男子」ではなく「会話に入れなくて戸惑っている男子」という風に解釈されたはずだ。しかもここで更に追い打ち。名前呼びまで許してくれるだなんて、寛大じゃありませんか。

「じゃあ、…総二、ごめんな」

少しだけ、図々しくしてみる。彼が呼び捨てでいいと言うのならばこれくらいの方が印象は良いだろう。

「俺もすまなかったよ、光太郎」

総二は両手を合わせて、俺に謝ってくれた。

こうして、光太郎と総二は互いのことを知る事になったのだった。

※

それから俺たちは会話をしながら、ブラブラと歩いていた。

話の内容は勿論、テイルレッドと変身した俺のことや侵略者のことだ。

特に後者は俺も非常に関心があった。どれくらいのペースで攻めてくるのか、戦力は何匹くらいなのかなど。ある程度の戦力が分かればモチベーションも保ちやすいんだけどな。

「それにしても、何時までこの騒ぎが続くのかしらね」

愛香は疲れたような顔で、そこら辺の通行人を見た。

既に昨日の事は何人もの人に知れ渡っているらしく、どこへ行っても話題には尽きなかった。中には学校の連中と同じような発言をするような輩とも遭遇した。：おまわりさん、捕まえるなら今だぜ？

「すぐに収まればいいんだけどな…」

そう答えた総二も泣きそうな顔になっていた。うん、その気持ち、凄いい分かる。ただの一般人の総二ですらそう思っているのだ、身元バレの危険と隣り合わせの俺にとってはこの手の話題は一刻も早く消えてほしい話題だ。：ただ、どこか確信もあった。

これはあくまで希望的観測だが、しばらくすれば徐々に消えていき、最後は忘れられる、そんな風に物事が運ぶのではという確信は心のどこかにあった。

新しいものが目まぐるしく変わり、数日程度で新たな話題が上がる現代。それを楽しむ民衆は新たな話題にすぐ食いついて、前の話題を次第に忘れていく。テレビの前のスクリーンや事件と同じだ。だからどうせこの事態も次第に風化していつて忘れられるんじゃないか。そう光太郎はタカをくくっていた。

(しばらく波が治まるまで、変身は気を使わないとなあ…)

まさか男の身で「ネット流出」という現象に怯える日が来るとは思わなかった。戦闘中ならばともかく、変身前後の姿は絶対に見られないようにしなければ。少なくとも、特撮ヒーローみたいに敵のド正面での変身は絶対に行ってはいけないだろう。よくあんなことできるよな。

カメラとか動画は必要最小限しか撮られないようにして、戦闘が終わったなら、早く離脱するように心がける。：このこともレイチエルと

話し合った方がいいな、うん。それに、テイルレットのこともレイチエルに聞こう。何故、テイルギアを彼女は持っているのか？ 俺と彼女の関係は？ それに、もし、彼女自身が戦いを拒んでいるのならば：俺は何らかの行動を起こす必要があるかもしれない。一桁の年齢の子を戦いに参加させるのは、俺自身引け目を感じているからだ。できることなら、彼女のそのツインテール姿を戦場で見せることは避けて欲しい。

「あいつらまた来ますかね？」

「まつさかー、昨日の今日で…」

津辺さんは俺の発した言葉に苦笑しながら、角を曲がり、そして…『この世界に住まう全ての人類に告ぐ！ 我らは異世界より参った選ばれし神の徒、アルティメギル！』

突然、空中に巨大スクリーンが浮かび上がったかと思うと、津辺さんは盛大にカバンを落とした。津辺さんだけじゃない、総二も俺も、カバンを落とした。

聞き覚えのある名前に嫌な予感がし、空を仰げば、竜の姿をした怪物が偉そうに足を組みながら玉座に座っていた。

『我らは諸君らに危害を加えるつもりはない！ ただ各々の持つ心の輝き(ちから)を欲しているだけなのだ！ 抵抗は無駄である！ そして抵抗をしなければ、命は保証する!!』

これは所謂、宣戦布告ということなのだろうか？ 町中にあるテレビやラジオ、電子機器類から同じような声や映像が聞こえてくる。総二も携帯のワンセグを起動させると、どのチャンネルを回しても空のスクリーンと同じ映像が流れていた。

(ああ…(…いつらやりやがった)

もう、駄目だ。とっさにそう思った。

学校の奴らだけじゃなく、一般市民にもアルティメギルの存在が、ばれた。これ絶対、間違いなく面倒なことになる。

『だが、どうやら我らに弓引く者がいるようだ…。抵抗は無駄である！ それでもあえてするならば…思うさま受けてたとう！ 存分に挑んでくるがよい!!』

すると、偉そうにしていた怪人から、亀のような外見の怪人へと映像が変わった。

『ふはは、わが名はタトルギルデイ！ ドラグギルデイ様のおっしやる通り、抵抗は無駄である！ 綺麗星と光る青春の輝き…体操服ブルマの属性力を頂く!!』

ブルマ…？ ツインテールの次は体操服のブルマ？ 髪型ならまだ理解は及んだんだけど、衣服の好みでも属性力って存在するのかわかるといふか、ブルマって絶滅危惧種ものの服装だぜ。

俺の思考とリンクしたように、申し訳なさそうに一人の戦闘員がそつと耳打ちをする。

『…何、この世界では、今はほとんど存在せぬだと！ おのれおろかなる人類よ、自ら滅びの道を歩むかああああああ!!』

絶叫する怪人と、絶句する俺たち。

『タトルギルデイ？ 終わったのか？俺の出番はまだか？』

『うわ、馬鹿！ まだ貴様の出番ではないぞ、ヘッジギルデイ!』

『何！貴様ばかりずるいぞ!』

『うるさい馬鹿者お!! まだ私の演説は終わって』

亀怪人がいったい何を言いたかったのか最後まで分かることは無く、ぐだぐだのままプツンと映像は途切れた。

「……………」

俺たち3人は顔を見合わせ、あははと力なく笑っていると、俺と総二の携帯が同時にけたたましく鳴り響いた。

「うわあ!」

2人はすつとんきよんな声を上げ、慌てて画面を開いてみると、見たこともない番号からの電話だった。

総二も画面を開いて、俺と同じようにどこか戸惑っているみたいだった。とりあえず、津辺さんに「電話出てくるね」とだけ言い残し、少しだけ離れて通話ボタンを押した。

「もしもし?」

『あたしよあたし!』

出てみると、レイチエルの甲高い声が聞こえてきた。心なしか、受

話器越しの彼女はゼーゼー息が上がっている気がする。…こいつ
どっから、掛けてきてんだ？

「お前、どっから電話掛けて…」

『駅前の公衆電話よ!! しょうがないでしょ、あたし携帯持っていないんだから!!』

その言葉で納得する。ああそうか、こいつ携帯持っていないから、俺に掛けるとしたら公衆電話から掛ける以外方法が無いんだ。…駅までわざわざダツシユして掛けてきたのか、レイチエル。

『そんなことよりも、来たわよ、あいつらが！ アルティメギルがこの付近に出現したわ!』

「えっ!？」

嘘だろ!? 普通、怪人は1週間に1回のペースで出現するもんじゃ無いのかよ!!

『とにかく、相手の座標の位置はテイルギアに転送したわ。変身すればあんたを自動的にナビゲートしてくれるから!』

それだけを言い、レイチエルは電話を切ってしまった。

「ちよ、ちよつと待つ…」

相手はいったい何を求めているのかとか、はたしてそいつはブルマを狙う怪人なのかとか、この状況を切り抜けるにはどうしたらいいのかとか。聞きたいことはいっぱいあるのに、勝手に電話を切られてしまった。

呆然としていると、丁度総二も電話を終えたらしく、こっちに向かってきた。

とりあえず、ここから抜け出さなくては。黙って抜けると逆に怪しまれる、ここはあくまでも自然に、現実の範疇でありえる急用ができたと言えば…。

「総二。そ、その…俺、急用ができちゃって…今、俺の家に来ているところが外出中に迷子になっちゃって、探しに行かなきゃならないんだ…」

まあ、なんて下手くそな嘘なんでしょうか。俺が今咄嗟に浮かんだ精一杯の嘘がこれだった。これだったら何も言わないで立ち去った

方が何倍もマシだと、言ってから気付いたが、もうどうしようもない。「お、俺もそうなんだ。母さんが病気で倒れてさ…病院にいかなきゃならないんだ…」

ほら、総二の方が本当の急用じゃないか。お母さんが倒れたただなんて…。

「へ、へーそうなんだ…」

「そ、そうなんだよ」

周りの空気が一気に死んでいくのを感じ、俺はもう耐えられなくなつて、逃げた。

「そ、それじゃあね！」

「お、おう！ また明日な！」

脇目も振らずに猛烈にダッシュし、近くの路地裏に入る。そしてテイルドライバーを腰に着け、コンマ数秒で変身を完了させると、半分涙目になりながら俺は街を駆けだした。

（あああ、もつとマシな嘘があつただろうに！ 絶対怪しまれたぞ、俺の馬鹿野郎!!）

そう叫びながら、俺はアルティメギルの反応がある場所まで懸命に走った。

※

「これ、持ってきてくれ！」

総二は愛香に自分の荷物を預けると、勢いよく走り出し、光太郎が駆け込んだ側と反対に位置する路地裏で変身アイテム、テイルブレスをかざして、一瞬でテイルレッドへと変身を完了させる。

そして先ほど光太郎についた嘘を後悔していた。

（家の母さんが病気？ ああ確かに病気にかかっているよ、中二病という名の不治の病にな！ つーか、家の母さんが病気で倒れるとか、天地がひっくり返ってもあり得ねー！むしろ邪気『癌』という名の病原菌をばら撒く側だぞ!?!）

自分の母親のエキセントリックな行動を普段から見ている総二は、

自分が放った言葉がどれだけあり得ないか十分に理解できていた。一児の母にして未だ現役の中二病患者である母は、かれこれ20年近く病気にかかったことすらない。総二自身、母は病原菌か何かの生まれ変わりなんじゃないかと本気で思うほどだった。

更に母はたびたび行う奇行のせいでご近所からは悪い意味で有名になってしまっている。あんな嘘、すぐにはれる。もっと上手い嘘を言うべきだった、いとこが迷子だなんて光太郎の方がよっぽど急用じゃないか。

：こうしてお互い誤解し、すれ違ったまま、2人の戦士はそれぞれの戦場へと向かうのだった。

第9話 ツンデレとツインテール

変身した光太郎はレイチェルが送ってくれた座標データに従い、目的地まで最短ルートで突っ走っていた。道を走り、時には壁を登り、時には建物と建物の間を飛び越える。さながらアクションスターのように街を駆けていると、周りから色々な声が聞こえてくる。

「おい、あれー!」

「ネットの女の子じゃないか!?!」

だがそれに答えている余裕もかまっている時間もない。ビルオブセンスに足を乗せ、そのまま一気にジャンプして、隣のビルへと飛び越える。そしてジャンプで得た勢いを殺さないように猛然と走り出す。

あと少しで戦いは始まる。アルティメギルが今度は何を奪おうとしているのかはまだ分からない。ツインテールかブルマかあるいはそれ以外の属性力なのか。けれど、自分が戦わなければ、誰かの属性力が奪われる。それだけは間違いない。そして、それを止める力があるのなら、俺はそれを止めなければならない。例えそれが世迷言を叫ぶ変態集団で、ひどくスケールの小さい侵略行為であってもだ。

とん、と軽い足取りで民家の屋根に着地すると、目的地までいよいよ数百メートルになる。最後に座標を確認して目的地まで一気に行動こうとするが、示した場所と目の前の光景にん? と疑問に思った。

(え、小学校…?)

間違えたか? と座標を確認するが、目的地は目の前の小学校をしっかりと示している。瞬きをしても凝視してみても同じだった。座標はそこを、『私立陽月学園初等部』を示していた。

「…」

猛烈に嫌な予感がし、ぞわぞわと背中に悪寒が走り始める。

昨日と今日、アルティメギルの行動や目的を知っている身としては、彼らが戦いの舞台を小学校に決めた時点で何かしらの邪な目的があるのだろうと疑いをかけざるを得ない。ツインテールやブルマの

属性力があるのならば、他にも属性力は無数に存在すると考えたほうがいい。レイチエルは、年齢や職業、人の意志や好みでありとあらゆる属性力は存在すると説明してくれた。小学校とは必然的に小学生がいる場所。わざわざそこを選んだ理由は、求める属性力がそこに集中しているからだろう。

小学生が持つていそうな属性力といえば：ランドセル、スク水？まさかロリコン属性とか言うんじゃないだろうな…。

もしそうだとしたら、俺が戦うよりもおまわりさんと呼んで対処してもらった方がいいと思うのだが。多分、一発で牢屋にぶち込めるほどの変態集団だからさ、あいつら。：仮に警察が彼らを牢屋に入れられればの話なんだけど。

「よし…い」

そう呟いて、拳を握った。ここで大人しくいても、しょうがない。とりあえず行く。いかなかったら帰るし、いたら戦う。それしかあるまい。

行くか。そう決心し、光太郎は屋根の上を駆けだした。

※

私立陽月学園初等部の校庭。この時間帯はほとんどの生徒が授業を既に終え、放課後を迎えていた。校庭で遊ぶもの、校舎に残るもの…さまざまな生徒で溢れる場所だが、ここにいつもの光景とは違う、一人の怪人が混じっていた。

「さあ、おとなしくしている！」

女子小学生を脅し、次々と捕えていく怪人。身長は2メートル前後、爪や牙はそれほど発達していないが、そのかわりに体中に鋭い針を生やしている。

その怪人の名はヘッジルディ。ハリネズミのような姿をしている怪人であり、ここに来たのも彼が持つ属性力がここに集中しているからだ。

「近寄らないで！」

「キヤー、変態！」

ヘッジギルデイはアルテイロイドに囲まれ、怯える女子小学生にすっかり気をよくしていた。

やはり子供はいい。とりわけ、思春期を迎えたばかりの子供は、なお良い。まだ熟しておらず、青い果実のような年代の少女がヘッジギルデイはたまらないほど好きだった。

何が好きなのだ？ と同僚のタトルギルデイに聞かれたことがある。熟していないなら、中学生や高校生もそうだし、何故貴様はそこまでこだわるのか？と。タトルギルデイは体操服（ブルマ）が一番似合うのはその年代であるといつも語っている。程よい肉付きや大人っぽさ。確かにそれらは劣る要素だ。だが、小学生はそれらにも勝る要素があるのをタトルギルデイは知らないのだ。

よく間違われるのだが、ヘッジギルデイは決してロリコンではない。子供は確かに好きだが、性的な意味での好きではないのだ。だが、世間は子供好きというだけでロリコンのレッテルを貼る連中は多く存在するし、ヘッジギルデイもまたそういった被害に合うことも多かった。自分は人を襲う立場ではあるし、聖人だというつもりはないが、ヘッジギルデイは自分にそういう趣味は一切ない、ということだけは断言できる。

あいつらには分からないのだろうか。なんというのだろうか：青い果実が甘酸っぱいのと同じように、彼女らには彼女ら特有の甘酸っぱさがそこにはあって…。

「待てえ！」

だが、ヘッジギルデイの物思いは後ろから聞こえた声に途切れることになった。

「誰だ!？」

そう言い放ち、振り返る。その力強い声。まさかテイルレッドか？だがそこにいたのはテイルレッドではなかった。

幼いテイルレッドをそのまま成長させたような外見、大きすぎず、かつ小さすぎてもいない適切で美しいスタイル、アーマーにはファイヤーシンボルのペイント、そして鮮やかな焰色のツインテール。可愛

さよりも凛々しきという言葉が似合う少女。

「ほう…来たか、名無しの戦士よ！」

そこにいたのは後に、「テイルレッドの姉妹派」と「テイルレッドの親子派」の終わりなき争いを繰り広げる原因になる少女…もとい変身した光太郎の姿だった。…どうでもいい話である。

※

「名無し…？」

怪人と対峙したと思えばいきなりそんなことを言われて戸惑う俺。

「そうだ、お前のことだ！」

そう言つて怪人はビシツと光太郎に指を刺す。

「リザドギルデイを殴り飛ばしたその拳、見事なツインテールに、テイルレッドに似た姿！ お前以外に誰がいる!？」

ああ、やっぱリアルティメギルにも目をつけられているのね、俺。

「…」

「何だ、黙つたままか。テイルレッドと違つて随分無愛想なんだな」

悪かったな、こっちはこれからのことで頭がいっぱいなんだ。カメラ対策とか、お前らの対策とか。

「俺の名前はヘッジギルデイ！ お前の名は何だ!？」

「…名前？」

「そうだ、俺たちアルティメギルには双方の名前を言つてから戦いを始めるという鉄の掟がある。で、お前の名前は何だ？」

俺ははたと困つてしまう。確かに俺の名前は丹羽光太郎というけれど、まさかここで本名を言う訳にもいかない。

俺によく似たあの子はテイルレッドと名乗っていた。普通、戦隊ヒーローとかだと、ブルーとかイエローなど色の名前の付けるのがお決まりの法則であり、あの子もそれに従つたのだろう。となると、俺が名乗るべきは必然的に「テイル○○」という名前になり、○○の中に似合う名前を入れる必要がある。

でも俺のメインカラーのレッドはもうあの子が使っているし、同じ

名前を言うのは流石に駄目だ。どうする、何て名乗ればいい？

「どうした？ さっさと名乗れ！」

ヘッジギルデイが早くしろと言わんばかりに貧乏ゆすりをし、苛立ち始めている。分かっているよ、こつちだつて名乗りたければすぐに名乗っているんだから。

うーん、ゴロがいい名前は何か？ テイルドラゴン、テイルサンシャイン、テイルナツクル：法則に当てはめないとするとアナザーレッド、とかか？ 駄目だ、いい名前が出てこない。

「…ちよつと待つて、タイムだ。レ：マネージャーと相談するから、少し時間をくれ」

俺は両手で×のマークを作つて、怪人に交渉にタイムを申し込んだ。通信でレイチエルと相談して、今すぐ名前を決めなくては。

「相談？ 何故だ、名乗るくらいすぐに出来るだろう」

「こつちにも色々事情があるんだよ。それにそつちだつて俺がしつかりと名乗つた上で戦う方がいいだろう？ 雰囲気的にもさ」

「…む、確かにな。お前の名乗りを受けたうえで初戦、シチュエーションは非常に大事だ。戦う身としては、この問題ははっきりしておいた方がいいだろう。分かった、相談とやらを認めてやる」

納得しちゃつたよ、こいつ。駄目元で言つたのに、まさかの承諾を貰つてしまった。ヘッジギルデイは指を3本掲げ、俺に突き出す。

「3分待つ。だが、それ以降を過ぎれば女子たちを襲うぞ、いいな？」
「ありがとう、でも逃げはしないから安心していてくれよ」

そう言つて、俺は近場の木陰に引つ込むと、レイチエルに通信を送る。

『名前え!? そんなもの適当に言つちやいなさいよ。レッドだつて即興で決めたんでしょ?』

一部始終を話すと、レイチエルはすつとんきよんな声を出した。こんなことで通信を貰うとは思つてもみなかつたらしい。

「色が被っているんだぞ？ 色がレッドと違うならすぐに出たけど、同じ赤色だから困っているんだよ」

『うーん…そうね』

「名前って、一回言ったら引つ込みが聞かなくなるんだからな。お前だって怪人と戦う俺が変な名前と呼ばれたら、嫌だろ？」
『そりやそうよ。へんてこな名前と呼ばれちゃたまったもんじゃないわ』

巷では一目では読めない名前や暴走族の当て字のような名前が流っているが、流石に俺はあのような名前と呼ばれながら戦っていく自信がない。万が一、そんな名前がお茶の間で流れたら、俺は多分、二度と戦えなくなるほど、心に傷を負う羽目になる。

それからあーでもないこーでもない意見と意見を交換し合い、3分の制限時間ギリギリによく決まった。

「…て、いうのはどう？」

「うん。ゴロもいいし、被っていない。決まりだな」

急いで木陰から飛び出した。決まったぞ、もう戦えるぞと言いながら、ヘッジギルデイにアピールしながら、戻る。

「ほう、そうか。では改めて聞く！ 貴様の名前は何だ!!」

まるで3分前の事はなかったかのような感じで仕切り直しになる。

「俺の名前は…テイルファイヤーだ！」

そう、二人のレッドがいるのならば、俺はもう一人のレッドになればいい。だが、そのまま使うのでは駄目だ。だから、俺はこのアーマーに刻まれたファイヤーシンボルの名前からもじって、こう名づけた。炎のツインテール戦士、テイルファイヤーと。

「ほう…確かに聞いたぞ、その名を！ では、炎の名を持つ戦士よ、いざ尋常に！」

ヘッジギルデイはぐぐつと身を構え、戦いの体勢に入る。俺もファイティングポーズを取り、戦いの開始を待つ。

「…勝負！」

ヘッジギルデイの声で、俺にとって、初めての孤独な戦いのゴングは鳴った。

※

先に飛び出したのはテイルファイヤーだった。拳を握りしめ、昨日の時と同じように、全速力で踏み込んでからの一撃をくらわせようとする。

そして、あと一步のところまで射程圏内に入ろうとしたその時、突然、何か鋭い警告を発した。今、踏み込んではずい…！

無理矢理足を突き出して、とつさに飛び退らせた。直後、ヒュン！と踏み込もうとした場所に何か突き刺さった。

「よくぞかわした」

俺は地面に突き刺さった何かを見て、驚いた。そこに突き刺さっていたのは、10センチばかりある鋭い針だった。きわめて鋭利なそれは半分以上が地面にめり込み、ヘッジギルデイがかなりの速さで射出させたのが伺える。もし当たっていたら、なんてあまり考えたくない。いくらこのギアに守られているからって、不用心でいたら危ない。

「次からは迂闊に飛び込まない方がいいぞ？ 串刺しになりたくないならな」

「…そりやどうも」

随分と紳士的だ。余裕があるのか、それとも舐めているのか。…多分、両方当てはまるんだろうな。

(くそ…)

遠距離攻撃、奴がどれほど針を飛ばせるのかは分からないが、これで迂闊に飛び込めなくなった。

ゆつたりとヘッジギルデイの周りを歩きながら、出方を伺う。その間にギアの情報を読み取る。何か遠距離から攻撃できる手段はないのか？ このままだとなぶり殺しだ。

「来ないのか？ では、俺から行かせてもらおうぞ」

しらびを切らしたヘッジギルデイが両腕の穴から針を出し、メリケンサックの要領で腕がトゲトゲにし、拳を振りかぶってきた。

「いいっ!？」

慌てて横に跳んで回避するが、拳がめり込んだ場所には針でできた穴がいくつもできていた。まいった、あいつ、針を射出するだけじゃ

なくて、出すだけ出して留まらせておくことも可能なのか。

「驚いたような顔をしているな。そう、これが俺の属性力…ツンデレ尖照属性だ！」

「ツン、デレ…？」

ツンデレというのは、所謂性格を表す単語の一つだ。普段は「ツンツン」して取っ付きにくい感じを出しているが、特定の条件下になると「デレツ」とするような性格のことを示している。あまのじゃく、とでも言えばいいのだろうか？　つまりは中々素直になれない性格のことだ。

「そう、ツンデレという属性力は思春期の目覚めと共に目覚める物だ。そもそもこれの生まれるきっかけとなる『恋』や『異性の違い』という感情も思春期辺りから生まれるものだからな」

ヘツジギルデイはブロードウェイのように歩きながら、何やら演説を始めた。

「だが、この辺りの齢になってくると、素直に自分の思いを伝えるのが難しくなってくるものだ。『やーい、あいつ○○と話しているぞ』とか『あの子、○○君と話しているわ』とか周りの声を気にしがちになる。その結果、素直になれなかったり意地を張ったりする女子が増える訳だ」

…こいつ、小学校の校庭で拳を握りしめて、何を熱く話しているんだ。

「だがな、俺はその感情の狭間で悶えたり、初々しい反応をする女子がたまらなく好きだ！　俺の同僚は『小学生は青い果実』だと言っていたが…その青い果実が俺は好きだ！　思春期を迎えて、初めての感情に戸惑ったりする幼子の姿が…たまらんっ!!!」

…こいつもやっぱり、変態だった。それにしてもツンデレ属性かなるほどね、ツンが針を示しているのか。

「そしてだな…この属性力はお前と非常に相性がいいのだ」

何？　思わず、眉をひそめる。

「…ふ、何を、という顔だな。ツンデレに対して、ある偉人は言った。ツンデレとはツンとした鎧で固めているが、中身はデレツと柔らかい

気持ちでできていると」

「何が言いたい!!」

俺はヘッジギルデイの腹部を、まだ針を出していない部分を全力で殴った。完全に不意を突いた一撃であったそれは、ヘッジギルデイをのけ反らしたが、ケロリとした顔で踏みとどまる。俺はその光景に愕然とした。

「俺は属性力：^{ツンデレ}尖照属性を持つ怪人。ツンデレを一途に愛し、己を高めた。そして鍛錬を積み重ね、それを高めた結果：俺はツンデレの如き体を得た！ 外はツンとした固き鎧に、中身はデレツとした柔らかな体になったのだ！ それすなわち：打撃系の攻撃は俺には効かんことを意味する!!」

打撃を受けつけない強固な鎧のごとき外側、その衝撃を受け止める柔らかい身体。この2つを習得したヘッジギルデイは驚異的な防御力を得ることに成功した。あらゆる攻撃を弾く防御。少なくとも、打撃技でこの防御を破った者は未だかつて存在しない。それ程までに強力な守りを、ヘッジギルデイは持っているのだ。まさにツンデレという言葉を具現化したような存在なのだ。

「更に悪い知らせがあつてな、俺の繰り出せる針は、単発ではない！」
「っ!!」

ファイヤーは己が逃れられない状況に陥つたことに気づき、その場を離脱せんとするもそれを見通していたかのようにヘッジギルデイは凄まじい速度で、いくつもの針を射出する。

あの威力の針を、しかも連射できるって!?

「畜生、正々堂々戦え！」

「ふん、何を今更！ これが俺の戦いだ！ ツンデレは気を許さない相手にはツンツンするものだ！」

ヒュンヒュンヒュンヒュン！

いくつもの針の嵐が、逃げ惑うファイヤーの体を襲う。目にも追えない驚異的なスピードでそれを避けるが、何発かは避けきれずに体を襲い、フォトンアブゾーバーがその威力を殺しきるのを感じとる。

だが、それも何時までもつか。全身を包んでいる防護膜、フォトン

アブゾーバーは決して無限に発生できるわけではない。このままズリ貧のまま攻撃を受け続けたら、いずれエネルギーが底を突き、自分の生身の体を直撃する。

そして、奴の針が何発出るのが分からない以上、逃げに徹するし
かできない。攻撃も通じない。八方ふさがりじゃないか！

『こう…じゃなかった、ファイヤー！ 逃げてばかりじゃ勝てないわ
！』

「そんなこと、言われなくても、分かっている！」

今度は生身の部分に針が当たる。幸いにもフォトンアブゾーバー
はまだその役割を果たしているが、いつまで持つか。

『ええ、そうね！ その為に、あんたのギアには武装が積んでいるのよ
！』

「んなこと、言ったって、レッドのような武器はギアには無かったじゃ
ねーか!!」

そう、これが何よりもマズイ問題だった。この状況を打破できる手
持ちの武器が無いが、自分のベルトに問いかけているが、反応はNO。
即ち、このギアには素手での戦闘しか配慮していないのだ。

『ええ、確かに手持ちの武器は無いわ…』

レイチエルは「でも！」と付け加える。

『あたしが何にも武装をつけないで戦場に放り込ませるわけないじゃ
ない！ あんたの今着けている両手の籠手に、あいつを倒せる武装が
搭載されているのよ！』

「何い!?!」

慌てて、両腕のアーマーの情報を確認する。脳裏にタイプライター
が叩かれるように、左右それぞれの籠手に搭載されている武装の説明
が浮かんでくる。こいつ、俺の籠手に武器を仕込んでいたのか。どう
りで他の所を検索しても見つからないはずだ。

「…また、お前の趣味丸出しの武装だなあ、これは!!」

『でも、役には立つてしょ!?!』

「まあ、なー」

そして針がついにファイヤーのツインテールを打ち抜き、はらりと

髪の毛が数本落ちる。が、ファイヤーは動じずに逃げるのをやめ、ヘッジギルデイと真正面から向き合った。

「ほう、ついに諦めたか」

ヘッジギルデイはようやく獲物をしとめられると思ったのか、とどめの針を射出する。諦める？　：ああ、諦めてはいたさ、さつきまではな。

「ファイヤーウォール!!」

その声と共に突き出した左手から、紅色のバリアが展開された。

「何!?! バリアだと!?!」

ヘッジギルデイが狼狽する。そう、これがテイルファイヤーの左手に仕込まれた固有武装『ファイヤーウォール』。体に纏うフォトンアブゾーバーを左手一点に集中して作る空間湾曲バリアだ。残り少ないフォトンアブゾーバーを左手一点に集中させたこの技は、ヘッジギルデイの針を完全に防ぎ、その全てが消滅していった。

「おのれ、小細工を!」

ヘッジギルデイは針の射出をやめ、近接戦闘に移ろうとこちらに走り出してきた。：お前、最初に言ったよな、迂闊に飛び込むなって。だったら、その言葉、そっくりそのまま返すぞ!

『今よ!・ 右手を!』

レイチエルの合図で右手を突き出すと、勢いよく籠手部分がスライドし、右手の武装の攻撃準備に入る。弓を引くように拳を振りかぶり、狙いを定める。

「ブレイク……!」

スライドした拳は高速回転を始め、うねりを上げる。それを勢いよく走って来るヘッジギルデイ目かけ、殴り込む様に射出する。

「シュートオ!!」

掛け声と共に発射された拳の弾丸をヘッジギルデイは避ける術もなく、腹部に直撃した。

「ぐぬ、ぐぬああああ……!!」

踏ん張ろうと堪えるヘッジギルデイの腹部では、直撃しても尚も回転を止めない拳が健在していた。

『ブレイクシュート』。テイルファイヤーの右手に内蔵されている武装であり、所謂ロケットパンチと呼ばれる、右拳ごと相手に射出する武器だ。

そしてその拳が、強固な鎧の如き身体を砕き…遂にはその身体に風穴を開ける。

「ぐああああ!!」

その絶叫と共に、ヘッジギルデイは「く」の字の姿勢で吹っ飛んだ。『一つ教えてあげる、ツンデレの女の子はね、鎧すら打ち貫く必殺の一撃に凄く弱いんだよ』

そのレイチェルの言葉を果たしてヘッジギルデイが聞けたかどうかは分からない。

だが、消えゆく意識の中ではつきりところ思った。この戦士は、テイルファイヤーは強い、と。

そしてヘッジギルデイは爆散し、その身体は跡形もなく散っていった。

第10話 裏方とツインテール

爆発。ヘッジギルデイを貫いた拳の影響で、それは巻き起こった。その爆発で校庭に軽い火柱が上がる。その火柱を前にして悠然と立つ戦士、テイルファイヤー。散った怪人、立つ戦士。もはやどちらが勝者かは明白であった。

そして射出された右手が腕へと戻ってくる。がちんと収まり、射出形態に変形していた拳は元の籠手の姿へと戻った。

「ふう…」

軽く右手を動かして、腕が戻ったことを確認すると、光太郎は盛大にため息を吐いた。

初めての戦いは終わった。一応、怪人は消えたことだし、俺の勝ちってことになるんだろうな。

にしても、怖かった…。初めての戦いとはいえ、本気で諦めかけたし、泣きそうになった。あいつの属性力、かなり厄介だったからな。尖照ツンデレがあればほど恐ろしい武器になるとは。

幸いにも俺には対抗手段はあったものの、もしあいつとテイルレットが戦っていたらと思うと一体どうなっていたんだろう。あの子の武器は剣だけだし、嫌でもあいつの懐に飛び込まなければならぬだろうし。もし、彼女が傷ついたら…。ふとそう思ったが、首を振ってそれをかき消した。

もしも何てありえない。あの怪人は俺が倒した。テイルファイヤーが勝って、ヘッジギルデイが負けた。それが全てだ。

「さて、と」

ファイヤーは身体に鞭打ちながらも何とかヘッジギルデイが爆発した地点までたどり着き、そこにしゃがみこみながら一つの結晶を手にする。無機質なはずのそれは、まるで生きているかのように神秘的で、とても美しく見えた。

(これが、属性玉…)

それは属性エレメント玉と呼ばれる、属性力が結晶化したものであった。属性力を糧にして生きるアルティメギルを倒した時に出る思いの結晶

体。ヘツジギルテイが愛していた属性、尖照^{ツンデ}への思いの塊がそこにはあった。

しばらくそれを眺めていた。あいつはこのちっぽけな結晶に、どれほどの思いを注いでいたのだろう…。俺のツインテールを正確に打ち抜いたあの一撃から、飛ばされた針に何かしらの思いは感じ取ることはできた。それこそ、俺がツインテールの思いで戦うのと同じように、彼もまた針に自分の思いを乗せて戦っていた。

彼は変態で怪物だった。しかし、ツンデレを愛する心は間違いなく本物であり、俺たち人間と同じだった。

そう思うと、掌に載せたこの小石ほどの結晶から、ずしりと千鈞の重みを感じられる。

「…」

それをそつと回収してベルトに収めると、校庭の隅で女子小学生を捕えているアルティロイドに視線を向けた。が、彼らは既に戦う気はないらしく、蜘蛛の子を散らすようにバラバラに逃げていった。どうやらヘツジギルテイが倒された今、彼らには戦う意思はないらしい。さてと、俺も早い所逃げないと。アルティロイドが逃げたのならもう戦う相手はいない。だったら、ここにいる必要もない。動画や写真もごめんだからな。

くるりと踵を返し、さつさと帰ろうとしたが、グイツと誰かが髪の毛を引っ張られる。

(痛ッ)

じんじんと痛む頭皮を撫でながら、立ち止まり、毛先を見ると、一人の少年がファイヤーのツインテールを引っ張って、逃がさないようにしていた。

「ど、どうしたの?」

何かあったのか? そう思いながら、優しく少年に話しかける。

「おねーちゃん、今のどーやったの?」

「え?」

「ぶれいく、しゅーと!」

戸惑う俺の前に、少年は俺がさつき繰り出した技を見よう見まねで

やっていた。

「ねえ、どうやるの？ もう一度見せて！」

少年はまるで憧れの野球選手にサインを頼むかのようにまっすぐ、輝かしい瞳で俺を見つめてきた。

え、えーと。これは…。

「す、すまない。これは決して見世物じゃ…。」

そのキラキラ輝く瞳から逸らし、この場から逃げ出そうとするが、そうは問屋がおろさない。いつの間にかその少年と同じような目をした何人もの小学生に囲まれていた。

「ねえねえ、他にも武器は無いの？」

「ビーム出せないの？ビーム」

「ちげーよ剣だよ剣！」

「バズーカも…」

「ヨーヨーや弓とか、ミサイルとかデツカイトンカチとかあるんだろ？ 見せてよー！」

「見せて見せてー！！」

嗚呼、この世に神はいないのだろうか。小学生たちはテイルファイヤーの足や腕、髪の毛などにしがみつき、絶対に逃げられないようにしていた。

(こ、これヤバいんじゃないか…)

最後の頼みの綱でレイチェルに助けを求めるが…。

『あはは、テキトーに相手して、そのうちに帰ってくればいいわよ。ちびっこの相手をするのも、テイルファイヤーの大事な役目よ』

それだけを言い放ち、通信は切られた。嗚呼、神は死んだ。

「うわ、ちよつと髪の毛はダ…変な所は触るなあ！ 誰か今、お尻を触らなかつたか!？」

「触ってない!!」

「いや、絶対、今…おい！ 胸は駄目だぞ、突つつくな！ 後ろの坊主はツインテールを弄るなああ…！」

炎のツインテール戦士、テイルファイヤー。ある意味、アルティメットギルよりも強力な奴らとの第2ラウンドが幕を開けた。

※

その頃、光太郎の部屋では。

「ふう…」

レイチエルは小学生軍団にもみくちやにされているファイヤーを眺めながら、映像を切った。まあ、あいつなら大丈夫だろう。適当な所で切り上げて、帰って来るに違いない。

それにしても、初戦を上手く乗り切ってくれた。やはり、あいつに私のベルトを託して、本当に良かった。

そう思いながら、電子機器を操作して、映像を別の物へと切り替える。正確に言えば、数分前、隣町で戦っていたもう一人の戦士の録画映像に切り替わる。

『くらえええー！』

映像が現れると、今まさに必殺技を放たんとするテイルレッドの姿に切り替わった。炎の剣を振りかざし、タトルギルデイへとその叩き込む瞬間。レイチエルは映像を一時停止させた。全身像が見えるこの瞬間の映像が欲しかったのだ。

そして、あらゆる角度から動画を検証する。揺れるようなりボン型のパーツ、水着のようなスーツ、剣、全身の装甲。全身像を確認した後、映像の解析に映る。

まず間違いなく言えるのは、レッドが纏っているのはファイヤーと同じ、テイルギアだ。変身アイテムがブレスレットタイプであること以外、ほとんどファイヤーとパーツが変わらない。特徴的なパーツの数々が一致するし、テイルギア特有の装備も映像にしっかり映っていた。

間違いない、こいつが使っているのはテイルギアだ。並行世界外部の者から持ち込まれたと見て、間違いないだろう。そして彼女は光太郎と同じように、託され、変身して、戦っている。

(さて、どこまで解析できるかしら…)

パキポキを指の関節を鳴らして、解析に映る。

テイルギアの標準装備には認識攪乱を行う首輪『フォトンサークル』が装備されており、当然テイルギアを装備しているレッドにもそれはある。そのせいで正体は見抜けないものの、どうしても誤魔化しきれない部分も存在する。口調や仕草などがその代表格だ。その細かな部分から、大まかな正体を割り出そうとしてみる。

キュルキュルと巻き戻して、再生する。必殺技のシーンから、タトルギルティの固い甲羅に剣がぶつかり、再度攻撃に移ろうとするシーンにまで戻る。

「……こね」

ピツと停止し、映像を凝視する。ここがおかしかった。映像は立ち止まっているはずのタトルギルティとの間合いを間違え、勢いよく剣を空振りするというシーンだった。素人目からしてみればレッドの可愛さが滲み出るシーンでも、レイチエルからしてみれば今の場面はどこか違和感を感じるシーンだった。

（動きがぎこちない…バランス感覚が悪いのかしら。いやこれは、自分の体に慣れていない？ 恐らく変身した時に身体能力以外にも変わっている部分が存在している…）

——身長操作。

そのキーワードに至った時、そして頭に一人の科学者の姿が浮かんだ時、レイチエルはテイルレッドの正体に一步近づいた。

やはりそうだ。テイルレッドは変身時に身長を変えている。この場合、縮めているといえば正しいか？ まだ2回目の戦闘で変化した身体に慣れていないのか、時折動きがどこか変だ。

同じほどの身長のレイチエルからしてみれば、剣を振るったり、走り出したりするテイルレッドの動作が不自然でぎこちなく見える。ファイヤーと比較してみると一目瞭然だ。一回一回の動作が不自然極まりない。

（恐らく、正体バレ対策で身長を無理やり変えているのね。この子は自分の縮んだ身体にまだ違和感を持っている…。この間合いから見て、40センチほど背を縮めているのかしら。変身者の本来の身長は160センチほど。だけど、伸ばすならともかく、わざわざ身長を縮

めるだなんて。そしてこのレッドの外見…)

レイチエルは忌々しそうにレッドの姿を睨んだ。それで確信できる。こんなことを行い、かつ実装でき、テイルレッドの外見をこんな風にする人物を、レイチエルは一人しか思い浮かべられなかった。

「やつぱり、これはあんたの作ったものなのね…トウアール」

ぽつりとそう呟いた。その言葉から、様々な感情が浮かぶ。嬉しい。けど、どこか複雑だ。

もしかしたらあいつは本当にこの世界に来ていて、どこかで生きているかもしれない。もしかしたらこの町にいるのかもしれない。できることなら一目会ってみたい。けど…顔を合わせるのがどこか怖い、できれば会いたくない…。そんな思いが胸にグルグルと巻き起こりつつあった。

レイチエルは反射的に映像を切って、電子機器を部屋の片隅へと投げ捨てた。このことはあまり考えたくなかった。

(…ま、あたしみたいに性別そのものを変えている訳じゃないから安心したわ。あいつにも人の心はあったのね)

気分を切り替えるように、ごろりと床に寝転んで、ぼんやりとそう思った。あいつは天才的な頭脳の持ち主だけれど、色々と残念すぎるところが多すぎるからね。前の世界では何度しよつぴかれそうになったことやら。

流石にテイルレッドの性別までは分からないけど、あの仕草はどう考えても女の子で間違いないだろう。そう、こんな可愛い子が男のはずないもの。

※

「くしゅんー！」

「あら、トウアールちゃん、風邪?」

この町の片隅にある喫茶店『アドレシエンツァ』。こここの地下にある秘密基地でデータの解析をしていたトウアールと、総二の母親の未春の姿があった。盛大にくしゅみをしたトウアールを、未春は心配そ

うな目で見つめていた。

「あ、いえ、大丈夫です。多分、埃が入っただけだと思いますので」
「そう…?」

「それよりも見てください！ 現在の総二様の姿です！ 最高画質で、しかも生中継ですよ！」

目の前の大スクリーンに映し出されたのは、体操服ブルマ属性を狙った怪人タトルギルディとの戦闘の舞台となった女子校の校庭。そこには既に戦闘を終えたテイルレットの姿があった。だが、そこに映っていたのは…。

『はあはあ、一緒に着替えっこしましょう！』

『大丈夫、優しくするから！ 先っちょだけ、先っちょだけだから、ね!!』

『うわくん、帰るうゝ道開けてえー!!』

助けたはずの女子生徒に囲まれ、涙目になるレットの姿だった。手足をばたつかせ、まるで本物の幼女のような姿を見せる息子に未春は震えた。愛する息子が女子生徒に襲われていることに怒っているのではない、このシチュエーションに感激し、震えているのだ。長年の夢が叶った、そう言わんばかりに。

「トウアールちゃん…グッジョブ！」

「いえいえ、居候として当然のことをしたままでですよ」

未春はトウアールによくやったとサムズアップをし、トウアールもそれで返した。

未春はトウアールの正体や敵の事、息子が幼女の姿で戦っていることも全て知っている。それを知った上でこの光景に感動しているのだ。

普通なら愛する我が子が戦場に赴くなど、頑として否定するだろうが、この観束未春という人物は色々つぶつ飛んでいる人間だったのだ。それこそ、ド変態で痴女な女科学者トウアールとタメを張れるほどに。

未春は中二病という不治の病にかかっている。中二病とは所謂「俺の右手の封印が…」とか「邪気眼が…」とかいう、思春期特有の思想・

行動・価値観が過剰に発現した病態である。夢見がちな子供の思考と背伸びしたい大人の思考が混じり合い、恥ずかしいことやおかしな言動をとってしまう現象のことだ。

そして未春は中学生でこれを発症し、完治しないまま一児の母へとなってしまうた。そして異世界からの住人、トゥアールが観東家に転がり込んできた。

異世界からの住人、侵略者、変身、性変換、幼女…このシチュエーションはまさに私の望んだ展開そのものだ！ ナイスな展開じゃないか!!

無論、この一連の事件を即信じ、トゥアールを観東家の一員として歓迎した。更に地下に基地を建設するのも二つ返事で承諾。このことを息子や幼馴染の愛香が騒ぎ立てるも、聞く耳を持たなかった。…そして、何故か未春は悪の女幹部的なポジションに落ち着いている。そこは総司令のポジションじゃないのかよ、というツツコミがあったが、未春的にはこっちの方が燃えるので、それでよしとなった。

「それとトゥアールちゃん、例のあの子なんだけど」

「はっ！」

「新しい情報は掴めた？」

トゥアールはカタカタとキーボードを叩いて、映像を出した。

『ちよつと…こちら！ 腕をつつくな、足を擦るな！ それと、いい加減に離れてくれえ——!!』

そこにはテイルレッドと同じようなシチュエーションに陥っているテイルファイヤーの姿があった。囲まれているのが小学生軍団であり、年上のはずの彼女は多勢に無勢で涙目になっていた。

「…この子の名前は分かった？」

「はっ、テイルファイヤー、と名乗っていました」

「この子、分かっているじゃない。レッドの次はファイヤー。常識だわね」

「ええ、それにこのカメラを意識した立ち位置。侮れませんよ」

未春はやるじゃないといった顔でファイヤーの顔を見た。この子、侮れない。息子と同じシチュエーションでありながら、逆のパターン

で攻めてくるとは。トウアールもそれを理解しているのか、ふひひと笑った。

「引き続き、データを集めて頂戴。とびっきりのシーンをリクエストするわ」

「かしこまりました、お母様。その命令は確かに……！」

そこには十数年越しの願いが叶って、ほくほくしている未春の顔があった。…人類とアルティメギル、果たしてどっちが悪役なのだろうか？ それはまだ、誰にも分からない事である。

第11話 青のツインテール

アルティメギルより恐ろしかった小学生軍団から命からがら逃げてきたその翌日。

俺はテレビの前で、ニュース番組を見ながら絶望感に打ちひしがれ、落ち込んでいた。

『我らは異世界より参った選ばれし神の徒、アルティメギル!』

テレビでは昨日流れた宣戦布告映像と共にアルティメギルのことが紹介されていた。このせいでアルティメギルの情報が一気に広まり、奴らの事を知らない一般人はほぼいなくなってしまった。これでもう、秘密裏にあいつらと戦うことができない。隠しておきたかったことが世間の目にさらされてしまった。昨日の時点で半ば分かってきっていたことだったが、こうして現実を突きつけられると、落ち込みもする。できれば皆には何も知らないまま普通の生活を送ってほしかったんだけど。

…だが、そこはまだいいんだ。うん、そこは重要じゃない。問題は今、テレビに映っているこの映像なんだ。

『名前を！ 名前を教えてください!!』

『あ……テ、テイルレッドでs……うわ、ちよつと!』

『素敵です！ お姉さまと呼ばせてください!!』

『妹に決まってるでしょ！ ハアハア、一緒に着替えっこしましょう!!』

なぜか大勢の女生徒に揉みくちやにされ、涙目になっているテイルレッドの姿があった。大勢の女子生徒の中にはあきらかにヤバそうな目をしてるやつも何人かおり、ほのぼのとしていてその中に狂気を感じる、朝っぱらから流してはまずいであろう映像がそこには流れていた。…そんなテイルレッドが可愛いと思ってしまう俺は情けなくなってしまう、自らの右頬を殴った。

『そしてもう一人の少女の映像がここに――』

そして問題の映像に切り替わる。その瞬間、俺は血反吐ものの映像が映し出される。

『駄目だあああ！ それ以上引つ張ったら、服が脱げるううう!!』

：そこには小学生軍団に戦闘服を引つ張られ、見えそうな胸や股の部分を手で隠し、顔を真っ赤にしているティルファイヤーの姿があった。：俺のテレビデビューが女体化して、小学生に服を脱がされる映像だなんて。しかも、この出来事はしっかりと誰かに録画されていたとは。

もう、できることならテレビを叩き割って、現実を逃避したい。テレビの前に蹲りながら、俺はめそめそと泣いた。アルティメギルより小学生の方が恐ろしい事この上なかった。

小学生の何が怖いって、恐れを知らないで色々なことをやれちゃうことなんだと思うのだ。カエルの肛門に爆竹を突っ込んだり虫の足や頭を千切ったりするが如く、モラルより楽しさが勝ってしまう。ヒーローの服を脱がすなんて発想、どうやったら考え付くんだろう？

「あんた、凄いことになっていたのね…」

流石のレイチエルも引き気味で、服を脱がされている俺の姿が映っているテレビを見ていた。この事態を引き起こした張本人が引いているんじゃないよ！ そう言いたかったが、言う気力も湧かない。

「俺、これからどうなっちゃうんだろう…」

世間からの注目は減るどころかますます増え、うなぎ上りだった。ネットでは俺たちのまとめブログや考察サイトがいくつもあり、話題もこれでもちきりだった。俺からすれば何を纏めて、何を考察するのが理解できない。考察サイトは海外版もできており、「日本人は未来に生きている」「これが日本のくのいちか？」「ニンジャだ、伝説のニンジャの降臨だ」とか色々日本が誤解されそうなことになっているコメントばかり。海外の皆さん、世界のどこにバリアを張ったり、ロケットパンチを飛ばす忍者がいるんだい？

『警察はこの少女たちの情報を引き続き求めていく方針でー』

おまわりさん、そんなことよりアルティメギルの方を捜査してくれ。これ以上情報が広まったら、俺もう戦えなくなるぞ。まだ2回しか変身していないのに、俺、心が壊れそうだよ…俺たちの意志とは裏

腹に世界レベルで祭り上げられていくレッドとファイヤー。もう戻れない所まで来てしまった気がして、改めてとんでもないことに首を突っ込んでしまったということがひしひしと感じてくる。

「あ、そうだ。あんたにこれを渡しておくわ」

俺の気を遣ってくれたのか、テレビのスイッチを切ったレイチエルは何か思い出したようにポンと俺に何かを渡してきた。蹲っていた俺は、畳の上に落ちたそれをのろのろと拾う。

「何これ…腕時計？」

「そう。でもただの腕時計じゃないわよ。あたしのお手製」

それは高校生くらいの年代だったら誰でも持つていそうなデザインのデジタル時計だった。テイルファイヤーと同じ焰色の時計で、時計のベルト部分にはツインテールのマークが彫られていた。

「それはテイルリストつていつて…平たくいえば、腕時計型通信機みたいなもんね。昨日、そこら辺の廃材を使ってちよちよつと作ってみたのよ」

昨日の公衆電話の一件で、何らかの連絡手段を確保しないとマズイということにレイチエルも気付いたらしい。本当なら携帯を買えばいいのだが、回線とかの問題で緊急時の連絡ができなくなったら面倒なのでということとで通信用の専用ツールを開発したのだそうだ。

「通話だけじゃなく、文字でのメッセージ交換もできるようにしてあるから。これなら授業中でも連絡できるし、いちいち携帯開くよりも楽でしょ？ テイルギアと同じで小型の認識攪乱装置が内蔵されているから、通話内容やメッセージも他人に見られたり聞かれたりする心配もないわ」

まかない作ったみたいな感覚で渡されたテイルリストだったが、使い勝手はすごく良さそうだ。確かに連絡の度に携帯を開いていたんじゃない怪しまれるかもしれないし、会話も盗み聞きされるかもしれない。それを防げるというのは確かに大きい。

テイルバンドの機能はまだまだあった。戦車に踏まれても壊れない耐久性、衛星携帯と同じように砂漠のど真ん中からでも通話が可能、GPS、防水機能、水圧対策、体温計や血圧計、カレンダーや血

液型古いなどその他機能。：最後辺りのやつはいらぬ機能ばかりじゃないのか？

「しかし、こんな凄い物、昨日の今日で作れんのか？　つーか貰っていいの？」

「ここまでの高性能な時計を簡単に貰ってもいいのだろうか？　今更ながらに心配になる。」

「あー、大丈夫よ。あんなもの作ろうと思えばいくらでも作れるし、壊したら新しいのをあげるわ。：しかし、何か今一つもの足りないのよね。改良型にはじゃがいもの皮むきや湯沸かし器でもつけてみようかしら？」

「いや、確実にこのままの方がいいよ。時計に皮むきや湯沸かし器機能なんていつ使うんだよ。どんな事態を想定してつけようとしているんだ？」

「ま、今後はアルティメギルに関する連絡はこれでするから、いつでもつけていて。もしかしたら早速今日使うかもしれないから」

勘弁してくれ、と思いつながらテイルリストを腕につけ、眺めてみる。どつからどう見てもただの時計にしか見えない。まさか通信機能があるなんて夢にも思わないだろう。これなら怪しまれる心配もないし、時計としても普段に使えるそうだ。

「流石に昨日2体もやられたってなると、あつちも来ないだろうよ」
「…ま、そうだったらいいんだけどね」

※

登校する前からクタクタになった光太郎は、ようやく、やっとのことで放課後を迎えた。学校はもうテイルレッドとテイルファイヤーの話題でもちきりであり、いちいちその話題が上がるたびに嫌な気分になってくる。

「あー疲れた…」

椅子に寄っかかり、へばる俺に、昨日の3人組が「よっ、兄弟」と顔を出してくる。

「お、おう」

軽く手を上げ、それに答える。

「でさ、お前は思うのよ」

「…どう思うって?」

まるで明日世界が滅ぶかどうかの瀬戸際のように真剣な顔の男子生徒に、半ば諦めかけた顔で答える。…次、あいつらが何て言うか見当がついているからだ。賭けてもいい。それくらい見当がつくことだ。

「だから、テイルレッドさんとテイルファイヤーさんの関係だよ！

兄弟同士の意見も聞きたいんだ！」

…これである。もう、嫌だこの学校。朝から何回この話題を熱く語れるんだろう。

テイルレッドに似て、彼女よりも凛々しく、たくましい戦士。己の拳だけで敵を薙ぎ払い、まさに炎のように敵を倒す少女、テイルファイヤー。

名前が判明した赤き新戦士はテイルレッドに勝るとも劣らない話題になっていた。腕に装備したバリアとロケットパンチで敵を倒す豪快さ。それとは対照的に小学生に服を脱がされかけ、涙目になる乙女のような姿。そしてレッドとファイヤーの『姿が似ている2人の関係は?』という話題。新たに投下された燃料は業火の如く燃え上がり、光太郎に襲いかかろうとした。

「さ、さあ…赤の他人じゃないのかな?」

この手の話題はもうお腹いっぱいだから勘弁してくれとあしらおうとするが、男子生徒は手に肩を置いて、熱く語る。

「鈍いぜ兄弟！ お前だって見当がついているくせに！ もはや似ているってレベルじゃないぜ、あれは！ テイルファイヤーさんはなあ、テイルレッドたんのお姉さんだって」

「それは違うわ！」

バン！ と誰かが机を叩き、振り返る。そこには異議申し立てると言わんばかりの女子たちがいた。

「テイルファイヤー様はお姉さんじゃないわ。お母さんよ！ あの

レッドに向けた目は慈愛に満ちた聖母のような母性ある…」

「何い!? そんな訳あるか! お母さんだったら、あんな人前で素肌を見せるような行為を…」

「何よー!」

もうね、こんな会話が朝から、しかも学校中で巻き起こっているんだ。疲れない訳がないだろ? テイルファイヤーの変身者が男で、ここでげんなりとした顔で座っているだつて言ったら、多分こいつら全員泡吹いて倒れちゃうぜ。もしくは「馬鹿なことを言うな!」つて殴られるかのどつちかだ。

何とかここから逃げ出す言い訳を考えていると、自分の腕につけてあるテイルリストからビー!とかな高い音が鳴り響き、びくつと体が跳ねあがる。

「うん? どうしたんだ、兄弟?」

「あ、いや、何にも…」

あんな大きな音がしたのに、俺にしか聞こえていないみたいだ。認識攪乱がしっかり作動しているのを確認した後、トイレに行つてくるよとだけ言い残し、廊下に出る。

「…どうしたんだよー!」

ピツと側面の通話ボタンを押して、通信に出る。誰にも聞かれる心配がないと言われても反射的に声小さくなってしまふ。

『アルティメギルが現れたわ。場所は郊外のハイキングコース』

途端に俺は嫌な顔になる。お前ら、毎日毎日出てくんなよなあ…。

『と、どうかこれ…どういふ状況なのかしら?』

「…どういふことだ?」

『今、そのアルティメギルとレッドが戦っているのよ。でもなんか様子が変というか…』

既にレッドが戦っている? それに人の属性力を集めるアルティメギルが郊外という人が集まりにくい場所に現れたのも妙な話だ。

『…とりあえず映像回すわね』

そして画面に現れたのは…等身大のテイルレッドの人形の手を取りながら優雅にダンスをしている怪人の姿と、その光景を見ながら絶

叫しているテイルレッドの姿だった。

『うっぎゃああああ!!』

跪いたレッドの絶叫が響く。自分と全く同じ姿をした人形であれこれされているのがたまらなく気持ち悪いみたいだ。…というか、怪人も鼻息が荒いというか…あらぬ妄想をしているというのか。確実にあれだろ、アレな妄想をしているだろ!?

『ふっ……これ、走ってはいけませんよ。まだ身体が拭き終わっていないのですから、湯冷めしてしまいますよ』

『想像の中で俺に何してんだ、てめええええええ!!』

こいつ駄目だもう! 怪人は妄想の世界に入り込みながら、人形のテイルレッドと妄想劇を繰り広げている。しかも、湯冷めとかの言葉からシチュエーション的に怪人は裸のレッドで何かしているってことになる。

(気持ち悪い……!)

ゾクゾクと鳥肌が立つ。人形相手に意気揚々と話しかけている怪人の事や幼女の裸を想像している事とか、もう色々とありすぎてぞわぞわしてきた。

『どうするの光太郎…助けに行くの?』

「…行くよ。とりあえず、行かなきゃレッドがかわいそうだ」

どうやら今回のエレミアンは肉体的な苦痛ではなく精神的な苦痛で攻めてくるタイプのようだ。これ以上放っておくと、レッドの精神が持ちそうにない。レッドの目がヘドロの如く濁ってきていて、錯乱状態になっている。

「それじゃあ、座標データを送って…」

『その必要はないわ』

「どうしてだ? 時間がないんだぞ!？」

『慌てないで。こんなこともあろうとね…:テイルリストにつけておいた機能があるのよ!』

バサツと大げさに白衣を纏う音が画面越しに聞こえる。

『その名も転送ゲート機能! テイルリストには私が指定した地点まで移動できるワープできる機能を搭載しているのよ! これを使え

ばブラジルだろうが島根だろうが一発で移動できるわ!』

「お前何でそんなこと重要な機能を黙っていたんだ!? 占いとか体温計以上に重要な機能じゃねーか!!」

するとレイチエルはフツと小馬鹿にしたような顔をして、ドヤ顔を決める。

『科学者にとってね、『こんなこともあるのかと』っていうのは憧れのセリフなのよ! いやあ、一回言ってみたかったのよね、この王道のセリフ! 昨日言いたかったんだけど、すっかり忘れちゃってねえ!!』

「さいですか…」

超マイペースだ、こいつ。画面の隅ではレッドの悲鳴が聞こえているのに、自分の発明品の演出を優先するだなんて。

『それじゃあ、通話ボタンの横にある赤色のボタンを押して』

これか。ぼちつと押すと、俺の目の前に一人が通れそうな丸い光のゲートが現れた。

「変身して、そのこのゲートに飛び込めば、すぐにあの地点へ行けるわ!」

言われなくともやるさ。さてと、レッドを助けなくちゃ、な!

「変身!」

その掛け声と共に、俺はゲートに飛び込んだ。

※

『駄目だ…俺にはあの人形は破壊できない!』

「何やっているのよ、総二!」

同時刻、観束家の秘密基地内で愛香はやきもきしていた。今回現れたエレミアン、フォクスギルディは髪紐属性リボンと人形属性ドールの2つの属性力を持つ怪人。その能力で等身大のテイルレッド人形を作りだされ、それを使った吐き気のする気持ち悪い妄想劇を画面越しで愛香は見せられていた。

無論、対策法はある。あの人形のせいで妄想劇が繰り広げられるな

ら、人形そのものを破壊すればいい。人形を壊せば、即総二は戦いに復帰できる。だが、テイルレツドの姿を模したその人形を総二は破壊できない。たかが人形。だがそれでも、その人形の髪型はツインテールをしており、ツインテールを愛する総二はそれを破壊できないのだ。

「何か対策は無いの!?! このままじゃあいつ…!」

「……こうなれば、もう……!」

トウアールは拳を握りしめ、震えていた。苦渋の決断をしている、そういつた風に愛香は感じ取れた。

「…愛香さん、お願いがあります」

普段の痴女っぷりからは想像できないようなシリアスさで愛香と向き合うトウアール。そのことからただ事ではないという風を感じる愛香。

「何? それはあたしにできること?!? 総二を助けられるならあたし、なんでもできるわ!」

「——では、変身してくれますか!」

「わかったわ、変身すればいいのね!!」

咄嗟に返事したものの、意味が分からず静止する愛香。ようやく理解した頃には当然のリアクションをしていた。

「は? 変身って…何?」

「私は前に言いましたよね。テイルギアは2つあって、既にもう一人の候補者がいると」

愛香は頷く。それは一昨日トウアールが言っていたことだった。トウアールが元居た世界から持ってきたテイルギアは2つあり、一つは総二の手へと渡り、もう一つのギアの変身候補者は既に決めている。ただし、その変身者に渡すかどうか迷っている。

「それが愛香さんなのです。この世界でもう一人、テイルギアを使える人間。誰よりも総二様と近くいたあなたこそ、テイルギアを使えるのです」

「—嘘、でしょ。そんなご都合主義がある訳が」

「嘘じゃありませんよ」

トウアールは真剣な目で答える。

「同じツインテール属性を持つからこそ、引かれあい、導かれたとも考えられます」

運命。その言葉にどこかロマンティックな気分になるが、愛香は「ちよつと待て」と止める。

「…あんたさ、この前こんなこと言っていなかった？もう一人の好捕者は破壊を楽しむような蛮族とか暴力に染まりきった凶獣とか」
「だって事実じゃないですか！」

真顔でそう答えるトウアールに、一昨日以来のグーパンが顔面に飛んだ。

「ぐっふえう…！」

「そうね、確かにあたしは蛮族かもしれない…でも、そんなあたしでも、総二は助けられるわ！」

愛香は決然とそう告げる。

「あ、愛香さんが何かカッコいい事言っています…言っていることと行動はあれなのに」

「うるさいわよあんたあ！」

「ぐっぽぺえー！」

流れ作業のように、今度はリバーブローを決める。

「そりゃあ、あたしだって戦うのは嫌よ。相手があんな変態軍団ならなおさらね。でも、戦力は多い方がいいでしょ!? どうしてあんたはそんなに変身者を明かすのを拒んでいたの!？」

「それは…愛香さんを、巻き込みたくなかったからです。あなたを戦いに巻き込ませれば、総二様も悲しませてしまいますから…。それに、あなたはこの世界でできた大切な友達です…そのような争いを知らずに平穩に過ごしてほしかった…」

涙目になりながら悲痛な叫びを訴えるトウアールに愛香は戸惑った。だが、その隙に白衣のポケットに『目薬』と書かれていた小さな物をそつと隠そうとしているのを見逃さなかった。

「…で、本当の理由は？」

「え、と、その。初めての戦いの後に説明したじゃないですか。テイル

ギアの力を維持するには私の生体データを総二様の体内に取り込む必要がある…と。それっぽい嘘について、総二様と如何わしいことをしようと思っていたのですが、そうなると思香さんにテイルギアを渡してしまうとあなたとも如何わしいことをやらなきやいけなくなるからそれは嫌かなと…」

「このド痴女があああああああ!! ど直球に言っているんじゃないやねえええ!!」

最後まで言い終わらない内に今度はコークスクリューをぶち込んだ。

「あああ、思ったことを何でも言ってしまうこの体質が憎い！」

「なんであんたは！そういつもいつもエロいことばかり考えるのよ！」

「メスがオスに発情して何が悪いんですか!!」

「開き直るにも言葉を選べあんたはああああ!!」

ドツゴオン！今度はジャーマンスープレックスをかまして、トゥアールを沈める。

「まあいいわ！ あんたがあたしのこと嫌いなのは十分に分かったわ！でも今は総二を助きたいの、だからあたしにテイルギアを渡して！」

「…嫌いだなんて思っていないですよ、あなたは大切な友人だつていうのは本当です。私がやろうとしていることは結局の所、復讐です。あなたをそれには巻き込みたくなかった」

むくりと起きあがったトゥアールはそう言う。今までの行動から嘘っぽく聞こえてしまうが、その言葉に少しだけ嬉しくなる愛香。

「ただ、覚悟はありますか？一度変身してしまつたら…もうあなたは戦いから逃げ出せなくなります。それでもかまいませんね？」

「承知の上よ」

不器用ながら初めての気遣いを感じ、愛香がしっかりと頷いたことを確認したトゥアールは青色に光るテイルブレスを取り出した。

「愛香さん、約束してくださいね。何があつても——」

一蓮托生。ブレスを託すトゥアールの覚悟が見て取れる。

「——総二様の初めての女になるのは、この私に任してもらえると」
「…おい」

何かおかしなワードが入っていたぞ、てめえ。愛香の顔が阿修羅のようにならわっていく。

「さあ、時間がありませんよ！ いいからはいと言ってください！
でなければこれは渡せませんからね！ それともあれですか、今からヒーローになろうとしている方が、まさか力づくでブレスを奪おうとでも考えているんじゃないでしょうね！」

「…」

「愛香さんはそんなこと考える人じゃないですよね……」

愛香はニツコリ笑いながら、指の関節を鳴らし、トウアールに襲い掛かった。

ドゴツ、バキツ、グシャ、メキボキ、バコン、ガオン！

ヒーローとはなんなのだろう？ 津辺愛香にとってそれは悪と決めた奴らをぶちのめす存在だという持論があった。だから悪と決めた奴には基本、容赦はしない。

「さあて、行きましようか…テイル、オン！」

関節がいくつか外れ、床に転がっているトウアールを放って、ブレスを装備した愛香は変身機構起動略語を叫び、変身を完了させる。総二の赤色とは対照的な青色の戦士へと変身が完了する。

「待ってて、総二！ 今助けに行くから!!」

…だがこの時愛香は気づいていなかった。後ろのモニターではテイルレッドとテイルファイヤー、二人の戦士の共闘が映っていることに。このまま自分が行かなくても、何か事態が解決しそうなことに気づくことがないまま、愛香は走り出していた。

第12話 共闘、ツインテール

「絵本を読んで差し上げましょう…おやおや、甘えん坊さんですね」

甘い声で人形にそう囁くフォクスギルデイの精神攻撃にテイルレッドはズタズタにやられていた。

(なんて…恐るべき相手なんだ、フォクスギルデイ！)

彼が語りかけているのは自分の姿を模した人形。けれど彼の属性力で作り出されたそれは精密にできており、あまりにもテイルレッドに似すぎていた。彼女の身長や細かなシワ、装飾品、そして見事なツインテール。フォクスギルデイの強大な属性力によつて生み出された人形はそれら全てを見事に再現した物であり、とてもまがい物と言えるものではなかった。それを破壊すること…それはすなわち、ツインテールへの冒涇になるのではないか？ ツインテールを愛するレッドには、ツインテールを滅することができなかつた。

「ふふ…もう眠ってしまったか。続きはベッドで…」

そして恐ろしいのは、フォクスギルデイの克己心だ。幼女の人形相手にあそこまでの妄想劇を繰り広げられるとは。あそこまでやるにはきつと頭の中のどこかが壊れていなければ不可能のはずなのに、何ともないように己を保つたまま、真顔で真剣に取り組んでいる。それだけで奴がこれまでの敵と格が違うと感じざるを得ない。

(これが、心の力…！これがアルティメギルなのか!!)

レッドは膝をついたまま、苦しそうな顔をする。俺のツインテールは何も守れないのか？ 俺のツインテールはこんな奴に負けてしまうのか…?! そう思いかけた時だった。

「うあああああああー！」

「むっ？」

「!?」

凜々しさと勇気が入り混じった少女の咆哮が聞こえた。

いったい何事かと空を見上げると、空から拳を真下に向けた少女が降下してくる。

「ブレイクー！」

ガシン！ 少女が右拳を変形させ、弓を引き絞るように照準をフォクスギルデイに合わせた。

「これは……！」

フォクスギルデイは咄嗟にテイルレッド人形を抱えて、その場から飛びのく。

「シユートオー!!」

「ぬおうっ!?!」

掛け声と共に弾丸の如く射出される拳。その一撃は直接フォクスギルデイには当らなかつたものの、地面にぶつかった際の衝撃でフォクスギルデイを吹き飛ばし、近くに生えている木へと叩きつけた。

そして少女はテイルレッドを守るように、大地へと降り立つ。

その姿をレッドは見覚えがあつた。初めての戦いで自分を助けてくれたその少女を、刻まれたファイヤーシンボルを、攻撃の余波が巻き起こる中で焰色に揺れるツインテールを見間違えるなんてことができるわけがなかつた。

「テイル……ファイヤー……」

そう、テイルレッドを守るために、テイルファイヤーは再びその姿を現したのだつた。

※

ガシン！ と射出させた腕を戻して、俺はテイルレッドへと向き合う。う。

「ええと、テイルレッド、ちゃん？」

優しそうな声で話してみる。…改めてテイルレッドと向き合うと、何て言えばいいのか分からなくなってくる。

この間は彼女を助けるために戦いに乱入したが、実は彼女もまた俺と同じで侵略者と戦う戦士だつた。…でも俺の中ではまだテイルレッドは「戦士」ではなく、どうしても「子供」として感じてしまうのだ。ネットでは彼女の勇士が確認できる動画は数あるものの、初めての戦いでの怯えている姿や涙目になっている姿からどう接するべ

きなのか未だに分からない。自分と同じで人々を守る「戦士」なのか、それとも守るべき「市民」なのか、その区別がつかなかった。

「あ、はい」

そう答えるテイルレッドはまあ、なんて可愛いんだろう。くりつとした目で俺を見てくる。これはネットでも見たことのない激レアな表情だ。：それに相変わらずなんてツインテールをしているんだろう、この子は。テレビやネットで散々見る機会はあるものの、やはり生で見るそれは格別だ。艶やかな髪が太陽に反射して、まるで太陽のように美しく輝いている。髪の毛の一本一本が絹でできたように滑らかで、可愛い。アルティメギルもレッドを最強のツインテール属性って言っていたが、正しくその通りだろう。

このようなツインテールを持つ幼女に切られたり殴られたりしたと思う奴が出てもおかしくないのではという考えが一瞬、頭をよぎったが、チリツと感じた気配に、直ぐにその考えを取り消した。

「ぬうう：今のは効きましたよ、テイルファイヤー！」

バツと吹っ飛ばしたフォクスギルデイがこちらへと戻ってきた。ダメージを負っているにも関わらず、どこか嬉々とした表情で等身大のテイルレッド人形を抱えてこっちを見ている。

やだな、あれ。何度見ても気持ち悪い。半ば覚悟していたものの、生で見る等身大のテイルレッド人形は実に気味の悪い物だった。細かな骨格まで完全再現されたそれは生物標本として見ても非常に興味極まらない。

「それにしても：今日はなんて運のいい日なのでしょう！ テイルレッドだけでなくテイルファイヤーも現れるとは！ これもまさに天の定めなのでしょうね!!」

テイルレッド人形の頬を撫でながら、幸せそうな顔のフォクスギルデイを俺はゴミを見るような目で見た。だが、そんな俺の目を見てもこいつは態度一つ変えない。というかむしろますます嬉しそうな顔をしてやがる。

「その凛々しき姿、是非とも私の手に！」

妖艶な笑みを浮かべて、新体操のようにどこからともなくリボンを

繰り出すフォクスギルデイ。

『危ない！』

テイルレッドの声とレイチエルの通信が重なるのと同時に、俺は左腕を突き出す。言われなくても分かっている！ あいつは何か企んでいる：恐らくは今あいつが放つたりボン、これは攻撃の為だけに放つたんじやない。

「ファイヤーウォール！」

左手から発生したバリアが、渦を巻いて迫りくるリボンを防ぎ、消滅させる。

「ほう：バリアですか。大胆に攻めてくるのにガードは堅い：やはりあなたは一筋縄ではいかないようですね」

攻撃が防がれたのに、なんて嬉しそうな顔をしているんだフォクスギルデイ。そして次の言葉で俺の奴への呆れはさらに加速することになる。

「それでこそ、テイルレッドの姉であるあなたを倒す価値があるというもの！」

「はっ。」

フォクスギルデイの言い放った言葉にポカンとするが、すぐに理解が及ぶと俺の頭が痛くなってくる。

：お前もその話題を出すのか、アルティメギル。人間とアルティメギルって非常に似ている生き物なんじやないだろうか。学会にでも発表できそうなテーマをぼんやりと考える。

「ああ、誤魔化さなくてもいいのです！ 戦いの中では姉妹関係など無意味！ですが、優しいあなたは妹であるテイルレッドを見捨てる非情さはなかった！ こうして来たのも妹を助け、戦士としての道を…」

「どうすればいいんだろう？」

「無視していればいいと思うよ」

レッドの蚊が鳴くような呟きに俺はそう返した。長々と喋るフォクスギルデイを完全に無視し、俺とレッドは作戦会議を始める。あの手の輩は話し終えるまで満足しないから、話すだけ話させておけばい

いのだ。

「…ということは、あいつの属性力であの人形はできているんだな」「うん。あの人形を壊せば、この気持ち悪い感覚は直るんだけど…」
「壊すのは気が引ける、と」

レッドは弱弱しく頷き、うつむいた。なるほど、レッドの説明と事前にレイチエルから聞いた情報を統合するところということか。

奴は、フォクスギルデイは髪紐属性と人形属性、2つの属性力を持つ怪人。髪紐属性でテイルレッドの姿をコピーし精密な人形を作りだし、人形属性でそれを強化、より人間的に近づけ、操らせる。この2つの能力でテイルレッドを精神的に攻撃し、追いつめていたのだ。使用用途はアホらしいが、力押しが主な攻撃方法だった今までの怪人とは違い、搦め手を使うフォクスギルデイの策略にレッドは見事に嵌ってしまった。

対策法は一応ある。人形が苦しませる原因ならばそれを破壊すればいい。無論、強化された人形を壊すことは至難。だがレッドはそれを覆すアイテム、リザドギルデイを倒した際に手に入れた属性玉、人形属性を持っている。これを使えばテイルレッド人形はたちまちただの人形へと戻り、簡単に壊せる。だが、自分の姿を模したテイルレッド人形をレッドは破壊することができない。

ツインテールを愛し、最強のツインテールを持つレッドだからこそ、破壊することができないでいたのだ。

「…」

俺はしばらく悩む。確かにレッドの言い分も分かる。テイルレッド人形は自分では動くことできないという点を覗けば、レッドそのものといえるほどの存在だ。これを破壊するのは確かに苦悩する。レッド最大の特徴であるツインテールまで見事に再現されたそれを壊すことは、芸術品を地面に叩きつけて粉々にするような愚かな行動であることも分かる。

…だが、それでも。人形を壊せないからといって戦えませんでしたとはいかない。俺たちはアルティメギルと戦える唯一の人間だ。俺たちが負けを認めること、それは人類の敗北を意味しているからだ。

例え、どんなにツインテールが好きでも、それが人形でも、どんなに馬鹿馬鹿しい侵略者でも、俺たちは奴らと戦って、倒さなければならぬ。

「…俺は今からあいつと戦う」

俺はそう呟き、唇を噛みしめながら立ち上がった。レッドが顔を上げる。

「まさか…壊すのか？」

何を？ とは聞き返さなかった。そんなこと分かりきっている。

「できるだけ壊さないようにはする。…けど、もしかしたら傷つけたり、壊したりしてしまうかもしれない」

「本気か!？」

レッドが小さな体で、俺の足にしがみついた。分かっている、俺はきつと、愚かなことをしているのかもしれない。けど…!

「…残酷な運命だけど、やるしかない」

そう言ってから、目を瞑った。そして、一つの質問を彼女に投げかける。

「君はどうする?」

「え?」

「俺は今からあいつと戦う。…テイルレッド、君はどうするんだ?」

これはいわば確認だ。レッドが俺と共に戦う「戦士」なのか、守るべき「市民」なのか。その確認のための問いだ。仮にレッドがここで戦うと答えても答えなくても俺は構わないと思う。

だってこんな残酷な運命、俺だって何が正しいか分からないからだ。俺よりも年下でしかも女の子にこんな選択を決断させたくなかった。できることなら、ここから逃げて欲しかった。

レッドはしばらくの間、押し黙っていた。俺が口を開こうとしたとき、レッドはこう答えた。

「お、俺も、戦う。戦って、あの人形も助ける…!」

弱弱しく、でもその声にははっきりとした意志が宿っていることが分かった。『戦わない』のではなく、『戦って助ける』。今の言葉から彼女の力強い意志が確認できる。

「…ありがとう、テイルレッド」

俺はそう言い、そしてフォクスギルデイを睨んだ。フォクスギルデイは既に話は終えたらしく、テイルレッド人形の髪を弄りながら立っていた。どうやら作戦会議が終わるまで俺たちの事を待っていてくれたらしい。

テイルファイヤーは両の拳を構え、テイルレッドは剣を構える。そして、2人は合図もなく、同時に走り出した。2人の赤き戦士の共闘劇が幕を開けた。

※

「いくぞおー！」

テイルファイヤーの拳がフォクスギルデイ目がけて飛んでくる。だが、今までの戦いで見せたような一発一発が力強いパンチではなく、力を押さえて手数を増やしたパンチでけん制する。

「何ですかこの弱弱しい拳は!?! あなたの力はそんなものじゃないでしょう!」

フォクスギルデイは人形を抱えたまま、片腕でそれを裁く。顔、胸、腹。それらに来る拳を全て叩かれ、防がれる。

「ほらほら、どうしたんですか!?! あなたの本気を見せてください!!」

だが、ファイヤーはその挑発には乗らない。何故なら…。

「俺を忘れるな!」

「しまっ!?!」

背後からの声にフォクスギルデイは焦る。そう、ここにいるのはテイルファイヤーだけではない、この場にはもう一人の戦士がいるのだから。

大きく振りかぶったテイルレッドの攻撃に、たまらずフォクスギルデイは体制を変え、避けようと身体を捻る。だがその隙をファイヤーは見逃さない。

「よそ見を、するなああ!」

「ぐぬうっ!」

腹部に走る痛みにはフォクスギルデイは嫌そうに顔をしかめた。姿勢を変えたことで生じた隙にテイルファイヤーは先ほどの手数を増やしたパンチではなく、思いつき振りかぶった本気の一撃を腹部に与えた。リザドギルデイを吹っ飛ばしたその一撃は伊達ではなく、フォクスギルデイに大きなダメージを与える。

「まだまだ!」

今度はレッドが前衛になって、フォクスギルデイを追いつめる。小柄な身体ですばしっこく、巧みにフォクスギルデイに食らいつく。剣を振り回し、突き、薙ぎ払う。どれも当ればただではすまない威力を誇る一撃に、段々とペースをテイルレッドに奪われていく。

「…まだ負けたわけではありませんよお!」

フォクスギルデイはリボンをテイルレッド目掛けて飛ばす。そのリボンで拘束させるのか、または新たな人形を作り出そうとしているのか。

「下がれ、レッド!」

ファイヤーはそう言つてレッドの肩をつかんで無理矢理下がらせ、フォクスギルデイの間に割り込み、左手を構える。現れたバリア、ファイヤーウオールがリボンを消失させ、お返しにと言わんばかりに右手を構える。

「ブレイクウ!」

「む!」

ファイヤーのその掛け声と体勢でまずいと判断したのか、フォクスギルデイは慌ててガードを固める。最初に見せた拳を放つあの技は余波だけでもあれほどの一撃を誇った。なら直撃すればどれだけの威力を持つのだ? その警戒心が反射的にガードの体勢にさせる。

「…!?!」

しかしいつ待とうとも、テイルファイヤーの拳は飛んではこなかった。当たり前だ…何故なら、初めからファイヤーには拳を放つ気なんてないのだから。

ファイヤーはスツと拳を引っ込めて、がら空きになったフォクスギルデイの右足目がけ、蹴りを放った。ゴリツという鈍い音がして、

フォクスギルデイは再び嫌そうな顔をする。

「ぬがあっ!?! 拳では…ない、ですとお!?!」

フォクスギルデイは思わず一瞬膝をつきそうになった。

そう、構えた右はフェイント。ファイヤーの本命は蹴りだった。最初に現れた際の不意打ちで、既にこの右手の恐ろしさを理解し、次からは警戒してくるはず。だから、あえてそれを利用して貰った。乗ってくるかは賭けだったが、まさかここまで上手いくとは。

「これで、終わりだ!」

テイルレッドはその瞬間を逃さない。剣を構え、決定的な一撃を与えようと、フォクスギルデイに飛びかかる。だが、フォクスギルデイも一筋縄ではいかない。

「させませんよお!!」

多数のリボンが、まるで弾丸のようにまっすぐレッドに襲い掛かる。そして、そのうちの一つがレッドの手に当り、その手から剣が弾け飛んだ。

「!?!」

これでレッドの攻撃は失敗した。武器を失ったテイルレッドはただのツインテールな女の子だ。だからこそ、剣を失ったテイルレッドなど恐れるに足らずと不用意に飛び込んだ。だが…。

「う、あああああああああ!」

テイルレッドは己の武器が拳だけになっても向かってきた。武器が弾かれても、諦めてなどいなかった。

「なん、ですとおおお!?!」

そして、テイルファイヤーが先ほど打ち込んだ腹部と同じ箇所にはレッドの拳が深々と突き刺さる。

「ぐ、ああがああ!」

そしてついにその時がやってきた。腕にずっと抱きかかえていたテイルレッド人形をフォクスギルデイはついに地面に落としたのだ。

「え…!?!」

それを見たファイヤーはそっと落ちたテイルレッド人形を抱きかかえ、そして気付いた。

フォクスギルデイが戦闘中、ずっと大事そうに抱えていたテイルレット人形はボロボロな彼の姿とは対照的に、傷一つ、埃一つなかった。あれだけボロボロならば、この人形だって、傷一つあってもいいのに…何故だ？

「…」

そして一つの結論にたどり着いた。…奴はずつとこの人形を守りながら戦っていたのだ。どれだけ自分が傷つこうとも、あいつはこの人形を大事に、傷一つつかないように守って…。

「フォクスギルデイ…」

レットも人形の状態に気付いたのか、呆然とフォクスギルデイを見た。だが、フォクスギルデイは軽く笑い、何ともないようにこう言い放った。

「…あなた方にも信念があるように、私にも信念があります。人形を傷つけてまで私は勝とうとも、ましては戦おうとは思わない！ 愛する人形ドールを守って勝つ、それが私の信念なのですよ!! …さあ、どうしたのですか、お二方？ まだ戦いは終わっていませんよ！ 私はあなた方が持っている人形を奪い返し―必ず勝ちます!」

そう叫んだフォクスギルデイは何故か笑っていた。何故なのかは分からない。しかしほほ笑む表情は、まるで悪友と馬鹿をやっているように、どこか穏やかな表情に見えた。

「…ああ、そうだな。勝負はまだ、終わっていないかったよな」

呆然としていたテイルレットも何故か微笑み、叩き落とされた剣を拾った。

そして、拳を構えるファイヤーも笑っていた。奴は、フォクスギルデイは馬鹿だ。だけど、この馬鹿はなんていうのか…気持ちのいい馬鹿というのか。何故か笑ってしまうのだ。初めは気持ち悪かったはずのフォクスギルデイが、何故か今はもの凄くカッコよく見えてしまう。

「では、勝負を再開しようとしませー」

「そこまでよ、変態!」

だが、この雰囲気壊す人物が稲妻の如き轟音と共に現れた。

「な、何い!？」

まるで俺の時の登場と同じように、奴は立っていた。青き稲妻のようなブルーアーマー、何故か胸を強調している衣装、そして青いツインテールを纏った女。

「何者です!?! セっかくの神聖な勝負の最中に!」

フォクスギルデイのその問いに迷いなくその女は答えた。

「あたしは―テイルブルーよ!」

3人目の戦士、テイルブルー。女はそう名乗ったが…今のこの状況では彼女の存在が場違いというのかなんというのか。テイルギアを持っているとか、味方が敵かなどの疑問は色々あったが、せっかく張りつめていた緊張感がどこかへ飛んでしまった。

「…そうですか。では、レッド、ファイヤー。直ぐに勝負の再開を…」

フォクスギルデイもブルーには構ってられないと言わんばかりな顔をする。このグダグダな空気を何とか軌道修正しようと雰囲気だけでも戻そうと頑張っている。

「お、おう。そうだな…。戦いはまだ、終わっていないもんな」

俺は一応そう答えたが、レッドはブルーを見ながら驚きと焦りが入り混じったような顔をしていた。レッドはまるで幼馴染と再会した転校生のような顔でブルーとあれこれ喋っている。…どうしたんだ? ?

「? どうしたのですか、テイルレッド?」

フォクスギルデイも心配になったのか、おろおろし始めた。すると、テイルブルーは一振りの槍を持ち、鬼のような顔をしながら、こちらにやってきた。

「さあて、あんたは、あたしが相手になるわ…!」

えっ!?! この場にいる全員がそう思っただろう。だって、今のこの空気じゃ絶対、あんたの出番じゃ…。

「ちよ、ちよっと待っ…!」

「うるさい、問答無用よ!」

そう言い放つと、ブルーの持っている槍から膨大なエネルギーが溢れだす。槍の切っ先が変形し、変形した部分から溢れんばかりのエネ

ルギーの刃が生まれる。

「か、開幕必殺技は掟やぶ…」

「うるつつつさいのよ、この変態怪人!!」

そう吐き捨てるように言い、テイルブルーはそのエネルギーの刃をフォクスギルデイ目がけ振り下ろした。

「な、なんじゃそりやああああ?!?!」

フォクスギルデイは青色の濁流に飲まれながら消え、彼の信念であつた2つの属性玉だけが残された。

「…」

俺とレッドは互いに向き合い、テイルブルーに感謝すればいいのか、それとも憎めばいいのか…どうリアクションすればいいのか分からないでいた。戦いが再開すると思つたらいきなり知らない奴が乱入してきて敵を倒してしまった。訳が分からない。

…こうしてフォクスギルデイは倒され、俺たちの戦いは終わるのだった。残つたのは、最後まで俺たちと戦えなかつたフォクスギルデイの無念さと、俺たちが戦いの前に思つた信念や意志が全部無駄になつたと感じる脱力感だけだった。

そんな俺たちを無視するように、フォクスギルデイを倒したテイルブルーは、でっかい仕事をやり遂げた気分でのんきに笑っていた。

…それをテレビ局のカメラが撮っていることにも気付かずに。

第13話 波紋、ツインテール

「何なのよこれええええええ!!」

フォクスギルデイとの戦いを終えた次の日、観束家の朝はいきなり上がり込んできた愛香のその咆哮から始まった。

「あ、おはようございます」

居間のテレビを眺めながら、総二はがつくしと肩を落とすし、隣にいるトウアールはわき目も振らずに挨拶だけを交わし、ノートパソコンに向き合っては、せわしなくキーボードを叩いていた。

『テイルレッドとテイルファイヤー。この2人が遂に手を取り合っている』

ネット、ニュース、諸々のメディアで特集されていたのは、怪物にいじめられてへたり込むテイルレッドの姿と、颯爽と現れてそれを救出したテイルファイヤーの姿。そして2人の戦士の熱き共闘の姿がほとんどで、テイルブルーについて触れるメディアはほとんどなく、2人のおまけ扱いされていけば上々、ほとんどが刺身の上のタンポポ程度の扱い…つまりはどうでもいいものとして扱われている。ぶつちやけ敵であったフォクスギルデイの方が確実に多く触れられているという有様だ。

勿論、資料が足りない、情報が少ないといったこともあったかもしれないが、新しい戦士の登場という比較的使いやすい話題でもあったにも関わらずこの扱いに愛香は憤慨した。しかも…。

『なるほど。つまりはこの青色の少女は味方かどうか分からない、と』『ええ。この少女は昨今のヒーローのお約束をことごとく破っていますからね。他人が追いつめた瀕死の敵にいきなり乱入、開幕必殺技、命乞いに対して情け無用の一撃…これで味方と判断するほうが難しいですよ』

そう喋るのは、テレビをあまり見ない総二でも名前くらいは知っている有名な評論家であった。

『それに見てください、この目を。餌食となる獲物を見つけたと言わんばかりの暴力的な目ですよ。プロレスの悪役レスラーが時たまこ

のような目をするのを私は何度も見ていますからね、分かるんですよ。この手の輩はね、顔は笑っていても中身はひどく暴力的です。この少女にもその片鱗が既に見え隠れしていましたね…』
『なるほど。では次は—』

たまに話題に上がったかと思えばこれだ。正義の味方どころか、悪役か、もしくは敵か味方か分からない第3勢力の手先か何かという扱いを受けている。

評論家たちのテイルブルーへの鋭い意見に、総二は大体あっているんじゃないかなと思ったが、心の中だけに留めておく。もしうっかり口を滑らせたりしたら、きつとテイルファイヤーの拳と同クラスの一撃を生身で食らう羽目になるからだ。

『う、あああああああああ！』

『よそ見を、するなあ!!』

そんな扱いを受けたブルーとは対照的に、メディアに大々的に紹介されているのはテイルレッドとテイルファイヤーだった。適当にチャンネルを回してみても話題はこの2人で持ちきりだ。

『いやあ、テイルレッドは今回も可愛らしいですねふひひ』

おい、発言に気をつけろよ、机の上に偉そうな肩書きを乗せているおっさん。この番組生放送中だろ？ 今まで積み上げたキャリアを台無しにするような顔をテレビで映すな。

『流石は儂の娘、テイルレッドたん!』

『はあ!? ちげーよ、テイルレッドたんは貴様の娘じゃねえ! テイルファイヤーさんの妹に決まっているじゃねーか!』

『お前は馬鹿か!?! テイルレッドたんはなあ、テイルファイヤーさんがお腹を痛めて生んだ娘に決まって』

おっさん同士の醜い争いの途中で映像が切れ、ピーという音と共に「しばらくお待ちください」のテロップが流れた後、総二は感情の欠片もない能面のような顔でテレビを消した。

「もうやだ、この国」

愛憎表裏一体。応援してくれるのは嬉しいが、このままの応援だといつか自我や精神が崩壊を起こしてしまいそうな気分になる。

だが、総二以上に悩みを抱えているのが愛香だった。

「もう嫌なのは私の方よ！テレビでもネットでもあたしの評価酷いんだから！ あんたはまだ人気あるからいいかもしれないけど、あたしほんとに評判悪いのよ!?!」

「ネット？ ネットなんて見ていたのかお前」

総二はここ最近、ネットを見ていないせいか自分がネットでどういう扱いを受けているのか分からなかった。：何故触れていなかったかは聞くまでもないだろう。放送コードという防護柵があるテレビですらこの扱いなのだ、誰が何とでも書き込めるネットの世界など怖くて触れることすらできない。

「ほんと酷いのよ。掲示板でブルーを絶賛するコメントを書いたら『自演乙』ってレスがすぐ帰ってくるんだから！」

「何の戦いを繰り広げているんですか、愛香さん」

「本人さん、乙ですwww」『本人さんチース』とかも言われたし」「事実じゃないですか」

「仕舞にや動画サイトであたしのIDをNG推奨って晒されたし！酷いわよね！」

「迷惑な行為ですし、当然ですよね！」
「うるさ——い!!」

トウアールの合間合間に挟むツツコミにキレた愛香は、どこから取り出したのかトレーニング用のリストバンド（重り入り）をトウアールの顔面へと叩きつけた。

：なんて斬新なツツコミなんだろう。トウアールが来てから数日しか経っていないが、日に日に愛香のツツコミのバリエーションが多くなっている気がする。

「で、でも、テイルブルーを推す人もちゃんといえますよ！」

鼻血を出しながら、トウアールは笑顔で愛香にパソコンの画面を見せる。そこは申し訳程度のテイルブルーの横顔を映した写真と大量のコメントで構成されたページだった。

—以下、そのページに載っていたコメントの一部である。

・胸が平らなのに、胸元の開いたスーツを着るとはマゾの極みww

ww

・一瞬セクシーなのかな？　と思ったけどよく見たら違った、ただ貧相なだけだった。

・貧乳なのに、セクシー衣装で顔面テイルブルーww

・ぶつちやけ、ファイヤーさんと被っている。というか胸も性格も全てが劣っている。

・もしかしてあれか、彼女は貧乳を求める怪人なのか？　だから恰好も貧乳なのかな。

・もはやイジメとしか思えないコメントがページいっぱい書いていた。ほぼ挙げられる話題が貧乳っていうのが酷過ぎる。

「——これ、学校で誰かが言ったら、あたしそいつをぶちのめしたいという衝動を抑えられないわ、きつと」

パキパキと拳の関節を鳴らしながら、愛香は親の仇を見つけたような顔で画面を睨む。が、そんな愛香を呆れたような目で見るトウアール。

「そういう所が悪いと思うんですよねえ…」

「何よ！」

「ほら、そうやってすぐ手を出そうとするんですね！　悪い癖ですよ！！」

「こ、のお……」

頭上で拳を握ったまま、プルプルと震わせる愛香。トウアールは愛香が言い返せなくなったのを好機と見たのか、ねちねちと言葉のナイフを武器に反撃を始めた。

「愛香さんのそういった短気な行動や暴力的な態度が、世界中の人に見抜かれているんですよ。だから人気が無いんです、貧乳って馬鹿にされるんです。悔しかつたらそういう性格や人を殴る癖を直しましょうよ。直した頃には多少なりとも人気は上がるんじゃないでしょうか…まあ、いくら性格が良くても貧乳である以上、その道は大変厳しいと言わざるを得」

ズブリ！　言い終わるか終わらないかの内に、愛香はトウアールの愛らしい瞳に、勢いよく指を突っ込み、目潰しをくらわした。

「ぎにや——!!」

「だからお前はあ! 言った傍からそれか!」

「だってさあ……こいつの話聞いていると、反射的に手が出るっというか。多分、あたしはこいつの話を聞くと、脳から電気信号が送られるよりも前に体が動くようになってるのよ」

「どんな身体?! そんな身体になっていたらそいつは人間じゃねえよ、もはやサイボーグだよ!!」

「そ、総二様…愛香さんはきつと人間じゃないんですよ。昨日も私の関節をバラバラにしましたし、本当に人間なら躊躇したり、情けをかけたりできます。それができないのはきつと蛮族か何かの生まれ変わりなのでは」

「シヤラ——プ!!」

ゴグシヤア! 目潰しをされても懲りないトウアールに遂に堪忍袋の緒が切れた愛香は折りたたまれたノートパソコンを殴り、無残にもそれを拳で貫通させた。

「ああああああああああ!! 私のウハウハフォルダがあああ!!」

数秒前まで電子機器の形をしていたそれは、拳大の穴が開き、火花が散る斬新なオブジェへと早変わりし、トウアールは血の涙を流しながら蹲った。

「まあ、ぶつちやけ、愛香が来なくてもどうにかなったしなあ」
「…え?」

幼馴染のまさかのカミングアウトに呆然とする愛香。

「テイルファイヤーと一緒にだったし、あのまま戦っても絶対に勝っていたと思うから…別に愛香が来なくても大丈夫だったんだぜ? ていうか基地で映像見ていなかったのか?」

トウアールとの殴り合い（一方的）でそんなもの見ている暇がなかった愛香はそんなことがあったなんて知らなかった。

「じゃ、じゃあ何? あたしの決意とか、意志とか気持ちとかは…」

「まあぶつちやけ、全部無駄だったしか言いようがありませんね。世間からの評価が悪いのも愛香さんが貧乳で空気が読めないのが原因

じゃ」

「うおわああああ——!!」

バーン！ そう呟くトウアールの顎を愛香は蹴り上げて、天井に首をめり込ませた。ぶらんと首から下の身体が揺れているその光景はホラー映画顔負けの光景だ。

「俺んちを殺人現場にするなあああ!!」

「あ、大丈夫です総二様！ 私こういうことには慣れていきますので…。それより総二様、私のスカートの中がしっかりと見えていますか、パンチラですよ、パンチラ!!」

…そんなやり取りも耳に入らず、愛香の心には暗い深海のように深い嫉妬が生まれつつあった。

（あ、あたしが本来いたはずのポジションをあいつが…！幼馴染のあたしのポジションが！ あ、あいつがいなければ、あいつのせいであたしはこんな目に…!!）

とぼつちりと言わんばかりの理不尽な怒りでテイルファイヤーを恨む愛香。

（ぜ、絶対許さないんだから、テイルファイヤーああ!! あんたさえいなければあたしだってえええ!!）

…人それを八つ当たり、はた迷惑な奴というのだが、今の愛香にはそんなことが理解できるわけがなかった。女の嫉妬だけが彼女の心の中に渦巻いていた。

※

——ブルツ。

「うおっ!？」

同時刻、光太郎の部屋。突如悪寒に襲われ、肩を震わせた。

「どうしたの光太郎?」

「いや、なんか…少し寒気が。ゾツとしたんだ」

「風邪じゃないの? クスリ飲む?」

「あー、いらぬ。後でなんか温かい物でも飲むからいいや」

ミーティング中に光太郎を襲った悪寒。何か嫌な予感がしたが、特に気にも止めずに会議を続行することにした。

「レットに続いてブルーか。俺も含めるともう3人目かあ…」

先日現れた新戦士テイルブルー。俺たちが追いつめたフォクスギルデイを開幕必殺技で倒すという衝撃的なデビューで飾った青色の戦士。はたして敵か味方か。今回の会議はそれが大きな話題の一つになっていた。

「レットは信用できるんだけどさ、ブルーは味方なのかな？ あの人何か怖くてさ…」

「やり方はともかく味方って認識でいいんじゃないかしら。少なくともこつちに危害を加えない今のうちだね」

「まあ、こつちに直接的な被害は出てないからいいんだけどさ。それよりも気になるのは」

「…何故あの子たちがテイルギアを持っているかってことね」

「ああ。俺の使っているやつと違う気がするしな」

やはり気になるのはレットやブルーの外見だ。纏っているのは俺たちと同じテイルギアで間違いないだろう。ただ気になるのは、俺のギアとレット達のギアの違いだ。

俺のギアはベルト型のアイテム『テイルドライバー』で変身するのだが、レット達のギアにはベルトのような装飾品が見当たらない。そのかわりに腕のブレスレットのようなアイテムに俺のベルトと同じような機能が備わっている。

同じテイルギアのはずなのに、どこか違う。外見も違いが見られる。レイチェルが並行世界から持ってきたギアは俺のテイルドライバーただ一つだけ、誰かに他のテイルギアを渡したという説はありえない。これらが示すことは…。

「レイチェルと同じように並行世界からテイルギアを持ち込んだ奴がいる」

「ま、そういうことになるわね」

つまりはそういうことだ。レイチェル以外の並行世界の生き残りが、この世界に来ていることになる。

「…できることなら、会って見たいんだけどね。もし、そいつが生きているのなら」

レイチエルはぼつりと呟いた。

「やっぱりそうだよなあ…」

俺もレイチエルの立場だったらそう思う。自分の知り合いがこちら側の世界に來ている、しかも生きているかもしれない。それだけでどれだけ嬉しいことか。

「でさ、このギア、誰が作ったかってのは分かるか？ もし分かるのだったら、俺があつた人の中にその人がいるかもしれない」

その言葉にピタツとレイチエルは静止する。聞かれちゃマズイことを言われたみたいにな、黙ってしまふ。

「？ どうした？」

「…あ、うん。一応心当たりがあるっていうのか、無いっていうのか…」

「本当か!？」

「あー、まあ、勘づいていうのか察しが付くかなってくらいで、確信には至らないんだけど…」

顔を背けながら曖昧なことしか言わないレイチエル。…何となく気まづくなってきた。

「まあ、その…言いたくないなら無理に言わなくてもいいよ…」

「…ごめんなさいね」

「何か、ごめんな。俺も無理やり聞いちゃって」

「ううん、いいのよ」

光太郎は知らない。テイルブルーの纏っているギアが、レイチエルにとつてももの凄く見覚えがあるということをし、そしてそのギアの元々の持ち主がレイチエルの知り合いだということも。

そしてその本来の持ち主はスタイル抜群で、装着するギアもそれを前提に作られている為、貧相なスタイルのテイルブルーには壊滅的に似合わないということに気付いたのもレイチエルただ一人であったことも、光太郎は知らなかった。

※

侵略者アルティメギルの秘密基地のとある一室。『事務室』と書かれたプレートが引っかけられているその一室では怪人たちが書類制作に励んでいた。

いくら戦いに明け暮れる侵略者でも組織という集団にいる以上、事務作業は必要であり、時折こうやって作業に励んでいる。

だが、作業に励むはずの怪人たちは心ここにあらずといった状態で、頻繁に私語を交わしていた。

「フォクスギルデイもやられたらしいな」

「ああ、青い悪魔に倒されたってよ」

「ヘッジギルデイに続いてベテラン二人が殉職か。俺たち勝てんのかねえ…」

「知ってるか、この世界の侵略中止の案も挙がっているらしいぜ？」

「マジかよ…そうになったら新しい部署の転属になるかなあ？ 今の部署気に入っているんだけど…」

何人かの怪人が中学生の休み時間のノリで固まって話している。

「青い悪魔、テイルブルーか…あいつと戦うのは嫌だなあ。貧乳は俺の好みじゃねえ」

「それは同じ貧乳のテイルレッドたんのファン全員を敵に回す発言とみていいのか？」

「どうせ倒されるのならレッドたんかファイヤーさんがいいぜ。あのツインテールを拝みながら散りたい」

「お前、散り際の言葉考えている？」

「いやあ、やっぱり…」

その怪人の散り際が何なのか、周りの怪人は知る機会を失った。何故なら、どん、と机を叩く音が事務室に響いたからだ。

「…事務作業を続ける。戦いだけが俺たちの仕事じゃない、書類制作も大切な仕事だ」

「わ、悪かったよ。ワイバーンギルデイ…でもさ、俺たちも…」

「ああ…？」

翼竜の姿をした怪人、ワイバーンギルデイはギロリと睨んだ。睨まれた怪人は何も言い返せずに怯え、しぶしぶといった気分で事務作業へと戻った。

「いいか、俺たちはアルティメギルだ。人間相手に臆するなどあつてはならない！」

ワイバーンギルデイは事務室にいる全員に聞こえるように大声を出す。

「相手はたかが鎧を纏った人間だ。青い悪魔？ 違うな、俺たちが悪魔なんだ!!」

律儀な何人かの怪人が「はい」とか「ふーん」とかの返事をする、ワイバーンギルデイは満足したらしく、書類制作へと戻った。

「つたく、相変わらずお堅いんだから」

誰かが子声で囁いた。

「しようがないだろ？ だってあいつは若手ナンバーワンだし、期待されているんだよ」

「ちえつ、羨ましいね」

「所詮たたき上げの俺たちとは違うってか？」

「いいねえ、エリート様は…」

ヒソヒソコソコソ。

「…」

子声はワイバーンギルデイにも聞こえていたが、無視した。そう言われるのはいつものことだからだ。

(忌々しい奴らだ…！)

ぎりつと歯が軋む。仕事に励まない怪人もそうだが、彼らの話題の種であるツインテールの戦士の方も忌々しい。

4人、この短い期間で4人ものの怪人が殉職した。元々入れ替わりの激しい仕事だ、こうなることは覚悟していたが、たかが3人の人間の戦士に4人もやられたなど。

(今に見ているよ…人間共!!)

静かな怒りをふつつつ燃やししながら、ワイバーンギルデイは書類制作に励むことにした。

焦ることはない、チャンスは必ずくる。そう、チャンスはまだある
のだから…。

第14話 ツインテールの静けさ

「ブレイク、シュート!!」

「ぬおおおおお、無念だー!!」

テイルファイヤーの右拳に貫かれたアルティメギルの怪人は断末魔を残して爆破し、散った。怪人が倒されるその光景を物陰から見ていた市民は、テイルファイヤーの勝利にわっと歓声を上げて、飛び出してくる。

「お姉さま、素敵です!!」

「ありがとうテイルファイヤー!!」

「あ、はは。どうもー…」

倒した怪人の属性玉を回収し、半笑いでひらひらと手を振りながら市民の歓声に応えるテイルファイヤーこと丹羽光太郎。

正直こういった行為は苦手なのだが、レイチェル曰く、市民の歓声に応えるもヒーローの役目みたいだ。仕方ないが頑張らなくては。

(これで10体目のエレメリアン撃破か…)

初めて俺がテイルファイヤーに変身してから今日で20日余りの時が過ぎた。最初のころよりはペースこそ落ちたもののアルティメギルの侵略行為は未だ続いているが、レッドとブルー、そして俺の3人のツインテール戦士の手によつてその侵略行為は全て未然に塞がれていた。

そして倒した怪人はどうとう2桁という大台に上がり、そろそろアルティメギル側も何らかのアクションを起こしそうな気がしてならない。最近はどうも手ごたえのない弱い敵ばかりが出てくるし、何か嫌な予感の前触れのような気がするのだ。俺はこのまま何も起こらずにアルティメギルがとつとと侵略行為を諦めてくれないだろうかと考えているのだが…。

「すいませーん!」

と、人ごみをかき分けてトコトコと俺の方に近づいてくる女の子が一人。髪型は最近流行りのツインテール、しかもテイルファイヤーと同じようなツインテールに仕上っている。

(ツインテールをする子が多くて嬉しいんだけど…何だかなあ)

そう、ここ最近、俺たちの活躍と比例するようにツインテールの髪型の女の子が非常に増えている。俺としては嬉しい反面、ツインテールの髪型を狙って、アルティメギルに襲われるリスクが高まったり、思わず目のやり場に困ってしまうなど、複雑な心境だ。…できれば、こういったブームは早く去って欲しいんだけど。

色々複雑な気分になる中、ピタッと俺の前に女の子は止まると、ぺこりと頭を下げてきた。

「あの、ティルファイヤーさん！ サインをお願いします！」

すっと色紙を俺の前に見せ、女の子は頼んできた。

…やっぱりそれか。半ば予想できたことであつたが、やはりこういう事を頼まれることが最近多くなってきた。

「えー、えーとサインはちよつとね…」

「えー？ サイン駄目なんですか!？」

「うん、そうなんだ…。ごめんね？」

女の子ががっかりする顔に罪悪感が芽生える。

「わ、私、ティルファイヤーさんの大ファンで！ あなたの髪型を真似するほど大好きなんです！ それでも駄目なんですか…?」

ジワリと目に涙を浮かべる女の子。それとシンクロするように女の子のツインテールもしょんぼり悲しんでいるように見えてくる。

…これは少し困ったことになった。ここで逃げてても全然かまわないのだが、逃げたら逃げたらで面倒くさいことになりそう。ティルブルーの一件でメディアの恐ろしさが身に染みて理解できているつもりだ。事実、あれからティルブルーは妖怪か悪魔か何かのような扱いを受け、皆の恐怖の対象になっている。

街中で戦ったときにはティルブルーが現れた途端に市民全員が悲鳴を上げながら一斉に逃げだし、人々を襲う側の怪人もへつり腰になりながら戦っていたしな。そして俺はブルーからひどく嫌われて、睨まれるようになってしまったし…。ああ、俺、何か悪い事しちゃったかな？

そして今、この状況をどうするべきか。それが問題だ。

できることならサインの一つや二つ書きたいんだけど…でも、俺そもそも字が汚いしなあ。この子が望むような女の子っぽい可愛らしい字が書けなくて、テイルファイヤーへの夢を壊したくはないし、かといつて…。

幸いなことに対策法はすぐ思いついた。…ただ、これでこの子が納得できればだけど。

「やっぱりサインはちよつとね…。あ、でも、その代わりに、握手なら全然大丈夫だよ！」

「！ ほんと!?」

「うん、大丈夫！」

女の子の目線に合わせるように屈んで、すつと右手を差し出して握手の姿勢になる。

「じゃ、じゃあ…失礼します！」

「あ、そんなにかしこまらなくてもいいんだけど…」

女の子はすりすり俺の手を擦りながら、荒い息をしながら握手を交わす。俺も笑顔でしつかりと女の子の手を握る。

「はあ…これが、これがテイルファイヤーの手…綺麗…素敵…」

俺の手をさする時の動きが少し卑猥に見えたのは気のせいかな？

握手というよりはまるで手コ…。

(うおおおおおおおーい!!)

一瞬、とんでもない下ネタを連想してしまつて、ギリギリの所で理性を取り戻す。

馬鹿たれ、今の俺は幼き女の子と握手しているんだぞ!? 女の子はそういった邪な事を一切考えていないというのに、俺がこんな淫らな事考えるだなんて変態か!?

1分近く続いたと思われる長い握手がようやく終わると、女の子は満足したかのような顔になっていた。

「えへへ、ありがとうございます！ 私、この手は二度と洗いません！」

一応洗ってほしいんだけどな。そう言いたかったけど、女の子の夢の為にここは黙っておこう。

「うん、ありがとう」

「じゃあ、今日は本当にありがとうございます！　頑張ってください！」

「…うん、頑張るよ！」

グツとサムズアップを交わして、女の子は人ごみの中へと消えていった。

（あー、上手くできた…）

俺は女の子を喜ばせた嬉しさとヒーローとしての仕事をやりきった満足感に浸っていた。

…だが、これが更なる騒動へと発展することになるとは全く予想できなかつた。

「お姉さまが握手を…!?!」

「バリアのようにガードが固かったファイヤーさんが…?」

「幼女と握手を、交わした!?!」

「テイルファイヤーさんが握手をしたぞ、俺たちも続けー!!」

「あわよくば!!」

「俺たちも！」

「ーええっ!?!」

一度例外を認めてしまったら、二度目の例外も認めてしまったも当然。例えそれが、男が女へと性転換したヒーローの握手でもだ。

「二テイルファイヤー！　握手をしてくださいー!?!」

この危機を俺はテイルギアのスペックを最大限に生かし、驚異的なスピードで一瞬でその場から姿を消した。

※

アルティメギル秘密基地の廊下。

その廊下をカツカツと早歩きで進む怪人が一人いた。細身の体を持ちながらもパワー、スピード共に他の怪人と一線を引く實力を持ったエレメリアン、ワイバーンギルデイその人だった。

（何故だ…何故だ!?!）

ワイバーンギルデイはとある怪人を追っていた。先ほど開かれた会議、それを取りまとめ、勝手に話を進めてしまった上司。彼が決めたことがどうしても納得がいかなかった。だから、ワイバーンギルデイは上司を問い詰めるため、追っていた。会議が終わってからそんなに時は経っていない。だから、まだこの辺りにいるはず…。

そして曲がり角を曲がり、ようやくその姿を捕えた。竜の身体を持ち、その身を強固な鎧で身を包み、身の丈を超えるほどの大剣を背負う怪人。一目見るだけで強者のオーラが滲み出る怪人。間違いない。隊長だ。駆け足で詰め寄る。

「ドラグギルデイ隊長!!」

ワイバーンギルデイは唐突に声を発して、自分が探していた上司、ドラグギルデイ隊長を呼び止めた。ドラグギルデイはピタリと止まり、振り返った。

「控えよ、ワイバーンギルデイ! この方を誰と知って…!」

ドラグギルデイのそばにいた側近がワイバーンギルデイを見るなりたしなめるが、無視する。確かに上司に対する反論や追及は重罪に値する行為。だが、それでも。ワイバーンギルデイはこのことを知るまでは止まれなかった。

「よい」

「ですが…!」

「よいと言ったのだ」

だが、ドラグギルデイは興味を引かれたようにワイバーンギルデイの無礼を許し、側近を黙らせた。

「…お前は先に戻っておけ」

「は?」

呆けたように答える側近。

「この男、俺が預かろう」

「しかし!」

「二度も言わせるな!」

しびしびと側近が下がった後、ドラグギルデイは口を開いた。

「俺に用とは何だ、言ってみるがいい」

「…!」

隊長の許しを得たワイバーンギルデイは、前へと進み出て、悔しそうに大声で問うた。

「何故、俺を戦場へと行かせてくれないのですか!？」

―それは先ほどの会議が原因だった。

同胞10名・戦闘員127名。それがこのアルティメギルが20日間です。失った戦力だった。

日数を考えれば、かなり大きい痛手だ。こちらが得た属性力はゼロのまま、犠牲者だけがどんどん増えていく。この状況に、いよいよアルティメギル側も焦り始めていた。

だが、ワイバーンギルデイにとってこの状況は望んでいたことだった。犠牲者が増えるこの状況、出撃させる怪人も強者へと厳選されるようになってきた。少なくとも、アルティメギルが怪人を選ぶ基準やその法則など、ワイバーンギルデイはある程度の予想がついている。その法則が正しければ、次は俺が選ばれるはず。

人間たちの力が見せつけられているこの状況で、手柄を立てることができれば、俺は更なる高みへ上ることができる…。

だが、ワイバーンギルデイが望んだ通りの展開には至らなかった。

『ならん、次の戦いには俺が行く』

『隊長!』

本来なら若手ナンバーワンの實力を持つワイバーンギルデイは他の怪人からの猛アピールを受け、次の出撃へと至るはずだった。だが、それを上司であるドラグギルデイが制し、隊長自らが出撃するよくな状況へと変えてしまった。

それが納得できなかった。何故だ、この人は俺を信頼していないのか!？」

「俺が、弱いからですか…?」

確かにドラグギルデイ隊長は強い。怪人が行う修行の中でも修めるのが非常に困難な五大究極試練の一つ、スケテイル・アマ・ゾーンを乗り越えたただ一人の怪人。通販で買ったものが一年間透明な箱で梱包され届けられるという、精神面で非常に負荷を背負うその修行

を乗り切り、隊長という地位を手にした強者。

確かに隊長と実力を比べると、俺は劣るのかもしれない。…だが、それでも納得できない。

「いや、そうではない」

しかし、ドラグギルデイは予想に反した返答をしてきた。

「ワイバーンギルデイ。貴様は俺が今までに出会った、お前と同年代のエレミアンの誰よりも強い」

「…！ ではなぜ…!!」

「だからこそだ。お前は俺を超え、新たな戦力となれるやもしれない逸材だ。だからこそ、今はこの戦いから身を引き、修行に励め。己の属性力を高めろ」

そして一呼吸置いた後に、ドラグギルデイはこう述べた。

「今のお前では、ツインテイルズは倒せん」

優しくも厳しい声でそう言った。それは実質、ワイバーンギルデイの戦力外通告を意味する発言だった。

「俺が人間に劣るとでも!？」

ダン！ 悔しさが滲み出るような叫びで、ワイバーンギルデイは壁を叩いた。その手からは血が滲み出ており、ワイバーンギルデイの悔しさがうかがえる。

ツインテイルズ。テイルレッドやテイルファイヤーなど人間の身でありながらアルティメギルと戦う少女たちの愛称。恐れと尊敬の意味を込めていつの間にか広まった愛称。

しかし、ワイバーンギルデイに言わしてみればツインテイルズなどたかが人間。現に今まで侵略してきた世界に、人間は数多くいたが、どれもこれも歯ごたえが無い。

皆が何故、あれほど人間に執着するのか、よく分からなかった。確かにワイバーンギルデイにも人体のとある部分への属性力はあるが、それはあくまでその部位だけが好きなかただけであって、人間そのものには興味が一切湧かなかった。ワイバーンギルデイはそういった意味ではどこか他人と違った一面を持っていた。

「ワイバーンギルデイ。貴様は人間をどのような存在だと思っている

？」

「人間を…？」

「そうだ、どう思っている？」

突然聞かれたこの質問に、ワイバーンギルデイは戸惑った。どのよう
に答えるか少し迷ったが、自分に正直になり、はつきりこう答えた。
「倒すべき相手です！ 俺たちが属性力を奪うためだけの存在です
!!」

だが、ドラグギルデイは残念そうに首を振り、ため息をつく。

「…俺が言った意味が分からないのならば、貴様は永遠にツインテイ
ルズを倒せないだろうよ」

そしてドラグギルデイは畳みかける。

「奴らを見くびるな、ただの下等な生物として見るな。我々にはない物
を奴らは持つている。それを理解できないのなら、お前は所詮、そこ
までの男だったということだ」

ドラグギルデイはそこまで言い、踵を返す。

「待つて下さい、隊長！」

「ワイバーンギルデイ、貴様は謹慎だ。明日、俺とツインテイルズの戦
いをその目に焼き付け、その意味を理解しろ！」

それだけを言い残し、ドラグギルデイは去っていった。

残されたワイバーンギルデイは悔しさに肩を震わせた。プライド
がズタズタにされていた。

隊長にそう言われただけじゃない、他の怪人にも、そして自分が普
段から見下す人間にも劣っていると遠回しに言われたような気がし
たからだ。

(俺は…俺は!!)

生まれて初めて経験するような感情だった。血液が沸騰するよう
な激怒に駆られた。

自分が何をしようとしているのか、自分自身がようやく気付いたの
は己の属性力を解放し、隊長に襲い掛かろうとした時だった。

ちくしょう…ちくしょう…

殴ろうと構えていた腕を解き、ワイバーンギルデイは膝から崩れ落

ちた。自分の掲げてきた誇りにかけて隊長を殴る事なんてできない。最後の一線を越えることはできない…。

ふと、自分が泣いていることに気付いた。そしてふらふらと歩き始める。

隊長は言っていた。人間を理解しろと。ならば…。

(明日、俺は…行動を仕掛ける!!)

隊長がそこまで言うのなら、俺は自分の行動で人間を見極めてやる。ツインテイルズが本当に強い存在なのか、自分自身で確かめてやる。

ワイバーンギルデイは焦る気持ちを抑えながら、明日行う計画の構想を練り始めた。

第15話 決戦、ツインテール 前編

4月ももうすぐ終わろうとする中で迎えた日曜日の昼下がり。戦いが起こらないこの平和な時間を光太郎は、市内の図書館にて学校から出た課題を片付けることに費やしていた。

この1カ月弱、アルティメギルはこっちの都合に構わず、世界中のどこにでも時間を問わず現れて侵略活動を行ってきた。レイチエルが開発した転送装置のおかげで、すぐさま現場にかけつけて戦ってはいるものの、時間だけはどうにもならない。深夜にレイチエルにたたき起こされて出撃したことも何回かはあるし、いざ夕飯を食べようとした瞬間に現れたこともある。幸か不幸か、今の所は授業中など正体バレに繋がるような時間帯に戦うことはないのです、そこは助かっているが。

こういった自由な時間を有効活用しないと、課題などを行う時間が取れないのだ。ヒーローの辛い所なのだろうな、これは。

だが、のほほんとした空気は突然かかってきた通信によつて崩れ去った。

『アルティメギルが現れたわ！ 場所は山奥の採掘所よ！』

またか。課題が終わり、一息ついていた途端にかかってきた通信にそう思いながら、出撃準備に取りかかろうとするが…。

『あ、でも、待って…レッドが倒しちゃったわ！』

「早っ!?!」

人気のない所へ移動して転送ゲートを開いてくれと頼もうとしたのに、既に決着がついてしまった。どうやらレッドが文字どおり怪人を瞬殺してしまったらしい。

『悪かったわね、通信かけちゃって』

プツンと切れた通信。腕につけたテイルリストを擦りながら、ぼんやりとする。

(なんていうのか…変な感じだ)

自分が出撃しなくても戦いが終わったことやレッドが勝利したことが嬉しいはずなのに、なぜか腑に落ちない。ここ最近、ずっと思う

ことだ。

フォクスギルデイとの戦い以来、アルティメギルの動きに不自然さがあるような…そんな気がするのだ。何の対策も立てないで犠牲者が増やすようなやり方もそうだし、今日だってそうだ。瞬殺されるほど弱い相手をなぜ出撃させたんだ？ そんなの組織にとつてデメリットにしなければならないのに。まるで俺の知らない所で何かが進んでいるかのような…そんな気分がする。

(…考えすぎか?)

椅子に寄りかかりながら、俺は思考の海に入っていく。

そもそも何故あいつらは一気に侵略に取りかからない？ そこがいつも疑問に思う所だ。

メタ的な発言をすれば、ゲームのRPGと同じようなツツコミが入るのだ。『どうして勇者の国の近くは弱い敵しか出ないのか』とか『どうして魔物の大群で勇者を攻めないのか』とかだ。普通は勇者を倒すのならば育ちきっていない序盤で徹底的に強い敵で叩きのめしたり、人海戦術で攻めればいいのに何故だ？

やり方次第では俺たちを倒せる方法とかいくらでもあるはずだ。なのに、20日間近くで苦戦した相手は俺が戦ったヘツジギルデイとレッドと共に戦ったフォクスギルデイの2体だけ。

まあ、お約束だとかルールだとか言われてしまえば納得するが…、まあ相手が変態集団の癖に変な所は律儀な奴らなんだ。あり得なくもない話かもしれない…。

(考えすぎだったのかもしれないな)

椅子をシーソーのように揺らしながら、そう考えていると、再びテイリストに通信がかかってきた。

「！」

ガタガタン！ 突然の通信にビックリして椅子から転げ落ちるが、何とか通信を開く。何人かこちらを見ているが、それは無視しよう。

「なんだよ？ 帰りに買い物のリクエストか？」

『違うわよ！』

ツツコミの後に一呼吸置いて、レイチエルは焦った声を出す。

『アルティメギルがレッドの前に現れたの！ 恐らく、最初に現れた1体目は囃よ！』

「何い!？」

声が裏返った。1体目は囃：つまり、本命は今現れた2体目。戦いを終え、レッドが気を緩めた瞬間を狙ったの出現か。アルティメギルも味な真似をする。

「分かった、俺も現地へ行くよ」

『ええ、お願い』

荷物を図書館内のコインロッカーに預け、人気のない所まで移動する。

『転送ゲートをそっちへ送るわ』

「おう！」

テイルドライバーを腰に着け、準備万端な俺の前に、光のゲートが現れる。そして両足に力を籠めようとした時、『待つて！』という声が出た。

「どうしたんだ？ 何か言い忘れていたのか？」

『：気を付けてね。多分そいつ、今までの奴と違うから：』

「ああ：、行くぞー！」

了解という合図を送り、俺は光のゲートに飛び込みながら変身を完了させる。

今までのアルティメギルの行動とは違うと、何か嫌な感じはするが、レッドと2人ならば大丈夫なはずだ。あの子とならば、どんな敵にだって負けはしない：。

テイルファイヤーはそのまま転送ゲートの力に包まれ、テイルレッドのいる採掘所へと瞬間移動する：はずだった。

「…え？」

俺は呆然としながら声を漏らすしかできなかった。それは2つの驚きがあったからだ。

1つ目は転送の際に感じた違和感。移動する自分とどこか違う力の流れを一瞬だが感じ取った。まるで何か別の力の流れに巻き込まれるような、混線するような奇妙な感覚。

そして2つ目にして最大の驚きは目の前の光景だ。

採掘所に転送されるはずなのに、目の前一面に広がるのは大きな海と煌びやかな街の姿。そして俺はどこか見知らぬ橋のど真ん中に立っている。既に現場は荒らされており、人々が逃げ惑っている。そして自分が今いる場所を調べると、とんでもない場所にいた。

(東京のレインボーブリッジ!?)

そう、何故かテイルファイヤーは今、本来移動するはずの採掘所と真逆の位置にある大橋、レインボーブリッジにいたのだ。

どういうことだ、転送ミスか？ でも、そうでもないよこの目の前に広がる光景の説明がつかない…。

ぐるぐると思考を回転させていると、ちりちりつとした感覚がした。

瞬間、ペタリペタリと足音がする。その小さな音からでも嫌な予感がする。今までの怪人とはどこか違うような、そんな感覚がする。そして、姿が見えてくる。

テイルファイヤーと頭一つ以上離れた身長。黒い体に鱗。何よりも目を引くのは翼竜のような薄い翼と一体化した腕。何よりも身に纏うオーラが違う。薄っぺらさがあった今までの怪人とは違い、引き締まって、凜としている。

ペタリと怪人は足を止め、テイルファイヤーを見る。テイルファイヤーもまた怪人を見、互いの視線が交差した。

「悪いな、貴様を隊長の所へは行かせん。そして…」

「！」

ジャギン、と怪人の手が光り、そこへ凄まじい力が宿っていく。

「テイルファイヤー。お前を…倒す！」

その言葉と共に怪人、ワイバーンギルデイは襲いかかってきた。

※

「どういふこと!?!」

レイチェルのパソコンの画面では、レインボーブリッジで戦うテイ

ルフアイヤーの姿があり、採掘所ではレッドが大剣を操る怪人との戦いが映っていた。共に戦うはずの2人はバラバラな地点でそれぞれの戦いを繰り広げていた。

本当なら採掘所にファイヤーが駆けつけているはずなのに何故？ どうしてあそこにテイルファイヤーがいるの？ 何故転送が失敗した!? 原因を解明するためにパソコンを大急ぎで操作し、解析してみる。

システムの方は何の問題もなかった。定期的に調べていることだし、つい先日動かした時もいつも通り動いたことから、その信頼性はお墨付きだ。

だとしたら、考えられる原因は…。

「外部からの、介入」

レイチエルは思わず爪を噛んだ。

考えたくない原因だが、アルティメギルの何らかの介入によって転送が中断され、意図的に転移する空間を変えられた。

でも、そんな芸当ができるアルティメギルが本当にいるのか？ 属性力を自在に操ることができれば話は別だろうが…。

そして先ほどの転送の際の動作確認へとチェックが移った時、ある一つの部分が気になった。

「この部分…」

転送の際、何者かが無理矢理進路を変えたような形跡が見られた。例えるのなら、道を歩いている時に無理矢理手を引っ張って進路を変えた、そんな形跡だ。

(…まさか)

じろりと画面を見る。あくまでも推測だが、このようなことを引き起こせる属性力をこの怪人は持っている。そして、意図的にレッドとファイヤーを引き離した。

何故？ …恐らくはこれをやったのけたエレミアンは、フォクスギルデイの時と同じことが起こらないようにさせた。レッドとファイヤー、一つ一つは小さいかもしれないが、二つ合わさればそれこそ巨大な炎へと変わるあのコンビを結成させないように分断させた。

(個別に戦って、確実に始末するために分断させた!!)

そのことを理解できた瞬間、レイチエルは部屋を飛び出していた。レインボーブリッジへとその足を向かおうとしていた。

このままじゃマズイ。相手は今までとケタが違う、取り返しのつかないことになる。—そんな予感がしたからだった。

※

「ぐうっ！」

土煙から飛び出したテイルファイヤーは後ろから猛スピードで迫ってくる怪人に防戦一方だった。

「！」

レーザーの如き素早い突きが、土煙を割ってテイルファイヤーの眉間を貫いた。その拳の迫力とスピードで、遠く離れた所で観戦している野次馬にまで風圧が届く。

「「テイルファイヤーさん！」」

その驚異的な風圧は何台かの車も舞い上がり、野次馬たちの悲鳴が聞こえる。

だが、次の瞬間、テイルファイヤーのツインテールが真横へとなびいた。

(危ねえ……！)

紙一重で今の突きを避けたテイルファイヤーは、敵の横へと回り込み、攻撃のチャンスを作ろうとしているのだ。

「ほう……」

だが、怪人の勢いは止まらない。突きの構えから素早く体を捻らせ、踵落としを焰色の戦士の頭を狙い、振り下ろした。

「!!」

踵が頭をかすり、かろうじて避けるも、怪人の踵がコンクリートへと叩きつけられ、大爆発を引き起こす。その際に生まれた衝撃によって俺は吹っ飛び、強制的に距離を置かれてしまう。

「なかなかやるな」

「うる、きい!!」

地面を蹴り、猛然と襲いかかる怪人とかわすのが精一杯の俺。状況は芳しくない。拳、突きと弾幕を張る怪人の猛攻に攻撃の隙がないのだ。

体格だけでもワイバーンギルデイと俺は大人と子供くらい差がある。もう体格からして、ハンデを背負っているようなものだ。

攻撃をよけながら、じりじりと後退を続け…そして遂に止まった。手すりの部分にまで後退して、これ以上下がれなくなったのだ。

「…」

好機と見た怪人は一気に距離を詰め、拳を振りかぶる。ドゴンツ! という自動車同士がぶつかりあったような衝撃音と共に、テイルファイヤーは動きを止める。

「「お姉さま?」」

女性ファンの悲鳴が上がった。遂に逃げ切れずに攻撃をくらったのかと思ったのだろうか。

「ぬう…」

だが、違った。怪人は苦しそうに顔を歪ませる。カウンターの要領で放った右腕の武装『ブレイクシユート』が、怪人の腹部に命中したのだ。だが、怪人の身体を貫通するまでには至らずに、拳は腹部で止まってしまふ。

(…けど、隙はできた!)

更に前蹴りを繰り出して追撃し、怪人を遠方の地面へと弾き飛ばした。

「はあっはあっ…」

本当なら喜びの一つでも上げたいのだが、今の俺にはそんな余裕はなかった。息を上げて、苦しそうに前を見る。怪人はまだ倒れているが、一瞬でも気が抜けない。

(あいつ…とんでもないくらい強え…)

今までの怪人がおままごとレベルに至れるほど、レベルが高い。拳、突き、爪によるひっつき。攻撃はどれもこれも味気のないシンプルな物だが、それ故に恐ろしく感じる。

それに、決死の覚悟で作ったチャンスも活かせなかつたのもデカイ。いつもならブレイクシュート一発で倒せるはずなのに、今回はそれが通用しない。

さっきの一撃で技も見られた、こちらが切れる手札も少なくなるばかりだ。対してあちらの切れる手札の枚数が分らない。目隠しでババ抜きをしている気分だ。終わりが見えないマラソンほどつらいものは無いというがまさしくその通りだと思う。

「なるほど…俺と同じ拳を使うのか。…少しは骨のあるようだ」

むくりと立ち上がる怪人。…くそつたれ、少しは効いているようなフリでもいいからしてくれよ。

「だが…それだけでは俺は倒せん」

ゆつくりと怪人はその両拳を動かす。それに合わせるように腰も落とし、両足も広がって行く。それが徒手空拳の構えだと理解するよりも早く怪人の姿が消え去った。

「このワイバーンギルデイにはな!!」

「!・ファイヤーウォール!!」

ボツ! ミサイルの如くこちらに突撃してきたワイバーンギルデイを左手から展開したバリアで止めようとする。が、今まで様々な攻撃を防いできたバリアは、あるうことかワイバーンギルデイのたった一撃でヒビが入る。

「…っ!!」

しかも、その衝撃までも殺しきることができない。後ろにのけ反り、ビリビリと金属バットで殴られたような鈍い痛みが左手を襲う。

「よそ見している暇はあるのか!?!」

正面突破が無理と判断したのか、ワイバーンギルデイはすぐさま行動を変えた。側面に回り込み、接近してくる。

もう一度バリアを張ろうとするが…駄目だ、間に合わない…!

「がああっ…!」

テイルファイヤーの胸元や太ももを覆う黒のアンダースーツが爪で引き裂かれ、チラリと素肌が見える。無意識に出していた右手を覆っているアンダースーツもビリビリに破れてしまった。

思わず、きつと素肌の部分を隠す。その光景にワイバーンギルデイは満足そうにしている。

「…やはり女は素肌を見せるに限るな」

くそつたれ。これって所謂、視姦ってやつか。女の服を破くだなんて、マナーがなっていないぞ…俺は男だけど。

「それにしても…いい手をしている」

ワイバーンギルデイは音もなく近づいて、芸術品を扱うように俺の右手を持って、素肌の部分をツーンと指でなぞった。

「ふむ、肌の細かさはやはり天然ものか、化粧品をつかつていない。それに、やはり若い女子は肌が違うな、婆の肌は干からびた砂漠のようにザラザラだからな」

「〜！ 気持ち、悪いんだよ！」

ゼロ距離から渾身の拳を打ち込もうと開いている左手でワイバーンギルデイの顔面を殴るが、ワイバーンギルデイはケロリとした顔をしていた。

「効いていない!?!」

「爪の方も…ああ、整ったいい切り方をしている。指を弄る癖もないのもまたいいな。あれがあると肌に良くないからな」

「話も聞いていない!」

「拳を武器に使う割には傷ついていない…良い手だ」

俺を無視して、右手の評価をするワイバーンギルデイ。まるでおもちゃを見るような子供のように、俺の右手だけに意識を持っていつている。

何となくだけど…こいつの持つ属性力が分かった気がする。多分、こいつはフェチ…所謂、異性の体などに執着する性的趣向の持ち主だ。こいつの好みから察するに…!

「やはり手はいいものだ」

手フェチの属性力に違いない…!ワイバーンギルデイは俺の右手を指で擦ったり、つついたりしている。そのうちこいつ、舐めてみようとか言うんじゃないだろうな…!

「さて、と」

ワイバーンギルデイは急に冷めた顔をして、グルンと合気道の要領で腕を捻り、俺を地面へと叩きつけられた。

「がはっ……！」

いきなり叩きつけられたことで肺が圧迫され、一瞬、呼吸が止まる。「余興は終わりだ。後は貴様を倒してから、ゆつくりと手だけを楽しむことにしよう」

ワイバーンギルデイは俺の手を見ながら、そう言った。

（やつぱり……そうだ……）

地を這って体を起こしながら、俺はやつと理解した。

今まで感じていたエレメリアンとどこか違うと感じていた違和感。それがようやく分かったのだ。

こいつ……さつきから俺の手にしか興味を示していないのだ。今までの怪人はどの部位や性格や好みであろうと何らかの形で人間という対象に興味を示していた。……でも、こいつは違う。

まるで人間の存在価値が手しかないような目で見ているんだ。淡々と家畜を殺すみたいいな目で俺たち人間を見ている。

（ふぎ、けるなよ……！）

ギリギリと歯を食いしばり、立ち上がる。その目で……俺たちを見るな！

「見下してんじゃねえええええ!!」

拳を握り、殴りかかるが、ワイバーンギルデイに軽々と避けられる。「ふん……たかが人間が、俺に立ちはだかろうなど……」

ワイバーンギルデイは昨日自分の上司に繰り出そうとした技の構えを取る。

「片腹痛いわあ!!」

ドツゴオオオン!! 先ほどのテイルファイヤーが繰り出したカウンターパンチと同じように拳を振りぬいた。ただし、その威力はワイバーンギルデイの属性力を纏うことで、比べ物にならないほどの凄まじい威力となった。

その一撃はテイルファイヤーを遥か遠くへ殴り飛ばした。体ごと吹き飛ばされ、数回バウンドし、橋を支える柱に激突する。

「ぐっ…あつ、がつ…」

柱に激突し、瓦礫に埋もれるテイルファイヤーは体を僅かに動かすことだけが精一杯で、起き上がることはできなかった。

ワイバーンギルデイは手属性を持つ怪人だ。鍛え上げたその一撃はただ殴るだけではなく、短時間ではあるが時空すらも貫く一撃を放つこともほどの実力を秘めている。

この能力を使い、あらかじめ測定しておいたテイルファイヤーの属性力を目印に、転送しようとする彼女を無理矢理こちらへと引っ張って、連れてきたのだ。時空すらも超える属性力、使い方次第では恐ろしいまでの汎用性を誇るこの属性力は、使い勝手も応用性も高かった。

ツインテイルズの片割れともいうべき炎の戦士、テイルファイヤー。その実力を見極めるためにわざわざ命命を無視してまで戦いを挑んだというのに、何とあつけないことか…。

「終わりか…やはり人間とは、弱いものだな…」

ワイバーンギルデイは瓦礫に埋もれ、下を俯くテイルファイヤーを見て、そう呟いた。

だの人間でしかなかったではないか！ 隊長も俺を何だと思ってるんだ、人間如きに俺が負けるとでも!？」

その笑いに何人かは涙を流し、膝から崩れ落ちた。嬉しそうに笑うワイバーンギルデイに誰もが屈しそうになる。レイチエルも目頭が熱くなるが、グツと堪え、ワイバーンギルデイを睨みつける。

(そう、それがあんたらのやり方って訳…！)

アルティメギルの侵略方法は自分たちの世界が襲われたときに何となく察していたが、今一度見せられるとようやく確信できる。こいつらの侵略の方法は変態の癖に非常に悪質だ。

今までの怪人が弱かったのは、ヒーローを世界的に有名にするための生贄。そして、ヒーローが世界的に有名になり、世界中で大流行するとその辺りで強敵をけしかけ、ヒーローを叩きのめし、動揺したところを一気に世界侵略させる。ヒーローが活躍した際に広まった様々な属性力を回収し、侵略を完了させる…。要は植物を育てる時と同じなのだ。肥料をまき、実が育ちきった所で回収させる。変態が考えたくせによくできている侵略方法じゃないか…。

「でもね…」

小さく呟いて、レイチエルは手ごころな大きさのコンクリートの破片を持った。それを構えて、フルスイングで投げた。綺麗な放物線を描いたそれはワイバーンギルデイの頭へと当り、高笑い が止まる。「…誰だ？」

ギロリと破片が飛んできた方向を向くワイバーンギルデイ。眼光だけで人を殺せるような鋭さのそれに、何人かの野次馬が悲鳴を上げて、逃げ出した。

そんな中でもレイチエルは凜と前へと躍り出た。ここで屈してはいけない。少なくとも時間は稼げる。奴らは人こそ襲うけど、人殺しはしない。死んでしまえば、奪うはずの属性力も一緒に消えてしまうからだ。属性力を糧とする奴らにとっては意味のない行為。

最悪、私が犠牲になってでもいい。レッドやブルーが駆けつけてくれるだけの時間が稼げればいい。

それを心の支えとして、レイチエルは言い放った。

「人間は、人の意志は…あんならアルティメギルなんかには屈しないわ！」

幼き少女が言い放ったとは思えないような声で、そう叫んだ。

※

瓦礫に埋もれるテイルファイヤーもとい、光太郎は意識が朦朧としていた。手足は鉛のように重く、まぶたも重い。意識はまだ失っていないものの、あと一押しでプツンと切れてしまいそうな状態に陥っていた。

(これは、きつと、夢なんだろうな…)

頭の中で流れる映像に光太郎は簡単に結論を出せた。ワイバーンギルデイに殴られて、柱に叩きつけられて頭も打っている。もう、夢と現実の区別ができないくらいに朦朧としていた。だから夢を見ていたって、きつとおかしくないだろう。

それに、今自分が見ている光景が、ありえないような話なんだから、夢に決まっている。なぜなら夢の中で俺と対峙しているのが、顔も輪郭も見えない人間なんだから。

『ここで眠っちゃうの?』

聞こえたのは男性とも、女性とも区別がつかない柔らかい声だった。姿は…駄目だ、目がかすんで見えない。でも、人間だということには辛うじて分かる。

…でも、今、自分は凄く眠たい。このまま眠ってしまったほうがどれだけ楽か…。

『本当にいいの?』

まあ、ヒーローだったら、ここで立ち上がるんだろうけどさ。…俺は負けてしまった。

だから、きつと、レッドが仇を討ってくれる…俺はここで、用済みなんだ。そういう展開も、悪くないんじゃないかな? ヒーロー殉職っていうのもお約束じゃないか。

『それは貴様の本心なのか、丹羽光太郎?』

次に現れたのは、光に包まれた何かだった。渋い声で、俺へと語りかけてくる。

…誰なんだ、あんたは？

『私は、お前のツインテールだ』

一瞬、訳が分からずに疑問に思ったが…直ぐに納得できた。

夢、だもんな。ツインテールが現れようと喋ろうと関係ないか。ありえないようなことが起こる、それが夢なんだから。

『夢などではない！』

ペチリと片方のツインテールで顔を殴られた。夢のはずのその一撃は妙に痛かった。

『ふん、貴様はいつもそうではないか！ 頭のいい方向へと持つて行きたがるその癖が私は…！』

ガミガミと叱るツインテール。何だろう、これは？ 夢にしてはやけにリアルだし…。

『あーもう！ まどろっこしい!!』

人間は俺の歩へつかつかと詰め寄ってきた。

『あんた、本当にこのままでいいの!? おねんねしていたら、確かに助けに来てくれるかもしれない。けど、カッコ悪いって思わないの!?』

その問いに俺は言葉が詰まる。

俺だって…本当は戦いたいよ。でも、あいつ、強いし…俺が立ち上がったって、勝てるかどうか…。

『ふん、そういう事を聞いているのではない！』

ツインテールは俺の手に、くるりと髪の毛を絡めてきた。…痛いよ、それ。

『私は』できるかできないか』を聞いているのではない！ 貴様は』どうしたい』のだ!』』

…! どう、したい、か？

『このままおねんねして、仲間の助けを待つのか!? それとも僅かな可能性にかけて、立ち向かうか!? …もう一度聞く、貴様は』どうしたい』のだ!』』

…俺、は。返答に詰まった。…きつと、これはとても大切な選択と

なるであろう質問だ。

『…光太郎、ツインテールは何故2本の髪の毛の束で作られていると思う？』

は？ 頭の中で？マークが流れ始める。俺は聞き間違いかと思つて、ツインテールを見た。突然何を言い出すのだ？ 哲学とか…そういう類の質問なのか？ いったい何の脈略があるんだろう。

『ふ…分からないといった顔をしているな』

いや、多分誰に聞いてもこういうリアクションになると思うんだけど…。

『分からない貴様に教えてやろう！ ツインテールが2つの髪で作られる理由はな…人間の足と同じだからだ！』

どんっ！ とツインテールは述べた。

『前へ前へと進む髪型。遙か昔から愛されてきたツインテールは、時代を変え、国を変え、あらゆる形、あらゆる意味を込めた髪型へとなった。それは貴様も分かるな？』

うん、とツインテールの語りに自然に首を頷いてしまう。確かにそうだ、ツインテールと一言で述べても千差万別。齢や背丈、性格、髪質、形状、長さなど大まかな違いを上げるだけでもこれだけある。その中に込められた思いだって無数にある。

『そして、人間もツインテールと同じ。前へ前へと進む、例え躓いても、立ち上がれる。風に吹かれても雨に濡れてもツインテールが不滅のように…何度だって前へ進む。人間だってそういう生き物でしょ？』

猿から人間へ進化した人類。その進化の過程では何らかの過ちや失敗があつただろう。しかし、人類はその度に立ち上がって、人類は今へと至る。

『そう、ツインテールが最強の属性力と言われる所以は…2つの足を持って立つ人間と同じように、その2つの髪で遙かな時を歩んできたからなのだ！』

な、なんだって…！ 驚きで目が見開く。眠ろうとしていた意識が覚醒していく。

『それにね、逆境から立ち上がるヒーローって、燃えない!』

わくわくするような声でそう語る人間。いや、お前は…何処かで…?

『確かにボロボロでカツコ悪いかもしれない。でも、同じ負けるでも、このまま寝ていて負けるよりは立ち上がって負けた方が何倍もカツコいいって思わない!』

その人間の顔は陰に隠れて見えなかった。でも、その声は、どこかで聞いたような気がする。

『あいつは確かに強い。最強の属性力を持つ貴様でも勝てるとは保証できない。…だがな、強大な力を持つ者はまた、その強大な力そのものが弱点へと繋がるのだ!』

ツインテールはそう言うと、言葉のトーンを上げる。

『さあ、もう一度聞くと、丹羽光太郎…いや、テイルファイヤー!』

そしてツインテールと人間の声が重なる。

『お前は『どうしたいんだ!』?』

その問いに、やつと俺は答えを見つけ出す。大切なのは、『どうしたいか』か…なら、俺がしたいのは…。

「ああ、俺は—」

俺はそつと、腕に巻きついているツインテールを握る。俺が、したいのは—!

※

「コノヤロー!」

「お前なんか怖くないぞ—」

レインボーブリτζでは、ワイバーンギルデイ目がけてありとあらゆるものが投げつけられていた。ビンや石ころ、破片、拳銃の果てにはゴミや靴などがポンポンと空を舞う。

レイチェルがコンクリートを投げ、ワイバーンギルデイへとタンカを切った。このことが火種となり、残った野次馬は傍観者であることを辞めたのだ。近くにあるものを手当たり次第、ワイバーンギルデイへ

と投げつけていく。

「テイルファイヤーさんが欲しいなら、俺たちを倒してからにしろ!!」

「そっすうだそっすうだー!!」

「…いいともー」

ワイバーンギルディは苛立ち混じりにそう言い、ブンと腕を薙ぎ払った。

軽く薙ぎ払ったそれは、ワイバーンギルディの腕力もあり、人が軽く吹き飛ぶ突風へとなる。

「「うわああああ!!」」

最前列にいた何人かは吹っ飛んだ。レイチエルも吹き飛びそうになるが、必死で踏ん張る。

まだ、駄目だ。まだ倒れている訳にはいかない。

(…!)

そして突風の中でレイチエルははつきりと見た。瓦礫に埋もれて全く身動きしなかったテイルファイヤーが不意に立ち上がったのだ。

「「テイルファイヤーさん!」」

「「お姉さま!!」」

不意に立ち上がったテイルファイヤーに驚く野次馬やワイバーンギルディ。しかしレイチエルは、ぱあっと笑みを浮かべた。そして、テイルファイヤーは少し俯いたまま一步一步、歩き出した。

「…いや、驚いた。あのまま倒れていけば、楽だったもの」

ワイバーンギルディは笑う。それに対して、テイルファイヤーも自傷気味に笑った。

「ほんと、何で立つちゃったんだろうなあ…」

そう、寝ている方が遥かに楽だったのに。でも、俺は、こっちを選んだ。寝てることよりも、立ち上がる事を選んだ。

「ふん、下らん足掻きだ…だが、これで貴様も終わりだ!」

ワイバーンギルディは猛スピードで接近して、拳を振るう。これで終わらせると言わんばかりの一撃を繰り出そうとしている。

「強大な力が…」

ブツブツと下を俯いて呟くテイルファイヤー。そして、拳を構え

て、自分もワイバーンギルデイと同じように前方へ走り出した。

「相手の…」

「!?」

その瞬間、ワイバーンギルデイはゾツとした。顔を上げたテイルファイヤーの眼光が、先ほどとはまるで違っていたのだから。沈んでいた目が、炎のように熱く輝いている。

「弱点と…」

テイルファイヤーは無理矢理身体を捻り、腹部を狙ったワイバーンギルデイの拳を皮1枚の距離で回避した。

「なる!!」

そして、その燃えるような瞳を見開いたまま、自らの拳を伸ばし、全力の一撃をワイバーンギルデイの顔面へとぶち込んだ。

ドグシャア!! 先ほどの一撃とは比べ物にならないほどの音が響いた。テイルファイヤーの拳は、ワイバーンギルデイの顔面へと深くめり込んでいた。

「カウンターだ…!!」

誰かがそう呟いた。そう、それはテイルファイヤーが使った技の名前だった。相手の勢いを利用し、自分の拳の威力と掛け合わせる。見事なまでのカウンターが成立した瞬間だった。

「なぜ…、貴様の拳が…」

ワイバーンギルデイは初めてもろに食らった拳に足をガタガタと震わせる。

確かにカウンターはブレイクシュートを放った時もやった。だが、あれは後ろに下がりながらのカウンター攻撃だった。

だが今度は相手の全力から逃げずに、己も全力で踏み込んでの、真正面から立ち向かった上で顔面への一撃だ。ワイバーンギルデイの力を込めた拳がカウンターによって倍になって顔面に返ってきたのだ。そこに、ダメージは確かにあった。

「だが…、まぐれは続かん!」

ワイバーンギルデイはキツと睨み、手刀の構えでテイルファイヤーの顔を狙う。

「まぐれなんかじゃ…ねえ!」

先ほど打ち込んだ右拳を戻して、籠手部分をスライドさせ、回転させる。

「飛ばす拳か! それは俺には…」

「効かない、だろ?」

分かっているよ、そう言いたげにニヤリと笑ったファイヤーは回転させたままの右拳を手刀へとぶつけた。

ギイイイイン!! 拳が触れ合った瞬間、バチバチと両者の属性力がぶつかり合い、金属が削れる嫌な音がする。だがしばらくの間拮抗していた拳が、徐々に徐々にワイバーンギルデイが押し始める。

「ぬ、がああああ…!」

だが、押しているにも関わらず、ワイバーンギルデイは苦しそうに顔を歪める。

何故か? …それは異常なほどの高回転で回り続けているテイルファイヤーの右手のせいだ。射出せずに高回転するそれは単なる拳ではなく、今は鋼鉄を貫くドリルの役割を果たしている。そして、その際に生じる摩擦のせいで異常なほどの熱気がワイバーンギルデイの手を襲っているのだ。

「う、ああああああ!!」

そしてテイルファイヤーの叫びと共に、右手にある装甲が放熱の為に展開すると、その拳が燃え上がり、ワイバーンギルデイの爪を根元まで砕いた。

「ぬぐあああああ?!」

悲鳴と共に、たまらず引火した手を押さえながらワイバーンギルデイは後ろへと下がる。

(逃がすか…!)

テイルファイヤーは冷静に深追いせずに狙いを定め、まだ高速回転を続ける右手を先ほどのお返しと言わんばかりに射出する。

「ブレイクウウシュートオオオ!!」

大声で叫びながら燃える拳を放つテイルファイヤー。

だがその技は最初に放った技とは違った。摩擦で生み出された炎

が回転によって広がり、炎の渦を生み出していく。そして、その渦が前方へと進むにつれて竜巻へと変わっていく。

「うぐおおおおおおお!!」

炎に飲まれたワイバーンギルデイは身体が燃えながらも、脱出する。

だが、攻撃はまだ終わらない。

「まだだああああ!!」

「!」

接近し、更なる追撃を凶ろうとするテイルファイヤー。だが、ワイバーンギルデイもそこまでは許さない。

「そこ、までだあ!」

ギシギシと全力で右手を握り絞めるワイバーンギルデイ。高速回転するこれがお気に召さないようだ。

「捕まえたぞ…!…これで貴様の奇術もここまでだな!」

…ああ、そうさ。右拳は封じられたな。

でもさ、俺の心が、ツインテールが叫んでいるんだよ。ここで終わるのは早すぎるってな!

「ファイヤーウオール!!」

左拳を握り、防御用の技を使う俺に怪訝そうな顔をするワイバーンギルデイ。

「ただし、左手だけええええ!!」

炎の防壁を作り出し、左拳をバリアで固めた拳で殴りかかろうとするファイヤーに、マズイと離脱しようとするが、右腕を握りしめ返し、逃がさないように抑え込む。

「こいつ…!?!」

先ほどの火炎で火傷を負った部分をもう一度拳で勢いよく殴る。左拳は、バリアの強度が加わることでバンテージで固められたような強固な拳となった。

ドゴン! ドゴン!! ドゴン!!! 2発、3発と繰り返される拳に、

ワイバーンギルデイの膝が震え、倒れそうになる。

「人間如きが…凶に、乗るなあああ!!」

右腕にしがみ付いていた俺は、力任せに投げつけ、放り投げられた。そして、その勢いのままコンクリートに落とされ、その上を転がった。敵を吹き飛ばしたワイバーンギルディ。だが、その行動は近づけたくないという気持ちだが、即ち拒絶の感情が見えるということだ。

その証拠に、先ほどの猛攻からの恐れからか、顔が曇っている

「はあ…はあ…まだ、まだ！」

「ぬうっ!？」

そして、むくりと立ち上がったテイルファイヤーに対して、明らかに表情を歪めた。

「人間如きが、生意気に！」

「人間を、舐めるなよ!!」

前へ前へ。焦るワイバーンギルディに対して、一直線に向かってくるテイルファイヤー。

拳と拳が交わり、その衝撃で互いの属性力がぶつかる。ツインテール属性と手^{ハンド}属性。互いが生み出す強大な属性力が原因で、触れるだけでダメージが両者を襲う。

「とつとと…沈めえ！」

「!!」

握りしめた両手で、テイルファイヤーをハンマーのように叩きつけて地に沈める。テイルファイヤーは大の字になってコンクリートに叩きつけられた。

「まだ、だあ!!」

だが、すぐさま立ち上がって、反撃を再開する。

(何故だ…何故倒れない!?)

ワイバーンギルディは訳が分からなかった。ボロボロなのは明らかにテイルファイヤーだ。アンダースーツは破れ、素肌のあちこちが露出している。あれほど評価していた手も、煤と泥で汚れまくっている。装甲もヒビが入り始めている。これほど満身創痍という言葉が似合う相手がいない。

それなのに、なぜ立ち向かってくる? 叩きのめしても、吹き飛ばしても、奴はすぐ立ち上がる!?! 奴は何故その燃えるような目を辞めな

い!?

(何故だ、何故? 何故何故何故!?)

弱い存在。そう決めつけていた人間が何故立ち向かってくるのだ!?!その焦りが拳を鈍らせ、更なる攻撃を貰う。

勿論、テイルファイヤーだって苦しくない訳がない。動いたびに、苦痛で顔が歪んでいく。

(まだ、倒れないのか...!)

両者が放つ拳がぶつかり、テイルファイヤーの右拳装甲にヒビが広がる。...それでも、進撃を辞めなかった。

いつかレイチエルが言っていた。「属性力は心の力だ」と。それを糧にして、テイルギアは動いている。そしてテイルギアはその心の力を推進力に、パワーを発揮する。それは正に意志の力を表現できるデバイスなのだ。

折れない心が、力となり、体を動かしていく。そして、今の光太郎はまさしくその状態に入っていた。

ツインテールがテイルファイヤーの背中を押しているのだ。数々の武装の応用技も無意識の内に編み出していた。前へ進むテイルファイヤーをまるでここを打て、こう使えと語りかけている。

「ぐうっ...!」

左手の装甲が軽い爆発を起こし、煙を上げた。それでも止まらない。い。

(前へ...突き進む!!)

繰り出された攻撃を受け流して、懐に入る。

夢の中でのツインテールは言った。ツインテールが強いのは、2つの髪が人間の足ののように、前へと進んでいるからだ。そして人間は言った。俺は『どうしたいのか』と。

だから、俺はこう思ったんだ。戦いたいって。勝つ負けるとかじゃない、戦うのだ。暴力とか喧嘩とか苦手だけど、それでも戦いたい。カッコ悪くても、無様でもいい、前へ進みたいのだ。俺の焰色のツインテールのように熱く、強く。そして、今の俺を支えている、ツインテールの為にも、戦うのだ!

そして、この意志はこの戦いで更に洗練されていく。こんな素晴らしい髪を奪う権利なんて、お前らにも俺にも、誰にもないのだと!!
今まで曖昧で、何ができるのか分からないまま来ていた。でも今日の戦いで折れかけた決意が、覚悟が生まれ変わった。ハッキリしたんだ：俺がどうしたいのか、何をすべきなのか！

「お前を倒して、皆も、ツインテールも守る!!」

―それが、俺の、本当の『どうしたいか』という感情なんだ！

テイルファイヤーは踏み込んだ勢いで肘鉄を食らわせ、ワイバーンギルデイを吹き飛ばす。

（お前には分かるか、ワイバーンギルデイ!! 手しか執着しないお前に、誰かを守りたいと言う信念が、思いが―）

遠方に吹き飛ばされたワイバーンギルデイを一瞥するテイルファイヤー。

「ぐっふっ…!!」

ワイバーンギルデイはボロボロの身体を必死で動かしながら、初めに対峙した時のように向き合う。

「ぐっほっぐっほっ…!!」

対するテイルファイヤーも咳き込みながら右腕を押さえ、満身創痍で向き合う。：多分、これが最後の一撃となるだろう。俺の煤だらけのツインテールが、そう知らせてくれる気がした。

「…行くぞ!!」

俺が先に踏み込んだ。先手必勝、前へと突き進む。もう握ることすら難しい右手をグーの形にする。

「来おい、人間!!」

ワイバーンギルデイは焼け焦げ、爪が砕けた右手を握った。血が滲み、握る事すら苦痛であろう右手を握る。

「おおおおおおお!!」

「ぬっっっっっっっ!!」

赤き戦士の拳と翼竜の戦士の拳が、空中で交差した。互いをかすめた拳は火花を散らしながらすれ違い、それぞれの顔へと向かう。

「…!!」

…グシャア!! そのぶつかった音は、何の音なのか? 拳が潰れた音か、装甲が砕けた音か、それは分からない。だが、土煙が晴れ、徐々に姿が見えていく内に、確実に分かることがあった。

「おい、あれ!」

「ああ!!」

それは、テイルファイヤーの右拳がワイバーンギルデイの顔面にめり込み、ワイバーンギルデイの拳がテイルファイヤーの顔面数ミリ前で止まっていたことだった。

「クロス…カウンター!!!」

その光景を、観戦していたレイチエルが叫んだ。相手の打撃に合わせて顔を打つカウンターであり、相手の拳と自分の拳がクロスすることから呼ばれる技、それがクロスカウンター。その拳は深々とワイバーンギルデイを捕えていた。

そして、拳を突き出したまま静止していたワイバーンギルデイが、ズルズルと膝が折れ、完全に地面へと倒れた。

「た、倒れた…」

「お、おお…」

先ほどまで黙っていた野次馬たちがざわざわと騒ぎ出す。そして、テイルファイヤーの突き出した拳がだらんと落ち、右手の籠手が砕け散った。

「俺の…勝ちだ、ワイバーンギルデイ!!」

テイルファイヤーの高らかな声が響き、遂にこの戦いの勝者が誰なのか、ハッキリと分かった。

この戦いを制したのは、最後まであがき、突き進み、ワイバーンギルデイが劣ると馬鹿にしていた人間だった。

第17話 決着、ツインテール

(俺、は…)

ワイバーンギルデイは目を開けた。まぶたが酷く重く感じる。そして、周りをゆっくりと見渡した。

まず見えたのはボロボロの腕だった。所々焦げており、爪は砕け、何か所も切れている。出血も多いのか、頭がボーとする。

次に感じたのは全身に走る激痛と背中から伝わるコンクリートの感覚と冷たさ、人間たちの歓声だった。

そこでようやく、自分が倒れているのだと気づいた。そして、この戦いの結末にも。

(負け、たのか…人間に…)

ギリツと歯を食いしばる。…悔しきは当然あった。

アルティメギルという組織の中で若きエリート の地位を欲しいままにしてきたワイバーンギルデイはあらゆる勝負に勝ってきた。戦闘も、営業も、同僚との地位争いにも。その実力と、自信過剰な性格で全てをねじ伏せてきた。

いつしか負けることが無くなった彼はどこか傲慢に、いじらしくなっていたのかもしれない。自分は強い。最強だと。やり方次第では上司であるドラグギルデイをも倒せると調子に乗っていたこともあった。だから、人間如き、たかが小さな生き物に遅れを取ることもどないのだと、ずっと思っていた。

『まだだああああ!!』

だからこそ、ワイバーンギルデイには理解できなかつた。どうして、目の前の小さな生き物がまだ生きて、立ち上がるのか、理解できなかつた。

目の前にいる人間は違う。幾度となく自分の前に立ちはだかつてきた、この女は違かつた。

何度叩きのめし、必殺の拳で吹き飛ばしても、不死身であるかのごとく立ち上がってきた。自分の自慢の腕さえも撃ち砕き、敗北へと叩き落とそうとしていた。

『来おい、人間!!』

そして最後のクロスカウンター。…あの時、自分は勝利を確信していた。奴の拳のリズムは何発も食らっているから分かっている。だから、同じタイミングで踏み込み、拳を打ち込めば勝てる、思っていた。

だが、最後の一步を踏み込もうとした最大の局面で——迷いが生まれた。

ここで打って、あいつがまた立ち上がってきたら…？ 俺は勝てるのか？ いや、そもそもあいつがこのことを予測して、リズムを変えてきたら…？ いや、そんなはずはない相手は人間だぞ？ しかし…あの目は何だ？ あの燃えるような目は…何だ!?

湧き出る恐怖心と自身のプライドのせめぎ合い。それが一瞬、ほんの一瞬だけ、動きを鈍らせた。

『おおおおおお!!』

テイルファイヤーは迷わなかった。目の前の敵を倒す。ただそれだけの目的の為に、身体を、心を、焰色のツインテールを揺らして、走る。

——そのほんの一瞬が、勝負を分けた。自身の有り余る傲慢さが崩れに崩れ、そして亀裂を入れ、バラバラに打ち砕かれた。

『人間よりも上だという傲慢さ』。それがワイバーンギルデイの強さでもあり、弱点でもあった。その弱点を突かれ、ワイバーンギルデイは敗北したのだった。

「ハ、ハハハハハ…!」

乾いた笑い声がレインボーブリッジに響き渡った。何人かはギョツとした顔でワイバーンギルデイを見る。まだ生きていたのか、といった驚きなのだろう。事実、殴り倒したテイルファイヤーですらも驚いた顔をしていた。

「見事だ…人間、いや…：テイルファイヤー…」

ワイバーンギルデイは目の前で立ち尽くしているテイルファイヤーを見ながら、フツと笑う。

「負けた、完膚なきまでに、俺の、負けだ」

途切れ途切れのその言葉だが、その言葉は野次馬たちにもはつきりと聞こえた。

敗北宣言。今まで傲慢なことばかり言っていたワイバーンギルデイとは思えない発言に、皆が戸惑った。

「なるほどな……これが隊長の言っていた人の強さ、か」

ワイバーンギルデイはポツリと呟いた。

我々にはない物を持っている、ドラグギルデイ隊長はそう言った。そのことを始めは意味が分からなかった。

でも今なら分かる。人間は確かに弱い、道具を使わなければアルティメギルにも立ち向かう事もできないちっぽけな存在。けど……弱いからこそ、劣っているという訳ではなかった。

弱いからこそ、ちっぽけだからこそ、前に進め、変わることが出来る。弱いから……未熟だから、強くなりたいと思え、成長できる。

ティルファイヤーが、この戦いを通じて、俺に勝ったように。だからこそ、人という生き物は属性力をその身に宿すことができるのかもしれない。

始めから超越した肉体を持つ自分たちアルティメギルとは違った強さ、心の強さを、人間は持っている。

「だが、な……」

グググ、とワイバーンギルデイは自分の体に鞭を打ち、無理矢理立ち上がった。ワイバーンギルデイ自身、どこにここまでの体力があるのか、分からなかった。

「だからこそ、俺は貴様に……」

一步一步、弱弱しくも歩き始めたワイバーンギルデイ。踏み出すたびに痛みが電流のように身体を走るが、それでも止めない。

それはワイバーンギルデイに残された、最後のプライドであった。心を完全に砕かれた上で、その肉体までも、バラバラにはされたくはなかった。そんなことは、戦士として、絶対に許すわけにはいかなかった。

「倒される訳には……いかない」

戦いには必ず勝者と敗者が生まれる。必ず、どちらかが消えなければ

ばならない。だが、自分は生き残ってしまった。戦う相手の人間に負けた。だから、この戦いの幕を引く方法は、敗者である自分が自ら命を絶つしか残っていないかった。

「俺は…ゲホツ、戦士、ワイバーンギルデイだ…!」

もう、これしか方法は残っていないのだ。ワイバーンギルデイは自分にそう言い聞かせるように拳を握りしめ、テイルファイヤーと向き合い、笑った。

「…おい!」

テイルファイヤーはワイバーンギルデイが何をしようとしているのか気づき、駆けだした。

しかし、テイルファイヤーの到着より先に、ワイバーンギルデイはレインボーブリッジから後ろ向きに身を投げた。彼の後ろにあるはずの防護柵は、戦いの最中に壊れ、跡形もなくなっていた。

「さらばだ…テイルファイヤー…」

その眩きと共に、ワイバーンギルデイの身体は音もなく、落ちていった。

(申し訳、ありません…隊長)

最後にそれだけを思い…翼竜の戦士、ワイバーンギルデイは東京湾へと姿を消した。そして、彼が着水した直後、凄まじいまでの水柱が天を昇った。

※

戦いは、俺たち人間の完全勝利に終わった。

あの後、レイチエルから聞いた情報によると、テイルレッドは現れた2体目の怪人との戦いを制し、無事生き残ることができたらしい。どうやらあちらも本気でレッドを潰そうとしていたらしく、多くの戦闘員を戦場に投入していたらしいが、ブルーがまとめて全員倒してしまっただけらしい。

本当は俺も戦いに加わりたかったのだけど、装備もボロボロで使えない物にならなかったし、これ以上変身できるかどうか怪しいほど疲弊し

きつっていた。だから焦ったような声で「これ以上戦うな！」と怒られてしまった。

話を聞くと、レイチエルはあの現場で俺の戦いをずっと見ていたらしい。だから俺の身体状態がヤバい事になっていると判断したらしく、早く帰って寝ろ！ と一喝されてしまった。

「…」

あの戦いの後、満身創痕の身体を引きずって、家まで帰ってきた。たった数時間しか家を空けていないはずなのに、まるで何日も帰っていないような不思議な感覚がした。

そして明かりをつけなままベッドで横になって、色々考えていた。あの戦いのこと、今後のこと、そしてワイバーンギルデイのこと…。内容があり過ぎて、頭の中がグルグルする感覚がした。

(どうして、あいつは…)

自ら、命を絶ったワイバーンギルデイ。何故あいつは俺に倒されることを拒んだのだろうか…？

奴が見下していた人間の手で倒されるのが嫌だったのだろうか？ それとも、自爆という奴なのだろうか？ …どちらにせよ、原因は分からない。あいつは俺の前から姿を消してしまった。真相は永遠に闇の中だ。…だから、もやもやするのだ。

と、ここで玄関の扉が開いて、誰かが入ってきた。振り向きはしなかった、誰が入ってきたか足音で既に分かっているからだ。

「ただいま」

「…ああ、おかえり」

靴を脱いで、家に入ってくるレイチエル。すっかりこのやり取りも定番と化していた。

レイチエルはパチンと明かりをつけてくれた。蛍光灯の光で突然部屋が明るくなり、目に染みたが、それでも俺は横になったまま微動だにしなかった。

「…どうしたの？」

そんな俺の様子が気になったのか、声をかけてきたレイチエル。どこか身体の調子が優れないのか？ という意味で聞いているらしい。

「ああ、いや。ちよつとな…身体は大丈夫だ。特に異常はないよ」

「…あいつのこと？」

「…うん」

あいつとは説明するまでもないだろう、ワイバーンギルデイのことだ。レイチエルはベッドの端にそつと座った。

「…あいつらは私たちとは違う生き物よ。行動原理も違ければ、誇りも、信念も違う。私たちとは価値観が違っていても不思議ではないわ」

「けどさ…」

「気になるって？」

俺は無言で頷いた。アルティメギル、変態な奴らだけどこか人間臭い種族。誇りとか信念とか、どこか奴らは間違っている方向に進んでいる気がするけど、それでもどこかしら俺たちと似ている生物。…だけど、その行動には、理解できない部分も多い。今日のあの身投げがその最たる物だ。

「まあ、どちらが正しくて、何が間違っているのかとか…私には分からないわ。あんたのことがあんたにしか分からないように、あいつの価値観はあいつ自身にしか分からない。あいつにとっては、あそこであししたのがあいつの価値観なんでしょうね」

レイチエルは「だけどね」と続けてくれた。

「あんたは、あいつの魔の手から、この世界の日常を守ってくれた。それだけは紛れもない事実よ。…だから、自分の行動に自信を持って頂戴」

レイチエルはそつと俺の手を握った。…でも、その手は震えていた。

「今日の戦いは、あたしの世界と同じようになるかもしれない戦いだった。…あんたはそれを退けてくれた」

「いや、俺は…」

俺は喋ろうとしたが、レイチエルはそれを制した。…何故か身体も震えていた。

「だから…ありがとう。あの時、立って、くれて…。私、凄く、しん、

ばいしたんだから…！」

レイチエルは言葉を打ち出しながら、ぽろぽろと泣き出した。シートの上にぼたぼたと涙が落ちていく。

テイルレッドぐらいの身長で俺よりも年下に見えるのに、いつもどこか生意気にしている普段のレイチエルからは考えられないような姿に、少しばかり俺はショックを受けた。いつも生意気に笑っているあいつとは思えなかったのだ。

「わたし、倒れているあんたを見て、とんでもない戦いに、あんたを、巻き込んじゃったって…。わたし、もう、いやなの…あんなこと、いやなの…」

レイチエルは機関銃のように、弱みを吐露していく。

俺はグスグスと涙と鼻水を流すレイチエルの背中をそつとさすった。…やはり、レイチエルも人の子なのだ。

俺が殴られて、傷つく姿を見ていて、ずっと辛かったのだろう…。誰かがボロボロに傷つくのが、嬉しくてたまらない人間なんているはずがないのだ。

「うん…分かったから、大丈夫だからさ」

「ほんと？」

レイチエルが呟く声は、自信を欠いたように聞こえた。

「うん、大丈夫だよ。…だって、俺、テイルファイヤーだからさ」

「…なによ、それ」

それから、しばらくの間、しゃくりあげるレイチエルの背中をそつとさすってあげた。まるで保護者になった気分だった。

※

観東家の地下にある秘密基地。その片隅にある一室では、タワーがネグリジエ姿で机に座っていた。

先ほど総二を誘惑しようとするの恰好で総二の部屋に待機していたのだが、どこから入ってきたのか、愛香に止められ、追い出されてしまった。

何度か肩関節が外されたが、自力で戻せるあたり、トゥアールもだいぶ慣れてきたんだなあとしみじみに思う。

（ああ、総二さまの初めてを奪おうと思っていたのですが…！）

愛香対策用に開発したメカ『アンチアイカシステム』も粉々に粉碎されてしまったし、更なる対策法を考えなければ…。

ぼんやりとそんなことを思いながら、トゥアールは部屋に備え付けてある小型の冷蔵庫からジュースを一本取り出し、部屋のモニターをつけた。そして、セットしておいたビデオを再生する。

「…」

クイツとジュースを口に含みながら、モニターを見るトゥアール。…こうして見れば、結構な美人であるのだが、彼女の痴女っぷりがその美しさを帳消しにしているのが何とも悲しい。

モニターには夕方のワイドショーの映像が映し出された。途中から録画したので、中途半端な所からの再生となる。

『…レインボーブリッジでは、つい先ほどまでテイルファイヤーとアルティメギルとの戦いが繰り広げられました！ テイルファイヤーは勝利しましたが、舞台となったレインボーブリッジは破壊された箇所が酷く、修復に時間がかかるとのこと。観光会社からはツインテイルズの新たな聖地として、観光に利用』

トゥアールは映像を止めた。

テイルファイヤーとワイバーンギルデイの戦いの舞台となったレインボーブリッジ。その映像の奥、野次馬たちが映っている中で、わずか一瞬、とある少女の顔が映し出されている。

映像は小さく、拡大とノイズを除いても荒れているが、トゥアールの目には判別がついた。あの少女を、トゥアールが見間違えるはずがなかった。

「…レイ、チエル」

トゥアールの手が自然と力が入った。彼女の手の中で握りつぶされたジュースの缶が、悲鳴を上げていた…。

番外編 設定資料集（1巻終了時点）

登場人物紹介

丹羽光太郎／テイルファイヤー

私立陽月学園高等部に通う高校一年生であり、今作の主人公。身長は164センチメートルで体重は54キログラム。

表向きはどこにでもいる平凡な男子高校生だが、実は少女向けの髪型、ツインテールをこよなく愛する男。：が、そんな趣味がどこかおかしいことに自分でも気づいており、ツインテールフェチで変質者扱いされるのを恐れるあまり、そのことを周りに隠しながら生活している。

ここが本編の主人公の総二との決定的な違いであり、光太郎は自分がそんな趣味を持つていることがどこか恥ずかしいと思っている。日常生活ではその有り余るツインテール愛を普段は無理矢理押さえつけているが、見事なツインテールを見ると、自分でも押さえつけられないほど興奮してしまい、その度に自己嫌悪を起こしてしまう。：そんな彼だが、ひよんなことから女体化して、ツインテール戦士テイルファイヤーとして戦っていくことになってしまったのだ。

：と、どこかネガティブな設定だが、本来の光太郎は快活にして向こう見ず、優しい所もあればどこか抜けたところもある、どこにでもいるような普通の少年である。

テイルファイヤー

光太郎が変身ベルト「テイルドライバー」で変身するツインテール戦士。メインカラーはテイルレッドと同じ赤だが、こちらの方は装甲に炎のようなペイントが随所に見られており、メインカラーの赤もレッドとは違い、深みのある焰色となっている。

身長と体重は変身前とほぼ変わらず、スリーサイズは上から82／56／82。

光太郎が変身すると、総二と同じように女体化するが、あらかさまに小さくないも大きくもない、適切なサイズであるがゆえの美しさをもつスタイルへと仕上がる。（その所も開発者であるレイチエルの

趣味が反映されているのかもしれない)

レッドやブルーなどトウアールが開発したギアとほとんど同じだが、外見など細かな違いがある。最大の違いは、剣や槍といった手持ちの武器を一切持たずに己の拳一つで戦う格闘戦スタイルを展開するという事。

その為、テイルファイヤーのスペックは超近接戦特化仕様になっており、近接戦では圧倒的な戦闘力を誇るが、中々遠距離からの攻撃にはめっぽう弱いという欠点を持つ。一応、左腕のバリア『ファイヤーウォール』と右腕に仕込んだロケットパンチ『ブレイクシユート』、並外れた身体能力でその欠点を補っている。

基本的な戦術は『やられる前にやれ』であり、常に敵に張り付いて、拳を放つ格闘戦一本スタイル。一応、属性玉も使えるのだが、本人はあまり使わない。(そんな暇があったら、殴った方が早いから)

世間からの人気はテイルレッドと同じくらいあり、メディアの扱いも上々。世間からは「お姉さま」だの「テイルファイヤーさん」という呼び名が定着している。

その外見はテイルレッドと非常に似ているが、はたしてこれは何を意味するのだろうか…？

1巻までの人物関係 レイチエル

同居人にしてパートナー。戦闘面では頼りにしている一方で、日常面では何かを隠している彼女を心配している。今の所、彼女には特別な感情を抱いていない。

観束 総二(みつか そうじ) / テイルレッド

クラスメイトであり、同じくツインテールを愛する者。当初は接点こそ無かったものの、はちやめちやな日常生活を通して彼と関わることになる。

光太郎自身、彼がテイルレッドの正体だとは夢にも思っていないく、テイルレッドの正体を可愛い女の子だと本気で思っている。

その為、戦いに出るレッドを心配することもあつたが、フォクスギ

ルデイの戦いでレッドを『戦士』として認め、共に戦った。

津辺 愛香（つべ あいか）／テイルブルー

クラスメイトであり、光太郎曰く「凄まじいツインテール」の持ち主。基本的には良い人だと思っている。

レッドと同じく、テイルブルーの正体が彼女だとは夢にも思っていない。

ブルーからは「どうしてここまで世間の人気に差が開いてしまったのか」「あんたさえいなければ」と嫉妬されており、ファイヤーは一刻も早く彼女との仲を修復したいと思っている。

アルティメギル

愛すべき変態たち。テイルファイヤーとテイルレッドとの関係は「姉妹派か親子派か」で激しい対立が起こっている。

夏にはこの2人の薄い本が大量に作られるみたいだ。…いいぞ、もつとやれ。

※

レイチェル

年齢、誕生日共に不詳。身長は128センチメートルで、体重は34キログラム。スリーサイズは上から73／57／75となっている。

自分の元いた世界がアルティメギルの侵略に会い、仇を討つために光太郎の世界へとやって来た科学者。幼女であり、性格はどこか勝気で生意気。

年上？ である光太郎を呼び捨てにする、勝手に人の家にかかるなどといった行動を平然と行うが、少なくともトウアールのように変態的な行動はしない。

主に裏方全般を担当し、ドライバーの整備や戦闘中のアシスト、新装備の開発を一手に引き受けている。

幼女とは思えない天才的な頭脳を持ち、光太郎の変身アイテムである『テイルドライバー』も彼女が作り出した。…が、テイルファイヤー

の武装やスペックが格闘戦一本に特化していたり、適切なスタイルで美しい女性に変身するのも「私の趣味」で済ましてしまうあたり、やはり科学者お約束の「馬鹿と天才は紙一重」を地でいく人物なのかもしれない。

総二たちをサポートする女科学者、トウアールとは何らかの因縁があるらしいのだが…？

※

ヘツジギルデイ

今作オリジナルのエレミアンであり、ハリネズミ型の怪人。私立陽月学園初等部の校庭でテイルファイヤーと戦いを繰り広げた。

子供好きであり、特に女子小学生が好き。でも、ロリコン的な好きではなく、思春期を迎えたばかりの女の子の甘酸っぱい行動が好きらしい。

所持する属性力は尖照ツンデレであり、ツンデレの如く固い防御力を持つ怪人。

だが、固いのは外見だけであり、中身はデレデレで柔らかい。その為、テイルファイヤーの武装、『ブレイクシユート』で貫通、敗北となった。

ワイバーンギルデイ

今作オリジナルのエレミアンであり、アルティメギルの若手ナンバーワンの実力を持つ翼竜型の怪人。レインボーブリッジでテイルファイヤーと死闘を繰り広げた。

属性力は手属性ハンドであり、その属性力を活かした強力な格闘技で戦う。

基本的に人間という存在を見下しており、若手ナンバーワンという地位からか自分が強いのだという意識やプライドが高い。その為、他のアルティメギルとは違い、人間を愛すべき存在ではなく単なる標的としか見ていなかった。

テイルファイヤーとの戦いでは当初は自分のペースに持ち込み、敗北寸前にまで追い込むが、不屈の闘志で立ち上がったテイルファイヤーに徐々に追い込まれていく。

そして最後のクロスカウンターをもらに受け、人間の強さを理解し、地に倒れた。その後、自ら戦いの幕を引く為に、レインボーブリッジから身を投げる。

…だが、彼の生きた証である手の属性玉はまだ見つかっていない。^{ハンド}どこかで生きているのか、それとも…？

※

第2巻編嘘？ 予告

※この予告は「例のあの声」と「あのBGM」で再生してください。^{い。}

次回予告

君達に最新情報を公開しよう！

トウアールが開発した新型のテイルブレスを欲し、プライドを捨てて懇願する愛香。それは何故だ？

そんな中、敵もまた2つの新たな軍団を呼び寄せていた。

巨乳派と貧乳派、この終わりなき争いはどこへ向かうのか!?

The Another Red Hero ネクスト! 『滅ぶべき胸囲』

次回も、このチャンネルでファイナルフュージョン承認!!!

これが勝利の鍵だ!! 【巨乳属性^{ラージバスト}】

第2巻

第18話 始まりのツインテール？

メイド長、桜川尊（さくらがわ みこと）の朝は早い。日が昇るか昇らないかの時刻に起き、朝の細かな支度をする。時には自分より下のメイドに激を飛ばす。そして、日が完全に昇ると同時に、自分の仕えるお嬢様を起こしに行くのが、毎朝の仕事だった。

だが最近、そのお嬢様が中々起きてこない。寝坊したり寝過ごしたりと、生活サイクルに多少の乱れが出てきている。

このことは周りのメイドも不思議に思っている。規則正しく、礼儀正しくを絵に描いたようなお嬢様が何故？

説は色々あった。お嬢様はそろそろあつちのことに興味を持ち始めたとか、生理とかじやないのかとか、お母様と同じようなあの兆候が見え始めているのではないかとか…。

尊から言わせてみれば、どれも的外れだ。お嬢様があつちのことに興味を持ち始めたのは中学に上がってからのことだし、生理はまだ来ていないはずだ。主人に仕える身としては、生理のサイクルくらいは把握しておかねば話にならないからだ。

お母様の兆候は…まだ見え始めていないが、尊自身、ああはなつて欲しくないというのが正直な意見だった。あの人もあの変な性癖さえなければ凄くいい人なのに…。お嬢様のお父様も、その…色々とあれだし。

「お嬢様、朝ですが…」

コンコンコン、と扉をノックする。反応は無し。…やはり、あれをやっているのだろうか。

「失礼します」

その言葉と共に部屋に入った尊はああ、やっぱりといった顔をすする。席に座りながら、何やら作業をしているのは、自分が仕える幼き少女。高校2年生なのに、どう見ても小学生にしか見えない幼き風貌。生徒会長にして、学園のアイドルとして皆から優しい目で見られ

ている少女。

そして一番に目につくのは、その金髪のツインテール。まるで絵本に出てくるお姫様を想像させるようなその柔らかな髪は、もうすぐ三十路に入ろうとしている尊にとって憧れの象徴でもあった。

「ふーん、ふふふくん♪」

ヘッドホンを耳に着けながら、鼻歌交じりでチヨキチヨキと鋏を動かしている少女、その名は神堂慧理那。それが桜川尊にとって仕える主人である少女だ。

「お嬢様……」

もう一度、今度は声のトーンを張り上げて、慧理那に呼びかける。すると、ようやく気付いたのか、こちらを振り向き、驚いたような顔をする。慌ててヘッドホンを外して、何事もなかったように、慧理那はこちらを向いた。ヘッドホンからは慧理那お気に入りの曲が流れていた。

「ど、どうかしましたか、尊？」

「もうすぐ朝食です、お呼びに上がりましたのですが……」

「……ああ、もうそんな時間でしたの」

「ええ、もう朝の7時です。そろそろ食べないと、遅刻してしまいます」

そう言うと尊はチラリと机の上を見た。そこには慧理那が最近躍起になっている作業の形跡があった。

机に積まれているのは新聞と雑誌、ニュースサイトから印刷した情報報の山。鋏が転がっているのはその中のある記事を切り取っているからだろう。そして、黄色い表紙のスパイラルノートには、それらの記事が丁寧に糊付けされていた。それだけではなく、手書きの文字が細かく書かれていた。

スクラップ作業。慧理那がここ最近、躍起になっている作業はこれだったのだ。

「お嬢様の趣味に私はあれこれ言うつもりはありませんが……時間は守られた方がよろしいかと。お母様も心配いたします」

「……ええ、そうでしたわね。申し訳ありません」

ぺこりと頭を下げた慧理那は、机を片付けながら、一つの記事を手に取り、うつとりとする。

「綺麗、ですわ…」

とろんとした表情で記事の中にある写真を眺める慧理那。

それはテイルファイヤーとテイルレッドが手を組み、共に戦っているという記事だった。確か、キツネ型の怪人と戦ったときの記事だったはずだ。

しばらくそれを眺めた後、名残惜しそうに記事を机の中に閉まった。机の中には同じような記事がいくつもあった。

そう、慧理那はツインテイルズの熱心なファンだった。学園での演説の後、彼女は熱心にこういった記事集めから動画鑑賞、聖地巡礼などをを行っている。その度にあの忌々しい侵略者に狙われるが、ツインテイルズはことごとく慧理那を救出してくれていた。そのことには嬉しいのだが、慧理那に仕える身としては、気軽に散歩して欲しくないというのが尊の意見だった。

「では尊、行きましようか」

「ええ」

慧理那の部屋の扉が閉まり、廊下をテクテクと歩きながらも、慧理那はツインテイルズの話話を辞めない。

「尊、昨日のテイルファイヤーの活躍は見ましたか？ あのクロスカウター！ 私、彼女たちが本当に大好きで…」

全く、お嬢様のツインテイルズ好きには勘弁する…。そう思いつつも、尊の口元は緩んでいた。新堂家の一人娘として、肩ひじを張った生活をしている慧理那がこうやって何かに熱中できるものがあるということとは、嬉しく思うからだ。

(きつと彼女たちがお嬢様と同じツインテールだから、あれほど応援できるのだろうか…)

昔から続く優所正しき家系である新堂家には良く分からない決まりや家訓が多い。その一つが、一人娘である慧理那の髪型はツインテールであるのが絶対というものであった。

曰く、昔から続く伝統というが、そのせいで慧理那は自分の髪型が

あまり好きではなかった。そのせいか、ただでさえ幼く見える慧理那が子供向けの髪型であるツインテールのせいで更に幼く見えてしまうという悲劇が起こってしまった。自分の意志で髪型一つ変えることができない。それが慧理那のコンプレックスになってしまった。

だが、ツインテイルズが侵略者と戦い始めてから、慧理那の顔には笑顔が多くなった。

自分のコンプレックスであったツインテイルを力に変え、颯爽と戦うヒーロー。ツインテイルを愛し、それを守る正義の味方。日曜日の朝放送されている子供向けのヒーロー番組が好きな慧理那にとって、これほどマッチする組み合わせはないのだろう。

「ああ、何て素敵ですの…」

慧理那は顔をポツと赤くしながら、朝食の席へと向かおうとしていた。その顔はまるで恋する乙女のような顔をしていた。

※

「では、今日はここまで」

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響き、先生が教室を出て行った。その途端、生徒達は騒ぎ出した。ようやく訪れた昼休みをありがたく思いながら光太郎も一息つき、机の前に広げていたノートを畳む。

「でさ、昨日のあれ見た？」

「見たよ見た見た！ あのレインボーブリッジの戦いだろ!？」

「あのクロスカウンターは見事だったね！」

「それもそうだけどあのセリフに痺れた！ 『お前を倒して、皆も、ツインテールも守る』って！ カッコよすぎて血尿が出かけた!!」

「これ見て！ テイルファイヤーの新作モデルのアクセサリー！」

「いいなー、私もそれ欲しいんだけど…」

今日の授業を終えた生徒たちは昼食を食べながら話す話題のほとんどが、昨日のレインボーブリッジでのワイバーンギルデイの死闘

だった。やはり、というかもうネットに動画がばら撒かれてしまったらしい。

皆がメインとしている話題はファイヤーであり、レッドの話題があまり上がらない。その理由は、昨日戦いを繰り広げていた場所が山奥の採掘所の為、誰にも気づかれぬ内に倒してしまっただけではないかと光太郎は推測していた。

「やっぱり良いよなあ、テイルファイヤーさん。優しくて強くて…」
「俺なんてテイルファイヤーさんの顔写真を印刷したTシャツ着ているんだぜ？」

「馬鹿言うなよ、俺なんてパンツにファイヤーさんの素手を熱転写したんだぞ！ これでもいいでもファイヤーさんは俺の尻を触っていることになるんだ！」

「その気持ちは分かる！ もはや一緒にいないと学業もままならないもんなー！」

「…まあ、お姉さま！ 私と夜のボクシングをしてくるんですか！？」
あ、いえいえ、私がサンドバック役になりますので、お姉さまはその進る拳で私を…」（繋がっていない携帯電話に一人で延々と話しかけている女子生徒）

…こんな光景が当たり前のように繰り広げられるようになってるのは、もう、どういふことなんだろう。そして、それに順応してしまっている俺もどうなんだろう。

人間の慣れという感覚は恐ろしいと思う。こんな異常なことを皆が口走るようになってから、はや一ヶ月弱。最初はいちいちツツコミを入れなければやってられないと感じていたのに、今になってくるとそれが日常のBGMになってきているのだ。もう今では馬鹿馬鹿しくて騒ぐ気力も湧かない。

世界の平和を守って、彼らがいつも通りの日常を過ごせるのはいいのだが、こう…もう少しだけでいいんだ、その騒ぐ気力を勉学や何かに注ぎ込めないのだろうか。

「なあ、光太郎」

と、ここでこの学園の中でもかなりまとまな部類に入る生徒にし

て、俺の数少ない友人、観束総二が弁当を抱えながらやってきた。総二は空いている机に腰掛けながら、こつちを見る。

生徒会長の演説事件以降、総二とその幼馴染の愛香さんとはだいぶ仲が良くなった。やはりまともな感性を持つ者同士惹かれあうのか：俺たち3人は学校でもつるむことが多くなった。

ただ、愛香さんは何故かツインテイルズの話、特にテイルファイヤー関連の話題が出ると、途端に不機嫌になってしまう。テイルブルの話を出されるのも嫌みたいだ。：何でなんだろう？

「：どうしたんだ、総二？」

改めて総二と向き合う光太郎。すると総二は自分のカバンから何かを取り出した。

「何これ？」

「部活申請用紙だよ！」

満面の笑顔でそう答える総二。：確かに机の上に乗っかっている書類にはそう書かれている。

「でき、新しい部活の申請には部員がある程度必要なんだ。それでさ、名前だけでいいんだ、書いてくれないか？ 特に何かして欲しいって訳じゃないし、ほんとに名前だけでいいんだ」

部活申請用紙を覗き込む。：勧誘は上手くいっていないらしい。名前の欄には、総二と愛香さんの名前、そしてトウアールという見知らぬ生徒の名前だけが住所と共に記されていた。

「へー、ちなみに何部なの？」

軽い口調で聞いてみる。すると総二は満面の笑みでこう答えた。

「ああ、ツインテール部さ！」

：はい？ 不意打ちでデッドボールをくらったみたいなのがして、ポカンとした。

「つ、ツインテール？」

「ああ、ツインテール部さ。ちなみにこれ、部室のプレートな」

技術工作室で作ったんだ、と言いながら総二が取り出したのは明朝体で綴られた『ツインテール部』と書かれたプレートだった。

：無機質な文字で『ツインテール』と書かれているのに激しい

ギャップを感じてしまうのは何故なんだろう？ もつとこう…可愛らしい文字で書いた方がいいんじゃないかな？

「…総二、お前本気なのか？」

「ああ、本気さ。ツインテールに誓ってもいいぜ」

…いやそんな星条旗に誓うみたいに言われても。

呆れたような顔をする俺を尻目に、総二は真剣な顔をしていた。ここまで本気の顔をする総二を俺は見たことがなかった。

「大体何やる部活なんだよ、これ？」

聞く内容によっては、そそくさと立ち去ろうと、半ば覚悟しておく。

「ああ、あらゆるツインテールを研究し、見守る部活さ！」

「そうなのか」

総二の言葉を聞いて、俺は半分諦めたような顔をして、目を閉じた。そうなんだよなあ…こいつ忘れていたんだけど、結構な変人なんだよなあ…。入学式で盛大な地雷を踏み抜いた男なんだよなあ…。最近は大人しいと思っていたんだけど、遂におかしく…。

「そうかそうか。つまり、ああいうことをやる部活ってことなんだな」俺が指を指した方向には、奇声を上げて『でもやつぱりテイルレツドたんも可愛いよおおお!!』とか叫んだり、『お姉さまのクロスカウンターを私の顔に!』とか喚いている集団がいた。

「違えよ！ そういう意味じゃなくて…！」

残念そうな顔をして立ち去ろうとする俺を、慌てて総二は止めた。これでもかという程に全力で腕を引っ張られて、無理矢理椅子へと戻された。

流石の総二もあれと同類扱いされるのは勘弁願いたいらしい。俺だって嫌だけど。

「じゃあどういう意味なんだよ？」

…こんなくだらない部活の申請がそもそも通るとは思えないのだが…一応最後まで聞いておこう。

「いや…ツインテイルズのことだよ。彼女たちがどこから来て、何の為に戦うのか、そのことを解明する部活なんだよ」

「それってオカルト研でもやっている活動じゃ…」

「それ専門の部活って事さ。それにさ、こういうった活動を通せば、ツインテイルズの応援にも繋がると思わないか？」

：うーん。確かに今、陽月学園は小中高大一貫でツインテイルズファイバーが巻き起こっている。こういうった理由で立てられる部活が会っても、おかしくはないのか…？

「どうして俺たちを守ってくれるのかとかさ、もっと根源的なことが知りたいんだよ、俺は」

「…なるほど、ね」

まあ、確かに…。テイルファイヤーとして日夜活動する俺は、レツドやブルーが戦う理由はまだ明確に分かってはいない。俺とは違うテイルギアを使い、戦う戦士。何回か共闘しているものの、未だその正体も分かっていない。

：まあ俺とは違って、間違いなくその正体は可愛い女の子なんだろうな。男が性転換して戦うヒーローが俺以外にいてたまるかっただ。

(総二たちにくっ付いていれば、もしかしたら彼女たちに近づけるかも…?)

部員の中には凄まじいツインテールの持ち主である愛香さんもいる。もしかしたらの話だけど、活動を通すことでアルティメギルに襲われる可能性もでてくるかもしれない。そうなった時に、被害者の視点からツインテイルズに遭遇でき、彼女たちの目的や正体に近づけるかもしれない。

何だか騙されている感覚もするが、まあ…そもそも友人の頼みだしなあ。ひと肌脱いでやるとしますか。

「まあ…いいよ。名前だけでいいんなら、書かせてもらうよ」

そう言っつて、連絡先などを書類に書き込むと総二は嬉しそうな顔をする。

「サンキュー！ いやあ、ありがとう、持つべきは友だなあ！」

まあ、何と調子がいいことで。書類を片付けながら総二は嬉しそうに語る。

「やっぱり俺はさ、ツインテールが好きなんだよ。今まで恥ずかし

「いつて思っていたんだけどさ……！」

そうはしやぎながら身振り手振りしながらあれこれ喋る総二。その表情は凄く幸せそうだ。

：「やっぱり総二は羨ましい。そうやって自分の好きなことを正直に話せるんだから。俺も少しだけでいいから、そんな勇気があればなあ……少しは違うんだろうに。どうしても、あと一歩の所で……」

「じゃ、ここが部室だからな、暇な時があればいつでも来ていいぜー」
総二はこれから申請の手続きに行つてくると言つたと、慌ただしく立ち上がり、バタバタと教室を出て行つた。

※

「ふう……」

階段を下りながら、光太郎は腕に付けたテイルリストを見て時刻を確認する。日没までまだ余裕はあったが、蛍光灯がついていない校舎は薄暗く、気味が悪い。

「そろそろ帰らないとな……」

踊り場に足をつけると、近くの教室からバイオリンやサクソフの音が聞こえてきた。吹奏楽部の生徒たちが教室を使って、練習でもしているらしい。テンポを崩して演奏しているのが聞こえてくる。

それをBGMにしながら、通学カバンを背負い、廊下を小走り気味で歩く。早く帰らないとレイチェルの機嫌が悪くなるからなあ。あいつ、あんなに頭がいいのに、家事とかは全くできないっていうのがな……。せめて掃除くらいはできて欲しいんだけど……。

ボーと考え事をしながら歩いていたせいか、曲がり角から近づいてくる小さな人影に俺は気付くのが遅れた。普段なら、窓越しで見えるはずだったのに、この時ばかりは考え事で視界にそれが入つてこなかったのだ。

「うおっ!？」

「きゃあ!？」

チラリ、と見えた瞬間には遅かった。俺は曲がり角から来た子とぶ

つかり、無様に転んだ。ぶつかった衝撃で、背負っていた通学カバンの口が開き、中身がバラバラと廊下に転がった。

前にも、レイチエルの時にこんなことがあった気が…そう思いながら、俺はぶつかった子に謝ろうと顔を上げて…驚いた。

「生徒…会長？」

そう、何故なら俺がぶつかったのは、この学校の生徒会長にして、皆のアイドル、そして金髪に輝くツインテール。入学式で見とれてしまったあのツインテールの持ち主、神堂慧理那その人だったのだから。

「そ、その、大丈夫ですか!？」

あたふたと慌てながらも、俺は新堂会長を心配する。こんな光景を会長を愛でる上級生たちに見られたら何をされるか分かったもんじゃない。だから何事もないようお願いします、と神様に願いながら俺は神堂会長に近寄る。

(しかし、こう近くで見ると…会長って背が凄く小さい。レイチエルよりは…一回りは大きいけど)

近寄りながら様子を見ると、会長の身体には特に目立った外傷はなかった。会長はぶつかった俺を見ると、大丈夫だというディスプレイをして、立ち上がった。

「…ええ、大丈夫ですわ。私の不注意で、ご迷惑をおかけしまいました、申し訳ありません」

小さな体をぺこりと下げて、俺に頭を下げる会長。

「い、いえ！ お、俺が考え事をしていたせいで！」

「いえ、私が悪いのですよ。私も考え事をしていましたから…ええと、丹羽君、でよろしかったかしら？」

動機が少しだけ早まった。どうして会長が俺の名前を…？

不思議そうな顔をしている俺に察しがついたのか、神堂会長はクスリと笑った。

「ふふ、生徒全員の顔を把握するのは生徒会長として当たり前ですわ」

…生徒会長って凄い。俺はそう思った。会ったことすらない生徒の名前なんて普通は覚えられないものなのに。

「…あらう？ 荷物が散らばってしまいましたわね」

チラリと神堂会長が廊下を見ると、ルーズリーフやら筆記用具やら…俺のカバンから飛び出た荷物で辺り一面散乱していた。

「あ、これくらい大丈夫ですよ！ 全然、大丈夫ですから!!」

俺は全然大丈夫だよというアピールをしながら、慌てて散らばった荷物を集め始める。やばいやばい…カバンの中にはあれが入っているというのに…。

「いえ、私にも非があるのです、是非お手伝いさせてください」

しかし神堂会長は優しかった。自分にも責任がある、と言わんばかりの顔で散らばった荷物を一つ一つ回収してくれる。…本当なら、泣いて喜ぶ状況なんだろうけど、今はあまり嬉しくない。早い所回収して、逃げ出さないと…!

ノートや教科書を小さな手で回収していく会長。と突然、会長の手が止まった。

「こ、これは…?」

会長は驚いたような顔で、俺に何かを見せてくる。

そして、神堂会長が握っている物体を見たとき、俺は、顔から血の気が引くような気がした。

会長の小さな手にある物体…それは俺がテイルファイヤーに変身する際に必要なベルト、テイルドライバーだったからだ。カバンの中に入れていたそれが飛び出して、丁度、神堂会長の方へ転がってしまっただのだ。

「丹羽君。あなたこれは…?」

ヤバい、これはヤバい！ 俺は何とか頭をフル回転させて、それらしい言い訳を作り出す。

「こ、これは…そう！ テイルファイヤーのアクセサリーなんですよ！ 最近、この手のタイプ、よく見ますよね!？」

「え、ええ」

慧理那は昼休み、総二の腕につけられていたブレスレットのことを思い出していた。確かに今、ツインテイルズ関連の商品は一般でも販売されており、特にアクセサリー系が人気を博している。こういった

関連の商品を光太郎が持っていたもおかしくはないだろう。

「だから…それなんです！ 俺、テイルファイヤーさんのファンでして…本当は学校に持ってきてはいけないんですけど、その…」

まさか本物のベルトだなんてことは口が裂けても言えないので、それらしい言葉を並べまくってこの危機を脱しようとする。

「…そう！ 限定モデルのベルトが昨日手に入りました！ つい嬉しくなってしまったので、学校に持ってきてしまったんですよ！」

「ああ、そうでしたの…」

会長はどうやら納得したようだった。…良かった、何とか危機は脱せたか？

「…ですが、一つ忠告しておきます。派手なアクセサリーの類は我が校では持ち込みは禁止されていますわ。今回は嚴重注意としますが、次からは処罰の対象になりますから、気を付けてくださいね」

「は、はいー」

神堂会長は少しだけ厳しい顔をして俺に怒ると、すぐに笑顔に戻って、俺の手にテイルドライバーを乗せてくれた。

「それと…せっかくの限定モデルなので、あまり持ち運ばない方が賢明だと思えますわ。こういったものは傷がつかないようにするの…」

「は、はい。善処します…」

背筋に冷たい汗がたらたら流れる感覚をしつかり味わいながら、俺はその場から一目散に逃げた。

そんな光景を見ながら、慧理那はぽつりと呟いた。

「…しかし、あんなモデルのベルト、いつの間に販売されていたのかしら…？」

…どうやら新たな騒動の種が捲かれましたことに、光太郎も慧理那も、誰も気づく余裕はなかったようだ。

第19話 それぞれの夜

アルティメギルの秘密基地。地球侵略を目論むこの前線基地では現在、嵐の只中にあるような危機に見舞われていた。

「大変です、タイガギルディ殿が、ツインテイルズに破れました！」
「くっ…やはり、そうか…」

大会議室で沈鬱な表情で部下の報告を受けるエレメリアンがいた。雀のような外見をしながらも、どこか老いを感じる空気を発している戦士・スパロウギルディだ。冷や汗を顔に浮かべながら、亡くなったタイガギルディに敬礼をする。意気揚々と「ドラグギルディ隊長の弔い合戦に行つて参ります！」と言いに来ていた彼の姿が脳裏に浮かぶ。

ついこの間まで、ただの側近でしかなかったスパロウギルディは、今は地球侵略を企てる侵略部隊の長に出世していた。…いや、その言いは少し違うだろう。その出世は自分の実力が評価された出世ではなく、ほとんど押し付けられる形での出世だからだ。自分の実力などこれっぽっちも評価されていないのだ。

…ではそれは何故か？ それはつい前日、自分たちをまとめ上げていた屈強な戦士にして、本来の隊長であるドラグギルディが殉職したからだ。

最強の属性力であるツインテール属性をその身に宿していた隊長は、同じツインテール属性を持つ最強の幼女、ティルレッドに破れた。その事実はこの秘密基地にいる全員に大きな衝撃を与えた。

(…それだけでも、やっかいだというのに…！)

それだけでも驚きだったのに、次のニュースでエレメリアンたちは更に驚愕することになった。特に彼をよく知る若き怪人たちは耳を疑わざるを得なかった。

―若きエリート、ワイバーンギルディの殉職である。

それを聞いた時は、誰もが疑った。ワイバーンギルディの実力はここにいる誰もが認めていたからだ。

多少の問題行動を取ることも多いエレメリアンだったが、任務の成

功率はほぼ100%。それに伴う驚異的なスピードでの出世。…素行の問題は多少あったが、それ以上に実力があつた戦士、ワイバーンギルデイ。素質と才能はドラグギルデイ隊長をも上回っていたと断言できる程の実力を秘めた翼竜の戦士。そして、それを打ち破った焰色のツインテール戦士、テイルファイヤー。

彼が得意とする格闘戦で、真正面から打ち破り、自決という道まで追い込んだ女、テイルファイヤー。彼女もまた、頭を悩ませる要因であつた。

(そして、残る戦士は…)

そして、スパロウギルデイはタイガギルデイの戦闘映像を再生する。ここに、最後のツインテール戦士の映像が収められているのだ。

『さあテイルレッドよ！ 我が腹を大海原だと見立て、元気よく泳いでくれい!!』

『ぎゃああああああああ変態だああああああああああああ!!』

再生された映像には、だらんとお腹を出し、服従のポーズで地面に横たわるタイガギルデイと頭を抱えて絶叫するテイルレッドの姿があつた。

(そういえばこいつ、スクール水着が好きだつたな…)

タイガギルデイが持つ属性力は、スクールスイム 学校水着。テイルレッドが纏うアンダースーツがスクール水着を連想させるような形状であつたため、このような凶行へと出てしまったのだろう。画面の中でテイルレッドが怯えながら後ずさりしている。

『落ち着いて、こんなのいつものことじゃない!』

と、ここで現れるはテイルブルー。凶器の槍をクルクルと回しながら、見慣れた光景だと言わんばかりに落ち着いている。

だが、テイルブルーの登場はタイガギルデイを苛立たせた。不快感を露わにしたような顔で怒号を上げる。

『失せろ、汚らわしい! そのような布面積が少ない水着など邪道に等しいわ! 尻を拭く紙にすら値しな!』

…映像はここで途切れている。

映像が途切れる最後のワンカット、阿修羅の如き恐ろしい顔で槍を振りかぶっているテイルブルーの姿が見えたような気がしたが、気のせいだと思いたい。もう確認したくもない。とても恐ろしくなり、その映像の記憶をスパロウギルデイは頭の奥深くに押し込んだ。

「なんと恐ろしいのだ。そして、何と強いのだ…」

最強のツインテール属性を持ち、剣を振りかざす幼女、テイルレツド。

両の拳だけで真正面から敵と戦い、不死身の如く立ち上がる少女、テイルファイヤー。

悪鬼羅刹の如く、情け容赦、手加減を微塵も見せない戦いを繰り広げる少女、テイルブルー。

この3人が戦う映像を見ながら、半分諦観しながら、そう呟く。

戦いを通し、彼女たちは今以上に成長している。戦いを始めてから一月、動きのキレも以前とは見違えるほど良くなっているのが誰の目から見ても分かる。

部下たちは次々と亡くなっていく同胞に「弔い合戦だ！」と士気を上げながら出撃していくが、全て返り討ちに合っている。

このままでは間違いなくこの部隊は壊滅する。ドラグギルデイやワイバーンギルデイのような戦闘面で優秀な戦士はほとんど残っていないく、どれもこれも貧弱な部下ばかりが残ってしまった。

…ここに来て、部下共の育成をロクにしてこなかったツケが回ってきた。戦闘面に関して、この部隊はあの2人にほとんど丸投げしていたようなものだったのだ。

(…もはや、これまでか?)

長として、スパロウギルデイは決断しなければならない。悪戯に犠牲者が増えるこの状況下で、このまま侵略活動が続けるのか。

(…それとも意気込む部下たちをなだめ、この世界から撤退するのか) そんな考えに支配されそうになった時だった。先ほど報告しにきた部下が再び駆けこんできた。

「ス、スパロウギルデイ様！ たった今、リヴァイアギルデイ様の部隊がこちらに合流するとの報告が…！」

「何…!?!」

思わずスパロウギルデイは立ち上がった。今聞いた名はスパロウギルデイがとてもよく知る人物の名であったからだ。

海竜の戦士、リヴァイアギルデイ。ドラグギルデイと同期の怪人であり、その実力も彼と匹敵していると湛えられている。事実、ドラグギルデイと仲も良好で、スパロウギルデイも何回か彼と会ったことがある。

確かに、援軍としてはこれほど心強いものはない。リヴァイアギルデイならあるいは、ツインテイルズを倒せるかもしれない…。

微かな希望が見えてきたスパロウギルデイだったが、部下の口から更に衝撃の報告が飛び出た。

「そ、それと…もう一つ報告があります…クラークギルデイ様の部隊も我が部隊に合流するとのことですよ!!」

「何い!? それは確かか!?!」

「はっ! 間違いありません!!」

スパロウギルデイの声が驚きのあまりに裏返った。

海洋の戦士、クラークギルデイ。長の身でありながらも自らも前線に立ち、戦うことで有名な戦士であり、その影響もあってか、クラークギルデイの部隊はアルティメギルキッテの武闘派集団でも有名だった。

だがスパロウギルデイはそのことで驚いているのではない。この2つの部隊が合流するというこの事態に驚いているのだ。

リヴァイアギルデイとクラークギルデイ。この2人の仲の悪さは有名であり、互いに対抗意識を燃やしていることは誰もが承知の事実であった。

「あの犬猿の仲の2人が…我が部隊に合流するなど…!」

何か一波乱が起きる。間違いなく起きる。…そのような予感がスパロウギルデイにはあった。

※

「ふむ…」

場所は変わって、神堂家。

風呂をすませた慧理那はパジャマ姿で自室のパソコンを使い、色々情報を漁っていた。ツインテイルズの情報収集もそうだが、今度の休日に大型ショッピングモールの下調べも行っていたのだ。

（整理券配布が8時、開店が9時からですから…大体、7時くらいにつけば問題ないですね。移動ルートはエスカレーターではなく階段を使って、帰りは…）

大のアニメ・特撮好きの慧理那にとってこの手のイベントに賭ける意気込みは半端ではない。どこの諜報員だと言わんばかりに、綿密に時間やルートを細かく計画していく。

「このロボットは単体で変形と合体ができるのですか…しかし、本編での技を再現するには、こちらのアイテムも必要で…」

公式サイトの特撮解説のページや動画サイトのCMで概要を調べ上げ、何を買うかの選別を行っているのだ。

もうすぐゴールデンウィークが間近に迫っている。それは玩具メーカーにとって、聖戦の火ぶたが切られる日といっても過言でもない。

ゴールデンウィーク、夏休み、クリスマス。年に何回かある大型連休のシーズンになると、玩具メーカーは需要を見越して新商品を世に送り出す。

ヒーローのパワーアップアイテムや新型ロボットなどがこぞとばかりに発売され、子供たちやファンの間で熾烈な争奪戦が繰り広げられるのだ。たかが玩具で大げさな、と思うかもしれない。だが最近の特撮玩具は侮れない。サウンド、外見、ギミック。どれもたかがの一言では片付けられないほどのクオリティへと仕上がっているのだ。

慧理那はそれを優先して買うべきか検討していた。いくらお嬢様であろうと財布の中身には限度がある。特に今月は財布の中身の大半をはたいて『完全可動・アクションフィギュア テイルレッド』を購入してしまったので、財布が軽くて仕方ない。四肢の可動から表情の再現、武器、手、ツインテールといった細かな部分まで完全再現し

たそれは、慧理那の机の上に大切に飾られている。

(…そうですね、今回はこちらの商品は見送りでしょうか。単体で遊べる範囲は狭いし、他の玩具との連動が基本になっていきますしね。では、購入するのはこちらのロボットと追加アイテムと…)

ある程度、購入すべき玩具の厳選が終わると、慧理那は以前にブックマークしておいたとあるアドレスをクリックする。

「ですが、こちらにも捨てがたいですよね…」

ぐぬぬといった顔で現れたページを見る。そこにはとある玩具の写真が映っていた。焰色の字で『完全可動・アクションフィギュア テイルファイヤー』と書かれている。

テイルレッドのフィギュアに遅れる形で発売することになったこの商品。発売日が丁度、今週の土曜日。奇しくも、特撮玩具の発売日と重なっている。

元々人気のあったテイルファイヤーではあるが、先日のレインボーブリッジでの死闘からその人気は今やテイルレッドをも上回る勢いであった。ここでの投下は正に絶好の機会ともいえるべきタイムミング。…だが、そのせいか非常に手に入りづらい商品と化しているのだ。

その証拠に、ネット予約は僅か2分で全滅、店頭販売を残すのみとなっているがそれでも手に入るかどうか…。

「…この、レッドにはない数々の要素が…憎い、ですわ」

慧理那は画面を指でなぞる。そこには詳しい概要が書かれていた。『完全可動・アクションフィギュア テイルファイヤー』は格闘を主体に戦う彼女らしく、可動範囲が非常に優秀であり、写真では太極拳のポーズで映っている。各関節のパーツが自在に動くので、今までのフィギュアの範疇を超えた動きが可能となっているのだ。片足で立ったり、踵落としをしたり…想像しただけでもヨダレ物の出来だ。

手首のパーツや炎を模したエフェクトパーツも非常に豊富にある。レッドとは違い、武器を持たないからこそ、こういったパーツや動きでレッドとの差別化を図るメーカーの策略は見事にして、大変いじらしいとも言えるであろう。

手首は握りこぶし、手刀、平手と多数あり、エフェクトパーツも迸る炎、逆巻く炎、回転する炎、貫く炎と4種類も付いている。彼女を象徴する武装、『ブレイクシユート』『ファイヤーウォール』の再現。パーツ、専用スタンド付属…と、これだけでもお腹いっぱいなのに、更にそれらはレッドのフィギュアに全て流用できるのだ。

テイルレッドにファイヤーの手首を使って様々なポーズをとらせたり、付属する炎のエフェクトパーツを使つての『グラウンドブレイザー』の完全再現、本来ならありえないレッドでの『ブレイクシユート』や『ファイヤーウォール』も可能となっている。そしてレッドのパーツもファイヤーに使えるので、剣を持ったファイヤーなどといったことも可能となっているのだ。

しかも、早期購入特典ではレッドとファイヤーが互いに握手できる特殊パーツも付いてくる。これだけそろつてお値段なんと、19800円（税込）也。

財布の中身を確認すると、ギリギリ買える値段ではあるが…痛い出費だ。少なくとも本気で購入を検討するならば、特撮玩具の方は諦めなければならぬだろう。

神堂慧理那に決断の時が迫っていた。特撮を取るか、テイルファイヤーを取るか…。

恐らく、フィギュアの初版分の売り切れは確定しているだろう。メーカー側も再販を行う体制は見えているものの、その再販分も購入を望む者たちの人数に追いつくかどうか。

テイルファイヤーの画像をあれこれ見たりしながらどちらを買うかの決断をする中で、ふと夕刻の出来事を思い出していた。

（丹羽君の、あのベルト…）

今日、ぶつかつた1年生が持っていた、一つの玩具。テイルファイヤーのシンボルの一つでもある、あの焰いベルトが無性に頭に浮かんできた。

廊下に転がっていたそれを持った時、慧理那はすぐに違和感を感じた。あの重さといい、色使いといい…まるで本物のような出来であったからだ。少なくとも、市販されているレベルであのようなレベルの

商品はコストの問題上、販売することは難しいだろう。

確か、彼は限定版のベルトだと言っていたが：一体、どんなものなのだろうか？

(少し、調べてみましょうか…)

慧理那は検索サイトを立ち上げ、いくつかのキーワードを打ち込む。玩具系のサイトを一つ一つ見て回っていきながら慧理那は、できれば自分もあの限定版のベルトが欲しいなとぼんやり思い始めている。

※

時刻は深夜を周り、夜中へと入っていた。子供だけでなく、大人も夜も眠るような遅い時間になっても、トウアールは起きていた。真っ暗な地下室では、ある一室だけの照明がぼつんと点いており、トウアールはパソコンに噛り付いていた。

「ね、眠い…」

そう思うたびにトウアールは栄養ドリンクをラツパ飲みして、無理矢理意識を覚醒させる。胃が焼け付く感覚で思わずむせ、ドリンクが数滴、胸に垂れる。

目の下には隈ができておき、まるで締切直前の漫画家みたいなグロッキーな顔で作業に励んでいた。

「と、とりあえず総二様のギアは整備完了…です。後は…」

赤色のテイルギアに繋がれていた無数のコードを外し、今度は青色のギアにそれを装着する。その際に少しだけ名残惜しそうな顔をしたが、すぐに作業に取りかかる。

トウアールが眠い目を擦りながら励んでいる作業は、テイルギアの整備だ。

元々、テイルギアは高度なデバイスであり、簡単な修理や整備くらいなら自動で行う機能を備えているのだが、トウアールは一度それをオーバーホールし、細かな部品の一つまでチェックを行っていた。

正直、面倒な作業であったが、やらざるを得ない状況になっている

のも事実だ。それは今日の昼休みにまで話は遡る。

今日、トウアールは総二たちの通う陽月学園へ赴き、彼が作った『ツインテール部』の部室の改造をしていた。部室にいなながらも基地へ直行できる転送装置や簡単な整備工房など、今後の戦いに必要な設備の取り付けを行うからだった。

本来、部外者である彼女が校内に入ることにはできないのだが、近いうちに陽月学園に転校することになっているトウアールは「正式に転校する前に一度学園の見学に来た、総二の親戚」という設定で校内へ潜り込んだのだ。：何故か愛香は舌打ちをしていたが。

しかし、ここで一つのトラブルが起こった。そんなトウアールに挨拶をしようとやって来た陽月学園高等部の生徒会長、新堂慧理那に、総二のテイルギアを見られたのだ。テイルギアには認識攪乱装置が内蔵されており、一般人からは決して見えないはずなのに、慧理那はそれを見破って、ブレスの存在を認識するという一大事が起こってしまったのだ。

幸いにも、慧理那はそれ以上追及してこなかったものの、総二たちは途端に心配になった。認識攪乱装置は正体バレを防ぐための対策の一つであり、重要な機能だ。慧理那に見破られたということは、もしかしたらギアになんらかの異常があるのでは？。：そう思ったトウアールは2人のギアの整備を申し出たのだ。：その際に、愛香のギアの耐久力を意図的に下げ、エロゲ並みの強度にして「脱ぎキャラ路線で今後は売り込みませんか？」と言ってみたが、断固拒否されてしまった。そっちのほうが、今より人気が出ると思うのだが、愛香はお気に召さないようだ。

（ああ、早く総二様の通う学校で青春を送りたい：そして、エロゲ的なイベントやムフフなあれとか：。あの生徒会長さんも私の良い好みでしたからね：あわよくば）

色々残念な思考で整備を続行しようとした時、ふとギアに内蔵されているとあるプログラムが目にとまった。

のろのろとそのプログラムを起動させると、懐かしさのあまり、トウアールの眠気が吹き飛んだ。

「あら、これは…懐かしい…!」

それは以前、トウアールがこちらの世界に来る前に作ったプログラムだった。プログラムの名前は『同調システム』^{シンクロ}。他者の意識を混合し、それぞれの属性力を重ね、強化するプログラム。…もの凄く簡潔に言えば『二人で一人のツインテール戦士』になれるシステムである。だがとても実戦では使えない扱いづらいシステムであった為、「万が一の為に」とギアに搭載されたはいいものの、目の目を見ることがないまま今に至るといふ訳だ。

(このプログラムは、色々とありましたからねえ…)

懐かしい目をしながら、一つ一つを再確認する。その度に、懐かしさのあまり、ため息が出てくる。

このプログラムの開発するきっかけになったのは、レイチエルという一人の少女がきっかけだった。

幼いながらも、自分と肩を並べるほどの頭脳を持った少女。幼い女の子が好みであったトウアールは彼女に気に入りたいという邪な思いで、あわよくば…という目的で近づいたのが出会いのきっかけだった。まあ、一応、おまわりさんの世話にはなっていない為、未遂に終わってはいるのだが…。

それからはレイチエルとは友として、共に色々なシステムを開発してきた。この同調システム^{シンクロ}もその一つだ。戦う技術を持たない人たちでも、これを使えば戦士を支えることができるのではないか…レイチエルがそう言っていたのをトウアールははつきりと覚えている。

ところがレイチエルはある日を境に、トウアールの目の前から姿を消してしまった。必死で捜索してみたものの、結局見つけられずに自分たちの世界はアルティメギルに侵略されてしまった。その時にレイチエルも奴らの毒牙にかかってしまったのだと思いつつながら過ごしてきた…あの映像を見るまでは。

レインボーブリッジの野次馬の中に紛れているレイチエル。その姿を見たとき、どんなに嬉しくて喜んだことか。…でも少しだけ悲しくなってしまった。彼女は这个世界にいるのに、自分に会いに来てくれないのだから。

「…レイチエル、どうしてあなたは私の前から消えてしまったんですか？」

そう言いながら、トウアールは青色のテイルギアをそつと撫ぜた。青色のギアはまるで悲しんでいるかのように、鈍い光を発していた…。

第20話 うなじとツインテール

「あれ…?」

レイチエルはゆっくりまぶたを開けると、何故か大きなベッドの上
にいた。直ぐにおかしい、と思った。自分は光太郎の部屋で布団に包
まっていたはずなのに、どうしてこんな大きなベッドで寝ているんだ
ろう?

(…それに、何だか体が重いし…)

レイチエルは起き上がろうとしたが、上手く起き上がれない。風邪
を引いた時みたいに身体が怠いのだ。風邪を引いた記憶はないのだ
が…何故なのだろうか?

(…、どっ?)

レイチエルは何とか動く首を動かして、部屋を見渡すが、見たこと
もないような場所に自分は寝ていた。

部屋の広さは10畳ほど、だがその広さに反して家具はベッドと机
があるだけ。

部屋を照らしている照明は淫らなピンク色、レイチエルが寝そべっ
ているベッドも凄く大きくて、動いたびにぶよぶよとゼリーのような
感覚がする。こういうベッドは…そうだ、ウォーターベッドとでもい
うんだっけ?

それにどうして、このベッドは布団が一つで枕は二つあるのだろう
か? 枕元には見たことも聞いたこともないような怪しいドリリンク
の小瓶が転がっているし…。

「ふんふんふん」

そして、部屋のドアが開き、誰かが入ってきた。足音を聞く限り、人
数は一人。でも、この足音に声、どこかで聞き覚えが…?

そして入ってきた人物の顔が視界に入ると、レイチエルは驚きのあ
まり、目を見開いた。

…銀髪の長髪と青色の瞳、牛みたいにデカイ乳、自分と同じ白衣を
纏う女性が自分を見ている。何だか、いやらしい目ですつごくこつち
を見ている。

(もしかして、こいつ…、でも、何で…!?)

レイチエルが知る中でそんな特徴を持つ女性はただの一人しか存在しなかったからだ。でも、こいつなんでここにいるの…!?

「何、してるの? トウアール?」

半信半疑でレイチエルは答える。

トウアール、そう言われた女性は目が覚めたレイチエルのそばに急いで駆け寄ってきた。心配そうな顔をして、レイチエルの顔を覗き込んでくる。

「あ、レイチエル、ようやく起きたんですね! いやあ、私心配したんですよ、いきなりあなたが倒れたから…」

「そう、なの?」

「ええ、そうですよ! 私、友達としてこれは看病しなければと思いついて…」

「…そうなの」

やけに友達という単語を強調するトウアール。…嫌な予感がじわじわと押し寄せてくる。

どうして奴がいるのだとか、私は不法侵入でさらわれてしまったのか、そもそもここはどこなのかとか気になることは色々あったが、ここでおとなしくしていると絶対に碌なことにならないという確信がどこかにあった。

(逃げ、なきや…!)

レイチエルは身体を無理やり起こそうとするが、トウアールに止められる。

「駄目ですよ、安静にしていなきや!」

不自然に顔を赤くしている貴様がそれを言えるのか!? 覗き込んでくるトウアールは顔こそ優しく微笑んでいるが、目は笑ってはいない。

…あれは、そう、狩人。罠にかかった獲物をしとめんとばかりしているハンターの目だ。

「大丈夫ですから、レイチエル。私を信じてください…うふふ、うへへへはへ…」

一瞬、ほんの一瞬だけ女神のような微笑みをし…すぐに悪魔のような笑みになった。

音もなく白衣と上着を脱ぎ、トウアールは下着姿になった。誰もが羨むスタイルを持つトウアールだが、その姿に色気も糞も感じないのはどうしてなのだろうか？

「さあ、レイチエルも脱ぎ脱ぎしましょうか…」

「ちよ、ちよつと待って！ 私、女同士なんて趣味…！」

「大丈夫です、友達の私を信じてください！」

そんな目をしている友達を信じられるわけがないだろうがああああ！ …そして、痴女の指が自分の身体に触れるか触れないかのところで、レイチエルははっと目を覚ました。

部屋の中は真つ暗で、日もまだ昇っていない。しばらく天井を見つめ…意識がはつきりするのを待って、部屋を見渡した。

(夢…!?)

この一月で見慣れた部屋と嗅ぎ慣れた匂い。光太郎がベッドで寝息を立てているのが月明かりで照らされて見えた。

…それでようやくあの恐ろしい出来事が全て夢だということに気が付いた。

(…疲れているのかしら、私)

目くじらを押さえながら首を振る。私、どうしてあんな夢、見ちゃったんだろう？ 近々、あいつに合おうと計画を立てていたせいかしら…？

レイチエルはドツと疲れが押し寄せてくるのを感じて、布団を頭からかぶる。

(…とりあえず、あいつに会うのはもう少し先の方がいいかも。とうか会わない方が互いに幸せなんじゃ…?)

そう思いながらレイチエルは目を閉じ、夢の中へと入っていった。せめて今度ばかりはマシな夢を、と神様をお願いしながらレイチエルは眠った。

※

そして迎えた土曜日、全国の玩具店で聖戦の火蓋は切って落とされた。

人ごみでごった返している屋外駐車場には、神堂慧理那と桜川尊の姿もあつた。もうすぐ5月になるとはいえ、まだまだ寒い。その寒さのせいで、慧理那は何度かくしやみをしていた。

「お嬢様…後は私が代わります。ここまで来れば大丈夫です、整理券をお渡しください」

尊は主の身を気遣い、心配そうにこう言うのだが、決まってこう返されてしまう。

「自分で買うからこそ、玩具は愛着が湧くのですわ。私はあれを買うまではここを離れるつもりはありません」

慧理那はそれだけを言うと、前へと向きなおる。そんな慧理那を複雑そうな顔で尊は見た。

今、慧理那が言ったセリフは何回も聞いたお約束のセリフだが、今日は一段ときつく聞こえる。何かの使命を背負っているといったような顔を慧理那はしていた。

(…何せ、今日の慧理那のお目当ては、自分が愛してやまないツインテイルズの玩具なのだからな)

尊は慧理那の小さな手に握られている整理券をちらりと見た。

そこには『完全可動・アクションフィギュア テイルファイヤー整理券』と書かれている。

今日発売するツインテイルズの新たなフィギュア。ツインテイルズを愛する者だからこそ、商品を購入してレジを離れる最後までしっかりとやりきらなければならぬという使命感にでも駆られているのかもしれない。

だが、そのことを尊は心配しているのではない。いくら小さいからといって、慧理那ももう高校2年生。一人で買い物位できるし、お嬢様だからとはいえ世間の常識に乏しいというわけでもない。

尊が心配する最大の理由は、こういった外出の度に現れるアルティメギルのことだ。どこかに出かけ、何かをするたびに、連中らは狙っ

ているかの如く現れ、その牙を尽くすべきである主に向けるのだ。

危ない目に逢つても、慧理那が応援しているツインテイルズが必ず助けに来てくれるが、それでも仕える身としては複雑だ。ずっと屋敷にいてくれとまではいかなければいけません、こういった買い物くらいなら使用人たちに任せてもらいたいなのに。

しかし慧理那が頑として聞いてくれない。この一月、幾度となく繰り返されてきた中で、尊はある一つの仮説を立てていた。

(お嬢様はもしかや、ツインテイルズに会う為に、わざわざ危険な状況を望んでいるのでは…?)

尊は片時も目を離さないでいる中、疑うような視線を混ぜながら慧理那を見る。もしそうであるのなら、お嬢様の安全の為に放つておけない。最悪の場合、このことを慧理那の両親に報告しなければならなくなるかもしれない。

(…とりあえず、商品を購入したら、すぐさま帰らせなければ…!)

尊がそう思っていた時、耳につけたレシーバーから受信を受け取る際に生じるノイズが聞こえた。

「!」

その一瞬で、尊はメイドではなく、プロの護衛の顔へとなる。慧理那が丁度、商品を購入しておつりを貰っている所を視界に入れつつ、受信に応じる。

「どうした?」

『い、今すぐお嬢様をお連れして逃げてください!』

監視に回していた部下からの叫びを受け、尊は走り出した。何があつたとは聞かなかつた。この一月、このやり取りだけで状況を察することができるほど、慣れてしまっているからだ。

「お嬢様!」

「尊!?!」

尊はきよんとしている慧理那の手を引き、脇目も振らずにフロアを駆けだそうとしたが…尊の足が止まった。

(…くそ、遅かつたか!)

ほぞを噛む思いで、前方を見る。そこには、これまでに何度も目に

したあの黒ずくめの戦闘員がいたのだ。

「モケー！」

戦闘員はわらわらと各フロアに散っていき、階段やエスカレーターなどといった移動経路を制圧していく。逃走経路を奪ってから、一人一人刈っていくつもりなのだろう。：悔しいが、理にかなっている戦術だ。

「ふはははは！ 中々上質のツインテールを持つ女子ではないか！」

すると、黒い戦闘員の後ろから悠然と蟹のような怪物が現れた。怪人はじろりと慧理那を見る。

「それだけのツインテールを持つのだ。さぞかし、あれも素晴らしいのだろうな……！」

「〜！ その汚らわしい目でお嬢様を見るな、変態！」

思わず、怪人にそう吐き捨てる尊。

いつもそうだ、お嬢様に会うたびにこの怪人らはツインテール属性がどうだこうだと言ってくる。理屈は分からないが、どうやらこいつらはお嬢様のツインテールを狙って襲い掛かってくるのは疑いようもなく明らかだった。

すると、蟹型怪人が突然名乗りを上げた。

「わが名はクラブギルデイ！ ツインテール属性と共にある麗しき属性、項後^{ネーブ}属性を愛でる探検者である！」

「ネーブ……え!? うなじ!?!」

慧理那はこの怪人たちが自分のうなじ目的で襲おうとしているのに気づき、尊の手を強く握った。

「だが：俺が興味を持つのはその金髪の少女だけだ。そこにいるメイドの年増女はとっと立ち去れえ!!」

「…何!?!」

尊は聞き捨てならない単語がクラブギルテイの口から飛び出したことに、沸々と怒りの炎が煮えたぎってくる。

「俺が狙うのは未成年の少女のみ！ 年増などには興味はない！ さっさと帰ってほしい線対策でもしているがいい！」

「年増、だど!?—その言葉、今すぐ取り消せ!!」

一番気にしていることを指摘された尊は激昂し、クラブギルデイ目にかけて回し蹴りを放つ体勢に入る。：狙うは奴の顎。

(奴らが人の言葉を発し、人と同じ感情を持つのなら、身体はその構造も人間と類似している可能性がある。だから、顎を打ち抜いて脳を揺さぶさせれば、中枢神経に障害を起こし、隙を作れるかもしれない！) 尊の纏うメイド服はこういった格闘戦をも前提に作られた特注品であり、回し蹴りを余裕にできるほどの可動範囲を誇っている。

「くっらえ、化け物！」

尊の鍛え上げられた脚力で放たれた蹴りは、クラブギルデイの顎の細かい一点を目掛けて振りぬいたが：クラブギルデイは何ともないように突っ立っていた。逆に攻撃を放った尊が足を押さえて蹲った。

「なんだ、コイツの身体の固さは!？」

まるで全身が金属でできているような硬さだった。大の男をも吹き飛ばす威力を持った蹴りでも、こいつらにはまるでびくともしなかった。

「ふん、年増が俺に勝てるでも思ったのか!? アルティノイド！」

「モケ！」

「幼女と年増を押さえろ！」

「お嬢様、お逃げください!!」

尊は戦闘員に取り押さえられ、羽交い締めにされる。慧理那もまた、戦闘員に拘束された。

「よし、後ろを向かせい！」

クラブギルデイはそう戦闘員に命令すると、左右にいた戦闘員が慧理那の背中が自分に見えるように調節させる。

「ほう：やはり、いい！ 人のうなじは、幼女のうなじは何故これほどまでにツインテールとマッチするのだろうか!!!」

「何を見えていますの、あなたはは!？」

大声で世迷言を叫ぶクラブギルデイに恐怖を抱いたのか、慧理那は毅然と問う。

「ふ、幼女よ。うなじとはな、花と似ているのだよ。良い花が育つには良い環境が必要。そして良いうなじもまた、良いツインテールの前に

生まれる！ ツインテールにする以上、うなじが見えるのは必然！

この2つの美しさは互いに相乗され、互いに美しさを増させる！ この素晴らしき関係を、俺はお前たちにも分かって欲しいのだ！」

「そんな俗説、あなたに教わられる必要はありませんわ！」

「たわけ！ 男は背中中、女はうなじで語る！ この常識すら分からないとは、見た目だけでなく知性も幼いようだな、幼女!!」

「なっ…私が…幼い!？」

初めて慧理那が動揺した表情を浮かべた。

「おのれ、お嬢様を侮辱するな、変態！」

「ふん、貴様に言われる筋合いなどないわ、この年増メイド!!」

そのピンポイントな罵倒は、尊の怒りという名の炎に油を注いだ。

「…私はまだ28だぞ!! まだ20代だ!! 年増と呼ぶな、殺すぞ!!!」

…その怒りの度合いは主を罵倒された時よりも激しく見えるのは、何故なのだろうか？

「さて幼女よ、貴様のツインテールとうなじ、両方いただく!! …悪く思うなよ！」

クラブギルデイが威圧的に慧理那へと近づいてくる。

「お嬢様! …うっ！」

「尊!？」

尊は戦闘員に首筋を軽く叩かれ、ぐったりと気を失った。これで慧理那は一人ぼっちになってしまった。

だが、そんな状況下でも慧理那は凜とした空気を崩さなかった。泣きたいのを我慢して、怪人に向き合う。

「…いえ、あなたには無理ですわ」

「何?」

「あなたには私のツインテールとうなじは奪えない、と言っているのです！」

「何だと!？」

そしてあるうことか、慧理那はクラブギルデイに挑発をかました。見る見るうちにクラブギルデイの顔が歪んでいく。

そう慧理那は知っている。この場を助けてくれる、救世主が必ず現

れることを知っているのだ。ヒーローはピンチの時に必ず現れる、それはお約束なのだから。

「何故ならば…」

どこからか空気を裂くような音が聞こえる。そして、その音はどんどん大きくなっていく。

「あなたを倒す、ヒーローがいるのですから!!」

その言葉と共に、クラブギルデイの身体が宙を舞った。どこからともなく飛んできた紅色の拳が、周りにいた戦闘員をも風圧で吹き飛ばした。羽交い締めにされていた慧理那も、そのおかげで解放される。

「…やはり、あなたが来てくれたのですね」

飛ばされた拳が戻っていく方向へ視線を向けると、一人の少女が立っていた。

慧理那が憧れるヒーローが、ツインテールという子供向けの髪型でありながらも大人びている少女が、テイルファイヤーが目の前に現れたのだ。

※

近所にあるショッピングモールがアルティメギルに襲われている、という連絡を受けたのは寝起き直後だった。

何故かもの凄く機嫌が悪いレイチェルに急かされるように出撃した俺が目にしたのは、蟹型のエレミアンに誰かが襲われている光景だった。しかも、襲われている人間の背丈は小さい。

(もしかして子供か…!?)

急いで、右腕を構え、それを回転させる。もはやおなじみとなった飛ばす拳は、風を巻き起こし、周りの取り巻きをまとめて吹き飛ばした。

「大丈夫です、か?」

急いで駆け寄り、子供の安否を確認しようとした所で…俺は驚いた。

「神堂会長…?」

なんとそこにはこの間会った小さな生徒会長、神堂慧理那がいたのだ。近くには付き添いで来ていたと思われるメイドさんも倒れていた。

「え？ あなた、今…？」

「ああ、いや、その、何でもありませんよ！」

「ですが…今、私の…」

「ええと、何でもないですからー！」

迂闊に口を滑らせたことに焦りながらも、強引に話を占める。とりあえず、このまま狭い屋内に居ては駄目だ。戦いづらいし、他の人も巻き込んでしまう。外に出て、会長たちを避難させないと…。

「と、とりあえず、ここから逃げ出しますので…私にしがみついてください」

「え、ええ。そうですわね…」

会長は俺の背中におんぶするようにしがみつき、倒れているメイドさんをお姫様抱っこの要領で抱きかかえ、走り出した。

ところどころにある標識を目印に、目指すは非常階段と書かれた位置まで駆けだす。その道のりから、会長も俺が非常階段を使って外へと出ようとしていることに気付いたのか、慌てたような声を出す。

「階段はあいつらに占拠されていますわ！」

それは勿論分かっている。でも、俺は階段のある所へいくだけで、使うとは言っていない。

「モケモケー！」

非常階段前には多くの戦闘員がいて、逃げ出そうとしている俺たちに気付き、行かせまいと立ちはだかる。

俺は非常階段目がけて全速力で走りながら、会長に忠告を言うておく。

「舌、噛まないようにしてくださいね！」

「え？ ちょ、ちょつと何を…！」

戦闘員は見る見るうちに近づいてくる俺たちを捕まえようと、一斉にやってきた。…やはりそうだ、こいつら知性はあまりないらしい、こっちの作戦に全く気付いていない。

群れに近づけるだけ近づくと、ハードル跳びと同じように、一塊になつた戦闘員の群れの上を飛び越えた。

「行きますよおおおおお!!」

そして非常階段に続く扉を蹴破り、非常階段の踊り場についた俺は勢いよく下へと飛び降りた。

「え、えええ!? きゃあああああああああ!」

会長は自分が落ちているということが分かつたらしく、かん高い悲鳴をあげる。3階から屋外駐車場目がけての空中ダイブは流石の彼女も想定外だったらしい。

そして、僅か数秒の空中浮遊の後、何事もなかったかのようにティルファイヤーは駐車場にストーンと着地する。

「ええ、と。大丈夫ですか?」

胸に抱いていたメイドさんを地面に下ろしながら、会長に問いかけてみる。背中にしがみついている会長は陸に上がった魚みたいに口をぱくつかせていたが、ようやく怒ったように声を絞り出した。

「…跳ぶなら、跳ぶと…最初に言ってください!」

だが、すぐに感謝していいのか怒っていいのか分からないような困った顔になる。

「その…助けていただいて、ありがとうございます…。私は大丈夫、ですわ」

途切れ途切れではあるが、あの日と同じように大丈夫だというアピールをしていた。会長は俺の背中から離れて、メイドさんの様子を伺うように屈んだ。

「ですから、あなたは早く、戦いに戻ってください。尊は私が見えていますから…」

尊と呼ばれたメイドさんの手を握りながら、会長はショッピングモールを指さして、戦いに戻るようにと言ってくる。

俺はこの場に残すことが多少心配だったが、アルティメギルをこのまま野放しにしている訳にもいかない。急いで現場に戻らなくてはと思い、走り出そうとしたが「待って下さい!」と呼び止められる。

「その、私…あなたをずっと応援しますわ! だから…頑張ってください」

「さーい！」

「神堂会長はここで購入したらしい『完全可動・アクションフィギュア テイルファイヤー』と書かれている箱を見せながら笑顔でそう言った。」

「…うん、ありがとう」

「俺もつられて笑顔になり、新堂会長にサムズアップで返し、すぐに戦いの現場へと全速力で走りだした。」

※

「残像だ」

「このお！」

「残像だ！」

「うなじを見るな——！」

「残像だ、そして俺はうなじを見る！」

「シヨップینگモール1階にある吹き抜けのホールで、クラブギルデイとテイルレッドの戦いが繰り広げられていた。だが、レッドは敵であるクラブギルデイに翻弄されっぱなしだ。何度も剣を振るっているのに、一度も当らない。」

「俺は相手の後ろを取るスピードだけは、隊長たちをも上回ると自負している！」

「クラブギルデイは見た目のごつきとは対照的に驚異的なスピードでレッドのバックを常に取り続けていた。」

「クラブギルデイが見せるこの特殊な動きは剣を振るうレッド対策の戦術なのかと当初は思ったのだが、ただレッドのうなじを見たいが為の行動だと知った時の脱力感とは半端ではなかった。ジロジロと首筋辺りだけを見られるという特殊なシチュエーションは流石のレッドも初体験であったからだ。」

「超スピードの変態じゃねーか!!」

「このままでは拉致があかない。何とか隙を見つけて、必殺の一撃を叩き込まなければ…。頼みの綱のテイルブルーはモール中に散って

いる戦闘員退治に出ている為、救援は望めない。

「この、このお！」

「うなじ、うなじだ！ やはりうなじは素晴らしい！ 決して正面からは見えないものの、陰から美しさを支える美の土俵!! 母なる大地に恵みを与える清らかな水のような存在だ!!」

「だから見るなって言っているだろ?!」

「それは無理な話だ！」

テイルレットとクラブギルデイはグルグルとメリーゴーランドのように何度も切つては周りを繰り返しており、端から見れば間抜けな光景にしか見えなかった。

だが、この展開を打ち破る救世主がこの場に乱入してきた。

「おりゃあああああ!!」

クラブギルデイは背後に感じたことのない気配がし、振り向く。そして猛烈なスピードで近づいてくる人影を捕える。

「何い、まさか貴様!?!」

クラブギルデイは急所狙いに放たれた拳を自慢のスピードで紙一重でかわし、その人物のうなじを見るなり、驚きの声を発する。あの引き締まったうなじにツインテールは…間違いない、奴だとクラブギルデイは確信する。

「テイルファイヤー、貴様も来るとはな！」

「…すまないレット、遅れてしまった！」

テイルファイヤーはやってくるなり、レットに向けて謝罪をする。…だがレットは気にしていないといったような優しい顔になる。

「いや…大丈夫さ、ファイヤー！ 二人いればコイツなんて目じゃねえ!!」

レットは剣を構えると、にやりと笑う。同じようにファイヤーも拳を構えると、ニヤリと笑う。その姿にクラブギルデイは興奮した。

「ふふ、何という幸運か！ 赤色の姉妹のうなじを両方拝める日が来るとは！」

「うるっせええええええ!!」

レットは我慢の限界だといわんばかりの大声を上げ、大上段に剣を

振りかぶる。だが…。

「残像だ！」

ギユンとクラブギルデイは音もなく、消え、背後に回ろうとする。だが、レッドは先ほどとは違い、追撃をしなかった。

…こいつはうなじを見るためだけに相手の背後を取り続ける。その無駄に洗練された無駄な動きは、まさに一流の変態の動きだ。ならば、必ず背後に回る動き、それを逆手に取る！

「今だ、ファイヤー！」

「ああ、分かっている！ファイヤーウォール!!」

「ぬぐううう!? 何だこの壁は!?!」

レッドの背後に回ろうとしたクラブギルデイは突然現れた紅色の壁に勢いよく突っ込んだ。バチバチと自分の身体に展開されたバリアのエネルギーがぶつかり、クラブギルデイは苦しそうに声をあげる。

「お前の後ろに回る動き…それを利用してもらった！」

「おおおのれええ!! うなじが、うなじが見えぬ！」

強大なバリアに突っ込んだせいか、クラブギルデイは身動きが取れないようだった。…倒すなら、今しかない！

「今だ、レッドお!!」

「ああ、ファイヤー！ ブレイクレリーズ 完全開放!!」

レッドの剣が伸長展開し、熱波を噴き上げ、必殺技の体勢に入る。「グラント、ブレイザアアア!!」

掛け声と共に刀身を伸ばした剣を、クラブギルデイ目がけ、横一文字に切り裂いた。

焰のバリアと爆裂する炎刃に挟まれたクラブギルデイは、背後に回る事なく、炎の中に消えていった。

※

「レッドー、そっちはどう…って、あんた」

「あ、どうも、テイルブルーさん」

大量の戦闘員を倒し終え、やってきたブルーに俺は挨拶を交わす。
…が、ブルーは聞こえていないように振る舞っていた。

…無視か、分かっていたけど、こうやられると、キツイ。

「お、おい…挨拶くらいしてけよ」

レッドが肘で小突き、仕方なくといった表情をブルーは浮かべる。

「どーも、テイルファイヤーさん」

物凄い棒読みの形式上の挨拶だけを済ませると、ブルーはレッドの手を取る。

「戦いはもう終わったんでしょ？ だったらさっさと帰りましょ」

「おい、そんな言い方は…」

レッドの手を無理やり引きながら、俺とすれ違うが…。

「…ふん」

ブルーはぶいっと顔を背け、レッドと一緒にどこかへ行ってしまう。そしてこの場には俺だけが残される。

「…なあ、レイチエル」

『なあに？』

俺はたまらず、レイチエルに通信を送った。

「女の子って…難しいんだな…」

『…何を当たり前のこと言っているのよ、さっさと帰ってきなさい』

「それでいいのか？」

『こういう時は下手に刺激しない方が身の為よ、面倒な生き物なんだから、女って』

「さいですか…」

こうして、休日の戦いは幕を閉じた。…今だ埋まらぬテイルブルーとの溝を感じるといふ苦い結末で。

第21話 飢婚者とツインテール

(…帰りたい、今すぐ帰りたい!)

スパロウギルデイは冷や汗をダラダラと流しながら、並行世界の移動に使われる艇が置かれているデッキに立ち尽くしていた。側近として連れてきた白鳥型の怪人、スワンギルデイも同じような顔をしており、まだ新米兵である彼はもう泣きそうな顔になっている。

(ス、スパロウギルデイ様…これは、止めた方がいいのでは?)

(それは私に死ねと言っているに等しいぞ、スワンギルデイ!…もう少しだけ、もう少しだけ様子を見よう…)

ヒソヒソと話し合いながら、スパロウギルデイは危険物を取り扱うかのような目で、目の前で繰り広げられている事態を静観する。

デッキ内では二つの軍団が真つ向から睨み合っていた。

「…!」

片や海竜の戦士が率いる軍団、もう一つは海洋の戦士が率いる軍団。両者は到着するや真つ向から睨み合い、火花を散らしていた。後ろに控えている部下たちも同じように睨み合っている。何人かの部下は己の武器を見せあいながら挑発と威嚇を行っていた。

例えるのならばそう…不良校同士の抗争直前のような、あのピリピリした空気。それがデッキ全体を支配しており、スパロウギルデイとスワンギルデイはどうすればいいのか分からずに、ただ立ち尽くしているのが精一杯だった。

「相変わらず下品な触手を股からぶら下げるのだな、リヴァイアギルデイ」

「ふん、中途半端な長さの触手を何本も生やしている貴様には言われたくはないわ、クラーケギルデイ。男なら一本で勝負するのが常識だろうに…」

互いの軍の大将がその最たるものだ。今にも戦いが始まりそうなほど、緊迫した状況が展開されている。

細身な身体つきで優男のような顔つきとは裏腹に、全身から無数の触手を生やしているのは貧乳属性を持つ海洋の戦士、クラーケギル

デイ。

対するは股間から巨大な一本の触手を生やし、身体は筋肉質で顔が
厳つい海竜型の怪人、リヴァイアギルデイ。彼は貧乳属性スモールバストと相反する
属性、巨乳属性ラージバストを所持していた。

「この世界では死者は焼いて弔うらしいな。：焼き魚にでもしてやろうか？」

「いや、土に埋める方法が正しいと聞いているのだが：相変わらずの無知ぶりだな、クラーケギルデイ？」

「あ？」

「はあ？」

巨乳と貧乳、水と油のように相反するこの2人。流石にこれ以上静観するのはマズイと感じたのか、スパロウギルデイが火中に飛び込むような覚悟で、二人の間に入る。

「クラーケギルデイ様にリヴァイアギルデイ様！ お、お二人がこの世界に来てくれるとは：大変光栄であります!!」

これ以上ないという程、美しい敬礼で歓迎するスパロウギルデイであったが、両の大将の反応は薄い。辛うじて反応したのはリヴァイアギルデイであったが、不機嫌そうに顔をしかめる。

「：首領様の命令は絶対だからな。まあ、この増援にかこつけて、俺たちの手柄を横取りしようとする卑劣な軍団がいるらしいが：まあ、やり遂げてみせるさ」

誰がとは言わないがな、とクラーケギルデイをチラリと見るリヴァイアギルデイ。言葉こそ交わしてはいないが、その発言は誰に向けて言い放ったかは言うまでもないだろう。

「言ってくれるな、それはこちらの台詞だ！ 我々の軍団は貧乳の如き鍛え上げられた戦士ばかりだ。そのような卑劣な手を使わなくても、我々の勝利は揺るがない！」

「ふん、揺れる物が無い貧乳軍団だけにか？ 相変わらず、古い考えだ」

「何い!?!」

クラーケギルデイの全身の触手が怒りのあまりにそそり立つ。そ

の光景にスワングルデイは恐怖する。

「時代錯誤の騎士かぶれが一段と増したみたいだな。部下にマントをはおらせるそのセンスがもう古くさいぞ」

「何だとー」

リヴァイアギルデイの挑発に、クラーケギルデイ側の部下の顔が赤くなる。が、キレル寸前の部下を手で制し、クラーケギルデイはぎりりとリヴァイアギルデイを睨みつけた。

「…とにかくだ、私たちは貴様らには必要以上に干渉しない。それ故にでしゃばりは慎んでもらいたいものだ…巨乳属性ラージュバストなどいう下品な属性を崇拜する貴様らにはな！」

「何をお!?」

今度はリヴァイアギルデイの部下が怒鳴り声をあげる番だった。リヴァイアギルデイはダンと地面を踏み抜き、部下を黙らせた。

「時代遅れとはまさにこのことだな。ツインテールに似合う胸囲は既に貧乳ではない…巨乳だ！ 石器時代のような刷り込みに支配されている貴様らこそ、憐れとしか言いようがないな！」

「…！」

海竜と海洋の戦士は互いに目を見開き、叫ぶ。

「巨キョオオオー！」

「貧ヒンツツツ！」

ビリビリビリイイイ!!! 互いの叫びはぶつかり合い、強烈な炸裂音と衝撃が走る。その激突で大気は震え、周囲の壁が軋みを上げる。そしてデツキの上にある裸電球がパリンと割れた。

「…ふん、実力は衰えてはいないようだな」

「…ああ、貴様こそな」

今の一瞬の間で、二人にしか分からない激突があったらしい。

「まあいい、下品な貴様らがどれだけできるのか…この目で見定めてやる」

「…ぬかすなよ、クラーケギルデイ。俺たちの部下はそう弱くはないぞ？」

そして二人の大将は大声で笑いあう。互いの部下もゲラゲラと

笑っていた。

その光景にスパロウギルデイは震えた。…これはいけるかもしれない、と。打倒、ツインテイルズも不可能ではないかもしれない、と。
ラージバスト 巨乳属性と貧乳属性。スモールバスト 今、胸を愛する者たちによる、新たな侵略が始まろうとしていた。

※

そんなことも露も知らぬ、春の連休に入る直前のとある朝。ある一つの噂が校内を駆け巡っていた。

「転校生が来るんだってよ」

「英語ペラペラらしいぜ」

「外人らしいって話よ」

いつもはツインテイルズの話題でもちきりのクラスも今日だけは違った。俺が教室に入ってきて僅か数分の間にそんな噂が飛び交っている。随分、中途半端な時期の転校生だな、と思いつつも荷物を置き、光太郎は総二たちの下に駆け寄った。だが…。

「愛香…さん？」

「何よ、光太郎？」

「いや…どこか調子でも悪いんですか…？」

「別に、何でもないわよ」

愛香は何故か朝っぱらから机に突っ伏していた。寄れば切る、と言わんばかりの禍々しい妖刀のような黒いオーラが身体から昇っているような気がした。

隣にいる総二はこの愛香さんの異常なまでの不機嫌さに、何やら事情を知っているようだが、その総二も疲れているような顔をしていた。

「色々あったんだよ、朝からさ…」

「ああ、そうなんだ…」

何か聞いてはいけないことを聞いてしまった気がしたから、俺はそれ以上踏み込むのを辞めた。この一月弱、今までも似たような事例が

何件かあったし、幼馴染の間でしか分からないことがきつとあるのだらうなど感じつつも、席へと戻った。

チャイムが鳴り、HRの時間が始まる。担任の間延びた声でいつも通り淡々とHRは進んでいき、10分ちよつとの時間を半分ほど残り、話題が変わる。

「えくと、今日はく転校生を紹介しますく」

噂の転校生、そしてそれが自分のクラスに来る。クラスの全員がザワザワと騒ぎ出す中、一人の女子生徒が入ってくる。

（へえ…）

一歩一歩教室を進むその生徒に思わず、見惚れた。銀色の髪と高校生とは思えない抜群の胸囲。出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる魅惑のスタイル。…うーむ、けしからん。

その女子生徒がチョークを持って、カリカリと自分の名前を書いている光景を多くの生徒が目で追う。俺もその一人だった。

（綺麗だ…）

銀色の髪は純銀のように煌びやかで、ストレートに下しているが故に、ほんの少しの動作で揺れに揺れる。その光景に見とれながらも、少し勿体ないかな、と俺は感じる。あれだけの髪なら、ツイントールが非常にお似合いだろうに、ストレートで終わらすのは非常に惜しいな。そんなことを思いながら彼女が黒板に書いていた名前を何気なく見て、俺は腰を抜かした。

『観束トウアール』

観束だつて…!? 当然、俺や皆の視線は一斉に同じ苗字を持つ総二へと向けられる。そしてトウアールさんはそんな光景を凄く嬉しそうな表情で見っていた。嬉しすぎて口から涎が垂れて、優越そうな顔になっている。…なんだ、その…転校生さん、その顔は辞めた方がいいと思うんだ、女子高生が人前でお見せしちゃいけない顔になっているから。

「トウアールさんはく、観束君の親戚でく、海外から引つ越して今は一緒に住んでいるそうですく。…では、次の要件に移りま〜す」

転校生の紹介を必要最小限程度で終わると、転校生のトウアールは

驚いて担任を糾弾した。

「ちよ、ちよつと待つてください！ 私の自己紹介ここで終わりですか!? まだ総二様との関係性も皆さんから問われていませんのに!」
「ですから、さつき私が言ったじゃないですか、総二君とは親戚同士だつて〜」

「それだけじゃ何も始まらないですよ!! 『一緒に住んでいます』の所から話を大きく広げて盛り上げさせた後、色々と誤解を招くような発言を2、3個投下する予定だったのに、何なんですかあの詫び寂もない説明は!? 月9で言ったらまだ2人が出会ってもいない状態で第1話が終わるくらいあり得ない状況ですよこれ!」

よく分かるのか分からないとえで先生に迫るトウアールさん。

「え〜と、実はもうおひと方紹介する人がいるので、トウアールさんばかりに時間を割けないですよ〜」

先生は悪気もない顔でケロリと言う。

「そ、そんな…私の『ドキドキ』 総二様とのギャルゲー的学園生活転校生編』が…」

どうやら自分が思い描いていた状況とまるで違ったらしい。トウアールさんはぶつぶつと何かを呟いている。なんだろう…トウアールさんのメッキがボロボロと剥がれている気がする…さつきまでの優等生っぷりはどこへやらって感じた。

「では、入ってきてください〜い」

そして再び扉が開け放たれ、一人の女性が入ってきた。その入ってきた人物を見て、今度こそ席から転げ落ちそうになる。

何故なら、そこには一昨日俺が抱きかかえた女性が、あのメイドさんが、あの時の姿のまままで立っていたからだ。

「本日から陽月学園の体育教師として赴任した、桜川尊先生ですよ〜」
「うむ、よろしく〜」

その声と共に、メイド服のスカートがフワリと舞い、彼女の髪型であるツインテールも揺れる。

「……」

教卓に立っているツインテールのメイドさんを見ながら、全員が口

をポカンと開け、静まり返った。

この人はどうしてメイド服着ているんだとか、神聖な職場を何だと思っているんだとか、ツツコミどころを探せばキリがなかった。

「あの〜、先生…。これは一体…」

「私は知りません、何にも知りませんから〜」

これはどういうことなんだと聞きたげな女子生徒を笑顔で完全無視するウチの担任。空気を読まない上に事なかれ主義、なんかウチの担任の本性が少しだけ見えた気がする。

「ちよ、ええ!? 何なんですかこれは、どうすればいいんですか私!?
こんなはずじゃなかったのに!」

そして尊先生の登場で、完全に霞んでしまった転校生のトウアールさんは激しく狼狽していた。さつきまで圧倒的な実力差で勝っていたが、慢心していたせいで逆転されてしまった悪役のテンプレのように慌てふためいていた。

…それはまるでテイルブルーの初登場の際、各メディアで散々な扱いを受けていた時の変身者の行動と非常に似ていたと後に総二は語る。

「皆も見たことがあると思うが、私はこの学園の生徒会長である神堂慧理那様のメイド兼護衛を担当している者だ。しかし、ただ護衛として校内にいるだけではお嬢様が気を遣われるのでな、理事長と相談して非常勤の体育教師を担当することになった。…安心してくれ、ちゃんと教員免許も所持している」

安心できねーよ。メイド服姿の体育教師を許すだなんてこの学校の理事長は何を考えているのだろうか。そしてこの学園はいつたいどこへ向かうのだろうか。子供だけでなく、大人も毒されていつている事態に頭を抑えたくなってきた。

「それにしても、君たちは大人しいな。普通、美人の先生が赴任してきたら騒ぎ立て、スリーサイズがどうだとか彼氏はあるのかどうだとかあれこれ質問するのが常識だろう? 今そういった体験をしつかりこなさなければ将来苦労することになるぞ?」

何時の時代のどこの世界の常識なんだ、それは?

「ちよつと待つて下さい！ 後から来て何を仕切っているんですか！？」
「ここはまだ私のステージですよ!？」

「まあそう言うな、君はまだ若い。質問される機会なんてこれから先まだまだあるだろう。ここからは私のステージだ、君は譲りたまえ」
「いえ、それは譲れません！ この『転校生の質問』というステージは、今日が唯一無二の戦場なんです！」

「…ほう、そうか！ その意気込みやよし！ 君のような肉食系の女子は嫌いじゃないぞ！ ではここは公平に、交互で質問タイムをしようではないか！ さあ生徒諸君、誰か質問はないか!？」

そう促されても、なお無言の状態が続く。

…皆分かっているのだ。ここから先は一步踏み出せば弾丸の嵐に見舞われる恐ろしい戦場だということを、踏み入れた瞬間狙い撃ちされてしまうことも。そして誰か一人が足を踏み入れない限り、この状況は進展しないということも。でも、その犠牲者には皆なりたくないから、誰一人言葉を発しないのだ。

「む…？ おお、誰かと思えば、君はツインテール部部長の観束君ではないか！」

「え!？」

そして憐れにも一人目の犠牲者が決まった。尊先生の視線が総二へとロックオンされたのだ。

「どうしたんだ、私のことを熱い視線で見つめて！ あれか、君はあの時、部室で『ツインテールを愛するのに理由はない』といったな。つまりそれは、私の髪型であるツインテールも愛してくれると受け取っているのかな!？」

もうやめてあげて下さい先生！ 俺は叫びたくなる。友人が知らない間に言い放った恥ずかしいセリフを公衆の面前で聞かされることとか、愛香さんが爆発数秒前の爆弾のような状態で尊先生を睨みつけている事とかをジツと見守る事がもう、心臓に悪すぎる。

「そうかそうか！ 遠慮する必要なんか無いのに、奥手な少年だなあ君は！ ならば君にこれをあげよう！ 私からのささやかなプレゼントだ!!」

総二の席まで歩いて、尊先生は何やら封筒を総二に手渡した。ガサガサと開けると、折り畳まれた紙が出てきた。

「どうだ、嬉しいか？」

「いや…これ、婚姻届って書いていますけど、気のせいですか」

「気のせいではないぞ。君は高校生にもなつてその程度の漢字も読めないのか？」

「…既に妻の欄に先生の名前が書いてあるんですけれど、それは？」

「当たり前だろう、夫と妻の名前が書かれて婚姻届は初めて成立するんだ、白紙のままでは渡さんよ。相手に失礼だからな」

「相手って!？」

「君に決まってるだろうっ!!」

ビシッと総二目がけて指を指す尊先生。

…おかしい。何かが激しくおかしい。もの凄く非常識な事を口走っているのに、尊先生は何の迷いもなのまま教壇でジツと構えている。

「君はツインテールが好きなのだろう？ ならば私と婚約しても何の問題もないはずだ！ 君は私のツインテールを好き勝手できる、私は君と結婚したい！ 互いが互いの得となるwin-winの関係がここに成立する!!」

自分のツインテールを摘んで、超理論を熱弁する尊先生。そんな先生をちよつと可愛いかな？ …って俺は胸がときめいてしまったが、待て待て、ここで流されてしまつてはいけなさと感じる。総二、踏みとどまれ！ そこにハッピーエンドはないぞ!!

「成立する訳ないでしょうこの年増！ 総二様は既に売約済みなんです！」

ここでトウアールさんが乱入してくる。…もう彼女からは教室に入ってきた時に見せた優等生の空気は微塵も感じられなくなつてしまった。

「総二様、そんなものさつさと破り捨ててください！ 誰の許可を取って求婚しているんですかこの年増！ 総二様と私はねえ、前世からの求婚者なんですよお!!」

そう言つてトゥアールさんは得意げにクラス全体を見渡すが…皆、
全くのノーリアクションだ。

「な、何で反応してくれないんですかあ…普通はもつと騒いだり、黄色い声を出したりするじゃないですか…漫画やラノベではお約束じゃないですか…」

ヒックヒックと涙目になるトゥアール。…だって、皆この異種格闘戦の空気とペースに巻き込まれたくないんだよ。だから反応しないんだよ。

「若いな…転校生君。君が若いのは大変羨ましく憎ましいが、それよりも考えが古い！ 前世がどうだろうと今恋人がいようと、それは求婚するには何の関係もないんだ!! なぜなら…結婚というゴールは恋人がいようといまいが、全ての人に平等にあるからだ!!」

バーン！ という効果音がその言葉と共に聞こえてくるような錯覚がする。

「こ、これが婚期を逃した女の思考回路なんですか…?」

トゥアールさんの動揺で、周りの女子がザワザワとざわめきだす。私もあぁなつてしまうのか、と心配になっているのかもしれない。

そして尊先生は更に語りだした。

「…かつて私もそうだった。恋人がいて、人よりも上だと自負していた時期があつた。結婚なんてできて当たり前、そう思っていた…。だがな、恋人に振られ、私には仕事しかないのだと仕事に打ち込み…あつという間に時が過ぎた。私ももう気がつくともう28だ。30という大台まであと2年しか残っていないんだ！ いいのか君たちは? こんな三十路射程内にまで結婚できない女、売れ残りの女になつてしまつていいのか!？」

「いやー!!」

「どうしよう、私彼氏なんていないのに!？」

「い、今いる彼氏と結婚しなきゃ…あ、でも半年もまだある…」

女子たちの悲鳴が響き渡る。

…俺たちはどうしてまだあつて数分の先生から結婚観についての話を聞かないやならないんだろうか…?」

「そうだ、私を反面に君たちにも結婚という問題に真剣に考えて欲しかったのだ」

：なんて嫌な教育なんだ。そして尊先生のターゲットが再び、総二へと戻った。

「さて観束君！ もう婚姻届は書き終ったかな!? 書き終ったのなら私の前に持ってきてくれ!! 大丈夫だ安心してくれ、君がこの学園を卒業し、結婚できる年齢になるまでしっかりと私が責任を持って保管しておくから!!!」

何一つ安心できない！ 狂気すら感じる先生の行動にいよいよ逃げ出したくなる。

「ちよ、ちよつと待つてください！ 流石にこれはジョークの域を超えています！」

異議ありと言わんばかりに愛香さんが立ち上がり、抗議する。が、そんな抗議、このメイド飢婚者教師には届かない。

「何が冗談か！ 私がこれまで配ってきた婚姻届526枚、全て本気だ！ ただ相手の都合がちよつと悪かっただけなんだ！」

なおさらよくねーよ。

というか会って数分しか経っていないのに、いきなり婚姻届を出される女性を結婚したいと思う男性がはたしてこの世にいるかどうか。いたとしたら相当な変わり者か、どんなバグや反則技を使ったんだと疑われることになるだろう。

「…さて、男子諸君？ 観束君のように婚姻届が欲しいものはいないか？ なあに遠慮はいらない、この学校の男子生徒全員分の婚姻届を私は持ち歩いているからな、枚数の心配はしなくてもいいぞ！」

男子生徒全員、受験当日かと言わんばかりに教科書と筆記用具を机に広げ、真面目に授業を聞く体制に入る。俺は結婚なんかには興味ありませんと猛烈にアピールしている：勿論俺もその一人だ。

「ふむ：真面目だな。教師として嬉しいが：女としては少し悲しいな」

どうでもいいから早く帰ってくれ！ クラス男子全員の願いが一つになった瞬間であろう。と、ここで尊先生は何か思い出したように

手を叩いた。

「…おおそうだ、確かこのクラスにはもう一人ツインテール部に所属している男子生徒がいたな!」

その発言が聞こえた瞬間、俺の心臓が跳ね上がった。火種がこつちに回ってきた!?

「確か名前は…丹羽、そうだ丹羽光太郎だ!」

クラス全員の視線が一斉に俺に向いた。俺は恐怖でギョツと目を閉じ、うつむいた。

「さあ、出てきてくれ丹羽君。先日ツインテール部に顔を出した際、君だけはまだ挨拶が済んでいないんだ。怖がらなくてもいいんだ、出てきてくれたまえ! 私は君に婚姻届を渡したいだけなんだから!!」

皆の視線が早く出るよ! と訴えてくるが、俺は固く目を閉じ、拳を固く握る。

(違うよ、俺はそんな名前じゃないよ。人違いだよ、そんな奴このクラスにはいないよ…)

心の中でそう叫びながら、あと少しで終わるHRを逃げ切るつもりだった。尊先生は中々出てこない俺に少しだけ寂しそうに呟く。

「ふむ…シャイなのか。いまだき流行りの草食系男子なのか、丹羽君は…」

あんたから見れば誰だつて草食系だ! と、丁度その時、チャイムが鳴り響き、HRの終わりを告げた。

「おお、HRが終わってしまったな…」

「終わってしまったな、じゃないですよ! どうしてくれるんですか、年増メイドおお!!」

トゥアールさんがこの世の終わりのような声色で絶叫していた。きつとそれは転校生らしく新天地でやるべきことが滅茶苦茶にされての絶叫なんだろうなあ…。

「ふむ…まあいいだろう…また会ったときにでも渡せばいいからな。…ではさらばだ、観束君、丹羽君!!」

尊先生はそう言い残し出ていったが、出ていく際にヒュン! と何かが風を切る音とドスツ! と何かに突き刺さる音が聞こえた。奇

しくもそれはヘッジギルデイの時の針を飛ばすあの音にどこか似ていた。

「?」

ふと不思議に思い、顔を上げ：ギョツとした。

机の上：丁度、顔をあげた時に目が合う地点に、ヘッジギルデイのツンデレの針よろしく、婚姻届が机にと突き刺さっていたのだ。ビーンと音を立て、左右に小刻みに揺れる。

尊先生は退出の際に、俺の机目がけて婚姻届を手裏剣の如く投げ、渡してきたのだ。なんて投擲技術でなんて斬新な渡し方なんだ：。というか婚姻届ってそんな用途では使わないはずじゃないのか？

「…」

訳の分からない内に婚姻届を渡されてしまった総二と俺。二人は泣きそうな顔で向き合い、こう言った。

「誰か助けてくれ!」

俺は、ツインテイルズは、本当に世界を守れているのだろうか？世界は守れているけれど、何かとんでもない物を拡散してしまっているんじゃないだろうかと突き刺さっている婚姻届を見ると、感じざるを得なかった。

ちなみに俺たちに渡された婚姻届は、愛香さんがビリビリに破いてくれたので一安心だった。：また、渡されるかもしれないけれど。

第22話 巨乳とツインテール

アルティメギルの秘密基地。

海竜の怪人、リヴァイアギルディは小包みを一つ持ち、悠然と廊下を歩いていった。そして、目的の場所にまで辿りつき、懐から一枚のカードを取り出す。

「…」

スパロウギルディから借りておいたカードキーを使って、無言でロックを解除すると、リヴァイアギルディはとある一室へと足を踏み入れた。

「ふん、相変わらず女々しい趣味だ…」

目の前に広がる光景を見ながら、リヴァイアギルディはどこか懐かしそうに呟く。相変わらぬの趣味であった。

部屋の広さは6畳ほどであったが、そのほとんどを占めているのが女の子のフィギア。本棚、机、ベッド。ありとあらゆるスペースに隙間なく、己の愛するツインテール少女のフィギアが置かれていた。

(最後に奴の部屋を訪れたのはいつの話か…)

ここはつい数日前まで隊長であったドラグギルディの部屋だ。

同じ部隊にいた昔は、互いの部屋へ行きツインテールについて熱く語ったものだ。特に『おっぱいとツインテールの定義』については一晩会っても語り尽くせなかつたほどだ。何故おっぱいとツインテールは揺れるのだろうか、と世界の心理に到達するかもしれないような話題は、若造であった2人には少し早すぎる話題だったのかもしれない。

だが、そんな2人も部隊の長となり、中々会う機会もなかつた。会えたとしても年に1度か2度か…そして、突然の奴の死。奴は、ツインテールを愛していたドラグギルディは、一足先に逝ってしまった。

「…馬鹿野郎め」

リヴァイアギルディの股から生えている触手から、水滴がポタリと垂れ、地面を濡らした。

…悲しくない、といえは嘘になる。元々長く生きられるか分からな
い侵略活動、その中で同胞が散つていく姿など何回も見てきた。心
中ではしようがないと割り切っている部分もあるが、それでも別れと
いうものはつらいものだ。

エレメリアンは死ぬと光になる。死体は残らず、其処にいたとい
う形跡も何一つ残すことなく消えてしまう。だからエレメリアンには
墓標を置く習慣はない。精神の力である属性力を糧とする彼らは精
神エネルギーの塊ともいえるべき存在。ただ消えるだけの存在に、宗
教の教えである生まれ変わりなど望めるものではないからだ。

消える時は潔く消えよ——これがアルティメギルの掟であり、信念
だ。我々は死ねば消えてしまう存在。ならば、無様に恥を見せるな、
恥を晒すな。

(そして、自分がここにいたという証だけでも世界に刻んで散れ…！)
まだ自分がひよっこだった頃、隊長にそう教えられた言葉だった。
…そんな隊長ももう随分前に逝ってしまった。

ふと、ドラグギルデイが事務で使う机の上にちよこんと一つの箱が
乗っていることに気がついた。机に近寄り、箱を確認する。

その箱は『完全可動・アクションファイギア テイルレット』と書
かれており、まだ封を切っていないようであった。どうやら最後の出
撃の際、戦いが終わった後にでも開けようとしていたのだろう。奇し
くもそれが、ドラグギルデイの墓標のようになっていた。

(テイルレット…か)

箱に書かれた文字と写真を見ながら、先ほど拝見した資料映像のこ
とを思い出す。

テイルレット、噂で聞いていた通りの強さだった。ドラグギルデイ
が生涯最強の敵、最高の思い人と宣言しただけはある、その強さはま
さにこの星の守護神ともいえるべき存在だった。

「ふん…受け取れ、ドラグギルデイ。俺からのせめてものの餞だ」

その即席の墓標に、リヴァイアギルデイは小包みから取り出した
おっぱいマウスパッドを供えた。幼女とは対極にある、豊かなバスト
を模したマウスパッドだ。

本来、人間ならば、ここで花や酒を供えるのだろうが：エレメリアンは精神の生命体だ。花の芳香においも分からなければ美酒さけの味も分からない。人に似て、人ではない生命体、それがエレメリアン。

だからそんな彼が、亡くなった同胞の死を悼んで捧げるものは：おっぱいマウスパッド以外に何かあるというのだ。

「お前はツインテールを愛し、それを力に変えて戦った：だが、もうよいのだ。ゆつくりと休め、ドラグギルディ。そしてたまには幼女だけでなく、豊かなバストのお姉さんにも目を向けてくれ：。戦いを忘れ、心安らぐことを祈っている」

そして、リヴァイアギルディはこう呟いた。

「貴様の意志は——この俺が継ぐ」

リヴァイアギルディは踵を返した。

「お前を破った最強の幼女：そのツインテールを倒すことで、お前への鎮魂としよう」

そう言い残し、部屋を出ると、大勢の部下がそこに待機していた。そしてリヴァイアギルディは一人の怪人に声をかけた。

「分かっているな、クラーケギルディの部隊には負けられんぞ」

「はっ!!」

ラージバスト
「巨乳属性の強さを、奴らに示してみせよ!」

意気揚々と立ち上がるのは巨体なりヴァイアギルディをさらに上回る身体を持つ怪人であった。頭部にある猛々しい角が特徴の猛牛型の怪人、バッファローギルディである。

「必ずや、ご期待に応えて見せます!」

リヴァイアギルディの懐刀が、ツインテイルズ打倒に燃え、荒々しい足音で出撃した。

※

転校生のトウアールさんの高校デビューが完全失敗したその日の放課後。俺がツインテール部という謎の部活の一員だと知られてしまったという事実と変な先生に目をつけられてしまったという2つ

の傷で痛む心を引きずりながらも、出現したエレメリアン退治へと赴いた。

アルティメギルは俺の都合を待つてはくれない。例え、幽霊部員なのに、筋金入りのツインテール馬鹿の総二と同類だとクラスメイトに勝手に解釈されたことや、愛香さんがもの凄く同情的に俺を慰めてくれたりしたこと、トウアールさんがクラス全員から変人扱いされてしまっていることなんてお構いなしに、敵は現れるのだ。

「キヤーー!」

「助けてー!」

今日の戦いの舞台はグラビアアイドルのオープンコンテスト会場。大きな会場に現れた怪人に水着姿の美女たちが慌てて逃げる。彼女たちが逃げ惑い、跳ねるたびに胸がぶるんぶるんと揺れる。…正直目のやり場に困る。

「ああ…谷間なんてみんな無くなってしまえばいいのに」

そして今日のテイルブルーは今まで以上に怒っていた。俺がいるだけでも不機嫌なのに、今日の怒りの矛先は何故か怪人より水着姿の美女たちに、その揺れる胸に向けられていた。

「ほんつと胸くそ悪い…! 早く終わらせて帰りたいわ…!!」

「いや、早く帰りたいのは同感ですけれど…」

「ああ!? 何か言ったファイヤー!?」

「いや、何でもないです!」

何故かそんなブルーの姿が、今日の怒った時の愛香さんとダブって見える。そういえばなーんかあの2人、雰囲気似ている気がするんだよなあ…。

「ふははははは! 現れたな、ツインテイルズ!!」

怪人が、ドシンとステージ上に現れた。その巨体が着地したことで、ステージに大きなヒビが入る。

「我が名は猛牛の戦士、バッファローギルディ!! 我が愛する巨乳ラージバスト属性を広めんとする大義を掲げる主の懐刀なり! さあテイルファイヤー、我と戦え!」

見た目は大変厳しい怪人だが、いつも通りの敵と同じく、顔と言動

が一致しない。

「な、なんであいつ、テイルファイヤーを名指したんだ!？」

隣にいるレッドが不思議そうな顔をする。そんな疑問に、バッファローギルデイは丁寧に答えてくれる。

「ふふふ…それはな、テイルファイヤー、貴様のバストが一番大きいからだ!」

「はあ!？」

大きいバスト。そんな単語に反応し、恐ろしいまでの顔をしながら俺を睨むブルー。…勘弁してください、そんな人殺しのような目で俺を見るのはやめてください。

「我が求めるのは巨乳! ならば、ツインテイルズ一の胸囲を誇る貴様を倒すことで、我らの侵略は第一歩を踏み出せるのだ!」

「…そんなに大きいのかな?」

女の子のバストのサイズとか、詳しいことがよく分からない俺は隣のレッドに聞いてみると、レッドはうんうんと頷く。ブルーは『嫌味が貴様』とでも言いたげな憎々しい目で俺の胸を見た。

「私の眼力による測定によると貴様の3サイズは上から82/56/キすぎもなく小さすぎもしない美しさが貴様にはある!! 自信を持ち、これからも精進したまえ」

「はあ…どうも…」

何か反応に困るアドバイスを受け、とりあえずお礼を言うておく。

「次にファイヤーの娘、テイルレッドよ!」

「えっ!？」

レッドが困ったような声を出した。勿論、俺も驚いた。今コイツ、テイルレッドを俺の娘って…。

「そうだ、ファイヤーの一人娘、テイルレッド! 貴様のバストは…!」

「ちよ、ちよつと待ってって! 別にファイヤーとはそんな関係じゃ…!」

「上から—」

「話を聞けえ!!」

だがバッファローギルデイはお構いなしに話を進める。

「61／48／64! 貴様はまだ小さいが…まだまだ成長段階!

お母さんに劣等感を抱くこともあるかもしれないが、めげずに頑張りましたまえ! 好き嫌いすることなくご飯をたくさん食べ、たくさん睡眠をとるんだぞ! いいな!!」

「お、おう…」

コイツ、良い奴なのか悪い奴なのか分からないな。いやそれはこいつら全員に言えることか。

「さあ、では戦いを始めようかテイルファ」

「ちよつと待てええええええ!! あたしは、ねえあたしは!」

戦いに戻ろうとしたバッファローギルデイに猛烈な勢いで糾弾するテイルブルー。

「なんだ貧乳女」

「ひんっ!?!」

超ストレートな悪口を言い放つバッファローギルデイ。

…確かにテイルブルーはレッドや俺に比べて、露出が激しい。激しいのにも関わらず、ある特定の部位が若干寂しい印象を帯びている。けれどバッファローギルデイのその言葉は、あまりにもド直球過ぎた。

「我は貴様に興味がないから一言で終わらせてやる…貴様は貧乳だ。迷うことなき貧乳だ。ファイヤーと同じほどの背でありながらバスト72とは…」

「あ、あんたねえ…」

ああ、テイルブルーのツインテールが妖怪のように逆立ってきた。ワナワナと震えている。

「ひ、貧乳はステータスって言葉を知らないのかしら…あらゆる物は進化の過程で小さく、薄くなっていったのよ…テレビも電話もパソコンも…私たちの身近にある物はみんな小さくて薄いものよ…」

「つまりは何だ、貴様は今や巨乳の時代は終わり、貧乳の時代とも言いたいのか?」

おい、もうその辺でやめておけ、バッファローギルデイ！ テイルブルーが拳を握り始めた！

「そうよ…今や貧乳は、私たちの世界のトレンドなのよー！」

「ふん、下らん！ こうも堂々と言われると滑稽で憐れだな、テイルブルー…いや、タイラブルー!!」

「あああああ!? 誰の何が平らだつてえ!?」

「おおおおおお落ち着けブルー!!」

レッドが焦ったようにブルーに呼びかけるが、はたしてその声は彼女に届いているのだろうか？ いや聞こえていないんだろかなこれは！ 握りしめた拳から血が滲み出てきたぞ!!

「物事が小さいのがトレンド？ 貧乳はステータス!? ありえんな、貧乳がトレンドならば、今頃世界中のメディアから巨乳は消え、エロゲや同人誌から巨乳が減んでおるわ！ 貴様はそれに気づかず己の貧乳の身体を認めたくがないためにそうやって自己完結しているだけだ！ なんと憐れな事か！ …さあ、戦おうぞテイルファイヤー！ 我の鍛え上げた巨乳属性ラージバストと貴様のツインテール属性！ どちらが強いかわッキリしようではないか！」

「巨乳属性…」

そしてブルーはその一つのワードにピクリと反応した。

「巨乳属性…つまりはあんたを倒せば、巨乳の属性玉が手に入るのね…?」

ブルーがブツブツと小さく呟いているのを、この場にいる誰もが気付かなかった。

「あんたの…!」

瞬間—。

「あんたの属性玉を、よこせえええええ!!」

テイルブルーが一気に加速し、猛然とバッファローギルデイに襲い掛かった。

「なっ!」

「よこせよこせよこせ！ あんたの力、あたしによこせええええ!!」

テイルブルーが武器である長槍『ウエイブランス』を取り出すと、

バツファローギルデイの横っ腹に突き刺した。…まるで通り魔だ。

「うおおおおお!!」

「さつきから、貧乳貧乳貧乳貧乳…うるせええええええんだよおおおお!!」

ゴスバキ、ドゴオ！ 倒れたバツファローギルデイのマウントを取り、目を血走らせながら何発も何発も拳の雨を降らせる。その姿は鬼神。マウントポジションを取って目を血走らせながら敵を殴るなんて、到底正義の味方の戦い方ではなかった。

「ブ、ブルーがキレた…」

「こ、怖え…」

俺とレッドは互いに抱き合いながら、目の前の悲惨な光景を眺めていた。これは…まさに暴力だ。手加減とか、情けとか容赦とか今のブルーからは微塵も感じられない。ただ目の前の敵を倒さんとする力。俺たちは今本物の暴力を目の当たりにしているんだ。

「ふー、ふー、ふー…」

「あ、あ、あ」

バツファローギルデイはマウントポジションから何とか逃げようと地べたを這うが、その隙をブルーは逃さない。

「ウェイブランス!!」

バツファローギルデイの横っ腹に突き刺さった槍を抜き、そう叫ぶと、槍の切っ先が変形し、三又に別れた。

「くたばれええええ!!」

「ぬわあああああ!!」

そしてそのままバツファローギルデイに槍を突き立し、その際に発生したエネルギーで大爆発が巻き起こる。

「ひ、ひでえ…」

レッドがポツリと漏らした言葉に同意せざるを得ない。槍を地面に突き刺し、手を己の血で染め、鬼の形相で佇んでいるブルーを見ると、どっちが悪役なんだと思わず迷ってしまう。

そしてブルーは血肉を漁るハイエナのようにバツファローギルデイが消えた場所を手で探ると、ほどなくして地面に落ちていた結晶

を見つげ、手に取った。

「やった…巨乳属性ゲットラージバスト…これで…これであたしも…フッフ」

やめてください、ブルー！ 今日の戦いの場所が場所だけにカメラとかが滅茶苦茶回っているんです！ その悪役みたいな笑みを今すぐ取り消してください！ さもなければ明日、あなたは朝一でこのことについて絶対に後悔することになりますから！！

「テイルファイアアアアアア！…これで巨乳はあんたの専売特許じゃなくなつたわよお!! 覚えときなさいよおおおお!!」

テイルブルーのその奇妙な勝利の雄叫びは会場中へと響き渡った。

テイルブルー…あなたは一体誰と何の戦いを繰り広げているんですか？

※

「愛香、もう諦めろって」

「ちよつと待って！ 絶対、絶対発動するんだから！ ワンカット挟んだら、ナイスバディになる私が立っているはずなんだから!!」

「そう言つて何回目の挑戦なんですか、愛香さん？」

「72回目の挑戦ね、ええ！」

地下基地へと戻ってきた総二は隅っこでテイルブルーに変身して、左腕を叩いたり振り回したりしている愛香を見ながらそう言った。トウアールもこの光景をどこか優越に浸っているような目で見ていた。

が、愛香はそんなこと眼中にないみたいには、何度も何度も巨乳属性ラージバストの属性玉を左手に装備されている属性玉変換機構エレメントタリシヨンにセットして発動させようとしているが…結果はご覧の通りだ。ギアはうんともすんとも言わず、愛香の身体も何も変わらない。

ちなみに属性玉変換機構エレメントタリシヨンとは、テイルギアに標準装備されている武装の名前だ。ここに属性玉をセットすることで様々な能力を付加させることができるのだ。例えば兎耳属性ラビットをセットすると脚力強化、といった具合だ。

愛香は巨乳属性ラージバストの属性玉をこの機能で使えば巨乳になれると思っただろう…だが現実是非情であった。

「使えない…」

愛香はこの世の終わりのような顔をしていた。その表情は数時間前の輝きに満ちていた顔と対極のものだった。

「お前、仮に使えたとしても、今まで名目通りの効果だったことがあるか？ 兎耳ラビットだつてウサギ耳が生えてきたりはしなかっただろ？」

「それでもねえ、それでもあたしには最後の希望だったのよおおおお!!」

愛香はおいおいと泣き始めた。まるであの鬼神つぶりが嘘のようだった。

ここで愛香が言っていた『使えない』という意味は能力が役に立たないという意味ではない。文字通り『使用できない』のだ。

トウアール曰く、これは純度の問題らしい。これはエレメリアンたちの身体構造のせいで起きる問題なんだとか。

人間の趣味嗜好が一つではないように、エレメリアンも生きていれば人間と同じように多数の趣味や思い入れを持つようになり、それが時間と共に本来自分が持つ属性力とは違う属性力を備えてしまうケースがあるのだというのだ。

以前戦ったフォクスギルデイは自分の核となる髪紐リボン属性と後付けの人形属性ドール、2つの属性力を所持していた。あれがいい例かもしれない。

そして、後から得た属性力が大きければ大きいほど、本来自分が持っている属性力の純度が下がっていつてしまうというのだ。今日倒したバッファローギルデイはもしかしたら他にも属性力を備えていたのかもしれない。だから手に入った巨乳属性ラージバストも純度が低い属性玉となつてしまったのだ。

「濃いドリンクを水で割るとというのが分かりやすい例えかもしれないね」

トウアールはテーブルに置かれている乳酸飲料と水を手に取った。『本来の属性力』を白い乳酸飲料で例え、『後付けの属性力』を水と説

明しながらテキパキと2つのドリンクを作っていく。そしてテーブルの上には白さが濃く出ているドリンクと水っぽいドリンクの2つが出来上がる。

「おお、分かりやすい！　じゃあ今日手に入れた属性玉は…」

「そうです総二様、この水っぽいドリンクが該当しますね」

そしてテイルギアもある程度の純度の属性玉でない^{ラージバースト}と、発動しないようになってい^{ラージバースト}らしい。そして今日得た巨乳属性の属性玉はそのレベルを超えてい^{ラージバースト}なかったらしい。

「じゃあ、これどうすればいいのよ…」

愛香は宝の持ち腐れとなつた属性玉を床へと転がした。

「そのことについて、私から案があるわ！」

するとどこからともなく声が聞こえたが、皆騒がなかった。もう声色で誰か分かっているからだ。

「お義母様!」

唯一反応するのはトウアールだが、もうこの2人の悪の幹部ごっこにリアクションするものは誰もいない。これも慣れてしまったからだ。

「そのコアを使って、新たなテイルギアを作ればいいのよ！」

その言葉と共に入ってきた母親の恰好に、総二は口に含んだ乳酸飲料を思いつき噴き出した。

「あら何を驚いているの総ちゃん？　飲み物がトウアールちゃんにかかっちゃったじゃない、女の子に迷惑をかけちゃダメだってあれほど…」

「母親が平然と悪の秘密結社みたいなコスチュームで入ってきたら誰だって驚くわ!!」

「いえ、これは迷惑ではなくてご褒美ですよお義母様！　総二様の白くて口に含んだあれをぶっかけられるなんてご褒美以外の何がありますか!」

「もう黙っていてくれトウアール!!」

「はい黙っています!」

そう…総二の母、未春は悪の幹部が身に纏うような黒いマントと髪

飾りを着けて、地下基地に現れたのだ。中二病に関しては半分諦めていたようなものだが、もうここまでのレベルに達してしまっただか：と総二はがつくりと肩を落とす。衣装もどこで作ったんだ、と言わんばかりのクオリティに仕上がっている。この恰好に黒いフルフェイスヘルメットを被ったら、もう完全に某宇宙戦争の暗黒卿だ。

「で、さつき言っていた新たなギアって何だよ？」

諦めたようにテーブルの席に座り、母親に問う総二。

「だから、この間総ちゃんが入れたコアを入れたツインテール属性があるでしょ？ それと今日手に入れたコアを組み合わせるの新しいギアを作ったらどうかしらって。ここらでもう一人追加戦士をテコ入れしてもいいかなって話よ。ほら、良くあるでしょ二つの力を一つにって！」

ツインテールの属性力を力としていたドラッグルディとの戦いを制した総二は、ツインテール属性の属性玉を持っている。だが、それを属性玉変換機構エレメントリジョンで使うことはトウアールから固く禁じられていた。ギアに内蔵されているツインテールの属性力と合わさると暴走の危険があるからだという理由でだ。結局、それは日の目を見ることもなく、総二のギアの中でそのまま保管されている。

未春はその使っていないツインテールの属性玉を使ってもう一つギアを作ってみないかと提案してきたのだ。

「…あのなあ母さん、そんなこと簡単に言うけど、できる訳が」

「いえ、できますよ」

「ええっ!？」

総二も、この話題に今まで興味を示さなかつた愛香もトウアールがあっさりと言い放った発言に面食らった。

「これ以上新しい戦士はどうかと思いますが、少なくともここら辺で予備のギアを開発したいかなって思っていたんです。で、そのギアに属性力のハイブリット技術を組み込んでみましょうか」

前方の電子パネルにハイブリット技術の概要が現れた。難解すぎてちんぷんかんぷんだが、その中に2つの属性玉が存在することは辛うじて分かった。

「要は総二様が変身した時に起こる幼女化現象の逆を意図的に行うんです。さつきの使えない巨乳属性ラージバストの属性玉を上手く利用すれば、属性玉の本来の性能を発揮できなくても身体変化くらいの力を発揮させることができるかもしれません」

耳ざとく反応する愛香。見る見るうちに顔に輝きが戻ってくる。

「じゃあ…じゃあそのギアを使えば巨乳に変身できるの!?!」

「まあ、あくまでも可能性の話ですけれど…」

「じゃあお願いトウアール! それ私にちょうだい!」

愛香は空中に飛び跳ねると、一瞬のうちに変身を解除し、トウアールの前で頭を下げた。なんとという無駄のない無駄な動き…。

「愛香さんには私あげたギアが既にあるじゃないですか」

「新しいのがあるのならこれと交換して! このギア、起動する時変な音するし、温度はやたら上がるし、変な所でフリーズしたりする時があるんだから!」

もはや末期のパソコンのような症状だ。開発者を目の前にあれこれ好き放題言つて、トウアールに失礼だろう…と思っていたら、トウアールは意外にも笑顔だった。

「そうですかあ、どうしても欲しいんですか」

しかしその笑みは、ニタアアという効果音がつくほど、大変意地が悪い笑みだった。

「じゃあ愛香さんには今までの詫びをしてもらわなければなりませんね、とりあえずは土下座と私に様付けで敬って貰わなければ新しいギアは渡せま…」

「トウアール様! 今まで数々の無礼、誠に申し訳ありませんでした!!!」

その間、僅かコンマ一秒。謝罪の言葉と共に見せた土下座は美しく、優雅にさえ見えるほどだった。

「ひいひいひい!! ああ、あの蛮族が私に土下座!?! あなたにはプライドはないんですか!?!」

どうやらトウアールは土下座と巨乳の究極の選択で苦悩する愛香を眺めていたかったらしいが、そのリアクションから、全くの予想外

の行動であつたらしい。

「乳が手に入るのならねえ、巨乳になれるのならねええ…プライドなんて捨ててやるわよおお!!」

ゆつくりと頭を上げた愛香の頬には、血涙が流れていた。それは魂の叫び、決して頭を下げたくない相手に下げてまで手に入れたい。その覚悟がひしひしと伝わってきた。

「あたしはねえ、ずっと胸が欲しかった…その可能性が、希望が！今、目の前にあるのよ！ だったら飛びつくしかないじゃない!!」

「愛香お前、そこまで…?」

「総二様、私は基本的に愛香さんのいうことは全否定して生きていたのですが、こればかりは別です。胸がどうでもいい女の人間でないんです。これは人生の命題なんですよ。ノースリーブのシャツの袖がどんなに伸びても長袖にならないように、貧乳はどんなに頑張っても谷間というものができないんです。だから寄せて上げるブラっていうのがあれだけ売れたんです」

深い。トウアールのその言葉に、女の世界の奥深さを一つ知った総二であつた。

「私はね、胸が手に入るのなら神にだって、悪魔にだって魂を売り渡していいわ!!」

そんな理由で売り渡されたら神様も悪魔も困るんじゃないかなあ？

「ああ、胸が、胸が欲しい…」

その悲痛な叫びは、まるで水を求めて砂漠を歩く、遭難者のようであつた。そしてそんな愛香に救いの女神の手が差し伸べられる。

「…分かりました、愛香さん！ その願い、聞き届けましょう!」

「トウ、トウ、トウアール様!!」

愛香は感極まつたのか、トウアールに抱きつき、泣いた。その抱きついた部分が胸ではなく、腰というポイントに愛香の巨乳に対する恨みがひしひしと伝わってくる気がする。

「普段は敵ですが、今回ばかりは別です。つかの間の握手って奴ですよ」

「ありがとう、本当にありがとう！」

「いいんですよ、だって私たち：友達じゃないですか」

「あらあらいいわね、青春って奴ねえ〜」

女同士の美しい友情物語が目の前で繰り広げられているその中で、総二だけがあることに気付いた。

腰に縫り付いている愛香を慰めているトウアールの顔が、かつてないほどの邪悪さで満ちていたことを。

そしてある一つの言葉が総二の頭に浮かんだ。：人は可能性に救われることもあるが、その可能性によって殺されることもある、と。

第23話 休日とツイインター

ついに大型連休、ゴールデンウィークが訪れた。世間はこの長い休みを利用して、遠出や旅行などに出かける人が後を絶たない。テレビではレジャー施設の1日の入場者数を今までより大きく更新したとか、テイルレットとファイヤーが市場に与えた経済効果はいくらかとかそんな話題ばかりをやっている。

「ふあああああ…」

俺はテレビを見ながら、ベッドの上で大きくあくびをした。そんな俺をレイチエルは注意する。

「ちよつと光太郎。あんまり気を緩めないでよ、あいつらいつ来るかわかんないんだから」

「そんなこと言ってもさあ、暇じゃん」

「…まあ、それは確かにね」

この大型連休の間を狙い、アルティメギルの魔の手が世間に迫るのかと思いきや、そんなことはなかった。

意外にも奴らは連休中の間、一度も人間を襲撃しないでいるのだ。何かあったのだろうか？ 前回のワイバーンギルデイの時みたいに充電期間にでも入っているのだろうか？ もしくはアルティメギル一行も連休に入って、休暇を楽しんでいるのか？ 少なくとも、敵が現れないこの連休を世間の皆様は満喫していた。

それは俺も同じだ。怪人が現れないので、休暇中に出された課題を悠々自適に行ったり、積んでいたゲームの進行などをやっていたのだが…僅か2日で飽きてしまった。

(何なんだろうなあ…いざやっていたいいよってなるとやる気が起きないこの感覚)

正直、暇だった。連休はまだ3日も残っているし、やるべき課題はもう終わってしまった。これ以上何をどうして過ごせばいいんだろう？ そしてそれは、この部屋の同居人も感じているらしかった。

「ねえ光太郎、どっか遊びに行かない？」

レイチエルも暇で暇で仕方ないといった顔で敷いてあった布団を

畳み、俺を見る。

一応、レイチエルも敵が現れないときにやるべきことはあった。普段使うプログラムのチェックや整備。今まで手に入れた属性玉の性能の解析と俺の『テイルドライバー』の定期検診とアップデート。特に『テイルドライバー』の整備は重要な仕事だった。

今までの戦闘データから得た情報を元に、アップデートしておく点がいくつかあったらしい。これであんたも少しは戦いやすくなるわよ、と笑顔で言っていた。

…だがそれらを手際よく片付けてしまうと、もう何もすべきことが残っていないかった。流石の天才少女も敵が現れずにここまで暇になってしまおうとは想定の外だったらしい。

「遊びに行くっていいってもなあ…大体何したいんだよ？」

「時間さえ潰せればどこでもいいわよ。何かお勧めの場所知らない？」

「って言われてもなあ…」

残念ながら俺はついこの間この町に来たばかりであり周辺の地理に詳しくなかった。せいぜい学校周辺と家との通学路近くの地理程度しか知らなかった。

「とりあえずさ、ここを出ない？ 何だか息が詰まりそう…。暇を潰せるならこの際なんだっていいわ」

「…それは同感だな」

テレビのスイッチを消し、寝間着から着替えるために立ち上がる。

するとレイチエルは何をするのか察したのか、無言で洗面所まで移動してくれた。

「悪いな」

「いちいち言わなくてもいいわよ、毎日やっていることですよ？」

そう、レイチエルが俺と出会い、同居するようになってから早一月が過ぎた。最初はぎこちなかったレイチエルとの同居生活も、ようやく慣れてきた。…あいつもようやく、少しくらいの家事なら手伝ってくれるようになったし。

(早く、着替えないとな…)

漫画やアニメなんかではこういった脱衣シーンとかは可愛い女の子に見られたり、逆があつたりするのがお約束なんだろうけど、悪いが我が家ではそういうことは起こらない。

女の子と一つ屋根の下で生活し、更にその同居人が幼女というだけでもの凄くこっちは気を遣うからだ。特に風呂の時や寝る時なんかそれが当てはまる。一歩間違えれば、俺はおまわりさんのご厄介になりかねない。だから、きちんと一線を引くところはきちんと引いて、同居生活を行っている。

共に戦うからこそ、日常生活でのそういった線引きは大事だともいっても言っている。変に身体の関係を持ったりとか、知りたがつたり、親しすぎたりするのは時に毒になったりするかららしい。

まあ、俺にロリコン趣味はないから身体云々はおおげさのような気がするんだけどね。

(まあ、それでも、な)

そういった線引きの事以外はなるべくだけど、叶えて上げたい。例えばあいつの好きな物をなるべく献立にのせてあげたりとか、外食のリクエストくらいは叶えた方がいいだろ？

俺はレイチェルが泣いたあの夜のことを思い出していた。あいつだって本当はランドセルを背負って学校へ通っているくらい幼いのに、戦いという危ない世界に踏み込んでいる。

そしてあの時見せた涙。どんなに賢い頭脳を持っていたって、やはりレイチェルも子供なのだ。だから、そういった線引き以外の事ではなるべくは気を遣わないように俺も配慮していた。

「おーい、着替え終わったぞー」

そう言うと、ガラガラとレイチェルは脱衣所から出てくる。

「何ていうのかパツとしないわねえ、男の時のあんたは…」

「うるせえよ」

出てきて早々、悪口を言われた。生意気だ、まあ相変わらずと言えば相変わらずだ。

「いつその事、ファイヤーの恰好で出かけない？」

「絶対嫌だ！」

鍵を閉めて、階段を下りながらも、レイチエルは面白そうに話しかけてくる。

「ねえ、光太郎、あんた女体化とかに興味は…」

「ねえよ!!」

そんな会話をしながら、俺たちは街へと歩き出した。

※

ゴールデンウィークの半ばということもあってか、街は人ごみでごった返していた。レイチエルは疲れたような顔をして、歩を進める。

「人、多いわねえこの町。やっぱり都会って感じだわ」

「どうかあれのせいもあるんじゃないかな…」

俺は疲れたような顔をして、数メートル先の奇妙な集団を指さす。

その集団はテイルレッドとファイヤーの顔写真が印刷されているTシャツを全員が着用しながらカメラやビデオを持ってあちこちウロウロしていた。さながらその集団は何かの宗教団体か、俺が日夜戦っているアルティメギルと非常に似て見えた。

「ここがファイヤーが戦った場所！」

「そして少女と握手を交わした場所だぜ！」

「俺もしてえなあ、ファイヤーさんと握手…」

「少女ともしたって言わないのか？」

「僕は贅肉だらけのこの腹の肉を削いで欲しいな」

「ああ、テイルファイヤーさんのドリルで僕の中に熱いあれを注ぎ込んで天元突破させてくださいって叫びたいぜ」

「だがそれは禁句だぜ、兄弟？ セクハラになっちゃうからな」

「分かっているさ、僕も最低限のTPOは弁えるさ」

「ああ、一ファンとして当然の義務だよな」

全然弁えられてねーよてめえら。世迷言が俺にまで丸聞こえだよこの野郎。

というか、辺りを見ればTシャツ集団のようにカメラを持ったり、

ツインテイルズ関連の商品を身に着けている人があちこちいた。

「なるほど、聖地巡礼って奴ね」

聖地巡礼。俺も聞き覚えがある言葉だ。

本当は宗教において、重要な意味を持つ聖地に赴く宗教的な行為を示す用語なのだが、日本ではアニメや漫画などの舞台やモデルとなった場所などを訪問する行為を示す意味が一般的だろう。多分レイチエルも後者の意味合いで話しているに違いない。

確かにこの町ではアルティメギルと多くの死闘を繰り広げた。駐車場で、小学校の校庭で、ハイキングコースで、ショッピングモールで…。

「じゃあ何だ、俺たちが戦った場所にはあいつらと同じような奴らがうようよと…」

「その可能性は大いにあり得るわ」

その中には海外で戦ったケースもいくつかあるので、そこも聖地としてカウントすると考えると、世界中にあいつらみたいな奴らがいるということになる。何だかゲンナリしてきた。もうやだ、この星。

「ねえねえこれ見て。面白い記事があるわ」

レイチエルはパソコンを片手で操作しながら、俺の裾を引っ張った。そこにはとあるニュースサイトの記事を見せてきた。

『お宝誕生か!』という題名の記事だった。

そこにはレインボーブリッジでの戦いで俺が瓦礫に埋もれて気絶しかけた際、俺の身体に乗っていた瓦礫の欠片が美術家の間で高値で取引されたという話題だった。そのニュースサイトでは過去にベルリンの壁の欠片が高値でオークションで取引されたケースがある為、これもその延長線ではないかと書かれていた。

「凄いわね、あんた。この瓦礫は歴史的価値のある物だってさ。近々美術館に飾られるかもしれないって」

「ああ、聞きたくなかった、そんな話」

ベルリンの壁の欠片≡俺の身体に乗っていたコンクリートという嫌な公式が頭に浮かんだ。どんなバグが起きればそんな公式が成立するんだ。

「ま、こんな話題が上るってことはそれだけ世界は平和だってことね」
「まあ、確かにな」

その言葉に思わず頷いてしまう。自分の世界が侵略されたレイチエルのそのセリフは非常に説得力がある。

世界が平和じゃなかったらあんな風に聖地巡礼する人も、取引だの何だのの話題は出ないだろう。

「ま、私たちはその平和を噛みしめながら、休日を楽しみましょうか？
正義の味方の特権って奴よ」

「ん、そうする…か？」

ふと顔を下げると、俺はあることに気がついた。

さつきからレイチエルのその目線は俺を向いておらず、近くにあるソフトクリームの売店へと向けられているのだ。ジーと脇目も振らないで機械からうねうねと出るソフトクリームを見ている。

…なるほどな、あれを食べたいのかコイツは。

「…分かったよ、今日はゆっくりと休もう。その前にお前が食べたいソフトクリームを買おうぜ」

「!？」

何で分かったんだ!? と言いたげな顔をしてレイチエルは顔を赤くし、俺へと視線の矛先を変えた。

そりゃあ、あれだけジツと見つめていたら誰だって分かるわ。こいつ頭は賢くてませているのに、変な所は年相応って言うのがな。

「わ、私はソフトクリームなんて子供っぽいお菓子なんて別に…!」

顔をプイツと背けるレイチエル。俺は少しばかり面白くなって、反撃しておくことにした。

「あっそ。だったら俺だけ買ってくるよ」

わざとらしく尻ポケットから財布を取りだして、ゆっくりと歩く。
「〜!」

レイチエルは耐えきれなくなったのか、小走りで駆け寄ってきて、俺のズボンを掴んだ。

「ん? どうしたんだ?」

ニヤニヤしながらレイチエルを見る俺。そんなレイチエルは顔を

真つ赤にしながらか俯き、ぼそぼそと答える。

「…しい」

「ん？ なんだって？」

そしてレイチエルはそんな俺のわざとらしい言動に腹が立ったのかローキックで俺の脛を蹴り、叫んだ。

「わ、私もソフトクリームが食べたかったって言うてるのよ！」

それだけを言うと「あうう」と小動物みたいに縮こまった。

「欲しいのなら最初っからそう言えよな」

「…悪かったわね、変な気遣わせちゃって」

レイチエルはまたパイと顔を背けた。俺は何を言っているんだかと笑った。

「いいよ、それくらい。ソフトクリームだろうがアイスだろうが何だって買ってやるからよ」

「…じゃあ、じゃあ私…あのいちごの奴が食べたい」

「はいはい。じゃあ俺は…」

レイチエルはぶら下がっているメニューを指さした。

まるで親戚の子供の付添いのようななど感じながら、俺は財布から小銭を取り出した。

※

「トウアール様、お茶です」

「ああ、ありがとうございます愛香さん」

「わざわざ貴重な時間を割いて、私の為にブレスの制作に取りかかってくれて、誠にありがとうございます」

「いえいえ、この世界の、しいては正義のためですから」

同時刻、地下基地では愛香が顔を引き攣らせながらの笑顔で、憎き仇のトウアールに紅茶を出していた。：しかしトウアールは一口だけ紅茶を飲むと、すぐにカップをトレイに戻した。

「ああそうだ愛香さん。この紅茶に何か盛られているかもしれません。毒見をお願いしますか？」

大変意地が悪い顔でトウアールは愛香に笑いかける。以前愛香から同じようなことをやられた経験があるのでその仕返しのためならなんでもやる。一瞬、愛香の顔はグツと強張る。

普段の愛香ならここで一発殴るか、「うるせえ飲め！」と無理矢理口に紅茶をねじ込むか、持ってきたトレイで顔面を叩くかのどれかを行うであろうが――愛香はにこやかに笑った。

「分かりました、トウアール様」

そしてグイッと紅茶を飲んだ。トウアールの口をつけた紅茶をまるで美味しそうにガブガブと飲んだ。

「ああそうだ、私なんだか肩がこっちやっとなー、巨乳はやっぱり肩がこりますねー」

「すぐに肩をおもみます」

「わあ、ありがとうございます愛香さん」

「やっぱり巨乳は大変なんですネ」

棒読みのトウアールに愛香は何もやり返さず何も言い返さず、従順に肩を揉む。そんな愛香の顔は菩薩のような表情を浮かべていた。顔で微笑み、身体の中に怒りを溜めている、そんな危険な状態だ。

だが、そんな愛香をトウアールは楽しむように煽っていく。機嫌一つで巨乳になれるテイルブレスの開発中止もあり得ない話ではない今、愛香はトウアールに逆らえないのだ。このことをトウアールはとことん楽しんでいた。

「愛香さん、知っていますか？ 最近、ツイーンテイルズの食玩が発売されたんですよ」

「へえそうなんですネ」

「全9種類ありまして、テイルレッドが4種類、テイルファイヤーが4種類、シークレットのテイルブルーが1種類なんですって」

「へえそうなんですネ」

「不思議ですよネー、どうしてなんでしようネー」

更に煽るトウアール。

「さあ、私には分かりかねません」

「私が思うには、コスト削減の為だと思うんですよネー、テイルブルー

は胴体がただの直方体だから、原型作りも楽そうですねー、ねー」
「ええ、そうですね」

感情ゼロのような、能面のような顔を浮かべて答える愛香。

：トウアールは気づいていないのだろうか。トウアールが何らかのいやがらせをするたびに、愛香はしつかりとそれらをカウントしていることを。今までやられたいやがらせをしつかりと全て覚えていくことを。

もし、もしもだ。これほどまでに愛香がプライドを捨てて、耐えているのにも関わらず、巨乳になれなかった。そんな事態になった場合、トウアールはいったいどれほどまでのしつぺ返しをくらう羽目になるのか。

：考えただけで恐ろしいことになりそうだった。

※

「そうですねか…ありがとうございます」

同時刻、神堂慧理那は行きつけの玩具店から出てきた。入り口近くに控えていた尊は慧理那へと駆け寄ってくる。

「どうでしたか、お嬢様？」

「駄目、でしたわ」

「…そうでしたか」

残念そうな顔をする尊を尻目に、慧理那はメモ帳にバツ印をつけながら、ため息をつく。近場の玩具店を全て見て回ったが、最後に訪れたこの店にも取り扱ってないとなるともう諦めるしかないのだろうか。

(やはり、どこにも売ってはいませんか…)

慧理那の頭の中にあるのは、あの一年生、丹羽光太郎が持っていたテイルファイヤーのベルトだった。

つい先日購入した『完全可動・アクションフィギュア テイルファイヤー』は慧理那の予想をはるかに上回る出来であった。慧理那の机の上にはテイルレッドとテイルファイヤーが仲良く手を繋いでいるポーズで大切に飾られている。…そのことが慧理那の中にある

ツインテイルズ好きの魂に火をつけた。

あの1年生が持っていたベルト、限定品のテイルファイヤーのベルトが猛烈に欲しくなったのだ。丁度、月初めに差し掛かったことで母親からおこづかいが貰えたので、慧理那は購入を視野に入れ、玩具系のサイトを見てみたのだが：驚くことにテイルファイヤーのベルトの情報を見つけることができなかった。

どうということだ？ と慧理那は思った。確かにテイルファイヤーのアクセサリやベルトを模した玩具などは見つけることはできたが、あの時光太郎が持っていたような『限定品のベルト』の情報だけは最後まで見つけることができなかった。

限定品で数が少ないから、情報も少ないのだろうか？ そう思うや否や、町中の玩具店を回り、聞いてみたが、結果は全て全滅。終いには「そんな商品本当にあるんですか？」と店員から言われてしまったほどだ。

「どういふことなのでしょうか…？」

慧理那は色々と考える。光太郎が何故、あんなベルトを持っていたのか？ という疑問だ。限定品と言っておきながら、何故ネットで情報が見つからないのだろうか？

まず考えられるのはあのベルトは光太郎自身、自分の手で作ったということだ。自作のベルトとなると、売っていないのも当然。：でもそうになると、どうしてあの時自分に嘘をついたのか？ という疑問が新たに生まれる。嘘についてまで何か隠したいことでもあったのだろうか？

（丹羽君はモデラーでも目指しているのでしょうか？）

それから色々な推理を試みる。身分を隠したモデラー、玩具メーカーからの刺客、熱狂的なツインテイルズ好きの一般人。そして…。（丹羽君自身が、テイルファイヤーなのでは…）

一瞬、ほんの一瞬、思ったことだ。あのベルトはもしかしたら本物で、あの1年生、丹羽光太郎はテイルファイヤーの変身者なのでは、と。あまりにも大穴すぎる考えではあるが…。

「…ふん」

そして直ぐにその愚かな考えを取り消した。あまりにもありえない話すぎて、慧理那自身笑ってしまった。

丹羽光太郎は男で、テイルフアイヤーは女だ。そもそもの話、両者の性別は違うではないか。仮に光太郎に女装癖があったとしても、男性と女性では骨格からラインなど何もかもが一致しない。スイツチのオンオフみたいに人の性別が簡単に変わる訳がないし、仮にそんな技術があるのなら自分のこの小さな身体を大きくして欲しいものだ。

(それに…あんなに美しい女性が、男性な訳がないではありませんか) テレビの見過ぎだと自分自身でも思いながら、慧理那は次に光太郎に会ったら、どこであのベルトを手に入れたのかを聞こうと決心し、帰路に就くのだった。

第24話 下着とツインテール

アルティメギルの秘密基地。2つの部隊の合流手続きなどがようやく終わり、気がつけばすっかり大所帯となった。これで誰もがようやく侵略活動も本格的に打ち込めると思いきや、意外な所で壁にぶつかった。

部隊統一。よそから集まってきた者たちを交え、新たな部隊を再編成する。その際の地位や役割を決める時に、その問題が起こったのだ。

現在、各部隊の代表者達は大会議室で熱い討論を繰り広げていた。各部隊の要人を集結させたこの頂上会議。その議論の論題こそ、問題の原因であった。

「まだ分からののか!？」

「分からんからこうやって話しているのではないか!」

ラージバスト 巨乳属性とスモールバスト 貧乳属性。この対極の属性ゆえに主張は平行線を辿り、対立に次ぐ対立で部隊は真つ二つに割れてしまったのだ。

どちらが上でどちらが下なのか。それによって統一部隊での地位やポジション、敷いてはその属性力の強さや素晴らしさ、その価値が決まる。皆、やれ自分たちが上だやれお前らが下だと互いの主張を繰り返している。

その勢いは今や元居た部隊のメンバーをも巻き込む事態となっている。そのせいでこの長期間、出撃すらままならなかったほどだ。

「この世界のラージバスト 巨乳属性の少なさに呆れ果てているであろう! 自らの身体にメスを入れ、偽りの胸で満足しようとする浅はかさな女子がこの世界は多すぎる! その浅はかな考えだからこそ、ラージバスト 巨乳属性が生まれぬのだ!!」

「だが、スモールバスト 貧乳属性は違う! 小さいから、ちっぽけだからこそ、その胸に誇りが生まれるのではないか!？」

「ならばそれはこちらも同じだ! 偽りがはびこるからこそ、本物の存在とその価値が希少になる! 美しくなれる! 若かりし頃にしか見せれない、一瞬の火花のような煌めきがラージバスト 巨乳属性にはある!」

「贗作がはびこるからこそ、荒れた大地に咲く一輪の花のように、純然たる巨乳属性ラージバストのほうが可憐に映えるのではないか!？」

一歩も譲らぬ両者の対立。厳つい顔をした怪人たちが、中学生の休み時間レベルの話題でここまで論じ合う光景を見たら、はたして侵略される側の人間はどう思うのだろうか？

「ここに巨乳属性ラージバストの素晴らしさを示した一枚の写真がある！ これを見よ！」

リヴァイアギルデイの部下が大型モニターに一枚の写真を写した。写真には登校中の女子大学生が映っていた。その胸元はたわわに実った乳房が淫らにある。

「なんと下品な乳をしている女だ！」

「ふん…！ 馬鹿の一つ覚えのようにただ胸の大きさのことで語る前に、これを見たまえ！」

その言葉で渋々とモニターを見る貧乳属性軍団スモールバスト。するとリヴァイアギルデイの部下はピツピツと写真のある部分の拡大を行った。

アップされたのは、女子学生のたすき掛けにしていた鞆のベルト部分だった。なんと、ベルトが胸に食い込んだせいで巨乳が沈み、女子学生の胸の大きさが一層強調されているではないか。

「どうだ、この食い込みは！ 貧乳ではあり得ぬ谷間は！ 左右に別れた乳の有り様…これぞ天地創造の再現ともいえる素晴らしき光景！ 世界の開闢は巨乳属性ラージバストにあるのだ!!」

「そしてこの左右の胸の美しさこそ、左右に分かれるツイントールの根源と同じではないのか!？」

一気に貧乳属性スモールバストを畳みかけようとする巨乳属性軍団ラージバスト。

だがクラーケギルデイの部下も負けじと一枚の写真をモニターに表示させた。そこには笑顔でスクール水着を纏う幼女の姿が映った。

「どうだこの密着具合は!?! スク水との調和は!?! 下品な巨乳属性ラージバストに決して出来ん、貧乳属性スモールバストだからこそその魅力は!!」

「貧乳だからこそ、このようにスク水が映えるのだ！ スク水だけではない、メイド服、学生服…スレンダーだからこそ、貧しいからこそ、それらが美しく見えるのではないか!?!」

その主張は、数多の服装フェチの属性力を持つ怪人たちの目の色を変えた。

「! 貴様、そう言つてどつちつかずの者たちを自分たち側に取り込もうという魂胆か! 汚いぞ!!」

「違う! 私はいかなる属性力も最後は貧乳属性スモールバストに結実するのだと伝えたのだ! 大地が平らなものも、大空がどこまでも広がっているのも、水平線の彼方があれだけ平坦なものも、全ては平面を:すなわち貧乳を表しているからではないのか!? 空を飛ぶ小鳥も死ぬときは大地へと還る:つまり貧乳とは、どんな万物すら帰す、最終地点なのだよ!!」

「だったらティルファイヤーはどうだ!? 彼女があれほど強いのはツインティルズ一の巨乳があるからではないのか!」

「貴様! それは貧乳のティルレッドをディスプレイしているってことか!?!」

「ああそうだ! あんな小便臭い幼女のどこがいい!? 時代はティルファイヤーだ!!」

「この野郎、表に出ろ!!」

両者の怒りは遂に爆発し、一部で殴り合いや取っ組み合いが始まった。それを皮切りに巨乳だ貧乳だと、もはやただの口喧嘩となり、会議は荒れに荒れる。

「静まれい!!」

硬質のテーブルに触手を鞭のように叩きつけ、怒鳴るクラーケギルデイ。

途端、水を打ったように静まり返る一同。取っ組み合いをしていたものは気まずそうに離れる。

「このままでは拉致が明かぬ。一体何日、こうやって終わりのない言い争いをすれば気が済むのだ? 昨日に至つてはエロゲのキャラを会議に持ち出して、双方醜い罵り合いをした挙句、その内の一人が男の娘キャラだったではないか!! もはや巨乳貧乳の問題ですらない、貴様らは異性の乳すら見抜けない程愚かで未熟なのか!」

クラーケギルデイの触手の一本一本が怒りのあまりピンと張りつ

めていた。騎士道を重んじるクラーケギルデイが感情を露わにして叫ばなければならぬほど、事態は深刻だった。

「……のままでは侵略もままならぬぞ。やむをえんが、部隊の統一は一度白紙に戻し、個々での侵略を行うしかないな」

ここでリヴァイアギルデイが割って入った。

それは云わば先延ばしの決断であったが、そのすることではこの争いを終わらせる方法が無かったのも事実である。このままではツインテイルズと戦う前に内輪もめで部隊が壊滅してしまう。だからそれを防ぐためにもこの争いを無理矢理にでも止めなければならなかった。苦渋の選択だったが、一部隊の長として、リヴァイアギルデイはそれを決断はしなくてはならなかった。

「しかし、リヴァイアギルデイ様……お言葉ですが、2つの部隊の総力を結集しなければツインテイルズを倒せません！ 多少時間がかかっても話し合いで解決を……」

「だが、このまま座していても事態は何も変わらぬ！ ……分かった、リヴァイアギルデイ。その案を吞もう。貴様の言う通り、個々での侵略を行おう」

「ク、クラーケギルデイ様……」

クラーケギルデイが部下の発言を遮り、リヴァイアギルデイの意見を取り入れた。

「俺の腹心たるバッファローギルデイがああも惨たらしくやられたのだ。ツインテイルズの実力はとうに承知済みだ。皆、足がすくんでも仕方あるまい……もつとも、あ奴があそこまで腑抜けだったことに俺は苛立ちを隠せないがな!!」

バッファローギルデイを冒瀆するリヴァイアギルデイであったが、本心は違うということは誰もが理解している。その証拠に、彼の股間から伸びる一本の触手が悲しみに震え、濡れていた。

普段はいがみ合うクラーケギルデイもその部下も、惨殺された猛牛の戦士を思い、目を伏せた。

と、ここで――。

「た、大変です！」

会場内に一体のエレメリアンが血相を変えて駆け込んで来た。

「何事だ？　ただ今会議中であることは承知の上で…」

「そ、それどころではないのです!!　ダ、ダークグラスパー様が、近々この部隊の視察に来られるとの連絡が…!!」

「何だと!？」

真つ先に反応したのはリヴァイアギルデイだった。悲しみに暮れていた顔から戦士の顔へと戻る。そして遅れて、他の面子や部下たちも反応する。その反応は明らかに怯えと畏怖が混じっていた。

「…到着はいつになると?」

「ち、近々伺うとしか…」

「そうか」

クラーケギルデイは冷静に振る舞うが、それでも焦りの色は隠せなかった。

「ぬう…奴が来るとはな…度重なる失態について我々も見咎められたか…」

「ええ、地獄の処刑人…噂には聞いていましたが…」

リヴァイアギルデイとクラーケギルデイの顔に苦渋の表情が浮かぶ。

ダークグラスパー。アルティメギルに所属する者ならば誰もが噂だけでも一度は聞いたことのある人物の名だ。

所謂ワンマンアーミー。部隊を持たず、アルティメギルでは異例ともいえる単独行動を認められている。首領の勅命を受け並行世界を渡る闇の戦士。その使命は組織の反逆者の処刑。本名は誰も知らず、いつしかその戦士を示すコードネームだけが広まっていった。

「通称、地獄の処刑人。ダークグラスパー…」

そう呟いたクラーケギルデイだが、彼はダークグラスパーという存在をその異名のような物騒な存在ではないという風に考えていた。

アルティメギル内に処刑人などといったそんな物騒な存在があるとは思えないのだ。何故なら部下を処刑し、その恐怖で無理矢理縛る組織などが長続きするとは到底思えないからだ。恐怖は思考を鈍らせる。ある程度与えるのは効果的だが、度を過ぎるとそれはむしろ害

悪にもなりえる。

だからダークグラスパーという存在は精々、慣れあいや緩みがちな部隊の気を引き締める為の監視役：雇われ店長が運営する店をときどき視察に来る本部の社員、その程度の存在なのではないかというのがクラーケギルデイの認識であった。処刑人などという物騒な肩書きも云わば我々への威嚇。物騒な肩書きで周りが勝手に怯えてくれるのを狙ってなのだろう、きっと。

しかし、そんな処刑人様がこちらに何うという事実はありません。状況ではない。首領が地球侵略に拱いている我々のことを好ましく思っていないのは確実だ。

「…俺たちにのんびりと構えていられる時間はない、か。クラーケギルデイよ、ここは我々でのみ出向き、直接ツインテイルズの手の内を見てみるか？」

「ほう？ 貴様にしては良い案だなりヴァイアギルデイ。小手調べという訳か：異論はない」

巨乳と貧乳、どちらか上でどちらが下か。決着はつかずに遺恨だけが残る結果となったが、ダークグラスパーの来日を前に、いがみ合いを続けるのは得策ではないだろう。

会議は部隊の長2人が協力して出陣する、ということで一応の解決となった。

※

（本日の会議も実にならない、中身のない争論で終わってしまったか…）

そう思いながら、プレゼンの資料を片手に廊下を歩くクラーケギルデイ。騎士のような凛々しい外見とは対照的に、その背中では日々生徒に手を焼かされているくたびれた教師のような哀愁が漂っていた。

このままでは不味いと思うが、では皆が納得する解決法は？ と問われると明確な回答が出ないのも事実であった。

（明日は出撃を控えている。とりあえずは自室に戻り、お気に入りの

貧乳画像が大量に入ったパソコンでも弄りながら睡眠をとるか。まずはこの身体の疲れを取らなくてはまずいな…)

そう思いながら角を曲がろうとした瞬間…突如出てきた人影と衝突しそうになった。

「！」

ぶつかる、と思ったが、普段から剣術を嗜んでいるクラーケギルデイは反射的に身体を動かしてこれを回避した。

「…すまなかつた。こちらの不注意だ」

「いえいえ、大丈夫ですよ。それにしても…随分と疲れが溜まっているみたいではないですか」

ぶつかりかけた人物に謝りながら、クラーケギルデイは歩を進めようとしますが、後ろから遠慮なくかけられた声に聞き覚えがあり、振り返る。

「調子が優れないのであれば、明日の出撃はお止めになった方がよろしいのでは？」

「…貴様に言われる筋合いはないな、フェンリルギルデイ」

目の前にいる怪狼型の怪人、フェンリルギルデイに嫌悪感を抱きながら向き合うクラーケギルデイ。何故なら、このフェンリルギルデイは協調性がない怪人であり、騎士道を重んじるクラーケギルデイとは壊滅的に相性が悪いからだ。

会議には参加しない、無断行動が多い、自由気ままに行動する増援者。合流を命じられずにも関わらず自分の所属していた部隊を抜け出して、この部隊にやってきたのが、このフェンリルギルデイだった。

狼のような外見とその野心で染まった瞳は、クラーケギルデイはすぐに本性を見破った。こいつは、フェンリルギルデイはあまり信用できず相手ではない、と。

「豪傑のドラグギルデイ隊長と若手エースのワイバーンギルデイを倒し、あなた方2人が呼ばれるほどの相手となれば、私でなくとも興味は持ちましよう。私めの力が役に立てばと、この部隊に合流したのですが」

「貴様がいなくとも、我々だけで十分戦っていける。用が済んだのな

らとつとと帰れ…それに思い上がるのはやめておけ。早死にするぞ」
「ふふ、何を言っているのか私めにはさっぱりですな」

フェンリルギルデイはとぼけたような顔をするが、それがクラーケ
ギルデイの精神を逆なでする。

「貴様は幹部の座を欲して、コソコソと行動しているそうではないか。
属性力を鍛え、己の力で幹部を目指せ。そうやって功を焦っていると
碌なことにならぬぞ」

「…誰にも理解されぬ属性に邁進すれば、焦っているようにも見えま
しょうに」

スツと、フェンリルギルデイは自分の毛皮に収められているブラ
ジャーを取り出した。白のレースが入った、シルク生地のはそれはフェ
ンリルギルデイの銀色の毛皮と調和して、大変眩く見えた。

「あなた方のように巨乳だ貧乳だと言い争えるのならまだいい。胸の
内に秘めた思いを吐けるのならばまだマシです。しかし我は
アンダーウェア
下着属性を持つが故に、どの部隊からも爪はじきにあっているの
です。外道だ卑劣だと罵られ、同じ土俵で語ることも、誰かに喋ること
すら許されないのですよ。…あなた方が愛してやまない胸も、この下
着に包まれているというのに…!」

フェンリルギルデイは悔しそうに歯を食いしばり、手の中で握りし
められたブラジャーが歪む。その様子から、普段からどれだけ耐え忍
ぶ生活を強いられてきたのかが伺える。

確かに全ての属性力が仲間内で認められている訳ではないのも確
かだ。同じエレメリアン同士でも、奇妙な属性力を持つ者に対しては
眉を潜めたりされるといふ弊害も多い。組織という多数の怪人が集
まる以上、見えていない所でそういった小さなトラブルはどうしても
起きてしまうものだ。

「体操服属性や学校水着属性が王道と認められていて、下着属性は邪
道と罵られる風習。実に嘆かわしいと思いませんか？ 元を正せば、
それらは全て衣服という一括りで纏められるものはずなのに、古き
考えがそれを邪魔している。下着姿の女性を愛するなど邪道だ、と」
フェンリルギルデイの演説はなおも続く。

「ですから私はアルティメギルに新たな風を吹き込もうと考えているのです。私という、次世代のエレミアンの存在を以てしてね。だから私はこの部隊に合流したのです」

「…」

一区切りついたフェンリルギルデイの口元には勝利を確信した笑みが浮かんでいた。そんなフェンリルギルデイをクラーケギルデイはジツと見ていた。

(若いな。若いが、確かに一理ある…)

何時の世界にも若者という存在は、世界を大きく変えてきた。

例えば、ロリ巨乳やミニスカ巫女。これらを見出した若者たちは当初、古き良きを愛する者から大バツシングを受けたはずだ。

こんなの俺たちの愛する姿じゃないと。これはおかしいと、異質だと叩かれたはずだ。

だが若者は自らの信じる理想の為に戦い、立ち上がった。そして今ではそれらの存在は『これはこれで』と認められるに至っている。それは世界を変えるために尽力し、己の理想を優先できる存在である若者だからできたのだろう。

この世界に伝わる数多の偉人もそういった古き良きの殻を突き破り、常識を変えてきた。そういったことができる熱き魂を持つのは、何かを失うことを恐れる老人ではなく、何かを失うことを恐れずに行動できる若者にしかないのかもしれない。

「ふん…ならば好きにすればいい。我々の邪魔をせぬ限りは目を瞑ろうとしよう」

確かにフェンリルギルデイは鼻持ちならない相手だ。だが、いくら異質な存在であろうとそういった貴重な意見を認められぬほど、クラーケギルデイも器は小さくはなかった。…もつとも、次にフェンリルギルデイから飛び出した発言を咎めないほど、事なかれ主義ではなかったが。

「私は、ツインテール属性もそろそろ不要ではないかと思うのですよ」

「…貴様！」

クラーケギルデイは腰にある剣を手にかけて。流石に今の発言は聞き捨てならなかった。フェンリルギルデイが何とも無いように言ったそれは、アルティメギルの理念を根本から覆すような発言だったからだ。

「まあ、お聞き下さい。最強のツインテール属性の確保を最優先とし、その上で個々の求める属性を探すのが今の我々の侵略方針です。：ですがこれでは効率が悪すぎます。いくらツインテールが広まろうとも、全ての女子がツインテールにしたり、好きになる訳ではないでしょう？　そしてそれは我々にも言えるのではないのでしょうか。いかにツインテール属性が最強とはいえ、もつとのびのびと戦える状況に変えるほうが、結果的に集まる属性力も増えるとは思いませんか？」

つまり、フェンリルギルデイの言っていることはこうだ。

今までのアルティメギルの侵略活動は、他の属性はツインテール属性を奪うおまけ程度の扱いであった。まずは何が何でもツインテール属性の確保を優先し、他の属性力は奪えたら奪え、という方針。

フェンリルギルデイが変えるべきと言っているのはツインテール属性を優先する風習だ。それを優先するのを辞め、全ての属性力を同じランクに戻し、他の属性もメインに奪う方針に変えろ、と。その方が侵略も捗るのではないかと。

確かにその方が、兵の士気を高められるかもしれない。：だが、皆、ツインテール属性もまた等しく愛しているのだ。そうでなければ、あれほどツインテイルズが人気者にならないはずだ。

「それが貴様の言う新しい風か。：随分と小さな風だな。まるでそよ風だ」

クラーケギルデイはため息をついた。

「フェンリルギルデイ、これは忠告だ。：ツインテール属性を軽んじることだけは慎め。あれは貴様の範疇を超えるほどの強大な力を秘めた属性力だ。それを軽んじることは、流石にできんよ」

「……忠告ありがとうございます。私はあなた方の邪魔になることは致しません。どうぞご安心を」

警告が何だという風にクラークゲイルデイの横を通り、立ち去るフェンリルゲイルデイ。

「むっ？」

ふと、クラークゲイルデイは自分の手に下着が握られていることに気がついた。恐らくは横切った時にフェンリルゲイルデイが渡してきたのだろう。

…それはAカップのブラジャーと、それとお揃いの色のパンティーだった。上下セットで構成されているそれは、滑らかな手触りであり、一目で高級品であることが伺えた。

それはお近づきの印で渡されたのか、それとも決闘の際に渡す手袋の役目を果たしているのか…。

「生き急ぐなよ…フェンリルゲイルデイ…ワイバーンゲイルデイの二の舞にはならないでくれ…！」

クラークゲイルデイはブラジャーとパンティーを握りしめながらそう唸った。

※

アルティメギルは時空移動の際、移動艇を用いる。そして今、現在進行形で移動をしている一団がいた。

「…ふう」

この移動艇のスタッフ兼雑用係担当のエレメリアンは、緊張した顔つきでドアをノックする。

「…なんじゃ？」

少し遅れて、忌々しげな声が聞こえてきた。エレメリアンはビクツと怯えながらも、応じる。

「ダ、ダークグラスパー様！ お食事の方が完成いたしましたのでお持ちになりましたのですが…」

「…食事？」

「は、はい。もう夜の8時です。小腹も空いてきた頃合いかと思いまして…！」

受け答えに応じるエレメリアンは一足一手に全神経を集中した。なんせこの扉の向こう側にいるのは地獄の処刑人という異名を持つ、闇の戦士が控えているのだから無理もない。

「そうか…分かった。ではそこに置いてくれぬか？」

「え？ あ、あのそんなことなさらなくても私が…」

「いいからそこに置いてくれぬか！」

声が怒気を含んだ物へと変わった。途端にエレメリアンの顔が真っ青になる。

「は、はい！ かしこまりました!!」

そして逃げるようにエレメリアンが立ち去り、辺りに人の気配が完全に消えてなくなると、するするとドアが開き、さっと置かれていた食事を部屋の中へと引きずり込んだ。

「まったく…折角の勉強中に…余計な…」

ぶつぶつと呟く一人の人物は、おずおずとポケットに手を入れ、いつもそこに入れてある、くしゃくしゃの紙切れを取り出した。そしてその記事に書かれている人物に話しかける。

「ま、待っていて下さいね…この、ダ、ダークグラスパー…。また一つ、賢くなりますから…」

そう呟きながら、少女はパソコンへと向かった。パソコンに繋がれているヘッドホンからは淫らかな声とBGMが漏れていた。

「や、やっぱりこのメーカーのエロゲは何回やってもいい…」

ふひひと笑いながら、ダークグラスパーと名乗った少女はマウスをクリックする作業に戻った。

地獄の処刑人、ダークグラスパー。ただ今地球に向けて移動中である。

第25話 胸囲とツインテール

長かった連休もようやく終わり、いつも通りの生活が戻ってきた。

HRの終了を告げるこのチャイムの音もすっかり馴染んできたなと感じる。

「ふあ〜」

光太郎はあくびをかみ殺し、大きく伸びをしながら、一限目に控えている化学の授業準備をする。

「つ、遂にあれが完成したのですか!」

「ええ、放課後になったら試運転してみましようか」

「ありがとうございます、トウアール様!」

クラスの端つこでは愛香さんとトウアールさんが何やら話していた。何故か愛香さんが奇妙な敬語を使っているのが少しだけ気になったが、まあ、転校生のトウアールさんもようやくこのクラスに馴染んできたみたいで、よかった。

最初は変人かと思ったトウアールさんも、なんとかクラスに馴染めている。

この学園に転校する際に受けた編入試験も満点でパスしたらしく、クラスでもその天才ぶりをいかに発揮している。そのおかげなのかどうか分からないが、少なくとも馬鹿ではないのだということが分かり『たまに変なことを言う少し残念な優等生』という奇妙なポジションに彼女は落ち着いた。

ただ、トウアールさんは事あるごとに総二の親戚だ! ということを露骨にアピールしているのが気になるのだが：そしてその度に愛香さんがとても怖い顔をするのも気になるそんな2人が今日はとても仲が良いように見えるのも凄く気になる。

光太郎も、総二の友達という繋がりで彼女とも何回か話したことがあるが、近寄りがたいという雰囲気はなく、今の所愛香さんと同じ、仲の良い友達という関係で収まっている。

「光太郎、いこうぜ」

「おう」

近くに来た総二と共に理科室へと移動する。この学園は近隣の高校の中でも最大級の規模を誇る為、無駄に広い。その為、こういった移動教室の際は早めに移動しないと間に合わないのだ。

「ああ、ここにいましたのね」

すると、背後からかけられた。その声に聞き覚えがあった光太郎と総二は同時に振り返った。

「生徒会長……」

「あら、お久しぶりですね、観束君」

そこにいたのは生徒会長の神堂慧理那さんであった。休み明けだというのにも関わらず、眩い笑顔と可憐なツインテールを見せてくれる。何か用でもあるのだろうか？

「何か用でもあるんですか？」

一度、ツインテール部について会長からツツコミが入ったことがある総二はまたそれ関連の話題なのかと身構える。ツインテール部何ていう奇妙な部活の存在をツツコンでくれた会長は、変人が蔓延るこの学園では数少ない常識人だと思う。

「いえ、そうではないのですよ。今日は丹羽君に聞きたいことがあるのです」

「え？」

面食らった。用があるのは総二ではなく、俺？

「丹羽君」

「はい……」

真剣な目で会長は俺を見る。俺も自然と身構える。

「一つ、聞きたいことがあるのです」

何か用でもあるのだろうか？ 俺が会長に会ったことなんて、あのぶつかった一回だけなのに。何か恨みでも売ってしまったのだろうか？

「あの……」

「お嬢様!!」

「尊!?!」

だが会長の言葉はそれ以上続かなかった。階段を駆け上ってきた

メイド先生こと、尊先生が会長を呼び止めたからだ。相変わらずのメイド服姿で会長へ近づいてくる。

「何をしているのです。一限目は体育のはずでしょう。早く着替えないと授業に遅れてしまいます」

「で、ですが…」

「いいから早く!」

尊先生は会長の手を握ると、無理矢理引っ張って行ってしまった。会長は何か俺に言いたげそうな顔をしていたが、それも叶わず俺たちの前から姿を消した。

「な、何だったんだ…?」

「さあ…?」

総二は何故か右腕を抑えながら、不思議そうに俺を見た。俺だつて総二に聞きたいぐらいだ。会長とは個人的な付き合いもないし、何か仲良くなったきっかけもない。せいぜい、あの時ぶつかってベルトを見られた程度。

(まさか…な)

会長は俺の正体に勘づき始めてでもいるのだろうか?

でも、ベルトの時はしっかりとフォローもしたし、正体バレに繋がるような要素も無いはずなのだ。シヨップピングモールの時もうっかり口を滑らしたが会長も気づいていないようだったし…。

「うわあ!」

と、隣にいた総二が足元を見て悲鳴をあげた。俺も見てギョツとする。

足元にA6サイズの封筒が2枚、突き刺さっていたのだ。恐らくは去り際に尊先生がやったのだろう、中身はその…聞くまでもないだろう、婚姻届に違いない。

「愛香に破いてもらおうか…これ」

「そうだな…」

ちなみに封筒は床にかなり深く刺さっており、相当な力を入れないと抜けなかった。何なんだろうあの人は…。

※

そして迎えた放課後。総二家の地下室では愛香にとって、待ちに待った瞬間が訪れていた。

「ついに…ついに完成したんですね、巨乳ブレスが！」

「テイルブレスだ愛香」

総二が冷静な訂正を入れるが、愛香には目の前に置かれている新たなテイルブレスにしか眼中になく、総二の声は届かなかった。

「さあ愛香さん。どうぞ、これが第3のテイルブレスです！」

愛香は嬉々として自分の腕にある青色のブレスを外し、真新しい、黄色のブレスをつけた。

「変身の方法は前使っていたブレスと同じですから安心して下さい」

「分かったわ…いくわよ！」

「おう」

「あたしは巨乳に変わるわよ！」

「おう」

総二はこんなにはしゃいでいる愛香の姿を見るのは久しぶりだった。そしてそれと同時に嫌な予感が胸を走った。『可能性に殺される』…嫌な言葉が頭に浮かぶ。

「テイルオンツ!!」

力強く発したその言葉に反応して、ギアは愛香の身体を光で包…まなかつた。

「あれ…?」

愛香は何が起きたのか分からないように呆然としていた。その反応を見ると、ますます嫌な予感が広がる。

「テ、テイルオン！ テイルオン！」

愛香は何度も何度も、いつも変身する時と同じように叫ぶがブレスはうんともすんとも言わない。失敗しているというより、ブレス自体が反応していないみたいだった。

「ど、どどどうなっているの!?! これ壊れているんじゃないの!?!」

遂に愛香は癩癩を起こし、腕のブレスを振ったり壁に叩きつけたり、噛みついたりしていた。その姿はまるでトウアールの言葉を借りるのならば、蛮族そのものであった。

「いえ、そんなはずはありません！ 変身はできるはずなんです！」
「じゃあ何でできないのよおー!!」

巨乳になれると希望を抱いていた愛香。その希望が理不尽にも奪われてしまい、落ち込んだ愛香は泣きながら蹲った。まさしく愛香は『可能性に殺された』のだ。

…ああ、とうとう。とうとう恐れていたことが起こってしまった！

愛香が落ち着きを取り戻し、この製作期間中、目の前の憎き敵にやられてきた数々の屈辱を思い出した時、この地下室は名探偵が飛び込んでくるような凄惨な殺人現場へと早変わりする。我が家を、日常を、そして親友を守る為に総二にできることは、この現場を殺人現場に変えさせない、愛香が心の底から納得できる理由を早急に解明する必要があった。

「なあ…トウアール。もしかして、最初に使ったブレス以外は使えないってオチじゃないよな？」

「いえ、それはありませんよ！ 確かに敵に奪われて悪用されないようにセーフティは組み込んであります。が、そもそもテイルギアは世界最高峰クラスのツインテール属性がなければ使えない装備なんです。本人以外使えなくするような機能はつけていませんよ」

「それ本当なんでしょうねえトウアール!? もし嘘だったら…!」

「私がこの状況で嘘を言うと思いますか!? そんなことしたら私、愛香さんに殺されちゃいますよ!!」

もの凄く説得力のあるセリフをありがとう、トウアール。

「あ、そうだ。総二様も使ってみますか？ 巨乳ブレス」

もうその呼び名で定着しているのな。総二は少しだけ迷い、自分の右腕にある、真紅に輝くブレスをしばらく見つめる。

「俺は…いいや。こいつでいい」

総二はトウアールに自分のブレスを見せ、笑う。…そして同時に理

解する。

そうか…そういうことだったのか。総二は愛香が何故変身できない理由に思い当たった気がした。

「…いいんですか？」

「ああ。俺のブレスは、最初からこれだからさ。今更替えるなんてできないよ。俺は、あの人と同じ赤色の…このテイルブレスじゃなきゃ駄目なんだよ」

総二の脳裏にはピンチの時に幾度となく助けてくれた、あの憧れの焰色の女性の姿が映った。

「愛香。お前が変身できない理由がなんとなく分かる気がする」

「え？」

「お前はさ、きつと無意識の内に新しいギアじゃなくて、テイルブルーのギアじゃなきゃ駄目だって思っているんだよ。だから、その新しいギアを使えないんじゃないか？」

この一月。数々の戦いの中で、総二と愛香はこのブレスと共に戦ってきた。その中で総二はこのブレスには不思議な愛着を持っていたし、いまさら手放そうだなんて考えたこともない。

相棒。こいつは、そう感じる何かがあった。そしてそれはきつと愛香も同じじゃないだろうか。例え、憎き敵が開発したブレスでも、総二たちはそれでここまで戦って来れたのだから。世界を守りたい、開発者の一途な思いが赤と青色のギアには備わっているのだから。

「だからさ、そのブレスは、本当に託すべき人物に使わせるべきじゃないかって思うんだ」

「総二様…でも愛香さんは、それを使わないと巨乳になれないんですよ…？」

すると愛香は納得したのか、涙を拭いて立ち上がった。

「ううん、もういいわトウアール。多分ね、最初っからあたしは間違えていたのよ。新しいブレスにすら替えしてしまえば、簡単に巨乳になれるとか…そう思うのがそもそも浅はかだったのよね」

総二の言う通りだ、そう言わんばかりに愛香は晴れやかな顔をして

いた。

「気軽に着せ替えできるような、そんな軽いもんじゃないのよね、ティルギアって。あんたが言う通り、コイツは意志を乗せて動くデバイス…心に嘘をついて動かせるものじゃないのよ、きつと」

黄色のブレスを外し、テーブルに置く。けど、愛香には未練はなさそうだった。そんな愛香にトウアールは意を決したように告白する。

「愛香さん…私、あなたに復讐するつもりだったんです。本当は身体変化の属性力とのハイブリット機能を備えたギアなんて、机上の理論で、成功する確率が限りなくゼロに近かったんです。意気揚々と使って落ち込む愛香さんを指さして『異世界の力を使っても愛香さんの胸は結局、A以下なんですよぎやはははは！』なんて笑おうと思っただんです…」

「それはごつちも同じよトウアール。目的のものさえいただいでしまえば、後はあんたをぎりぎり生かしながら散々苦しませた挙句、ボロ雑巾のように捨てて、血祭りにあげようって思っていたんだから…」

「愛香さん…」

「トウアール…」

何なんだろう、これ。

何か愛香とトウアールの間では綺麗に物事が解決しているような感じなんだけど、総二から見ると何一つ解決していないように見えるこの感じは。

どう考えても今後の付き合い方にフォロー不可能なほど、溝の深さが出来上がったこの告白は何なんだろう。

総二が何も言えなくなってしまったその時、けたたましいアラートが鳴り響いた。そして、このタイミングで出現してくれたアルティメギルに感謝したくなった。

「敵か!？」

すぐさまトウアールはモニターを確認し、顔が険しくなる。

「ええー！ 都心にエレメリアン2体出現です！ しかも…もの凄い力の属性力です!!」

「なに!？」

「ええ、総二様が戦ったドラッグビルデイ、ファイヤーが戦ったワイバーンビルデイと同格か：あるいはそれ以上の反応を示しています！」

それはあの死闘を思い出せば絶望的な報告のはずだった。：けれど、何故か今の総二は負ける気がしなかった。

「そうか！　なら尚更、ほっとくわけにはいかない！」

「ええ、そうね総二！」

「「ビルオン!!」」

総二と愛香はトウアールに見守られながら、基地の通路を走る。

—そうさ、これが俺たちなんだ。

新たなビルブレスは残念ながら戦力にはならず、愛香の胸は大きくしてくれなかったけど、俺たちの決意は大きくしてくれた。今日確かめあったその思いは、間違いなくかけがえのない、得る価値があったものだ。

身体の奥底からほとぼしるような思いを感じながら、光のゲートに飛び込み、現場へと駆けつけ…。

「この摩天楼を颯爽と闊歩する、ツインテールで巨乳の女子はおらぬか！」

「違う！　我らはツインテールで貧乳の女子を求めなければならぬのだ！」

…盛大にずっこけた。

※

俺が都心にエレミアンがいるという連絡を聞いて変身して駆けつけた時、最初に目に入ったのは、ヘッドスライディングのようにならずっこけているレッドとブルーの姿だった。

「だ、大丈夫ですか!？」

コンクリートを抉りながらずっこけたレッドとブルーに慌てて駆け寄る俺。敵の戯言を小耳に挟みつつ、救出作業を行う。

「…何よ、なんなのよ。何で最近のあいつら、乳ばっかりこだわっているの!？」

道路にめり込んだ顔を上げながら、ブルーは俺に向かってそう叫んだ。

「…さ、さあ？ でもいつものことじゃないですか!? あいつらの戯言はもう大概聞いていますから、大丈夫ですよー!」

「あたしは大丈夫じゃないのよね! あたしは乳を力に変えて戦う全ての存在が許せないのよおおおおお!!」

そして俺の胸をキッ! と睨むと不機嫌そうに倒れているレッドを抱えて敵の前に立った。

…なるほど、ブルーが俺に嫉妬していたのは、胸の大きさに負けていたからなのか。

「ふっ…ついに現れたな、ツインテイルズ!!」

そして2体のエレメリアンは俺たちの登場に気付いたのか、正面から向かい合った。海竜型の怪人に海洋型の怪人。2対3、数の上では勝っているが…。

(くそ、場所がまずいな…)

俺は上唇を舐めながら、奴らとどう戦うかを考えていた。

そう、今回の戦いの舞台は都心ビル群の大型プラザホール前。何かのオーデイション会場が行われていたらしく、人が密集していた。また、ビル群ということもあって、今まで以上に狭い。攻撃が外れ、辺りに被害が出ないように戦わないといけないだろう。

更に一番まずいのはここに留まっている人たちの存在だ。最近は『エレメリアンはむやみやたらに人間に手を出さない』という中途半端な知識だけが世間に広まってしまっているらしく、エレメリアンが出て逃げないでそのまま見物したり、録画を始める輩が非常に多いのだ。ただでさえ狭い空間に、たくさんの人が押し寄せている。この事実を戦いを進めるに大いにやっかいな障害となっている。

「これだけの人が密集している場所であいつらとやりあうなんて…!」

いつの間にか隣で立っていたレッドも同じようなことを考えていたのか、非常にやりにくそうな顔をしている。

目の前にいる2体のエレメリアンは、ワイバーンギルデイと戦った

時に感じたあの独特の圧迫感が感じられる。恐らくその実力も他のエレミアンとは一線を超えているはずだ。

もし、攻撃の余波や奴らがギャラリーを狙って攻撃されたら…！でも手加減なんてできない。していたら、こっちがやられる。

「くそ…やるしかないってか…！」

「いくぞ、レッド！」

スツと剣を構えるレッドとファイティングポーズを決める俺。その姿に恒例のべた褒めタイムが始まる。

「…これが噂に聞く『クリムゾン・シスターズ紅の姉妹』か！ 姉のファイヤーは勿論のことだが、妹のレッドもなんとという素晴らしいツインテールを持っているのだ…!! 惜しい、実に惜しい！ 後数年遅ければ、2人の4つのたわわに実った果実が揺れる光景が見れたもの…！」

海竜型の怪人は俺たちを、正確には俺とレッドを見ながらべた褒めする。というか、何か俺たちの知らぬ間に、勝手に変なあだ名がつけられているぞ…しかも微妙に中二病臭い。

すると横にいたもう一体のエレミアンが怒号を上げた。

「妄言はそこまでにしろ！ レッドの美しさは既に完成されているではないか！ 彼女をファイヤーのような醜き果実をつけ、台無しにする気か、リヴァイアギルデイ！ 芸術品に泥を塗りたくるようなその行為こそ恥を知れ！ それに残りの一人のツインテイ、ル、ズ…も…！」

何故か海洋型のエレミアンは急に口を閉ざしてしまった。その視線はツインテイルズ最後の刺客、テイルブルーへと向けられている。

ブルーはこめかみに青筋を浮かべながらも、そういうことねといったリアクションを取っている。

「はいはい分かっているわよ、どうせあたしのことをタイラブルーとかマナイタブルーとか言いたいんでしょう？ 分かっているのよ、あたしだって分かるんだからね、こんなこと何回目だと思って…」

だが次の瞬間、そのエレミアンは音もなくブルーの眼前へと接近してきた。

「!?!」

俺たちは目を見開いた。こいつ、ブルーが見せたほんの一瞬の隙について、気配を極限まで殺して懐に入ってきた！ しかもその腰には剣が握られている！

(ヤバい！)

ブルーが斬られる。俺は反射的に拳を放つが、奴には当たらなかつた。何故なら奴は何の冗談か、いきなりブルーの前で跪き、まるで王に忠誠を誓う騎士のような態度で片膝について礼をしたからだ。俺の拳は空を切り、虚しく空振りする。

「!?」

早い。こいつ、今の動作も非常に早かった。…やはりできる、実力はけた違いだ。

だが、何故奴はいきなりブルーに接近してきたんだ？ やられているブルー本人も訳が分からないといった感じで突っ立っていた。

「…なんと、なんと……美しい……」

「はっ」

レツドが呆れた声を出す。全くその通りだと俺も思う。

「美しい…なんと美しいのだ！ 麗しき貴方と敵として出会ってしまったとは…何という悲劇か！ ああ神よ、何故こうもあなたは運命を弄ぶのですか!?!」

そしてそのエレメリアンはミュージカル風の台詞を息継ぎなしで喋ると、腰に携えた剣を抜き、刃に手を添えてブルーへと差し出した。

「私の名はクラーケギルデイと申します。我が剣を貴方に捧げたい：

愛しの姫よ」

「気は確かか、てめえ？」

俺は思わずツツコミを入れていた。そうでもしなきゃこの訳が分からない状況に耐えられなかった。

「ふっ…笑えば笑え、テイルファイヤー。私はいつだって正気だ。私は彼女の、^{プリンセス}姫の美しさに魅せられてしまった…テイルブルー様、どうか私の愛を受け取ってくれませんか？」

「ええええ!?!」

流石のブルーも困惑していた。いきなりの告白にいささか戸惑う様子であったが、それも仕方ないだろう。

何しろブルーに対するエレメリアンの反応は大体2つのパターンに限られるからだ。『怯えられるか』『馬鹿にされるか』のどちらかしかない。そしてそのどちらかの反応を見せた奴は惨たらしく惨殺されるか、殺される一歩手前まで追い込まれる。

だがこの一月で判明しかけていた法則が今、目の前で崩れたのだ。目の前のエレメリアンはブルーを敬い、剣を差し出した。これぞまさに忠誠を誓うポーズ、騎士が守るべき主に向けるポーズではないか。「むう…どうとう出たか奴の悪い癖が！」

苦虫を噛みしめたような顔で語るのは、リヴァイアギルデイと呼ばれていたエレメリアンであった。腕を組み、額からは焦ったような汗を流している。

「奴は騎士道を重んじる堅物…一度ああってしまったら止まらんぞ！」

「さあ、愛しの姫プリンセス！ わが想いを受け取ってください！」

「ちよ、ちよつと待って！ いきなり、そん、なの、困る…私たち、敵同士だし……」

ブルーは普段俺に見せるような不機嫌で恐ろしいな顔をどこかに吹き飛ばしてしまったかのように狼狽しきっている。

公然の場での告白。ブルーはその恥ずかしさで顔が茹でダコのように真っ赤になってしまっている。だがこの反応を見て、クラークゲイルデイは照れているのだと誤解したのか、駄目だしの一打をかました。

「私は心奪われたのです……！ 最高の貧乳スモールバストを持つ、麗しき姫プリンセス、あなたに!!!」

「……………は？」

ブルーは完全に虚を突かれた反応をし、茹でダコのように真っ赤だった顔がスツと元に戻った。

そしてこれ以上この空気に耐えられなくなったのか、リヴァイアギルデイが俺に喋りかけてきた。

「さあテイルファイヤーよ！ 我が部下、バッファローギルデイの弔い合戦だ！ 貴様に1対1の決闘を申し込む!!」

「え…ああ！ 分かった！ その決闘受けたぞ!!」

俺もリヴァイアギルデイの助け舟をとってもありがたく思った。だってこれ以上、ブルーの方を見ていられなかったのだから。

だってチラリと聞いただけでも「美しく光り輝く貧乳」とか「ツイントールにはあなたのような完全なる貧乳が似合う」とか完全にブルーに喧嘩を売っているとしか思えない発言がズバズバと飛び出してくるんだから。

しかもクラーケギルデイがこれを大真面目に話すもんだから、もう見ていられない。大勢の前でこの公開処刑はあんまりすぎる。

「行くぞお、テイルファイヤー!!」

「来い、リヴァイアギルデイ!!」

テイルファイヤーとリヴァイアギルデイの戦いの幕は切って落とされた。

「あたしは…巨乳になるのを拒んでなんかいないのよおおおおおとおお！」

「素晴らしき貧乳を持つ姫！ 私の思いを受け取ってくれませんか！ 姫ええええええええええええ!!」

…誰かと通信しながら怒っているテイルブルーの怒号と貧乳と叫びまくるクラーケギルデイの声をBGMとして。

※

「だああああああ！」

まずは猛スピードで接近し、拳の弾幕を張る。かつてワイバーンギルデイにやられた時と同じように、リヴァイアギルデイの顔や腹を、拳で打ち込んでいく。

「ぐう…！」

だがリヴァイアギルデイは一步も怯まず、股から伸びている尾をピンと伸ばした。そしてそれを鞭のように薙ぎ払い、テイルファイヤー

を叩きのめそうとするが、ファイヤーはこれを地面すれすれまで身体を捻らせることで回避する。

「はああああ!!」

そしてそのままの体勢から、低空アツパーをリヴァイアギルデイの腹部に叩きつけた。

「ぬおうっ…!!」

リヴァイアギルデイの巨体が浮かび上がり、苦しそうに唸るが負けじと拳を構える。右腕を大きく振りかぶり、それを打ち込もうとするのを視線が捕えた。

「! ふん!」

すぐさまファイヤーは右拳のアーマーを高速回転させ、低空アツパーの体勢から跳び上がった。そしてドリルの如く回転する右腕とリヴァイアギルデイの右拳が、空中で真正面からぶつかり合う。

「!!」

そして大型トラック同士が正面衝突したかのような轟音が響いた直後、テイルファイヤーとリヴァイアギルデイ、両者共に弾きとんだ。その際に生じた衝撃で、駐車してあった車のガラスがいくつつか割れる。

リヴァイアギルデイはプラザホールの正面玄関方面に、ファイヤーは駐車場付近に身体を叩きつけられる。テイルファイヤーはガリガリと背中でアスファルトを数メートル抉り、ようやく止まった。

(…あいつ…強い!)

起き上がり、ふうつと息を吐きだしてリヴァイアギルデイが吹き飛んだ方向を見ながら、拳を構える。先ほどぶつけ合った右拳は焼け焦げたような匂いを放っている。

奴は、リヴァイアギルデイは思った通りに強かった。あの鞭のような尻尾に気を付けなければヤバイ…。

そして、吹き飛ばされた際に生じた土煙を割って、何発かの光線がこちらへと打ち込まれる。

「行けー、テイルファイヤー!!」

「負けないでー!!」

「頑張つて下さいまし！ テイルファイヤー!!」

光線を回避しようと足を動かすが、後ろから聞こえる声の存在に気づき、慌てて踏みとどまる。回避するのは容易いが、そうすれば後ろのギャラリーに光線が当たってしまう。すぐさま己の行動を回避から防御へと変更する。

「ファイヤー…ウォール!!」

左手から展開されるバリアはいつものように光線を防ぐが、ここでいつもとは違うある変化が起きた。

いつもならただ攻撃を防ぐだけのバリアの表面に、防いだ光線の熱量が蓄積され…そのエネルギーが円形状の塊へと変化したのだ。

「…なんだこれ!？」

『それを相手にぶつけて!!』

「何?!」

レイチエルの通信が入った。これがもしかしてアップデートの…!?

『いいから早く!』

土煙を割って接近してくるリヴァイアギルデイが目に入る。このまま猛スピードでの接近を許すわけにはいかない。

「くそ！ その言葉、信じるぞ！」

右腕のブレイクシュートを放つ時の要領で、左腕で円形状の塊を押し出すと、勢いよく飛び出し、それがリヴァイアギルデイへと当たった。そして、ぶつかった拍子に大きく燃え上がる。

「何だと!？」

突然の発火に、たまらんとリヴァイアギルデイは後退した。そしてレイチエルから再度通信が入る。

『どう? ファイヤーウォールで防いだとき、相手の光線の熱量をバリアに蓄積し、反射できるように改良してみたの! : 勿論、反射できるのにも限度があるけどね』

「最初に言ってくれ…: 心臓に悪いぞ」

ゴールデンウィーク中にアップデートしておく点つてこれのことだったのか。

『あはは！　こういう秘密兵器はとっておきがお約束！　でしょ？』
「ハハハ…そうだったな！」

相変わらぬの科学者っぷりに苦笑が漏れる。だが、これで遠距離の防御に関する強化ができた。後は接近戦でどれだけ相手と渡り合えるか。目の前で炎まみれになるリヴァイアギルデイを一瞥する。

「ぬ…うおおおおあああ!!」

すると、リヴァイアギルデイは叫び声と共に気合を入れると、全身に回っていた炎をかき消した。その身体から消化の後の際に起こる煙が立ち昇る。

『…嘘でしょ？　いくらなんでも復帰が早いわよ!?　計算ではもっと燃えているはずなのに…!!』

レイチエルの焦った声から俺はリヴァイアギルデイへと意識を向ける。こういう時、データよりも目の前のことを信じるべきだ。そこは気合で何とかしたんだろうさ、きつと！

「やはり…貴様は一筋縄ではいかな！　流星はツインテイルズ一の胸囲の持ち主だ!!」

リヴァイアギルデイは尾をビン！　と鋭く張りつめさせ、槍のような高速の突きを放つ。

「!」

テイルファイヤーの顔目がけて打ち込まれたそれを、接近しつつ紙一重で回避する。そして右腕をリヴァイアギルデイの顔面目がけて振りかぶる。

「来たぞー！」

「いっけえええテイルファイヤーお得意の!!」

「カウンター攻撃ですわ!!!」

後ろに控えているギャラリーはテイルファイヤーの勝利を確信する。

そう、放たれた拳はリヴァイアギルデイの顔面をとらえるはずだった。だがその一撃は…。

「…巨オオオオ！」

「!?!」

ビリビリビリイ!! 拳が顔面に当たる直前、リヴァイアギルデイが発した強大な叫び声でかき消された。

しかも拳の威力がかき消されただけではない、声と共にテイルフアイヤーは大きく吹き飛び、受け身も取れずに地面に叩き落とされたのだ。

「ぐっう…!!?」

「この技を、貴様に使うことになるとはな…!!」

リヴァイアギルデイは苦しそうに顔を歪めますが、一矢報いたと云わんばかりに笑う。

対する俺は訳が分からずに混乱する。背中の痛みよりも訳が分からずに呆然としていた。何だ、何が起きたんだ!? なんでパンチが声だけでかき消されたんだ!?

(俺は一体、奴に何をされたんだ!?!?)

すると突然、このシリアスモード全開を吹き飛ばす声が聞こえてきた。

「さあ姫!! プリンセスこれが私の本気だと分かってくれますか!?!」

丁度俺たちの真横ではクラークケギルデイによるテイルブルー公開処刑シヨーが繰り広げられていたのだが…。

「いやああああああああああああああ!!?」

「ブルー?」

なんとクラークケギルデイが全身から生えている無数の触手をうねうねと動かしていると、突然ブルーの絹を裂くような叫び声が聞こえてきたのだ。いきなり蛇に睨まれた蛙のように怯え始めた。

「触手…触手ううううう!!?」

「ひ、姫!?!」

「いや——!! 触手やだ——!! やだ、やだ、やだ——つ!!」

こんなにも怯えるブルーを見たことがなかった。悪鬼羅刹と恐れられているテイルブルーを倒すには今しかないのではないかと、という程隙だらけだった。多分、赤子の手を捻るが如く簡単なはずだ。「何故怯えるのです!?! これは我が求婚の儀! あなたへの溢れん限

りの愛を表した、愛の証明なのですよ!？」

「いやあああああああ触手に告白されたあああああああああああ
ああ!!」

クラークゲイルデイが広げた無数の触手が一本一本うねうねと動く
光景に、ブルーはどうとう泡を吹き、白目をむいて気絶してしまった。
「おい、しっかりしろブルー! ブルー!？」

『そうか…クラークゲイルデイの奇妙な触手の動きは、クジヤクが羽を
広げるのと同じように、ブルーに求婚を伝える動きだったのね…!』
一人で納得したような感じになるなレイチエル。こつちはわけが
分からねえんだよ。

「…ちっ!!」

そしてリヴァイアギルデイはわざとらしい素振りですぐ舌打ちをした
後、戦いの構えを解いた。

「…興奮だ! 今日ではテイルレッドの小手調べまで行いたかったの
だが、これでは勝負どころではないではないか!」

リヴァイアギルデイは一飛びでクラークゲイルデイに近づき、肩を掴
んで退却を促す。

「テイルレッド、そしてテイルファイヤーよ! 今日の所は勝負を預
けよう! 次の戦いまで不甲斐ない仲間を慰めておけい!!」

「お前…」

「ふっ…また会おうぞ、テイルファイヤー! このリヴァイアギル
デイ、貴様との再戦を楽しみに待っているぞ!!」

「姫、姫ええええええ!!」

拳を突き出し、ニヤリと笑うリヴァイアギルデイと名残惜しそうに
叫ぶクラークゲイルデイ。

触手が踊りながら光のゲートに消えていく。そして最後の一本が
消え、辺りに静寂が戻ると、突然ブルーの身体が眩く発光した。

『まずいわ! 光太郎、思いつきり地面を殴って!』

「!？」

意味は分からなかったが、とつさに全力を込めた一撃をアスファル
トへと叩き込む。すると、舗装されたアスファルトの下から土ぼこり

や砂が舞い上がり、辺りを包んだ。

「うわっ何だ!？」

「ゲホゲホ!!」

「うえええ!!」

「…そうか、そういうことか…! ありがとうファイヤー!!」

『さあ私たちも退却するわよ!』

叫び声や咳き込みの中でレッドの感謝する声が聞こえたような気がしたが、そんなこと構う余裕もなく俺も退却するのだった。

※

「あ、危なかった…!」

人気の少ない路地裏に駆け込み、ブラインド代わりに展開していた拘束用ビーム、オーラピラーを解除する。

案の定、オーラピラーの中には変身が解除され、元の姿に戻って気絶している愛香の姿があった。

ゼーゼーとレッドは息をしながら壁に寄りかかり、乱れたツインテールを整える。

「あの人の…:テイルファイヤーのとっさの判断がなかったらヤバかったかもしれない…!」

気絶してしまったブルーをブレスは変身を維持できる体コンディション調を下回ったと判断したのかもしれない。そのせいで大勢の前で変身が解除されるというトラブルが起こってしまった。

だからテイルファイヤーは自分たちが逃げられる時間を少しでも稼ぐために地面を殴って土ぼこりを起こしたのだ。

あとほんのちよつとでも遅れていたら、全世界にテイルブルーの正体がばれていたかもしれない。そう考えると背筋が寒くなってきた

『次からは気絶しても変身が解けないように、ブレスを改良しますね』
トウアールの申し訳なきような声が通信で聞こえてくる。

「そうしてくれた方がありがたいよ、トウアール。流星に今回は肝が冷えた」

レッドはそんな軽い口調を叩きながら元の姿、観束総二へと戻ろうとする。

(やっぱファイヤーさんは凄いな。あんなメチャクチャな空気の中でもシリアスに敵と戦えているんだから…俺も見習ってツインテールを鍛えて…！)

『！ 総二様、変身を解除しては駄目です!!』
「え」

だがトウアールの警告もむなしく、テイルレッドは観束総二の姿へと戻ってしまった。

瞬間、総二の眉間に電流が走る感覚がした。…それは鮮烈までのツインテールの感覚。あの美しき金髪の、舞踏会に現れた姫のようなツ

そして背後から自分の身体に影が入り込んだ瞬間、総二は息を呑んだ。

「…観束…君？」

後ろを振り返り、路地裏の入り口を見るとそこには…。

「生徒…会長…？」

そこには肩で息をしながら、呆然と総二と愛香を見つめている、神堂慧理那の姿があった…。

第26話 秘密とツインテール

神堂慧理那がそれを見てしまったのは、本当に偶々だったとしか言い様がなかった。

偶々下校中に起こったアルティメギルとツインテイルズの戦闘を野次馬として観測している時。テイルファイヤーとリヴァイアギルデイの戦闘が突如中断され、敵は撤退。そして倒れているテイルブルーの身体が光輝いたその瞬間、ブルーを庇うかのようにファイヤーが地面を殴り、辺りに土煙を舞い上がらせた。

この展開に野次馬の誰もが混乱している中で、慧理那は偶然にも赤色に煌めくツインテールの先端が、近くの路地裏へと消えていく光景を捕えた。そしてそのツインテールの持ち主は間違いないとテイルレッドであったことは慧理那には一目で見当がついた。何故ならテイルファイヤーのツインテールの場合、路地裏に消えていった色よりもっと濃いはずだからだ。そしてあの遠目から見ても分かる艶やかな髪質は疑いようもなくテイルレッドであった。

何かあったのだろうか、テイルブルーが倒れたことと何か関係があるのだろうか？ と途端に不安になり、気がつけば路地裏へと足を踏み入れ、走っていた。

お嬢様！ と付添いの尊の声が後ろから聞こえるがそんなもの聞いている余裕もなく、走った。勿論、背も小さく運動もあまり得意とは言いがたい。いつものように追いかけてもすぐに見失ってしまうか尊に無理矢理止められてしまうか、と自分でも思っていたが、この日だけは何故か違った。

消えたテイルレッドがどの通路を通り、どこを曲がったのか…それが奇妙な感覚がするように、何となくだけど分かるのだ。そのおかげで見失うことも追いつかれることもなく入り組んでいる路地をスルスルと抜けていく。

(これも…あの子の言う『ツインテールの愛』というのでしょうか…)

テイルレッドが自分を助けてくれて、いつも彼女が別れ際に言う台詞が頭に思い浮かんだ。

もしかしたら何度も出会う内に、テイルレッドと自分との間に何か不思議なパワーでも生まれているのかもしれない。レッドと自分は同じツインテール同士、だから今の自分にはテイルレッドがどこにいるのかが何となく分かるのかもしれない…。

ふとそんな馬鹿な考えが頭に浮かんだ。そして自虐的に慧理那は笑った。

随分とロマンティックな考えだが、それは違う。同じツインテールでも、自分とレッドには根本的に違う点がある。

(私はこの髪を…ツインテールを…)

そして、遂に、テイルレッドらしき人物の人影を捕えた。ちょうど、向かい側の突き当りの路地の入口付近で小さな影が揺れていた。

「！ 居たー！」

途端に嬉しくなり、その路地に近寄る。近づいていくたびにレッドの声が聞こえてきて、ますます確信を強める。やっぱりそうだ、この向こう側にレッドはいる。どうやら誰かと通話でもしているらしい。

そして慧理那は突き当りの角を曲がりその先を見てー。

「え…？」

困惑と驚き。その2つが慧理那の頭を支配した。目の前ではテイルレッドが光に包まれ、今まさに変身を解除しようとする光景があった。光の中でレッドの小さな体がどんどん大きくなっていく。そして、その光の中から現れたのは…。

「…観束…君？」

そこには自分がよく知る、生粋のツインテール愛を持つ少年、観束総二の姿があった。

「生徒…会長…」

総二も驚いたような顔でこちらを見ている。彼の右腕には、テイルレッドがいつも付けているブレスレットがはつきりと見えた。…そして慧理那は一つの結論へと達してしまった。自分の憧れていたヒーロー、テイルレッドの正体を偶然にも知ってしまった。

「…嘘…観束君…が…テイルレッド…？」

その事実はいくらにも慧理那には衝撃的過ぎた。そして慧理那は

眩暈を起こし…その意識が暗転していった。

※

突然目の前で倒れた神堂慧理那は緩やかに壁にもたれかかり、そのまま崩れ落ちた。恐らく、テイルレッドの正体が男だという事実を知ってしまった、あまりのショックで気を失ってしまったのだろう。

第三者に自分の正体がばれたということの方もショックであったが、目の前で人が倒れたことの方が大きな驚きだった。そんな総二とは裏腹に、トゥアールは大声で捲し上げていた。

『総二様！　とりあえずその小娘を…裸に？　いて下さい！　さあ早く！　今すぐにです！　早くううう！』

「何で!？」

『裸写真を撮って脅すからに決まっているじゃないですか!!　誰かにばらしたらあなたの裸をネットにばら撒くって脅す交渉材料にするんです！　正体がばれたヒーローと恥ずかしい写真を撮られた少女！　これで条件は対等です!!』

「どんな法則だそれええええええ!？」

トゥアールの提案したあまりにも外道過ぎる交渉条件は常軌を逸していた。テロリストだって、もう少しまでも上品な交渉条件にするだろう。

トゥアールは自分を犯罪者か何かに仕立て上げたいのだろうか？　それとも幼児体型の生徒会長の写真が欲しいだけなのだろうか？

「ど、どどどどうしたらいいんだこれ!?　気絶した女の子2人も抱えて…」

何よりもまずいのは、この状況だった。この路地裏に気絶した女の子2人に男子1人。しかも2人とも気絶している。…おまわりさんと呼ばれてもおかしくない状況だ。裁判やっても確実に敗訴する事件が着々と出来上がっていく。

変身して移動させようにも、慧理那と同じようなギャラリーがまだ

その辺にいるかもしれないという状況下では迂闊に変身するのめらわれる。

とりあえず会長を助けようと近づくが、それを遮るように一人の女性割り込んできた。

「……さ、桜川先生……」

「お嬢様の体重は軽いが、男一人で2人抱えるのはいささか厳しいだろう。手伝うぞ観束君」

尊は驚くほど冷静だった。まるでこんな事態を想定していたかのような風に淡々と言い、総二と向き合う。

「その代わり観束君……聞かせてもらえるな、君たちのことを。いや……テイルレッドといった方が正しいか？ 隣に倒れている津辺君はテイルブルーか？」

「！」

総二は警戒するが、尊は心配するなといった顔をする。その口調も威嚇するというよりも嘆願するようだった。

「世間のあのバカ騒ぎを見れば、君たちが正体を隠したがるのも無理はないだろうさ。だが……お嬢様はやつらに幾度となく狙われている。お嬢様を守る立場の私もいつまでも傍観者ではいられんよ」

「……」

「それにな……臨時とはいえ、君たちは私の大切な生徒だ。大人として先生として、生徒が戦場に出ているという事実は決して見逃せん」

真剣な顔でそう語る尊。その姿は、服装や婚活に対する行き過ぎた行動を除けば、一人の立派な大人だった。その真剣な目と燦然と揺れるツインテールは総二に尊を信頼するに値する条件としては十分すぎた。

「……分かりました。でも、この事は……」

「ああ、誰にも話さんよ。この、私の名前を妻の欄に書いた婚姻届に誓おう」

「あ、それはいいです」

「何だ、照れているのか？ 何なら君の名前もここに……」

「ほんとにいいです」

「友達の丹羽君も」

「それだけはやめてくださいお願いします」

通信越しで聞いていたトゥアールも『一度基地まで2人を連れてきてくれ』という確認を取る。

総二は愛香を、尊は慧理那をおぶり、目立たないように路地裏を抜け、観東家へと急ぐのだった。

※

喫茶店を経営している観東家の厨房の一番奥にある大型冷蔵庫。その入り口が地下秘密基地へのエレベーターとなっているのだ。

「……ここまでとはな」

慧理那を背負った尊もポカンと口を開けながら驚いていた。トゥアールを軽くあしらった大人の余裕が今では全く感じられない。

「その…色々と言いたいことは分かりますよ」

「ふふ、部外者が入るのはあなたたちが初めてだものね」

母、未春も一応部外者という括りに入るのだが、もう普通に出入りするようになっていたので、総二はため息しか出なかった。

愛香を背負いながらコンソールルームへいくとトゥアールがかんかんになって出迎えてくれた。しかもその標的は総二じゃなくて愛香だった。

「早く起きて下さい愛香さん！ 押し付けるおっぱいも無いのに総二様におんぶしてもらうなんて！ あなたは重しを背負って歩くだけの拷問を総二様に強いるつもりですか!？」

「おはようトゥアール。何だか面白いこと言っているじゃない?」

トゥアールの顔が石像のように固まった。それはまるで開幕必殺技を食らわせ、広がる爆炎の前に「やったか!？」と口走ってしまうほどの死亡フラグだった。そして愛香はその絶好のタイミングでフラグを成立させた。

「ねえ、トゥアール。私ね、あなたに借りていたツケを返さなくちゃって思ってたのよね、利子つきで」

そそくさと逃げようとするトウアールに最高の笑顔で答えてくれる愛香。

これがギャルゲーならば、ハッピーエンドを超えた隠しエンドへの道が開けたのだろうけれども、残念ながらトウアールが開いたエンディングはデッドエンド（死亡エンド）だったらしい。

トウアールだった物体が部屋の隅っこで博物館のように展示される中、会長もようやく意識を取り戻した。

「…やっぱり夢ではなかったのですね」

意識を取り戻した慧理那は、基地の様子を目にして信じられないといった顔でそう呟いた。

そして事情を説明した。このことに関してはギリギリまで悩んだのだが、下手な嘘を言つて更に事態が混乱するよりは真実を話してくれという尊の意見により、大まかな事情の説明をした。平行世界が滅んだなど、聞かれたらショックを受けるであろう話題には極力触れずに、これまでの体験や戦う理由、トウアールの正体を説明する。

「そうなのですか…異世界から来た侵略者…」

「それにしてもツインテール部の部員のほとんどがツインテイルズ関係者とは…世間とは狭いものだな…」

慧理那の護衛の尊はすっかりこの場に順応しきっていた。一方、慧理那は頭に？マークを浮かべている表情をしていた。

「あの…ツインテール部の部員が関係あるのならば、同じ部員の丹羽君も何らかの秘密を知っているのですか？」

「…？ いや、あいつは部の結成の時に帳尻合わせでの入部ですから、あいつは何も知りませんし、関係ないですよ。所謂、幽霊部員って奴ですね」

「…そう、なのですか」

「あの、何か気になるんですか？」

「！ い、いえそうではないのです!!」

ぶんぶん顔と顔を振って、何でもありませんといった顔をする会長。そんな会長を見ながら愛香やトウアールは距離を取って、離れていた。特に愛香からすれば自分が気絶している間に正体がばれたとい

う羽目になったのだから、何か思うことがあるのかもしれない。

「…ごめん、総二、あたしが気絶しちゃったばかりに…」

「いえ、私も慧理那さんの存在に気付くのが遅れたのがそもそも原因です。申し訳ありません」

愛香もトウアールも謝罪するが、それだと会長が悪いといったような言い方だった。総二は女の怖さというものの片鱗を少しだけ感じた気がする。

「いえ、どなたのせいでもありませんわ。それに私…ずっと前から、あなたたちがツインテイルズと何か関係があるのでは、と思っていたのですから」

「何だって!？」

驚きのあまり、椅子から飛び上がりそうになる総二。

「何故、そう思ったのかは分かりません。でも…いつもテイルレッドに助けられるたびに、小さな胸に抱かれるたびに、いつも一人の男性を…ツインテール好きの少年を…あなたを思い浮かべていたのです。あなたとテイルレッドはどこか似ている部分がありましたし…でもまさか本人とは…」

「今の部分、録音しておいたかしらトウアールちゃん？」

「大丈夫です、最高音質で録音完了です」

「ええ、台詞アーカイブに登録しましょう」

後ろで息子と生徒会長の台詞を録音し、スパイごっこをやっている母親とトウアールをガン無視することにした総二だったが、納得できた事実が一つあった。

一度、慧理那には総二の右腕のテイルブレスを見破られたことがある。それは当初、ブレスの故障かと思われていたが真実は違った。慧理那はテイルレッドの正体をおぼろげながらも総二だという風に思い浮かべていたからだったのだ。

一度そういった風に認識してしまえば、認識攪乱装置が完全に作動しない。だからあの時、ブレスが見破られてしまったのだ。

「ごめん会長…あんなに応援してくれていたのに、騙しているみたい
に振る舞って」

「いいえ、正体を隠すのは当然ですわ。ヒーローなんですから…」
すると慧理那はまた一つ思い出したかのような顔をする。

「あの…テイルファイヤーはもしかして、トウアールさんが変身して
いるのですか？」

痛い所を突かれたような顔を総二はした。ここにはレッド、ブルー
がいる。ならばツインテイルズ最後の一人、テイルファイヤーもここ
にいるのだと考えるのが自然だろう。

そしてその正体はツインテール部の部員であり、今現在秘密基地に
いるトウアールが変身していると考えるのが最も自然だ…でも慧理
那は知らなかった。

「…いや、トウアールは俺たちのサポートに専念しているんだ。残念
ながら違うよ」

「ちなみに私でもないわよ？」

母が笑顔で手を振ってくるが、最初っからそんなこと信じる人など
いない。

「ではどなたが？」

「それが…俺たちにも分からないんだ。彼女が何者なのか、どうして
助けてくれるのか…そして彼女が俺に似ている事とか…何一つ分か
らないんだ」

「そう、でしたの…」

そして再び沈黙が訪れる。慧理那は何かを考えているような、総二
は今後をどうするかといった感じだ。そして、先に口を開いたのは総
二だった。

「会長、俺をヒーローと言ってくれるのならば、世間に正体がばれたら
どうなるか分かるよね。俺たちはあいつらとは戦えなくなる。…こ
のことを絶対に秘密にして欲しいんだ」

「それは…勿論ですわ！ 私…これ以上、あなた方への迷惑をかけた
くありませんから」

そう言いながら笑う慧理那の髪がふわりと揺れた。会長のツイン
テール。毅然としていても、怖がっていても、凜としていてもその美
しさは何も変わらなかった。

(…やっぱり、会長には)

総二は決意した。あれを託すのは、彼女しかいないと。

総二は椅子から立ち上がると、トウアールが使う工具やスクラップが散乱する格納棚に置かれているあれを覚悟と共に掴んだ。そしてトウアールに、真剣な眼差しで懇願する。

「なあトウアール！ このテイルブレス、会長に託していいかな？」

「そ、それは…」

総二の手に握られていたのは、愛香が使うことができずに本当に託すべき人に渡すと決めた黄色のテイルブレスであった。

「総二！ あんた本気なの!？」

「ああ、本気さ」

困惑する愛香とトウアール。その間に、後ろからひよいつとブレスを総二の手から奪い取られた。

「桜川先生!？」

「これが君たちが使う変身アイテムか…」

尊は色々な角度からテイルブレスを観察する。そして何を思ったのか、とんでもないことを言いだした。

「君たちの話を聞く限り…これはツインテールの女性であることが使用条件なのだろうか？ …だったら私がお嬢様の代わりにその役目を背負おう！ 私が4番目のツインテイルズだ!!」

「えっ!？」

「…何だその『えっ』ってリアクションは。それは驚いたリアクションとして何か違うんじゃないかトウアール君。えっ、あなたその年でツインテール戦士でもやるんですかの『えっ』じゃないのか君？ 私はこれでも28なんだぞ!？」

「イヤソンナコトナイデスヨ」

感情の欠片のない顔で機械のような音声で喋るトウアール。…総二も同じようなりアクションを心の中でしてしまったのは秘密の話だ。

そして愛香もツッコんだ。

「そもそも話、先生にツインテール属性があるの？ それがないや

変身できないわよ?」

「いえ、残念ながら尊先生にはツインテール属性の属性力はないでしょうね。慧理那さんの側に居ながらも、尊先生は奴らに一度も狙われていない。この事実から分かる事です」

「むう…」

「ツインテールにしていれば、誰だってツインテールの属性力を得られるわけじゃありませんからね。こればかりは個人差としか…」

「その根拠は?」

「愛香さんが貧乳を理由に告白されたほどの超絶貧乳の持ち主の癖に、スモールバスト貧乳属性を持っていないという事実があります」
「なるほど」

その瞬間、愛香はトウアールの頭を掴み、テーブル目がけ豪快なダクシユートをかました。

「そう言うのであれば、辞退するしかないな…。私は結婚を控えた身だからな、身体を労われと言っているのだろう。未来の夫、観束君?」
「いや全然違います」

「照れるな」

「いいえ、意味が分からないだけです」

総二は尊からブレスを返してもらい、意を決して慧理那の前へと差し出した。

「あなたに…ツインテイルズに、第4のツインテール戦士になってもらいたいんだ…会長」

「わ、私が…?」

会長は当惑し、数歩後退った。

「実を言うと、テイルギアが増えるって聞いて、真っ先に俺が頭に浮かんだのが会長だったんだ」

「それほんと!?!」

「うん」

愛香があんぐりと口を開けた。

「俺が知っている中で、あれほどのツインテールを持つ人物は愛香以外に会長しか知らないよ…勿論、ブレスの開発者はトウアールだ。」

トウアールが駄目だって言ったらダメだけど」

「そういうことじゃないんですよ総二様！ 本人が納得していないのにむやみやたらブレスを押し付けるようなことが…」

「いや、そういうことじゃないんだけど…」

トウアールには似つかわしくもない真面目なセリフだったが、総二は伊達や酔狂でこのブレスを会長に渡すわけじゃない。

「勿論、無理矢理に会長に戦いに参加してもらおうって訳じゃないんだ。それは俺たちの仕事だから。けど、会長はツインテールにしている以上、これからも狙われる可能性が高い。だから自衛手段として、このブレスを使ってもらおうって思ったんだ」

このまま使えないブレスとして埃を被っているのなら、せめてものの役に立ってほしい。敵を倒せとは言わなくても、せめて逃げるくらの時間を稼げることが出来ればこのブレスだって喜んでくれるだろう。

だが案の定、愛香が割って入ってきた。かつて総二がトウアールにブレスを託された時に止めたより以上に、真剣な顔になる。

「総二…もつとよく考えて！ 一般人にこれを渡すのがどんなに危険なことか分かるでしょ!? もつと情報を集めて本当に信用できるか…」

「いや、できるわ」

「どうして!？」

「会長のツインテールを見れば分かるよ」

総二がキツパリと言う。

「神堂会長のツインテールは、会長の心そのものだよ。いつだって眩しくて…変わらなくて…。その輝きを見れば分かる、会長は絶対に悪用なんかしたりしない。千の言葉なんかより、一のツインテールだ」

総二は人生の格言ともいえるべき言葉を語る。これは総二の信じべき言葉であり、テイルファイヤーと初めて会った時も、これがあったからこそ、彼女を信頼するべきに値できた。心からの言葉を言い放つたのに、愛香は総二を宇宙人か何かを見る目で「理解できない」と残念そうに言った。

慧理那もかなり悩んだような顔をしたが、やがて総二と同じように意を決したような顔をする。

「…ええ、分かりました。私にどれだけのことが出来るか分かりませんが…」

「ちよちよちよ！　ちよつと待って会長!?　あなた自分が言ったこと分かっているの!?　ただの悪党と戦う訳じゃないのよあいつら全員変態なのよ!?　公衆の面前で巨乳貧乳ツインテールうなじと喚く奴らよ!!　多分そこには会長が憧れるようなシチュエーションは一切無いわよ!?!」

「でもテイルファイヤーはいつも真面目に戦っているのではないですか。きつと心の持ちようですわ。それに私、ヒーローに憧れていますから、悪と戦うことに何の戸惑いもありません」

「いや、でも…!」

「彼らが常軌を逸した存在であることは身を以て理解しています」

あまりにも説得力がありすぎる言葉をありがとうございます。会長はかれこれもう2桁目に行くんじゃないかっていうくらいアルティメギルの被害にあっているものな。

「私は…ただ守られているだけでは嫌なのです。もし私に戦える力があるのならば…私は、あなたたちの仲間になりたいのです!!」

トゥアールの方も不本意といった感じであったが、頷いた。彼女は託すべき人物だということなのだろう。

「…じゃあ会長。これを…」

「あつ…待って下さい。観束君が…私にはめてくれませんか?」

「うつひよおおおおう!!」

その瞬間、トゥアールの雄叫びが基地中に響き渡った。ビクツと慧理那が怯えた。

「はめて?　ハメてくれ?!　いやあいいねえいいですねえ!　その幼い外見とは正反対のドスケベな台詞う!!　私待ってたんですよお、こういう破壊力のあるセリフをお!　いやっほおうううううううう!!」

トゥアールはいけない薬でも使っているんじゃないかってくらい

ハイになっていた。発想がもう、そこら辺のエロ親父レベルに達している。

「あの時私も言っておけばよかったな——！ 『総二様、私がハメてあげますね』って言えばよかった——！！ ひと月前の私を全力でなぐりたいわあああああああああ!!! ロリコンでよかったさいつこううううううううううううううううううううううううう!!!」

グルグルと回転椅子に跨りながら、ヘビメタ風の振り付けとエアギターと共に卑猥なセリフを連発している。…もうこのまま警察を呼んでも問題ないんじゃないかなって思ってしまう。

とりあえず、このまま会長を留まらせておくのはマズイと総二は判断し、ブレスを渡すのは明日にすることにし、会長を家に帰すことにした。

「ところでお母さん、観東君に渡してほしいものがありました…」
「あらかしら？」

…尊先生にもお帰り願った。渡されたものはやっぱり婚姻届だった。母さんは喜んでいたけれど、すぐに店のコンロで燃やした。

※

アルティメギルの秘密基地の廊下では、リヴァイアギルデイが身体を引きずりながら歩いていた。所々壁に寄りかかりながらも、ゆっくりと進む。

「ぐぐ…」

額には大粒の汗が幾つも浮かんでいた。それは…テイルファイヤーとの最後に繰り出したあの奥義が原因だった。あれは強力な反面、己自身をも傷つける諸刃の刃。その反動を徐々に食らったりヴァイアギルデイは大いに苦しんでいた。

(奴は…俺にそれを抜かせるほどの実力があるということか…)

恐らくは次回の戦いでケリをつけなければならない。この技を使えるのはせいぜい全力で2、3回が限度だろう。

(だが…何故なのだろうな…)

人間という生き物は、面白いものだ。テイルレットがドラグギルデイを倒したように、あいつにも、テイルファイヤーにも期待してしまふ。貴様はどれだけ俺を楽しませてくれるのだろうか、と。

そして格納庫へと続くドアが開き、何食わぬ顔でリヴァイアギルデイは並んでいる列の中に紛れ込んだ。今日はここへ来る客人を向かい入れなければならぬ。この基地にいる部隊長全員が並び、その人物が来るのを待っていた。

「…あれが噂の？」

「ああ処刑人の乗っている船だつてよ」

格納庫には大型の移動艦が止まっており、積み荷の移動や着陸の手続きなどが行われていた。

ヒソヒソと聞こえる声を盗み聞きする。…噂の処刑人、部下たちも色々な話をしていた。

曰く、悪魔のように恐ろしい怪人。テイルブルーのように情け容赦ない性格。何か恐ろしい能力を持っている…噂は様々だった。

(…！ 来たか!!)

遂に入口が開かれ、一人の戦士がこちらへと歩いて来た。恐らく、あいつがダークグラスパーだろう。後ろには付き添いなのだろうか、鎧型のロボットが着いて来ている。

「ふむ、中々いい所ではないか…」

そして、誰もが驚いていた。噂の処刑人の姿を見て、言葉を失っていた。リヴァイアギルデイもその一人だ。…だがすぐに彼は笑った。(だから、人間という奴は面白いのだ…！)

黒色の甲冑に身を纏い、その手には死神が持つような鋭利な鎌。眼鏡をかけ、悠然と歩く戦士、ダークグラスパー。その正体は、まぎれもなく自分たちが襲う存在である、人間だった。

地獄の処刑人、ダークグラスパー。人でありながらアルティメギルに身を寄せる戦士が今、地球侵略の前線へと降り立った。

第27話 変身とツインテール

「お呼びでありましょうか、ダークグラスパー様？」

アルティメギル秘密基地の一角に新たに作られたであろう入り口を前に佇むフェンリルギルデイ。その入り口の向こう側にはあの噂の処刑人、ダークグラスパーが控えている。

何故彼がここにいるか？ それは話を少しだけ戻さなければならぬ。

いつものように目的もなく廊下をブラブラしている時、突如フェンリルギルデイは何故か沈鬱な顔をしているスパロウギルデイに呼び止められた。そして彼に短く、たった一言だけ言われた。「：ダークグラスパー様がお前を呼んでいる」と。すぐに謁見に参れ、という命を受けた。

その瞬間、自分に巡って来た好機にフェンリルギルデイは内心ほくそ笑んだ。先日、来日したという噂は聞いていたが、まさかこんなにも早く地獄の処刑人から、名指しで自分を指名するとは。

力を合わせろという首相の心遣いも虚しく、今、この部隊は巨乳と貧乳の2大勢力で大いにもめ、対立が起こっている。

そんな部隊の面子にきつとダークグラスパーは見切りをつけたに違いない。そして、ダークグラスパーは自分へと目を付けた。：これは出世、いや上手くいけばそれ以上の地位を手に入れられるチャンス。

(：勝った！)

きつとスパロウギルデイが沈鬱な顔を浮かべていたのは、大出世の階段を上ろうとする若造を見て、悔しがっているからに違いない。

(私は：これを機に、地位を掴む！)

そして、部屋の中から声が聞こえてきた。

「うむ、入れ」

「はっー！」

中から許可が出たのを確認し、部屋の中へと足を踏み入れた。一步踏み出した途端、妙な違和感を感じた。どうやら、あの入口は別の場

所へと転移するゲートだったようだ。

「来たか」

「……」

まずフェンリルギルデイの目に映ったのは目に悪いとさえ思う程、色彩溢れる色をした壁だった。ピンク色が基調としてあり、何やら細かな字がびっしりと書かれている。だが何を書かれているのかまでは確認できなかった。

…そして何よりも驚いたのは、その部屋の中心に置かれている玉座を連想させるような椅子に座っている人物の顔が予想だにしていなかったからだ。

(に、人間、だと!?)

椅子に座り、ノートパソコンを動かしている人物は、紛れもない人間の少女であった。

漆黒のマントを纏い、マントにも負けずとも劣らない黒髪はツインテールに纏めあげられており、胸元へと垂れていた。そしてその人間は、自らの存在感を出させるような程の輝きを放つ、アンダーフレームの眼鏡をかけていた。

それはどこか理性的で、魅惑な雰囲気を放っていたがフェンリルギルデイはどこか興ざめたような顔をしていた。

(人間が、我らの味方をするとはな…)

どうせアルティメギルが侵略したどこかの世界の住人である少女が、人類を裏切り我々の同胞にでもなったのだろう。しかもあんな小娘が首領様直属となれるとなると、よほど上手い事、媚を売ってきたのだろう。

フェンリルギルデイは出世の高揚感が冷めたような気分だった。アルティメギルも刈るべき対象の人間を同士として迎え入れるとは。実に嘆かわしい。

しかもあの小娘もツインテールではないか。確かに見事なツインテールであり、その属性力も高そうだが…ツインテールにしていればウチは人間でも、ゴリラでも蛮族でも雇うのか？

(やはり、このままではいかん。支配するはずの人間がウチへすり

寄って来ているではないか…やはり、自分のような若者がアルティメギルを変えていかなければ…！)

仄かに野心が心の中で芽生える。…だが、その前に上司の機嫌を上げなければ。まずは気に入られて、確かな信頼を得るのだ。

「…失礼ながら、ダークグラスパー様でお間違いないでしょうか？」
「違うない」

短く答える少女。…そして少女の視線がすぐにノートパソコンへと視線が戻ってしまう。

「…」

会話が途切れてしまったことに違和感を感じ、フェンリルギルデイは目を凝らして、少女の周りをよく見てみた。それで何かが分かるかもしれないと思ったからだ。

(…大きな箱が散らばっている。いや、これは積まれている?)

そして、数瞬後、それが何なのかに気付いてしまった。

「うわっ!？」

フェンリルギルデイの小さな悲鳴が上がる。少女の周りに、いや…この部屋全体に、エロゲの箱が綺麗に置かれていたのに気付いたのだから。少女の椅子の周りにはバリケートのようにエロゲの箱が山のように置かれていたし、さっきまで色彩溢れる壁だと思っていたのは全て、箱で出来た壁だったのだ。しかも壁一面に敷き詰められているエロゲには、上蓋の絵柄を並べることで、壁にツインテールの模様のアートが描かれていた。天井にもエロゲがびっしりと敷き詰められており、電燈を設置している部分だけがぽっかりと空いている。

四方八方エロゲだらけの空間。そこはフェンリルギルデイならずとも、まともな神経を持つているのならば数分いるだけで発狂しそうなほど、異質な空間だった。

「ふむ…」

少女はPCのドライブからディスクを取り出し、そのディスクを空に放り投げると独りでディスクは飛び上がり、開けっ放しのケースへと収まっていった。ケースは自動的に閉じられ、まるで逆再生をかけていくように箱へと収まり、少女の手元へと戻った。

「次は…」

少女がパチンと指を鳴らすと、その壁の一部が僅かに揺れ、扉から一枚のレンガが飛び出してくるように、1本のエロゲがびゅん！と排出された。

飛び出した部分は穴が開いたが、エロゲの壁は崩れることはなく、依然とそこにそびえ立っている。物理の法則を無視したその現象を目にし、何か人ならざる力でその壁は守られているのではないかとフェンリルギルデイは感じてしまう。

そして音もなく箱は少女の真横で静止し、ひとりでに外箱の口が開く。素手で開けると箱を破いたり歪ませたりしてしまうが、そうなることもなく綺麗に開いた。

内箱が飛び出されると、その中に入っている様々な付属品が出てくる。マニユアル、アンケートのハガキ、メーカーのチラシに初回限定の特典カード、その他もろもろ。箱の周りを悠然舞い、グルグルと回っていた。

そして最後にディスクケースの中からゲームディスクが飛び出し、静かだった動きが激しく変わりだす。

ギイイインという効果音が聞こえてきそうなほどうねりを上げ、部屋中を飛び回ると、少女のノートパソコンの中に鮮やかに吸い込まれていった。

静かな読み込み音が続いた後、少女は画面上に現れたアイコンをクリックする。メーカーのロゴが表示された後、アニメ声の少女がメーカー名を高らかに読み上げる。

「……」

フェンリルギルデイはどうすればいいのか分からなかった。あの少女が何故自分を呼んだのか、そして何故いきなりエロゲを起動させているのかが何一つ分からないでいた。

すると、その疑問に答えてくれるように、少女は画面から目を離さないで淡々と述べた。

「インストールすればディスク無しで起動するエロゲは昨今多いが：わらわはこの作業に風情を感じるのじゃ。エロゲをプレイする時、ド

ライブにディスクを入れる瞬間の感覚は——戦の時に兜の緒を占める感覚と似ている、そうは思わぬか？」

「は、はあ……」

これは所謂、面接というものだろうか？ この状況下で何が出来るのかをこやつは試しているのか？

「だが……」

少女は『ロードする』を選択し、サーバーデータを読み込んでいるその瞬間。

「緒の緩んだ戯け者がいる、ようじやな……」

ほんの一瞬だけ、少女は氷のような冷徹な目でフェンリルギルデイを一瞥した。それはまさに処刑人の異名を持つに値するほど、凍てつく視線だった。

「！」

それを言ったきり、少女はまた黙ってしまふ。フェンリルギルデイにとってそれはたまらない程苦痛な時間であった。

ジロリと観察する視線を少女に送りながら、フェンリルギルデイは自問自答を繰り返す。(こいつはもしかや私の出方を伺っているのか……？ いや、もしかやそれ自体がブラフで、実はまだ策が……)

『いやあん、エッチ!!』

そんな中、パソコンから漏れるエロゲの音声部屋いっぱい広がった。画面には登校中、うっかりヒロインの胸を揉んでしまった主人公とそのヒロインのイベントCGが展開されていた。

「ふっ……ふふふふ……」

イベントCGを見ながら少女はだらしない顔で笑みを浮かべていた。その光景にフェンリルギルデイは戦慄を覚えざるを得なかった。

(こいつ、人前でエロゲをああも堂々と……!?)

他人の前でエロゲをプレイ。これだけでも相当難易度が高い行為なのにも関わらず、あの少女は初対面の相手が目の前にいるのにも関わらず、それを何にもないように行っている。

普通なら、エロゲをやってニヤニヤしている所を他人などに見られ

たくはない。例え、見られたとしても全力でその証拠を隠ぺいし、何事もなかったかのように振る舞うのが自然な行為、人としての本能のはず。

なのに、そんな行為など無駄だと語るように、悠然とパソコンを操作している。本能すら超越したその行為は、その少女が伊達に処刑人という肩書きを背負っている訳ではないという確かな証拠になった。

…すると少女はフェンリルギルデイの視線に気づいたかのように横を向き、目を細めて薄ら笑った。

「ふっ…エロゲを始める時に、まずオプションで文字速度を最速にするような小童が、幹部の座を欲しがるとはな…傑作ではないか」

「…!? 何を仰っているのか…」

「とぼけるな。貴様が野心を持っていることなど、わらわの目を持っていれば見抜くことは造作でもない。この部屋に入ってきた瞬間に見抜いていたわこの小僧っ子」

フェンリルギルデイはグツと顔が強張った。己の胸に秘めていた野心が見抜かれたことに怒っているのではない、年端もいかない人間の少女に小僧扱いされたことを怒っているのだ。

「い、言わせておけば…!!」

フェンリルギルデイはどうとう自分を律することができずに、尻尾に隠していた武器の長刀を抜いた。

「…貴様のその行為、何を意味しているかは理解しておるのだろうか?」

「…黙れ小娘! 我らアルティメギルの力でそこまで強くなれただけの分際で! その属性力、貰い受けるぞ!!」

若さゆえの暴走、ここに極まり。出世心を超えた下剋上という行為。自らの力量差も分からない相手にあまりにも無謀すぎた。普段から高いプライドを持ち、それを踏みにじられたフェンリルギルデイは冷静さを失ってしまったのだ。

「食らえっあ…!?!」

間合いに入ろうと詰め寄った瞬間…フェンリルギルデイの周囲を、何かが駆け抜けた。そして、フェンリルギルデイは苦痛に満ちた顔で

無様に倒れた。手に持っていた刀も綺麗に切断され、自慢の毛皮も手足もあちこちが焼け焦げたような跡が見える。

（今、何が…何が起こった!? しかも、あの、小娘が纏っているのは…!?）

一瞬、眩いほどの光線がフェンリルギルデイの横を通過したかと思えば、それがあつという間に自分を貫いていた。しかもそれは一度だけではない、前方、真横、背後、真下…。確認できただけでも8回は光線に貫かれた。しかも光線は自分の身体を通過したかと思えば、反射したかのように折れ曲がり、フェンリルギルデイの身体のあらゆる位置を何度も撃ち抜いてみせたのだ。

「ふふ、わらわの眼鏡は全てを見通す、と言ったはずじゃぞ？」

立ち上がった少女の黒衣の下で煌めく鎧に、フェンリルギルデイは目を疑った。それはあの憎きツインテイルズが纏う鎧と非常に似ていた。

「…貴様の謀反など、この部屋に入ってきた瞬間に見抜いていたと説明したはずなのだがな」

少女の眼鏡がキラリと輝き、倒れているフェンリルギルデイ目がけて冷徹な笑みを浮かべた。彼女の周囲には、同じような眼鏡が何個も浮いて、まるで何人もの少女があざ笑っているかのようだった。…そこでフェンリルギルデイは先ほどの全方位から打ち抜かれた技のトリックを理解する。

「き、貴様…！ 光線を、眼鏡で曲げたのだな…!？」

「ふっ…正解だ。小童にしては理解が早いな」

そう、少女はエロゲをしながらも、フェンリルギルデイの周囲に、複数の眼鏡をこっそり配置していたのだろう。そしてフェンリルギルデイが近づいて来たのを見計らって、光線を発射させる。そして放たれた光線を周囲に設置した眼鏡同士で反射させ、フェンリルギルデイをあらゆる方向から撃ち抜いてみせたのだ。

だが口で説明するには簡単だが、これは恐ろしいほど高等技術が必要だ。瞬時に反射角を計算し、正確に眼鏡同士が反射するようにしなければならぬ。失敗すれば攻撃が外れるのならまだしも、最悪の場

合それが自分に当ることも十分にあり得る。

それをああも平然と行う。やはり、少女とフェンリルギルデイの実力差は歴然だった。

「貴様は謀反だけではない、一つのある反逆を犯した。それもわらわではない、首領様への反逆だ。分かっているのであろうな？」

「な…何の…こと」

「ツインテール属性を、不要と申したの」
「！」

フェンリルギルデイは真つ青になった。何故こいつがそのことを知っている？ そんな軽口をほざいたのはただの一度だけ。しかも話した相手はクラークギルデイだ。あの生真面目を絵に描いたような奴が告げ口をするはずがない。

（まさか…奴は本当に“全て”が見えるのか!? 私の心の中も、その先にあることも…!）

そしてようやく理解した。…こいつに手を出してはいけなかったという、ただ一つの事実によく気付いた。

「元より貴様らの個々の属性へのこだわりは、ツインテール属性を奪取した上で許されている！ それをはき違えるとは…増長したものだなフェンリルギルデイ？」

「わ、私は…」

「こともあろうに、ツインテール属性は不要…？ そこまで断じるとは、首領様に、神に唾する行為！ 大罪じゃ!!」

「私はただ…侵略を効率よく進めるためにはツインテール属性だけにこだわることはない…首領様に楯突くなど微塵もありません！」

「…フェンリルギルデイ…罪には罰、じゃ。…二度とつけ上がることはないように、教育を与えなければならぬ」

少女の眼鏡が怪しく光り輝いた。眼鏡から放たれた2つの光円はフェンリルギルデイの視界を覆う程に巨大化していき、別の空間へと誘う。

「我が属性力より生み出されし奥義、眼鏡カオニックインフィニットよりの無限混沌！ フェンリルギルデイ、貴様は自分自身の心の闇と思う存分向き合うがいいぞ

!!

——何だ、これは？

少女の開いたワームホールに呑み込まれ、気が付いたら見知らぬ部屋に佇んでいた。突拍子な状況に追い込まれ、フェンリルギルデイは目の前の状況にただ呆然としていた。

そして、自分の周りに人が集まって来た。：ムキムキの身体と、えっほえっほと野太い声を発する男たちがぐるぐると自分の周りを円のように回っている。

「い、いやだ…いやだ！」

それはフェンリルギルデイの一番恐れている事だった。それは女性用下着を愛するからこそ、同性の：尚且つガチムチの男たちを、彼らが纏う下着を、何よりも恐れていた。

ふんどしやピチピチのパンツ一丁の男たちが嬉しそうに円の幅を狭めた。汗に煌めく肉体がどんどん近づいてくる。濃い吐息が自分の顔に降りかかる。

「お許しを！ ダークグラスパー様！ どうかお許しを!!」

むせ返るような空間にフェンリルギルデイの悲鳴が響くが、それは誰にも届くことはなく、フェンリルギルデイはガチムチ集団に飲み込まれ：そして何も発しなくなった。

軽口も道化も、野心すらアルティメギルは寛大に許す。ただ：ツイントールを軽んじることは、何よりも重い罪に、禁忌に値することなのだ。

「安心しておけ…それは一夜の夢じゃ。貴様は大切な物を捧げることもなく、綺麗な身体で帰ってこれるぞ。：ただし本物よりもリアルな夢で精神に何らかの異常は現れるかもしれないがな…」

少女の声を聞いたものは誰もいなかった。

※

「こ、これがテイルブレスですか…」

場所は変わって陽月学園ツイントール部部室。

慧理那は昨日貰うはずだった黄色のテイルブレスを装着し、すりすり頬ずりをしていた。憧れのツインテイルズの変身アイテムの本物を自分が着けている。その興奮を抑えられないようだ。

一度、それを愛香がつけ、壁に叩きつけたり噛みついたりしていたのだと説明したかったのだが、あまりにも嬉しそうにしている慧理那を見ると、どうしてもその行動を取ることはできなかった。

「では実際に変身して見ましようか…未知への世界の扉を開けましようか、ふふふ」

トウアールはわくわくするような顔で、涎を荒らしながら慧理那を見た。：おい、ここに犯罪者がいるぞ。総二は高らかに叫びたかったが、自重した。

「ええと、観束君。何か変身する際に掛け声はありましたか？」

「か、掛け声？　：俺たちはテイルオンっていつも言っているな。

言っても言わなくてもいいんだけど、意識の集中にいいらしいから」「それは是非とも言うべきですわ！　そういう積み重ねがあると、終盤辺りに無言で変身する回がカッコいいって感じになりますから!!」

「は、はあ…」

回ってなんなのだろうか？　総二は聞き返したかったが、更なる質問が慧理那から問われた。

「では変身ポーズは？　腕を出したり絡めたりしますの？」

「え!!　い、いやポーズは特にないんだけど…」

「あ、そうでしたら…」

結局、質問で時間を食ってしまい、元の流れに戻ったのは1時間以上経ってからだった。その間、愛香とトウアールは面白くなさそうな顔で総二と慧理那をずっと見ていたが、二人とも気付く事はなかった。

「そ、それじゃあ…いきますわよ！」

「うん。会長…変身するって意志をしっかりと心の中で描いて」

「わ、分かりましたわ！」

慧理那は深呼吸すると、ブレスを胸の前にかざして凜々しく叫んだ。

「テイル——オンツ!!」

…しかし、何の変化も訪れない。

…故障か？ 全員が焦ったが、一拍子置いて、慧理那の身体が光り輝いた。ああよかったと安堵する。

黄色の光が慧理那を包み、激しいスパークが巻き起こる。そして光が止り、自分の変身した姿を見て…慧理那は嬉しそうに声を上げた。

「こ、これが…私…?」

まず、声が大人びている。いや、声だけじゃない。あんなに背が小さかった慧理那は、今や総二と肩を並べるほどにまで成長していた。テイルレッドに変身する総二と同じで、変身前と後では別人ともいえるべき変化を遂げていた。

腰が高く、すらつと足が伸びている。胸も尻も、一般の女性何かよりも大きかった。出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいく。モデル体型って奴なのだろう。

「…かなりの重装甲、ですわね」

「ああ、防御タイプなのかな?」

慧理那は自分の身体を見渡しながら、呟いた。慧理那が纏うギアは、レッドやブルーには見られない肩アーマーや厚い装甲で覆われている。背中に装備されたツインテールの形のようなブースターなど、これまで見たタイプとは違った形のギアであり、まるでロボットみたいなテイルギアだった。

装甲のメインカラーは黄色であり、偶然にも慧理那の髪色と一致していた。

「黄色の…テイルギアですわね」

「ああ、テイルイエローの誕生ってとこだな!」

「!、そうですわね、観束君!!」

感極まったかのように総二の手を握り、ピョンピョン飛び跳ねる慧理那。その度に、ブルンブルンと成長した慧理那の胸が乳揺れを起こす。

…すると総二は鳥肌が立つような寒気を感じ、愛香の方を振り返る。

「な、な、な…」

総二の嫌な予感は見事的中した。愛香は見事なまでの芸術的な絶句顔で固まっていたのだ。信じられないといった目で慧理那を見ている。

「なっている…」

一度手にするはずだったテイルギア。一度は手にするはずの夢。そしてそれを捨て、振り切ったはずなのに。

目の前で繰り広げられている現実を直視した愛香は絶望の声を上げた。

「巨乳に…なっている。あんなに、私よりも貧乳の会長が…」

「ええ、なっていますね—よかったですね—」

「よく、ないわよ…絶つつつ対、よくないわよおおおおおおお!!」

トゥアールは面白いものでも見ているかのような暖かい目で愛香を見ていた。態度が余裕なのは、成長した慧理那でも胸のサイズは自分よりも下だと瞬時に見切ったかららしい。

「お願い交換してえええええええええええええええええええええええ!!」

愛香は空中で変形する起動兵器よろしく、跳び上がりながら空中で土下座の体勢に素早くアクションを起こし、頭突きでも食らわせるのではというほどの勢いで地面に降り立ち、テイルイエロー目がけて土下座した。

「青！ 青と交換しましょう会長！ 会長、先輩なら後輩の心からのお願いを聞いてくれませんか、お願いします!!」

「…見てて居たたまれないぞ。どうせ使えないんだから、諦めろよ」

「いいわよお！ あんたにどんだけ笑われたってあたしは土下座を辞めないわ!! 頼むは一時の恥、頼まぬは一生の貧乳よ!!」

幼馴染のこれ以上の凶行にもう見てられなかった。それに勝手にことわざを改造して使うな。

きつと先日、クラーケギルデイに告白されたのがよほど応えているらしいな。

「津辺さん、私はこのギアに命を預ける覚悟です。はいどうぞと簡単に渡せませんわ」

「わかったわ！　じゃあトウアールのおっぱいをあげるから！　今引き千切って、会長にあげるから!!」

「トウアールのおっぱいなんてあげてどうするんだよ！　何の解決にもならねーよ!!」

この部室をスプラッタ映画みたいな現場にするのだけはやめてくれないだろうか。するとトウアールは嬉しそうな顔でほっこりしながら、総二の手を握った。

「総二様！　今、『トウアールのおっぱい』って言ってくれましたね!!」
「はあ!?!」

「ほら証拠に!」

トウアールは録音していたらしい小型の録音器を懐から取り出した。

『トウアールのおっぱい』

再生された声は間違いなく総二の声であった。オウム返し気味にツツコミを入れていたら、とんでもない音声を録音されてしまった。

「よし、これからは私の携帯の着信音はこれでいきます!」

「やめろ——!!」

総二の絶叫が部室中に響いた。

嗚呼、これから俺たちはどうなってしまうのだろうか。

自分以外でまともなのが会長とテイルファイヤー以外、ツインテイルズには存在しなくなってしまった。：いや、前以上に愛香とトウアールが壊れ始めているんだ。しかも正体を知る関係者には飢婚者である尊先生や中二病母、未春も控えているし、もう嫌だ。

愛香は何時までたってもブレスを渡そうとしないのにキレて変身して、力づくで奪おうとしているし、トウアールは手に入れた着ボイスをパソコンに取り込んでいるし。。

「誰か…誰か!　誰か、俺を助けてくれええええええええええ!!」

…そして救世主は現れた。机の上に置かれたトウアールのパソコンが、アラートを鳴らし始めたのだ。

『トウアールのおっばい』『トウアールのおっばい』『トウアールのおっばい』

その奇妙なアラート音に、部室にいる全員がパソコンへと視線が向いた。

トウアールはきりつとした表情でパソコンを動かし、叫んだ。

「総二様…アルティメギルです!」

「やめろおおおお世界の危機を見過ごしたくなるそのアラート音を今すぐやめろおおおお!!」

「観束君、敵が現れましたわ!　すぐに現場に急行いたしましたよ!!」
…最後まで真面目な会長の姿に、総二はとても感謝したくなった。

第28話 砲撃とツインテール

光太郎の部屋では、レイチエルはパソコンと睨み合いながら、テイルドライバーの最終チェックをしていた。

「…はい、修復は完了したわ。武装、スペック、オールグリーン。問題なしよ」

「サンキュー」

ポイト、レイチエルから投げられたテイルドライバーを俺はキャッチする。

「まさかギアが傷ついていただなんてな…」

「そりやそうよ。属性力の強さだけなら、ワイバーンギルディレベルなのよあいつ？」

「マジか…どうりで強いはずだ」

げんなりした顔で光太郎は答える。レイチエルも疲れたような顔をしながら整備用のプログラムを終了させた。

土煙に紛れて逃げた際、レイチエルは何かが気になったらしく、帰宅早々ギアの状況を調べられた。そして内部にいくつかの損傷を受けていたのを発見したのだ。

「幸いにも戦闘には支障は出ない程度だから良かったけど…あの攻撃が原因とみていいわね」

「まあなあ…」

思い浮かぶのは、戦いが中断される直前のリヴァイアギルディのあの奇妙な咆哮だった。ただ叫んだだけではあり得ないほどの衝撃と振動。拳の衝撃を中和したばかりか、それを上回る衝撃と破壊の嵐。

奴の属性力が招いた現象であるのは間違いないであろうが、どんなトリックで使われているのかが分からず、苛立ちばかりが募る。

「やりずれえなあ、あいつ…」

「ほんとにね。あんたとはとことん相性が悪いわ」

あれがどんな理屈で打てるのか、何発使えるのか…それを分かるだけでも戦いを有利に運ぶことが出来る。戦闘スタイルが超近接戦特化となっているファイヤーは攻撃しようとしたらどうしても相手の

懐に入らなければならぬ。一応、光線反射という手段もあるが一度あいつに見られている以上、あいつもそう易々と使わないだろうし、これに頼るといふ手段は現実的ではないだろう。

ただでさえ、接近戦でリヴァイアギルデイとファイヤーは互角なのに、そこにあの強烈な咆哮を混ぜられてはこちらの身が持たない。：せめて、何らかの対策が取ればいいのだけれど。

「とりあえず私は少ないデータから解析をしてみるわ。そこから攻略法を探してみる」

「すまねえ…：こういうことには何の役にも立てなくて」

「いいわよ。それがあたしの仕事なんだから。あんたをワイバーンギルデイの時みたいには絶対させないわ」

「本当にすまない…」

「いいわよ」

レイチエルはニヤリと笑って俺にサムズアップしてきた。偶然にも、あの夜の時と立場が逆転した構図となった。

「任せておいて、天才のあたしがなんとかするわ」

そう言うレイチエルはパソコンと睨めっこする作業に戻り、俺は中間試験の勉強に費やすことにした。まだ当分の時間はあったが、この先アルティメギルの進行が続くのなら、テスト勉強の時間があまりとれなくなる可能性が高くなるからだ。

しばらくの間、キーを叩く音とペンが紙の上を走る音しか聞こえなかった。両者ともに集中していた為、再び会話らしい会話が出たのはそれから1時間も後のことだった。

「あんたそういえば、さ」

「うん？」

問題の解答時間を計るために使っているテイルリストのストップウォッチ機能を止め、顔を上げた。レイチエルも同じように顔を上げている。

「あいつらの正体、気にならないの？」

「…あいつらって？」

「レッドとブルーよ」

…予想外の質問だった。レイチエルも「変な事聞いてごめん」みたいな顔をしている。

「そろそろ一緒に戦って一月ちよつと経つでしょ？ …そろそろ、お互いの正体を明かしてもいいんじゃないかって思ったのよ。少なくとも、レッドだけには明かしておいた方がいいかしらって」

「…まあ、なあ…」

「何ならあたしと一緒にくつついていく？」

確かにそれは、光太郎自身何度も思ったことだ。あの子たちに正体をばらす、その選択は取ろうと思ったが、その度にいつも踏みとどまっていた。それは、メリットもあるだろうけれど、デメリットの方が遥かに多いからだ。

これにより生じるメリットは無いわけじゃない。まず、作戦や連携が今よりもと取りやすくなること。俺はあまり使わないが、集めた属性玉の共有など…少なくともバラバラで戦う今よりも戦いやすくなることは間違いないだろう。それに正体を明かせば信頼してくれるという何よりの証明にもなるし、険悪なブルーとの関係も今よりはマシになるかもしれない。

デメリットの方は…言うまでもないだろう。テイルフアイヤーの正体が男だということと彼女たちにばらさなければならぬことだ。

…少なくとも、このことだけは精神的に避けたかった。協力はできてもその一線だけは頑として光太郎は譲れなかった。それは羞恥心もそうだけど、レッドのことが少し関係していたからだ。

テイルレッドは、俺のことをときどきどこか尊敬するような目で見ている気がするのだ。

ピンチの度に助けに入るたびに見るあの目。所謂憧れの目で見られているような、そんな気がするのだ。…彼女と俺の姿が非常に似ているだけあって余計に。もしかしたらレッドはアルティメギルの連中が喚いているように、本当に俺をお姉さんみたいに思っているのかもしれない。

シヨップピングモールの戦いの時も「一緒になら安心」みたいに言っていたし、もしかしたら俺の正体を知ったことで幻滅してしまうんじゃない。

ないか…とか思ってしまうのだ。中身が男という事だけに、余計に。
(俺は、そんなに大した奴じゃない)

—それは俺がいつも思うことだ。

レッドに憧れられるような、彼女が思い描いているような、世間が崇拜しているような…俺はそんな大層な人物じゃない。いつも正体がばれるんじゃないかとか、アルティメギルはいつも変態だとか…そんなことを考え、びくびく怯えながら戦っている、どこにでもいるようなただの男子高校生なのだ。ツインテールが好きという変わった性癖を持っているというだけで、生まれ持った素質や宿命何て何処にも持っていない。

ツインテールの力を出力に変えて戦う正義の味方。その正体が女ならともかく、男というこの事実、ほいほいとレッドに言えることじゃないことは確かだろう。

あんなに小さな身体で、敵の前に出て戦っているレッドの方がよほど尊敬できる相手だと俺は思う。

光太郎は目を瞑りながら、唸った。

「…もう少しだけ、待ってくれないか？　俺の心の準備ができるまで…もう少しだけ待ってくれ…」

「…あ、あたしも冗談半分で言っただけだからあんまり気にしないでちようだい」

レイチェルも相当悩んでいる俺を見て気の毒に思ったらしい。でっかい汗を浮かべながら優しく語りかけてくれた。

「まあ、あの子たちのギアをね、少しばかり弄ってみたって思ったのよ。もし、一緒になった時にでも色々試したい…」

だがレイチェルの言葉はそれ以上続かなかった。パソコンから鳴り響くアラートが2人を戦士の顔へと変貌させた。レイチェルは急いで座標の検索を始め、俺も持っていたシャーペンを放り投げて、ベルトを構える。

「場所は!？」

「…ええと、待って…市内の中学校の校門前ね。敵は…うん、大丈夫、あいつじゃないわ。怪人1匹に戦闘員が多数ね」

「分かったー！」

テイルリストを左腕に、テイルドライバーを腰に装着して、転送の準備に取りかかる。

「転送ゲートオープン!! いつでも行けるわー！」

「了解…変身！」

光のゲートに飛び込みながら、俺はテイルファイヤーへと変身を遂げて、現場へと駆けつけるのだった。

※

レッドとブルー、そして今回から戦いに加わる新米のイエローはファイヤーよりも一足早く現場へと駆けつけていた。

「うむ、やはり中学生こそ至高！ それ以降の年齢の女子は全員ババアだ!!」

中学校正門前で、万死に値する暴言を吐きながら腕組みをしているのは、この間ブルーに惨たらしく惨殺されたバッファローギルデイと瓜二つの外見の怪人であった。ただしこちらの怪人には角が無く、ベルのようなデザインの首飾りが付けられたマントを留めている。それは先日現れたクラーケギルデイの物と大変酷似しており、彼の何らかの関係者であることが伺えた。

「さあ、アルティノイドよ！ 胸囲がAカップ以下の女子だけ集め、それ以外は無視しろ!!」

「モケー!!」

「さあ行け!!」

戦闘員がわらわらと散って、下校中の女子学生を捕えていく。

「…いい。やはり貧乳は良い。動くだけで揺れる乳などに存在感はない…貧乳こそ、始まりにして全ての終わりを示す乳なのだ!!」

「なかなかあいつ良い事言うわね。でも乳にこだわっている以上あいつは倒さなくちゃいけないわ」

「正義の味方の発言じゃねえ」

「何か言った？ あいつはあたしが倒すわ…胸のことを口にする奴は

全員敵よ」

「ううん、何も言っていないよブルー」

レッドは冷淡なツツコミをブルーへと入れた。最近では胸のことばかりこだわる怪人が多いため、ブルーは非常に苛立っている。そして今日はイエローのこともあったからその苛立ちはレッドゾーンへと達しようとしている。

ブルーの中では、胸のことを話題に出した怪人＝抹殺対象という公式が出来上がっているらしい。あいつの命運も、ここで尽きたな…。

「現れたなツインテイルズ！ 我が名はブルギルデイ！貧乳属性を司る、クラーケギルデイ隊長の懐刀なり！」

「うん、知ってたよ」

レッドは疲れた顔でそう答える。もう分かりきっていることにリアクションをすることすら疲れている。

こここのところ、巨乳貧乳しか喚かない怪人のバーゲンセールだったから、予想は容易だった。しかも校門前で聞くに堪えないことを口走っていたもんだから誰だつて分かるだろう。

それにあいつはブルーに公開処刑物の告白をした、あの問題児クラーケギルデイの部下か。…ふとレッドは疑問に思ったことを聞いてみた。

「でもお前の上司のクラーケギルデイは『子供の貧乳は別物だから狙わない』って言ってたぞ！ どうして子どもを狙うんだ!？」

それはファイヤーとリヴァイアギルデイが猛烈なバトルを繰り広げている合間に起こったことだった。貧乳を理由にブルーに告白してきたクラーケギルデイであったが、それを認めたくないブルーは「レッドの方が貧乳だ」と口走ったのだ。幼馴染に密告されたということは衝撃的であったが、敵のクラーケギルデイの方もそれを上回る衝撃的発言を言い放った。

クラーケギルデイは「子供は小さいから貧乳であるのが当たり前。貧乳とは成長しているのにちっばいだから、貧乳と言えなのです。だから私はあなたのような絶壁が大好きなのです」と言ったのだ。しかもこれに便乗してトゥアールも通信でブルーの悪口を言う物だから

もう收拾がつかない。…正直、あのまま続けていたら大勢の民衆の前でクラーケギルデイは惨殺されてしまつていたかもしれない。あいつが撤退してくれて本当に良かった、これ以上民衆の前で何かをやらかしたら、限りなくゼロに近いブルーの人気がマイナスの領域に達してしまうだろう。

この事から分かるように、クラーケギルデイは「子供は狙わない」というスタンスをとる怪人なのだ。しかしその部下であるブルギルデイはそのスタンスに当てはまらない侵略方法を取っている。何故なのだろうか？

「…私がこの年頃の少女が好きだからに決まつておろう!!」
「黙れ」

まさかのロリコン発言だった。一気に脱力するレッド。

「ちなみに貴様もターゲットだぞテイルレッド!!」

「うん、聞きたくなかった」

駄目だ、意志の疎通が全くできない。しかもあちら側も統率が全くとれていない。まあ、隊長からしてあの性格だから、しょうがないかもしれないのだけれど…。

「ふん、イエロー。見せてもらうわよ、あなたの正義の力つてやらが生み出す力がどれほどのものかを。もし口先だけだと感じた時は容赦なくあなたのブレスを奪うから。その忌々しいおっぱいはあたしのもものとなるのよ」

聞きようによつてはとんでもない発言だが、イエローは「よくつてよ」と自信たつぷりに答える。

…うん、そこは答える所じゃないと思うんだけどな。女の子同士が胸の貸し借りでこれだけでもめるとは思わなかった。

「必ず…必ず仲間として認めていただきますわ! だつて…あなたたちの戦いをずっと見てきたんですもの! 鍛錬だつて積んできましたわ!!」

心熱くなることを言い、敵の前に颯爽と躍り出るテイルイエロー。そんなイエローの態度に、むむむと唸っている。

「何い!? 新たなツインテイルズだど!」

ブルギルデイの大ききなりアクションに満足したように、イエローは高らかに名乗りを上げる。

「私の名はティルイエロー！　雷を司る、第4のツインテイルズですわ!!」

『…本当は「第5の」なんですけれどね—』

通信でトウアールからのツツコミが入る。一応、トウアールはフルフェイスマスクをつけて『仮面ツインテール』という名でアルティメルの前に現れることがあるので、自分が先だと抗議したいのだろう。…正直、よく分からない立ち位置にいる為、微妙な所なのだろうが。

「さあいきますわよ！　我が雷を重ねし武具よ、今こそ姿を表せ！　ヴォルテックスブラスター!!」

髪を束ねるパーツ、フォースリヴオンをかき上げるように触れると、バチバチと電流が走り、両腕に拳銃型の武器が装備される。

…流石はヒーロー好きだけはある。無駄にカッコよくするため武器の名前に無駄な濁点を付け忘れていないし、変な詠唱も入れている。2丁拳銃というのも無駄なカッコよさに拍車を掛けている。あれってあまり意味がないらしいし。

「さあ、これまで多くの人々を危険にさらしてきた罪、今こそ購ってもらいますわ!!」

「モケ!？」

ジャキン、と山吹色の銃を戦闘員へと向けるイエロー。確かに初陣は戦闘員というのが相場だ。今まで散々やられてきた恨みもあるだろうし、ここでそのお返しというのも悪くない話だ。

「くらいなさい!」

イエローは戦闘員に狙いを定めて、拳銃の引き金を引いた。まさに、稲妻のように弾丸が敵を貫く様を想像したのだが…現実はそうではなかった。

「…モケ?」

縁日の射的を思わせるような弱弱い弾道で弾丸は空を飛び、コッソソと戦闘員に当たったはいいものの簡単に跳ね返ってしまった。

倒されると覚悟していた怪人たちは一体どうしたんだと一番驚いていた。

「い、一撃で倒れないとは、やりますわね！」

大げさなりアクシヨンと共に、今度は両手の銃を同時に打つが、結果は同じ。射的的のを倒せるかすら怪しい弾丸が戦闘員に通用する訳もなく、弾だけが無駄に消費されていく。

戦闘員たちは何か自分たちが悪い事でもしてしまったかのように気まずそうに立ち尽くしていた。

「う〜！ う〜！」

イエローはムキになって乱射するものの、とうとう両方の銃の弾が尽きた。カチカチと引き金を引く音だけが虚しく響く。

「い、イエロー！ 気合だ！ 気合でギアのスペックを引き出すんだ！！」

「そ、そうですね！ 闘志で自己のスペックを超える展開こそヒーローというもの！ 威力不足は私の気合で補いますわ！！」

スペックは十分なはずなのだが、どこか勘違いしたような発言をしますイエロー。レッドは段々心配になってきた。ブルーやトウアールとは違う意味で残念さが滲み出てきている。

「私の武器が銃だけとは思わないでもらいたいですわ！！」

銃をしまい、グツと身構えるとイエローを覆う数々の装甲が展開する。

ギアの背中にあるブースター一対が長い砲身へと変形し、回転して肩越しに相手を狙う。腰につけられていた砲身も連動して展開、腕のアーマーも開き、両足、肩など全身のありとあらゆる装甲から武器が現れる。

「そうか…イエローのギアは重装甲じゃなく、重火力タイプだったのか！」

「どうでもいいから早く戦わせなさいよレッドお！ あいつを、ふんぞり返っているあいつを殴らせて！！」

「それは駄目だブルー！！ イエローが頑張っているんだから落ち着け！！」

レッドはブルーを落ち着かせながらも、冷静に解説に徹する。

イエローのギアが重装甲なのは、大量の重火器を搭載し、圧倒的弾幕火力で反撃を許さず殲滅するというまさにロマンを体現したようなスペックだからだったのだ。

新型のテイルギアは、ヒーローに憧れる変身者、慧理那の意志が非常に反映されたような性能へと仕上がっているのだ。

「さあ…断罪の時間ですわ!!」

合図と共に一斉に放たれる砲口…そこで威力も凄ければ申し分なかったのだが。

「あ、あら…?」

レーザーは味噌汁が垂れたかのようにへろへろだし、ミサイルはあらゆる方向へと飛んでロケット花火みたいに空中でボンと爆発、レーलगンやバルカンは相手に届かずに全部地面に落ちるといいう有様だ。

「…」

戦闘員同士が「どうしよう」といった風に焦り始めている。ブルギルデイは苛立ち始め、レッドはフォローしきれるか? といったしかめっ面をし、ブルーはどこか嬉しそうにはしゃいでいた。

「見た!? おっばいからミサイルが出たわ!! 偽乳だ偽乳!! あんたの乳、どっか飛んでいったわよ!!」

『あ、愛香さんそれはいくらなんでも…うぶ、うへっへはあはははははは!!』

『あははははははははははははははははは!!』

レッドはもう見てられなかった。胸のことでイエローに負けたことを根に持っている幼馴染はお返しとばかりにプライドの欠片もない罵りを始めるし、通信先のトウアールもゲラゲラ笑っている。くそっ、味方陣にまともな人間がいねえ…!

「う…う…う…」

イエローはもう涙目だった。自分の武器は通じないし、イメージ通りにはいかない。もっと…こう、重火器でバタバタなぎ倒していくのが理想だったのに、現実は上手くいかない。

怪人たちは日曜日にごっこ遊びに付き合う父親みたいに、当っても

いない弾丸を当たったフリをして倒れる奴も出る始末だ。「うわーやられたー」みたいにわざとらしく地面を転がり、ガクリと力尽きる。だがその優しさが凶器となつてイエローを襲った。

「て、敵に…敵に情けを…う、うう…うわーん!!」

とうとうイエローはへたり込み、泣き始めてしまった。

「…！ ええい、戦えもしないのにこのこと戦場にやってくるなあ!!」

この茶番にブルギルデイはとうとうキレた。背中に装備してある武器ハルバードを投げ槍の要領でへたり込んでいるイエロー目がけて投げた。ギユン、と風を切る音で見る見るうちにイエローに近づく。

「！ ヤバい!!」

レッドはようやく危機的状況に気付いたが、今からゲラゲラ笑っているブルーは頼りにならない。剣を取り出しても、今から間に合うかどうか…！

だが次の瞬間、誰かがレッドの横を猛スピードで駆け抜けた。

「!?」

それは正に紅い風ともいえるベキスピードだった。そしてへたり込んでいるイエローを抱え、持ち上げた瞬間。ハルバードが地面へとぶつかり、大きな衝撃音と爆風が巻き起こる。

「ふん…忌々しい奴…め…!?」

だが、舞い上がった土煙から飛び出すように人影が出てきた。お姫様抱つこでイエローを抱え、悠然とブルギルデイと向き合う戦士が一人。

「て、ててて…」

ブルギルデイが唸った。そして抱えられているイエローは嬉しそうに顔を赤くし、レッドは唯一の味方がようやく来てくれた！ と手を叩いてガッツポーズをとった。…ブルーは面白くなさそうな顔をしていたが。

「テイルファイヤー!!」

「やったぞ、コレで安心だ!!」

「…あいつなんていつも来るの遅いの!？」
そう、遅れながらも炎の戦士が戦場へと乱入してきたのだった。

※

俺が今一番欲しいのはこの特異な状況の説明だと思う。咄嗟に助けに入った彼女は何者なのだとか、戦闘員が何で死んだふりをしているのだとか…ツツコミどころは上げればキリがない。

「あ、と…とりあえず…あなたは何者なんですかね？」

胸の中ですらんとした表情でいる黄色の女性に話しかける。女性は待っていましたと言わんばかりにニコツツと笑顔になる。

「おほん！ 私、雷を司る戦士、第4のツインテイルズ！…その名も…」

だが胸の女性の言葉はそこで途切れた。地面に刺さったハルバードを回収しようと接近してきた怪人の処理をしなければならぬからだ。言葉を聞く余裕はそこで消え失せる。

「ふん！…むん！…はあ!!」

「…!」

俺は女性を抱えながら、牛型怪人の猛攻をかわし続ける。両腕が塞がっている以上、ここでは回避に徹した方がいい。

テイルファイヤーが素手なのに対し、ブルギルデイの方は武器を持っていて。普通に考えるならブルギルデイが圧倒的に有利だ。だが、奴が持つハルバードという武器は長いうえに重く、軽々と扱うには向いていない武器だ。地面に突き刺した時の音や空を切る際の風切り音でそれは判別できる。

使い方も振り回す、振り下ろす、突くの三つのみに限られるし、しかも戦場は校庭。下手な段差もないし、足場も悪くない為、地形に左右されることもない。悠々自適に動き回れる。

いくらフェイントがおり交じるとはいえ、限られた動きを予測して動くなど、ファイヤーには雑作もない事だった。事実、ブルギルデイのハルバードは空を切るか、地面を叩くかのどちらかだ。

「この…ちよこまかと…!」

「動きが遅すぎるんだよ! 牛だから思考も鈍いのか!」

「! 貴様!!」

そして何よりもブルギルデイ自身が鈍いということもある。ワイバーンギルデイやリヴァイアギルデイのあの素早い動きに比べればドン亀もいいところだ。

「ぬおががああああ!! ちよこまかと動くなああああああ!!」
「!」

遂にブルギルデイがやけくそを起こし、ハルバードをブン投げるという奇行に走った。だが、それが通じるのはさっきの不意打ちくらいだ…2度目はない。

投げられたハルバードを軽々と回避し、隙だらけになった怪人目がけて走る。両腕が使えないのなら、攻撃する手段は限られるが、一応はある。

「だああああああああ!!」

俺は勢いよく飛び上がり、空中で右足を思いつきり天へと伸ばす。

…正直、足技は得意ではないが、やるしかない。

「おりゃああああああ!!」

そして、奴の脳天目がけてかかと落としをくらわせた。

「決まりましたわ!」

「いや…!」

まだだ。まだ、決まっではない。ダメージは与えたが、それは決定的ではなかった。事実、怪人は頭を痛そうに押さえるだけで致命的な一撃とはなりえなかった。怪人は投げたハルバードを回収して、距離を取り、再び構える。

レイチエルもこの状況が芳しくないと感じ始めていた。原因は勿論、この黄色い女性だ。

放っておくと先日のあの民衆みたくに的になるだけだし、抱えて戦うにしても得意の拳を放てない。

『…このままじゃジリ貧だわ! ちよつとそこの黄色いの!』

「!? あ、あなた誰ですの!」

突然、黄色い女性が喚きだした。

『ええと…あたしはこいつのマナージャーみたいなものよ！ あんた何者って聞いているのよ!!』

そして俺も女性も、レイチエルが通信を彼女にかけているのによろやく気付いた。

「よ、よくぞ聞いてくれましたわ！ 私、雷を司…」

『時間がないんだからとっとと説明しなさいこのウストラトンカチ!!』

「…私、テイルイエローですわ」

残念そうに語る女性は俺に右腕に装着されている黄色のブレスを見せてきた。レッドとブルーと同じデザインのそれで、ようやくピンときた。

「テイル…イエロー？ もしかして」

「は、はい！ 私、つい先日デビューしたばかりのツインテール戦士で、今日が初陣なのですわ！」

なるほど、新しいツインテイルズなのか。レッドは新しい仲間を見つけたらしい。…羨ましいな。

しかも初陣ときたもんだ。なるほど、それであんなに動きが鈍かったのか。

『…とりあえず、あんた…ええと、テイルイエロー？ あんたはエレメンタリーシジョン属性玉交換機構を使って、項後ネー属性の属性玉を使って頂戴』

「え…？」

『このままファイヤーに抱えられているよりも、そうしてくれた方が何倍も役に立つわ。…ぶっちゃけ、今のあんた、お荷物だもの。壁にもなりやしないわ』

「おい…」

いくらなんでも言い過ぎだ、俺はそう思った。

『だって事実でしょ？ 武器を使うことも出来ない、ロクに殴ることも出来ない、ただ突っ立っているだけの戦士なんか戦場には必要ないわ!!』

「…！」

『だからあたしの言うことを聞いて！ 悔しかったら少しでも役に

立って!!』

淡々と怒りの感情を滲ませながら通信するレイチエルに、イエローは苦渋の表情をする。

「分かり、ましたわ…」

そしてイエローは折れた。認めたくはなかったが…幼き少女の言い放ったそれは正論であるが故に、どうしようもなかった。

イエローは属性玉を自らのギアへと転送し、それを左腕のアーマー部分、属性玉変換機構へとセットする。

「属性玉——項後属性…」

そして項後属性の能力が解き放たれた。イエローの見事なツインテールがうねうねと動いたかと思えば、それが俺の両腕へと巻きついた。

「うわ、なんだこれ!」

イエローのツインテールの動きは更に激しさを増し、毛先がギアの内部にまで侵入し、接続される。

『落ち着いて、今から説明するから！ イエローは砲撃特化の戦士よ、でも今のままじゃイエローはロクに弾を飛ばすこともできない！』

だからあんたがそれを補助するのよ!』

「ええとつまり?」

『あんたがイエローの補助輪になるのよ！ 遠距離からの攻撃で、敵を近づけさせないで倒して!!』

…要約すると、俺はイエローの電池ということらしい。イエローは力のコントロールが上手くできないため、ギアのスペックを十分に生かし切れていない。ならば外付けの属性力…つまりは俺と接続することで無理矢理ギアのスペックを引き出してもらおうという魂胆らしい。

『さあファイヤー! イエローの背中に抱きついて!!』

「…気は確かかお前?」

『そうした方が属性力が伝わりやすいのよ! しょうがないでしょ、こういう仕様なんだから!!』

絡みついてるツインテールはあくまでも最低限の繋がり。最も

効率のいい属性力の接続方法は、相手と密着…すなわち抱きつくことだという。

「ええと…その…イエロー、すまない!!」

「きやあ!」

がばつとイエローの背中に抱き着く俺。正直、あまり取りたくはない方法だけどレイチェルが言うのならば信じるしかあるまい。自分の胸がイエローの背中に当って苦しいけれど…しょうがない、我慢するしかない。

「ええと…イエロー! 思いつきり撃つてくれ!!」

「で、でも私…足手まとい…」

「支えるから大丈夫だ!!」

俺はグイツとイエローの手を握り絞める。

「俺の力をイエローへと託す! だから君は…好きなだけ撃つてくれ!!」

「…!」

その言葉がイエローに火が点いたのか、イエローは腰の装甲を展開して、構える。

「…貴様、馬鹿にしているのか!」

もつとも、ブルギルデイから見れば、今のイエローの態勢は、背中にファイヤーを抱かれているという奇妙な光景でしかないのだけだ。しかも巨乳コンビというのが彼のいらだちに拍車をかけているらしい。

「!」

イエローの怯えは握った手ごしでも伝わってくるが、安心させるようにギュツと握り返した。

「ゆっくり…落ちついて。心の引き金に思いを乗せて…!」

俺はイエローに同じ射出系武器であるブレイクシュートを使う時の感覚をアドバイスしながら、力を注ぎ込むように強く構える。

「は、はい…」

イエローはターゲットを怪人へと定める。ピピッとロックオンが完了した音が聞こえる。

「…狙い…打ちますわ!!」

「!」

ゴウツ!! 腰に装備された砲口が火を噴き、その反動で数メートル後ろへとけ反りかけるが、俺が踏ん張ることで何とかこらえる。超スピードで空を飛んだ弾丸は、見事に怪人へと着弾した。

「ぬがあっ!?!」

いきなりの攻撃にブルギルデイは吹っ飛んだ。着弾した弾丸は彼の羽織っているマントを焼け焦がし、胸には弾丸が奴の身体を打ち抜いた跡が見えた。

「…き、気持ちいい…ですわ…」

「は?」

「い、いえ! 何でもありませんわ!!」

『気を抜かないで! 続けて撃って!』

「分かった! イエロー、もうひと頑張りだ!!」

「! 了解ですわ!!」

ガシャン! 肩、背中、足元…イエローの全身にある、ありとあらゆる砲門がブルギルデイを捕える。

「き、貴様らあああああ!!」

ブルギルデイはハルバードを振りかぶって、こちらへと走って来るが、もう遅かった。こちらの準備は整っている。

「行けええええええ! イエロオオオオオオオ!!」

「…! ジエネレイト!フル!! バーストオ!!!」

イエローの技名と共に、全身の砲門が一斉に火を噴いた。それは先ほど見せたような弱弱い砲撃などではなく、正しく稲妻の如き破壊力を持った強力な砲撃だった。

「う、うおおおおおおおおお!!」

レーザー、レールガン、ミサイル…全身を重火器で貫かれたブルギルデイは遂に大爆発を引き起こした。

「やった…! やればできるじゃないか、イエロー!!」

「…あたしが倒すはずだったんだけどね、あいつは」

観戦していたレッドが喜びの声を上げた。ブルーは対照的に暗い

トーンで俺たちを見ているが…まあ、敵は倒せたんだ！ 良しとしよう!!

「はあ…はあ…これが…ファイヤーの力…太くて熱くて…たくましいですわ…!」

「あの…言い方は気を付けた方がいいと思うよ…テレビ局来てるし…」

シユウシユウと砲門が熱を帯びている中、イエローは顔を真っ赤にしながら怪しいことを口走っている。

「…よし」

俺は戦いが終わったと感じ、腕に絡みついているツインテールを振りほどこうとするが、イエローは逃がさないといった感じで手を握り返してきた。

「あの…もう少しだけ…こうしても…いいですか…?」

わらわらと逃げ出す戦闘員を眺めながら、イエローは俺の手をスルスルと擦る。

「あ、あの私…私…あなたの力の…はあん…」

…何だかイエローの様子がおかしいことが気がかりだったが、まずは彼女へ勝利の喜びを噛みしめてあげよう。初陣ご苦労様、と思いつつ、俺はイエローの手を握りしめた。

こうして、テイレイエローの初めての戦いは、俺の補助という助けを借りながらも勝利することができたのだった。

※

「手間がかかる新人なこと…」

レイチエルは苦笑しながらも、通信先の映像を切った。イエローをその気にさせるためにあんな臭い芝居をすることの身にもなってくれないものか。ああいう悪役はあたしには似合わないわね、と感じながらもパソコンの電源を落とそうとするが、ここで何者からか通信がかかってきた。

「…!?!」

通信を拒否する間もなく、強制的に通信が始まった。

『あの！ あなたレイチエル!? レイチエルですよね!?』

「…!」

『私です！ あなたの友達、トウアールです!!』

映像こそ映っていないが、画面の向こう側では聞き慣れた声が聞こえる。：間違いはない、あいつだ。

(やっぱり…生きて…いたの…あんた…)

だが、喜びたい本心とは裏腹に、レイチエルは画面の向こう側の人物に冷たく言い放った。

「人違いじゃないの？ あたし、あんたなんか知らないわ」

『…嘘、言わないでください！ 今、使っていたのあなたが作ったプログラムですよね!? あれと項後属性を組み合わせてイエローと接続したんじゃないんですか!?!』

「…勘違いじゃないの?」

『いいえ、違います！ あの数値と現象は、私とあなたで一緒に…』

「うるさい、切るわね」

『!? ちよ、ちよっ…!』

プツンと強制的にパソコンを消し、通信を終わらせた。

「…ごめんなさい、トウアール」

その言葉は、通信先の人物に聞こえたのかそうでないのか…それは誰にも分からない事であった。

第29話 前夜とツインテール

「…」

通信が切れ、砂嵐が走るパソコンの画面をじつと眺めるトゥアール。そしてこれ以上開いていても無駄だということを理解し、パソコンを荒々しく閉じた。

「レイチエル…」

ポツリと呟いたその名前。それが意味することは果たして何なのだろうか。

友が自分の呼びかけに答えてくれない苛立ちか、それとも逃げ続ける友への悲しみか。それとも…。

友を振り返るたびに思い出すのは、かつて自分が暮らして世界のこ
とだ。

今ではサポートに徹しているトゥアールだが、その昔、総二たちと同じように戦士として戦っていたことがある。彼女は先代のツインテイルズとして、自分の世界を守っていた。

そして正義の味方として敵と戦う日々を過ごすよりも前に、ひよんなことから出会ったのがレイチエルという少女だったのだ。

今でいうトゥアールのポジション、サポート役にいた彼女をトゥアールは一目で気に入ってしまった。…まあ、見た目かが自分の好みにぴったり合っていたということもあるのだが、幼くして天才的な頭脳を持つ彼女とは意気投合し、レイチエルが自分専属のオペレーターになるまではそう時間がかからなかった。それほどまでにレイチエルは優秀だったのだ。

2人の仲が深まり、パートナーとも呼べるような関係になっていたある日のこと、突然彼女は自分の前から姿を消してしまった。それから間もなく始まったアルティメギルの本格的な侵略。

トゥアールは最後の戦いに赴く時、彼女が後ろにいないことが非常に気がかりだった。いつもはいるはずのパートナーがいらない…そのことが大きな痛手になったのかは分からないが、トゥアールはあと一歩のところまで敵に負け、世界は瞬く間に侵略されてしまった。

そして次に奴らが狙う世界が総二たちにいる地球だと掴んだトゥアールは、このままだと地球はこの星の二の舞になるとはつきりと感じていた。自分が駆けつけても、やられてしまうのがオチとなる。もつと強い人物に…それこそ世界最強のツインテール愛を持つ者に力を渡さなければ勝ち目がない。

『ならば…私の中にあるこの力を…！』

トゥアールは自分の中にあるツインテール属性を抽出して作った赤色のブレスとかつて自分が使っていた青色のブレスを握りしめて、奴らよりも先へ地球へと降り立った。

そして、自分の身体の中にある属性玉が内蔵されている赤色のブレスは総二の手に、かつてトゥアールが使っていた青色のブレスは愛香の手へと渡ったのだ。――

「…」

…と、まあAパートを丸々一本使うくらい長い回想で振り返っていたが、はつきりと分かることは、レイチエルは間違いなく近場にいることだった。通信の時にラグ無しで行えたことからそれは簡単に分かった。そして通信先の人物は間違いなくレイチエルだと確信できる根拠もトゥアールにはあった。

何故なら先ほどの戦いでイエローとファイヤーを連結した際、ギア同士の間に独特で見慣れた反応が確認できたからだ。トゥアールはモニターに先ほどの映像を出してみる。

『行けええええええ！ イエロオオオオオオー!!』

『…！ ジエネレイト！フル!! バーストオ!!』

映像を止め、イエローの部分をピックアップしてみると、全射撃武装を解き放つ時、バチバチと強大な属性力がぶつかり合うことが原因で引き起こされる閃光が走っている。

(これは『同調システム』を使った時に起きる現象…)

そう、必殺技を放つ際、イエローとファイヤーの間には互いの属性力同士がぶつかった時に起きる同調システム独特の反応があったのだ。

(同調システム^{シンクロ}を使って、2人の属性力を重ね合わせ、上手く動かない

イエローのギアを正常に作動させている…)

本来は同調システムはそういった用途に使うものではないのだが、項後属性と組み合わせることでファイヤーの属性力を外付けのバッテリーのように使用しているのだろう。所謂「同調システムのちよつとした応用」というやつだ。その際、属性力が重なったことで生じる余波が周囲に発生しているのだ。

イエローのギアのデータと照らし合わせてみれば、それはすぐに分かることだった。互いの属性力が重なり合う…これと非常に似た現象を、トウアールはシステム開発の時に幾度となく見てきたので、すぐに同調システムを利用して、ファイヤーの属性力と繋げていることに気付けたのだ。

…と、ここまで自分の知っているシステムの反応を見せられれば、ファイヤーの後ろにはかつての自分のパートナーがいるということにたどり着くまでそんなに時間はかからなかった。

「あなたは…ファイヤーのサポートを…していたんですね」

それならば、あの時レインボーブリッジにいたことにも納得ができる。

「…よしー！」

そしてトウアールは決心した。次、彼女が確認できたとき、自分は真っ先に駆けつけてレイチエルを確保しよう。そして色々と話を聞いてあげよう。…それがかつてのパートナーがやるべき責任だ。

「で、会ったら…色々してもらいたいことが…あ、あるんですよ。コスプレとか…罵りとか…う、うへへへ…レイチエル…私、私ね…」

…色々危ないその怪しげな声は、地下室中に響き渡っていた。この独り言が、誰にも聞かれていないのがトウアールにとって、不幸中の幸いであつたであろう。だって今の彼女の顔は、とても人前で見せてはいけないものであつたから。

※

「私、本当は…ツインテールが嫌いなんですの」

総二は、慧理那が言ったその言葉にショックを受けていた。それは一番信じたくなかった言葉だし、総二が一番傷つく言葉であった。

その慧理那の衝撃的な告白を理解するには、初戦闘を終え、基地に帰ってきた時まで話を遡らなければならない。

慧理那は基地に帰ってきて早々、総二たちにブレスを返却すると言い出したのだ。総二と愛香は驚いたが、何とか慧理那を落ち着かせ、話を聞いた。…そしてその原因はすぐに分かった。

慧理那は自分がツインテイルズの足手まといになってしまったていることを気にしているのだ。デビュウ戦で敵を倒したといってもそれはファイヤーの助けがあったからこそであり、自分の力ではない。接近戦を主体として戦っているファイヤーの足を自分は引つ張っている。今日だって私がいなければもつと早く敵を倒せていた…だから、これを使う資格なんてないんじゃないかと、落ち込んでいたのだ。大丈夫だと、総二は励ました。初めての戦いは誰だってあんなものだと。すぐに順応できる俺や愛香の方が珍しいんだと、会長の方が普通だと。きつと時間が経てばすぐに慣れていくさと。

すると慧理那はで総二だけと話がしたい、と言い出した。そして2人きりになった時、彼女は苦しそうな顔でこう言ってきたのだ。「自分はツインテールが嫌いなのだ」と。

「私は、本当は自分でしたくてこの髪型にしている訳じゃありませんの…お母様に絶対にそうしろと言われて、仕方なくしているだけですの」

ばつの悪そうな顔で語る慧理那は目に涙を浮かべていた。まるで先生に怒られているように縮こまっている。誰よりもツインテールを愛している総二を目の前でこんなことを語るのは万死に値すると思っているからだ。

「家訓、とでもいうのでしょうか。子供の時から私はずっとこの髪型でしたわ…子供っぽい、子供っぽいと言われても…それでも髪型を変えることができなくて…いつしか私はこのツインテールを嫌って、いや憎んでいましたわ。子供と言われるのは…この髪型のせいなのだと…罪もないツインテールを憎んで、私は逃げたのですわ」

総二はショックだった。会長がツイントール嫌いだったことではなく、誰もがツイントールを愛して当然だという傲慢な考えに陥っていたことにショックを受けていた。

ツイントールという髪型は本来マイナーな髪型で、成長していくにつれて辞めていく人が大半であった。

しかしツイントールズの影響で、ツイントールは大人気の髪型として一大ブームとなっている。メディアではツイントールズの話が上がない日はない。

俺たちのおかげで誰もがツイントールを愛してくれている：誰もがツイントールを愛する世界になってくれたんだーいつのまにか総二の中ではそんなことが常識になっていたのかもしれない。：そんなことは絶対にありえないのに。

この世に同じツイントールが存在しないのと同じように、人の価値観だって同じものがあるはずがない。その中には会長ののように、無理矢理ツイントールをせざるを得ない人だっているかもしれないのに：ツイントールにしている人は必ずツイントールを愛している、なんてそんなことはありえない話じゃないはずなのに。

「観束君はいつも言っていました：『あなたがツイントールを愛する限り、私は助けに来ます』と。：不安だったのです。自分に嘘をついて、あなた方と出会うたびに。いつか私の言葉ばかりの偽りで塗り固めたツイントールへの気持ちを見抜かれてしまうのではないか、と」
「…」

「だから、私にはこのブレスを持つ資格なんて…」

慧理那は下を向いたまま、ブレスを取り外そうとしたが総二はそれを制した。

「え…？」

「…会長。俺は別に会長がツイントールを嫌いでも、それでもいいって思っているんだ。別に『本当は好きはずなんだ』って無理に言うくるめたくもない」

総二はぼつりとそう言った。そう、慧理那はギアを起動できるだけの属性力がある。それはすなわち、慧理那にもツイントール属性が存

在するという何よりの証拠だ。…つまりは彼女にも愛があるのだ。

「…もしかしてなんだけど…嫌いつて思っているのが、本当の嘘なんじゃないのかな？」

「う、嘘なんかじゃありませんわ!!」

慧理那はどこか心当たりがあったのか、痛い所を突かれたような反応があった。

「…いや、分かるよ。会長のツインテールを見れば、分かる」

「…! じゃあどうして! どうして…観束君はそこまでツインテールが好きなんですの?」

そう言つて机を力強く叩く慧理那。慧理那のツインテールはまるで萎れた花のように元気がなかった。

「じゃあ逆にさ、会長はどうしてヒーローが好きなんだ? 子供の頃からずっと好きで…会長だつてそんなヒーローになりたくて、ツインテイルズになつたんだろ?」

「それは…かつこいいからですわ! 己の信念を貫き、世界の平和を守る正義のヒーロー!! その尊い信念があるからこそ、ヒーローは強くて、かつこいいのです!! 観束君だつて…そんな尊い信念を持つヒーローではないですか!」

「ううん、俺は違うよ…尊い信念や決意なんて持っていないさ。ツインテールの為に戦うなんて、普通のヒーローの戦う理由じゃないだろ?」

「でもそれは建前なのでしょう!? 世界を守るついでにツインテールも…」

「ついでなんかじゃないさ!!」

今度は総二が机を叩く番だった。

「俺にとつては、世界の方がついでだ! 俺は、ツインテールを守るついでに世界を守っているんだ!!」

「…!」

「だつて俺…ツインテールが好きだからさ」

総二はそう言うのとニコリと笑つた。慧理那は信じられないような顔で総二を見ていた。

「…なあ会長。明日からヒーローに憧れて生きるのを辞めてみないか？ おもちやも全部捨てて…普通の高校生として生きてみないか？」
「そんなことできる訳ないじゃありませんか!! 私にとってヒーローは命の次に大切なものですわ!!」

「…な？」

その言葉と共に、総二はトンと親指を自分の胸に押し当てる。慧理那は総二が言いたかったことが理解できたかのような顔をしていた。
「誰だって、それぞれ大切なものがあるんだ。俺がツインテールが好きなように、会長がヒーローが好きなように。それは時に人には理解できないものかもしれないし、他人から見ればくだらないものかもしれない…でもそれは、その人にとっては、命にも勝る宝物なんだよ」
「それは…」

「俺はツインテールが好きだ。それもとびつきり。…だからそれを奪おうとするあいつらが許せないんだ。そりゃあ…あいつらは怖いしビビってしまうこともあるけど…救えるツインテールがあるのならば、俺は走ってしまう！ だって俺、ツインテールが好きなんだから！ 世界がどうだとかじゃやない、それだけで俺にとって、戦うには十分な理由なんだ!!」

総二は自他ともに認めるツインテール馬鹿だ。それを理不尽に奪う、奴らアルティメギルの存在が許せない。奴らに征服された世界の人たちもきつとそう思っているはずだ。大切な物を奪われた、と。

総二はそんな悲しみを広げたくはなかった。初めての戦いで会長のツインテールを奪われた時に感じたあの思いを、怒りを、悲しみを総二自身、二度と感じたくはなかった。

大切な物を奪われる。これほど残酷で身勝手なことはないということ。総二は分かっているからだ。

「だから俺は、ツインテールを守るために戦うんだ。俺にできるのはそれだけだから」

総二は言いたいことを全部言い終えたとばかりに椅子に腰掛ける。そんな総二を見ながら慧理那は目許を擦り、微笑んだ。

「…やつぱり、かつこいいではないですか、観東君」

「いや、さすがにこんな理由で戦って、それはないよ」

総二は軽く手を振って否定する。これでかつこいいというのならば、この世にいる数多のヒーローの方々にも申し訳が立たないからだ。こんな間抜けな動機で戦うヒーローが存在してたまるか。

「でも、だからこそ、私は、あなた方と共に戦うなんて…。私は、ファイヤーの助けが無かったら銃も使えない…あんなに惨めでかつこ悪い…」

「かつこ悪いなら一緒に戦えないのか？…だったら俺の方がよっぽどかつこ悪いさ、幼女に変身するんだぜ？」

「でも、テイルレッドは皆のアイドルではないですか！ 誰からも愛されている、力も人徳も兼ね備えて…ファイヤーだってあんなに華麗に…！私にはヒーローの資格なんて…」

「だったら愛香はどうなんだ！ 目つきがヤバイとか近寄ったら殺されるとか、魔人だ鬼神だと散々言われても一緒に戦ってくれているんだ！ 愛香は、テイルブルーはヒーローじゃないのか!? 違うだろう!!」

隣の部屋辺りで、誰かが壁を殴ったような轟音が聞こえた気がしたが気のせいだろう。…多分、愛香の仕業だろうけど、気にしないでおこう。

「…俺はさ、本当は怖いんだよ」

今度は総二が苦しい顔をして、慧理那に弱みをぶつける番だった。「愛されているから、崇拜されているから、俺の正体がばれた時が怖くてたまらない。皆だって掌を返すかもしれないし…」

そう、総二だって人の子だ。怖くないわけがなかった。正体がばれ、テイルレッドの正体が男だと広まった瞬間、皆から何を言われるか。共に戦うテイルファイヤーだってどんな顔をするか簡単に想像できる。戦うたびに人を騙しているような、そんな感覚が総二の中にはあった。

「でも俺は、仲間がいることで、一緒に戦うことでその恐怖と戦ってこれたんだ！ それは俺が一人では絶対にできない事なんだ！ …それは、いつか会長自身が言ってくれたことじゃないか!!」

「あ…」

慧理那は数週間前のことを思い出していた丁度、ブルーがメディアに出てきて、ボロクソに叩かれていた時期のことだ。

慧理那はレッドに新たな仲間ができたことを非常に喜んでいて。『レッドもファイヤーも寂しげに済むのですね』と喜んでいて。一緒に戦う仲間がいればつらくない…そう総二たちに言ってくれたのだ。

「誰にも認められなくてもいい。俺には、思いを打ち明けられる仲間が、共に戦う仲間がいればそれだけで十分に誇らしいんだ！そこに強い弱いも関係ない！華々しくなくなつてかつこ悪くたつていいんだ、俺にはその仲間たちがそばにいるだけでいいんだよ！それは会長も同じさ!!俺が、愛香が、トゥアールが、君が弱いから…慧理那が必要ないって一度でも言ったことがあるか!?!」

総二は熱くなり、いつしか慧理那に掴みかかっていた。その手には慧理那のツインテールが絡まり、総二は無意識の内に強く握る。

「強くなるうぜ、会長！弱くたつていい、誰だつて最初からヒーローな訳がないんだ、俺だつてそうだ！だから…ここから始めようぜ!!君が弱いのならば…君がファイヤーと繋がらなくなつて戦えるように！俺たちが慧理那を鍛え上げてみせるからさ!!」

総二は一通り喋ると、自分が会長に掴みかかっていることに気づき、慌てて離れた。その後自分が慧理那を呼び捨てにしていることにも気づいた。

「…あ、ごめん、呼び捨てにしちやつて…」

「い、いえ…！その…私…はあ…はあ…!!」

「え、えと!?!大丈夫ですか!?!」

何故か慧理那は顔を赤らめて、はあはあと息をあげていた。…まるでトゥアールが総二に詰め寄る時に見せるような顔つきをしていた。「え、ええ…その…申し訳ありません…私、少しばかり取り乱してしまっています…」

「う、うん。ならばいいんだけど…」

総二は離れながら、今の慧理那を少し観察して見ることにした。特

にある一部分を、注意深く見てみる。

そして総二はあることに気付いた。

「——今、会長のツインテールが光った気がする」

「…何を言っていますの?」

意味が分からないといった顔で総二を見る慧理那。うん、そうだろうなと思う総二であったが、今までにないほど会長のツインテールが光り輝いて見えるのは事実なのだ。

「…なあ、会長。もしまだ、俺を…テイルレットのことをかつこいと
言ってくれるのなら…俺の馬鹿に付き合ってくれないか?」

「…っ、付き合う?」

「ああ、それも今すぐにね。会長の殻を破る為に…」

「駄目ですよそれは——!!」

だが総二が言い終わる前に、ドアを蹴り破ってトウアールが転がり
込んできた。

「い、今すぐ突きあうですって!? 駄目ですよ慧理那さん、ここは順番
待ちをしてもらいましょう! 一番は不動の私なんですから!! …
あつ、でも愛香さんの前に横入りするのは許して…」

「いいかげんにしろあんたあ——!!」

「ごぼろげっえ!」

「ふむ、中々いい蹴りだな。私も参考にするか」

卑猥な発言を言い終わるか終わらないかの内に、愛香の放った延髄蹴
りが綺麗にトウアールに決まった。最近、トウアールは愛香のサンド
バックが非常に様になっている気がする。

壁に叩きつけられたトウアールを睨むふくれっ面の愛香と、メイド
の尊先生が部屋へと入って来る。

「付き合う、か…観束君、お嬢様を頼むぞ。君にならば任せられる。…
そして帰ってきたら私と結婚しよう」

「帰ってはきますが、結婚はしません」

冷たくそれだけを言うと、総二は部屋の隅に置かれている転送機器
を動かして、転送準備に取りかかる。

「あ、あの…どちらにいかれるのですか?」

「ん？ ああ…ヒーローが戦う、お約束の舞台さ」

さあて、と言いなながら総二は近くの使われていない採掘所を転送場所へと設定した。

※

「ふむ、これが…」

「ああ、新たなツインテイルズだ。名はテイルイエローというそうだ」
リヴァイアギルデイとクラークギルデイは部下からの情報を受け、それを観覧していた。モニターにはイエローとファイヤーが連結して必殺の一撃を放つ瞬間の静止画が映っている。

「今はまだひよつこらしいが…あれほどのツインテイルを持つ戦士だ。時間をおけばおくほど厄介な存在になると見て間違いないな」

「ああ。この揺れる乳は不愉快だが、遠距離特化型の奴と私たちではいささか相性が良くないであろうからな」

「テイルファイヤーと連結しているというのも厄介だ」

リヴァイアギルデイ、クラークギルデイ共に接近戦を主体として戦う戦士。その為、イエローの遠距離からの攻撃にはなすすべもなく、戦闘の主権を彼女に奪われる可能性が非常に高かった。やりようによつては戦えるが、倒せるかという点と難しい話になってくる。

クラークギルデイは歯噛みしながらモニターの電源を落とした。

「…面目もない。私を取り乱したばかりに、先の戦いではデータ不足に陥ってしまつて。未だにレッドやブルーの手の内が分からないままだ」

「構わん。手の内が分からない戦いというのも戦の醍醐味だ…それにしては貴様らしくもない。随分としおらしいではないか」

「いつまでも争いをやめぬ部下たちを見続けければ、こうなるに決まつているではないか」

「…違ういな」

巨乳と貧乳。組織を2つに分けた争いは、泥沼の極限状態に達していた。2人の部下たちは諍いをやめずに、言い争いだけでなく戦闘行

為にまで発展するケースも少なくはなかった。幸いにも死傷者は出ていないものの、これ以上放っておくと本当に出てしまう可能性もあった。

焦る理由はまだある。フェンリルギルデイの行方だ。ここしばらく、彼の姿を見ていない。

生意気な若造ではあったが、実力は確かにあった。それが忽然と姿を消した理由を、幹部クラスの2人が理解できないわけがない。既に闇の処刑人は降臨し、肅清は実行されたのは間違いないだろう。

ならば次の対象は自分たちか、あるいはその部下か……。そんなことだけは絶対に許すわけにはいかなかった。部下を守らずにして何が一部隊の長か。

そしてつい先ほど殉職したブルギルデイの存在。それがこれ以上、部下たちを無駄死にさせるわけにはいかないという決意を固めさせた。

…明日、リヴァイアギルデイとクラークギルデイはツインテイルズの決戦へと仕掛けるつもりだった。今度はどちらも思う存分戦えるように、人のいない場所を戦場として、互いの全力を尽くせるようにする…。

2人は向き合い、互いの目をしかと見た。それは互いの意志の確認を行うためであった

「…やはり貴様と手を組むことはできないな。ラージバスト巨乳属性を理解できぬものと手と手を取り合うなど」

「それはこちらと同じだ。貴様は不倶戴天の宿敵。スモールバスト貧乳属性を拒んだ者の助力など、必要ないわ」

和解の道は断られた。2人の長は、別たれた道を断固として進むという決断に達した。それが結論であり、互いの部下へのけじめでもあった。

対極の属性力を持つ者同士、和平という道はあり得ない。…ならば。

「我らの内、ツインテイルズのツインテール属性を奪った方が、全ての部隊を率いる…異論はないな？」

「ああ、ない！」

そして、2人は豪快に笑った。互いを嫌っているからこそ、互いの考えは恐ろしいほど読めている。そして、何が互いに納得できる答えなのかも分かっていた。

「くくく…結局、この答えに行きついてしまったか」

「勝てるから戦うとか、勝てないから戦わないではない…戦うべき時だからこそ戦う。アルティメギルの信念に基づき、良い解決方法ではないか？」

「つくづく馬鹿な奴らだ！」

「ああ…だが残念ながら、我々もその馬鹿な奴らの一員なのだよ」

「…違うない!!」

リヴァイアギルデイは粹な笑みを見せ、クラーケギルデイもニヤリと笑った。

シンプルかつ単純な解決方法だった。絶対的な力を得た者が、その力を以て全てを屈服させる。勝者を決め、勝利者になった者が全てを決めればいい。…それで争いは終わる。

なぜならば彼らは侵略者。言葉ではなく、力で全てを統一させるのが、あるべき姿なのだから。

2人は懐からパソコンを取り出し、無言でタイピングをする。キーボードを叩く音しか聞こえなかったが、しばらくすると、それが止った。

2人は所謂、遺書を書いていた。勝つにしろ負けるにしろ…結末は明日、決まる。生きて戻れない戦いかもしれない。だからこうやって2人は遺書という最後のメッセージを残す作業に励んでいたのだ。

万が一、両者共に死ぬことがあれば、この部隊はたちまち空中分解を起こすであろう。それほど部隊は泥沼状態にいるのだ。

だから2人は、それぞれの部下の成績や順位をしつかりと残し、万が一の時の為に、与える地位やポジションなどの詳しい情報を事細かに示し、自分がいなくなっても部隊がしっかりと機能するようにした。―それが、隊長として、散りゆくものの最後の責務だった。

遺書に示していたともあれば、部下たちは借りてきた猫のように大

人しくなってくれるはずだ。良くも悪くも部下たちは隊長思いである馬鹿どもばかり集まっているのだから。

リヴァイアギルデイは不器用な文面でそれぞれの部下たちへの激励の言葉を残していた。それぞれ最後に精進しろ、と言いついていく。小難しいこと嫌い、不器用で豪快なリヴァイアギルデイらしい遺書だ。

クラーケギルデイは万が一自分が死んだ場合、テイルブルー用に発注していた青色のドレスの処分方法や遺品などの行方を細かく示した。欲しいものがあれば持つていってもかまわないという一文も加える。遺品をなるべく残したくない、繊細で几帳面なクラーケギルデイらしい遺書だった。

「ふん：明日の出撃時刻は？」

「1600。午後4時丁度だ」

「：分かった、遅れるなよ」

「それはこちらの台詞だ」

それだけを言い、2人は別れた。それ以上言葉は交わさなかった。そう、勝てばいいのだ。必ず勝つて戻る。そうすればこの胸の中にある悲しみや空白はなくなる―そう決心し、会議室の扉は閉められ、明かりは消された。：巨乳と貧乳、この2つの属性力に彩られたパソコンだけを会議用の長テーブルに残して。

決戦まで、残り24時間を切っていた。

第30話 赤殺しとツインテール

そして次の日。俺は最後のHRの時間をぼうつと聞きながら席に座っていた。担任は間延びした声で何かを言っているようであったが、心ここにあらずといった様子で話を全て聞き逃していた。机にじっと仏像のように動かずに、俺はある一つのことに悩み続けている。

(あいつ、なんで元気なかつたんだ…?)

その悩みは、昨日のことが原因だった。出撃前はあるなりに元気だったレイチエルは、帰って来てみればどこかしよんぼりとして、元気がなさそうだった。明らかに様子が変だった。

当のレイチエル本人は明るく振る舞ってはいたものの、その元気には空元気が見え隠れしている。無理して元気を絞り出しているよな、そんな気がする。…俺がいない間、ブルギルデイの戦いの間に何かあったのは間違いないと思うのだが、あいつは何も話さないし、俺がその話題を振っても綺麗にかわされてしまう。

しかもその悩みはテイレイエローのことではないらしい。…俺はてっきりあの時言い過ぎてしまったことを悩んでいるのかとおもったのだけれど、今朝、はつきり違うと言われてしまった。あいつが嘘を言っているとは思えないし…。結局、何も分からず仕舞いでこうやって一人でもんもんと悩み続けているのだ。

(…そういうえば、俺、あいつのこと、あんまり知らないんだよな…)

戦い続けて一ヶ月経つが、分かってきたことよりも分からない事の方が遥かに多いのが現状だ。そろそろあいつが隠していることをいろいろ聞いてみてもいい時期なのではないかと思う一方で、まだ早いんじゃないかと思うこの頃。

(俺自身も怖いのかな…この関係が崩れるのが…)

どこか一步を踏み出す覚悟が足りない。そんな自分に少し嫌気がさしながら周りを見渡すと、丁度HRが終了していた。皆、潮が引くように帰っていく。

…うわ、もう終わっていたのか。

「ねえ光太郎、どっか調子でも悪いの?」

すると愛香さんが心配そうな顔で、こっちにやってきた。

「え?」

「え、じゃないわよ。あんた今日ずっと下向いているしボーとしてるし…総二とどっか身体でも悪いんじゃないかって話していたのよ」

保健室行く? と言ってくれる愛香さんを見ると、このクラスでも数少ない常識人だと改めて認識できる。

「え、と。特に悪いっていうんじゃないんだ。少し、考えたいことがあつてね」

「…まあ、あんたには色々悪いことにつき合わせているって感じはするし、考えたい気持ちも分かるわ」

「あ、はは…」

「ほんつとに総二の馬鹿に付き合わせちゃつてごめんさい…」

愛香さんは申し訳なさそうな顔をして、ぺこりと頭を下げってくる。彼女が謝っているのは、幽霊部員とはいえツインテール部なる怪しい部活へと俺を誘ってしまったことだった。

俺がツインテール部という謎の部活に所属していると周りに知られてから色々面倒なことになっている。ツインテイルズ大好きな男子たちからは「お前もようやくこっちに来てくれたのか」「新たなツインテールを求める勇者の誕生に乾杯」とクラスから一歩引いたポジションにいた俺を、ツインテイルズ好き仲間だと迎え入れてくれた。…そのツインテイルズの一員が俺のただけれど、もうこのツッコミをするのも飽きてきてしまっている。今月に入ってから何回目だこれ?

要するに、変な部活に入っている俺はクラスから好奇の目に晒されており、自他ともに認めるツインテール馬鹿の総二と同じような扱いを受けているのだ。総二や愛香さんの弁明で何とかその疑いは晴れつつあるが、それでも「総二の手下」「ツインテール部最弱の刺客」「劣兵」などという良く分からない異名が与えられ、それが俺のあだ名みたいになってしまっている。

しかもそのことが関連して尊先生にことあるごとに婚姻届を渡さ

れるようになってしまっている。オーソドックスの手渡しから、手裏剣のように投擲、ティッシュ代わりに渡されるなど最近はその渡し方にも変化が見られている。

…婚姻届ってそう易々と渡すものではないと思うんですけど。

その度に愛香さんは不良生徒の保護者みたいな顔つきで俺に謝ってくる。本当にごめん、総二が受けるのは全然かまわないんだけど幽霊部員のあんたまでとばっちりが…と判に押ししたように同じ言葉をかけてくれる。

「うん…」

ありがとう、と言おうとしたその瞬間だった。突如、ビー！ と甲高い音が左腕につけていているティルリストから聞こえ、驚きのあまり、俺は椅子から転げ落ちた。

「!? あ、あんた大丈夫!？」

愛香さんはいきなり転げ落ちた俺を見て、何事かと狼狽していた。ティルリストの認識攪乱が作動している為、俺以外には鳴り響いた音が聞こえない。その為、端から見ればいきなり転げ落ちた挙動不審の男にしか見えない。俺は心配そうな愛香さんにうん大丈夫だから、馬鹿なことしているけど大丈夫！ といったジェスチャーをする。

…この通信のやり方は毎度のことながら心臓に悪すぎる、もつと改良する余地があると思う。

すると愛香さんの方もきやつと、驚いたような声を上げ、ポケットから自分のスマホを取り出した。

そんな光景を見ながら俺は、ああきつと家からの通話か何かなんだろうな、と平和なことを考えていたのだけれど、次に彼女が発した言葉に度肝を抜かした。

「ぎやははははは!! 生肉が食いてえええええ！ 生、生がいいんだよお、あたいは！」

…耳を疑った。あの常識人筆頭の愛香さんが通話開始直後に発した、その魔界言語に俺は呆然せざるを得なかった。

「う、ぶぶぶ…」

そして、教室の端でそんな愛香さんを面白そうな顔で見ているトウ

アールさんがいた。何故か愛香さんとお揃いのスマホを持って、どこかに通話しているみたいだ。あ、丸見えの画面から通話相手が見える。その通話相手は…愛香さんだ。

「うおーらああああああああああああああああ!!」

僅か数秒で通話を切った愛香さんは、甲子園決勝のラストイニングを思わせる渾身の投球でスマホを黒板へと叩き込んだ。この行動で、トウアールさんが何かスマホに細工をして、愛香さんを困らせているのは一目でわかった。

「あ、あなた何してるんですかあああああああ!?!」

「あんたさ、いい加減学習能力つて無いのかしら…? これ2回目よね、前に忠告をしたはずなんだけど…!」

愛香さんは怒りの形相でツインテールを逆立て、拳の関節を鳴らし、トウアールへ詰め寄った。まるでテイルブルーの生き写しみたいなその摩訶不思議な光景を尻目に、俺はテイルリストの音声をようやく繋げた。

『出んの遅いわよ!!』

「…悪かった、こつちで少し野暮用があつて。で、エレメリアンか?」

『…そうよ、しかもあの2体組に間違いないわ。あんたが戦った奴に前回の付添いも一緒ね』

…! 奴が来たか、リヴァイアギルデイ。付添いの奴とはテイルブルーに告白したクラーケギルデイのことを言っているのだろう。遂に、奴とのリベンジマッチが幕を開こうとしている。…汗で滲んできた両手を制服の裾で拭う。

「場所は?」

『ええと、場所はここから…』

「死ね! 死ね死ね!! おっぱいなんてみんな死ね!!!」

「ぎゃああああああああああああああああおっぱい千切れるうううううううううう!!」

『!?!』

だが、俺が敵の現れた場所を聞く前に、トウアールさんの断末魔が原因で、通信が遮られる。俺も、通信先のレイチエルも驚いたように

息を上げた。

「うわー、津辺さん技かけるの上手いなー」

「関節技がトウアールさんに決まっているぜ!! 嗚呼、おっぱいが潰れて……!」

「…あ、いい! 凄くいい!! 薄い本が厚くなるわ!!」

クラスメイトの世迷言が通信に割込み、シリアスさが微塵も無くなってしまった。さっきの緊張感を返せ。

「…あー、その、悪い。変な音声が入っちゃって。今の、ウチのクラスメイトの声だ、気にすんな」

『…ト、トウ…トウアール?』

「?…おい、おい…レイチエル?」

『!? え!? …ああ、ごめんなさい!! そ、そうよね………他人の空似よね? 同姓同名よね? 私の勘違いよね?』

ぶつぶつと独り言を呟くレイチエルに俺はいよいよ心配になってくる。

「…お前、本当に大丈夫?」

『……うん……うん。…大丈夫、大丈夫よ! ええと、敵の出現場所だったわね。ちよつと待ってね……!』

何だか言葉を発するまでに間があつたけど、あいつ本当に大丈夫なのか? まあ、愛香さんとトウアールさんのど突きあいもうクラスの名物みたいになっているので、俺たちは騒がなくなつたけど、初めてのレイチエルにとっては驚きだよなと思いつつながら、俺はこつそりと教室を抜け出して、階段を下りる。人が多いここでは現場までの転送ができないからだ。

「と、と。ごめんなさい、ね。間通して、くれ、よつと」

丁度、HR終了時刻ともあり、人ごみの合間を縫って、俺は小走り気味に走る。…ふとその人ごみの中に、下を俯いている生徒会長が紛れ込んでいる事に気付いた。…が、俺はすぐにそれを頭の中から消し、戦場へ向かう為に駆けだした。

※

奴らが今回出現した場所は、市街地から相当離れた場所にある寂れた工場跡であった。サビだらけの鉄骨やひび割れだらけのコンクリートから、長らくここに人が立ち寄っていないことが分かる。人っ子一人立ち寄らないであろうここを戦場に選んだ理由は、聞かなくても分かる。

全力で、俺たちと戦う。それだけの為にこの舞台を選んだのだろう。…決戦の時だ。

「…来たか！」

「遅いですよ、プリンセス 姫」

2人のエレメリアン、リヴァイアギルデイとクラーケギルデイは揃って腕を組み、こちらを睨みつけている。

対するはツインテイルズ。レッド、ブルー、ファイヤー。いつもの面子だが、何故かイエローの姿はない。

「あれ、イエローは？」

「まだ実践に出せるレベルじゃないのよ、イエローは。悪いけど置いてきたわ」

俺の疑問を淡々と答えてくれるブルーは、顔色が悪そうだった。…原因は目の前のクラーケギルデイのせいだろう。ブルーを見た途端、猫が尻尾を振るみたいに触手をうねうねと動かしたのには俺だって気持ち悪いと思ったもの。

イエローが来ないのは、まだ戦力にならないからだと説明してくれた。

イエローはまだ属性力のコントロールに手間取っているらしい。あの射的の銃レベルの弾道からエアガンレベルまで何とかスキルアップは果たしたそうだが、それでも実戦に彼女を加えるのには危なっかしいとの判断らしい。イエローには元々、強制的に戦えとは命じていないので来なくても別に怒りはしない、問題はないとブルーは言っていた。

またレッド曰く「後一步で壁が破れそうなんだけど、その一步がどうしても分からない」だそう。素質はあるのだが、それを十二分に

発揮できるきつかけがまだ分からないらしい。どうやら俺と一緒に放った銃弾レベルに達するまで時間はかかりそうだった。

「姫…先日は取り乱しお見苦しい所を…申し訳ありません。しかし、私の気持ちは変わりません」

早くもクラークギルデイは片膝をついて、騎士の構えを見せてきた。求婚モード全開の触手のうねりに、ブルーは口元を押さえて必死で悲鳴をかき消している。

そんなクラークギルデイは立ち上がり、ブルーへと近寄ろうと歩み始める。

「待てよ」

するとそれを遮るように、レッドが剣を取り出してクラークギルデイの前に立ちふさがった。そんなレッドに途端に不快感を露わにするクラークギルデイ。

「…幼子よ、そこをどきなさい。それとも、あなたのツインテール属性から先に奪われたいのですか?」

「悪いな騎士かぶれ。姫を守るのも、騎士の務め…お前の相手はこの俺だ! ブルーには指一本触れさせねえ!!」

そのタンカと共に剣を構えるレッド。そんなレッドに関心したかのような顔つきになるリヴァイアギルデイ。

「ほう…その幼きにして、戦士の面構えか…流石はドラグギルデイを倒しただけはあるな。クラークギルデイよ、奴はただの幼女ではない、戦士だ。…舐めてかかるなよ?」

「分かっているリヴァイアギルデイ…私は騎士。ウサギを狩るときにも全力を尽くす戦士だ!!」

スツと腰にある鞘からレイピアを抜き、構えるクラークギルデイ。レイピアをレッドに突きつけ、叫ぶ。

「よかろう幼き騎士、レイルレッドよ…貴様に決闘を申し込む!!」

「ああ、その決闘受けたぞ!」

決闘前の光景に満足そうに頷くりヴァイアギルデイ。そしてグルリと俺へと視線が移動し、俺の鼓動が早まる。

「ふ…待たせたなレイルファイヤー。貴様との再戦、心より待ってい

た」

嬉しさのあまり、尻尾から変な汁が垂れだしているリヴァイアギルデイ。尻尾の位置的に、股間から出る汁ってというのが変な連想を生んでしまいそうになるが、慌てて取り消す。

「…俺は待ちなくてはなかつたけどな」

そんな呟きを吐きながら俺はこの前と同じように構える。

「ふっ、情けないことを言うな。貴様ほどの戦士はドンと構えているのが丁度いいぞ？ 度が過ぎた謙虚さは己の力を鈍らせるからな」

「…アドバイス、ありがとう」

結局の所、奴の奥義の攻略法を発見するには至らなかつたものの、奴がどんな攻撃パターンをしかけてくるかは大体の見当はついている。テスト範囲がこれならば、70点は取れるんじゃないかという理解度は得ていた。後は実戦でそれを暴いていくしかない。

「…では、茶番はここまでだ。ここからは戦だ」

リヴァイアギルデイは静かに腕組みを解き、身体に絡みついた尾をほどいた。そして槍を持つかのような構えを取る。顔つきも凜々しくなり、戦士としての面構えとなる。

「…始めようか、テイルファイヤー」

「…ああ、これでケリをつけるぞリヴァイアギルデイ」

奴らがこの人のいない現場を舞台として選んだ理由は、全力で己の力をぶつける為…ならば俺もその全力で立ち向かおう。

そしてテイルレッド、テイルファイヤー、リヴァイアギルデイ、クラークギルデイ。この場にいる4人の漢の叫びが同時に重なった。

「「「いくぞ!!」」」

その叫びと共に戦いの幕が上がった。

「…あたし帰っていい？」

「それは駄目ですぞ、姫！」

「とりあえずはファイヤーの援護に向かってくれ、ブルー！」

…一人だけ余ったブルーを置き去りにして。

※

「はああああああああああああ!!」

「ぬおおおおおおおお!!」

テイルフアイヤーとリヴァイアギルデイの拳がぶつかり合い、初戦と同じように互いが吹っ飛んだ。リヴァイアギルデイは朽ちた機材に突っ込んだが、俺が叩き込まれた工場の壁は老朽化したためか脆く、受け止めてはくれずに工場の中へと叩き込まれる。

「ぐ……!」

やはり正面同士のぶつかり合いでは奴の方が一枚上手か。体格、重量。どれをとっても俺よりも上だものな。

「ふんっ!」

「!」

ぐるりと身体を捻らせて回避すると、先ほどまで俺が寝転んでいた地点に尾が叩き込まれ、軽いクレーターができた。リヴァイアギルデイは工場中へと入った俺を追撃に来たのだ。

身体を起こし、体勢を立て直す為に距離を取ろうとするが、リヴァイアギルデイがそれを許さない。常に前進してきて、俺との距離を一定に保とうとしている。

「くそっ!」

苛立ち混じりの悪態をつくが、そんなことでどうにかなる訳じゃない。

(距離を、離してくれない……)

リヴァイアギルデイの戦い方が前回と違うのは、一度戦い、手の内をある程度分かっているからなのだろう。やはり予想通り、遠距離攻撃はしてこない。あの光線反射を警戒しているのだ。

「はあっ!!」

「があっ!?!」

またもリヴァイアギルデイの拳が飛んできて、辛うじて反撃を試みるが、結果は俺の負けだ。

まともではない体勢からの拳では奴には通用せずに、俺の身体はガクンと沈みかける。踏ん張ろうとしていた膝が折れ曲がり、地面へと

膝が点きそうなほどの衝撃が襲った。その決定的な隙をリヴァアイアギルデイは逃さない。

(けど……！)

「む!?」

リヴァアイアギルデイは自分の尾を鞭のようにならせて、俺を叩こうとするが、間一髪、地面をギリギリまで身体を落としたスライディングで滑り、無理矢理回避する。

「…手の内が分かっているのはそっちだけじゃないんだ!!」

一度技を見ているのはそっちだけじゃない。こちら側にだって、お前らの手の内は分かっているんだ。

そしてそのままの体勢から飛び上がり、低空アッパーの構えをするが、リヴァアイアギルデイは待っていたとばかりにガードの構えをする。

「馬鹿め、その一撃は読んでいる!!」

奇しくも前回と同じようなシチュエーションだが、前回とは違うのは…。

「ブレイク、シュートオ!!」

腹部を狙わずにそのまま上を目指し、零距离から射出用武装、ブレイクシュートを放ったことだった。

「ぬ、ぐがあ?」

零距离からのブレイクシュートがリヴァアイアギルデイの右肩を打ち抜く。腹部に来るとばかりに予想していたリヴァアイアギルデイは、右肩に走る痛みで顔を歪め、体勢を崩す。

『やったわね!』

「ああ…零距离でのこれは初めてだったからな、上手くいくかヒヤヒヤしてた」

『かつこいいわよね、零距离って!!』

「お前、好きそうでもない、こういうの」

嬉しそうな声をあげるレイチエルにそう反応する俺。やっと一撃らしい一撃を与えることができたのだから大声で喝采したい気分だが、それを何とか抑え、緊張の糸を緩ませない。

…単なる拳、肉弾戦だけでは奴を追いつめることはできない。奴の切り札も何かもまだ判明していない。切れるカードが少ないこちら側の方が追い込まれる可能性が高い。

ならば、奴が切り札を使う前に、戦いに響くような一打を敵に与えること。手の内が分かっているからこそあえてそれを利用する。そして自分が切れる最高のカードを切る。それがレイチエルと立てた作戦だった。

リヴァイアギルデイは前回の戦いから、一撃を避けた次の動作は腹部への攻撃に来るはずだ、と予想していたに違いない。事実、俺が今まで行っていた攻撃は腹部への一撃が主な手段であり、隙あれば他の部位を狙うのがセオリーであった。

零距离から右肩への一撃はさぞかし強烈であったことだろう。本来、ブレイクシユートはこういった用途には使わないのだが、まさか俺も射出武器を零距离でぶっ放すとは思ってもいなかった。

「ぐ、ぐぐ……！」

この戦い、初めて与えた決定的なダメージに、狼狽するリヴァイアギルデイ。右肩には拳大の穴がぽっかりと開いている。

そんな俺は距離を取って、奴の動作を注意深く観察する。…まだ奴は切り札を隠し持っているはず。それが判明するまで、何度でも奴の懐に潜り込んでやる。気を抜くな、その隙を相手に狙われる。

「ふ、ふふ……いや、まさか…貴様の右腕に貫かれるとはな…！」

「…！」

嫌な予感がじわじわとする。この感覚がしたときは大抵確なことにならない。両腕の武装をいつでも展開できるように構える。

「貴様と俺は敵同士…しかも貴様は全力でぶつかると値するほどの敵。しかも相手は素晴らしきまでの巨乳の持ち主…。こんなに胸がときめいたのは久しぶりだ…だから、俺も…本気を出そう…！」

『…ファイヤー… 気を付けて、あいつ、奥の手どころか全力を出してすらいなかったわ!!』

「…！」

弾かれたかのように、俺はリヴァイアギルデイの方へと駆けだし

た。敵が何をしてくるか分からない。ならば、何かされる前にこつちが手を打つ！

「させるかあああああああああああああ!!」

右腕を振りかぶって、武装を展開、回転。更に装甲を展開させ、炎のドリルを作り出す。…今、俺が行える全力の一撃を奴へと叩き込む！

「ふんその勢いは良し…だが！ 既に遅し!!」

リヴァイアギルデイの鬨気が青色のオーラとなって身を包み、全身を彩る。そして両腕を胸の前へと構え、何かを打ち出すような体勢へと入る。

「我が巨乳属性ラージバストの奥義…とくと味わえ！」

「…!!」

「揺れる巨乳パイプバストインパクトの一撃!!」

その声と共に、放たれた奥義。それはあの時の同じような異常な振動と共に始まった。ピシリ、と何かにヒビが入る音が聞こえ、咄嗟にヤバいと感じ、前進を辞める。

「ファイヤーウォール!!」

右手と左腕を突きだし、無理矢理この攻撃を防ごうとするが、エネルギーの大波を止めるには至らなかった。バリアが途端にきしみを上げ、周りにあるあちこちの物が粉々に粉碎されていく。壁や機材、放置されているスクラップが見る見るうちに小さくなり、跡形もなく消える。

『…！ 振動波!?!』

通信越しで聞こえてくるレイチェルの悲鳴。その中にあるキーワード、振動に俺もようやく奴の奥義についてのからくりを見破った。

「強烈な振動による…破壊か!?!」

バリアにヒビが入り、更にギアの装甲も軋むような音が聞こえた。そして俺の反応に、リヴァイアギルデイは嬉しそうな声をあげる。

「その通りだ、よくぞ見破ったテイルファイヤー！ 揺れる乳…乳揺れの如く、我が巨乳属性ラージバストの振動を放出する！ これぞ我が巨乳属性ラージバストの

奥義なり!!」

乳揺れ。それは文字通り、女性の乳房が動くことを意味する言葉だ。歩いたり着替えたりといった、なにげない動作でも起こせるものであり、まさに巨乳の女性にしか起こらない現象。それをリヴァイアギルデイは奥義レベルの技へと昇華させたのだ。

「俺は女性ではない、巨乳でもない…だが、巨乳を愛することはできる！―そして俺は己の愛で巨乳ラージュバスト属性で、乳揺れを起こすことに成功した!! 自らが巨乳となる…これが巨乳ラージュバスト属性を持つ者の本分だ!!」

超音波と超振動。これを己の属性力巨乳ラージュバスト属性で引き起こし、分子レベルで周囲を破壊する。これぞ、リヴァイアギルデイの奥義であり、奥の手であった。

(だから…あの時…!!)

俺があの時吹き飛ばされたのは、叫び声と共に起こされた強烈な振動波によるものだったのだ。幸いにも咄嗟に奴が発したことで、威力が大幅に下がっており、ギアの中身が損傷を受けるだけという軽い被害を受けるだけで済んだのだ。

…だが、今のそれはあの時とは状況が違う。本気の一撃を奴は繰り出している。そしてその一撃はまさに俺を呑み込もうとしている…。

(バリアがもう…持た、ない…!)

「巨キョオオオオオオオオオオ！」

「!!」

リヴァイアギルデイの叫び声と共にバリアは砕け、テイルファイヤーは属性力の大波に呑まれ…工場が大きな音と共に崩れ落ちた。

※

「くそっ！」

「ほらっとうしたのですかリトルナイト騎士！」

ギインギインギイン！ レッドの剣とクラーケギルデイのレイピアがぶつかり合う。だがテイルレッドとクラーケギルデイの戦いは、レッドの方が劣勢であった。

「手数が…多すぎる!!」

レッドが苦言を漏らす、それでも状況は変わらない。クラーケギルデイは腰に巻かれている触手で突きを放つ。その単純な動作は、洗練されており、達人が放つ槍の動作に酷似していた。

「ふふふ…どうしたのです、テイルレッド。やけに苦しそうではないですか…姫に助けを読んでみてもいいのでは？」

「うるせえー！ お前は、俺が倒す!! ブルーを呼ぶまでもねえ!!」
「そうですか…ではもっと私を楽しませて下さいー!」

クラーケギルデイは己の全身にある触手を巧みに使い、突き、払い…触手で行えるありとあらゆる攻撃手段でレッドを翻弄していく。クラーケギルデイの触手10本、腕2本。この計12本の圧倒的までの攻撃にレッド一人では裁ききれない。

「このお!!」

しかも隙を見つけ、レッドが剣を水平に薙ぎ払っても…。

「おっと」

クラーケギルデイは面白そうに呟いて触手でガードを行い、ばいん…と風船を叩いたような音と共にレッドを弾き飛ばす。軟体動物である己の身体を最大限に活かした技で、力任せにやって来るレッドをカウンターで弾き飛ばしていた。

「こ、このお…」

弾かれたレッドは首を振りながら、剣を杖代わりに立ち上がる。その身体はフラフラで、あちこちにアザができていた。

「ふふ…どうしましたか？ 戦いはまだ始まったばかりですよ？」

「…チッ!」

レッドは苛立ち混じりに舌打ちをして、剣を構えるが、その剣もまたヒビができており、息も上がっていた

(ドラグギルデイとは…違う意味で強え…!)

真正面からパワー勝負で挑んできたドラグギルデイとは違う強さがクラーケギルデイにはあった。一つ一つの一撃は弱いものの、それを何十回も繰り返してくる。塵も積もれば山となる…まさにその言葉のように、小さな攻撃をコツコツと積み重ねて、レッドをここまで

追いつめているのだ。

（一気に勝負を決めなければ…負ける！ 愛香を、テイルブルーを守れない!!）

「…！ オーラピラー!!」

「むっ？」

左腕から放たれたレーザーがクラーケギルデイを捕え、絡め取るように拘束させていく。そして円柱のような空間へと変化して、クラーケギルデイの身動きを封じた。彼の触手もまた拘束され、身動きを封じられる。

ここで勝負をかけるのはあまりにも無謀すぎる。だが…残る体力を振り絞って、奴を倒さなければ、本当にやられてしまう。決めるのなら…今しかない！

「ブレイク…レリーズ!!」

剣の先が変化し、そこから炎が噴き上がり、必殺技の体勢に入るレッド。それを悠然と見るクラーケギルデイ。

腰部分にあるブースター『エクセリオンブースト』から膨大なエネルギーが噴出し、剣を構えたままのレッドを超スピードで加速させる。

「…これはまずいかもしれませんね」

剣の切っ先に込められた並みならぬ属性力に顔色が変わったクラーケギルデイは己の属性力を解放する。

「グラント、ブレイザアアアアアアアア——!!」

そしてレッドの掛け声と共に剣は円柱ごと切り裂く…はずであった。

「…スモールバストクリフ貧乳絶壁！」

その声と共に膨大な属性力を身に纏うクラーケギルデイ。そして…

「!!」

バキイイイン！ …レッドの必殺の一撃は、クラーケギルデイの身体を切り裂くにはいたらなかった。逆にレッドの自慢の剣、ブレイザーブレイドの刀身を、粉々に粉碎させてしまった。

「なっ……!?!」

目の前で砕け散る刀身を見て、呆然とするレッド。それは当然だろう、今まで必殺技のグランドブレイザーが破られたことなど、ただの一度だってなかったのだから。

「レッド。あなたの今した行為はAカップの女性にEカップのブラジャーを与えているようなもの……つまりは、無意味な行為なのですよ」

そのグランドブレイザーが奴には通用しなかった。真正面から破られた。その衝撃で目を見開くレッドと余裕のクラーケギルデイ。
：状況はますます敵側へと傾いていく。

「……テイルレッド、あなたは貧乳スモールバスト属性の力を舐めすぎましたね。貧乳とは、貧しい胸を意味します。……ですが、貧しさは罪なのでしょうか？ ……私はそうは思いません。その思いと共に、私は己の属性力を高めてきました」

クラーケギルデイは分かりやすく今の状況を説明していく。

「私は女性ではないですし、貧乳である姫の気持ちも分かりません。
：ですが貧乳を愛することはできます!——そして私は己の愛で貧乳属性を高め……そして私の属性力は鉄壁を超える、絶壁と化したのです!!」

鉄壁はあらゆる攻撃を弾く防御。だが絶壁はその攻撃すら受けずに、全てを打ち砕く。先ほどのレッドの攻撃を真正面から砕いたように、あらゆるものを砕く最強の防御力を得ることに成功したのだ。

「……! それが……どうした!!」

レッドは砕けた剣を投げ捨て、素手だけでクラーケギルデイに立ち向かう。武器が無くなったからといって、まだ負けたわけではないと云わんばかりにレッドは拳を振りかぶる。

「……貧ヒンツツツ」

だが、レッドの拳はクラーケギルデイには届かず、しかも殴りかかった右手のアーマーが無残にも砕け散った。弾き飛ばされたレッドはそのまま、地面へと倒れる。

「あつ、はあ……ぐっ……!?!」

「さあ、テイルレッド…私は姫を迎えに行かなければならないのですから…早く退いてくれませんか？　こんな所で時間を潰すわけにはいかないですよ…!!」

その言葉と共に、倒れたレッドに剣を突きつけるクラークギルデイ。それは、レッドの自信ごと打ち砕かんとする程、絶望的な状況であつた…。

第31話 助っ人とツインテール

「光太郎!」

レイチエルは思わずパソコンを掴み、大声で叫んでいた。ファイヤールールが砕け散り、敵が発する衝撃波に飲み込まれた光景を画面上で見せられ、叫ばざるを得なかった。本名で叫んでいるのにも気づかずに大声で呼びかける。

「ちよつとあんた!? 応答して、光太郎!! あたしの声に答えて!!」

映像は奴が発した衝撃波の影響で乱れに乱れ、砂嵐しか発していない。映像が分からない以上、通信で訴えかけるしかない。

『あつ…があ…はああ…』

すると蚊が鳴いたような微かな声と共に、ガラガラと瓦礫が動くような音が聞こえた。そしてノイズ混じりの映像が回復していく。

「――! あんた、大丈夫なの!」

『耳元で…怒鳴らないでくれ…レイチエル…』

「うるっさい!! 誰だってあんたの恰好見たら心配するわよ!!」

映像に映ったテイルファイヤーの恰好は悲惨そのものだった。左腕の武装は完全に砕けて使い物にならなくなって、右腕だってヒビが入っている。装甲全体に亀裂が生じており、まるでテイルギアそのものが悲鳴をあげているみたいだった。自慢のツインテールも見るまでもなく汚れており、満身創痍という言葉がこれほど似合う状況がないというくらいボロボロだった。

(ギアの破損状況65%?!? これで身体に何にも影響がないのが奇跡だわね…!)

パソコンのギアのコンディションを見ながら唸る。左手はレッドアラート(危険領域)に達しており、ファイヤールールを使うことができない。奥の手として隠しておいた属性玉変換機構エレメントタリオンもイカレてしまい、使用不可能になっている。右手もダメージの損傷が酷く、ブレイクシュートが使えるのもあの1、2回が限界だろう。正直、かなりマズイ状況だ。

だが、心の底から安堵もしていた。何はともあれ、光太郎は生きて

いたのだ…これほど嬉しい事はない。

『ふっ…やはり生きていたか…!』

「!」

その声と共に土煙を割りながら、悠然と出てきたリヴァイアギルデイはニヤリと口角を上げて笑う。その表情はまさに怪人であり、ロボロのテイルファイヤーとは対照的に目立った外傷は肩の傷以外に見当たらなかった。

『理不尽にもほどがあるぞ畜生…!』

『まあ、そう言うな。まだ貴様と戦えるのだ…これほど胸がときめくことがあるか!』

胸の前に拳を突きだした瞬間、強烈な衝撃がファイヤーを襲う。防ぐ暇も避ける暇もなく、ファイヤーはされるがままに攻撃を食らった。

「光太郎!」

テイルファイヤーは食らった衝撃で吹っ飛び、地面に叩きつけられ、下半身のアーマーが粉々に吹き飛んだ。ギアの破損状況がさらに進む。

『さあどうした!? ワイバーンギルデイを倒した時のように立ち上がってみせろ!! 人間の可能性を、巨乳の底力を俺に見せてみる!!』
『うる、せえ…なあ…!!』

ガクガクと足を震わせて立つファイヤーであったが、この調子で戦っても絶対に勝てないとレイチエルは確信してしまう。ワイバーンギルデイの時と状況が違い過ぎる。両者の相性が悪すぎる為、気合や根性などの精神論で戦局が変わるとかいう領域の話ではなくなっている。

『ああああっ!?!』

すると今度はレッドとクラーケギルデイが戦っている方から悲鳴が聞こえる。映像を映すと、そこには剣を折られ、全身に切り傷を負ったレッドの姿が映っていた。

『ふふふ、あなたの貧乳もなかなかですね。…ただ、姫の美しさには劣りますがね!』

『…それ、ブルーが聞いていたら、発狂しているぜきつと…!!』

レッドも息絶え絶えで喋るが、それも強がりには聞こえない。目はどこか自信が無さげで虚ろだし、彼女の立派なツインテールも今はどこか陰りが見えていた。こちらも、このまま1対1で戦闘を続けていたら、間違いなくレッドは敗北してしまう。

「〜!」

レイチエルは声にならない悲鳴をあげながら通信用のプログラムを開き、ある人物へと通信をかけ始める。今のままでは確実に2人は負ける。だったらあがきにあがいて1%や2%でも、勝てる確率を上げる。それが私の仕事だ。

「頼むわよ…!・ 早く出てよ…!!」

ワンコール、ツーコール…中々出ない通信先に苛立ちが募る。そして遂にその人物と連絡が繋がる。

『…誰?!』

その不機嫌そうな声色で、お目当ての人物と通信が繋がったと確信する。レイチエルはふう、と一息ついて口を開いた。

「落ち着いてくれない? …テイルブルー」

『!? 何で私の名前…!』

向こうは焦ったような声をして、怪訝そうに言い返してくる。その反応を待っていた。

「自己紹介が遅れたわね。私はテイルファイヤーのマネージャーをやっている者よ」

『はあ? マネージャー? 応援でもしているの?』

「…あなたの所にいるおっぱい科学者のなポジションの人間ってこと」

『…ああ! あんたイエローが言っていた奴?!』

「まあ、そんな所ね…」

あいつと同じという説明をするのに抵抗はあったが、こういった方が向こうも分かりやすいだろう。光太郎と同じでブルーにも難しい説明をすることを今後は避けようと決意する。

『で、巨乳で美人なテイルファイヤーさんのマネージャーが何の用?』

「あのね…妬みやひがみを今は辞めてくれない？ あんた今誰とも戦っていないんでしょ？ …だったらウチのファイヤーの救援に向かって欲しいのよ」

『…絶対嫌』

…その間僅か、コンマ0.1秒。やはりそう易々と協力に応じてはくれないか。画面の向こうでは頑固親父のような表情で通信に応じるブルーの姿が確認できる。

（…ま、こちとらそんな簡単に物事が進むとは考えていないけれどね…！）

ブルーとファイヤーは仲が悪いことはツインテイルズのファンのは半ば常識と化している。どっちかといえば、ブルーが一方的にファイヤーを嫌っていると考えていいだろう。説は色々あるし、どれが正しいのかは誰にも分からないが、ただ一つ分かるのはこの2人が肩を並べて戦うシチュエーションは今後絶対に見ることはできないということだ。

水と炎という対極のコンビが肩を並べて戦うのは天地がひっくり返ってもありえないというのがファンの語り文句となっている。

（それをやろうってんだから、無茶苦茶な話よね…）

ここからは彼女の機嫌を損ねないように、慎重に進んで交渉を行わなければならない。ハッキングをかける時に感じるような独特の緊張感がしてきて、額に浮かんだ汗を拭う。

「まあまあ、話を聞いてよ。…色々、あなたに伝えなきゃならないこともあるから、ね」

『…何よ？』

よし来た。レイチエルはブルーが撒餌に引っかかって、やってくる1匹の魚をイメージしながら話す。

「あなた、バッファローギルデイは覚えている？」

『…忘れる訳ないでしょ？ あの忌々しい巨乳牛を忘れられる訳ないでしょ!?!』

メラメラと怒りの炎を燃やしながら、ブルーのボルテージは上がっていく。バッファローギルデイ戦で見せたブルーのあの惨事はあつ

という間にネットやテレビで拡散され、それがブルーの不人気ぶりになります。拍車をかけていたこともあり、ブルーには忘れられない怪人らしい。

「ええ、私も流石にあれば酷いと思ったわ。あなたは必死に頑張っているのに、あんな言い方はないわよねえ……」

『そ、そうよねえ!! あたしだってねえ! 一生懸命頑張っているのに……まな板とかタイラブルーとか……!!』

よしよし。繊細な性格だと思っただけだが、意外にブルーは単純な性格なのかもしれない。

「それでね、あなたに話があるのよ。アルティメギルはこの所、胸のことばかりにこだわった怪人ばかり出しているでしょ? その理由がようやく分かったのよ」

『……どういふこと?』

来た来た、針に垂れている餌に気付いた。レイチェルはニヤリと一瞬だけ笑みを浮かべる。

「ええ、これはあくまでも推測なんだけど……」

レイチェルは分かりやすくブルーに説明した。アルティメギルは多数のチームを組んでいて、個性の分断化を図っていると。互いの自己主張で部隊が空中分解しないようにあえて戦力を分け、侵略が効率よく進むようにしていると。

しかし今回、何の因果か運命か、別々の属性力を持った2つの部隊が合流してしまっていると。部隊間の中は悪く、協調性もないと。それが相反する属性力を持った、巨乳軍団と貧乳軍団なのだ。

「……そして今、その互いの親玉が現れている。更にあんたを不人気に陥れたバツファローギルデイの上司と思われるエレミアンがウチのファイヤーと戦っている……このことが分かる?」

『……どういふことよ?』

「ふふ……」

レイチェルは大変意地が悪い笑みを浮かべて、甘く囁くようにブルーにこう言った。

「——今、私たち側につけば、あなたはその親玉様に直接復讐ができ

るわよ?」

『!!』

「…勿論、無理にとは言わないわ。あなたがファイヤーを嫌っていることは百も承知。そいつと共に戦うなんてやりたくないでしょうね。でも、この機会を逃せば、あなたは二度と恨みの対象に復讐できる機会が無くなるわ…もしかしたらうちのファイヤーが倒しちゃうかも、ね。…さあ、どうするの!? 嫌っている私たちと一時的に手を取り合って復讐を成すか! それとも意地を張ったままその怒りをぶつけることなくこのまま終わるか! あなたが選ぶ道は二つに一つよ!!」

悪役か何かがやるような交渉条件ではあるが、ブルーは迷っている。彼女がそのような反応を見せていることは本気で悩んでおり、自分を信頼しきっていることだ。

(後は…!)

だがもう一押し。この交渉を確実に進める勝利の鍵がまだ残っている。恐らくはそろそろ来るはず…。

『だ、駄目に決まっているじゃないですか——!!』

来た! ニヤリとあくどい笑みを浮かべて、通信をわざと受ける。そこには自分が待ち望んでいた人物が血相を変えて通信してくる映像が映っていた。彼女を心の底から待ち望んだのは生涯で初めてのことだろう。

『テイルブルーにはあの貧乳の騎士様と戦って求婚してもらわないと困るんですよ!! あの人とブルーの貧乳はお似合い…』

『はあ!? ふぎけないでよトゥアール!!』

『いや、ブルー! あの怪人こそあなたの運命の…』

『あんた、いい加減にその口閉じろ! 殺すわよ!』

ブツブツと早口で現れた超弩級変態科学者、トゥアール。この交渉を成功させる最後の鍵が今まさに降臨した。レイチエルはスツとエンターキーを叩いて、テイルブルーのギアに密かに作っていたあるものを送信する。

『大体! あなたもどうしてブルーなんかには肩入れするのですかレ』

プツン！ 丁度いい所で通信が切れた。…いや、正確にはこちらが
そうするように仕向けたのだが。

『…あんた今、何したの!?!』

ブルーは驚いたような声を出してきた。突然、通信が途絶えたのだ
から驚くのは当たり前か。

「…まあ、あの女が色々邪魔だったから、特殊なプロテクトをかけさ
せてもらったわ。以後6時間に渡り、あなたはあいつからの通信を受
けることが出来なくなるわ」

『何で…』

「今回の戦いを有利に進める為の策よ、あの人とは結構仲悪いみたい
だし、ね」

「え…まあ、うん…結構っていうかかなりというか…」

「でも、これで信用してくれるかしら？ あたしはあなたに協力した
いの」

そう、レイチエルはトウアールの妨害を止めることでブルーの信頼
を得て、最後の一押しをする。普段から仲の悪いブルーとトウア
ール。この関係を利用させてもらったのだ。

思い描いていたシナリオだったが、まさかこんなにも上手くいくと
は。状況も数々の偶然に助けられたとはいえ、今自分ができる最高の
仕事をしたつもりだ。

元々、ブルーのギアはトウアールがかつて使っていたギアのおさが
りを使っている。トウアールがかつての設定のまま放置していたこ
とが幸いした。昔、自分がアイツのオペレーター担当だったこともあ
り、裏コードなどトウアールですら正確に把握しているか分からない
部分まで全てが手に取るように分かっている。

…だから、ブルーのギアに対応したプロテクトを作り、通信妨害な
んて容易いことだった。しかもトウアールの癖などもしつかりと理
解しているから、わざとあいつが解除しにくい方法で組んだし、更に
解除に失敗したらパスワードなどの情報が全て変わるように設計し
てある。

時間さえかければ解除されてしまうかもしれないが、少なくともこ

の短時間でそれを突破するのは、ほぼ不可能といってもいい。

『あんた…いい仕事するじゃない…』

「ありがとう。まあ、ちよつとしたサーブिसよお礼はいらないわ。じゃあ…改めてお願いするわテイルブルー。うちのファイヤー、助けてくれない?」

ニヤリと悪役も真つ青な顔で交渉に励むレイチエル。後に彼女はこう語る。

『女を舐めるな、更に幼女を舐めるな』と。

※

「…」

神堂慧理那はジツと腕のブレスを見つめたまま、誰もいない生徒会室の椅子に腰かけ、自問自答を繰り返していた。このままでいいのかと。このままだ、後ろで控えていればいいのかと。

『私は…ヒーローに、なりたいたのです…!』

思い出すのは昨夜の特訓だ。総二と愛香、トゥアールが使われていない採掘所で、慧理那に特訓をしてくれたのだ。弱いのなら強くなればいい。だから特訓をしよう! と、総二が提案してくれたのをきっかけに。

慧理那自身、そういうシチュエーションは大好きであった。ヒーローが特訓で強くなるというのはよくある話だし、燃える展開だ。

慧理那は少し前まで見せていたようないじけた目を辞めて、真剣に取り組んだ。そうでもしなければいつまでたってもツインテイルズのお荷物でしかない。レッドやブルーにくつついている訳にはいかない。

それに、いつまでもファイヤーに繋がれている訳にはいかなかった。自分一人の為に、貴重な戦力を一人潰すことはどう見てもマズイ。ファイヤーはバリバリの格闘スタイルで遠距離攻撃が主体のイエローとは壊滅的にポジションが合わない。繋がれたままだと、ファイヤーは相手の懐に入る事すらできず、イエローの電池役として全う

するしかないのだから。ツインテイルズのファンとして、電池役で終わるファイヤーの姿は見ていて気持ちのいいものではなかった。

…が、慧理那の意気込みも虚しく、特訓は上手くいかなかった。総二は『ツインテールの鼓動を感じるんだ。会長の中にそれは何時だったか！』と言っていたが、それでも弾丸の威力は少し上がった程度だけ。ファイヤーと繋がった時に放たれた弾丸には及ばなかった。…これでは実戦にはとても使えない。

『もつと長い目で見よう、特訓は始まったばかりだからさ』と総二は励ましてくれたものの、それは自分には素質がないと言われているみたいで何だか悔しかった。

愛香には『世界中で笑いものにされている中、あなただけが仲間だと応援してくれた。辛いことがあっても乗り越えていけると言ってくれて、凄く嬉しかった』と励ましてくれた。また『一緒に今後も付き合ってやるけれど、辞めるとか弱気を吐いたらブレスを奪い取る』と自分を奮い立たせてくれているのか脅しているのか良く分からないことも言われた。

トウアールには『イベント満載になるはずだったゴールデンウィーク全部をそれにつき込んだんですからね！ 責任を取って、何としても使いこなして貰わないと困るんですよ、この中古女!!』と半ば貶しているに等しい発言をされた。…すぐに愛香に半殺しの刑に処せられたけれど。あの人はどうして殴られるって分かっているのに何度も同じ過ちを繰り返すのだろうか？

ちなみに中古女とは『テイルギアを中古にしてみました』の略である。またえらく悪意のある略し方をしたものだ。

(あと…一歩。…あと、ほんの少しで分かりそうなのですが…!!) そう、慧理那はテイルギアをどういった風に動くかは分かっている。自分の意志を動力に変えて動くデバイス。それが強ければ強いほど、ギアは答えてくれるということも十分に知っている。知っているからこそ、上手くいかない自分がもどかしい。

今の慧理那を分かりやすく例えるのなら、自転車がどういう風に動くかは知っている、ただその漕ぎ方が上手くいかない…という状況

だろう。数メートル進んだだけで転んでしまうけれども、経験者からしてみればもう少しで漕ぎ出せるのに…といった感じだ。

ギアを使う時の感覚。こればかりはどうすることも出来ない。慧理那自身の感覚で掴んでいくしかないのだ。

(あの、感覚を…)

ギョツと右腕にあるブレスを握りしめ、物思いに耽る。

『俺の力をイエローへと託す！ だから君は…好きなだけ撃ってくれ!!』

思い出すのは、テイルファイヤーと繋いだときのあの感覚。あの時の感覚を思い出し、ギアを扱うコツを掴めれば、今よりもマシになるかもしれない。そう思い、慧理那はイメージトレーニングを始める。

「ゆっくり…落ちついて。心の引き金に思いを乗せて…」

あの時、テイルファイヤーが耳元で呟いた言葉を囁きながら、ゆっくりとあの時の状況を振り返ってみる。

弾を放ち、ブルギルデイを吹き飛ばした時に感じたあの心地いとも言える瞬間。背中に当たっていたあの人の胸の感覚、握り絞められたあの人の手の感覚、耳元で聞こえるあの人の息遣い、凜と響くあの人の声。そして…自分の身に注がれていくあの人の、炎のような熱い属性力…。

(勇ましく太ましくたくましく…あの感覚。…私、私は…)

次に思い出すのは、昨夜の総二たちとの特訓だった。レッドが剣で地面を斬り抉り、ブルーが大岩をぶつけてきて、トウアールの罵り。あの時、身体が何故か火照ったような感覚がして、少しだけ動きやすくなったような気がした。

「あぁっ…はぁっ…」

気がつけば、慧理那は身を振じらせながら、官能的な吐息をし始めていた。体が妙に熱く感じ、無意識の内に制服を着崩す。普段の几帳面な慧理那からは考えられないような痴態を見せていた。

「はぁはぁ…あの時の…感覚を…感覚、を…」

…そして慧理那は無言で変身を遂げ、テイルイエローの姿を現す。その変身スピードは初回の時よりも早く、タイムラグも短かった。

(こ、効果が…現れて、いますわ…あんなに遅かった変身が、一瞬で…できている…)

この感覚を、今感じているこの感覚を忘れない内にギアで実践して見なくては。慧理那はよろよろとおぼつかない足取りで構える。

室内で重火器をぶっ放すわけにはいかない。だが、テイルイエローには近距離用の武装が幾つか内蔵されており、膝のアーマーにあるスタンガンもその一つだ。それを試してみようと決意する。

「で、では…行きます…わよ」

スタンガンを起動させようとした瞬間、ザザツというノイズが耳元から聞こえてくる。

「!?」

思わず、慧理那は立ち上がった。それから間もなく、聞き覚えのある人物からの通信がかかってくる。切羽詰っているのか、焦ったような吐息が聞こえてきた。

『…ああ、良かった! あなたにも通じた!!』

「!? あ、あなたはテイルファイヤーの…」

『ええ! そうよ、久しぶりねテイルイエロー!!』

そう、それはテイルファイヤーのマネージャーからの通信だった。

『あなた今、どこにいるの!?』

「わ、私は鍛錬をしていましたわ!」

突然のテイルファイヤーのマネージャーからのコールに驚いたものの、しっかりと受け答えをする。今自分は何をしているのか…全てを伝えると、相手は満足したような声をする。

『…そう、都合がいいわ。今ね、レッドとファイヤーが敵と戦っているの!』

「!」

『映像、そつちに送るわ!』

パツと目の前に映像が映し出され、思わず悲鳴が上がった。

テイルファイヤーは拳が砕け散り、倒れており、レッドは剣が折れ、地面に転がっていた。

二人とも全身傷だらけで、満身創痍であった。そんな彼女らに対す

るのは海竜型と海洋型のエレメリアン。2体とも余裕そうに立っており、相手を見下している。

「これ…!!」

『そう、前に現れた2体のエレメリアンよ！ ……いつらは強いわ、あなたの力を借りたの!!』

「わ、私の…!?」

自分の力を借りる…？ 通信から聞こえてきたその言葉に固まってしまう慧理那。

この映像が本物なら、レッドとファイヤーがピンチだ。このままではやられてしまう。…でも、自分が行ったところで何かできるのだろうか？ 属性力もまともに扱えない自分が…弾丸をまともに扱う事すらできない自分が。

『このままだとファイヤーとレッドは確実に負けるわ!! 1対1じゃあいつらには勝てないの!! でも、あなたがいればその確率は上がるわ!! 少なくとも、反撃の糸を掴める!!』

「…あ、ああ…」

慧理那は震えていた。テレビの前のヒーローだったらすぐさま行くのだろう。通信を切って、颯爽と駆け出し、敵の前へ現れるのだろう。

…でも、自分は、神堂慧理那は果たしてツインテイルズの危機を救うことが出来るのか？ 行った方がいいのは頭では理解できている、ただ自分が加わったことで更なるピンチに陥ってしまうのではないか…。

『…じゃあ、質問を変えるわ。この際、あなたの理屈や信念、迷いなんかは関係ない！ たった一つの質問に答えて！ あなたの本心を聞かせて！ あなたは『どうしたいの』!?』

「…!」

『本当のあなたは、胸の底にある本当の答えは何!? 答えて!!』

「わ、私…!」

『テイルイエロー!! 本当のあなたを、ありのままの姿を私に見せて!!』

その絶叫は、何故か慧理那の心に深く響いた。本当のあなたを見せて……本心を見せて、答えて。

神堂家の一人娘でもなく、生徒会長の立場でもない。ただの神堂慧理那としての本心を、ありのままの答えを通信先の人物は欲している。そしてマネージャの相棒のテイルファイヤーも欲している。

「わ、私の、私の本心は——！」

どうしたいか？ ……そんなの、決まっているではないか。自分がいとも思い描いていた、本物のヒーローがするべきことは、ここでやるべきことは、言うべきことは、ただ一つしかないではない。

レッドやファイヤー、ブルーがいともやっていることだ。あの時、自分と繋いで励まして、握りしめて、抱きしめてくれた……あの人たちがいつも、いつもやってくれたことを私はやりたい！ あの人の、ツインテイルズを——。

「——助けたいですわ!! 弱きを助けて、悪を倒す!! それが、本物のヒーローなのですから!!」

『——いいわ、イエロー!! 凄くいい、ありがとう! ……じゃあ、ここが今戦っている場所よ!』

すると慧理那の脳裏にタイプライターが打ち込まれたかのように詳しい地図の情報が教えられる。

『ええと……あなた、転送の装置、持っている?』

「ええ。トウ……私たちのコマンダーが用意してくれていますわ」

危うくトウアールの名前を出しそうになり慌てて留まる。うっかり名前を出してはいけない。こういうのは、仲間になってから正式に明かす方が盛り上がりが今後の展開的においしい。

『そう……じゃあ至急いで! ……それと、さっきのあなた、凄くカッコよかったわ! ……この間、あなたを足手まといなんて言っちゃって、謝らなくちゃね』

「え……」

『あなたは立派なツインテイルズの一員よ。その考えを、本心を出せたのなら……ギアはあなたの声に、きつと答えてくれる』

待っているわテイルイエロー、という言葉が最後に通信は切れた。

「ありのままの、私を…本心を…」

不思議と身体が軽い気がする。重い荷物を降ろして、一時的に軽くなったような、そんな気分だ。

「…ありのままの私を、皆に見せますわ！」

慧理那は生徒会室の窓を開け、恐れもためらいも感じないで飛び降りた。そして、懐に忍ばせておいた転送用のペンを掲げ、姿を消した。

※

事態は一向に良くなるらない。

左手の装甲は砕けたし、右手ももうもたない。ワイバーンギルディ戦よりも事態は悪化する一方だ。

「はあ…はあ…このお！」

「ぬがお!？」

ドゴオ！ 満身創痍の身体を引きずって、リヴァイアギルディの顎にアツパーを当てて吹き飛ばす。

「あつ!？」

だが、途端にファイヤーの声にならない悲鳴が上がる。殴った瞬間に左手に痛みが走った。

装甲が砕けて裸拳で殴ったせいとか、殴る自分にもその強烈な反動が弾き返っている気がする。身体を覆っているフォトンアブゾーバもまともに機能していないのかもしれない。

(けど…倒れるのは、まだだ…。例え、倒れても、前のめりに…！)

殴られたリヴァイアギルディは地面を転がったが、それほど遠くには行かなかつた。尻尾を錨のように地面に突き刺し、それが原因で奴を止めたのだ。…くそ、こいついい加減に…。

「馬鹿め！」

「!？」

すると僅かな隙を突いて、リヴァイアギルディの尻尾の先端が開いて勢いよく突きだした。そしてそれは猛スピードで接近し、ファイヤーの喉元を掴む。

「あぐつう!？」

いきなり喉を掴まれ、声にならない悲鳴と息苦しさが襲う。そしてリヴァイアギルデイが勝負あったという顔になる。

「…油断し過ぎだ、テイルファイヤー! 勝負が決まらぬ内に気を緩めるのは3流のすることだ!」

尾がリヴァイアギルデイの方へ戻されると、捕えられたファイヤーはなすすべもなく奴の方へとずるずると引きずられる。

「ぐ…!？」

何とかファイヤーは尻尾を殴って脱出しようとしているが、首を絞められた状態ではまともなパンチを放つこともできない。

(やば…意識が…!?)

意識が飛びそうになるのを必死で堪えるが、ほぼ酸欠状態のファイヤーはいつ意識を失ってもおかしくはなかった。

「安心しろ、貴様のツインテールだけを奪…!？」

だが次の瞬間、何かがめり込んだ音と共に、リヴァイアギルデイの声が途切れ、彼の小さな悲鳴が聞こえた。

「!？」

その途端に喉を掴んでいた尻尾が力を緩めた。ファイヤーは何とか首を絞めていた尻尾を解き、後ずさる。

ゲホゲホと喉を撫でながら顔を上げると、そこには自分の見知った人物が平然と延髄蹴りを放っている光景が目に入った。そして駄目押し顎蹴りを放つと、悠然と俺の前へと着地する。そしてようやくその人物の全貌が明らかとなった。

青色のスーツに、露出が高いデザインに透き通るような青色のツインテール。世間からの人気が無いに等しいが、戦闘力はツインテイルズ一と言われている戦士。…その名は。

「て、テイルブルー?」

喉を擦りながら信じられないような目でブルーを見た。いつもは俺のことなんて気にも止めないはずなのにどうして助けるみたいない行動を…?

「…何情けない顔してんのあんた!」

「はい!?!」

すると途端にブルーは怒りの形相で詰め寄ってきた。

「え、あ、いやその…」

「あんたいつもそんなんじゃないでしょ!? 何でとつととやっつけなの!?! そんなにボロボロになつて、何なの? ドMなのあんた!?!」

「いや…そんなこと言われても…あいつ強いですし…」

「情けない事言うなあ、あたしよりも巨乳の癖に!!」

「は、はい!」

ブルーはジト目で見下すと、俺の腕を掴んで無理矢理立たせられる。俺も理解が追いつかないから、きつとかなり馬鹿みたいな顔してるんだろうな。

「つたく、人がせつかく助けに来たのになんて情けない…あたしよりも人気があるくせに…。いつもあんたがおいしい所全部持つて行くのに、何であたしが助けに来なきゃならないのかしら…あの子の頼みじゃなかったらあんたなんてねえ…」

ぶつぶつとブルーの小言が俺に聞こえる。それも語り出したら止まらない勢いでだ。

「あ、あの〜」

「何!?!」

鬼のような形相で俺を見るブルー。正直怖すぎるけど、ここは双方の今後の為にも一歩近づきたい。

「い、いや、何で助けに来てくれたのかなあ〜って思つて…ほ、ほら、私たちあまり仲、よくないじゃないですか…その、巨乳、嫌いみたいですし…」

「……あんたよく分かっているわねえ…!」

いや、あなたが前言ったことですしね、巨乳嫌いは…。

ブルーはハン、とため息をついて不本意ながら俺を見る。

「…勘違いしないでよ。あたしはあんたを助けた訳じゃないわ…あいつが憎いから、倒す。それだけよ」

「は…はあ…」

ブルーはそれだけを冷たく言うと、リヴァイアギルデイを睨みつけ

た。…敵の敵は味方ってやつなのか。でも今は、救援に来てくれただけでもありがたい。

「……………それと、あんたを見捨てたらレッドが悲しむからね」

「はい？」

「何でもない！ とつととあんたは下がってなさい！」

「り、了解です!!」

ぼそぼそと何か呟いたらしいブルーに怒鳴られ、俺はそのまま更に後方へと下がる。そしてブルーは悠然と愛用の槍を取り出し、それをリヴァイアギルデイに突きつけた。

「さあ…勝負よ、この巨乳怪人！」

※

「うおりゃあ!!」

「無駄です」

「！」

レッドは渾身の左ストレートを放つが、クラーケギルデイの触手に遮られる。そして左手のアーマーにヒビが入る。もう左手も限界に近づいているのか…。

「この…！」

続けて飛び上がると、回し蹴りを放つが、それも難なく防がれてしまう。

「…あなたでは私には勝てませんよ」

「いいや、まだだ！」

レッドはもう1本の剣を取り出し、猛然とクラーケギルデイ目がけて振り下ろした。

「ツインテールなだけに剣は2本あるんだよ!!」

倒れるとしても一太刀でもいいから奴に与える。その思いが剣の刀身に膨大な属性力を込めさせる。だが…。

「貧^{ヒシ}ツツツ！」

「！」

無残にもその一撃は奴が作り出した貧乳の壁に遮られ、剣は真つ二つにへし折られた。刀身と取っ手が綺麗に分かれ、地面を転がる。レッドも地面に身体を叩きつけられた。

「……そー」

「どうやら、ここまでのようですね」

クラークギルデイは持っていたレイピアを倒れているテイルレット目がけて突きだした。

(……これで、終わるのか!?)

これまでのツインテールに対する愛が、レッドの頭を一瞬のうちに駆け巡っていく。

(……これで……終わり……?)

レッドが無念そうに歯を食いしばり、自分へと近づいてくるレイピアを見つめたその瞬間であった。

ガアン！ 突然、どこからか飛んできた弾丸が、クラークギルデイのレイピアを弾き飛ばし、目の前で攻撃を妨害した。

「え……!?!」

今、誰かが助けてくれた？ —— 援軍か？

「……誰ですか、決闘を妨害した不届き者は!?!」

弾丸が飛んできたのはここからすぐ近くのようにだった。クラークギルデイはどこに伏兵が潜んでいるのか探している。

「……このツインテールの気配は!?!」

だがレッドには弾丸を放った人物が誰なのか分かった。辺りに感じるツインテールの感覚を探り、それを追った先に、その人物はいた。廃工場の入り口。むき出しの鉄骨の横には、手には一丁の山吹色の銃。その銃口からは煙が昇っており、今まさに弾丸を発射したような形跡があった。

「……何とか、間に合いましたわね」

その言葉と共に佇む人物は、悠然と笑った。黄色の装甲と豊潤なスタイル、そして麗しいほどのツインテールが風に揺れていた。

「テイル……イエロー!?!」

レッドの声に、イエローは銃を構え、呼び声に応じる。

「ええ、テイルイエロー！ 遅れながらもただ今参上ですわ!!」
その戦士の名はテイルイエロー。雷を司る4人目の戦士が今、戦場
へと降臨した。

第32話 共闘とツインテール

「テイルイエロー…だと!？」

クラークギルディは弾かれたレイピアを触手で拾い、目の前に悠然と構えるツインテール戦士に向かって叫ぶ。

「ええ、その通りです! 通称、雷の狙撃手! 第4の戦士、テイルイエローとは私のことですよ!」

「…そんな通り名あったっけ?」

レッドは記憶を探ってみるがそんな通り名を言われたことも言ったことも覚えがなかった。

「そこはツッコんではいけませんわ、レッド…! ヒーローは知らない内に決め台詞や武器の使い方を知っているものですよ!」

「あ、ごめん…」

イエローが真剣な表情でそんなこと言うもんだから、ついレッドも反射的にそう答えてしまった。

ああ、会長…きつと憧れのヒーローのシチュエーションを再現しようとしているんだろうな。だから無駄な通り名や技の名前とかに凝っているのか。もしかしたら今まで一人で技名のあれこれを考えていたのかもしれない。

「レッド…私は…私はもう、迷いませんわ!! 私に世界を救えるだけのツインテール属性があるかどうか分かりませんが、本当に戦えるのかも分かりません。…それでも、私を信じてくれたあなたの心に、報いたいですわ!!」

「イエロー…」

「…さあ、クラークギルディ! ここからは私が代わりにあなたの相手になりますわ!!」

スツとイエローはテイルファイヤーがするような格闘戦を挑むようなスタイルで構え、クラークギルディを迎え撃つ。

「ふん、馬鹿な! ファイヤーに引かれていなければ弾一つ放つことも出来ない下品な乳の少女の癖に!」

「その下劣さと向き合い、一皮剥けた私は今までと違いましたよ!」

そう言い終わると、何故かイエローはクラーケギルデイへと突進していった。

「…!? おいイエロー！ 何で重火器を持っているのに接近戦を挑むんだ!？」

「ヒーローは拳一つで勝負するものですわ！ 大丈夫です、任せて下さい!!」

「いや、イエローのギアは後方で弾幕を張るのが…!」

「スペック的には大丈夫ですわ！ 見ていてくださいますし、私の真の初陣を!!」

「いやそういうことじゃ…頼む、話を聞いてくれえ!」

レッドは頭を抱えて叫んだ。駄目だ、イエローは今までの面子と違った意味で残念になっている。自分のギアの特性を完全無視した戦法でクラーケギルデイと戦うおうとしているのか、ヒーロー好きという趣味が悪い意味で反映されていた。

クラーケギルデイもポカンとしていたが、すぐに戦士の顔へと戻り、接近してきたイエローとインファイトを繰り広げる。

「はああああああああああ!」

「うおおおおおおおおお!」

両者共にぶつかり合い、手と手を合わせて組み合う。両者共に力は互角で一步も引けを取らない。だが…。

「はやくどけ、私は姫を迎えに行かなければならないのだ…貴様に構っている時間などない!!」

「く…!？」

ギギギとイエローの装甲に触手が絡まることで悲鳴をあげ、イエローが押され始める。触手を解放したことで自らの攻撃力を底上げしているらしい。

「くらえ、巨乳の少女！ 我が触手のワルツを!」

するりと後方の触手がうねり、槍のように鋭くなる。

「! 逃げろ、イエロー!!」

レッドが吠えた。その攻撃に散々やられてきたレッドは自分の二の舞にイエローもなると咄嗟に感じた。

そして次の瞬間、イエロー目がけて触手の槍の攻撃が襲う。豪快にして変幻自在。それがクラーケギルデイの触手。そしてイエローの装甲を削る音がし、クラーケギルデイの高笑いが聞こえる。

「ふははははー！ どうだ!?!」

「…効きませんわ、そんな攻撃!」

「何!?!」

イエローはニヤリと笑って、突きだしてきた触手を掴みとる。

「貴様、肩の装甲で受け止めたのか…!?!」

「ご名答ですわ!」

そう、イエローは自らの厚い装甲を盾代わりに使用して、クラーケギルデイの触手を防いでいたのだ。単体での威力は低い触手では、装甲が厚いイエローのギアを貫くことはできずに、ただ錨のように突き刺さっているだけであった。

そしてイエローは掴んだ触手をたぐり寄せ、攻撃の態勢に入る。

「くらいなさい、プラズマニー!!」

「ぬがおおおおおお!?!」

膝元の内蔵式スタンガンと膝蹴りを同時にくらったクラーケギルデイは悲鳴をあげた。貫通するまでには至らなかったが、カウンターの気味に電撃付きの膝蹴りを腹部に叩き込まれたそれは確かなダメージとなり、クラーケギルデイを襲う。

「まだですわ! ダブルレールガン!!」

「ぬおう!?!」

「ツインニードル!!」

「があっ!?!」

腰に装備された砲口と爪先のニードルガンが電のように火を噴き、クラーケギルデイを吹き飛ばした。装甲に突き刺さっている触手は吹っ飛ばされた拍子に千切れ、ブラブラとイエローの装甲にぶら下がっている。それを引き抜き、地面へと落として敵を一瞥するイエローの姿はまさにヒーローだった。

「す、すげえ…完全にイエローがギアを使いこなせている…!」

「ふふ、だから言ったでしょうレッド、任せて下さい、と」

「ああ、しっかりと使いこなせてはいるんだけど…」

イエローがしっかりとギアを使いこなせていることは分かった。だが、わざわざ遠距離武器を互いの手が届くほどの距離で放つことのメリットがレッドにはどうしても分からないのだが…。

「…もつと…私を見て、くれますかレッド？ こんな…私を…ありのままの、私を！」

「ああ、いつまでも見てやるぜイエロー！ 今のイエローは最高にカッコいいぞ！ ツインテールも喜んでるみたいだ！」

「あ、ありがとうございます…！」

イエローは顔を赤くしながら、レッドに感謝の気持ちを述べた。そのことでイエローにますます自信がみなぎってくる。本当の自分を見てくれる人がいる。それがイエローの身体を火照らせ、力へと変わっていく。

そしてここにはいないが自分と繋いでくれたファイヤーが、自分を変えてくれる言葉を言ってくれたファイヤーのマネージャーが。どこか自信がなかったイエローの殻を破り、戦士へと変えてくれた者たちの存在が、イエローを支えている。

「行け、イエロー！ ヒーローになる時は今しかないぞ!!」

「は、はい！ あ…で、でも…私…もつと、自分をさらけ出したい…ですわ。はあん…！」

…だが、どこか駄目な方向へと剥けてしまったイエローに、レッドは残念ながら気づくことが出来なかった。そして多分、イエロー自身も「火照った身体に服が邪魔だ」と思い始めていることに気づいていなかった。

イエローがもうすぐ、とんでもない惨事を引き起こしてしまうことになるうとは、まだこの時点では誰も知らないでいたのだ。

※

津辺愛香は、テイルブルーは巨乳が嫌いだった。大きい胸が何よりも嫌いだった。

何故か？ …それは自分の姉という存在が大きく関係していた。自分よりも女らしくて、綺麗で、スタイルも良くて…。身近にいればいるほど羨ましく、妬ましく感じてしまう。姉にはあつて何故自分にはない？ 何故バストが72のままなんだ？

長年培ってきたそれは積もり積もつて、今の愛香を大きく形成するコンプレックスとなった。最近は特にそれが酷いことになっている。そして最近になって嫌いな理由がもう一つ増えた。それは自分と同じツインテイルズの一員であり、正体が一切分からない謎の戦士、テイルファイヤーのことだ。

どこか情けなさそうな空気をしているのに、戦闘になると空気が変わり、拳一つで戦う戦士。移動するたびに揺れ、妬ましく感じる巨乳の持ち主。レッドの姉、母、いや未来のレッド自身ではないか…正体は一切不明だが、レッドも信頼しきっている人物。それが愛香は気に入らなかつた。

格闘経験のある愛香からしてみれば素人丸出しの戦い方なのに、傷つきながらも無理やり前へと出るその戦法。肉弾戦へと持ち込み、受けなくてもいいダメージを負いながら戦い、自分の身も案じていないと思われる無茶苦茶さ。そしてそんな無理矢理な戦法で毎回勝利すること。そしてそんな彼女に嫉妬してしまう自分…全てに腹が立つた。

だから、あいつのマネージャーに助けを求められて、いざあいつらが戦っている舞台に来て、素直に飛び出せる勇気がなかつた。

あの時、つい「やる！」と言ってしまったものの、どうせあいつはここから逆転するんでしょ、ワイバーンギルデイの時みたいに…と冷めた目で、鉄骨の陰から工場の入り口を見ていた。中では殴り合う音やぶつかり合う音が聞こえる。きつと中でドンパチ賑やかにやっているのだろう。きつとあいつが今頃テレビのヒーローみたいな逆転劇を繰り広げているに違いない。

(…あいつ、いつもそうなんだから…いつも遅れてやってくる癖に、美味い所だけ持ってっっちゃって…！)

「あぐつう!？」

「？」

と、ここでくごもったファイヤーの悲鳴が聞こえ、ブルーは少しだけ気になった。そして、ひよいとそこを覗いて…愕然とした。

(…あいつ!?)

なんとそこにはリヴァイアギルデイの尻尾に首を絞められ、苦しもうなファイヤーがいたのだから。いつもの凜々しいあいつらしくもない、弱弱しく、折れそうな表情だった。

そして首を絞められ、今にも倒れそうなほどに顔色が悪くなっている。尻尾が捲きついているせいで、酸欠寸前のような様子で引きずられていた。

(…!)

一瞬、ほんの一瞬だけ足が止まったが…直ぐにブルーは走り出した。考えるのよりも先に身体が動いてしまったのだ。

(あたしは…全く、本当に馬鹿よね!!)

いくら嫌いなファイヤーでも、あれは流石に見逃せなかった。絞め技は使い方一つで命まで奪いかねない危険な技だ。あのままでは本当に死んでしまうかもしれない。

…それに、あんな弱弱しいファイヤーの顔が反射的にムカついた。いつもあたしよりも人気があるくせに、あんなに凜々しいあいつが、なんて情けない顔をしているのだろう。

ブルーは憤りと奇妙な義務感に突き動かせるように飛び上がり、蹴りの体勢に入る。

「安心しろ、貴様のツインテールだけを奪…!？」

ゴリツ！ 嫌な音と共にリヴァイアギルデイの延髄を無言で蹴り、体勢を崩した。そしてその隙を見逃さずに、がら空きの顎を蹴りで蹴り飛ばす。

するとリヴァイアギルデイの尻尾から抜け出して喉を抑えているファイヤーの姿が映った。

「て、テイルブルー？」

喉を擦りながら信じられないような目でブルーを見つめるファイヤー。喉を絞められ、涙目になっている。…それが無性に腹が立つ

た。

「…何情けない顔してんのあんた！」

「はい!？」

そしてブルーは無意識の内にファイヤーに詰め寄っておつかない声色で話しかけた。

「え、あ、いやその…」

「あんたいつもそんなんじゃないでしょ!? 何でとつととやっつけないの!?! そんなにボロボロになって、何なの? ドMなのあんた!？」

「いや…そんなこと言われても…:あいつ強いですし…:」

「情けない事言うなあ、あたしよりも巨乳の癖に!!」

「は、はい!」

ブルーはジト目で見下すと、腕を引つ張って無理矢理立たせた。

全くこいつはあ…! 無駄にアンダースーツを破らせて、露出を高めさせているし…。何だ、こいつはそういった露出趣味でもあるのか!?! またあいつの情けない顔を見るとムカムカと苛立ちが激しくなる。

「つたく、人がせつかく助けに来たのになんて情けない…あたしよりも人気があるくせに…。いっつもあんたがおいしい所全部持つて行くのに、何であたしが助けに来なきやならないのかしら…:あの子の頼みじゃなかったらあんたなんてねえ…:」

ぶつぶつと本人が目の前にいるのにも関わらず、文句が波のように押し寄せてくる。…ムカつくけど、そういうところは自分が嫌っている超弩級変態女科学者に似てきているのかもしれない。

「あ、あの…」

「何?！」

思わず、とんでもないトーンで睨みつけてしまう。…直ぐに自己嫌悪が押し寄せてくるが、律儀にもファイヤーはブルーの精神を逆なでしにきた。

「い、いや、何で助けに来てくれたのかなあ…って思っ…:ほ、ほら、私たちあまり仲、よくないじゃないですか…:その、巨乳も、嫌いみたいですし…:」

「……あんたよく分かっているわねえ……！」

こいつ、わざと言っているんじゃないだろうか？ ……あたしがファイヤーを嫌いな第一の理由であるその胸をこれでもかと思せつけやがって。

ブルーはハン、とわざとらしくため息をついてファイヤーを見た。谷間を潰したい衝動を必死で抑え、苛立ち混じりの言葉を吐く。

「……勘違いしないでよ。あたしはあんたを助けた訳じゃないわ……あいつが憎いから、倒す。それだけよ」

ブルーはそれだけを冷たく言うのと、リヴァイアギルデイを睨みつけた。こいつは確かにムカつくけど、それ以上にムカつく奴が目の前にいる。あんたの部下の責任を、しっかりと上司であるコイツに払って貰わなければこっちの怒りが収まらない。部下の責任は上司の責任という地球の言葉を侵略者にも叩きこまなければ。

「………それと、あんたを見捨てたら、うちのレッドが悲しむからね」

「……はい？」

「何でもない！ とつととあんたは下がってなさい！」

「り、了解です!!」

こいつ、思わず眩いてしまった独り言を聞き耳立てていやがった。全く……。

ファイヤーはそのまま更に後方へと下がり、観戦モードに入った。そしてブルーは悠然と愛用の槍を取り出し、それをリヴァイアギルデイに突きつけた。

「さあ……勝負よ、この巨乳怪人！」

そのタンカと共にブルーは、リヴァイアギルデイへと突撃していった。

※

早い。俺の驚きと共に、ブルーはあつという間にリヴァイアギルデイとの距離を詰め、槍を振りかぶった。だがリヴァイアギルデイも

それを黙って見ている訳でもなく、股の間から伸びている尻尾を振り、転がっているスクラップをブルーへとピンボールのように投げつける。

「ふん……」

だがブルーは慌てずに、左腕に内蔵されている、エレメンタリイション属性玉変換機構を起動させ、一つの属性玉を選択する。

「属性玉…ラベット兎耳属性!!」

脚力強化をものものコンマ数秒で済ませたブルーはぱつと地面を蹴って、空中で身体を捻り、跳んできたスクラップを回避する。

「はあっ!!」

そして真上にあるワイヤー機器を槍で切断し、それをリヴァイアギルデイ目にかけてブン投げた。その一連の流れはあまりにも洗練されており、力押しで進む俺とは違った戦い方であった。

「その攻撃は見えているー!」

だがリヴァイアギルデイの反応もまた驚くほど速かった。自身の属性力を解放し、威力を抑えた振動波を前方で押し出すことでワイヤーを粉碎する。

「分かって…いるわよお!!」

「何!?!」

ブルーは慌てず騒がず、壁を蹴り、高速で距離を詰めて接近戦を開始する。長い槍のリーチを活かした戦法でチクチクとリヴァイアギルデイにダメージを与えていく。

「はあ! りゃあ! だあ!!」

「ぐ…!?!」

脛を狙い、一瞬だけ行動を封じたその隙に顔面へと槍を叩き入れ、また距離を取る。ヒットアンドアウェイ戦法でブルーは戦闘を自分のペースへと持ち込んでいつている。

敵もブルーが適度に近づいているので、あの全力の衝撃波を出そうにも出せないでいる。こうも貼り付けられたら自分までも巻き込まれかねないからだ。だが…。

「うわっ、うわっ!?!」

ブルーの攻撃の余波がこつちにまで飛んでくるのだ。槍で突いたりするたびにブルーの驚異的な属性力の余波が周囲に飛び散り、時折それは俺にまで襲い掛かる。なんとか回避できてはいるが、このままではこの工場ごと潰れかねない。

「も、もう少し場所を考えてー!?!」

「ああ!?! あんた巨乳なんですよ!?! そのくらい我慢して!!」

「情けないぞテイルファイヤー!! ツインテイルズーの巨乳の持ち主が弱気な発言をするな!」

「あんたたち、巨乳を理由に全ての問題を解決できるとは思わないでくれ!!」

駄目だ、ヒートアップしてしまったブルーやリヴァイアギルデイには言葉が通じない。胸の争いは二人を更なる境地へと誘う。

「巨乳、死すべし!!」

「貧乳、滅ぶべし!!」

テイルブルーの目が鋭く光ると、槍の柄を使つて大きく薙ぎ払うが、リヴァイアギルデイもまた自身の尻尾を槍状に変化させて受け止める。

「…見事な槍使いだが、俺の武器は巨乳だけではないぞ!」

「!」

更にリヴァイアギルデイはやつかないブルーの槍を自分の尻尾で巻きつけ、弾き飛ばそうとする。

剣道三倍段という言葉がある。素手で剣道有段者に勝つには、剣道の段位の三倍の段位の実力が必要だということだ。また、剣道の高段者が、薙刀をもった初段に手も足も出ないでやられたという話もある。…つまりはリーチがあればあるほど戦いを有利に持ち運ぶことが出来るのだ。

つまりはリヴァイアギルデイの槍を排除するといったこの考えは非常に理にかなっているのだが…。

「悪かったわね…あたしは素手喧嘩ステゴゴの方が専門なのよ!」

次の瞬間、ブルーは槍をギアの中へ戻し、すぐさま素手での戦いに切り替えた。対象物を失ったリヴァイアギルデイの尻尾は虚しく空

を切る。

「ふんっ！」

「ぐがあ!？」

その隙にブルーのみぞ撃ちが決まる。このまさかの攻撃にリヴァイアギルデイはくの字に身体が折れ曲がり、床へと叩きつけられた。スピード特化型のブルーは、本来は接近戦には向かないはずであり、槍を使つてのヒットアンドアウェイ戦法が基本となる。だが変身者の愛香は自身の驚異的な格闘センスでその欠点を穴埋めし、きちんと拳での戦いにも対応できているのだ。

「ぐぐっ!？」

立ち上がるうとしたリヴァイアギルデイは思わず一瞬、膝をつきそうになった。ブルーの攻撃に合わせて、ファイヤーから受けた傷、そして彼女に放った巨乳属性ラージバストの一撃による反動が彼を蝕んでいたのだ。

だが、それで言い訳はしない。一度受けた戦闘に、そのような言い訳を持ち込むのは情けない。戦士として生きるリヴァイアギルデイにとって言い訳とは、最も恥ずべき行為の一つ。

このままでは…負ける。そう思ったときだった。何かが音を立てて崩れたような感覚が襲った。

俺が負ける…? この俺が…あんな貧乳の小娘如きに、負けるだど?

その瞬間、リヴァイアギルデイの中で、何かが吹っ切れた。

「この俺を…リヴァイアギルデイを! 巨乳属性ラージバストを舐めるなああああ

あああああああああ!」

「きやあああああ!？」

薙ぎ払うような属性力の解放による一撃が、ブルーを吹き飛ばした。宙に舞い上がったブルーの首をリヴァイアギルデイは尻尾でねしあげ、壁へと押し上げる。

「調子に乗るなよ貧乳の姫君! 俺は巨乳属性ラージバストを持つ部隊の長…リヴァイアギルデイだ!! 俺の、俺たちの誇りにかけて…貴様のような貧乳の女子に倒される訳にはいかぬ!!」

「うるっさいわねえ…! さつきから貧乳貧乳貧乳貧乳…うるっさい

のよおおおおおおお!!」

ブルーは青筋を浮かべながら殴ろうとするが、首をねじ上げられてはその威力も半減以下となっていた。

「この一撃で…終わらせるー!」

リヴァイアギルデイの属性力が青色のオーラとなって身を包み、全身を彩る。

「! 逃げろブルー!!」

咄嗟に叫ぶが、それが何の意味もなさないことは俺自身一番分かっている事だった。

リヴァイアギルデイはあの振動波を出そうとしている。あの距離からあの技を出されたら、ひとたまりもないだろう。それはリヴァイアギルデイも分かっているはずだ、自分自身も衝撃波に巻き込まれる可能性があるのに、それでもかまわずに放とうとしている。

「くそっ!」

たまらず飛び出した。走るごとに身体に痛みが走るが気にしてられない。そして両腕を胸の前へと構え、まさに奥義を放とうとするリヴァイアギルデイの顔面目がけて、右拳をぶち込んだ。

「!」

不意打ち気味にぶち込んだそれは、綺麗にリヴァイアギルデイの顔面に入り、先ほどの焼き直しのように吹き飛ばした。吹き飛んだことで溜めていた属性力が四散し、奥義は不発に終わる。

「あ、あんた…!」

ゲホゲホとむせるブルーの背中を叩いて、何とか落ち着かせようとする。

「あいつ、衝撃波を放つんですよ。俺もあれでやられましたし…」

「はやく、それ言いなさいよね…!」

だからあの時ワイヤーが…とブツブツブルーは呟く。

「…言っただってあなたたちやんとあの状況で聞けていましたか?」

「……………聞けていないと思うわ」

「ほら」

ブルーは胸の話題になると、どうも頭に血が上るんだよなあ…それ

が弱点となりかねない。それに敵は巨乳を司る敵。…相性は最悪と
いったところか。

(…こりゃ、もう少し頑張らないとな…)

拳を握りしめて、よいしょと立ち上がる。

「…で、ここは一つ共闘といきませんか？」

「はあ？」

「俺とあなた、二人であいつを倒すんですよ」

「…あんた…正気？ それとも馬鹿なの？」

ブルーは悪魔でも見るような目で俺を見てきたが、失礼な、俺は何
時だって真面目だ。

ブルーはこのボロボロな俺が戦線に復帰するのを良しとしていな
いのか、それとも巨乳の俺の手を借りたくないのか…真意は定かでは
ない。

だが、確実に分かることがある。あいつは、俺だけでも、ブルーだ
けでも倒すことは難しい。前者は戦闘スタイルの相性的に、後者は胸
囲的な意味で相性が悪すぎるから。

だが…共闘すれば、互いの欠点をカバーすれば勝率は上がる。2体
1で戦う事やぶっつけ本番で戦うなど不確定要素が多すぎるが、それ
でも勝つためにはこれしかないのが現状だ。

「俺はあいつを倒したい、あなたはあいつが憎い…奇しくも目的は一
緒です。あなたが俺を嫌っているのは百も承知です、一緒に何て…と
思うかもしれませんが、でも、俺たちの戦いは必ず勝たなければならな
い戦いなんです!!」

「…」

ブルーは何かを考えるような表情になる。

「ここで負けたら俺たちのツインテールが…いや、世界中のツイン
テールが奪われます。それだけは絶対に避けなければなりません」

俺が奪われるのならばまだしも、レッドやブルーのツインテールは
奪われる訳には絶対にかかない。女の子のツインテールだけは絶対
に死守しなければならぬ。それが男として、テイルファイヤーとし
ての意地だ。

「だからお願いです…俺と、俺と共に戦ってくれませんか!？」
精一杯の声と共に、俺はブルーの手を握る。

「あんだ…」

「それとも、あなただけであいつに勝つ自信ありますか？ …言っちゃなんですけど、あいつ強いですよ…!」

「わ、分かっているわよ、そんなこと…!」

ブルーはしばらく考えるようなそぶりを見せる。やはりリヴァイアギルデイの実力とその奥義の恐ろしさを味わったのか、即答で断る事は出来ずにいるらしい。

そしてようやく決心したのか、俺に向き合った。

「もの凄くね…ものつつつつつ凄く不本意だけど、あんだと協力するわ…だってあいつを倒すにはそれしか方法がないもん」

「あ、ありがとうございます…」

「〜! また、情けない顔しないで!」

ぺちんと軽く頭を叩かれた。…痛いよ、ブルー。

「確かにあんだは憎むべき敵、巨乳よ…でもね、あいつは巨乳を力に変えて戦う怪人。だったら優先順位はそっちに映るわ」

あ、やっぱりそう簡単に憎しみはなくならないのね…。

「…あんだは憎いけど、目の前にいるあいつはもつと憎いからそっちを倒すことにしたわ…!」

「…そりゃ、ありがたいです」

ブルーは空手のスタイルで構え、俺も同様に構える。一時的な共闘って奴だ。

「言つとくけど、あたしはあんだを助ける余裕なんてないからね。自分の身は自分で守って」

「分かってますよそんなこと…困ったら盾の代わりにでも使ってください」

そんな軽口を数度交わすと、律儀に会話が終わるまで待っていてくれたリヴァイアギルデイと対峙する。

「ふ…何を相談していたかと思えば、巨乳と貧乳のコラボの実現か!!」
「お前、黙っててくれ」

「あんた、黙ってなさい」

リヴァイアギルデイに揃って文句を言う俺とブルー。

「じゃあ…行きますか!」

「そうね…巨乳は倒さなきゃいけないものね!!」

そして共に、敵に向かって駆けだした。

さて、行くとしますか。最初で最後の、ブルーと2人きりの共闘の始まりだ。

第33話 爆発とツインテール

同時に駆けだしたブルーとファイヤーを見ながら、リヴァイアギルデイは心の底から楽しんでいるような笑みを浮かべた。これこそ自分が待ち望んでいたような戦いだった。

決して折れず、何度も立ち向かってくるツインテールの女子。それと戦えることこそ戦士としての誇り。そしてその相手は最強クラスの間人ときたものだ。アルティメギルの戦士として、これほど心が躍る展開はそうそうない。しかも共闘する相手が巨乳と貧乳。対立するはずの両者が一時的に手を取り合って戦うとは…。

「だから人間は…面白い!!」

リヴァイアギルデイは尻尾を後ろに引き、ファイヤーの胸に振り出した。だが、ファイヤーは自分の胸に当たる寸前でそれを掴み、なんとか地面を踏ん張り、尻尾を抑える。そして共闘相手に向かって叫んだ。

「今だ!」

「言われなくても!」

ブルーはぶつきらぼうにそう返すと、腰を捻って、リヴァイアギルデイの首が千切れんばかりの右ストレートをお見舞いした。

「ぐぬう!」

その一撃にリヴァイアギルデイは数歩よろめいたが、何とか踏ん張り、喘ぐように息を吸い込む。

「まだだあああああああ!」
「!」

その咆哮と共に強烈な振動波が巻き起こり、接近していたブルーを吹き飛ばす。ブルーは天井へと転がりながら飛んでいき、腐った屋根を突きぬけて屋外へと姿を消した。リヴァイアギルデイはブルーを追撃しようとするが、ここで尻尾に猛烈な痛みが走った。振り向くと、ファイヤーが尻尾を踏みつけて、地面へとめり込ませている光景が目に入った。

「貴様!」

「俺を、忘れちゃ困るな、リヴァイアギルデイ!!」

尻尾を踏まれたことの痛みで一瞬動きが鈍ったリヴァイアギルデイを見逃さずに接近し、拳を振りかぶる。

「その手はくわんぞおおおお!!」

リヴァイアギルデイもまた、ファイヤーが先制攻撃を仕掛けてくると理解し、拳を握りしめる。

「おおおおおお!!」

「おおおおおお!!」

うねりを上げるファイヤーの拳と属性力を纏ったリヴァイアギルデイの拳が空中で交差する。互いの拳は火花を散らしながらすれ違い、全く同じタイミングでそれぞれの顔面へとめり込んだ。

「!?!」

そして強烈な属性力同士のとぶつかり合いで衝撃が走り、両者共に地面へと叩きつけられるが、すぐさまファイヤーが立ち上がる。相手のダメージが消える前に立ち上がり、追加攻撃を浴びせる。これも立派なカウンターの一種だ。

「このっあつ…!?!」

…だが、その途中で悲鳴と共にファイヤーの片膝が折れた。リヴァイアギルデイの奥義と猛攻、そして先ほどのクロスカウンターとの衝撃で遂にその体力が底をつこうとしているのだ。…いや、むしろ、ここまでよく持ったほうと言えるだろう。

そして、その隙を逃すほどリヴァイアギルデイも甘くはない。

「ふ…遂に貴様のツインテールもタネ切れか!?!」

リヴァイアギルデイは不敵に笑い、尻尾が鞭のようになってファイヤーの胸を打った。

ファイヤーは「ごふっ」という声を漏らして、吹き飛んだのと同時に、ブルーが工場の窓を突き破って戻り、まっすぐ両足でリヴァイアギルデイの胸の真ん中を蹴った。

「!?!」

今度はリヴァイアギルデイが吹き飛ぶ番だった。大量の水が入ったタンクへと突っ込み、何百リットルものの汚水がリヴァイアギル

デイに襲い掛かる。

ブルーは横たわっているファイヤーに駆け寄ると、苦しそうに歪めるその顔を覗き込んでくる。

「ゲホツゲホツ…!!」

「あんた…その顔…」

咳き込むファイヤーの左頬に、誰かに殴られたような跡が見えた。そしてブルーはすぐさま、ファイヤーが何か無茶をしたのだと察した。そしてまたファイヤーも自分の頬にブルーの視線がいつていることに気がついた。

「あ、はは…少し無茶しちゃいました…」

「〜あんたね！ わざわざ顔でパンチなんか受けるんじゃないわよ!!」

笑ってごまかそうとするファイヤーに苛立ったブルーがぺちんと頭を叩いた。流石のブルーも目の前にいる同年代の女子が顔面パンチを受けたことにはいい気分をしなかったらしい。ブルーはファイヤーのことを嫌ってはいるものの、自ら傷つきやすい戦い方をするファイヤーを見逃すほど薄情ではなかった。

「あのね…あんた、もう少し…!」

だがブルーが最後まで言い終わることなく、勝負は再開される。尾の先端から射出されたビームが立ち止まった二人を襲う。防御手段がないファイヤーは逃げながらも攻撃の隙を伺うが、ブルーはエレメンタリーシジョン属性玉変換機構を起動させ、一つの属性玉を選択する。

「属性玉、スクールスイム学校水着属性!」

すると、ブルーはとぶんと地面へと潜り、地上から姿を消した。その突然の光景に戸惑うファイヤーであったが、リヴァイアギルデイはその光景は見覚えのある物であった。

「その技は…!」

それはドラグギルデイの部隊にいて、ブルーが倒したタイガギルデイの得意技であった。スクールスイム学校水着属性の力で、地面でも水のように泳げるようにする…それをブルーが使えることも驚きであったが、幸運なことにその技の対策法をリヴァイアギルデイは既に知っていた。

「だが…貴様のやろうとすることはすべてお見通しだ!!」

リヴァイアギルデイは右拳を高らかと掲げながら、地面に向かって狙いを定める。

「まさか…地面を崩落させてブルーを生き埋めにする気か!？」

「気付いたところで…遅い!」

リヴァイアギルデイの強靱な拳が振り下ろされ、ビリビリと振動波が襲い掛かる。

「揺れる巨乳の一撃!!」

その攻略法は振動波と共に繰り出される強力な一撃は、床下へ逃げたはずのブルーを床ごと生き埋めにしようという大胆なものだった。だが…。

「甘い!」

その声と共に、ボロボロになりながら地面から出てきたブルーは、その勢いを殺さずにハイキックを先ほどと同じように蹴りをぶち込んだ箇所へと叩き込んだ。

「ぬがあ!？」

属性力の反動と再度蹴り込まれた箇所の痛みで顔を歪ませるリヴァイアギルデイであったが、ブルーの攻撃は止まらない。

槍を取り出し、再度、ヒットアンドアウェイ攻撃を仕掛ける。槍を振り回し、突きや払いで翻弄し、隙あらば勢いよく足を振りかぶり、足を放つ。パワーではリヴァイアギルデイが圧倒的に有利であるが、ブルーはスピードや距離、間合いを優位に取り、ペースを自分側へと持っていつていた。槍を掴まれそうになるとすぐさま素手での戦闘へと切り替え、リヴァイアギルデイを翻弄していく。

だが、リヴァイアギルデイもやられっぱなしではない。なんとか接近してブルーの身体を掴むが、ブルーもまたそれを待っていたとばかりに技を構える。

「さつき言ったでしょ、素手喧嘩の方が専門だって!」

ブルーはそう言いながら、リヴァイアギルデイが向かってきた勢いを利用して、逆に背負い投げを決めた。リヴァイアギルデイは宙高く放り投げられ、無防備となる。

「おりやああああっ！」

「がぁおぉあ!？」

そしてファイヤーもまた、勢いよくアツパーをリヴアイアギルデイへと叩き込み、追加のダメージを与えていく。

ふうっ、と息を吐きながら、ブルーの下へと戻るとブルーはあつげにとられたような顔をしていた。

「満身創痍の人間が放てるパンチじゃないわね…あんだゾンビかなんか？」

「あはは、俺にはこれしかないもんですから。それに、あいつを倒して、ツインテールも守らなきゃいけませんからね」

「…あんだ、やっぱり似ているわ」

「え、誰とですか？」

「…あー、何でもないわ」

妖怪でも見るような視線で俺を見るブルーであったが、まだ俺は動ける。倒れる訳にはいかない。まだ負けられないし、頑張らなければならない。

あいつが倒れるその時まで、戦わなければならない。

「さあ…もうひと頑張り、行くわよー」

「はー」

そう言葉を交わし、奮い立たせると、再度俺たちは走り出した。結構…いいコンビなのかも。この戦いを通してながら、そう感じ始めている俺であった。

※

そしてこの戦闘を見ているレイチエルもまた、驚いていた。

「2人の息が、合ってきている…?」

画面の中ではブルーとファイヤーが同時にリヴアイアギルデイへと蹴りを放つシーンが映っていた。二人の息は最初の戦闘時と比べて、格段に上がっており、蹴りを入れるタイミングが綺麗に一致していた。そして、2人のギアもまた、その出力を上げ、その動きを更に

洗練したものへと変えていく。

「どういふこと…?」

しかめっ面をしながら、ブルーとファイヤーのギアのデータを見比べる。敵に拳をぶつけるたびに、蹴りを放つたびに2人の出力は上がっている。まるで、一步一步進んでいくかの如く、リヴァイアギルデイを追いこんでいくたびに、2人のギアはうねりを上げる。そしてその度に、軽い閃光が辺りを駆け抜ける。

「まさか…同調システムが?」

工場内で巻き起こっている現象に、信じられないような口調でそう呟いた。

ブルーが付けているギアに試験的に内蔵され、また自分が開発したテイルドライバーにも組み込まれているそのプログラム。奇しくも今あの場には、トウアールがかって使っていたギアと、そのパートナーが開発したギアが並んでいる。しかもギアに内蔵されている属性力は互いにツインテール属性。これらの要素が2人に何らかの影響を与えているのか?

「…はは」

レイチエルはたまらず、乾いた笑いをした。目の前で起こっていることが信じられないのと、認めたいと思う心がぶつかり合って訳が分からない状態にいるからだ。

(何が、どーなっているのかしら…)

もしこれがトウアールならば、すぐに理解できるのだろう。仮にもかつて戦士だった彼女ならば、理屈ではなく感覚で目の前の現象に簡単に納得できるのかもしれない。でもレイチエルには、どうしても納得が出来なかった。

共闘する相手がレッドやイエローならこの現象は理解できる。あいつらならばファイヤーと仲が良いから。でも何故、仲が悪かったブルーとこのような現象を引き起こせるのだ?

「まさか…2人のツインテールが…そう、させているの?」

2人の意志と思いが、目の前にいる敵を砕かんとするたびに共鳴し、力を上げている。あり得ない話かもしれないが、それは最強の属

性力であるツインテールだからこそ、成し得る現象なのかもしれない。

『はああああああああああ!!』

2人の声が重なり合い、互いの拳が交差して、リヴァイアギルデイを吹き飛ばす。その2人の動きはまさにドンピシャであり、2人は気づいていないようだが、その拳の動きもまた、綺麗にツインテールの形を描いていた。

「あたし…ほんとに…とんでもないシステム、作っちゃったかも…」

あはは…と笑いながら、レイチエルは急いで敵のデータと自分たちのデータの見比べを始めるのだった。

※

「おおおおおおおー！」

「だあああああー！」

ファイヤーが蹴り上げ、リヴァイアギルデイを吹き飛ばす。そして飛んできたリヴァイアギルデイをブルーが殴り、空中へと浮かす。

「はあっ!!」

そして2人同時に蹴りを繰り出し、リヴァイアギルデイを工場内の器具へと叩きつける。

「ぬお、うっ…!?!」

すぐさま立ち上がろうとするが…遂にその膝を完全に地面へと付けた。

「はあ…はあ…」

「ぜえ…ぜえ…」

だが、ブルーもファイヤーも同じように限界であった。いや…この場にいる全員がボロボロであり、満身創痍だった。もう勝負も長くは続かないであろう。

「何故、だ…」

「？」

「何故…貴様らは…それほどまで…共に、戦えるのだ…!?!」

ぜいぜいと肩で息をしながら、リヴァイアギルデイはファイヤーたちへと問いを投げかけた。それはこの戦いが再開してから、ずっと疑問に思っていたことだった。

(何故、こいつらが共に戦う?)

そう、目の前にいる2人は戦う目的も意思も違う。…それこそ決して道が交えることが無かったリヴァイアギルデイとクラーケギルデイのように。

ブルーは愛する男と憎む巨乳の為に。ファイヤーはツインテールの為に。互いに掲げる信念も違えば、思想も、ましてや性別も違う。本来ならば、全く息が合わない2人であるはずなのに、何故、これほどまでに肩を並べて戦うことが出来るのか?

「悪いけど仲は良くないわ。けど…」

「確かに相性は良くないかも知れない。でも…」

バラバラのことを同時にリヴァイアギルデイに話すブルーとファイヤー。だが…。

「あんたを倒す、それだけは変わらない」

二人の声は最後の部分だけは綺麗に重なり合った。それが、2人が共に戦う理由でもあった。

ティルブルーとティルファイヤー。闘う理由は違うが、その目的だけは何も違わなかった。

『目の前にいる敵を倒す』。それだけは何も変わらなかった。ブルーとファイヤーが完全に重なり合う数少ない部分でもあり、そしてそれは互いに共通する意志でもあった。

そしてそれはギアを通して、何となくであったが伝わってきた。そして、この場は互いの息を合わせなければ決してあいつには勝てないということも、それでしか互いの目的を果たすことが出来ないことも分かっていった。そして、それは戦いを通すたびにますます確信を強めていく。互いの考えが、まるで自分の考えのように理解できる。つい最近、総二が言っていた『千の言葉なんかより、一のツインテール』という言葉がブルーの頭をよぎる。

…まさかそれと似たようなことをこの身を持って経験する羽目に

なるとは。

「…ふ、そうか…貴様らは…」

そしてリヴァイアギルデイは自虐気味に笑った。巨乳のフアイヤーと貧乳のブルー。

奴らは別の存在であるのにも関わらず、協力し、部隊の長であるリヴァイアギルデイを追いつめようとしている。そしてその選択をしなかった自分が、こうやって追い込まれている…。

皮肉なものだ、とりヴァイアギルデイは感じる。弱いからこそ、小さいからこそ人間は協力し合える。あんなにも仲が悪かった2人が手を取り合って共闘している。だが…なまじ強い存在である我々は強いからこそ、分かり合うことがこんなにも難しい。

(胸の大きさ…か)

ただこれだけであるのにも関わらず、幾度となく対立し、最終的には和解という道すらも取れなかった。その結果がこの状況だ。我々らしいといえはそうかもしれないが、改めて人間を目にすると自分たちが憐れな存在に見えてくる。

「だが…それでも、俺は…俺自身の為にも、部下の為にも負けるわけにはいかない…!!」

リヴァイアギルデイは己を奮い立たせると共に無理矢理立ち上がり、既に限界であろう身体に鞭を打ち、胸の前に両腕を構える。そしてゆらり…と残り少ない属性力が昇るのがはつきりと見えた。

「リヴァイアギルデイ…正気か!？」

奴は、リヴァイアギルデイは満身創痍なのにも関わらず、あの奥義を放とうとしている。だが、そんなことをすれば奴は…。

「…悪いが、俺は負けられないのだ! どの道、ここで全力を出さなければ…貴様らを倒すことなど出来ん!」

「そういうことよ…最後はあたしが決めるわ…!」

「えっ…!？」

「…まさか、あんたまだ戦うつもりなの!？」

「…駄目なんですか？」

「あんたね、そんな身体でもう戦える訳ないでしょ!? とどめはあた

しがやるから、あんたは下がっていなさい！」

ブルーはグイツと無理矢理俺を下がらせると、青色に輝く槍、ウエイランスを取り出し、先端部分を展開させる。そこへ膨大な属性力が集まるのを感じる。

「さあ…行くわよ、巨乳怪人！」

「ああ…逃げも隠れもせん。正面から貴様の技を潰してやる、貧乳女！　そして、次はテイルファイヤー！　貴様の番だ!!」

「…悪いけど、それはありえないわ。あたしが…あんたを倒すんだからね…!!」

空気で分かる。…これが、最後の一撃になる。技と技のぶつかり合い。それが間もなく、行われようとしている。

ブルーとリヴァイアギルデイは共に構え、技の体勢に入った。ブルーの槍の先端から、青色の光がほとばらせた。リヴァイアギルデイもまた、同じように全身から青色の光をほとばしらせ、属性力がうねりを上げる。

「…!!」

そして遂に、互いの最強の技が解き放たれた。

「エグゼキュート!!　ウエエエエエイブ!!」

「マキシマム最大出力!!　バイブバーストインパクト揺れる巨乳の一撃!!」

瞬間、青色に昇ったエネルギーの刃と青色の衝撃波が激しくぶつかり合った。激しくぶつかり合う両者はどちらも全力がこもった一撃であり、工場内は強力な閃光がほとばしる。

「!!」

ともすると失いそうになる意識を必死につなぎとめながら、ファイヤーは2人の戦いを見ていた。

拮抗していた両者の一撃に動きがあったのは、リヴァイアギルデイのほうであった。

大量の振動波と超音波がエネルギーの刃ごと打ち砕かんと、徐々に押し始める。

「ぐ…あんななんかにねえ…あんななんかにねええええ…!!」

踏ん張るブルーが思い出すのは、ネットでの中傷やテレビでの自分

への扱い。そして巨乳という存在。揺れる乳、出る谷間、ブラジャー……！それがフラッシュバックのようにブルーの脳裏でチカチカと点滅する。

奴は、リヴァイアギルデイは、その胸の思いを戦うエレメリアン。ならばそれを許せない。乳を力に変えて戦う全ての存在を許すわけにはいかない。それこそが、ブルーの真の敵なのだから。

「負けられないのよ……アンタなんかにいいいいいいいい！！」
「！！」

次の瞬間、ブルーのギアが輝きを増し、エネルギーの刃の出力が勢いを上げた。刃は見る見るうちに大きくなり、そのまま衝撃波を押し返した。そして、そのエネルギーの刃がリヴァイアギルデイまで届き、貫く。ブルーもファイヤーもレイチエルもそう思っていた。これで終わると。誰もがそう思っていた。だが……。

「な……!？」

「あ……!？」

それよりも前に、槍の方に限界が訪れた。度重なるぶつかり合いで、既にダメージが蓄積していたブルーの武器、ウェイブランスは遂にブルー自身の属性力にも耐えられずにバラバラに砕け散ってしまったのだ。

「そんな……」

狼狽したブルーが一步下がった。

リヴァイアギルデイはその瞬間を見逃さなかった。だが、それはファイヤーも同じだった。

「！ ブレイクシュート!!」

リヴァイアギルデイの攻撃が再開したのと同時に、すぐさま右腕を射出する。

もう右拳を相手にぶつけることはできない。ヒビはもう限界まで広がっており、このまま右手を酷使すれば右装甲すら、砕け散ってしまう。だが、物を拾うくらいなら出来る。

(たとえば、殴ることは出来なくても!!)

飛んでいった右腕を回収し、先ほど砕け散った槍の刃先を握り絞め

る。そして、そのままリヴァイアギルデイの衝撃波に飛び込み、刃先を前へと突き出した

「何い!？」

この期に及んで動くファイヤーの姿にリヴァイアギルデイの顔が驚愕のものへとなる。振動波のせいで、多少のダメージを受けるものの、まるでお構いなしとばかりに突き進む。

「…この刃に込められた、ブルーの属性力は消えない!!」

その刃には先ほどまでブルーの魂の籠った意志が宿っている。そして、ファイヤーの属性力も上乘せしたその刃先は膨大な属性力の固まりとなり、あつという間に衝撃波を突き破り：遂にリヴァイアギルデイの胸へと突き刺さった。

「歩みを止めない限り：前へ前へと進む：」

リヴァイアギルデイの胸で、刃先が淡い光を発した。それと同時に、腰にあるテイルドライバーがうねりを上げる。

「倒れたって、何度だって：前へ突き進む：！」

ファイヤーは、一気に刃先に込められた属性力を解放した。

「それが：ツインテールだあああああああああああつ!!」

どん！——と、空気を震わせる音と共に、リヴァイアギルデイの体内で爆発が起こった。

※

「つがあ!!」

ファイヤーは爆風で吹っ飛び、そのまま地面へと突っ伏した。もう動くことすら不可能なほど、全てをあの一撃へと込めた。もし、これでリヴァイアギルデイが生きていたら、今度こそ万事休すとなる。

「お前…！」

「ふ…：そうか…：そういうことか…」

爆発の際に生じた煙が晴れると、そこにはぽっかりと胸に巨大な穴が開いたリヴァイアギルデイが立っていた。そこには血も肉も何も見えず、エレメリアンが精神エネルギーで構成された生命体であるこ

とをまじまじと見せられる。

「俺は…負けたのだな…」

だが、リヴァイアギルデイは穏やかそうにそう言つて、笑つた。

「だが、最後に、貴様に貫かれて…俺は誇りに思う…」

「ああ…そうかい…」

相変わらずだ、とどめを指されて嬉しいとか…俺には良く分からな
い価値観でこいつらは動いている。

だが、確実に分かることが1つある。それはこの戦いは決して1人
では勝つことが出来なかつたということだ。ブルーがいたからこそ、
最後の活路が開け、奴に決定的な一撃を与えることが出来た。彼女が
いなければ、俺は勝つことが出来なかつただろう。また、奴の隣に、ク
ラーケギルデイがいたならば、また勝負は分からなかつただろう。

勝負を分けた決定的な差、それは巨乳や貧乳とかいった『胸のサイ
ズ』ではなく、『共闘する者の有無』が勝負を分けたのではないだろう
か、と俺は思う。あの時、共闘を申し込んだのは、決して間違つてな
どいなかつたのだ。

「スタイルのいいお姉さんに胸を貫かれて倒される…これはこれで、
胸を愛する戦士の最後としてふさわしいな！」

ガハハと豪快に笑うリヴァイアギルデイであつたが、俺はどうリア
クションすればいいか分からなかつた。それは敵である奴に少しだ
け、憎めない部分を感じたからだ。…いや、それは奴ら全員に言える
ことか…。

「では…さらばだ、強き戦士たち、ツイン、テイルズよ…」

別れを告げるように後ろ向きに倒れた瞬間、リヴァイアギルデイは
大爆発を巻き起こし、散つた。

「あつ、くつ」

そしてブルーもまた、俺と同じように倒れて、横たわつた。

「えつと…とりあえず…お疲れ様です」

「…お疲れ様」

げっそりとした顔で、ブルーはそう答える。

「その…」

「あと…喋りかけないで。色々言いたいけど、何だか、疲れちゃった…」

「あはは…俺も、ですよ…でも…」

「あたしたちの、勝ちね」

「…ええ」

そう言いながら、2人はニヤリと笑った。

——— テイルファイヤー&テイルブルーVSリヴァイアギルデイ

勝者・テイルファイヤー&テイルブルー

第34話 解放とツインテール

「まだまだですわー!」

イエローの肩アーマーが開き、内蔵されているバルカンが火を噴いた。ヒビだらけのアスファルトに着弾したそれはあつという間に舞い上がり、煙がもうもうと立ち込める。

「むうっ!? 煙幕とは卑怯な…!」

「敵であるあなたがそれを言えまして!?!」

舞い上がった煙の中でテイルイエローとクラーケギルデイが交差する。

「ヴォルテックスブラスター・トンファーマード!」

クラーケギルデイの剣に対して、イエローは自らの銃をまるでトンファーのように使用して、接近戦を挑んでいた。：実際はただ銃を逆手に持って、ぶん殴っているだけなのだが、イエローの中では銃がトンファーに変形してそれを武器にしているイメージらしい。

「じ、銃で殴り合っている!?!」

「あらレッド? 銃はただ構える武器ではありませんことよ! そして…ツインニードル!!」

「! ちい!」

射出されたニードルガンをレイピアで弾く。接近戦をしながらも時折、遠距離攻撃も混ぜるイエローの戦闘スタイルに、クラーケギルデイは非常にやりづらそうな顔をする。

「黄の戦士よ…戦いの経験をまるで持たない貴様が、何故この決戦の場に姿を現した! 何故そこまで戦える!?!」

クラーケギルデイはイエローの攻撃を受け流し、再度接近戦を挑む。イエローもまた、果敢に距離を詰めていく。

「経験ならありますわ…!」

「何…?」

「物心ついた時からずっと…古今東西世界中のあらゆるヒーローの戦いを目に焼き付け、記憶してきました! どんな敵と戦うか! どう勝利したか! それが私の戦闘経験となっているのです!」

「馬鹿な…想像だけで片がつくのなら、誰も鍛錬などせぬわ！」

「ではあなたが今押されているのに説明がつきまして!? プラズマ
ニー!!」

イエローは力強く言い放ちながら、銃のトンファーによる強烈な打撃で怯んだ隙に、膝のスタンガンでクラーケギルデイへとダメージを与える。

「私の心にはヒーローを愛する心があります！ それで、私の糧となつて突き動かしているのです!!」

テイルギアは心の力で動くデバイス。今のイエローは全てを振り切り『ヒーローのように戦う』という信念で動いている。わざわざ言わなくてもいい武器名を叫んだり、もったいぶった言い回しをしているのがいい証拠だ。実に生き生きした表情で、クラーケギルデイと戦っている。

「ふん、ならば…その焼きついた記憶とやらに聞いてみるがいい！」

クラーケギルデイは触手を地面に叩きつけて、その反動で無理矢理距離を取った。そして自分に残っている全ての触手をピンと伸ばし、扇状に展開させる。

「我が全力の一撃を、どう防げばいいかとな!!」

叫び声と共に突き出された右腕を合図に、全ての触手が一斉にイエローへと襲い掛かった。

「まずいついが!？」

イエローを逃がそうとレッドは何とか動こうとするが、身体に走る強烈な痛みにとまらず、片膝を落とす。その間にも見る見るうちに無数の触手がイエローへと近づいていく。その光景はおぞましいを超えて、どこか壮観ですらあった。

「逃げろイエロー!!」

「いいえ、私は逃げませんわ! ——どうすればいいかですつて?」

だが、イエローはレッドの忠告を受けず、逃げも隠れもせず両の足をしかと踏みしめた。

「こういう場合は——」

イエローは迫りくる触手の雨を凜と見据える。ギアが壮大なうね

りを上げて、身体にあるアーマーのあちこちが展開し、発射形態を取っていく。

「全て撃ち落とすのが、お約束でしょう！」

そして大気がはじけ飛ぶような爆裂轟音と共に、テイルイエローの全身から武装が発射された。

肩、腕、腰、背中、足。ありとあらゆる場所から雷を纏った弾丸とレーザーが触手へと向かう。

触手と弾幕は2人の丁度、中間地点でぶつかり合い、押し合いを開始した。

「はああああああああ！」

クラーケギルデイが叫び声をあげると、触手が回転を始める。それらが千切れ飛ぶのも意にも介さずに、クラーケギルデイの突貫は勢いを増していく。

「ぐ、ぐううううう…!!」

強力な触手の突貫と、斉射による反動。2つの想像を絶する圧力により、じりじりと後退していくイエロー。踵はアスファルトにめり込むが、それでもなお止まらない。

「…ッ!!」

じりじりと追いつめられていくイエローを見て、レッドは思わず叫んだ。何故だかは分からない。弾かれたかのように、腹から声を振り絞っていた。

「何をやってんだイエロー！ お前の本当の力はそんなものじゃないだろ!! 胸の中にあるもの全部、俺たちに見せてみるおとおおお!!」

その叫びは辺り一帯に響き渡り、クラーケギルデイにもそしてイエローの耳に入った。

「——!!」

そしてイエローの中で何かが：弾けた。『全部』『本当の力』：その言葉が、イエローの中にあつた最後の壁をぶち壊した。

「…かしこまり、ましたわ」

ニコリと優越そうに口元を吊り上げ、はあはあと息を荒げ始める。

「全て…全て、お見せしますわ…私のありのままの姿を、隅から隅まで!!」

瞬間、押し切られていたイエローの攻撃が、勢いを取り戻しかのよう激しさを増していく。

そして吹き飛ばされそうになっていたイエローの身体がピタリと静止した。突如地面に吸い付いたかのようにイエローの体勢が安定し、不動になる。

「まさか…あれは!」

爆風がうごめく中で、レッドははつきりと見た。地面に、何か突き刺さっている。それがイエローの体勢を安定させている。

それは先ほどまでただ爆風にはためいていただけであったイエローのツインテールだった。先端の縦ロールがドリルとなつてアスファルトを抉り、船を支える錨のような役割を果たしているのだ。

「ツインテールをアンカーに…いいぞ! やれば、やれば出来るじゃないかイエロー!!」

「や、やれば…や、やる……そうですね…! もつと、もつと見せてあげますわ!! 本当の私を!!」

真つ赤な顔をするイエローの声に応えるように、突然胸のアーマーが開閉し、ミサイルが胸から射出された。この前のロケット花火みたいな弾道ではなく、高速で追尾する巨大なミサイルとなり、後ろで構えるクラーケギルデイ目がけて襲い掛かる。

「その技は効かん! スモークバーストクリフ 貧乳絶壁!」

ここでクラーケギルデイはレッドの必殺技をも封じた絶壁を展開する。だがそれを分かっていたかのように、イエローは高らかな声を上げる。

「分離ですわ!」

と、射出中のミサイルの上下が分離し、ロケットのように上段部分が絶壁へと向かう。絶壁に触れると、当然のように上段部分が跡形もなく消失した。だが、数瞬遅れて、下段部分のミサイルが、上段が着弾した部分をすり抜けて、クラーケギルデイへと着弾する。

「何い?」

自慢の絶壁を攻撃が突きぬけたことに驚きを隠せないクラーケギルデイ。

クラーケギルデイの奥義『スモールバストクリフ貧乳絶壁』は確かに強力な技だが、弱点が無いわけではない。その一つが同時攻撃に弱い事である。

攻撃を受けると、その攻撃によって消失した部分を埋めようとし、展開するバリアが一瞬だけ弱まる。その隙に弱まった部分を突けば、この技はあっさりと攻略が出来るのだ。

発射し終えた胸アーマーがパージされ、地面へと落ち、イエローの胸がたゆんと揺れた。

そしてミサイルの一撃を受けたクラーケギルデイが操る触手の動きが鈍ると、イエローはすかさず両腕の銃で全て撃ち落とした。

「ぐ、ば、馬鹿な!!」

そして永劫に続くと思われていた技のぶつかり合いは、両者相打ちにて終わりを迎える。

「はあ…はあ…、まだですわ…!」

だが、イエローは止まらない。突き刺したツインテールを元に戻すと、腰部分のブースターを吹かし、更に追撃を始める。

「はああああああああ!!」

「いいぞイエロー!! ヒーローだ、完全にヒーローだよ!!」

「あつ、はあ…嬉しい…私、私…嬉しいですわ——!!!」

その叫びと共に、銃を乱射し、背中に装備されていた巨大な砲門をパージするイエロー。何故か頬を赤らめながら、すっきりしたような顔をしている。

「……………ん?」

その光景にレッドはどこか嫌な予感がし始める。着弾した弾丸で舞い上がった煙の向こうでは次々とイエローがアーマーをパージしており、邪魔だと云わんばかりに脱ぎ捨てていく。

「お、おいイエロー!! どうしてアーマーなんか脱ぐんだ!」

レッドからしてみれば貴重な遠距離武器を自ら捨てていくイエローの行動が理解できないのだろう。脱いだところでスピードが上がったりパワーが上昇する訳でもないのにも関わらず、何故イ

エローは脱ぎ捨てるのだろうか、と。完全なる無駄な行いにレッドは首を傾げる。

だが、イエロー本人からしてみれば自分を包んでいるこの重厚なアーマーは、自分を抑え込んでいる拘束具でしかない。この熱く火照った身体を沈めるには、本当の自分を解放するには、テイルファイヤーに繋がれた時の感覚にたどり着くには、そして自らのツインテールに応えるためには自分をとことんまで見せ、解放するしかないのだ。

「ああ見られている！　こんな…こんな私を、本当の私を…皆が見ていますわあ——!!」

テイルイエローが、神堂慧理那がたどり着いた境地、それは…『脱衣』と『DM』であった。

「見て、見て！　本当の私を！　レッド、ブルー…そしてお姉さまたち!!　見てくれていますか!!　イエローは、イエローは…うふふふふふ…!!」

「あ、あれえ——!?!　何か…何か激しくおかしい気がする!!　そしてどこかで似たような人物をつい最近見た気がする!!」

黄色い声を上げながら、大盤振る舞いとばかりに次々に武装を撃ちまくるイエロー。レッドの「やめろ」の忠告も耳に入らずに、次々と撃っては脱ぐを繰り返していく。

「何なのだこれは!?!　何なんだこいつは、どうすればいいのだ!?!」

クラーケギルデイもわけが分からないといった顔をしながら攻撃をくらうがまさしくその通りだろう。味方であるレッドですらこんな事態、想定外の範囲外なのだから。

「隠して！　イエロー、隠して!!　駄目だ、そっち(変態)の世界に行っちゃ駄目だ!!」

「嫌ですわ！　もつと、もつと見て下さいまし!!　私をもつとおおお——!!!!」

今やイエローは肌色の部分のほうが多いというところでもない事態になっており、水着同然の艶やかな姿になっている。それは、先ほどまで見せていたヒーローの姿はどこにもなかった。ただの変態痴女

と化した女子がそこにいた。

レッドやファイヤー、そしてここにはいないレイチエル。彼らは慧理那が押さえこんでいたツインテール属性と共にとんでもない災厄を解き放ってしまった。育ちのいい生徒会長の本心を閉まつてあつた箱は、開けてはならないパンドラの箱だったのだ。

「ああん、ファイヤーお姉さま!! イエローは…イエローは…あなたのように華麗に戦えていますか!!??」

「ちいー!」

遂に全てのアーマーと武器を脱ぎ捨て、水着姿でファイヤーと同じように徒手空拳を繰り出すイエロー。奇しくも全ての触手を失い、身体一つという状況のクラーケギルデイと対等の立場でぶつかり合う。

「部下や同胞の怠惰を憂いている場合ではなかったな…私自身、貴様にそれ程の潜在能力ツインテールを秘めていたことにも気づかなかつた!! それが貴様の本当の姿…それならば我が触手を全て叩き落とせるのも頷ける!!」

「はあ…はあ…。女という生き物は脱がなければ分からないものですわ…!! あなたの目をもつてしても私の全てを解き放つた一撃必殺の奥義にして形態『フルブラストモード』までは見抜けなかつたようですね!!」

「ルビが何かおかしくないか?」

その心意気はいいのだが、何だかそのかつこいいルビを託すには漢字がはてしなく間違っている気がする。だがそんなレッドの叫びも熱く燃える両者には届かない。イエローは変態じみた表情を何とか沈め、凜とした表情へと戻った。

「お姉さまたちが教えてくれましたわ…真に大切なのは自分を信じる心! 自信を持って、ありのままの姿でいることだ!! そしてこの形態こそが本当の私自身なのですわ!!」

そう力強く言い放つイエロー。…ちよつとカツコいいかな? とレッドは思ってしまった。

いつも周りの空気に飲まれずに堂々と戦うファイヤーと本心を見せろと言つたマネージャー。その2人と接したことでそのことに気

づき、そして戦いを通してその真理にようやくイエローは到達したのだ。

誰がなんと言おうと、自分を曲げずに胸を張って堂々と生きている者こそが、最強なのだ。そしてそれこそがヒーローなのだ。…それが例え、露出癖でドMであったとしてもだ。

「イエロー…」

レッドは呆然としながらも、どこか胸が熱くなってきた。そしてその髪はますます煌めきを増して、輝こうとしている。そしてその輝きに満ちた力が今、解き放たれようとしている。

「これが！ 私の一撃！ 本当の必殺技ですわ!!」

イエローがバツと構えると、自らのツインテールを鞭のようにしならせ、地面に叩きつける。すると縦ロール状の髪がバネのようにしなり、反動でイエローを天高く跳躍させた。

「ツインテールで…跳んだ!」

予想外の行動にどこか胸を踊らせるレッドであったが、この状況をマズイとも感じていた。

必殺技を放とうにも、奴には絶壁がある。グランドブレイザーすら防ぐその壁をイエローに砕けるのか？ ふとレッドがそう思ったとき、自分の足元に転がっているあるものに気付いた。

「…これは!」

その間にもイエローの必殺技の準備は進む。イエローが脱衣し地面に転がしたままであったアーマーが、意志を持ったかのようにイエローの元へと戻っていった。ただし、アーマーは再び装備するのではなく、跳躍した主の後ろに折り重なるように集う。

砲身を伸ばした巨大砲を中心に、ランチャー、バルカン、レールガン…各種武装が接続、ジョイントされ、最後にヴォルテックスブラスタターがグリップのように底面後部へとはめ込まれる。

「ご覧あそばせ…私の完全開放を!!」

「何?」

イエローの背後に全てのアーマーと武器が合体して出来た武装、ユナイテッドウェポン合身巨大砲が完成する。

「オーラピラー!!」

「ぬう!？」

そしてその叫びと共に、主砲以外の砲門から拘束用ビームがクラーケギルデイを包み、結界を作り出す。

「何をしようと…私の絶壁が迎え撃つ!!スモールバストクリフ貧乳絶壁!!!」

拘束されようとも、クラーケギルデイは悠然と構え、属性力を展開する。目の前にそびえ立つは、全てを拒絶し、粉碎させる最強の壁。

「例え跳ぼうが脱ごうが何をしようと…我が絶壁は超えられん!!」

「…!」

その声を聞いたレッドは落ちていたそれを抱えながら、全速力で走り、クラーケギルデイへと突進していく。そしてありつただけの属性力をそれに込め、奴が展開している絶壁へと押し込んだ。

「…!? 何をする!」

「ぐう!」

途端にクラーケギルデイの剣で吹き飛ばされ、力なく地面に転がるレッド。だが目的は成し遂げたと云わんばかりにレッドはニヤリと笑う。

何故ならクラーケギルデイが展開した絶壁には、折れた剣が…レッドの武器であるブレイザーブレイドの刀身が突き刺さっていたからだ。その小さな刀身からは想像もできないようなツインテール属性を纏っており、絶壁ですら砕くことができない代物と化している。

「何かしようとしているらしいが…無駄な足掻きに終わったな、小娘!」

だがクラーケギルデイは気にも止めずに、宙で何かを構えるイエローに意識が向かっている。

奴はまだ何も気づいていない。…決めるのならば、今しかない!!

「今だ、イエロー!!」

「!」

その一瞬の間に全てを理解したらしいイエローは、自らの主砲を解き放つ。放たれた巨大なビームはイエローの身体を直撃させて、まるで解き放たれた弾丸のように彼女を加速させた。

「ヴォルテツクウウツ！ ジャツジメントオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

そしてそのままの勢いでクラーケギルデイの絶壁を…いや、正確にはそこに突き刺さっている剣の刀身目がけて電の脚撃を放った。

「!!」

瞬間、天から降り注ぐ神罰ともいえる強烈なキックと全てを地へと返す絶壁同士がぶつかり合った。奥義と奥義のぶつかり合いで、強力なスパークが辺りに走る。

「ぬ、ぐぐぐ…！」

「はああああああああああ!!」

クラーケギルデイが展開した貧乳絶壁スモールバストクリフにより、押されるティルイエロー。

だが、イエローが踏みつけている剣の刀身が絶壁の壁を超えようと踏ん張りを上げる。

「何?!」

まるで釘を打ち込むように徐々に徐々に壁と削り…絶壁を突き破ろうとしている。レッドとイエローの属性力がその刀身に集まり、立ちふさがる壁をも蹴り砕かんとしている。

「だ、だからあの時…！」

クラーケギルデイはレッドが刀身を突き刺した理由、それが何の役割を果たしているのかをようやく理解した。

1人で足りないのならば2人で。それは既にボロボロであるレッドが最後に繰り出した足掻き。展開されたバリアを破るにはそれ以上のパワーで貫いてしまえばいいというある意味、究極のシンプルな解決方法を成功させるための足掻きであったのだ。

「クラーケギルデイ!! 光にいいいいいなあれえええええええええええ!!!」

イエローの力強い叫びに応えるように、遂に絶壁が砕かれた。その途端、レッドの刀身とイエローの蹴撃が叩き込まれ、まるでパイルバンカーのようにクラーケギルデイを打ち貫いた。

「ぐわあああああああああああああああああああああああああああ

!!

イエローは蹴り足を削岩機のように地面に突き立て、なおも止まらずにアスファルトを捲り爆走するが、ツインテールを突き刺してブレーキをかけることで、ようやく静止する。

そして一瞬の後に、クラーケギルデイは大爆発を引き起こした。

「私の…勝ち、ですわ…」

イエローは満足そうに微笑みながら、気を失い、地面へと倒れ込んだ。その光景を見ながら、レッドはほつりと眩いた。

「…見事なツインテールだったゼイエロー、いや…慧理那」

途中、露出癖に目覚めるというトラブルはあったものの、逆に言えばそのおかげでこれほどのツインテールを拝むことが出来た…感謝しているのか困っているのか分からない顔でレッドはそつと微笑んだ。

——— テイルレッド&テイルイエローVSクラーケギルデイ

勝者・テイルレッド&テイルイエロー

※

何とか立ち上がれるまで体力を回復させたレッドは貧乳属性スモールバストの属性玉を回収して、天を仰いだ。

乳とは、胸とは何なのだろうか。どうして胸の大きさだけで争いは起こってしまうのだろうか。この一月弱、幾度となく繰り返された争いの根本的な原因をレッドは考えようとしたが、結局分からないという結論に達し、気絶しているイエローを運ぼうとしたその時。

「見事じゃ…更にツインテール属性の輝きを増したのう…」

周囲一帯の空気を、澄んだ声が震わせた。優しくもどこか恐ろしさが混じったような声色がレッドに鳥肌を立てせる。

「誰だ！」

レッドはボロボロの身体で構えるが、既にフラフラとよろめいていた。このままでは戦う事すらできない。

「安心せい、戦いに来たのではない…」

すると工場裏からスツと何かが現れた。工場の影と同化し、まさに影そのものといえるほどにこちら側に誰かが歩いてくる。

首から下を覆う黒衣、おさげのように胸に垂らされた黒髪のツインテール。凜然とした瞳を彩る、黒色のメガネ。そして今倒したクラークギルデイを遥かに上回る、周囲全てを覆い尽くすような、巨大な属性力。

全てが黒く、まさに影とも云わんばかりの恰好をした少女がこちらを見ている。

「…君は、誰だ？」

レットは素直にそう問いかけた。むこうはこちらを知っているような口調で話してきたが、レットは記憶をどれだけ探ろうと思いつけないからだ。すると少女は悲しそうに頭を垂れた。

「…そうか…分からねか」

「え…いや…その…」

レットは何とかして記憶の中から該当するであろう人物の検索に入るが、どうしても思い出せない。

あれほど眼鏡とツインテールが調和した少女を、物心ついて以来全てのツインテールの記憶を振り返ってみても、一向に思い出せない。

「いや、仕方あるまい。あの頃のわらわはまだ幼く、手足も伸びきっていない小娘であった。これほどに成長してしまつては、思い出せなくても仕方のないこと…」

すると少女はレットの視線に目を合わせ、目許に涙を湛えた。

「だが…今度はあなたが幼女になつてしまつてしまうとは、なんと皮肉な運命…！ そんな姿になつてしまつたのは世界を超えた弊害か、それともカモフラージュか!? わらわがこうして、あなたの愛を受け止められるだけの身体へと成長したというのに!!」

「ちよ、ちよつと待つて…！」

少女は黒衣を投げ捨て、一気に全身をレットへとさらけ出した。

「わらわの名は…ダークグラスパー」

「…！ その姿!？」

ダークグラスパーと名乗った少女が全身に纏っている鎧に、レット

は驚愕した。

——それは、黒色の鎧であった。だが、その鎧は眩いばかりに輝いていた。禍々しさを超え、畏敬すら感じてしまう程に、強く凛々しく気高い純黒色に。

「テイル…ギア!? じゃあ君も…!」

ダークグラスパーが身に纏っているそれは、どう見てもツインテイルズが使っているテイルギアと類似していた。

「違う。これはグラスギア…頑強装甲グラスギア。お主らのテイルギアがツインテイルを愛する力で動くのならば、これは眼鏡を愛する力で動く鎧じゃ」

支配者と眼鏡、頑強と眼鏡がんきょうをかけているらしい。

「あなたに憧れて作ったのじゃ…トウアール。同じツインテイル属性で作らなかったのは、あなたへの敬意があつてこそ…」

「あなた…トウアール…? あの、人違いじゃ…?」

「とぼけなくても構わぬ…あなたが付けているそのギアの輝きは、あの頃と変わらないままじゃ…」

少女は、レッドを見ながらよく知っている人物の名前を言った。しかも少女はまるでレッドをトウアールと勘違いしているみたいに話しかけてくる。スルツと芸術品を扱うかのようにテイルギアを擦る。そして、はつきりとレッドの目を見据えてこう言った。

「そして、今のわらわは、アルティメギル首領直属の戦士。あなたを迎えに来たのじゃ…トウアール」

「…!」

レッドは息を飲むのと同時に、ダークグラスパーはその手をしかと握る。

「わらわと共に、戦つて欲しい」

冷徹に光る、黒色の眼鏡。その透き通ったレンズが放つ光は、何も映さず、ただレッドのギアの中にあるトウアールの属性力だけを映していた。

番外編 設定資料集（2巻終了時点）

主な登場人物の現状

丹羽光太郎／テイルファイヤー

総二の頼みでツインテール部なる謎の部活の数合わせ部員となるが、それがきっかけで飢婚者である桜川尊に目をつけられるわクラスメイトには総二と同じような扱いを受けかけるわなど日常面では様々なトラブルが降り注ぐ羽目に。

また日常面では意外に真面目な所を見せるなど、この世界ではまだまだもな領域の住民として過ごしている。

戦いではワイバーンギルデイ戦を乗り越えたので成長し、多少のことでは苦戦はしなくなったものの、相性がとことん最悪なりヴァイアギルデイとの戦いでは大苦戦をする羽目に。だがテイルブルーとの共闘でこれを制す。だが流石にそろそろ自身の戦力不足は感じ始めてはいるようで…。

仲が悪かったテイルブルーとは共闘を通じて少しだけ距離を縮めた感じにはなったが、一難去ってまた一難。知らぬうちにテイリエローに『お姉さま』扱いされる、その変身者の神堂慧理那には変身アイテムのテイルドライバーを見られるなど、新たなトラブルの種がすぐそこに…。

レイチエル

今回はオペレーター業や裏方に徹しており、ファイヤーのギアのアップデート、イエローを覚醒させる的確なアドバイスやブルーへの救援交渉を成立させるなど敏腕ぶりを発揮。

また彼女が開発し、ギアに内蔵されているプログラム『同調システム』が逆転の鍵となるなど、戦闘面でも大いに貢献している。

…だが、かつての相手であるトゥアールの生存を知って、どこか複雑な様子。どうやら再会は近い予感がするが…？ また彼女もまた知らぬうちにイエローに『お姉さま』扱いされている。

観東 総二／テイルレッド

今回は原作とあまり変わらず。光太郎をツインテール部に幽霊部

員として勧誘するがそのせいで光太郎にまで魔の手を及ばせてしま
う。

だが原作とは違い、ティルイエロー覚醒のきつかけを与えなかった
ので、ご主人様にならずに済み、負担が多少は軽くなった。

戦闘面ではクラーケギルデイに大苦戦するが、最後の最後に勝利の
道を作るなどしつかりと活躍する。

津辺 愛香／ティルブルー

胸囲を力に変えるエレミアンばかり出現したので、胸を馬鹿にさ
れたり褒め称えられたりで機嫌は常に不機嫌状態。バツファローギ
ルデイのドテツ腹に槍を突き刺す、ついには味方の胸囲まで奪いかけ
るなど、周囲にこれでもかというほど巨乳への恨みを見せつけた。

ただしリヴァイアギルデイ戦では原作の『血走った両目をしながら、マウントポジションで蹴り殺す』という正義の味方としてもヒ
ロインとしても間違っている蛮行ではなく、ティルファイヤーと共闘
して勝利を掴むなど真つ当な行為で倒した。…ただしこの模様は一
切テレビ中継されていないので、世間から人気の方は相変わらず最低
ランクである。

ティルファイヤーとの仲は一步前進…といったところか？ 少な
くとも、顔面を犠牲に攻撃を当てるなど無茶ばかりするティルファイ
ヤーを気にかけるようにはなった。

トウアール

原作通り、光太郎のクラスへと転入。そしてその残念さを徹底的に
見せつけ、転校デビューに完全に失敗する。新たなティルブレスを開
発し、最終的に慧理那にそれを託すことに。

そして彼女が先代のツインティルズということも判明した。謎で
あったレイチエルとの関係は戦士とオペレーターという、現在のツイ
ンティルズと似ているパートナー関係であったことも分かった。

何故レイチエルは彼女の元を離れたのか？ そして何故再会を拒
むのか？ …それはまだ分からない。

神堂慧理那／ティルイエロー

光太郎が感動する程の「凄まじいツインテール」の持ち主であり、生

徒会長を務めるお嬢様。ひよんなことから総二たちの正体を知り、自身も非日常に首を突っ込むことになる。

初戦はファイヤーとの共同作業で敵を倒したので、情けない所だけを見せて終わった原作よりは世間の評価は高い…今のところは。

初戦でファイヤーと繋がったことで燃えるような属性力をその身で感じ、更にレイチエルに『本心を見せつけろ』と発破をかけられたことで原作とは違ったタイピングで覚醒することに。

DMと露出狂に加え、ファイヤーとレイチエルに百合的な感情を抱くという追加要素が今後の騒動の種になりそうな予感が…。

桜川尊

我らが飢婚者。メイド服で職場に通勤、婚姻届を机に投げつけて突き刺す、去り際に廊下に刺すなど常人離れた行動を見せつけ、生徒をドン引きさせた。だが臨時の教師にしても本業のメイドに関しても仕事面では普通に有能なものだから、尚のこと性質が悪い。

…結婚に関しては、『30歳の誕生日まで一週間を切ったら自分でも何をしでかすか分からない』と感じるほどまでに追いつめられている。

※

同調システム^{シンクロ}

レイチエルが独自に開発したプログラムで、テイルギアに組み込まれているとあるシステムの名称。

当初は他者の意識を混合し、それぞれの属性力を重ね、強化するプログラムであり『二人で一人のツインテール戦士』になれるシステムを目標に開発したものの『ツインテール属性同士の組み合わせによる危険性』『そもそも安定しないし、たとえ成功したとしてもリスクが高すぎる』といった理由から積極的には使わずに、あくまでも万が一の為に組み込まれていた。

だが、ブルギルデイ戦で見せたように項後属性^{ネーブル}と組み合わせることで外付けのバッテリーみたいに使うなど意外に用途の幅は広い。

リヴァイアギルデイ戦ではブルーとファイヤーのギアで何故かこのシステムが起動して、2人の息を合わせていくという使い方がなされた。：一体、このシステムは何なのであるのか？開発者であるレイチエルですら分からない部分があるらしいが…。

※

リヴァイアギルデイ

ドラグギルデイが倒されたことで派遣されてきた幹部の一人。所有する属性力は巨乳属性。

そのため貧乳を愛するクラーケギルデイとは仲が悪いライバル関係であり、とことんまで意見が合わない。

口調は厳しく同僚にも冷たい態度をとったりするが根は優しい怪人であり、友であったドラグギルデイや部下が死んだ後は体を震わせて悲しみをこらえたりしていた。

武器は股間から生えている尻尾であり、これを槍や鞭のように扱い、戦う。

更に巨乳属性を身体に纏って放出し、属性力による乳揺れで超音波と超振動を起こして対象物を粉碎する奥義『揺れる巨乳の一撃』を奥の手として隠している。だがこの技は自分の身体にまで負担をかける諸刃の刃であり、これを放つたびにダメージの一部が自身へと跳ね返ってくる。

ティルファイヤーとの戦いでは勝利寸前にまで追いつめることに成功するが、ティルブルーとの共同戦線で徐々に追いつめられることに。最終的には2人の属性力を纏った槍の欠片で胸を貫かれたことが原因で敗北となった。奇しくも胸を愛するばかりに胸を貫かれて負けるといふ最後を辿った。

クラーケギルデイ

アルティメギルの幹部怪人であり、リヴァイアギルデイと同じように派遣されてきたエレメリアン。

属性は貧乳スモールバスト属性であり、巨乳を愛するリヴァイアギルデイとは犬猿の仲。

騎士道に邁進する堅物で真面目ではあるが、理想の貧乳であるティルブルーには敵でありながら求婚し、忠誠を誓うなど一度暴走すると手が付けられなくなるタイプ。武器は背中についている無数の触手と腰に刺してあるレイピア。

更には貧乳スモールバスト属性を壁のように前面に出し、攻撃を消滅させる奥義『貧乳絶壁』スモールバストクリフを隠し玉として取っており、レッドの必殺技を正面から防ぎきるといった強さも見せつけた。

だがティルイエローの登場によりペースを終始持っていかれ、遂には覚醒を果たしたイエローとレッドの合体攻撃により倒された。残念ながら、姫と崇めたティルブルーとの再会も叶わぬまま、その身を散らせることとなった。

ダークグラスパー？

アルティメギルに属する闇の処刑人。アルティメギルでも数少ない人間の幹部であり、ワンマンアーミーが許されている戦士。ティルギアを元に作ったグラスギアを装備しており、眼鏡のレンズで光線を何度も反射させ、一步も動かぬまま反逆者であるフェンリルギルデイを倒すなどといった今までの怪人とは一線を引く強さを見せつけた。

どうやらティルレッドをトウアールと勘違いしているらしいが：彼女は何者なのだろうか？

※

第3巻編嘘？ 予告

※この予告は “例のあの声” と “あのBGM” で再生してください。

次回予告

君達に最新情報を公開しよう！

突如現れた黒き敵、ダークグラスパー！ はたしてその目的は何だ？

そしてイエローに更なる試練の時が訪れる！ それを機に3つ首のエレミアンも姿を現し…！

今こそ必殺技を発動承認せよ！ 燃える炎の属性力で強敵、ケルベロスギルデイを打ち砕け!!

The Another Red Hero ネクスト! 『脱衣を制する者』

次回も、このチャンネルでファイナルフュージョン承認!!

これが勝利の鍵だ!! 『二人の女科学者』

ここで素敵なプレゼントのお知らせだ！ この番組の主題歌CDと我らがテイルファイヤーの変身ベルトである、DXテイルドライブをセットで50名様にプレゼント!

更にWチャンス賞として、番組特製、貼ってはがせるツインテイルズステッカーを1000名様にプレゼントするぞ!

ハガキに住所、氏名、年齢、番組の感想を書いて、ご覧の宛先までどしどし応募してくれ!!

締め切りは○月□日まで！ 君たちの応募を待っているぞ!!

第3巻

第35話 眼鏡とツインテール

「痛つてえなあ畜生…」

痛む身体で塵埃だらけのコンクリートを這いながら進み、リヴァイアギルデイが残っていた巨乳属性ラージバストの属性玉をギアへと収める。共にいたテイルブルーは先ほどの激闘のせいか目を回すように床に寝転がったと思うと、寝息を立ててしまっている。

それを見ていると戦いがようやく終わったんだという感覚がして、途端にまぶたが重くなってくる。家に帰って、布団でぐっすり眠りたいという気持ち波のように押し寄せてくる。

「…呆れた！ あんたまだ動けるの!?!」

「!? お前…なんでここにいるんだよ!?!」

ここで工場の入り口付近から聞き覚えのある声が聞こえ、反射的に振り向き、驚いた。そこには呆れ顔のレイチエルが腰に手を当てながらファイヤーを見ていた。またファイヤーも驚きの顔でレイチエルを見ていた。

「あのね…あんたが心配だからに決まっているじゃない！ あんなボロボロのまままで戦闘を続けるわ、あいつの技に真っ向から向かうわ！ 見ているこつちの方が痛かったわ!!」

「…あー、その…ごめん」

「それにブルーのことも気になるしね。いくら強いからって、戦いが終わった途端に眠るなんて流石に心配よ…あたしが救援を頼んだせいでこんなになっちゃったんだから、ケジメは最後までつけなくちゃ」

「…お前がブルーに頼んでくれたのか!? あ、だからブルーが『あの子』って…」

「そうよ、もっとあたしを褒めなさい。そして感謝して。あたしがいなかったらあんた負けてたわよ」

そう言うレイチエルは横になって寝ているブルーの腕に血圧計

のような腕帯を付け、何やらパソコンで調べ始めた。どうやらブルーの健康状態を調べているらしい。そしてポーンという音と共に結果が映し出される。

「…うん、健康面は何の問題も無しね。あー良かった、この子も結構無茶してたから心配したのよね」

満足そうに頷くと、どこからともなく毛布を取り出して、ブルーへと羽織る。今度はファイヤーの方を見た。

「さ、次はあんたの番よ。腕、出して」

「…分かったよ、はい」

寝そべったままでレイチエルに急かされるように言われ、諦めたように左腕を突きだすと、二の腕に帯で巻かれる。テキパキとした動作で健康状態のチェックが開始される。

「お前さ、こういうの慣れてんの？ えらい動きが機敏だけど」

「…まあね、マネージャーみたいなもんなのよ、あたしの仕事は」
「へえ」

すると同じようにポーンという音と共に結果が判明した。

「…あんたの場合は過度な疲労が見られるわ。恐らく属性力を極限まで使ったせいでの疲労でしょうね。後は打撲と擦り傷が少々」

レイチエルは的確に症状を言い当てると、これまた慣れた手つきで湿布やら塗り薬を取り出し、ペタペタとファイヤーの全身に張る。ぷんと香るその匂いから、かなり強烈な薬品を使っているのが分かった。

「…はい、ということであんたは先に家に帰って寝てなさい。後はあたしの方で何とかするから」

「って言われてもな…ほら、ブルーのこともあるし…」

「いいから！ さっさと帰って寝なさい!!」

「お、おい！」

有無を言わせないとばかりにレイチエルは勝手にギアを遠隔操作し、ファイヤーはその場から姿を消してしまった。強制的に家に戻すと、工場内にはレイチエルと寝ているブルーだけが取り残される。

「全く…！ あいつはお人よしなんだから…！ 人の心配をする前に

もう少し自分の心配をね…！」

ぷりぷりと怒りながらレイチエルは苛立ち混じりに足元の石を蹴飛ばす。

こっちはあいつのことを心配して家から飛び出して来たのに、あいつはもう…！ それともあいつには痛みを耐える趣味でもあるのか？

「頼むからあいつだけはそっちの道には行かないで欲しいものね…」

レイチエルが思い浮かべるのは先ほど間違った方向へと覚醒してしまったテイルイエローとある科学者だった。

天才にして犯罪者予備軍として君臨するあいつ。イエローもあいつも最初はまともだったんだけど、ドンドン毒されちゃって今や…。まあ、どっちも覚醒の片棒を担いでいるのは私なんだけど。テイルギアの装着者は皆、変人の世界へと導かれる運命にあるのだろうか？

はあ、とため息をつくくとパソコンを畳み、勢いよく立ち上がる。

「さてと…後はここに来ている馬鹿をとつと追っ払いましうか。四十八区あいつでしょうしね」

それは先ほど部屋で見た映像。戦いが終わったレッドに接触をし、しかもレッドをトゥアールだと勘違いしているあのメガネの少女。

あいつには見覚えがある。あいつはとある科学者と同じで変質者の世界にツッコんでいる人間であり、その変態を崇拜している人間。あの頃より成長してしまったものの、その燦然と輝く眼鏡は忘れようにも忘れられない。認識攪乱装置を装備しているらしいが、レイチエルの目はごまかせない。

幹部クラスとの戦いの後に現れた増援。仮に戦闘に発展したら、戦いを乗り切る体力は私たちにはない。ならば、ここは私が出ることであいつにいったん引いてもらうように催促するしかない。あいつに任すという手もあるが、泥沼にはまって戦闘というケースが容易に想像できてしまうため、あまりやりたくない。

正直いつて姿を現すというリスクは避けたいものの、現場に姿を現した方が成功率は上がるし、ここは最善を尽くすしかない。

そしてファイヤーを無理矢理帰したのも、これが関係していた。身

体のことも勿論そうだが、本心はあいつに接触している自分を見て欲しくなかったからだ。…正直、あいつと知り合いつてことは光太郎には知られたくないのだ。

(…あいつを追い払ってレッドを助けなくっちゃね。そして事が済んだらすぐさま逃げよう)

レイチエルは覚悟を決めて工場の外へと出た。

※

「わらわと共に、戦って欲しい」

目の前で手を握ってくる少女の言葉は、にわかには信じられない衝撃的な内容だった。

アルティメギル直属の戦士、ダークグラスパー。まぎれもない人間である少女は、確かにそう名乗った。

「…！ す、すまぬな。いきなりのおさわりはファンクラブの中でも禁止されていたはずじゃったな…！」

慌てて手を離し、飛び跳ねるように後ろへと下がる少女をレッドは更に疑い深く見る。

不可解なのはこの少女は何故レッドをトウアールだと勘違いしているかということと、人間なのにアルティメギルに所属しているかということだ。

「…君は一体何者だ？」

狼狽しつつもレッドはそう切り出した。

後ろには気絶したイエローが倒れている。これ以上近づけさせるわけにはいかない。そして今後の為にも、彼女が何者なのかという情報を聞き出しておくべきだと判断したのだ。

「ふふ…そうか…」

だが目の前の少女は真意の見えない薄い笑みを崩さずに、じっと目を見つめる。

「やはり、わらわがあまりにも美しく成長し過ぎて、記憶と重ならぬのか。喜ぶべきじゃろうが…寂しいものじゃな」

案の定、レッドをトゥアールだと勘違いしたまま話を進めている。背丈も見た目も何一つ一致しない2人を勘違いしている。その考えられる理由は、レッドのテイルギアのコア：トゥアールのツインテール属性を感じ取って、トゥアール本人と誤解していると予想できる。それはドラッグルディとの激闘の際、トゥアールが教えてくれた情報であり、トゥアールは先代のテイルブルーであることは既に知っているが――。

(じゃあ、何故人間であるあの子が属性力で人を認識するんだ?)

新たな疑問が湧き出てくる。エレミアンならまだしも、人間であるあの子が見た目ではなく属性力で人を区別するのだろうか？ …もしかしたら見た目が人間だけでその正体はエレミアンなのか？

色々な疑問が浮上していると、多少のノイズと共にギアの通信機能が起動した。

『総二様、総二様』

「…」

通信先からはトゥアールの声が聞こえてくる。驚いたが、悟られないように顔をグツと強張らせて、通信を聞く。

『ここは私に任せてくれませんか？ 悪いようには致しませんから：後ろに手を回して：』

言われるがままに後ろに右手を差し出すと、その途端、掌に何か重いものが握られるのを感じた。手の感触からするにこれは通信用のデバイスであるトゥアルフォンだ。これを転送で上手く少女に見えないように渡したのだろう。

「イスナ：…何故、この世界に？」

レッドはますます驚いた。何故なら背中から自分の声が聞こえたせいだ。思わずトゥアルフォンを落としかけるが、グツと堪える。

すると、少女はぱあつと明るくなり、嬉しそうにはしゃぐ。

「！ おお、ようやく思い出してくれたか！ そうじゃ、わらわはあなたの一番の信奉者^{ファン}であった、イスナじゃ!!」

「ええ、お久しぶりですね」

それは後ろに持っている多機能通信デバイス、トウアルフォンから聞こえる声であった。

後ろに持っているトウアルフォンへとトウアールが通話し、更にトウアルフォンにある変声機能でレッドの声に変換することでまるでレッドがそのまま喋っているように見せているのだ。幸いにも、トウアルフォンはそこら辺の携帯とは比べ物にならない高性能の為、音質は肉声と比べても遜色のないクリアーで、通話によるタイムラグもない。よほどのことがない限りバレることはないだろう。

まるで見た目は子供な名探偵のようなこの状況、トウアールはレッドになりきることと情報を更に引き出そうとしているのだ。

…まあ、自分の知らない所で自分の声を使うことができるという機能にどこか危険を感じてしまうが、ここは少女の知り合いであるトウアールに任せるしかない。

念には念をとレッドは深刻に悩んでいるかののように空いている片腕で口元を覆い、唇の動きを悟られないようにする。

「以前と随分性格が変わったようですね、それも、そのグラスギアとやらの影響ですか？」

「そうじゃ。グラスギアを纏い、ダークグラスパーとなった時、わらわは本当の自分へとなれた。側にしても恥をかかせぬ、一流の戦士となったつもりじゃ！ あの頃のヘタレなわらわは死んだのじゃ!!」

「あなたの属性力が失われずに健在ということは——私たちの世界の侵略が完了する前に…属性力が奴らに奪い尽くされるその前に、あなたはアルティメギルの仲間になったということですね？」

「むう、確かにそうじゃが…」

初めてバツが悪そうな顔でイスナという少女は頷いた。

「では何故です。テイルギアのシステムは私のオリジナルであるはずです。アルティメギルにいるあなたが何故私の模倣品を所有しているのです？」

そう問われるや、一転して誇らしげな表情と共に、眼鏡をクイツと上げた。

「それはわらわの心の力じやろう。トウアールのことをずっと、ずっと

とずっと、ずっとずっとずっと見続けているうち、わらの眼鏡には不思議な力が宿っていたのじゃ。後はティルギアを参考にして、この眼鏡を変身ツールに改良して…変身アイテムゴッドメカネ神眼鏡は完成したのじゃ」

なんと絶妙に微妙でダサイネーミングの変身アイテムなんだろう。眼鏡は確かに数多のヒーローの変身アイテムの一つではあるが、もう少しカッコいい名前を付けれたはずだ。

だが、レッドもこの状況を傍観していく内に、トウアールとイースナの人物関係がなんとなくではあるが把握できるようになっていた。「トウアールよ、教えてくれぬか？ 何故、あなたはそんな子供のような姿になってしまったのだ？ 確かにあなたが幼子ばかり愛する戦士でロリコンであることは全世界の人間の知る所ではあったが…」

そんな不名誉な情報を世界中に広められてもなお、誇り高く戦い続けていたのかトウアールは。…何か、容易にそんな姿が想像できるから困るな、うん。今と全く変わらない姿で幼女を見てはニヤニヤしていたのだろう。

「…初めは贖罪のつもりでした。今までの自分の身体を捨て、私が愛した幼女の姿にあえて変身してこの世界を守ろうと——罪滅ぼしをしよう。ですが、小さい身体に変わることを私自身の身体は全く拒みませんでした。むしろ、それが快感になっていったのです」

その幼子ばかり愛するロリコン戦士は相変わらずのペースで、まかせの嘘をペラペラと言い放つ。詐欺師もびつくりのタイムラグ無しの嘘でイースナをまくし立てる。

確かに好きなものに変身できるのなら、それは罪にはならないだろう…喜んでしまうのも分かる気がする。ティルレッドの変身者の総二もまたツインテールの女の子になれてとても嬉しく思っているが…。

「やがてこの身体を完全に受け入れてしまったその結果…私は元の姿に戻れなくなってしまったのです！ あなたが愛してくれたトウアールという存在は、もうこの世のどこにもないのですよ!!」

「！ なんと…変身による一時的な身体変化ではなかったのか!? で

はあなたのおっぱいは!? トウアールのあのそびえ立つように大きなおっぱいはどこに消えてしまったのじゃ!」

「身体に拒絶されたのは残念ながらおっぱいの方でした。わたしのおっぱいは、次元の彼方へと消え去り、どことも知れぬ亜空間で今も寂しく2つそびえ立っていることでしょう」

「な、何じやおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおとおおおお!!?」

誰かこれ止めろ! レッドは口元を押さえながらそう思う。一応の辻褄はあっているっぽい嘘なのだが、この嘘を信じてしまっではないけない、そんな気がひしひしとする。そしてそんな嘘を真剣な表情で聞くイースナも色々と残念すぎる。そしてこれを傍観している自分がだんだん嫌になってくる。

「:幻滅、したでしよう? もう私のことは忘れて新しい恋を:」

「い、いや:あなたのおっぱいはわらわが必ず! 必ずや取り戻してみせるのじゃ!! 何ならわらわの膨らみかけのおっぱいをやるから、これで何とか:!!」

「いいえ、いりません。私は膨らんでいないおっぱいが好きだということ、あなただって承知の事実でしょう? そんな中途半端に大きくなつたおっぱいなど、貰っても嬉しくありません」

「ぬぬ:」

だが、ここでおっぱいの話題が出たのがまずかった。イースナはふと、何かを思い出したような顔になる。

「ところで、お主らの過去の資料映像を見たのじゃが何故、あのような絶壁の胸をしている女がトウアールのおさがりのギアを使っているのじゃ? 初めて見たときはてっきりアイロン台の上にテイルギアが載せてあるのかと思って驚いてな:よく見れば人間の胸であったから更に驚いたぞ」

「ああ、そのことですか。その辺にいた貧乳にテイルギアをくれてやることで、かつての自分の身体への未練を断ち切ったのです。太陽とピンポン玉並みの差の胸を見ることで、二度とセンチな気持ちになどならないようにという戒めを自分に課したのです」

「むうう、なんとという気高き決意じゃ…！」

ここにブルーが、そしてかつてトウアールが使っていたギアの現所有者である愛香がいないことをいいことにあることないこと言いまくって調子に乗り始めているトウアール。

「とにかく、もう私のことは諦めて下さい。そんなに可愛くなったのなら、どこにいったって新しい恋くらいすぐに探せますよ」

「いや、それはできぬ」

するとイースナは懐から携帯電話を取り出した。デザインや色のくすみ、擦り切れ具合から見てかなり長い間使い込んでいるということが分かる。

「この携帯電話に登録された唯一のアドレス…あなたは世界を離れた時にそれを捨ててしまったのじゃな。あなたからのメールが来なかった日々は大変寂しかった…だがわらわのアドレスはあの頃のまじじゃ！ さあ、もう一度わらわにメールアドレスを教えてくださいぬか!?」

「……………」

あれだけうるさく喋っていたトウアールがまさかの沈黙となる。

…そして、か細い棒読みの声でこう発した。

「——ワタシ、イマ、ケイタイ、モツテイマセン」

外国人だつてもう少しまともな発音で喋れるであろう言葉であった。ここでまさかの逃げの一手を放った。

…今、レッドが持っているスマホがトウアールの物であろうに、まさかの携帯持っていない発言をかました。勿論『あらそうなの、持っていないの』と通じる相手でもなく、信じられないという目をする。

「そんな馬鹿な！ あれほどいつも携帯を持ち歩いてきたあなたがか!? 幼い女の子たちにメールアドレスを配って、『あなたたちの写真をお姉さんに送って！』とお願ひしていたのは何じやつたのか!? それだけでは飽き足らず『これが私のパートナーなの！』と言って電光掲示板に自分の携帯の画像を載せて、かつての相棒との写真なんかを公衆の面前に見せびらかしていたのにか!? 皆トウアールに気に入られたらそのような行為に及ぶことができると必死になり、それが工

スカレートした挙句ついには…」

「んんんはああああああああああああああああんっふ!!」

どれだけあなたの喉に痰が詰まっているのですかと云わんばかりの強烈な咳払いをするトウアール。

「違います、違うんですよあれは！ あれは怪物に襲われた子たちのアフターケアをしていてですね！ 決してやましい気持ちがあった訳では…!」

トウアールはまるでイースナではなく総二に言い訳するかのよう
に、必死で弁明するが、仮にこの弁明が成功してもかつての相棒の件
はどうやっても弁明の余地がないと思うのだが。というか、トウア
ールに相棒がいたのか…。

「…今は、ただ戦う日々です。誰かのケアをするなど、おこがましいと
思っています…」

そしてまた演技モードに軌道修正するトウアール。何なのだろう、
これ。もうどうしようもなく軌道修正は不可能に等しいぞ。

「え、遠慮はしないで欲しいのじゃ！ 24時間いかなる時にメール
を貰おうと、3分以内に返信することを約束する！ 今度はわらわ
に、あなたの心のケアをさせてくれぬか!!」

そう断言するイースナの目は本気の日だった。たとえ熟睡してい
たとしてもトウアールからのメール受信専用の音声が届り響いた途
端に、すぐさま起きてやるといふ凄みを感じる目だった。

「…それが迷惑だって何で分かんないのかしらね、あんたは？」

「!?!」

どこからともなく聞こえてきた声。そして聞いたことのない声に
レッドは戸惑った。それはトウアルフォン越しで話しているであろ
うトウアールも、目の前にいるイースナも例外ではなかった。

「お、お主は…」

「久しぶりね、イースナ…いや、今はダークグラスパーって言った方が
いいのかしら？」

工場の中から現れたのは見事なまでの茶髪の美少女だった。背丈
は小さいものの、身に纏う空気にはどこか張りつめが感じられる。白

衣を着て、まっすぐとした視線は、そう、どこか真剣な時のトウアールに似ているとレッドは感じた。

※

ああ、何であたしここにいるんだろう。レイチエルは瞑想するかのように、少しだけ目を閉じて…そして目の前にいる黒い甲冑の少女を見る。

やらなきやならない。今までの会話状況から相当事態はカオス化しているが、何とか言いくるめて撤退まで追い込まなければ。

「お、お主…生きていたのか!? てつきりわらわは死んだとばかり…！」

「ええ、この通りぴんぴんしているわ。背は伸びなかったけど、頭は数段賢くなってね」

突如現れたレイチエルを豆鉄砲でもくらったような顔で見つめてくるテイルレッド。…まあ、向こうはあたし的一切知らないんだから仕方ないか。

「あ、あんだ…」

「…静かに」

スツとさりげなく近づくと、レッドの耳元でこう囁いた。

「…あんだの代わりに喋っている奴の知り合いって言えば分かる?」

「—」

「ここはあたしに合わせて、テイルレッド」

わずか数秒足らずの短いやりとりであったが、レイチエルは何事もなかったかのように会話を再開させる。親指でビツとテイルレッドを指さす。

「まあ、今は姿が変わったこいつのサポートをやらせてもらっているわ。幼女化したってこういうこいつのサポートで手いっぱいね、いろいろ忙しいのよ」

「そ、そうなのか…では一つ聞きたい！ トウアールが携帯を持っていないというのは…」

「事実よ」

「何じゃと!?!」

「にわかには信じられないかもしれないけどね」

渋い顔をするレイチエルはあまりにも馬鹿馬鹿し過ぎる演技だと頭の片隅で思うが、しつかりとやり遂げなければという気持ち一つでなんとか表情を維持する。何とか戦闘だけは避けられる展開まで持っていかなければ。

「そ…そうなのか。し、しかし…何故、持たないのじゃ!?! あれほど持ち歩いていたトウアールが…」

「それはね…あいつはストーカーなんてもう勘弁だつて言っているのよ。そのせいで携帯を持ちたがらなくてね」

「す、ストーカー!?! 一体誰が…」

「あんた以外にいると思うの!?! この現役犯罪者!」

ビシツと犯人を言い当てる名探偵並みに勢いがついた指さしでダークグラスパーを、いやイースナを糾弾する。世界を超えてまで追っかけてくるその姿はまさに最凶のストーカーと言える。

当然、イースナは狼狽するがネタは既になら上がつているのだ。もうこの場に居られない程に罵って、撤退させてやる。

「わ、わらわが犯罪者…ストーカーじゃと!?! それは違うぞ! わらわは愛するが故にあのような…」

「世界のどこに個人のメール送信だけで回線をパンクさせる人間がいるのよ!?! あんた酷い時は1時間に60通以上文面の違う長文メールを返信してくる人間メールサーバーと化していたじゃない!?!」

「そ、それは…!」

「愛って言葉をつければ何でも許されると思つたら大間違いよ!! あんたのせいで病む一步手前にまで追い込まれたことがあるんだから!!」

ああ、思い出すだけでも腹が立つてくる。思い出すのは自分がまだこっちの世界ではなく、元の世界で暮らしていたころの記憶だった。

イースナは当時、現役で活躍するツインテイルズ、トウアールのファンであった。最初の内はまだよかったのだが、幼さを見せ小さくて可愛いイースナをトウアールが気に入ってしまい、鼻屑するような

メールを送ってしまったのだ。そしてその瞬間…奴は弾けた。

幼きファンは凶悪なストーカーと化し、個人のメールアドレスだけでなく、トゥアールやレイチェルが所属する研究所にまでメールを送って来るようになったのだ。それは同じ種族である人間の方がエレミアンなんかよりもずっと怖いと感じた瞬間でもあった。

ここまで来ると、もう警察のお世話になってもおかしくないのだが、世界を守るヒーローであるトゥアールにストーカー被害があったという事は世間へのイメージダウンにもなりかねない為、何とか身内だけで処理しようということになった。その過程で白羽の矢が立ったのが当時、トゥアールのパートナーであり、オペレーター担当のレイチェルであった。

最初は真面目に対策を考えていたものの、あらゆる手でこれを回避するイースナに本気で腹が立った。懲りないイースナに遂にブチギレたレイチェルは、イースナが使っている携帯電話のメインコンピューターにハッキングして、ありとあらゆる情報とシステムをまとめて消去、クラッシュしてやったのだ。バックアップまで残らずに行ったそれは、奇しくも人生で初めてのハッキングとなった。

…だが、イースナが携帯電話を変えてまで同じ行為に及んできたとなるともうお手上げだった。

受信拒否にするとストーカーは何をしでかすか分からない。そう意見したトゥアールと共に対策を考え、最終的に受信時のメール振り分けで通販のダイレクトメールと同じフォルダにぶち込ませることで、メール自体を見ないことにするという事で一応の解決となったのだが…そこまでするまでに行き着くまでに奪われた時間を返せと声高に叫びたい。

「…とにかくあんたのやったことは世間では全部犯罪って認識されるのよ。世界が変わったからといって、性懲りもなく同じことを一度でもやったら今度こそあんたを国家権力の前につきだすわ…！ あんたの行為はこの国でもバッチリ犯罪なんだからね!!」

証拠もバッチリあるしね…と言いながら、実は何にも関係のないUSBメモリを目の前で印籠のように掲げる。だが後ろめたいという

自覚が少しはあるのか、イースナはギクツとしたような表情を浮かべた。それをレイチエルは見逃さなかった。

「まあ、痴漢やストーカー被害つてのは犯罪者の中ではかなり軽蔑されるらしいから、ぶち込まれた刑務所ではいじめやはぶられなんか起こるかもね。まあ、ぼっちのあんたにはお似合いの場所じゃない？」

『はい、2人組作つてー』の時に味わう時みたいに孤独で楽しく愉快的な獄中生活があんたを待っているわよ」

「そ、それは……」

トラウマを刺激され、ガクガクと震えるイースナ。よおし、いい感じに追い込んでいる。後はもう一押しだ。

「そ、それだけは……警察だけは勘弁をー」

「更に言うとな、トウアールが胸を失った原因の大半はあんたのせいでもあるんだからね……！ あんたがやってきた数々の行為でトウアールは病んで、精神面に異常を起こしたのよ！ そのせいであいつは亜空間に自慢の胸を持っていかれたのよ!!」

「!?」

「確かにトウアールの言っていることも原因の一つよ。でも、持っていかれた日のあいつのコンディションは最悪だった……あんたがやってきたストーカーのせいでね。病んだ結果、あいつはおっぱいを亜空間に持っていかれた……」

「どんな等価交換なんだろう？ しんみりと話すレイチエルは自分で自分をツツコミたくなる。

「本人はああ言っているけどそれは所詮、嘘で固めた建前！ あんたのせいなんだからね!! あの頃のトウアールは一番の信奉者^{ファン}であるあんた自身に殺されたのよ!!」

もう自分でも何を言っているのかさっぱり分からない。目に涙を浮かべながら、被害者面して叫んでる自分がとてもなく情けなくて馬鹿に思えてくる。ああ畜生、早く帰って頂戴、ストーカー。

「つまりね、あんたが何と言おうと、こいつの気持ちは一切変わらないわ。あんたの所に行こうだなんて微塵も思っていないし、あたしだって同じ気持ちよ。今のあんたにアルティメギルを抜けてくれって

言っても無駄なようにね…！」

「うっ…くう…い…」

マジ泣きしながら、マントを翻すイースナ。ああ畜生、泣きたいのはこっちだ。

「…今日は、今日はこの辺にする…この辺で引き上げる…！　だが、わらわは諦めはせぬぞ！　幾多の世界を超え、ようやく巡り会えたのじゃ…決して諦めはせぬ！」

極彩色の膜が、イースナの後ろに出現する。ああ、とつとと帰ってくれ！

「…それとこれだけは覚えていてほしい。わらわは、人間に仇なす存在としてアルティメギルの軍門に下った訳ではない。わらわは、わらわの守るものの為、戦いを選んだのじゃ！」

「…そう」

一番肝心な部分をさらつと流していく。もっと聞きたいのだが、残念ながらイースナは撤退の準備に入っている。

「それとトウアール！　わらわのメルアドはあれから一度も変更しておらぬ!!　メールはいつでも募集中じゃぞ!!!」

そんな悲しい捨て台詞を残して、イースナは光に包まれて消えていった。

※

「さて、と」

ようやく奴が去ったことで何か間違った充実感が胸を満たすが、まだ仕事は残っている。

目の前で？　マークを浮かべているテイルレッドに状況をなるべく早く伝えて逃げなければ。逃げたいところなのだが、今後の為にも小限の自己紹介をしておかなければ。早い所逃げないと、あいつはすぐさまこっちに転移してくるだろう。

それをコンマ数秒で考えると、早口でレッドへと迫った。

「始めまして、テイルレッド。あたしはレイチエル、いつもうちの相方

が世話をかけているわ」

「相方…?」

まだ? マークを浮かべるレッド。その姿は見事に可愛いと思うが、残念ながら見とれる時間はレイチェルには無い。

「…あんたと凄く似ている奴のパートナーって言えば分かる?」

「! まさかテイルファイヤーの!?!」

「ご名答。あいつのサポートをやっている者よ」

ついニヤリと笑みがこぼれ、レッドにこの状況で色々説明したい衝動に駆られるが、残念ながら時間が無い。腕に装着してあるテイルリストが警告音を発しているのだ。転送のラグから考えるに残り時間は約20秒、早く撤退の準備をしなければ…。

「と、とりあえず今日はこの辺にしときましようか。お互い、疲れているし何より時間が…」

「じゃ、じゃあ! あの人が誰なのかも知っているのか!? 俺、あの人に色々言いたいことがあるんだ!!」

「ちよ、ちよつと! 離して…!」

「嫌だ! 俺はあの人に、ツインテールにお礼を言わなくちやならないんだ!!」

レッドが強烈な力でレイチェルの白衣の襟をつかむせいで、その場から離れることが出来ない。転送しようにもこんなに近くにいるんじゃないレッドまで一緒に転送してしまう。

「そ、そのうち話すから今日は…」

「レイチェル!!」

その声に、レイチェルの足がピタリと止まった。嫌という程聞き慣れている声色に、反射的に足が止まってしまったのだ。

「…!」

その声の主は、ついさっき自分がやってきた方向から歩いてくる。息を切らして走るその姿、揺れる胸元、長い銀髪、そして…自分と同じ白衣を纏っている少女だった。

あつという間に近づいてきて…そして数メートル前で止まった。息を切らしながら、信じられないような表情でこちらを見てくる。

「…レイ、チエル」

そして自分の名前が呼ばれた。そしてレイチエルもまた、目の前にいるその人物の名を呟いた。

「トウアール…」

まるで互いの存在をしかと確かめるように、2人は互いを見つめ合う。

それはかつての相方同士、そして戦士のサポートに徹する、科学者同士の再会であった――。

第36話 再会とツインテール

「トウアール…」

レイチエルは自分の目の前にいる人物の前で鉄仮面を纏おうとした。無表情で、何も感じていない人形のようになりたかった。

顔を見られたならまだいい、ここにいと知られただけならまだいい。でも、今の自分の浮かべている表情と感情だけはどうしても知られたくはなかった。

「レイチエル…本当にレイチエルですよね…？」

「あ、う…」

その問いにレイチエルは何か声を発しようとしたがすぐに失敗した。口をぱくぱくと何度も喘がせるが、どうしても声が出ないのだ。目の前にいる人物、トウアールに何を言おうとしても、声を発することが出来ないでいた。

「？」

隣にいるレッドも不思議そうに両者を見る。

突然現れたトウアールにも驚いたが、その親しげな口調からレイチエルとは何らかの知り合いだということだけは何となくだが何うことが出来たようだった。

「なあトウアール、この子は…」

続きを言うか言わないかのその時、レッドがトウアールへと意識を向けたほんの一瞬の隙につき、レイチエルは纏っている白衣を脱ぎ捨てて、逃げた。

「あー！」

レッドが気付いて手を伸ばした時にはもう遅かった。レイチエルはレッドの手をすり抜け、遠くへと駆けだしていたのだ。

「逃げるんですか、レイチエル!？」

トウアールは叫んだが、レイチエルは聞く耳を持たずにあつという間に距離を離し、数十メートルの距離を取った。そしてレイチエルは腕に付けている腕時計、テイルリストの転送機能でこの場からの脱出を図ろうとするが…。

「!? どうして!? さっきまでは正常に…」

何故か先ほどまで正常だったテイリストがうんともすんともいわなくなっていた。狼狽するレイチエルをトゥアールは優しく論破する。

「転送で逃げようとしても無駄ですよ。つい先ほど、この辺一帯に転送妨害用のジャマーを仕掛けましたから」

「…あんた!」

「私の方が一枚上手でしたね。常に相手の先を見る…私が教えたこと、忘れちゃったみたいですね。でも、これでもう逃げられませんかよ、レイチエル」

トゥアールはまるで悪戯した生徒を叱る先生のような口調でレイチエルへと迫ると、今度こそ逃げられないようにしつかりと捕まえた。

「あなたには色々聞きたいことはありますが、それは後回しです。…本当に、本当にあなたが無事で良かった…!!」

絞り出したような声でそう言い放つと、トゥアールはレイチエルを抱きしめた。レイチエルも最初は抵抗しようとしていたが、やがて諦めたかのように大人しくなりそのままの体勢でいた。

「良かった…本当に…! 本当に…生きていて!!」

トゥアールはようやくの再会を噛みしめるかのようにレイチエルを抱きしめる。感無量というべきその行為にレイチエルはどうすればいいのか分からない顔をしていた。

それを傍観していたレッドもどうすればいいか分からないような顔であった。あんなトゥアールの顔を見るのは初めてだったからだ。いつもはおちやらけて変態な女科学者の顔はどこへいつてしまったのか、目の前では本気で再会を喜んでいる顔で友を抱きしめている光景が広がっている。

「夢じゃない…。私の、私の大切な親友が…私の胸の中にいる…」

「うん…そうね…」

「胸の…胸に…! え、えへへへ、うへへ、けけけけ…」

「…あの、ちよつと、一旦離してくれない?」

「いい髪です…相変わらずこの髪は…優しくて可愛くて…やはり若い子はツヤが違う！」

「ん！ んんー！」

もう顔が悪魔の笑顔ですらない、唯の笑顔の悪魔と化した痴女がそこにはいた。

「もがー!!」

「大丈夫です大丈夫ですよレイチェル!! あなたも感じていますよね、私の温もりを！ 私も感じています！ だからもつと感じて…私の全てを…！」

レイチェルの顔色がそろそろヤバそうな感じになっており、トゥアールの背中を全力でタップしているが、トゥアールはそれすらスキンシップなのだと感じているらしい。

だがー。

「オーラ……ピラーツ!!」

「えっ」

その行為は、トゥアールの足元から突然現れた青色の拘束用ビームにより強制終了された。

抱きしめられていたレイチェルはそのまま弾き飛ばされて地面へと落ち、抱きしめていたトゥアールは青色のビームで拘束される。

「こ、の…… あんたとうとう、直接手を……！」

「て、ててて、テイルブルー!?!」

「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!」

その姿はまさに神か悪魔か。ツインテールを逆立たせ、とんでもない形相で佇む戦士、テイルブルーが降臨した。

「あ、あああああなた何で…気絶していたはずじゃ…!?!」

「流石のあたしも偶然、幼女にふしだらな行為をする現行犯を視界に入ったら、寝てもいられなくてねえ……！」

言いたいことはそれだけかと目の前で拘束されている不審者の現行犯を睨むと、何気ない顔でオーラピラーの出力を上げるブルー。怪人を軽々と拘束できるそれを生身の人間に放つというそれはまさに拷問ともいえる行為であり、トゥアールの身体がメキメキと音を立て

るような勢いで拘束が強まった。

「おぎやああああああああああん!?!」

「あ、あんまりゲホツ…やり過ぎちゃダメよ…そいつ、一応は友達なんだから、ケホツ…」

「分かってるわ…殺す一歩手前で辞めるから大丈夫よ」

「前提がそもそも間違ってるかい?」

「うっぎやあああああああああ誰か止めてええええええええええええ!」

ブルーはムスツとした顔で腰に手を当て、拘束されているトゥアールを睨んでいるのを尻目に、レッドは何とか場に落ち着きを取り戻そうとした。

「…あー、トゥアール。一旦基地に戻って、あの眼鏡の子のことを詳しく教えてくれないか?」

そして、一旦言葉を止めたレッドの視線がレイチエルへと向かう。

「それに、君のことも。君はトゥアールの知り合いなんだろ? 聞きたいことが山ほどあるんだ」

「…分かっているわ」

「あ、あの…ブルー様? 私、そろそろ五体がバラバラになりそうなんですけれど、いつまでこのままなのでしょう?」

「いつそ、一度バラバラになってしまえばいいわ! 変質者にはいい薬よ!」

「に、二度目は 아닙니다…その薬は私を永眠に…ぐげえ…」

「お願いブルー、そいつだけは殺さないであげて。変態だけどいなくなったら色々困るから」

そのフォローはどこか哀愁にまみれており、胸で殺されかけたレイチエル自身もトゥアールが変態だと認めていることが皆にも分かっていた瞬間であった。

※

「まあ…まあまあまあまあ!」

秘密基地に帰投したレッド達を待っていたのは、コスプレ状態で椅子にふんぞり返っている母、未春の姿だった。

「随分可愛い子が来たわねー！ 宜しくね、私はこの部隊を率いる隊長にして大幹部の未春よー！」

「は、はあ…」

入って来るなり高いテンションでレイチエルに握手をしてきた未春に、リアクションに困った反応をするレイチエルはそっとレッドに耳打ちをする。

「ねえ、あのおばさん誰？ 何で中ボスみたいな格好してるの？」

「俺の母さん」

「…ごめんさい、変なこと言って」

レイチエルの何か同情するかのような視線の先には悪の女幹部衣装の母親がアニメ好きなイエローと共にきやつきやはしゃいでいる光景があった。

「素敵なお召し物ですわー！」

「でっしょー？」

「……………」

レイチエルはそんな未春を見ながら軽く引いていた。あれはないわ、みたいな視線をしていた。

そんな当たり前の行動はレッドを感激させた。コスプレ姿の母親を見られて、しかも会話しているという恐ろしい行動に初めてまともなりアクションをしてくれる人がいた。それだけで嬉しくなってしまう。

「心中、お察しするわ」

「ありがとう…！そんなこと言ってくれるのは君が初めてだ!!」

レイチエルはレッドの肩を叩きながら、慰めている合間にも話は進み、互いの自己紹介に映る。

「あ、あらためて、よろしくお願いしますわ。私、テイルイエローと申しまして、本名は…」

この場に見知らぬ幼女が一人紛れ込んでいることで本名を名乗るか否かで迷っているイエローにレイチエルは助け舟を出した。

「あー、いいわ。今日の所は本名を出さないでくれない?」

「え、でも…」

「ファイヤーの正体を明かしていないのに、あなた達の正体を私が知るのはフェアじゃないもの。あなた達ツインテイルズの正体についてはひとまず保留にしてもらえないかしら?」

「…な、なら」

「脱衣も禁止」

「ああん、寸止めだなんて…」

「どうしてそこでエクスタシーを感じちゃうの?」

何だか物足りない感じのイエローだが、ここは我慢して貰わなければ。この場で脱がれてはたまったもんじやない。

「うへへ、目の前にレイチエルがうへへ」

「ちよつと黙っててよ、変態」

「はい、黙ります! ああ、このやり取りも久しぶり。幼女に罵つてもらう私、ぐへへ」

「自重してくれ、トゥアール…」

口元に涎を垂らしながら至福の時を味わっているトゥアールをレイチエルは無視することに決めた。構っていたら何時までたつても話が進まない。

「あー、もう知っている奴もいるかもしれないけれど、私の名前はレイチエル。ええと…」

チラリとトゥアールを一瞥すると、不服そうにこう言った。

「テイルファイヤーのマネージャーをやらせてもらっているわ」

「え!?」

ブルーとイエローが目を剥いた。まあ当然のリアクションね、と思しながらレイチエルは話を進める。

「分かりやすく言うと、あっちではあいつの…目の前で涎を垂らしている奴のポジションを担当しているわ」

「嘘よー」

「事実なのよ」

信じられないような目で糾弾するブルーに返す刀の如く切り返す

レイチエル。

「で、ではあなたが私たちに通信を…」

「そういうことね。随分早い再会になっちゃったわね」

そつと笑いながら手を握ってくるレイチエルに、どうリアクションしていいか分からない顔をする両者。

「で、では！ あなたが私の…お姉さま!?!」

「はあ!?!」

とここで、突然イエローが立ち上がったと思うと、大げさに手を握り返してきた。そんな光景にレイチエルはどこか戸惑った表情を見せる。

「お…お姉さまって、絶対あんたの方が年上でしょ？ それにお姉さま呼ばわりするんだったら、あたしよりファイヤーの方が…」

「いえ、いえいえ！ あなたのあの言葉のおかげで私は全てをさらけ出すことに成功しましたわ！ おかげで私が思い描いていたスタイルや必殺技が完成いたしました！」

イエローの本来の戦闘スタイルは後方支援の火力型なのだが、先ほど見せたスタイルは前線にガンガン突っ込んでいく上に、せつかくの武装をどんどん脱いでいくという真逆のスタイルなのだが。

「ああ、そうなの…」

「ですから尊敬の念を込めて、お姉さまと呼ばせてください!!」
「……………はあ」

もの凄く面倒そうな目でイエローを見始めるレイチエルはどうすればいいのか分からなかったが、ここで未春が会話へと加わった。

「いや〜でも、凄かったわねえ。おばさん、何だか感激しちゃった！ 射撃型なのに格闘戦もこなせるだなんて！ それもこれも全部レイチエルちゃんのアドバイスのおかげなんですよ?」

「そうですね！ 今の私がいるのは、あなたが、いえレイチエルお姉さまがいるからなのですわ！ 『全てをさらけ出せ、ありのままの私を解放しろ』…お姉さまはこのことを言っていたのですよね!!」

「よしてよそんな」

「いえ！ それもこれも全部お姉さまのおかげなんです！ ああ、こ

の胸の解放感は何なのかしら——！」

何て言っているのかレイチエルには分からなかったが、一人で盛り上がって一人で落ち着いたイエローは一旦落ち着きを見せたように自分の世界へと入り込んでしまった。

すると今度はブルーが詰め寄って来る番だった。

「あ、あの…あんた本当に…？」

「何度も言っているでしょ？ 本当に本当なのよ。あなたに通信を入れたのもあたしよ…信じられない？」

「だって、あいつのポジションなのよ!? なんで変態じゃないの!? しかもこんな子供が…」

「初対面の人間にこんなに喧嘩売られたのは初めてよ、ブルー」

青筋を浮かべながら、わなわな震えるレイチエルは憎々しげにブルーを見たが、ここでトウアールからの助け舟がやってきた。

「見た目で騙されてはいけませんよ！ 確かにレイチエルは小さくて可愛くて幼女ですけど、頭脳は超天才なんですから!! 飛び級で大学を卒業している上に一時は私とパートナーを組んでいた時期だつてあるんですから!!」

「飛び級にパートナー!? あいつと!」

「わざわざ分かりやすい説明をありがとう、トウアール」

「ふふん、もつと褒めて下さい！」

何であんたが得意げになっているんだとツツコみたくなったが、ここは我慢した。

「でも、ねえ…どう見たって小学生くらいなあんたが？」

だがブルーはそれでも信じられないような目でレイチエルを見てくる。…正直言うと、通信の際に彼女に顔を明かさなかったのもこれが該当する。

いきなり通信をかけてきた人物が幼女だとばれたら、説得するのに余計時間がかかっていた可能性がもの凄く高い。その結果、ファイヤーがやられていた可能性もあったため、あえてレイチエルは顔出しをしないで、ブルーに通信をかけたのだ。

「…まあ、確かに信じろつてのが難しい話よね…こんな子供が戦って

いるだなんてね…。でもあなたには感謝しているわ。うちのファイヤーのピンチに駆け付けてくれて、共に戦ってくれて。…ありがとう」

「えっ…？」

するとレイチエルが、ブルーに向かって頭を下げ、礼をした。ブルーもこれには驚いて言葉を失ってしまった。

「その…あなたが頑張ってくれたから…あいつに勝てたし、皆も守ることが出来た。だから…本当に、本当にありがとうございます」

「う…」

最初は言葉を失った。だが、目の前の少女が自分に向かって丁寧なお辞儀をしていることにより、ようやく気付いたのか、焦ったように声を出した。

「〜頭上げて！ 女がそんな簡単に頭は下げるもんじゃないわ!!」

「そうですねレイチエル！ そんな毛皮と棍棒が似合いそうな蛮族に頭を下げる必要はありませんよ！」

「あー何だか寒くなってきたなー、あ、ここに毛皮があったわ！

羽ー織ろつと!!」

「毛皮というかそれは私の皮でぎゃああああああああああああああああああ!!」

人骨という名のマネキンにかけられた毛皮を、強引に剥ぎ取って羽織ろうとするブルーと全力で悲鳴をあげるトゥアール。それを見て、焦るレッドにそんな光景を見慣れてしまったのか微笑ましそうに見えるイエローと未春。

そんなツインテイルズたちの日常に、いつもはここにいないメンバーであるレイチエルはポツリと呟いた。

「…あんたがいる所はいつもいつも、騒がしくていいわねえ…」

※

「で、どこから話せばいいんでしょうかね。正直、私も色々混乱しているの…」

「まったくよね。あいつ、地獄の底まで追いかけてきそうで怖いわ。あんたも想像していかなかったでしょ？」

「ええ。あの年頃の女の子って少し見ない間にいきなり成長しやがりますからね。その点レイチエルは以前と変わりなく幼く胸もちっばいで…」

「くたばれこの変態」

「ありがとうございます、レイチエル」

初っ端から流れるような会話がモニタールームを支配したが、トゥアールは満面の笑みを浮かべながら、席に着いた。

先ほどのあれで命の危機を感じたのか、ブルーから一番離れた席に移ったトゥアールは慎重に言葉を選んでいようような様子であった。ちなみにトゥアールは「私のここ空いてますよ」と膝を叩いてきたが、レイチエルはこれを間髪入れずに断固拒否した。だがトゥアールは断られたことですらご褒美に感じているらしく満足そうな顔をしていたので、もう放っておくことにした。

レイチエルは一番無難そうなレッドとブルーの間に入って、会話へと入る。

モニターに先ほどの様子を捉えた静止画を映し出しながら、会話が始まった。

「彼女の名前はイースナ……私が元いた世界の幼女じゅうにんでした」

トゥアールが頭に浮かべた言葉とセリフとして発したルビが何一つ一致していない。

「あれは私がエレメリアンに狙われている所を助けたのがそもそもものきっかけでして…その時に知り合ったんですが…」

「？ ええと、その話ですと、トゥアールさんもツインテイルズだったのですか？ でも以前…」

イエローは不思議そうな顔をしながらトゥアールを見た。イエローが言いたいのは以前、この基地に来た時にトゥアールがテイルファイヤーなのではないかという疑いがあったのだが、残念ながら違うとの回答が出ている。それなのにどうということなのか？ ということなのだろう。

「私は別の世界でテイルギアを着けて戦っていたんです。今は引退して、レッドたちに力を託したのですが…」

「何故、引退を？」

質問を重ねるイエローに少しだけ痛そうな顔をするトゥアール。それでイエローは何か聞いてはいけないことを聞いてしまったと察した。

だがツインテイルズにいる以上、話しておかなければならないとレッドは思い、立ち上がる。

「…イエローにはまだ話していない、トゥアールの秘密があるんだ。でも、イエローも正式なツインテイルズになったんだ。トゥアール、もう話してもいいんじゃないのか？」

「…もし、あんたが嫌ならば、あたしが説明してもいいわよ。聞きたくなかったらその間だけ出てつてもいいし」

「いえ、大丈夫です。全て私が説明します…。でも2人とも、話し終えるまで…握っていてくれませんか」

不安そうな顔をするトゥアールはレッドとレイチエルにそつと、手ではなく胸を突きだしてきた。

「オツケー、そのくらいお安い御用よ」

「ひいっ!？」

この場にブルーがいるのに握ってくれだなんて迂闊な発言にも程があった。おやすく御用になりそうな力でトゥアールの胸を握りしめながら、トゥアールの身の上話が始まった。

自分の世界で起こったこと、自分が最後の決戦で負け、自分の世界が侵略されたことや自分の属性力を犠牲にしてそれをレッドのギアに組み込んだこと、以前使っていたギアをブルーへと託したこと。隠してきたことを全て暴露した。

時折、悲鳴がBGMとSEとして彩ったその解説は圧巻の一言であり、必要以上に哀切極まる語りへとなってしまった。…別の意味でトゥアールは哀切極まっているが。そしてレイチエルもまた、渋い顔でそれらをすべて聞いていた。

「…つまり、トゥアールさんは次世代に意志を託してくれた、先代の

ヒーローなのですね!! 引き継ぎイベント、しかと承りましたわ!!」
ちよつとずれた感じではあるが、イエローにもトゥアールの事情が
しつかりと理解できたらしい。あなたの魂は私たちが継ぐと云わん
ばかりに張り切っているイエローにトゥアールはどこか嬉しそうに
微笑む。

「わ、私の魂を受け継いで下さったのなら、無力な私に変わって、戦っ
ていただけませんか…超絶貧乳だから胸を握り絞められるのがどれ
だけ痛いのかわかっていないんですよこのゴリラは…」

「10割方あんただけの問題だからあんただけで解決して。それはあ
たしたちの管轄外よ」

「ああん、レイチエルはいけずです…」

「黙っていてこの馬鹿」

トゥアールの身の上話が済んだところで、イースナについての説明
は再開される。

「さっきの話から分かるように、レッドのギアにはトゥアールから摘
出されたツインテール属性が組み込まれているわ。…多分、イースナ
はこいつのツインテール属性の反応だけを頼りに、この世界にやって
きたんでしょうね。そのせいでレッドをこいつと勘違いしているの
よ」

「……つまりは、この眼鏡女はアルティメギルに取り入ったってこと
?」

遂に名前ですら呼ばれなくなったトゥアールを指さしながら話す
レイチエルに、腕組みしながらブルーが聞き返した。過去云々より今
の立場の方が重要だと言いたげそうに眉間にしわを寄せて。

「私との会話から分かることは、あの子は洗脳されたり、騙されて利用
されている訳ではないということですよ。つまり、イースナは自らの意
志でアルティメギルに与しているということなんです」

「認めたくないけど…あいつのうろたえ具合から、洗脳という線は間
違いなく消えるわ」

先ほどのレイチエルのイースナに対する精神攻撃の録画映像が再
生される。妙に現実味が帯びたその攻撃は見ているこつちが痛くな

る内容だ。

自分の意志で同胞を裏切り、共存できない怪人がうごめく敵組織に身を置くイースナ。そのショックは大きく、その意味することを全員が噛みしめていた。

「で、どうして敵がその…グラスギア？なんて持っているのよこの眼鏡は。あれ、テイルギアのコピーなんでしょ？」

「イースナは妙な能力の眼鏡で私のテイルギアを解析したそうです。それでも完全にはコピーできなかつたそうですが」

眼鏡にいつの間にか不思議な力が宿っていたとイースナは言っていたし、それのおかげでギアのデータを読み取るといった芸当を成しえることが出来たのだろう。

「大まかなギアの情報さえ読み取ってしまえば後はあつちのものよ。属性力の変換技術はアルティメギルの方が何倍も研究が進んでいるから、例え別の属性力でもその調整は容易でしょうしね。問題は…」

「人間が仲間として受け入れられている、ということですよね」

「その通りよ」

イエローとレイチエルの言葉にレッドが続いた。

「あいつら、共存は出来ないって言っていたのに、どうして人間を受け入れるんだ？ 例えあの子が強力な属性力を持っているにしたって…」

「戦闘力を買って引き入れられたとか？」

「それだけじゃあ、理由としては不十分過ぎるわ。もっと別の…奴らと手を組んでいる何かがあるんでしょうね」

あの時、イースナは後ろで気絶しているイエローには目もくれずにレッドだけを構っていた。もし、イースナがアルティメギルに取り入っているのなら、気絶して戦えないイエローやブルーをさらつてもおかしくはない。それなのにそんな行動は一切取らずにしている。トウアールのことをいくら尊敬しているからといって、何の手土産も持たないで退却。

そんな彼女が首領直属のポジションにいるだなんて、不自然にもほどがある。

彼女が去り際に言っていた『わらわは、わらわの守るものの為、戦いを選んだ』。この言葉が何か関係しているのだろう。

「何にせよ、トウアールの元恋人なんでしょ？ だったら適当に色気振りまけば、また戻ってくるんじゃない？」

「滅多な事言わないでください！ 私はまだまつさらの新品なのに、変な風に思われたらどうするんですか!! とにかく！ イースナとは本当に何もありませんでした!!」

「微塵も思っていないから安心して、こいつ」

「せめて名前だけは読んでくださいよレイチエル…」

そんないつもの様子なブルーとトウアールとは対照的に、レッドは不安だった。

人間と戦う。しかも相手は怪物なんかじゃなく、ツインテールをしている女の子だ。人間と命がけの争いをしなくちゃいけないかもしれない。怪人と戦う事すら抵抗があるのに、人間とだなんて…。

「燃えますわー！」

「はっ。」

するとイエローは鼻息を荒くしながら夢見る乙女のように手を組んで、勢いよく立ち上がった。

「燃えますわー！黒色で同じ力を持った敵の出現！ しかもその正体はかつてトウアールさんを慕っていた少女…避けられぬ運命！ この燃えるシチュエーションを待っていたんです!!」

真剣に悩んでいるレッドとは比べ物にならないくらいにらんらんと輝いた瞳で語るイエロー。

「あ、あのくそんな気楽な問題じゃないと思うんだけどなこれは…だって人間と戦うんだぜ？」

「？ 特撮やアニメではこういった人間同士の争いはお約束ではありませんか！」

そんな後で仲間になるライバルキャラとの戦いみたいな、軽いノリで言われても困るだけだった。

困ったレッドは助けを求めてブルーの方を見たが、しかし当のブルー本人もまた、これに賛同するように、拳をパキパキと鳴らしてい

た。

「まあ人間相手だし、エレメリアンとは違って爆散させちやまずいけど、要はトゥアールを殴るより強めにブン殴ればいいんでしょ？」

何て頼もしくて、何て恐ろしい発言をするんだらうこの子は。

ブルーの変身者である津辺愛香は誰彼構わず見境なしに暴力は振るわない、家族思いで友達思いの高校生だ。

だが、一度敵と認識した者には情け容赦一切かけないのは承知の事実であり、それは我々の前で何度も見せつけられた。…こう言っただけなんだが、限りなく野生動物の習性に近く感じるのは気のせいなのだろうか？

「ありがとうございますブルーにイエロー。きっとイースナも、心のどこかでは自分を倒してほしいと思っただけです。ですから手加減せずに、余計な事を言われる前に全力ではっ倒して足腰立たなくしてあげてください」

「分かったわ」

「分かりましたわ」

ああ畜生、これでいいのかツインテイルズ。痴女に蛮族に脱ぎ魔。こんな正義の味方が果たして存在しているのだろうか…？

※

イースナの話題が終わった後、次なる話題はレイチエルのことだった。

「解説は私が担当を…」

「あることないこと言っただけで誤解されたら面倒だから、あたしが全部話すわ」

トゥアールの口すら挟む隙を与えずにレイチエルは自らの身の上話を始めた。…とは言っても、必要最小限のことだけなのだが。

「まあ…こいつが昔、世界の平和を守っていたのは周知の事実よね？」
「あたしは未だに信じられないんだけどね。こいつがヒーローだったなんて」

「奇遇ね、付き合いが長いあたしですら、未だに疑う時があるのよね」
話はトウアールが先代のツインテイルズであり、別世界で世界の平和を守っていた頃に遡る。

「あたしはまあ…人より頭の出来が良くてね。だから学年が上がる感覚で、トントン拍子に飛び級しちゃって…気がつけば大学を卒業していたのよ」

レイチエルは同年代の子供が小学校中学年辺りに差しかかった頃には、既に一般社会に出て働いていた。大学の卒業過程を終えてしまったレイチエルはその身一つである研究所へと進路を定め、そこで住み込みで働くことに決めたのだ。そこは近年発見された新たなエネルギーである属性力に関する研究所であり、ここでトウアールとの出会いを果たすことになったのだ。

「そこで…今のツインテイルズみたいな関係が始まったのよ」

トウアールは常人を超えたツインテール属性を持っており、テイルギアを纏う資格があった。そして現れた侵略者アルティメギル。今のツインテイルズのようにエレミアンとの戦いの幕が開けたのだ。そうしていく内に、トウアールの周りには戦闘に関する環境が着々と整えられていき、サポートする専属の研究員などが現れ始める。

その一人であり、オペレータ担当であったのがレイチエルであった。

「つまりは、レイチエルはあなたたちの大先輩ってことになるんです！」

「お姉さまにそんな過去が…」

「…あんた本当に面倒くさいわね、いちいちお姉さまだなんて」

「そんなこと言わないでください、レイチエルお姉さま」

「黙っててよ、もう」

イエローが尊敬のまなざしで見ているのを、うっとおしい感じで耐えるレイチエル。

「それであたしは、今のあいつみたいなお仕事をしていますね。オペレーターであいつの戦闘をサポートしていたのよ」

元々、並外れた頭脳の持ち主であるレイチエルと変態だけど天才で

あるトウアールはすぐにパートナーとしても友人としても打ち解けることになった。

「じゃあ…何でこいつとは一緒にこっちにこなかったの？ やっぱり最後の戦いが原因ではぐれちゃったのかしら？」

「違うわ。それよりも前に、あたしが、こいつの元を離れたからよ」「どうして、なんだ？」

するとレッドは真剣な声色でレイチエルを見た。

「君はトウアールとパートナーだったんだらう？ どうしてそんな中途半端に…」

「……………」

レイチエルは思わず、顔を伏せた。レッドの真摯な視線が、これでもかと突き刺さってくるのに耐えられなかったからだ。

「ふ、ふふ…」

わざとおちやらかした風を装って、顔を上げる。表情に出てしまっているかもしれないけど、この際どうでもよかった。

「何てことはないわ……ただ、変態のコイツに付き合つてられなくなっただけよ。あたしの洗濯カゴから脱いだパンツ盗んだり、真つ暗な部屋の中で全裸で正座して待っているあいつとはね」

「……………」

全員の冷たい視線が一齐にトウアールへと向かった。当然の如く、トウアールは反論する。

「いつ、一回だけ！一回だけなんですよあれは！ 若さ故の過ちといますかあれはしようがなげほえ!？」

言い終わるか終わらないかの内にブルーの右ストレートがトウアールを捉えた。

「一回でも何回でも駄目なものは駄目よ！ あんた間違いなく犯罪者！ もう嫌よ、警察呼ぶわ!!」

「違うんです違うんですよ待って下さい落ち着いて下さい！ あれは本当に時効が…」

どっちにしろ、トウアールが前科持ちの変態であり、こっちの世界でもあっちの世界でもやることなすことは何にも変わらなかったら

しい。

「何となくだけど、あたしが逃げた理由、分かった？」

「二十分に分かった（分かりましたわ）」

「違うんですよレイチエル。あれは、あれはねえ…」

「どうやら皆、納得してくれたようだ。勿論、それも理由の一つではあるのだが、本心はまだ別の所にある。…でも、それはここでは絶対に言えない。」

「と、ところでさ…君は今、テイルファイヤーのマネージャーをやっているんだろ？」

「そうよ」

レッドの露骨な話題逸らしではあったが、レイチエルはありがたくこれに乗った。するとレッドは物凄い勢いで詰め取って来て、レイチエルの肩を掴んだ。

「じゃあ！ 君はファイヤーが誰なのかも知っているんだよな！」

「…ええ、知っているわ」

ここで嘘を言ったら余計に話を拗らせることになる。咄嗟の判断でレイチエルは正直にそう答えた。

「じゃあ！ じゃあ…それを教えてくれないか!? 俺はあの人に！」

「一回でいいんだ！ お礼をしつかりと言いたいんだ!!」

「それは無理な話よ」

「どうして?!」

「あいつ自身がそう望んでいるからよ」

「…っ！」

今度はレイチエルが詰め寄る番だった。真剣な顔でレッドを睨む。

「あいつは自分の正体を自分の意志で明かしたいと言っていたわ。時間がかかるかもしれないけれど心の準備が整うまで待つてくれ…だから、あたしはあいつの意見を尊重する。あいつがいつまで言うまで、あたしは絶対に正体はばらさない。例えあんたが自分の正体をばらしたとしても、あたしは絶対に言わないわ！」

これはあいつのパートナーとしての役割よ、と言い終わるとレッドの手をどけて、レイチエルは出口へと向かって歩き始める。

「それと…あんまりあいつを過度な期待で見ないであげて」

「え？」

ふとレイチェルは立ち止まり、何にもないような風にわざとそう言った。

「あんたから見れば、テイルファイヤーは何でもできるヒーローかもしれない。いつでも強くて、正しくて…でもねあいつはあんたと同じ人間なの。ミスだってしているし、アンタの知らない所で失敗だっている。怖いことだってあるし苦手なことだってある…変な期待や崇拜は逆にあいつを困らせるだけよ」

レイチェルはそれだけを言うと、歩みを再会させた。

「…あたしが言いたいのはそれだけ。今後もちよくちよく遊びに来るわ、トゥアール。いつかファイヤーも連れてくるから楽しみに待っていてね」

「あら、もう帰っちゃうの？ ご飯くらい食べていっても…」

「遠慮しておきます、レッドのお母さん」

「泊まっていかないんですかレイチェル!？」

「いい加減にしないとその口ねじ切るわよ」

相変わらずマイペースな未春にレイチェルは丁重にお断りする。トゥアールはいわずもがなだ。

ひらひらと手を振ると、レイチェルはお邪魔しましたとだけ言い、そのままモニタールームを出ようとするが、ここでグンツと腕を引っ張られる感覚がし、急ブレーキをかけられる。

「何？」

「待って、レイチェルちゃん。あいつに会ったら…あたしがこう言っていたって話して。…『無茶だけは絶対にしないでって』」

「…分かったわ、ブルー。今日は一緒に戦ってくれて、ありがとうね」

ニコリとブルーに笑いかけると、レイチェルはテイルリストで転送のコマンドを選択し、その場から消えた。

※

「ただいま」

貰った合鍵を使って鍵を開け、家へと戻ったレイチエルが最初に見たのは、テーブルに突っ伏して寝息を立てている光太郎の姿だった。きつと自分が帰ってくるのをずっと待っている内に、寝てしまったのだろう。テーブルには食器や箸が置かれており、レイチエルがいつ帰って来ても大丈夫なように夕食が食べれるようにしていたらしい。つい数時間前まで激闘があつて休ませるために返したのに、帰って来るまで待っているだなんて…。

「…全く、あんたはお人好しで馬鹿なんだから」

呆れたように笑うと、レイチエルは上から毛布を掛けて、そのまま寝かすことにした。

そんな光太郎はどこか満足そうな顔をしながら、寝息を立てていた。

そんな光景を見ながら、自分が帰ってこれる場所があるということのありがたみをひしひしと噛みしめていた。ここに来るまではあちこちを転々としていたからこそ、余計にそのありがたみが分かった気がする。

誰かが帰りを待っていてくれる…何だか胸の中が暖かくなっていく感覚がした。

「…おやすみなさい、光太郎」

そう言いながら、毛布を羽織ってあげたレイチエルは昔こんなことトウアールにもしたような気がするかもと思いつつ、自分も床につくことにした。

※

そして残されたレッドとブルー…いや、変身を解除した今は正確には総二と呼ぶ方が正しいだろう。2人は会議がお開きになってもそのままホールに残っていた。

「なあ愛香…ファイヤーに会ったのならさ、どんな人が変身しているかぐらいは分かるか？ 俺みたいにツインテールの気配を探るとか

で…」

「…あたしだって分かんないものは分かんないわよ。…というか、そんなこと出来るの、ソーじだけよ」

正直な所、その正体は愛香だって知りたい。いつも助けしてくれるのはありがたいけれど、一向に正体を明かさないうファイヤーのことが心配なのだ。

いつも、いつも馬鹿の一つ覚えのように突撃しては殴られて、吹き飛ばされて…。今日のリヴァイアギルデイの時だって、無茶ばかりして…。

「女として、やっぱり心配よ。攻撃を当てる為にわざと顔面パンチを受けたりとかして…」

「うっへえ…」

流石の総二も痛そうな顔をする。

「…多分、あの子は何の武術経験も無いんでしょね。だからがむしやらに突き進むしか戦法が無いのよ」

「何とかしなきゃ、マズイよなあ…」

武術経験のある総二や愛香はその危険性は嫌という程知っている。いくらギアで今日強化されているとはいっても、戦っているのは人間。その全てのダメージを受けながら戦うファイヤーのスタイルは豪快に見えるが、危なっかしいことこの上ない。

総二もファイヤーをどこか頼りにしている一方で、そういった無茶をすることを心配しているのだ。

「…何となくだけど、レイチェルちゃんが言っていたこと、分かる気がするわ」

「え？」

「その…ソーじとファイヤーって凄く似ているでしょ？ まるで鏡写しみたい…」

ある時は姉妹。ある時は親子。またある時は未来から来た成長したレッド自身…テイルファイヤーの正体には色々な説がある。

だが、愛香はその3番目の説である『未来の総二本人説』を真つ向から否定できる。

理由は2つある。1つは、総二ほど…と言っているのか、ツインテールへの愛を叫ばない。

普段はそれを隠しているのかどうか分からないが…ここ一番という時にしかツインテールのことは喋らない。それに総二とは違って、どこか恥ずかしげ…というのか、今日の叫びも、ほんの僅かだが迷いが見えるような感じだった。普段から総二の惜しみないツインテールへの愛の叫びをすべて聞いている愛香だからこそ、分かったことだった。

どこへいようとツインテール一筋馬鹿の総二とはまず、そこが違う。

2つ目は…。

「多分…なんだけど、あの子は、自分がツインテイルズだってことにまだ迷いがあるのかも」

「ええっ?」

総二が信じられないといった顔をする。

「あたしだって詳しいことは分かんないわ。でも…ファイヤーからは何か本心を封じ込めているような感じがするのよ」

ギアを十分に扱えるほどの属性力をファイヤーは持っている。けれど、今日間近で彼女を見た感想は、『もつと勢いよく動けるのでは?』ということだ。

今日だって勢いはあったものの、ワイバーンギルデイ戦で見たようなどこか吹っ切れたような勢いではなかったし、共に戦っていた時に感じたあの不思議な感覚の中に迷いや戸惑いといった感情が混じっているのに気付いてしまった。

『本心を封じ込めている何か』という存在が総二とファイヤーとの決定的な違いがあるのだ。

「確かにソーじとファイヤーは凄く似ている。…けど、違うところは違うし、迷いや戸惑いだってある。同じように見えても、やっぱり他人なのよ」

もしかしたらだけど、ファイヤーはその迷いを吹き飛ばす為にあんな戦い方をしているのかもしれない。

「…だからね、あいつがまた無茶をしたら、今度はきつく言ってるわ。このまま放っておいたらとんでもないことになりそうだもん」

第37話 処刑人とツインテール

「なあレイチエル。昨日、何していたんだ？」

「…ん、少しね」

「それじゃ分かんねえよ。俺を無理矢理帰した後で何かあったんだろ？」

次の日、馬鹿みたいに早く起きた光太郎はレイチエルにそう聞いてみたが、当の彼女は口を濁しただけだった。

いない間に何かあったかと聞いているだけなのにその返答はどこかおかしいと思った俺は、レイチエルに食い下がった。最初は何のことかとしらばっくれていたレイチエルであったが、しつこく食らいついている光太郎に遂に折れ、話をすることにした。

「昨日、あの場には新たな敵が現れたの」

「…！」

話はこうだった。俺がレイチエルに無理矢理帰された後、あの場にはダークグラスパーなる敵が現れたそうだ。その姿はまぎれもなく人間。テイルギアを模した鎧、グラスギアなるものを纏って、レッドの前へと現れた。

幸いにもレイチエルの介入もあって、戦闘には発展せずに、宣戦布告だけで済んだそうだが、その知らせは俺を大いに落ち込ませた。

レイチエルのことが敵に知られたという事もあったが、それよりもショックな出来事だった。

「人間がアルティメギルに…」

「ええ。本人はアルティメギルに屈した訳じゃなく、自分の目的の為にあくまでもいるに過ぎないって言うていたけどね」

「でもよー！」

「戦いづらいつて？」

「…そりゃあ、まあ…な」

レイチエルが見せてくれた静止画を見ながら唸る。写真に写っているのは見事なツインテールと黒色の眼鏡を光らせる少女。グラスギアも黒色ながらも輝きを放っており、そこからは心の輝きが見て取

れる。

「二難去ってまた一難か…」

正直言って、かなりやりづらい。怪人相手ならまだ腹は括れる。だが人間相手となると話は別だ。俺は女の子を殴るところか叩く、あるいは小突くことすらためらうというのに…。

聞くところによれば、このダークグラスパーという戦士はレイチエルがかつていた世界の住人で、しかもレイチエルの知り合いだということではないか。ますます悩みは増えるばかりだ。

やっと強敵のリヴァイアギルデイを倒し、ブルーと少しだけ仲が近づけたかと思えば、もう次の課題が待ち受けていた。しかも今までと違って今度の課題は大きく、難しい。いや、なによりも苦しい。

「気持ちにはわかるけど…そうも言ってられないのよ。こいつが来たってことは、あっち側も更に策を練り始めると思うし」

「マジかよ」

「あたしも面倒な女と知り合いになっちゃったもんよ…」

「はあ…」

げっそりしても腹は減る。俺たちは茶碗に盛ったご飯を口に入れないながら、同じタイミングで落ち込んだ。

気分転換にテレビをつけてみたが、どうでもよかった。

会長が買っていた完全可動のティルファイヤーフィギュアの初回生産分がオークションで定価の数十倍の値段で取引されているとか、近々イエローの物も発売されるとかブルーのフィギュアだけが在庫が多いとかが聞こえてきたが、どうでもよかった。

「ああ…それと、レッド達にも会ってきたわ。あいつらのアジトも見てきたわよ」

「ぶうー」

そしてレイチエルがさりげなく言った一言に俺は驚き、食後のお茶を全部テーブルへとこぼしてしまった。『とりあえずビール』みたいなノリでとんでもない事言いやがった。

俺がいない間にレッドに会っただけでなく、アジトまで見てきたとは…。

「安心して、あんたのことは何も喋ってないし、あたしもあの子たちの正体も何も分かっていないわ」

「だからってなあ……！」

「あたしはレッドたちのバックにいる奴に接触しただけよ。特に正体に繋がることは喋らなかつたし、聞かなかつたわ」

レイチエルがあそこに来た目的はあくまでも俺を家へと突っ返すのとダークグラスパーの撤退、そしてひと月前くらいに話していたレッドたちにブレスを託した人物との接触だけであつたらしい。ここで正体を知ることが互いにフェアじゃないと判断したらしい。

「でき、どうだったのよ？ ……やっぱり、心当たりがある奴だったのか？」

レイチエルはこくりと無言で頷いた。

「やっぱりあたしの知り合いだった。あいつ……生きていたのよ」

「……よかつたじゃねえか。その人生きていて」

「うん」

そう言うレイチエルの顔は複雑そうだったけど、どこか嬉しそう。やっぱり世界を滅ぼされた同じ境遇の人間が生きていたというだけでその嬉しきは言葉で表すことが出来ない程なんだろう。俺だって今通っている学校に俺と同じような境遇の生徒がいたら凄く嬉しいし、それと同じようなもんだ。

それにレイチエルだってまだ子供だ。そこら辺の幼女にはない精神力を持っているが、俺とは違った、本音を話せる友達や知り合いは一人でもいた方がいい。

「何にも変わっていなかつたわ。あいつ、相変わらずだった」

「はは、そうか」

「そうよ。あいつは本当に……」

レイチエルは俺に色々話してくれた。まるでテストで満点を取つた時みたいな顔で色々話してくれた。知り合いは昔、一緒に色々な研究をしていたとか、レイチエルは飛び級をして既に大学を卒業しているとか。今まで知らなかつたことを多く語ってくれた。

しかも話を聞くと、その知り合いは相当変わった人間なんだとか。

レイチエルにセクハラはするわ、その度に知り合いはブルーに吹っ飛ばされるわ、変態的なアプローチはするわ……。相当力オスな展開になっただけらしい。

(まるでトウアールさんみたいだなあ……)

吹っ飛ばされる人物こそ違うものの、ブルーと知り合いさんのやりとりは愛香さんとトウアールさんが日ごろから見せている掛け合いみたいじゃないか。最近の女の子の間ではド突きあいをするのが定番になっただけなのか？

「あ、それとね。ブルーからあんたに伝言を預かっているわ」

「伝言？」

「うん……無茶するな」

「……そうかい」

「ブルー、あんたのことを心配していたみたいよ。見た目は女の子だもん、あっちだっただけであんたが殴られるのを、あまりいい気がしていないみたい」

「はは……そりゃ、嬉しいねえ……」

確かに悩みの種は増えた。けど、それに勝るくらいに得るものもあつたかもしれない。

……例えば、ブルーから伝言を貰う、とかね。

※

その頃、アルティメギルの秘密基地では。

ドラグギルデイだけでなく、増援に来たりヴァイアギルデイとクラークギルデイの敗北というショックから、いち早く回復したのは文学属性を持つフクロウ型のエレメリアン、オウルギルデイであった。

古株である彼は皆をどうにか励まそうと、ある一つのノートのコピーを同胞へと広めようとしていた。

「いいから騙されたと思って読んでみよ！ 心の中にエデンが広がろうぞー！」

「…すまぬが私のエデンは可愛い女子の耳たぶにこそあるのだ」

「むう…絶対にこれを読めば英気を養えるのだが…！」

受け取りを拒否したのはワニ型エレメリアンであるアリゲギルデイであった。近寄るだけで子供が泣くと言われている凶悪そうな顔とは裏腹に耳たぶイヤローブ属性という凶体に似合わぬピンポイント過ぎる属性力の持ち主であった。そして今から開かれようとしている作戦会議で進行役を務めている。

「申し訳ないがオウルギルデイ殿、その話は会議が終わった後だ。ではこれより——作戦会議を始める!!」

その言葉が合図となり、会議室は暗くなり、スクリーンが下りてくる。そしてスクリーンにはテイルレットが凛々しく剣を構える映像が大写しになった。

「「おおおおおおおお!!」」

その瞬間、ホールでうなだれていた面々が活気を取り戻し、一斉に声を上げた。

「やはり可憐だ…」

「見事なツインテールも最近は更に磨きがかかっているな！」

「レットのツインテールを形容するのに、美という言葉では収まらぬ！」

「もはや守護者という言葉では収まらぬ…女神であるな！」

…作戦会議と名はいいが、実質はただのツインテイルズ鑑賞会になっているのは気のせいだろうか。だが、エレメリアンたちの失っていた英気は徐々であるが取り戻しつつあった。

強敵をなぎ倒すその姿、一般市民にもみくちやにされ、半泣きになっっている姿。

それらの姿を見ながら、怪人たちはほっこりした顔をする。

「次にテイルブルーの映像なのだが…」

アリゲギルデイが一同に確認を取った。

「早回しで構わぬな？」

「…いや待ってくれ。最新の映像ではテイルファイヤーとの共闘が映っているのだ…ここは、早回しは避けてくれないか？」

いつものようにテイルブルーの部分は飛ばすか早回しにするのがお約束なのだが、ここで意に反する意見が飛び出た。

「せめて、せめてでいいんだ！ ブルーの部分だけは飛ばしていいからファイヤーさんの所だけは通常再生にしてくれ!!」

「…分かった」

そしてテイルブルーの部分だけを10倍速で再生するという意見で鑑賞会は再開した。

キュルキュルと早送りしても見えてくるのはテイルブルーの容赦ない一撃と恐ろしいまでのその表情だった。特にブルギルデイ戦でのファイヤーの胸が潰れたシーンなんか、人質として捕えられた女の子が悲鳴をあげるほど凄まじい顔になっていた。

それを見ながら何人かのエレメリアンが涙目になるも、その恐怖を和らげようと何人かがおちやらけた口調で解説を始めた。

「的確なまでに急所を狙って来るよな、あいつ。多分俺らで実験していると思うんだよ、どの方法が一番苦しんで倒せるかをよ」

「俺たちをモルモット扱いにしているのかよ…」

「無慈悲な殺戮要塞という二つ名が広まる訳だ…恐ろしいまでも程がある」

「…ツインテールはいいのになあ」

「うん」

そして最後に映ったのはテイルファイヤーがリヴァイアギルデイにとどめを刺すシーンだった。一同はボロボロになりながらも立ち上がり、ブルーの武器であった槍を掴み、前へと走っていくシーンに大興奮する。

そして敵の胸に槍をねじ込み、最後の力を振り絞って戦いへ勝利したファイヤーをエレメリアンたちはスタンディングオベーションで大喝采した。ファイヤーだけを拍手していた。

「ブラボー!!」

「隊長の奥の手にも屈せず…くそう！ 憎むべきか褒めるべきか分からねえ!!」

「彼女こそ、勇者だ!!」

「レッドは女神、ファイヤーは勇者か…！ まさに『クリクワン・シスターズ紅の姉妹』の姉であるファイヤーにふさわしい二つ名だぜ!!」

テイルファイヤーの評価は最初こそ、レッドの姉というポジションということだけで評価されていたものの、最近はそうではなかった。

正々堂々とした振る舞い、拳一つで戦う一昔前のスタイル、そして不屈の闘志で何度も立ち上がるその姿に感動を覚えているエレメリアンも少なくはない。特に最近は戦うごとにその動きにもキレが増している気がするのだ。今やファイヤーはレッドから離れ、独自のファンをも獲得する人気となっている。

「では次は新戦士のテイルイエローだ。こやつは先の戦いでクラーケギルデイ様に勝利を収めた曲者よ」

次に移ったのは重火器を雨あられと発射しながら、何故か自ら武装を脱衣していくイエローの姿だった。

「馬鹿な、何故脱ぐのだ!？」

「…わからぬ。これほど神に祝福されたツインテールを持ちながらも、この戦士は進んでそれをドブに捨てているのかがどうしても分くらぬ!!」

「これじゃあただの痴女じゃないか!」

「銃を持っているのにわざわざ前に出るのも理解が出来んな…」

イエローが脚部アーマーをパーズした途端に胸が揺れたが、その光景に一同は色気も何も感じなかった。むしろ感じるのは戸惑いと戦慄。またはその両方だった。

「この世界には乾坤一擲という言葉がある。あえてこやつは自分に辱めを課すことで、潜在能力を底上げし、勝負に挑んでいるのではないだろうか?」

「馬鹿な…そのような枷をはめ込みながら、勝負に挑んでいるのか!？」

ううむ、なんという覚悟か…!」

まさか怪人たちも、イエローがドMに目覚め、好き好んで脱いでいるというあまりにもぶっ飛んでいる真実には到達できずに、ただ困惑するだけだった。

「ふむ…ブルーとイエローに関しては十分に研究が出来た。やは

り、レッドとファイヤーに十二分に時間をかけねばなるまい」

「「異議なし!!」」

そして再びテイルレッドとテイルファイヤーの鑑賞会が始まった。それは悪の組織の作戦会議としてはあまりにも不愜すぎた。

それらをじっくりと数時間観賞し、締めのエンドロールが流れ始めると、エレミアンたちは満足げな顔になっていた。特に作戦を考えているわけでもないのに、それだけで大きな仕事を達成したような錯覚に陥っていた。そして最後にはお待ちかねの会議参加者の配給品を配る時間となる。

「ではこれより人数分のテイルレッドとテイルファイヤーのミニフィギュアを配るぞ! これで各自戦いに備えよ!!」

「「おうー!!」」

もう完全に夏休みにやっている子供向け映画の入場者特典みたいなことになっていた。それでいいのか悪の秘密結社。スケールにして約20分の1のフィギュアがはたして戦いの役に立つかどうかはもうアルティメギルの世界の住人にしか分からないのだろうが、皆とてもいい顔つきをしていた。

だが、残念なことにその入場者特典は出来にばらつきがあるらしく、一人の怪人が不評の声を漏らした。

「待たれい! 見よ、我に配られしレッドのフィギュアを!」

「あ、お前のフィギュアはツインテールの先端部分が俺と違うな…」

「そうだ! ここの部分は橙色ではなく朱色でなくては駄目なのだ!

手抜きもいい所だ! 適当な塗料で塗りやがったな!」

「そんなものはまだマシだ! 俺の物に至っては瞳の位置がずれているんだぞ!! 作画崩壊アニメじゃあるまいし、これじゃあ子供が泣くぞ!」

「ああここも! ファイヤーの両腕部分の関節が弱くてすぐに取れる! 関節部分の補強をせねば…俺の部屋からパテを持ってこい!!」

「ええい筆を貸せ! スミ入れをして立体感を出してやられれば! それに色の修正も…!」

「畜生、こっちは塗装が剥けている!? これを作った奴出てこい!

お前のいい加減な仕事のせいで俺たちの夢が壊れるんだぞ！」

「完全可動シリーズを見習え！ あれと比べれば雲泥の差ではないか！！」

大部分の怪人はちっちゃなファイギュアでギャーギャー言つて遂には乱闘騒ぎが始まるが、その光景に愕然としている怪人も少なくはなかった。古株のオウルギルデイもそうであったし、参謀役にして新隊長のスパロウギルデイもそうであった。

「…これでは、もう…！」

「こんなんで侵略が上手くいくのかなあ？」

スパロウギルデイはがっくしと肩を落とし、目の前でたかがファイギュアが原因で起こった大乱闘騒ぎを冷めた目線で見ていた。

彼らは大部分の怪人が戦意を失い、部隊の空気が末期へと近づいていることに気付いていた。

ドラグギルデイにワイバーンギルデイ、リヴァイアギルデイにクラーケギルデイと強敵が揃いも揃って倒された。そのことで部隊の大部分の面子に諦めムードが漂い始めているのだ。どうせ俺なんか無理に決まっているよというだらけきった空気が部隊を覆い尽くさうとしている。

今までは同じツインテールの女子を見て熱狂するにしても、目の輝きが違った。妨害されようと必ず奪つてやるぞという熱が、決意があった。

だが今はもはや、勝てぬと分かって体裁を繕うだけに作戦を立てている始末だ。作戦会議がただの鑑賞会と化しているのがいい証拠だ。そしてリヴァイアギルデイが負けたことで何か決意の表情をしていた側近のスワンギルデイの姿も見当たらなかった。一体どこへ行ってしまったのか。あるいは彼も諦めのムードに流されてしまったのか。

(もはや…これまでか…！)

スパロウギルデイが力なく俯いたその瞬間であった。

「一同、控えよ！！」

会議室のドアが勢いよく開かれ、凜々しい女性の声が響いた。

「何奴!？」

その声がこの場の濁った空気を吹き飛ばし、一同は全員入口へと視線が向かった。…そこには、見たことのない戦士が仁王立ちで立っていた。

この部隊にいるのは、動物や神話の獣の姿をした怪人のみ。しかし仁王立ちしている戦士の姿は色鮮やかな2対の羽が2枚あり、体表が細かくあった。顔は巨大な複眼と、鋭い棘のような嘴。——その姿は蝶、昆虫型のエレメリアンだった。

「昆虫の姿のエレメリアン…?」

「一体どこの部隊なんだ? 合流するだなんて話聞いてないぜ!」

「ま、まさか…まさか!」

「知っておられぬのですか、スパロウギルデイ殿!」

この事態に一人察した様子であるスパロウギルデイにアリゲギルデイは震えながらも声をかけた。

「——噂で聞いたことがある。アルティメギル四頂軍の内の一つ、ビー・ティフル・ハート美の四心は昆虫の戦士が集まる部隊だと…!!」

「せ、先鋭部隊であるアルティメギル四頂軍がここにいるのですか!」「恐らくはそうであろう。…見よ、後ろにも同じような戦士が控えておる」

「あ…!」

確かにスパロウギルデイの言う通りだった。蝶型エレメリアンの後ろには同じ昆虫モチーフであるカマキリ型怪人とアリ型怪人の2体がいた。両者とも立ち上る属性はここにいるエレメリアンの比ではなかった。ただ立っているだけでもその実力の高さが伺えた。

アルティメギル四頂軍。それはアルティメギル首領直轄の精鋭部隊である。云わばエリート集団である奴らたちは精鋭部隊だけあって実力が高いエレメリアンが多いものの、その分問題児と呼ばれるものも多いのだ。

だが、次に現れたのはそれ以上にスパロウギルデイたちの度肝を抜いた。黒いマントをなびかせながら悠然と歩を進めるそれに、全員が戦慄を覚えた。入ってきた奴の姿は昆虫ですらなく、そして怪物です

らなかったからだ。

「――に、人間だと!？」

「ツインテイルズがとうとう基地に侵入してきた!？」

何も知らない者がそう誤解するのも無理はなかった。何故なら、年端もいかぬ女子が平然と会議室へと入って来たのだから。そして彼女はテイルギアと非常に似た鎧を纏っていたのだから。その色が禍々しい黒色であることを除けば、限りなくツインテイルズに似通っているのだから。

「違う。わらわの名はダークグラスパー。首領様のご意思を伝えるものじゃ」

「何い!？」

ざわざわとざわめきが大きくなった。これが噂に聞く地獄の処刑人。しかし、まさか人間だったとは、誰もが驚いていた。

「本日付より、わらわは首領補佐としてこの部隊を指揮することになった!。これは首領様の意志じゃ、反論は許さぬぞ!!」

そう言いきったものの、当然拍手や喝采は起こらなかった。部屋中に重い空気が漂い始め、彼女がこの部隊に迎えられている空気ではないことは火を見るより明らかだった。

「こ、こんな小娘が…アルティメギル最強の処刑人だと!？」

「確かに…確かに奴のツインテールは見事だ!。だが、いくら不勝を重ねてきた我らとて、プライドはある!。人間の配下に下るなど!」

「そこまで俺たちは落ちぶれていない!!」

だがダークグラスパーはふんと鼻で笑うと、目ざとくスパロウギルデイへと視線を移し、気軽に声をかけた。

「そのツバメ。確か最近見た顔じゃったな。貴様がこの部隊の現在の最高責任者か?」

「お久しゅうございます。仰る通り、私はドラッグルデイ殿の参謀を務めておりましたが、名誉の戦死を遂げてから、今は隊長という立場にあります。ですが地獄の処刑人という異名を持つあなた様が自ら指揮を取られるとは…」

「理由は言わずとも知れたことじゃろう。この部隊は属性力の回収の

ペースが悪すぎる。首領様もお怒りであったぞ。…もともと、この程度のレベルの奴らでは扱らぬのも無理はないか」

「…！」

「歩だけ並べて王将を倒せというのも、難儀な話じゃしろう」

その挑発により、会議室は瞬く間に一触即発の雰囲気となった。

「…ふん、わらわが気に入くわぬか？ ならば誰でもよい。今この場でわらわの属性力を奪ってみせよ」

そう言ったダークグラスパーは全身を始めた。武器も持たず、余裕ともいえる不敵な笑みを浮かべたまま。

護衛として来たであろう昆虫型のエレミアンは、依然として入り口に立ったままだ。何の手助けもしようとしない。

「…う、うう！」

「ぬうううう！」

踏み込めば、いくらでも手は出せる。だが、踏み込んだ瞬間、自分たちの命はないだろう。

彼女は無防備だ。だが無防備が故に、何をされるかが分からない。ただ人間が歩いているだけなのに、それだけで身体から汗が昇り始める。

達人とそこら辺のチンピラ並みに実力の差はあった。それほどなまでの理不尽さがあった。

だが、圧倒的な力の差を感じ取ることが出来ただけでも落第点といえる。もし飛び出したのならば以前のフェンリルギルデイのように粛清が執行されていたに違いないからだ。

「ふん…いよいよ持って使えぬ持ち駒じゃ。前に進むことだけが歩に与えられた権利だというのに、動くことすら出来ぬとは」

ダークグラスパーはつまらないものでも見るような目でエレミアンを見る。…だがこれに異を唱えるものもいた。精神を総動員して、反論する者もいた。

「俺たちは前に進めなかったんじゃない、進まなかったんだ。…実力も分からぬところで命を落とすのは4流のすることだとドラグギルデイ隊長は言っていた！ 俺たちは本当に勇気を出す場所を知って

いるんだ!!」

「ああそうだ！ 例え歩であろうと俺たちには誇りが、勇気がある！ 盤面を埋め尽くせばやがてそれは王にも届くだろうさー！」

「そうだ！ そもそも、名だけ知れた処刑人がしゃしゃり出てくるな！ 突然指揮を執るなど、我々が将棋の歩ならば、貴様はチェスのクイーンが勝手に割り込んでくるものではないか！」

「とつとと帰れ！ 根暗女!!」

彼らは女神や勇者と崇めるミニフィギュアをロザリオのように握りしめて、立ち上がった。言われっぱなしではないということを見せつけていた。

「ほう」

その行動にダークグラスパーは初めて、侮蔑ではない笑みを浮かべた。

「行き場のない敗兵だと侮っていたが：口と気迫だけは失っていないようではないか。金に成るといふ気概があるのならば、歩でも構わぬ」

一同をグルリと見回し笑うと、ダークグラスパーはマントの裏から携帯電話を取り出した。

「気に入った。褒美として、わらわのアドレスをくれてやる。各々、携帯電話を出すがい！」

「「……はーっ」」

空気が、死んだ。

さつきまでの怒りややる気がどこかへ飛んで行ってしまい、皆呆氣にとられたような顔をして立ち尽くしていた。

「どうした、わらわのアドレスが欲しくないのか!」

「「……………」」

無言。皆無言でいた。会って数分、しかも先ほどまで憎しみの対象であった人物のメアドなど誰が欲するのか。

「……まさか。まさかかと思うが貴様らの携帯は赤外線機能すらない骨董品なのか!? それとも携帯すら持っていないとか言うまいな!」

そういう問題ではないのだが。怒る部分を完全に間違えている

ダークグラスパーは、見当違いな罵声を浴びせるが、それでも誰一人携帯電話を出そうとはしない。

「全く古式ゆかしき奴らだ…ならばパソコン！ パソコンぐらいは皆も持っているであろう！ エロゲーすら嗜まぬ小僧がこの部隊にいるわけがなからう！ この際、パソコンのアドレスでも構わぬぞ！」
「……………」

やはりエレメリアンたちは無言であった。後ろに控えている昆虫型エレメリアンですら、我関せずといった様子で明後日の方向へと顔を向けていた。

目に見えて機嫌が悪くなっていくダークグラスパーを前に、先ほどあれだけ勇ましい様子を見せた戦士たちも、だらだらと違った汗を流し始めた。

力とは違う、ダークグラスパーのどこかヤバげな危険さをようやく理解し始めているのだ。こいつあれだ、俗にいう痛い女…。

「…おいそこのワニ」

「ワニ!?!」

「そうじゃ。そこにいるワニ口の主じゃ。本当は持っているであろう、携帯を？ さあ出すのじゃ」

ヤンキーがいじめられっ子にパシリを頼む時みたいに指名されたのは、アリゲルデイであった。

しかし、彼は何とか逃げようと悪あがきを続ける。

「わ、私は戦い一筋の無骨者！ それ故に携帯などというハイカラな物は持ち合わせておらず…！」

「本当か？」

「嘘などついておりませぬ!!」

完全にヤンキーといじめられっ子の関係だ。いつ『おら、とつととジャンプしろよ。小銭、ポケットにあるんだろ?』という展開になってもおかしくない。

だがダークグラスパーはアリゲルデイが嘘をついていると感じたのか、確認の為にパチンと指をならした。

するとどこからともなく、ささつと誰かが小走りで走って来た。そ

してダークグラスパーの数歩後ろで立ち止まる。…すると何かに気付いたのかスパロウギルデイが驚いたような声を出した。

「!? お、お前…フェンリルギルデイか!?」
「?!?!」

彼を知っている全員が驚き、信じられないような目でその怪人を見た。すると目の前にいる怪人はよぼよぼのじじいの声であいさつを始めた。

「…お久しぶりです、スパロウギルデイ殿。私、なんとか生きておりますフェンリルギルデイです…」

「? なんじゃスズメ、こやつと知り合いだったのか?」

「か、かつての私の部下でしたが…。お、お前、本当にフェンリルギルデイなのか?」

確かに目の前に立っているエレメリアンはフェンリルギルデイに似ていた。怪狼型の怪人であるし、その外見も非常に類似している。

だがあまりにも彼は老けていた。あんなに見事だった銀の毛皮はくすんでいたし、顔色も生気がない。それに首から下げている雑用係」という札の存在が気になった。確か、フェンリルギルデイはそこそこ高い地位にいたはずでは…。

「うむ、確かに奴はアルティメギルの掟に反し、罰は受けた。だが何の因果かこうして生きていてな。今は罰則期間として、色々雑用の仕事をやらせているのじゃ…おい!」

「!」

ダークグラスパーの声に条件反射ともいえるスピードで毛皮の中から携帯電話を取り出したフェンリルギルデイ。その動作でやつと全員が目の前にいるのが紛れもないフェンリルギルデイ本人だと理解するに至る。毛皮に色々な物をしまうのは彼の癖だったからだ。それは携帯も例外ではない。

するとフェンリルギルデイは何やら無言でカチカチと入力し始めた。そしてあつという間に入力を終わると、そのまま携帯電話を毛皮へとしまった。何故かフェンリルギルデイの携帯は威嚇状態の深海生物みたいにラメラメなっていたが。

…すると無情にも、アリゲギルデイの腰元から着信ボイスが最大音量で鳴り響いた。

『おにーちゃん、メールがきたよ！ おにーちゃん、メールがきたよ！』

「ぬぐ、何と聞いたはずらっ子よ!!」

焦りのあまり、アリゲギルデイは両手でバウンドさせながら携帯を取り出し、顔を引き攣らせながらメールを受け取った。着信のタイトルは短く、こう書かれていた。

『今度はマナーモードにしておけ』と。

「あああああー!」

「……………」

その悲鳴と共に、ダークグラスパーとアリゲギルデイの目が合った。そして理解した。ダークグラスパーはフェンリルギルデイを利用して、携帯の有無を確かめたのだと。

「ふんー!」

そしてアリゲギルデイはダークグラスパーに殴られ、頭から壁へと突っ込んだ。

「ふん、腰抜けどもめ! もうよいわ! とにかくこの部隊の指揮官はわらわじゃ! 反論があるならば、いつでもこの首を取りに来るがよい! わらわのアドレスをくれてやるわ!!」

難解すぎる捨て台詞を残し、ダークグラスパーは去っていった。後ろにいたフェンリルギルデイも、昆虫型エレメリアンも同じように去っていった。

そして乱入者がいなくなった会議室で、誰もが呆然とする中、ぽつりと一人のエレメリアンが呟いた。

「これから俺たちどうなっちゃうんだろう…?」

「……………」

それに答えてくれるのは、誰もいなかった。

※

ダークグラスパーはエロゲだらけの自室に戻ると、変身を解除した。瞬間、鎧に包まれていた身体はジャージ姿へと変わる。

そして元の姿に戻ったイースナは苛立ちを隠せないように親指を噛み、猫背で部屋をグルグルと歩き回った。

「ど、どいつもこいつも…変態の癖に、プライドだけは高いんだから…ゆ、許せない…!」

さつきまでの自信満々な雰囲気はどこへやら、ぶつぶつと恨み言ばかり呟いていた。

「はあ。ほんま、イースナちゃんは友達作るのが下手やなあ…」

するとイースナが帰ってきたのに気付いたのか、一人のある人物がカシヤカシヤという足音と共に近づいて来た。

それはエレメリアンではなかった。勿論、人間でもなかった。それは銀色で出来たロボットであった。角ばったボディに、たくましい脚部、V字を描く頭部はツインテールを模しているのか。その体型に似合わないアイドル声優のような声にして、何故か関西弁。

メガ・ネプチューンⅡ Mk. II。それはイースナのパートナーにして、保護者ともいえる存在だった。

「あ、あいつらがいけないだもん…わ、私がアドレス教えてあげるって言っているのに、あんな小さなフィギュア握りしめて…!」

「イースナちゃんかて、この間まで小さかったやんか。て、いうかなんでうち、この部屋から出ちゃあかんの？ はよお皆に自己紹介したいんやけどなあ…」

メガ・ネプチューンⅡ Mk. IIが動くたびにガチャガチャと細かい稼働音が鳴る。

「あ、あいつらが…私を上官だつて認めるまでは、籠っていて。が、我慢して…」

「心配せんでも、うちはすぐに皆と仲ようなるから大丈夫やで?」

するとイースナは曇った目で、恨めしそうにメガ・ネプチューンⅡ Mk. IIを睨んだ。

「そ、それがいやなの……。あいつらは、ああいう奴らは、生身の人間に興味ないんだ、もん。あなたが出たら人間じゃないあなたの方に、

「親近感、湧くだけ…。全く、嫌な奴ら」

悠長に明るい声のロボットときこちなく、薄暗く鬱屈とした人間の声。象徴的な対比に、どこか哀情を感じてしまう。

「そーやって、イースナちゃんがへソ曲げるからあかんと思うねんな。仲ようなりたかつたら、自分から行かなあかんよ?」

「う、うるさい。私は、歩み寄っているもん。あいつらが…」

堂々巡りなやりとりのため息が出るメガ・ネプチューンⅡMk. I
I。

「全く…。ならばうちがひと肌脱いだる!」

「脱ぐ服もない癖に?」

「気持ちの問題やんかそれは…」

するとメガ・ネプチューンⅡMk. IIは腹部から何かを取り出し、イースナの手にはポンと何かを乗せた。

「……………何、それ?」

「ふふん、うちな色々考えたんよ! イースナちゃんが無理矢理メルアドレスを教えようとするから駄目なんじゃないかってな。エレミアンの皆みたいに生身の女の子に免疫がない奴なんかは、グイグイ行っても逆に引いてしまうもんやで。だからイースナちゃんのメアドをQRコードにしてプリントしてみたんや! これやったら会議とかでもさりげなく渡せるし、相手の警戒心だって解けるやろ? きつとサラツと登録してくれると思うで?」

そうやって小ささまざまなタイプのシールを、イースナに手渡す。

…まあ、エレミアンの皆が受け取らなかつたのは女に免疫がないからではないのだが、残念ながらそれを指摘する者は誰もいない。

「さ、さすがメガ・ネ、頼りになる…いい女、リア充は違う……………」

「…その呼び名は辞めてくれへん? ウチの名はメガ・ネプチューン

ⅡMk. IIや! カッコいい正式名称なのに変な略し方しちやあ台無しや…」

「だって…長いんだ、もん」

「イースナちゃんがうちの名前を名付けたのに!? それに何で一号機なのにMk. IIやねん…いちいちツッコむウチの身にもなつてく

れや……！」

メガ・ネプチューンⅡ Mk. IIが高ぶったことで、一層部屋がガタガタと音が響いた。

「とにかく！ このQRコードとあとはみんなが好きな物を一緒にプレゼントすれば、効果もマシマシや！」

「み、みんなの好きな物……かあ……」

イースナはちらりとうず高く積まれているエロゲの方を見る。そういうえば、この部隊の面子はエロゲをよくやるって聞いたことがあった。確か会議でエロゲキャラを出したほど、皆がハマっているらしい。

「わ、分かった……皆が好きな物、だよな……」

イースナはえへへと笑ったが、その笑みはコミュニケーションが苦手な人間が見せる卑屈な笑みだった。

「……後は笑顔の練習やな。せっかく可愛いんやから、もつとスマイリーにならな！ いつまでも変身ばかりに頼っていたらあかんよ？」

「い、いいの……いつか、あの人の前で、本当の私が笑えればいいんだもん……」

「……………」

表情がないはずのメガ・ネプチューンⅡ Mk. IIであったが、その眼が僅かに光を弱めたように見えた。

「い、一緒にがんばろう、メガ・ネ。私は……ダークグラスパー、支配者なんだもん……この世界の人間の心も、すべて、支配してみせるから……私の、この、眼鏡で……」

「……そやな、ウチは応援してるで。イースナちゃんはやれば出来る子なんやから！」

「え、えへへ……ありがとう」

そう言い終わるとイースナはごそごそとエロゲを選別し始めた。

「ん？ 何してるん？」

「メ、メガ・ネ。ト、トウアールの好みのエロゲは分かるんだけど……テイルファイヤーの好みのエロゲが分かんないの……一緒に選んで」

「いいっ!? まさかあの子にエロゲ渡す気なんか!?!」

「だ、だってあの姿は絶対、トウアールの知り合いか何かだもん…まずは周りから包囲網を…」

するとイースナは詰まれたエロゲから厳選を始めた。そんなイースナを見ながら、メガ・ネプチューン || Mk. II は疲れたように息を吐いた。

「うちのパートナーも、あの子たちみたいに真っ直ぐやったらなあ…」

第38話 助言とツインテール

「では今日はここまで。そろそろテストが近いから、しっかりと勉強しとけよー」

長かった現代文の時間が終わり、ようやく昼休みに入ると、教室は蜂が突つついたかのように大騒ぎを始める。

「あゝ、腹減った〜」

光太郎も昼食を食べる為、学食へと向かうことにした。自分には活字というものが合わないのか、普段以上に頭を使いがちになる。そのせいでさつきからお腹が鳴りっぱなしだ。

自分には余計な事を考えずに済む、数学や物理などのロジックの世界の方が合っているのかもしれない。

「でさ、どう思うよ?」

「テイルイエローか…うーん、今後に期待って所かな?」

「砲撃はロマンで!」

「おっぱいは正義だよな!!」

廊下を歩いていると男子生徒たちによるそんな会話が聞こえてきた。どうやら新戦士であるテイルイエローの話題で盛り上がっているらしく、男子陣からの評判は悪くないらしい。だが…。

「ふん、何よあのあざとさー!」

「あれ絶対、お姉さまに抱っこされるためにワザとやっているわ。

ビッチよビッチ! 黄色は淫乱で黒いのよ!」

「それにたびたび女の顔をしているのが腹立つわよね〜」

「巨乳死すべし!」

女性陣からの評判はすこぶる悪いらしい。どうやらイエローの初陣がファイヤー頼みであったことや胸が大きいこと、どこかあざとさが見えたことが不評の原因らしい。

(今後の戦いで、何とか名誉挽回が出来ればいいんだけどな…)

券売機でキップを買って、並びながら色々な考えに耽る。イエローのこと、ブルーのこと、そしてダークグラスパーのこと。

ダークグラスパー。人間でありながら、自らの意志で敵の立場にい

る人間。彼女は何の目的でいるのか？ どうして敵であるのか？ ツインテールをしているのに、何故それを奪う側へと回ってしまったのか？ 疑問は尽きず、俺の悩みも迷いも増えるばかりだ。

「はい、どーぞー！ 福神漬はスプーン一杯までだよ！」

「あ、はい」

トレイの上に乗った芳しいカレーの匂いに胸を躍らせながら、どこか座れる席を探す。

すると、見知った顔の前の席が空いていた。ラッキーと思いながら小走り気味で席に近づき、声をかける。

「総二、ここ、いいか？」

「…光太郎？」

俺の目の前には暗い顔をしながら、ラーメンを頬張っている総二がいた。

「愛香さんもいるのか？ だったら俺、別の席行くけど」

少し気を遣った。

「いや…座つていいぜ。今日は一人なんだ」

へえ、珍しいことがあるもんだ。いつもは愛香さんとトウアールさんでグループを組んでいるのに、今日は一人なのか。

ツインテールのことしか頭にない能天気って感じなのに、今日はそれが見られない。いつも女の子と一緒にいる総二が一人という状況は凄く珍しく感じる。総二も女の子って訳か、偶には一人で飯を食いたい時もあるということか。

(…ま、そんなこと言っちゃったら、俺なんか幼女の同居人と毎日飯を食っているんだけど)

同意を得たことで席に座り、俺も食事にかかることにした。

スプーンを使って、ご飯とカレーの比率を崩さないように器用に食べていると、おもむろに総二が話しかけてきた。

「なあ…ちよつといいか？」

「何？」

顔を上げると総二は思い詰めたような顔をしていた。

「あー、その…こういう時ってどういう風にすればいいのかなって

思ってたよ」

「だから何だよ？」

「…」

総二は相当迷っている様子であったが、意を決したように顔を強張らせた。

「今さ、ツインテール部はある一つの課題に立ち向かおうとしているんだ」

今更ながら俺はそのことに対して、ひどく驚いていた。ツインテール部なる謎の部活がしつかりと活動しているなんて。

「で、皆は課題に乗り気なんだけど…俺はそうじゃない。この課題を、ノリノリでやることは出来ないでいるんだ」

「…へえ」

総二はますます顔を暗くするのを観察する光太郎。

まあ…ツインテールズを応援している面子はどこか宗教的な感じもするし、総二にも宗教的なノリで活動することに抵抗があるのかもしれない。

誰よりもツインテールを愛するだけに、そういったノリはきつと総二も好まないだろうし、光太郎だって無理矢理ツインテールを広めたり、押し付けられるのは好まない。性格からして、余計に。

「最初はみんな戸惑っていたんだけど、なんだか乗り気になっちゃつてさ…気がつけば、俺だけが残されちゃって」

一呼吸して、総二は俺に語りかけてきた。

「俺はさ、どうするべきなんだろうっ？」

どうすればいいのか、か。この場合は乗るべきは逆らうべきか、ということなんだろう。

「きつとそれをするのが正しいみたいだな空気になっているんだけど、俺は…」

総二はそれを言い終わると、どんよりと沈んでしまっていた。

(難しい問題だと俺も思うけどさ…)

確かに世の中は多数派が正しくて少数派が間違っているという傾向がある。…例えばツインテールフェチなのがどこかおかしいと言

われている事とか。多数派の意見が正しいという認識の中で、少数派の自分は間違っていないと主張することは難しいだろう。

光太郎だってそれが出来ていれば、自分のツイントール好きを隠してなんかいないのだ。

「うーん…総二は自分がどうすればいいのか悩んでいるんだろ?」

「まあ、な」

「じゃあさ…悩んでもいいんじゃないか?」

「…え?」

総二が面食らったような表情をして、まあそんなリアクションになるよなあとしみじみ思った。

我ながら凄く情けない意見だと思うけど、友人の悩みには答えてあげたい。それに話を聞いてしまった以上、「俺には手に負えません」みたいなことはあまり言いたくなかった。

「これはあくまでも自論、だけどさ…俺は何でもかんでも賛成するんじゃないくて、あえて疑問に思ったり、迷ったりしている奴がいてもいいと思うんだ」

それは今の光太郎の心境みたいなものだった。ツイントイルズの活躍で今の世の中はツイントールという髪型がメジャーな物になってきている。街中を歩いていてもどこかしらツイントールという言葉は聞こえてくるし、ツイントールの髪型の女の子も非常に増えてきている。

だから、光太郎も「今、ここで自分がツイントール好きだってばらしたっていいんじゃないか?」という思いが心のあるのだ。…奇しくも、ツイントール部の幽霊部員だし、誤解は解けつつあるけど、総二と同類という扱いを受けかけているし。

「お前が何をしようとしているのかは分からないし、俺は聞かないけど、疑問に思っているなら、納得できないでいるのなら、今は進まない方がいいと思う」

親元を離れ、誰も知り合いないこの土地に来るという決断をしたときも光太郎は散々悩んだ。ツイントールフェチを周りにばらすか否かくらい悩んだと思う。地元を離れる怖さと自分の学力。それ

を天秤にかけ、最終的に光太郎はこちらへと来た。

「限られた時間の中で、本当に自分が納得できるまで悩みに悩んで、そこで決断を出せばいいと思うよ……その課題ってまだやらないんだろ？」

「……まあ、時間はあるの、かな？　今すぐつてことはないけど……」

「だったらその時間の中で悩めばいいじゃんか。納得がいくまで悩みに悩んで、それで答えを出せばいいんじゃないか？」

それは人にとっては「逃げ」とも取れるかもしれないけど、光太郎の基本的思考でもあった。

まず、すぐに答えは出さない。勿論例外はあるけれど、基本的には光太郎は悩む。不器用で鈍いかもかもしれないけれど、与えられた時間の中で悩みに迷って、答えを探る。自分が本当に納得できるかを探るのだ。

（まあ最近は『どうすればいいのかじゃなくてどうしたいか』ってことが行動原理になっているんだけど……）

まあ、これは総二に言わなくてもいいだろう。総二はそんな所、俺なんかよりもずつとしっかり出来ているし、俺の基本的な思考だけを伝えればいいか。それに、俺も総二と同じように答えを出さなければいけない問いが存在しているしな。

いつレッド達に自分の正体をばらす事や自分がツイントール好きであることを明かすこと、とか。この2つの解はまだ出ていないけど……俺が近いうちに答えを出さなければならぬ問題だ。

「まあ……こんな情けない意見だけど、一つの参考にしてくれないか？」

「……いや。凄く、参考になつたぞ。……流星は常識人」

「……周りが変人しかいないみたいない方だな、それ」

「だって事実だろ？」

「……………」

そこで両者は黙ってしまった。そういえば俺らの周りには奇人変人しかいないような気がする。

痴女行為を平然と行うトゥアールさんに関節技と右ストレートが得意技の愛香さん、妖怪婚姻届の尊先生に……。数え上げればキリが無

い。

「…俺、お前と知り合えて心から良かったって思うよ」

「奇遇だな、俺もだよ」

2人の男は、握手を交わした。この世界ではもう、何人いるのか分からないであろう常識人同士の熱き握手を。

※

同時刻、生徒会室では生徒会長である慧理那が筆頭になつての会議が行われていた。

会議は順調に進み、副会長が来月の抱負を述べていた。

「…えー、そろそろ衣替えのシーズンになります。風紀の方も乱れやすくなると思いますので、私たち生徒会が皆の見本になるようにしなければなりません」

分かりました、という声が生徒会室中に響き渡る。

「では会長、締めを言葉を…会長？」

「えっ？」

すると慧理那は驚いたような声をあげると共にバランスを崩し、椅子からコテンと落ちてしまった。

「だ、大丈夫ですか!？」

「会長!」

「神堂会長!!」

「も、申し訳ありません…私の、不注意ですわ…」

慌てて慧理那の元へと駆け寄る生徒会メンバーではあるが、そんな慧理那の姿に一同の顔は何故か赤い。「可愛い」とか「写真撮りてえ」とか「転んだ会長ぐへへ」とか呟いた奴がいるが、気のせいだろう。

…正直、こいつらが風紀云々言える立場ではないんじゃないだろうか？

「その、会長。締めの言葉です。もう会議も終了しますので…」

「…ああ、そうでしたわね。申し訳ありません」

副会長は赤面しながらもパンパンと手を叩き、皆を散らせる。そし

て慧理那はコホンと咳き込み、空気を何とか転ぶ前までに直した。「では皆さん、今日の会議はこれにて終了いたします。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした！」

その言葉でようやく会議は終了になる。生徒会メンバーが次々と教室を出て、慧理那と副会長だけが残された。

「はあ…申し訳ありません…」

慧理那は椅子に座りながら、謝罪の言葉を呟く。会議中、ずっと別な事を考えていた為、注意力が散漫になっていたのかもしれない。

「気にしてませんよ。会長の補佐をするのが副会長の役目ですから本望ですよ」

「私が一番しつかりしなければなりませんのに…」

「いえいえ、誰だつてミスくらいありますよ」

副会長はあつけからんのように笑うと、お疲れ様でしたと生徒会室を出ていった。

「はあ…」

一人残された慧理那はその途端、顔を真っ赤にしながら、息を喘がせる。この瞬間、真面目な生徒会長は一人の女の顔へと豹変した。

（ああ…ファイヤーお姉さま。いつ、あなたに会えるのでしょうか…？）

そう慧理那は所謂、恋煩いになっていた。

自分を変えてくれた人物であるテイルファイヤー。あの戦いの後、再会できると思っていたのにボロボロで家に帰したとレイチエルに言われた時は酷く落ち込んでしまったものだ。

もう一人のお姉さまであるレイチエルに会えたのは嬉しいものの、やっぱりファイヤーにも会って、きちんと今の本当の自分を見て欲しいのだ。

もう自分はその頃の弱弱しい自分ではない。銃だつてちゃんと撃てるし、ギアのスペックも十二分に引き出せている。あの人と同じように接近戦だつてこなせるし、カッコいい必殺技だつて出来た。テレビのヒーローを参考に必死でイメージトレーニングしてきた甲斐があつたものだ。

(ああ…… 早く、早く見せたいですわ、本当の私を……！ 私はあなたとお姉さまと同じように……しっかりと私もヒーローをやれていますのよ……！)

もじもじと身をくねらせながら、慧理那は官能的な吐息を漏らした。

「お姉さま……！ 私は、私はあ、慧理那は、はあん……！」

妄想は更に進む。きつとファイヤーは次の戦いで自分を見直してくれるはずだ。もう、ファイヤーは自分の電池代わりにならなくてもいいのだ、きつと「これで私も安心して敵の懐に飛び込めるよ」とか笑顔で言ってくれるかもしれない。

そしていつかは、同じようなシチュエーションで自分がリードして合体攻撃を……！ 昔やったシチュエーションを攻守交代、逆のパターンでやるという展開は慧理那が一番やりたいことだった。

(そ、そうになると、攻撃のパターンも考えなければなりませんね！ お姉さまは合体攻撃の場合、いつもみたいに接近戦がいいのかしら。それとも裏をかいて遠距離……？ ぶ、武器も考えなければ……お姉さまにはきつとハンマーが似合うと思うのですが……！)

そして合体攻撃を終えた2人は遂に私の懐にまで来て、ベツトルムで……！

「……最高ですわ！ ああ、早く来てくれないかしら、アルティメギル！！」

正義の味方が悪の組織を催促するという半ばとんでもない発言であったが、慧理那はそんなことどうでもいい事だった。恋する乙女と化した慧理那にとって、些細な事だった。

(そ、そうになると……研究をしなければなりませんわね！ お姉さまのベルトに、フィギュアに……！)

そう思うと、脳裏に浮かんでくるのはとある1年生が持っていたあのベルトだった。あの本物と見間違えうまでに完成度が高い、テイルファイヤーのベルト。

「やっぱり、欲しいですわ。あの、限定品のベルトが……！」

※

そして時刻は夕刻。エレメリアンも現れず、余計なトラブルも起きない平和な時の中で、光太郎は夕飯作りに取り組んでいた。

「なあレイチエル！ ちょっと手伝ってくれ！」

「何よ…今ギアの修理中で手が離せないんだけど…」

「ここにある皿をレンジの中に入れるだけでいいからさ！ 今、手が離せないんだ！」

そう言われるとレイチエルは渋々立ち上がり、シンクの上に山積みになっているキャベツへと視線を向けた。

「また随分買ったのね」

「ああ、スーパーで安かったからな。しばらくはキャベツ三昧になるかもしれない」

「あの、あたし野菜苦手なだけけど…」

「好き嫌いしていると大きくなれないぞ？」

「〜！」

一瞬、自分の胸元を見たレイチエルはすぐさま俺のお尻に蹴りがかかりますと、ぷりぷり怒ってキャベツをレンジの中へ放り込んだ。そして不機嫌な顔でパソコンに向かい合う。

「…まあ怒るなって。今日の夕食はロールキャベツだから、機嫌直せよ」

「…ホント!? いいセンスしてんじゃない、あんた！」

するとレイチエルの機嫌が一発で治った。何て言うのか…単純な奴だ。

そういえば同居当初、カレー食わせた時も黙々と頬張っていた。食い物に関してはやっぱり飢えているのかもしれない。

「味付けはトマトソースで良かったよな？」

「そのとおりよ。ロールキャベツにホワイトソースなんて論外にもほどがあるわ」

「はいはい…全く、ご注文が多い相棒なことだ」

ボールに入ったひき肉を混ぜながら、クスリと笑っていると、光太郎の携帯が鳴った。

「…?」

ボールから手を離し、素早く手を洗って画面もロクに見ないで通話に出た。こんな時間にかけてくるだなんて誰なんだろう…?

「はい? どちら様ですか?」

携帯の向こう側から、底抜けに陽気で明るい声が返ってきた。

『あ、光太郎? 良かった、ちゃんと出てくれて!』

「…いいっ!」

その声には大変聴き覚えがあった。他に間違えようがない、光太郎の母である重美（しげみ）からの通話だった。

「ちよつと…何なんだよ、こんな時間に?」

「ねえ、光太郎? 誰と話しているの!」

すると通話する光太郎に気になったのか、レイチェルが大きな声を上げた。

「! 馬鹿、大きな声で喋るな!!」

『あら、女の子の声…?』

「…!」

すると重美は何かを勘違いしたのか、黄色いを上げる。

『まあまあ! 光太郎にもとうとう彼女が!』

「ああいや、そういう事じゃ…」

『いいのよいいのよ誤魔化さなくて! ああ、奥手だった丹羽家の長男にもとうとうガールフレンドが出来たのね!! お赤飯炊かなくっちゃ!!』

「…違うってば、母さん」

何だか無性にこそばゆくなっていく。うちの母はどこかおっちょこちよいでそそっかしい所があるからなあ…。

それにお赤飯の意味が違うから、俺は女の子じゃないからな。…変身中は除くとして。

「とにかく! 今来ているのは学校の友達だよ!! 偶々忘れ物を届けてくれただけ!!」

流石に異世界から来た少女と同居していますとは言えないので、適当な嘘をでつちあげる。

『…あら、そうなの？ 光太郎も恥ずかしがることないのに…』
「意味が分かんないだけだよ。母さん一人で勝手に盛り上がって、勝手に納得しちゃっただけじゃん…」

光太郎の母、丹羽重美はこの間40歳を迎えたばかりで、高校生の息子を持つ母の中ではまだまだ若い。うちの両親は結婚したのも相早かったらしいし、父さんも若い。そのせいなのか、母さんも学生気分が抜けていないのかもしれない。

『でも良かったわ、光太郎もそっちでうまくやっているみたいじゃない！』

「…まあ、ね」

地元を離れて、もうすぐ2か月。少ないけれど友達は出来たし、変わった日常は送っているもの、生活は充実していると言えるのかもしれない。

『お母さんどうしても心配だね。都会は色々な誘惑や欲望が多いってネットで見ているから…』

「ネットでの情報を全部信じないでくれよ…」

『登校拒否とか、イジメとかないわよね？』

「ないよ」

『カツアゲとか登校拒否とかは？』

「ドラマとよくないニュースの見過ぎだと思うよ、母さん」

まあ、ウチの学校はドラマや漫画並みに相当カオスな世界と化しているが…。

『あらそうなの？ 今時の学校は、江戸時代の牢屋敷みたいだってお母さん聞いたことが…』

いつの時代のどこの世界の情報なんだそれは。

「よく分かんないけど、母さんが心配することは全然」

『めがーねめがーね、太陽は眼鏡、海王星も眼鏡、なんかもう全部』

「…はっ。」

俺は絶句した。今、携帯から聞こえてきた声は嫌という程聞き覚えがあり、そして奇妙に思ったからだ。今の念仏じみた歌声は、でもまさか、あいつがあんな宗教じみた謎の歌を歌いあげる訳が…！

「あの…母さん？」

『なあに光太郎？』

「今の声さ…俺の聞き間違いじゃなかったら…ノブだよな？」

信じたくはなかった。最近、奇人変人が蔓延る世の中になっているけれど、あのノブが…？家を出る時、最後にあった時、あんなに堅物で真面目だったノブが、まさかそんな…。

『当たり前じゃない。光太郎、あなた自分の弟の声も忘れちゃったの？』

「あああああああああ!!」

ああ神は死んだ。神様よ、あんたはあんなに真面目だった、俺のたった一人の弟すら、変人へと染め上げてしまったのか。

『お母さん嬉しくってね！ 信彦が、やっと夢中になれるものを見つけたらしくって、この間お赤飯を…！』

「何で止めなかったんだよお母さんんんんん!!」

丹羽信彦（のぶひこ）、通称ノブ。俺の2つ下の弟であり、現在中学2年生。

俺がまだ実家にいたころは真面目を絵に描いたような奴であり、普段は大人しくて、今さつき電話越しで聞いたような電波ソングを口ずさむなんてことしない奴なのだ。

『いやなんかね、アイドルにハマっちゃったらしくって、今はおっかけをやっているらしいのよ！ オタ芸っていうのかしら、激しい踊りも庭で踊っていたわよ？』

「嘘だろ…？」

『名前は…なんて言ったかしら？ 確か…そうそう！ イズナ…』

『違うよ母さん！ 眼鏡を愛し、眼鏡と共に生きるニューフェイス！』

善沙闍子（いいすな・あんこ）ちゃんだあ!!』

『ああそうそう！ そんな名前のアイドルにハマっちゃっててね…あれ、光太郎？』

「……………」

俺はただただ絶句するしかなかった。『男子三日会わざれば、刮目して見よ』というが、ノブの変わりようは、その比ではない。あんなノブの叫びは聞いたことないし、もの凄い太い声での叫びも聞いたことなかった。

あんなに真面目だった優等生が、ある日を境に突如露出魔に変貌くらしいの変わりようだ。

「…ノブと変われるかな？」

『？ 全然いいけど…ちよつと待つてね！』

そう言うのと、ドタドタと階段を上がり、ノブの部屋へ行く足音が聞こえてくる。そして二言三言話したかと思うと、電話相手はノブへと変わった。

『あつ、久しぶり、兄さん！』

「…おう、久しぶりだなノブ」

『どうしたの？ 俺と変わりたいだなんて…』

「いや…兄ちゃん、一つ聞きたいことがあつてな」

『何だよ兄さん？』

『お前さ…この2カ月で何があつた？』

するとノブはピタリと会話を止め、ふふふと笑い始めた。

『ふ…それを説明するには、聞くも涙、語るも涙の壮大な話があるんだよ、兄さん！』

「いいから早く言ってくれ」

そして、ようやく説明を始めたノブは、エンドレスに流れる例の電波ソングのせいでテンションがうなぎのぼりになっており、たびたび会話の脱線が起こった。その度に俺が修正し、時間はかかったものの、何とか話を理解するに至った。

つまりは簡潔にいうとこういうことだ。

ノブはつい最近デビューし、偶々ウチの町の近くに営業に来たアイドル、善沙闇子にドハマリしてしまったらしいのだ。世間はツイントイルズばかり人気ではあるが、ノブはそちらではなく、無名ながらも一生懸命に頑張っている善沙闇子の魅力に取りつかれてしまったら

しいのだ。以来、あの電波ソングをエンドレスで聞くことは勿論のこと、視力も悪くないのに眼鏡を買ってしまったというほど。

どうやらその意気込みから、にわかとかではなく、本気で善沙閨子なる新人アイドルを応援しているらしいのだ。

「…まあ、俺は人の趣味にあれこれ言うつもりはないけど…迷惑だけはかけないようにな」

『はは、分かっているよ兄さ…来た来た来たあああああああああああああああ！』

すると突然ノブは叫んだかと思うと、声変わりが終わったばかりの野太い声で、歌い始めた。電波ソングが最後のサビに入り、ラストスパートを迎えたのだ。

『めがーねめがーね！ 太陽は眼鏡！ 海王星も…』
「……………じゃあな、ノブ。元気でいろよ」

俺はそつと通話を終え、携帯をテーブルの上へ放り投げると、キツチンへと戻り、ロールキャベツ作りを再会するのだった。

「ねえ、光太郎？ あんた大丈夫、顔色悪いわよ？」

「ああ、大丈夫…うん、大丈夫だからさ」

「お母さんは元気だったの？」

「ああ、大丈夫…うん、大丈夫だからさ」

「…」

俺は呆然としながらも、あれだけ堅物だったノブをメロメロにさせてしまった善沙閨子という新人アイドルは、今後きつと伸びるのだからなあとしみじみと思ったのである。

第39話 唇とツインテール

時刻は午前4時を回っていた。真夜中もいい所で、子供どころか大人ですら眠りに入っている時刻だ。

勿論、俺も布団に包まりながら睡眠を取っていた。レイチエルもぐっすり眠っており、朝6時半にセットしている目覚ましが鳴るまで、2人はそのまま寝ているはずだった。

だが、レイチエルの枕元に置いてあるパソコンが突然点灯したかと思っただけの時、けたたましいアラート音が部屋中に鳴り響いた。

「!」

瞬間、レイチエルはガバツと布団から身体を出した。眠そうな目をしてしたが、アラートがわんわん鳴っているパソコンを見るなり、しゅつきりした顔つきになる。

「敵か!」

俺もアラート音でたまらず飛び起きて、布団の上で中腰の体勢になる。大抵は昼間に出現するアルティメギルだったが、今回は真夜中の出現か。それが敵による嫌がらせのように感じてしまい、つい苛立ち混じりの声色へと変わってしまう。

レイチエルも同じような気分らしく、大きな声で返答してきた。

「…そうね、敵よ! しかも今回は海外に出現したわ!」

「海外!」

「…ハワイよハワイ! こつちとの時差は19時間差、あつちは朝の9時からいつてことになるわね。あつちの時間では絶好の侵略日和って事ね」

「〜! 半日以上離れているじゃねえか!」

また面倒くさい所に出たもんだ。言葉が通じないものだから海外は非常にやりづらい舞台なのに、時差が半日以上離れている国に出現するだなんて…。

(授業中に寝ないように気をつけなくちゃな…)

眠い目を擦って、無理矢理意識を覚醒させながら、そう思う。出来ることなら、早く終わらせて通学までの睡眠時間に当てたい。

更に悩みの種はそれだけじゃない。俺のテイルドライバーは現在、レイチエルに預けたままだ。リヴァイアギルディ戦で武装のほとんどを壊してしまったので、修理には時間がかかりそうだった。はたして間に合っているかどうか…。

「…はい」

するとレイチエルは心配ご無用とばかりにテイルドライバーをベッドの上へと投げた。

「直ったのか!？」

「修復率は7割ちよつとつて所だけど…:戦闘には支障は無いわ。ある程度の機能は直したからね」

ひび割れていた外見はすっかり綺麗に直っており、レイチエルの言う通りに、ある程度の修理は終わっているということを示していた。

「ありがたえ！」

「でも気を付けて！ 左腕の修理はまだ完全には終わっていないの！」

左腕の武装は使えないわ！」

「…大丈夫だ、問題ない！」

ファイヤーウォールと属性玉交換機構エレメンタリーシジョンが使えなくなつたって、戦える。

右腕さえ使えるのならば、問題はない。いざとなつたら、懐に飛び込んでカウンターでも食らわせてやるさ。…またブルーに怒られてしまふかもしれないけれど、その時はその時だ。

「…そう、じゃあ転送、行くわね！」

「おう!!」

あつという間に変身を完了した俺は、レイチエルの転送によって、遙か彼方にあるハワイまで瞬間移動を果たすのだった。

※

視界一面に青い海と大空が広がる常夏の国ハワイ。

太陽がさんさんと輝くサンセットビーチには壊滅的に似合わない戦闘員が水着美女を追いかけ回しており、水着美女たちは悲鳴をあげていたが、どうも下手なコントのようにはしか見えない。

もう完全にアトラクション感覚だ。こっちは眠い目擦って出動しているのに、ビーチに降り立った途端にそんな間抜けな光景を見せられたら脱力せざるを得ない。

「先に来ていたのかファイヤー!」

「あんだ、今日は随分早いよね」

「今日は俺が一番乗りらしいですね」

丁度、転送してきたレッドとブルー、イエローは同じような顔つきで俺に挨拶をすると、現場へと降り立った。皆、俺と同じように眠そうな顔つきをしており、そのことからさつきまで寝ていたんだろうなということが容易に想像できる。特にイエローはまだ眠気から覚めていないらしく、気を抜いたらまた寝てしまいそうなほど、うとうとしていた。

「お、おはようございますわ…」

ふわあと大きな欠伸をかみ殺して、イエローは俺に挨拶をするが、すぐまたうとうとし始めてしまう。彼女のツインテールもどこか不調のようだ。

これは不味いなと思い、俺はイエローの元へと近づいた。イエローは銃撃タイプの戦士であるから前線には出ないけど、これでは敵に狙ってくださいと言っているものではないか。

「だ、大丈夫?」

「!」

俺がすつとイエローへと近づくと、彼女はカッと顔を茹でダコのように真っ赤にし、猛スピードでレッドの後ろに隠れてしまった。

「え!」

俺は思わずすつとんきよんな声を上げてしまった。挨拶を交わして数秒、いきなりイエロー側から拒否られる行動を取られるとは。

(…暴走は起きていないよな?)

一瞬、俺は時折やってしまう、見事なツインテールを見たら暴走してしまうあの病状が起きてしまったのかと思ったが、それは勘違いだったようだ。あの時起こる、身体の熱さは今は感じないし、最近は自分でも自制が出来ているし。

ひよつとすると、何か俺は彼女に嫌われる行動でもとってしまったのだろうか？ イエローはそういうことを結構気にする人っぽいから、気をつけなくちゃならないって分かっているんだけど。

やっぱり性別の壁は大きいなあ…。

「い、いえ。何でも…何でもないのですわ…！」

ちよこんとレッドの後ろから顔を出して、イエローは小動物のようにこちらを見ている。

「そ、それならいいんだけど…。もし調子が優れないのなら、今日は帰っても…」

「だ、大丈夫ですわ！ 今日、今日の私は前回までの弱い私とは違うのですから！」

「は、はあ…」

「生まれ変わった私の力、存分に見せて上げますわ！」

レッドの後ろで隠れているのと、どこか自信ありげな口調で語るイエローの行動が矛盾している気がするのだが、このやり取りで眠気は覚めたらしく、しゃつきりした顔になった。

だが俺はやっぱり心配だった。本人がああ言っているにしても、何だかはあはあと息が乱れているし、身体をうずうずさせているし…風邪でも引いているんじゃないだろうか？

『…まあ、本人がやるって言っているんだから大丈夫なんじゃない？』

レイチエルは何だか呆れたような声でそう通信してきた。

『ヤバくなったなら、あたしがこの前みたいに指示を飛ばすわ。…それとね、一つ言っておくわ』

「？」

『今のイエローは十分戦えるほど成長しているんだけど…その…驚かないでね』

「はあ？」

何がだ、と聞きたかったが俺は見事にタイミングを逃してしまった。敵が目の前に現れたのだ。

「あゝ、あなたたちが噂のツインテイルズですかあゝ」

「何だあいつは!？」

砂浜に現れたエレメリアンは、地面に踵をつけずにフワフワと浮いていた。そして、そのエレメリアンにすぐに違和感を抱いた。

「蝶…昆虫?」

今までのエレメリアンは、ワイバーンやリヴァイアサンなど伝説上の生物やハリネズミやキツネなどといった実在する動物がモチーフのものばかり。目の前にいる蝶のような昆虫タイプのエレメリアンは今まで見たことが無く、身に纏っている雰囲気から、そいつが今までの敵とはどこか違うのだということが分かったからだ。

ダークグラスパーの襲来に合わせたかのように、未確認タイプのエレメリアン。これは偶然ではないだろう。

「あ、どーもです。私、パピヨンギルデイと申しまして…：…ダークグラスパー様直轄部隊にして、アルティメギル四頂軍の一角、美の四心の先鋒でして、ええ、あと唇属性リップの為に戦っております、はい」

「…ああ、そうなんですか」

「私はツインテイルズのこと大好きなんですけれど、敵同士ですから戦わなくちゃいけないんですよ。今日は互いのベストを尽くして、頑張りましょうね」

「どうも…」

蝶型のエレメリアン、パピヨンギルデイは腰の低い外回りのサラリーマンのような雰囲気、自己紹介と戦いに対する意気込みを語る。またもや脱力しかけたが、その雰囲気と反比例した大層な肩書きを矢継ぎ早に告げられ、混乱してしまう。

「アルティメギル四頂軍の一角…：…美の四心の先鋒、パピヨンギルデイ！ いよいよ敵も強力な増援を仕掛けてきたのですね…！」

「記憶力いいんだな、イエロー」

「そ…：そんなこと、急に言わなくても…：はあん」

「…。」

色々告げられた重要な情報に苦悶している俺たちとは違い、イエローの記憶力は凄まじかった。…また変な声と共に、もじもじ身体をくねらせるのは疑問だったが。

「…つまりは、今までの敵とは違うってことだな！ いくぞ、レッド

！」

「OKだ！ みんな、気を引き締めようぜ！」

俺たちはそれぞれの武器を構え、戦闘態勢に入るが、パピヨンギルデイはうっとりとしたような表情で、俺とレッドを見ていた。

「レッドもファイヤーもやっぱり可愛いですわ、やっぱり姉妹っていいですね。でもまずは…」

じろりとレッドの目を見つめるパピヨンギルデイ。

「…何だよ？」

パピヨンギルデイは、蝶特有のどがった口を撫でながら、恥ずかしそうにこう述べた。

「テイルレッドさん、その…あなたのですね、はは、唇が欲しいのですわ」

ビュオン！ 言い終わるが終わらないかのうちに、パピヨンギルデイ目がけてブルーの槍が投げられ、パピヨンギルデイの身体へと飛んでいった。

離れている俺たちとパピヨンギルデイの距離は約20メートル。ここから獲物目がけて投げ槍を放つのは、アフリカのジャングルとかにいる裸族だけだと思っていたのだが、どうやらそれは違ったらしい。そのカテゴリーにテイルブルーも付け加えなくてはならないらしい。

砂浜という足場の悪い環境をものともしない、見事なまでの早業だ。ブルーは今日も絶好調のようであったが、何故か顔を真っ赤にしていた。

「いや、中々凄い挨拶ですね、生まれて初めてですよ、槍なんて投げられたのは」

「効いていない!?!」

しかし、パピヨンギルデイは投げられた槍を自分の身体に当たるギリギリのところでキャッチしており、ダメージを受けていなかった。

驚愕する俺たちを余所に、平然としているパピヨンギルデイにブルーはキレた。

「つぎっけんじやないわよ！ 誰があんたなんかに渡すもんですか！

…あなたが外国に現れた理由が分かったわ、日本と違って挨拶代わりだものね！」

「女性の唇を何だと思っっていますの！」

『所有物のように言うのは気に入りませんが、その通りです！ 身の程知らずに思い知らせてやってください!!』

槍を防がれたことよりも、敵の態度に怒りを滾らせるブルーとイエロー。どうやら向こうの通信先の人物も怒っているらしい。

(…でも、どつかで聞いたことあるような声だな?)

通信先の声は、どこかで聞き覚えのあるような気がするのだが、どうも思い出せない。…まあ、いいか。

「？」

レッドは小首を傾げているが、その方がいいと思う。2桁いつているか分からない子に唇云々の話題は少し早い。女の子のファーストキスは凄く大事なんだから。そもそも日本でそんなこと言ったらレッドファンの皆に殺されるぞ。

するとパピヨンギルデイは羽を飛ばたかせ、動色に輝く鱗粉を放出し始める。

「…!?!」

鱗粉はあつという間に凝縮し、ノートサイズほどの銅板へと変化する。

「さくどうぞ、行ってくださいい〜」

完成した無数の銅板が合図と共にターゲットであるレッド目がけて殺到する。

「ファイヤーウォー…しまった!?!」

とっさにレッドの前に出て、故障中の左手を突きだしてしまった。さつきバリアは使えないってレイチェルから説明を受けたばかりなのに、いつもの癖でやってしまった。

当然だが、左手からはバリアは展開されず、見る見るうちに銅板は近づいてくる。

「危ないですわっ!!」

するとイエローは胸アーマーからホーミングミサイルを発射し、銃

を逆手に持って銅板目がけて突撃を始めた。

ミサイルを砂浜目がけて着弾させ、大量の砂が舞い上がらせることで、銅板の動きを止める。そしてその隙に銃をトンファーのように叩きつけて、銅板を粉碎した。

「おお……！」

レイチェルの言う通り、イエローは見違えるように成長している。まるでヒーローみたいじゃないか。

だが、短いヒーロータイムはここで終わりを告げた。イエローは何故か脚部アーマーを丸々パージして、優越そうな表情を浮かべた。解放した胸がたゆんと揺れる。

「ん？」

あれ、何かおかしいぞと思ったが、イエローの奇妙な行動はまだまだ続く。

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ——！！」

イエローの全身に装備されている砲門が一斉に火を噴き、パピヨンギルデイにダメージを与える。

ブルギルデイ戦で見せた一斉射撃を一人で行っているのは称賛出来るのだが、何故かイエローは撃つたびに身体中に装備されている重火器をパージしているのだ。

訳が分からない表情をする俺を見て悟ったのか、レッドは申し訳なさそうに呟いた。

「その……イエローは強くなったんだけど！ ……代わりに露出癖に目覚めちゃったんだ！」

「…何がどうすればそんな結末になる!?!」

「本当に……めんファイヤー！ ……あの場にいた俺が無理矢理にでも止めるべきだったんだ!!」

クラーケギルデイ戦に介入してきたイエローは、戦う内に覚醒を起こし、脱衣による快感を味わってしまったらしい。そしてそれがもろに今の戦闘スタイルに反映されているのだ。

「あははハハハハハ——！！」

もう気分がハイになってしまっているのか、もの凄くいい笑顔で重

火器を乱射しまくるイエロー。そして撃つたびにアーマーが脱がれていき、肌の露出が酷くなっていく。

と、ここで先輩からの強烈なダメ出しが入った。

「何で脱いじやうの!? しかも真っ先に胸アーマーを飛ばして!! それは一番最後に取っておいて! どうしてもどうしようもない時だけ、断腸の思いで脱いで!! 胸アーマー!!」

胸というワードを強調するブルーに何か私怨的なものを感じてしまう。まだ胸を気にしていたのか…。

「で、でもテイルギアにはフォトンアブゾーバーという光膜が全身を覆っているから、装甲を脱ぎ捨ててもさほど防御力は問題ないと…」
おろおろとしながら反論するイエローであったが、ブルーはここで引き下がらない。たゆんと揺れた胸をぐぬぬといった視線で見ながら、更に論破していく。

「ヒーローになりたいのならむやみやたらに脱いじや駄目でしょ!

そんな布みたいなのアンダーウェア一丁で戦っちゃ駄目!!」

「う、う…」

ブルーの説得を受けて、迷いが生じ始めているイエロー。すると、ブルーの視線は俺の方を向いた。

「ほら、あんたもなんか言いなさい!」

「えっ!」

「えっ、じゃないわ! あんたも説得に加わってよ!!」

「!」

ぐいと引つ張られて、イエローの前に立たされる俺。そんな俺に、イエローはまたもや茹蛸のような顔になってしまう。

「お、お姉さま…も、申し訳ありません」

「お、お姉さま?」

そう言うイエローの目はウツトリとしており、とろけたような声を発する。

「はい…あなたは私の…お姉さまです…! 私を変えてくれた、お姉

さま…!!」

「……………」

「ほら、こういふことなのよ…」

俺は顔をこわばらせてしまった。確かに世の中にはそういった路線で応援してくれるファンもいるけれども、まさか身内にまでそう呼ばれる日が来るとは…。

「…とりあえず、着よつか？」

ガチャンと脱ぎ捨てたアーマーを一つ拾うが、イエローはぶんぶんと首を振る。

「…その…どうして、脱いじゃうのかな？」

すると、イエローはぱあつとした顔になる。よくぞ聞いてくれた！といった感じなのだろうか。

「これが、本当の私だからです！…本当の私を、皆に見て欲しくて…このおかげで私は覚醒して、ヒーローになることが出来ましたのにお姉さまも褒めてくれると思ったのに…」

イエローは『脱衣を行って何が悪い』といった戸惑いの表情で俺を見てきた。

「う、うん…立派に戦えているのは凄く嬉しいんだけど…」

「でも、真っ先に胸アーマーを飛ばしたのは良かったと思いませんか!？」

「その前提でもう間違っているわ」

ブルーが残念そうな顔でそう呟いた。

そもそも各アーマーに装備されている武器がイエローのギアの長所なのに、脱衣という行為で全部それをドブに捨ててしまっているのだ。モラル云々よりも戦闘面に関しても不味すぎた。

「その…女の子が簡単に脱いだりしたら色々とマズイし…今、凄いと…」

「えっ?」

「今のイエローの身体は、黄色より肌色の方が多んだって」

アンダースーツ一丁のイエローはあちこち素肌を晒してしまっている。ギアのメインカラーの黄色が霞み、肌色の方が主張を上げているのだ。これじゃヒーローとは言わない、ただの痴女って言うのだ。

「日曜朝のヒーローだって、戦いながらスーツを脱いだりしないし…」

ヒーローを目指すのならば、脱衣は控えてくれないかな…?」

そう説得する俺であったが、ここでイエローは予想外の反撃をしてきた。

「そ、それを言ったら…! お姉さまだって戦闘中、脱いでいるではありませんか!?!」

「はあ!?!」

まさかのカウンター攻撃に、俺とブルーの声が重なり合う。

「ワイバーンギルデイの時もリヴァイアギルデイの時だって…お姉さまはいつもアーマーを壊して、素肌を晒しているではないですか…! あれは脱衣なのでしよう!?! 皆に見てもらいたいから、ああしているのではありません!?!」

「いや、それは…!?!」

「じゃあどうしてお姉さまの大切な所だけはしっかりと隠れて、あちこち破れたりするのですか!?! 私だってお姉さまみたいに強くてたくましいヒーローになりたくて…脱衣を行っているのに…!!」

イエローはそう言うと、涙目になってしまった。

これはヤバい。ああ言えばこう言ってくるし、言い返すたびにこっちが追い込まれていく。

「あ、あの…ブルー、助けて…?」

だがさつきまで近くにいたはずのブルーはいつの間にかレッドと共にパピヨンギルデイと熱い戦いを繰り広げていた。

「叩き落とす! 銅板は一枚残らずぶっ壊すわ!」

「あら〜そんなこと困ります〜」

レッドに襲い掛かろうとしている銅板を一枚残らず叩き落としている。

(に、逃げられた…)

まさかのブルーの逃亡に啞然とするファイヤーであったが、事態はますます酷くなっていく。

イエローのコンディションだって下がってきているし、このままでは戦闘継続も困難になってしまうかもしれない。…というか、俺も覚醒の片棒を担いでもっていったのか。

『…ファイヤー！ あたしと変わりなさい!!』

「レイチエル!？」

『ここからはあたしが説得するわ!!』

そう言うのと、レイチエルはイエローのギアに通信を繋げた。

『久しぶりね、イエロー！ 元気だった?』

「!? レイチエルお姉さま!!」

ぱあつとイエローの顔が明るくなったが、それ以上に重要なワードが飛び出ていたことに俺は気づいてしまった。

「…！ おま、お姉さまつて…!」

『悪いけど、あたしもイエローを目覚めさせてしまった原因の一つでもあるの…尻拭いはするわ…!』

そう言うのと、いつにもなく真剣なレイチエルの声が始まった。

『ねえイエロー？ 官能小説で痴漢物つてどうして人気があるシチュエーションだと思う?』

「…!？」

イエローの顔が羞恥で真っ赤に染まった。俺も同じように染まった。まさかハワイのビーチで、官能小説と痴漢というワードが出てくるとは思わなかった。

「お前何言つて…!」

『あんたは黙っていて。これは説得に必要なことなのよ』

レイチエルは真剣な口調でそう言うが、その口調と話すワードの差が激し過ぎる。

『痴漢つて脱衣と似ているのよ。人がいるという状況、移動する車内、変わる景色…誰かに見られてしまうというシチュエーション。『脱ぐ』という行為を場所と人がいる空間で行う…脱衣と似ているとは思わない?』

「思いますわ…!」

そこは納得しちや駄目だよイエロー。

『そうよ…イエロー、皆に見られているという中で気持ちが高ぶるのはおかしいことじゃないの。でも…何でもかんでも脱いでいる今のままじゃはいつか限界がくるわ…!』

「？ 今の…ままで？」

『そう…あなたはきつと今の快感じゃ満足できなくなってしまう…マ
ンネリ化が必ず起こるわ!!』

「——!？」

それはヒーローにも繋がる事だった。

毎週毎週同じピンチ、同じ展開、同じ必殺技…お約束と言ってしま
えば聞こえはいいが、視聴者もいつかは飽きが来てしまう。だから
ヒーローはあらゆるシチュエーションで戦ったり、普段は組まない面
子で戦ったり、発想を転換させてピンチを切り抜けたり…とマンネリ
展開を打破している。

脱衣にも同じことが言えてしまう。確かに目覚めたばかりの今は
それでいいかもしれない。

でも人とは慣れてしまう生き物だ。いつかはその快感が普通に思
え、更なる快感を…。永遠に終わらないイタチごっこの始まりだ。

『じゃあ話を変えるわね。ファイヤーのアーマーが砕けて、素肌を見
せるのは何時か分かる?』

「…自分よりも強敵や格上の相手としか…」

『そうよ、ファイヤーは限られた状況下でしか脱衣を行わない…!
何故だか分かる!』

「それは…」

『タイミング、シチュエーション…本当に脱ぐべきタイミングをファ
イヤーは見極めている…! 全てが重なり合ったシチュエーション
で最大限の効果を発揮する時にしか、ファイヤーは脱衣を行わないの
よ!!』

「な、何ですって!!」

ああ畜生。通信先の相手にロケットパンチを飛ばして黙らせる方
法はないのだろうか？

『ファイヤーは強敵と戦って、勝利を掴むという最大のシチュエー
ションでしか脱がない…何故なら、本当においしい瞬間を知っている
からよ!』

「——!!」

そう、アニメでの燃える展開と同じだ。その瞬間に行う行動や仕草は、ここぞという時に輝く。最大の山場で見せる演出なんかは特に視聴者を釘付けにする。

痴漢も同じだ。数々のシチュエーションが重なることで通常のプレイとは違った快楽を得ることが出来る。

『ここまで言えば分かるわよね？？ あなたはいつか何でもかんでも脱ぐスタイルでは満足できなくなる…でも、ここぞという時にまで我慢し、最高のタイミングで行ったとき！』

「行ったとき…？」

『あなたは、味わったことのない快楽と共に、ヒーローになれるわ…！』

こんな間抜けな説得、聞いたことない。イエローは真剣な表情で聞いているのが居た堪れない。

『それと…ファイヤーはね、少し不器用な所があるの…今日みたいにね…。だからあなたが後ろで支えて上げて…！ ファイヤーの拳とあなたの銃撃が合わされば、敵はいないわ!!』

「!!」

『そして、あなたの必殺キックは最後の切り札として取っておくべきよ！ 普段は隠して、ここ一番でとっておきを見せるのも、燃えるシチュエーションの一つ！ じゃあ健闘を祈るわ!!』

レイチエルはさりげなく、砲撃なのに接近戦ばかりするイエローをフォローするような発言を残して、通信を切った。…それが出来るんだったら、前半戦ももう少しまともな説得が出来たんじゃないだろうか？

「お姉さま…」

するとイエローは申し訳なさそうな顔をしながら、こちらを見てきた。

「レイチエルお姉さまの言う通りですわ…お決まりのパターンは、いつか飽きられてしまう…そのようなことにならないように、お姉さま方は気を遣ってくださいったのに…私が、私の配慮が足りないばかりに…！」

「え、いや…そういうことじゃ…！」

「いえ、何もおつしやらなくてもよろしいのです！ 私は、私は…！」
するとイエローは突然立ち上がったかと、パピヨンギルデイ目がけて駆け出した。

そして俺は即座にレイチエルへと通信を繋げた。

『なあに？』

「なあに？ じゃねえ！ お前、本当にいい加減にしろよ!!」

『…でも、大体あつていたでしょ!？』

「お前さ、辞書で一回大体つて意味、調べてみる。かすりもしてねえぞ…」

レイチエルの妙な説得は自分もどこか納得しかけてしまったが、待て待てと踏みとどまった。

嘘を言っているんじゃないかと、事実を膨らませている分、レイチエルは性質が悪い。

『…でも、これでむやみやたらに脱ぐことは防げたと思うわ。大事なのはシチュエーションとタイミングだつて説明したし、これで脱ぐ頻度が下がればいいんだけど…』

「だと、いいんだけどな…」

レイチエルが行った説得は、果たして効果を発揮してくれるのだろうか？ …してくれたらいいんだけどな。

※

「はああああああああああ!!」

「あら〜脱ぐツインテイルズさん、もうお話はいいのですか〜」

飲むヨーグルト的な謎の呼称を付けられたイエローは駆けだしながら、自分が脱ぎ捨てたアーマーに意識を集中させた。イメージするのは、脱衣した服をもう一度着る感覚。露出の時、ばれそうな瞬間にトレンチコートを着るように…。

「戻つて来て下さいまし…着^{フット・オン}衣!」

すると木陰に隠していたアーマーが数度動き、独りでにイエローの

元へと戻っていく。そして腕に、足に、胸に…バラバラだったアーマーはイエローの身体に再び装備される。

「あらあら〜」

その光景にパピヨンギルデイは落ち着いて指を鳴らすと、戦闘員がぞろぞろと集結し、イエローを止めようと一斉に襲い掛かってくる。

「一斉解放ですわー!」

するとイエローは素早く肩アーマーだけをパージさせ、イエローの左右にいる戦闘員へと当ててる。そしてパージしたアーマーにあるバルカンが時間差で解き放たれ、辺り一面に弾丸の雨を降らせる。

「!」

戦闘員が怯んだその隙に銃を展開、まるでグルグルと踊るかのよう回転し、銃を乱射し始めた。四方八方に乱れ飛ぶ銃弾を戦闘員や銅板、パピヨンギルデイをまとめて叩き込む。さらに追加分だとばかりにレールガンとニードルガンも追加される。

「乱れ撃ちますわあ——!!」

それは大変ロマンあふれる光景だったが、見境のない全力砲撃に、俺やレッド、ブルーなど関係のない面子まで弾丸が降り注ぐ。

「あつぷ、危ない!!」

「だあああああ、脱がないと思っただらこれかあ!」

剣で飛んできた弾丸を叩き斬るレッドと叩き落とすファイヤー。いつの間にか集まっていた後ろのギャラリーにまで攻撃が及ばないように何とか被害を食い止めようと頑張っていた。

「もう、もう…:私ほむやみやたらに脱ぎませんわ…でも、でも…!」

この火照った身体は誰にも止められませんか——!!」

肩アーマーを戻したイエローはトリガーハッピーに目覚めてしまったのか、ファイギュアスケート選手みたいに回転しながら弾丸を放つため、ねずみ花火が爆発したかのような悲惨な状況になっていた。あははと笑いながら、銃を撃っていた。

レッドとファイヤーは飛んでくる弾丸を叩き落とすことで精一杯だ。手が空いている奴といえば…。

「ブルー!」

「頼む！ イエローを止めてくれえ!!」

「…属性玉——スクールスイム学校水着属性!」

するとブルーは砂の中に潜って、弾幕を回避する行動に映った。
「おお……」

リヴァイエギルデイ戦で見せた戦法にファイヤーは期待したが、いつまでたってもブルーは砂の中から現れない。ビーチには、イエローの笑い声とパピヨンギルデイの悲鳴だけが聞こえる。

で、つまり——このことから分かることといえば…。

「に、逃げやがった……」

レッドは信じたくない残酷な現実をようやく悟ったのか、愕然とした顔になった。俺も同じような顔になった。

「さあ、いきますわよ……」

イエローは回転を辞め、ツイントールを砂浜へと突き刺し、必殺技の体勢に入る。

ガシャン！ 肩、背中、足元……イエローの全身にある、ありとあらゆる砲門が開き、パピヨンギルデイを捕える。

発動するのは、クラーケギルデイ戦に使ったキックではない。最初の戦闘で、ファイヤーと共に放った……テイルファイヤーとの連結技を一人で発動させようとしているのだ。そして、ピピツと全砲門をパピヨンギルデイへとロックオンする。

「…… ジェネレイト！フル!! バーストオ!!!」

全身の砲門が一斉に火を噴いた。レールガンが、ビームが、ミサイルやバルカンが一斉にパピヨンギルデイ目掛けて打ち込まれる。

「あく、そういえば戦力の把握が目的でした、いや、ダークグラスパー様に怒られちゃいますね」

全身を撃たれたパピヨンギルデイは呑気な遺言と共に爆発四散した。最初に使った必殺技を、しかも一人で放つという燃える展開なのだ、どうもこれに燃えてはいけない気がする。

「き、気持ち……いいですわ……!!!」

するとイエローは顔を真っ赤にして、さつき纏ったばかりのアーマーをどんどん脱ぎ捨てていく。身体からは湯気が立ち上っており、

第40話 喪失とツインテール

異空間を漂う、とある一隻の小型艇。

その一室では欧米の自宅にあるような暖炉が焚かれており、木製の椅子に座って穏やかそうに編み物を楽しんでいるエレメリアンが一人いた。

そのエレメリアンの爪は鋭く、口には犬歯があり、頭はなんと3つもあった。まるで地獄の番犬、ケルベロスを思わせる風貌であったが、その表情は大変穏やかであった。

まるで一瞬、恐ろしげな外見であることを忘れてしまう程、優しげな光景が繰り広げられていた。

「…なかなかの出来だな」

先ほどまでせわしなく動かしていた編み棒を横にあるテーブルに置き、怪人は完成したセーターを広げる。丁度胸元あたりの位置に、毛糸で編まれたツインテールの模様が浮かぶようにした、手作りのセーターだ。

「ふふ…」

それを満足そうに眺めていると、自室のドアのロックが解除される音が聞こえ、首の一つをセーターからドアへと移動させた。

「ケルベロスギルデイよ」

挨拶の一つもなく、いきなり入り込んで来た人物から名前を呼ばれても、特に何も思うことは無かった。ここ最近、何度も繰り返されているやりとりだったからだ。

部屋の入り口付近には、グラスギアを見せつけるようにマントを翻したダークグラスパーの姿があった。

「…何度来ても同じだ。会う事はないと申し上げたはずだが」

地獄の処刑人の異名を持つダークグラスパーを前にしても、そのエレメリアンは座したまま態度を変えなかった。まるで乾いた老人。定年退職をしたようなサラリーマンのような雰囲気があった。

「そうもいかぬ…今回は大仕事での…恥ずかしい話じゃが、早速手痛い洗礼を受けた所なのじゃ」

ダークグラスパーは悔しそうな顔をしながら、ロッキングチェアに座っている三つ首型エレメリアンであるケルベロスギルデイにそう言った。

「これまでとは違い、ブレイクが酷く遅く、行き詰っている。まるで地球の侵略状況みたいにな…」

「送られてきた映像は一通り見たが…あれでは駄目だ。ただの模倣ではないか。アイドルとは生物と同じ…過去のブームが今も通じるとは限らんし、ブームなどいくらでも変わる。過去にすぎりついでいるだけでは頂点へは行けぬぞ」

「流石じゃな、もう問題点を見抜きおったか」

「何時までも真似っ子をしているだけでは高みへは昇れぬ。個性が必要なのだよ、何事もな」

ツインテール模様のセーターを丁寧に畳むケルベロスギルデイは、そつとテーブルに置きながらため息をついた。ダークグラスパーの悩みの種はとつくに見当がついている。

「…ツインテイルズ人気の煽りがそこまで来ているらしいな」

「その通りじゃ。敵の立場ではあるが、わらわも敬意を表する最強の戦士はここでも立ちふさがってきたのじゃよ」

この世界の守護者であり、強敵であるリヴァイアギルデイとクラークギルデイの胸囲コンビを倒したツインテイルズ。その人気は下手なメジャーアイドルよりも上であり、彼女らが与えた経済効果は計り知れない。先日ニュースでもハリウッドでの映画化が決定するなど、その人気は火を見るよりも明らかだ。

…まあ、映画化の件は大部分のエレメリアン達にとって不評だったが。曰く「レッドはあんなババアじゃねえ、別の俳優をよこせ」とか「ファイヤーさん役の女優の胸がデカすぎる。デカければいいってもんじゃないの」とか「イエローが脱ぐあの光景を映画化？ 無理だな、ただのストリップショーになるよ」とか「そもそもブルーの俳優がどうして筋肉モリモリマッチョマンのスキンヘッド男なんだ？」とか色々あった。

ちなみにテイルブルー役に抜擢された世界的アクション俳優、デッ

ク・ニールソンはこの件に関して『確かに僕はテイルブルーに比べたらちよつとだけ筋肉がモリモリだけど、後はさほど差がないって思っているから心配はご無用さ。監督の指名でこの役を受けたんだけど、やる気は満々だよ。ツインテールもカツラじゃなくて、自分の髪を伸ばしてやりたいね』と大変爽やかなコメントをしてくれた。おかげでエレミアンたちは「あー、なるほどね」「このデックって男の胸筋はテイルブルーそっくりだもんな」と納得した。

それについて先日にあったパピヨンギルデイ戦で見せたイエローの脱衣行為も全世界に公開されてしまったせいでエレミアンだけでなく、人間たちも大いに混乱し、世界各地のテレビ局には電話が殺到したらしい。何故か、その内容のほとんどが抗議や批判ではなく『どうして彼女は脱ぐのですか?』という疑問の電話だったらしいが。

…とまあ、良くも悪くも世界中の話題をかつさらっているツインテイルズ。生半可な話題では太刀打ちできなかった。

「それほど強大な偶像アイドルを前に、同じツインテールに対抗しても無駄だ。同じ土俵では明らかにあちらの方が分がある。ここは別の土俵で短期決戦を…別のアプローチで勝負を仕掛けるべきだ」

「ほう、では貴様ならば…何を以てツインテールに挑む? 今現在、ツインテイルズ人気にあやかろうとしてアイドルのほとんどがツインテールにする中で、何で勝負を仕掛けるつもりだ?」

「……二つ編みだ」

それだけを言うと、ケルベロスギルデイは首を戻して、パチパチと燃える暖炉へと視線を向けた。

「助言は与えた。とつとと帰ってくれないか」

「流石じゃな、貴様の着眼点や観察眼…いさかも衰えてはおらぬではないか。何故それを有効に使わない? 腐らせるには惜しい才能だと思うが」

「首領様には既に退職の許可は頂いている、文句は言わせぬぞ。私は戦いに疲れたのだ、何もかもに疲れてしまった」

ケルベロスギルデイはくたびれたような声を漏らし、椅子を揺らした。この小型艇には部下も戦闘員もない、乗っているのはケルベロ

スギルデイただ一人。…その理由は、ケルベロスギルデイ自身が語った通りだった。

ケルベロスギルデイはアルティメギルを抜け、戦いを放棄した。それは云わば、属性力を奪うことを辞め、生きることすら諦めたということだ。

エレミアンの身体は属性力で出来ている。その構成には人間の食事などと同じく定期的な摂取が必要不可欠であり、摂取しなければ自らの身体は崩壊を始めるのだ。補給事態にさほど頻度が必要な訳ではないが、ケルベロスギルデイはその補給すら放棄している。

自らに迫りくるお迎えが来るその日をそつと待っているのだ。

「我が属性の未来の為に、私はあなたと共に戦ってきた。しかし、我が属性は何人もその滅びを止めることは出来ないのだ。…それはあなた自身が証明してしまったではないか」

「言うたであろう。ここが正念場じゃ。最後にもう一度だけ力を貸して…いや、貸すのじゃ」

説得はいっしか命令に変わっていた。ダークグラスパーの語調が強くなったことにケルベロスギルデイも気付いていたが、その態度は変わらない。

「くどくど」

だがその言葉とは裏腹に、ケルベロスギルデイの身体の周りには静かに闘気が立ち上るのをダークグラスパーの眼は見逃さなかった。

「その割には貴様の心とその言葉は矛盾していると思うのだがな」

「……………」

そう指摘されてもケルベロスギルデイは無言を貫き通した。

「…戦いを捨てる自由の為、戦いも辞さぬか。少々荒療治になるが…致し方あるまい!!」

瞬間、ダークグラスパーはグラスギアの背中にある一つのパーツを引き抜いた。獣の尻尾のように垂れ下がっているパーツを鞭のように振るい、ケルベロスギルデイを座っている椅子ごと叩きつけた。

「…むっ？」

だがダークグラスパーは途端に違和感を感じた。確かに叩きつけ、

奴にダメージを与えたのだがあつさりしすぎている。手ごたえが無すぎる…。

「！」

するとダークグラスパーの手を掴み、暗闇の中からケルベロスギルデイが襲いかかって来た。その狙いは首元であり、自慢の犬歯でかみ殺すつもりなのだろう。その頭部は、何故か3つから2つへとなっていた。

「眼鏡エツ!!」

だがダークグラスパーは焦ることなくそう叫び、自分の眼鏡から光線を放つと、ケルベロスギルデイを吹っ飛ばし、地へと打ち付けた。

「ぐおっ…！」

「ふん…番犬風情が処刑人に噛みつけるとでも思うたのか？」

鞭を手にしながらケルベロスギルデイを見下すダークグラスパー。眼鏡越しの冷たい視線は強者の余裕が…いや余裕すら超越した「当然」といった感情があった。

「力比で劣っているのは、ならず者を統率することも叶わぬからな…伊達にこの鎧を纏っている訳ではないぞ？」

「ぐぬぬ…ひ、一思いに殺せ…！」

ケルベロスギルデイは身体を大の字にして、「さあやれ」とアピールするがダークグラスパーはとどめを刺さなかった。既に戦いに興味を示しておらず、鞭をギアに戻すとダークグラスパーは自らのツインテールを弄り始めた。

「ふん、そのままでもいい、わらわを見ておれ。勝利の鍵は三つ編み…か」

ツインテールを大雑把に掴むと、ダークグラスパーは自らのツインテールを三つ編みへと仕立て上げていく。元々彼女の髪はおさげのようなツインテールなので、弄りやすいのだ。

「む…ぬ、ぐぐ…」

だがダークグラスパーは自らの髪を編もうと四苦八苦するが、お世辞にもそれは綺麗だとは言い難かった。人形遊びをする幼稚園児の方がもつと器用に弄れるのではというほど、不器用だった。何とか編

めても、その三つ編みは乱雑でござわっていた。

そしてそれを見ているケルベロスギルデイもまた段々苛立つてきた。ああ、そこじゃない、そこは…。

「〜んもうっ！ 見ていられないわっ!!」

紳士風の口調だったケルベロスギルデイが突如、変貌した。口調も態度も一変し、くねくねと身体をねじらせてダークグラスパーにじり寄った。

「な、何をするのじゃ!？」

「雑だわ！ 手抜きで不器用で…なんてド素人なのかしら!! 素材はいいのにどーして何時まで経っても自分じゃからつきしなのかしらねー!!」

ケルベロスギルデイは軽く髪をなでると、あれほどござわしていた三つ編みがあつという間に解けて元のツインテールになる。そしてまるでセーターを編む時と同じ要領で手を高速で動かし、ダークグラスパーのツインテールを編み込んでいく。

壁のように大きなケルベロスギルデイがくねくねと動きながら編む姿は、見ているこっちの方が目を回しそうなほどだった。

「ああ、お手入れもなっていないじゃない！ またお風呂入るのサボったわね！」

「…別にいいではないか」

「駄目なのよ駄目なのよ！ 髪はすぐ痛みやすいんだから！ キューティクルが壊れちゃっているわ〜！ スプレーをシャワアーとかけて…!!」

トリートメントスプレーをまぶしながらもアミアミと髪を織り交ぜて。あつという間に見事な三つ編みが出来上がった。

「ああその三つ編み…嫌いじゃないわ!! —— はっ?」

歓喜を感じたのは一瞬のことであつた。ケルベロスギルデイは我に返ったように後ずさると、わなわなと震えていた。自分の手を見つめて、足元から震えが這い上がっているかのように怯えていた。

そう、ケルベロスギルデイは所謂…オカマだったのだ。

「流石じゃな…腕は落ちてはおらぬ。女のように繊細な手さばき、男

のような大胆さ。そしてそれらを兼ね備えた技術：まさに職人じや」
編み込まれた髪を嬉しそうに触りながら、ダークグラスパーはケルベロスギルデイに賞賛の言葉を送った。だがケルベロスギルデイは逆に、黙れとでも言いたげな目をダークグラスパーへと送る。

「——これが最後だ…。ただし、私のことは、部隊の皆には黙っておいてもらおう。この本性を知られたら、士気に関わる」

「ふん、これで7回目の『最後』ではないか…じゃが、あるいは本当にそうなるやもしれぬな。存分にプロデュースの手腕を振るってもらうぞ！ アルティメギル一のメイクリスト、ケルベロスギルデイ!!」
「…ならばすぐに取りかかるぞ。今、素敵インスピレーションな三つ編みが下りてきたのだな」

ダークグラスパーとケルベロスギルデイは互いに頷き、握手を交わした。今ここに、協定は結ばれた。

「ではわらわも全眼鏡全霊を以て、これに挑む。貴様の言う通り、既にこの世界はツインテール属性が根付いている。別の属性力を広げぬことでは、本丸を落とすことは叶わぬからな」

そう言うと、ダークグラスパーは不敵な笑みを浮かべた。

そう、アルティメギルの新たな侵略は、今始まったばかりなのだ。

※

その頃、アルティメギルの秘密基地では。

スワングルデイは細長い小包を片手に基地を歩き回っていた。目的はとある人物を探すためだ。

そこら辺をうろついていた戦闘員の話によると、移動艇が置かれている格納庫に目的の人物はいるらしいのだが…。

格納庫にたどり着いたスワングルデイはしばらく歩き回って、その脇にある小さな住居へと足を進めた。

スワングルデイは緊張しながらも、テントの入り口を軽く叩くと、その中からしわがれたような声が聞こえてきた。

「誰だ？」

その声を聞きたびにスワングルデイは悲しくなるが、何とか気力を振り絞って声を出す。

「私だ、スワングルデイだ」

「…何の用だ？」

「お前に届けたいものがあるのだ。…中に入れてくれないか、フェンリルグルデイ？」

するとテントの扉が開かれ、入ってこいという声が聞こえてくる。スワングルデイはテントに足を踏み入れ、目の前にいるフェンリルグルデイの姿に居た堪れない表情を浮かべる。

組織から配給された毛布を座布団代わりにして両者は座り、何気ない世間話から会話を始めた。

「調子はどうだ？」

「あんまり良くはないな」

「…そ、そうか」

「罰の後遺症だ」

そう言うフェンリルグルデイの腕はしわが広がっており、この数週間でどれだけの苦痛があったのかは想像するに容易い。

反逆という行為を行い、粛清を受けたフェンリルグルデイは積み上げてきたキャリアや地位も全てをなく奪われ、雑用係まで転落してしまった。今現在、フェンリルグルデイは戦闘員よりも地位が下なのだ。このエレミアン2人が入っただけでぎゅうぎゅうになってしまいう程狭いテントが今のフェンリルグルデイの住居だ。

フェンリルグルデイはあと一月余りで雑用係から復帰できるものの、その後もあらゆる局面で様々な不利な条件が付きまとうだろう。奴が行った『ツインテールを軽んじる』という反逆はそれほど重い行為なのだ。いかなる理由があったとしても、罪を犯してしまった以上、罰は背負っていかなければならない。

(…しかしだ)

スワングルデイは首を振った。

その為に、ここまで過酷な罰が行われていいものだろうか。スワングルデイはそう思っている。

確かに問題児ではあったものの、何かを変えようと燃えていたフェンリルギルデイを尊敬しているエレミアンも少なくはなかった。

スワンギルデイもその一人であり、肅清が執行された後、皆何となく避けがちになっているエレミアンたちの中では珍しくこうやって話し相手になったり、差し入れをあげたりしているのだ。

「テント生活はどうだ？」

「辛いな。夜は寒いし、昼は熱い。地面が固いから眠りにつけない。飛空艇が格納される時は絶対に起きてしまう」

「私が空いている住居スペースに入れるように申請してやろうか？」

「お前らまで厄介ごとに巻き込みたくはない」

そう言うと、フェンリルギルデイが机代わりに使っている段ボールの上に置かれた携帯電話がチカチカと点滅しているのにスワンギルデイは気付いた。

「携帯、鳴っているな？ 出なくていいの？」

「…今、私は軽作業中ということになっている。携帯なんて仕事中には見れないだろう？」

「…？」

「つまりはそういうことだ、電話やメールなんて見る暇はないのだ。SNSなんて以ての外だ」

だがそれでもスワンギルデイは察することが出来ないのか、首を傾げている。呆れたフェンリルギルデイはため息をつきながらこう言った。

「…地獄の処刑人様からの連絡だ」

「！」

「ついでに言えば、私の携帯も奴にやられた」

フェンリルギルデイが所持している深海魚が威嚇しているようなラメラメの携帯電話。機種変更するにはあまりにもハデハデし過ぎるそれに、皆驚いていたが、これも奴にやられていたのか。

「奴め、メールアドレスを手打ちで入力したあげく、携帯まで勝手に改造しやがった。これは配給品だというのに、お構いなしにやられた」

「……………」

「SNSにも勝手に登録されてな…奴のIDも無理矢理入力された。…仕事中、3分に1回は携帯がなるんだ。休日は1分に1回か？」

「そ、それは…」

「更にスリーサイズも教えられた」

「あ、あ…！」

ダークグラスパー曰く、『好物や趣味などが互いに伝達できなくて何がアドレス交換じゃ』らしいが、余計なお世話だという他ない。

仲間内ですら誕生日までの個人情報ぐらいが精々なのに、それ以上の情報を望まぬのに次々に与えられるのは恐怖でさえあつた。あまつさえ、それほど親しくもない上司のスリーサイズなんて誰が知りたかというのだ。

しかも年相応の、それほど実っていない少女のスリーサイズを知つたということは何だか援助交際でもしている気分で、フェンリルギルデイは気持ち悪くなってしまったほどだった。あまりにも重すぎた。「他の皆に今すぐ機種変しろと伝える。確か倉庫に、電話連絡しかできない機種があつたからな、それに変えておけ」

「…分かった、伝えておく」

「それと最近は振動音ですら奴は見抜いてくる。マナーモードでは危険だ、サイレントマナーが最適だ」

フェンリルギルデイはやつれた顔でそう漏らした。もはやダークグラスパーの方が侵略者と化している今、雑用係であるフェンリルギルデイがあらゆる意味で被害を受けていた。云わばフェンリルギルデイが受け皿になっている状態なのだ。

「すまない…お前ばかり痛みを負ってしまつて」

「別にお前らの為ではない。このままでは別の意味で組織は終わるからな…」

そう言うフェンリルギルデイの姿は哀愁に塗れていた。それでしばらくの間、会話は途切れていたが、スワンギルデイは何かを思い出し、脇に置いてあつた小包を掲げた。

「…ああ、そうだ。お前にな、渡すものがあつたんだ」

「何だ？」

「まあ見ておけ…」

小包から取り出したのは1本の鞘に納められた刀であった。鞘を抜き、スワンギルデイは刃を見せる。

「フェンリルギルデイ。お前の、刀だ」

「…！」

「お前の私物は全部没収されてしまったが…これだけは何とか無事だな」

反逆者となったフェンリルギルデイの私物は紙切れに至るまで全て没収され、鍵のかかった倉庫へとしまわれているが、ダークグラスパーの手によって折られた刀だけは処分という形でゴミに出された。そしてスワンギルデイはそれをこっそりと回収し、鍛冶屋に頼んで折れた刃の修繕を頼んだ。そしてつい先ほど、修繕された刀が戻ってきた。渡したいものとは、これだったのだ。

「さあ、収めてくれ」

スツと差し出された刀にフェンリルギルデイの腕が伸びかけるが、何故かそれを突き返した。

「いらぬ」

「何故だ？ …ああ、金のことは心配するな、はした金では無」

「そういうことではないのだ！」

フェンリルギルデイは怒鳴り声をあげ、拳を地面に叩きつけた。その声はテントだけでなく、格納庫中へと響き渡った。

「〜わざわざ直すなんてことしなくてもよいのだ！」

地面の上に涙がぼたぼた落ちた。歯を食いしばっているが、それでも泣き声が漏れてくる。

「もう私には、剣を握れるほどの属性力などないのだ…！」

「…！」

「私が愛していた、アンダーウェア下着属性はもう…何も応えてくれない。自分の属性力が衰えているのだ…」

それはエレミアンにとって死にも等しい宣告だった。

自分の身体が、属性力の力が衰え始めている。それはエレミアンにとって何よりも恐れることだった。

エレメリアンの身体を構成している属性力はその強弱でもろにスベックに反映される。だが人間と同じく、衰え始めるとその力は弱くなり始めるのだ。…そして最終的には死に至る。

人と違つて死ぬときの苦しみはないが、その分じわじわと圧力をかけられるような恐怖がそこにはあった。

「戦士フェンリルギルデイは、死んだ。もう私には何の価値もない。その刀は質にでも収めてくれ」

「しかし…！」

「二度も言わせるな!!」

再び怒鳴ると、かつての相棒であった刀をひったくり、スワンギルデイへと投げつけた。

「帰つてくれ!!」

そしてスワンギルデイを締め出すと、その入口を閉め、閉じこもつてしまった。

「フェンリルギルデイー！」

スワンギルデイは叫ぶがテントの中にいる人物は何も答えてはくれなかった。何度か呼びかけたが、何も反応がないことに遂にスワンギルデイは折れた。

「…また、来るぞ?」

それだけを言い残して、スワンギルデイは格納庫を去った。彼の手にある、主を失った刀がまるで泣いているかのように煌めきを発していた。

※

テントの中にいるフェンリルギルデイは毛布に包まりながら泣いていた。自分が今陥っている状況に、泣いても何も変わらないのだということとは分かりきっていたが、それでもやるしかなかった。

「私は…！」

フェンリルギルデイはいつも一人だった。アンダーウェア下着属性という属性力を持ったせいで、いつも爪はじきにあっていた。

自分が愛している属性力を誰にも理解されずに、外道だ卑劣だと罵られ：いつしかフェンリルギルデイは同胞のエレミアンたちがどこか嫌いになっていった。

属性力だけで差別され、比べられ、軽蔑されて。それに疲れたフェンリルギルデイは自分を認めてもらう為に、己の力を磨いた。きつと実力が上がれば、皆も認めてくれる。それだけを心の支えとして。

だが、何も変わらなかつた。むしろ地位が上がれば上がるほど、周りは自らの属性力を馬鹿にすることが増えていく。そしてその過程で、珍しい属性力を持つエレミアンたちは肩身が狭い思いをして過ごしているということも知った。

フェンリルギルデイはそれを変えたかつた。だから出世欲は人一倍あつたし、若手ナンバーワンのワイバーンギルデイとまでいかなかったも、それなりの地位についていた。ツインテール属性だけが優遇され、他の属性力がないがしろにされたりしている現状をどうか変えたかつた。

だが：結果として、その願いは叶えられることはなかつた。今まで築き上げてきた地位も名誉も何もかもが信じられない程あつさりとな奪われ、雑用係にまで転落してしまつた。

(ツインテールばかりが：何故、優遇されてしまうのだ!?)

フェンリルギルデイは悔しかつた。ツインテールをただ一度だけ蔑ろにした発言だけで自分は何もかもを失つた。唯一の心の支えだつた自らの属性力すらも奪われ、戦えなくなつた。

だからスワングルデイのあの行為は、余計にフェンリルギルデイの心をズタズタにしてしまつた。自分はもう力などない。それなのに、何故かつての武器を直してここへ持ってきたのだ？ どうせなら捨てたままでも良かったのに、どうしてわざわざ拾ってきたんだ？ 惨めになつている自分を笑いにでも来たのか？

(力が、力が欲しい！)

それはフェンリルギルデイが今一番望む物であつた。そこまでツインテールが優遇されるのならば：それと同格か、あるいはそれ以上の力が欲しかつた。ツインテールばかりを優先するアルティメギル

に一矢報いたいという思いが、フェンリルギルデイの胸にはあった。でもそれは、きつと永遠に叶わない願いであるのだろうかけれど。

※

地球のどこかにある、巨大な粗大ごみ置き場。

既にそこには大小さまざまなゴミが散乱しており、何時の日からか一人のエレミアンがそこで暮らしていた。

組織から離れ、野良エレミアンと化したそいつは自由気ままな生活と修行に励んでいたが、もうすぐここを発つことに決めていた。

ここには少しばかり長居し過ぎた。環境に慣れる前にここを発ち、新たな場所での修行に励もうと、そのエレミアンは世界各地を旅しているのだ。

全ては己を高める為。そしてとある相手へのリベンジを挑むためだ。その為にこのゴミ置き場は修行には最適な場所だった。このゴミの山は誰にも見つからない秘密の特訓場：次の場所にもこういった空間があればいいのだが…。

「ん？」

ふと自分の足元に新聞が落ちていた。ボロボロの手でそれを拾って、日付を見てみると、今日の新聞だった。

「ありがたいな…最近読んでいなかった」

近くにあった古タイヤをベンチ代わりにして、新聞を読みふけることにした。人目を避けて生活している今、情報の収入源はこういった新聞くらいしかないのだ。そして情報は新しければ新しいほどいい。

「！ほう…」

その新聞の一面には面白そうな記事があった。先日新たにデビューして、何故かいきなり身に纏った鎧を脱ぎだした戦士、テイリエローに関する記事だった。

だがそのエレミアンが興味を抱いたのは残念ながらイエローではなかった。一面を飾る写真に写っている、一人の人間。いや、正確に言えばツインテイルズの一員に目を惹かれた。

写真から見ただけでも、そいつの成長ぶりが分かった。身に纏うツインテールが、何よりも雰囲気違った。強者との戦いを乗り越えた、貫録が見て取れた。

「貴様も随分、実力を上げたらしいな…：テイルファイヤー」

そのエレメリアンはテイルファイヤーの一部分を…：彼女を象徴する部位である『手』を見て、嬉しそうに笑った。

第41話 約束とツインテール

次の日の昼休み、俺はクラスメイトの男子たちと集まり、謎の集会に参加していた。…というか無理矢理引っ張られたのだが。

購買にパンを買いに行つて、教室に戻つたその時、いきなり男子たちに『俺たちは兄弟の意見も聞きたいのだ』と教室の隅っこで繰り返し聞かれている謎の集会に参加する羽目になつてしまった。

「では本日の議題を始める」

リーダー格であろうと思われる男子が起立して、指揮を始める。パチパチと何人かの拍手が起こり、そのまま着席した。

「さて、皆も今朝のニュースは見ただろうが…今日の議題はこれだ」
そう言つて差し出されたタブレットには、とある人物の画像が映つていた。光太郎もそつとタブレットを見て、即座に理解に至る。というかここにいる誰よりもこの人物には詳しくかつた。

「今日は新たに現れ、我々に多大な衝撃を与えたツインテイルズ…：テイルイエローについて語りたい」

タブレットには脱衣をすませ、優越そうな表情を浮かべるテイルイエローの全身像が映し出されていた。

ゴクリ、と誰かの生唾が呑み込まれる音が聞こえる。俺の正面に座っている小太りの男子の額には玉のような汗が浮かんでいた。この反応だけで、世間が抱くテイルイエロー像がなんとなくだけど察することができる。と。

「まずはこの動画を見て貰いたい…」

タブレットには今朝のとあるニュース番組の一部分を切り取つた動画だった。

『えー、現地時刻の午前9時ごろ、ハワイのビーチでアルティメギルとツインテイルズの戦いがありました』

パツと映像が切り替わると、テイルイエローが胸のアーマーをパージした瞬間の映像が流れ始めた。そして砲撃を繰り返しながら次々と脱衣をしていくイエローの光景で映像がアナウンサーへと戻る。

『テイルイエローの不可解な行動に、世間や国会は大いに戸惑つてい

る模様です』

次の映像に切り替わり、そこに出てきたのはなんとこの国の総理大臣だった。どこかで記者会見を開いているのか、多数のマイクが向けられており、悪い意味で注目されていた。

『総理！ 既に世界中から彼女について非難を受けていますがいかがなさるつもりですか!?!』

『テイルブルーは味方だと野党の反対を押し切って放置した結果が、あの凶悪なツインテイルズですよ!?!』

『そもそもあれをツインテイルズと呼んでもいいのでしょうか!?! もう何か別のカテゴリーに分類されているような気がする」と国民は意見しています!?!』

『遺憾であるでは済まされませんよこれは!』

国会を巻き込んだの話題がこれだ。政治云々よりもツインテイルズか…もうやだな、この国。

「これが今朝やっていたニュースだが…これに続きがあつたんだ」
「何だつて!?!」

俺以外の男子は大変良いアクションをしてくれたが、残念ながら俺はそれをする気力が湧かない。というか、イエローの行った行為のほとんどをリアルタイムで見ってしまった俺としては、こういった動画はあまりお目にかかりたくないのだ。

『あはははははははははは何かいい感じですね——!!』

なんでよりによってそのシーンをチョイスした。

パピヨンギルデイを倒し、砂浜で脱衣を行いながら高笑いをするイエロー。それを見ながら絶望顔で落ち込むレッドとファイヤー。

俺はそうしたつもりはないのだが、落ち込んでいるシーンは大変か弱く見えており、余計に哀愁が漂っていた。レッドとファイヤー共に落ち込む光景は大変ショッキングに映し出されていた。

「…以上が動画の全てだ。諸君らの意見が聞きたい」

瞬間、皆の様々な意見がクラス中を駆け巡った。

「レッドさんとファイヤーさんを悲しませるとは…おのれテイルイエロー!」

「それもこれも、テイルイエローって奴の仕業なんだ！」

「なんだって、それは本当かい!？」

「変質者なのかなイエローは？ でも直接の被害は加えていないからブルーよりはましなんじゃ…」

「ブルーはほら、怒らせるとマウントポジションで殴り殺すし…」

「辞めるよな、あれトラウマなんだぜ」

皆の意見をまとめると、脱ぐとはいえ比較的まっとうに敵と戦っているからか世間の評価はまだブルーよりかはマシらしい。…限りなく人氣がゼロに等しいブルーと比べるのがおかしいと思っではない。

(ああ…本当に彼女の脱ぎ癖、直せるのかなあ?)

レイチエルと誓った昨日の決意が早くも霞みかけている。何だかもう、イエローが脱がなくなる光景を想像できないているのだ。仮に脱がなくなったとしてもイエローの世間に対するイメージを回復させるのにどれ程の時間を要するのか…考えただけでも頭が沸騰しそうだ。

すると突然、教室のドアが開け放たれた。皆、何事だと振り向き…
啞然とした。

「失礼しますわ」

「せ、生徒会長!?!」

男子だけでなく、クラスにいる全員が驚いた。勿論、俺もだ。

教室のドアには陽月学園高等部の生徒会長にして皆のアイドル、神堂慧理那会長その人が立っていたのだから。

会長は周囲を見渡したかと思うと、俺と目が合った。そして真っ直ぐにこちらを目指して歩きだし、俺が座っている席の前まで来た。

「お久しぶりですね、丹羽君」

「あ、はあ…久しぶり、ですね。会長…」

会長と喋ろうとするたびにつっかえてしまう。皆が驚いている中で、普通に親しげに話している自分が何だかこの場にいつらいのだ。だって会長と面と向かって喋るのは随分と久しぶりだし、俺自身も呆気にとられている。

そんなことに気付いていないのか、会長は屈託のない顔で俺へと喋りかけてくる。

「今、お時間はありますでしょうか？」

「…え？ あ、その、俺は…いつでも暇ですけど…」

「では、その…少しばかりそのお時間を貰えないでしょうか？」

会長のこの発言は、クラス中に爆撃を起こした。全員の視線が俺へと向けられ、俺は堪らない気持ちになる。

俺に用があるのなら、放送でもなんでも方法があっただろうに。普通に放送での呼び出しならば、ここまで甚大な被害は出ない。なにせ仕事の一言で済むし、いくらでも言い訳の仕様がつく。

だがしかし、ここに何処か緊張した面持ちで告げてくるというオプシヨンが付属したらどうなる？ しかも緊張からか声が若干震えていて、その相手が皆のアイドル扱いを受けている生徒会長だとしたら？ 皆の前で話すという場数を踏んでいる会長が緊張する理由とは？ そもそもどうしてクラスの中でも地味なポジションの光太郎が生徒会長と顔見知りなんだ？

…考えれば考えるだけ、妄想が捗るだろう。何人かの男子は恨めしそうな顔で俺を睨むが、勘弁してくれ。俺だって何の意図があって、会長に話しかけられているのかが理解できないのだから。

「お、俺…なんですよ？ 総二ではないんですよ？」

「はい、丹羽君、あなたに用があるのです」

間違いかと思ったけれど、そうではないらしい。そういえば、何週間前にもこれと似ている感じのことがあったようなないような…。

「で、では…丹羽君！ 今すぐ生徒会室にまで来てくれませんか!？」

「は、はあ…では、行きましょうか」

会長は焦ったような声をだすと、俺は逃げるように立ち上がり、会長について行くように教室を出ていく。俺がドアを閉めた途端、教室の中は再生ボタンを押したかのように野郎共の悲痛な叫びが聞こえてきた。

「はあああああああああああああああ!？」

「な、何であいつが…!？」

「おい、情報網を張れ！ 何か接点はないか足を洗うんだ!!」
「畜生、リア充は全員死ぬね!!」

…事が片付いて、再び教室へと戻るのが少し怖くなってきた。

※

「いい加減に校内での暴力は控えて下さい愛香さん！ すっかり有名な人になって、私が壁にめり込むたびに修繕に来るDIY研究会の方々の身にもなつて下さい!! 争いは何も生まないんですよ!!」

「あたしだって学校でくらい大人しくしていたいわよ！ そもそもあなたが変態的な行為をしなければいいだけの話でしょ!？」

「メスがオスに発情して何が悪いんですか!？」

「開き直んなこの痴女——!!」

昼休み、ツインテール部の部室では愛香とトゥアールはいつも通りの言い争いをしていた。

もう愛香とトゥアールの争いは皆の知る所になってしまったらしく、その影響で壁や床が壊れる被害が出るとすぐさまDIY研究会へと連絡が行くという謎のネットワークが完成されてしまっている。もう校内には彼らの手によって修繕された箇所が何か所もあるが…その内校舎すら壊してしまいそうで恐ろしい。

だが総二はそのいつも通りの争いにツッコむ気力も湧かずに、仏像のように椅子に座ったまま、思考の海に溺れていた。悩みの種は勿論、アルティメギルのことだ。

(昨日のエレメリアン…性格がああだったから良かったものの、敵は確実に戦力を増やしている。それに、ダークグラスパーもいるし…どうすればいいんだろう?)

光太郎が言っていた悩む時間はいつ終わりを告げるか分からない。果たしてその時が来るまで自分が本当に納得できる答えは出るのだろうか。

「…はあ」

面子は揃いも揃ってダークグラスパー討伐にノリノリだし、答えが

い。

自分の知らぬ間に近辺にありとあらゆる細工が施されている現状に慣れ始めていることが総二自身恐ろしくなってくる。

「くくく…これで私はいつでも総二様のチャックを下げ放題！あとは転んだふりをして、私の顔を総二様の股間へとタッチダウンさせればぶおふ!!」

愛香はトウアールの顔面を持ち上げて軽々と投げ飛ばすと、部室片隅にあるゴミ箱へと頭から落ちて見事なタッチダウンを決めた。：いや、これはフアンブルしてしまっただでも言うべきだろうか？もしかしたらトウアールが次起きたら、頭を強く打ったショックで今以上に陽気な性格へと変わってしまうかもしれない。

「むぐぐ…ですが、愛香さん。あなたは一つミスを犯しましたね？

私の仕掛けたトリックにすぐ気付いたってことは、愛香さんは総二様の股間を常日頃から見張っているという何よりの証拠になります!!

エッチ、スケベ、変態!」

「あんたにだけは言われたくないわ!! あたしが常日頃から見張っているのは、あんたの変態的行為よ! あんたはいつもいつもおかしな発明や行動ばかりして…少しはレイチエルちゃんみたいにまともになりなさいよ!!」

「科学者はまともではやっていけないんです!!」

「あんたその言葉を免罪符に全ての犯罪から逃げるつもり!」

部室全体に見えないゴングが鳴り響き、第2라운드의幕は開いた。開始早々、愛香がマウントポジションを取り、トウアールのお腹をねじ切ろうとするが、残念ながらここでレフェリーストップが割り込む。

「おおう、中々楽しげそうではないか、そこから関節技でも仕掛けるつもりか?」

「せ、先生!」

その言葉と共にノック無しで部室に入り込んで来たのは、慧理那のお付けメイドにして学園の臨時教員の桜川尊であった。一応、教師というカテゴリーに分類される人物の乱入により、一旦戦いは中断され

る。

「あ、相変わらずメイド服なんですね」

「うむ、これは私の戦闘服だからな。君たちのテイルギアみたいなものさ」

平然とメイド服姿で職場にいるのはどこかおかしいはずなのだが、そんなこと尊の常識の中ではどうでもいいことらしい。

ちなみに午前中にあった体育の時間でも、尊はメイド姿で教鞭を奮っていた。今日の授業は野球だったのだが、頭にカチューシャを載せてその上からヘルメットを被り、バッターボックスに立ってフルスイングをかますという光景を見せつけてくれた。：ちなみに、そんなおかしな光景をツッコんだのは総二と光太郎の2人だけであった。

「今日はな、お前たちのクラス担任に許可を貰って来たのだ、感謝しろ」

「許可？ 何のですか」

「この部活の顧問についてさ。喜べ観束、私がこのツインテール部の顧問になってやったぞ！」

「：…ええっ!?!」

珍しく3人でハモリ、一斉に尊を見る。顧問が出来るのは嬉しいのだが、まさか色々と問題がある教師の尊が顧問になるとは思わなかったのだ。

「い、いいんですか!?! 先生は会長の護衛でしよう!?! 顧問なんてやったら会長の側にいる時間が…!」

総二のまともな指摘がクリティカルヒットしたのか、尊は膝から崩れ落ちて諦めの言葉を発した。

「：…頼む、私を仲間に入れてくれ。私の本来の役目はお嬢様の護衛のはずなのに、お嬢様がツインテイルズになってしまった今、私は護衛としての役割を果たせていないんだ…今まで以上に自分の居場所がなくなってしまうんだ…」

「そ、そんなことないですよ!?!」

「しかしなあ、しかしなあ…戦闘員一人倒せない私に価値があるとは思えないんだ…」

本来、尊の教師としての仕事は慧理那の護衛の延長線だったのに、その慧理那が護衛よりも強くなってしまった。一番の仕事が護衛のはずなのに、自分が護衛される側へと回ってしまったこの現状に尊は全力で落ち込んでいたのだ。

更に婚活が上手くいっていないという現状が更に尊を追い詰めている。もうすぐ夏が始まり、自分の誕生日の9月がすぐ側に近づいている。30という大台まであと一年と数か月…そんな現実が尊を責め立てていた。

「と、とにかく…落ち着いて下さいよ。確かにアルティメギルの戦闘では劣るかもしれませんが、会長だって四六時中変身している訳じゃないじゃないですか。普段の会長はか弱い女の子なんですから、そういう時に先生が頑張らなくてどうするんですか!!」

「お…おお…」

「環境が変わり過ぎて落ち込むのも分かりますが…先生が必要じゃなくなるなんてありえないでしょう？ もっとしっかりと自信を持って、頑張りましたよ!!」

総二のその説得は尊の五臓六腑に染みわたったらしく、尊は何とか落ち着きを取り戻したらしい。

が、ここで総二がうっかり尊へと手を差し伸べたのがまずかった。

「…優しいな、観束君は。私は嬉しふおおおおおおおおおおおう!!」

「!?」

突然、尊が獣の雄叫びのような声を発したかと思うと、差し伸べられた手を掴み、隠し持っていた朱肉に総二の親指を押し付けた。

「げえっ!?」

そしてそのまま流れるように、メイド服のエプロンに仕込んでいた婚姻届に無理矢理拇印を押させようと手を捻ってくる。

「そんなことだろうと思っていたわよ!!」

しかし幸いなことに総二の指が婚姻届に到達する寸前で、愛香がエプロンを蹴り上げ、蹴りの風圧で婚姻届を破り捨てた。

「何!?! 津辺君…まさか読んでいたのか!?!」

「そーじ!! ダークグラスパーのことで悩むのもいいけど、こういう日常に潜む危険にも意識を向けて! あんたお人よしで騙されやすいんだから!!」

「くそつ、観束が私の求婚を断るのは強気な大人の女ということを前面に押し出し過ぎたのが原因だと思つて、弱気な大人へとアプローチを変えてみたのだが…駄目だったか!!」

残念ながら、どう考えてみてもこの一連の流れは求婚とはいわない。世間一般では犯罪というのだ。

そんなロマンティックなカテゴリーに入れていいのかと、総二は赤インクまみれの右腕を眺めながら、乾いた笑みを浮かべていた。

「黙っていれば求婚求婚と…! いい加減にしてください! 部室出禁にしますよ!?!」

「いいではないか、これくらい許してくれ! お前たちは若さという武器があるではないか! 若さは後ろを振り向かなくてもいい10代にだけ与えられた最強のアドバンテージ! 20代の私には振り向きたい物事がいっぱい胸が張り裂けそうなんだ!! 10代の女は20代の女に優しくする義務があるんだ!!」

遂に開き直った尊の反論に、何故かフリーズしてしまったトウアール。

「? どうしたんだトウアール君? 随分顔色が悪いようだが」

固まってしまったトウアールの顔を覗き込むように近づいて来た尊に、トウアールは尻餅をつくレベルで後ずさる。

「! び、美白なだけです! 最強の10代、染みひとつないすべすべの肌です! ここに何かしらの白い液体がつくと凄く映えると思いませんか総二様!!」

「そ、そうかな…?」

よく分からないことを口走ったトウアールを残念そうな目で見る総二。もう今に始まったことではないが、発言が女子高生のそれじゃない。

「まあとりあえず、顧問になったのは本当なんだ。よろしく頼むよ」
さっきの行為なんて気にするな、とでも言っているようにカラツと

した笑みを浮かべる尊。

総二もさっきの一連の流れさえなければ素直に喜べるのになあと
思いながら、赤インクで滲む右手をティッシュで拭きとった。

※

尊がツインテール部の顧問になったということは、ツインテイルズ
にとっても歓迎すべきことだったので皆、喜んで肯定した。

というのも、ツインテール部の活動内容はツインテイルズの活動内
容となる為、おいそれと一般人に公表できないでいたのだ。その為、
事情を知っている尊が顧問に収まってくれたことは大変喜ばしい事
だった。

尊は椅子に座ると、部室に備え付けられているテレビをつけた。丁
度、お昼のワイドショーが放送されており、テイルイエローの話題が
映ったテレビを見て、途端に渋い顔をする。

「早速顧問として、指摘したいのだが：お嬢様の戦い方はどうにかな
らんのか。今朝、ニュースを見て、お嬢様はだいぶ落ち込んでいたの
だぞ」

「：そんなこと言われましても、私たちはあの戦い方を強制している
訳ではありませんし。本人の潜在意識に起因していることですので、
もうどうしようもありませんよ。慧理那さん本人が脱ぎたくて勝手に
脱いでいるだけなんですから」

トウアールにオブラートに包むという考えはないらしい。ドスト
レートな説明だけを言うのとパソコンへと視線を落とし、尊もまた肩を
落とした。

「：反動、なのかもな。今まで厳しく自分を律してこられたから、のび
のびと出来る場が出来たことでそれが戦い方へ影響を与えているの
かもしれない」

その結果、目覚めてしまったのが脱衣とDMとは、誰が予測できた
であろうか。

『レッドとファイヤーですが、やはり現地の人たちにも絶大な人気が

…』

と、ここでテレビの映像が切り替わり、大勢の外人に囲まれる2人の映像になる。

『のー！ ノーセンキュー!!』

必死に訴えかけるレッドだったが、矢継ぎ早に大勢の人々に囲まれている。そして金髪のお姉さんに囲まれながら、自慢のツイントールをペタペタと触られていた。レッドも何故か、お姉さんのツイントールを触っていた。

『駄目です駄目です!!』

泣きそうな顔のレッドを何とか助けようと、ファイヤーが必死で人ごみをかき分けて近づくも、結局2人揃ってもみくちやにされるだけであった。

「あんた何、パツキンのツイントール触ってんの!? やらしいわね!」
くわっと目を見開いて、テレビを指さす愛香。不当な言いがかりっぽく聞こえる発言ではあったが、さっきの一件があった為か、きつめの口調で叫んでいた。

「…だって、触って欲しいって、お願いされたから…わざわざ日本語で」

「はあ!? あんた、女が触れって言ったら誰でも触るの!?!」

「…ルビ、おかしくないか?」

今や海外でもツイントールは流行っており、ツイントールにする外人が増えているらしい。

どうやらツイントールズのツイントールに触れば、願い事が叶うというよく分からない噂が広まっており、レッドのツイントールが触れるという行動はこれが関係しているらしい。

「そもそもそーじも簡単に知らない人のツイントール触っちゃ駄目よ! 海外なんてコンビニでコーラ買う感覚で簡単に裁判吹っかけるんだから!!」

また愛香の心配性が…と総二は幼馴染を見る。

「…あのさ、テイルレッドの時、俺は女なんだぜ? しかも年端もいない幼女だし…いくらなんでも詐欺目的なんてありえないじゃない

か

「…」

すると愛香は自分のツイントールの毛先を摘んで、そっぽを向いてしまった。そういうことを言いたいんじゃないって顔をする。

「べ、別に…知らない人の触るのより、あ…あたしので充分でしょ…」

「へ？」

「な、な、何でもないわよ!!…テレビ、消すわよっ!!」

ほそぼそつと愛香が何かを言った気がしたが、残念ながら総二には聞こえなかつたらしい。

愛香は顔を真っ赤にしながらテレビの前まで歩いていくと、何を思ったのか手刀を画面に突き刺した。

「何してんだお前はあああああああああああああああ!!?」

「あ…!」

愛香もハツと気づいて手を引き抜いたが、時すでに遅し。備品のテレビは早くもご臨終となってしまった。

どうやらテレビのスイッチを切ろうとしたらしいが、愛香が止めたのはテレビの息の根らしい。照れ隠しで行った行為はとんでもないことになってしまった。不幸中の幸いは突き刺したテレビが薄型だったことで愛香の手に損傷を与えなかったことだろうか。

「その…頑張つて直すつてファイヤーやそのパートナーも言っていますし、俺たちも出来るだけお手伝いしますから…」

何とか総二は慧理那の脱衣行為を直して見せると宣言すると、尊は感謝の表情へとなる。

「済まない」

尊はスツと手を指し伸ばして握手を交わそうとするが、尊の空いている手にはしっかりと朱肉が握られているのを総二は見てしまった為、全力で断つた。

「…で、今日はそのお嬢様のごことで君たちに相談があつてな」

「相談？」

「ああ」

尊はそつと体勢を正し、憂鬱そうなため息をついた。

「実はこここのところ、神堂家ではお嬢様の生活態度が問題になってな。奥様がお怒りになつてゐるのだ」

「奥様つて…確か会長のお母さんつてこの学校の理事長でしたっけ？」

いつの間にか椅子に座つていた愛香は尊に尋ねると、「その通りだ」と首を縦に振つた。

…聞けばこういう事らしいのだ。

慧理那がツインテイルズの活動を始めるようになってから、無断外出などが増えていることを慧理那の母はあまり良く思つていないらしいのだ。事情を説明すれば分かつてもらえるかもしれないが、ツインテイルズの活動を公に出来る訳もなく、空白の時間が増えてしまつてゐる。

それに敵はいつやつてくるか分からない為、遅くまで無理して起きるようになってしまつてゐるらしい。朝は頑張つて自力で起きてゐるが、無理して夜更かしをするようになってからは睡眠時間もまともに取れてなく、生徒会の仕事に身が入つていなくなつてしまつてゐるのだとか。

「そういうえばこの間のパピヨンギルデイの時も、眠そうにしていたしな…」

「うむ、慧理那様も頑張つてはゐるのだが…やはり頭の中はツインテイルズのことदैいっぱいになつてゐる」

つまりはツインテイルズのせいで生活サイクルに乱れが生じ始めているのだ。

だが、それに反論したのは意外にも愛香だつた。

「あの…先生？ 確かに最初は辛いかもしれないけど、あたしだつて最近では慣れてきてゐるんですよ？ 会長もまだ日が浅いから慣れてゐないだけだと…」

「ところが、そうも言つてゐられないのだよ」

申し訳そうに愛香の言葉を遮る尊。何故か声のトーンが暗くなつてゐる。

「ここからが本題なんだ。この先は神堂家の個人的な問題なのでな、

ますことはしても、嘘は決して言いはしないのだ!!」

「はいいいいいいいいいい!!」

トウアールは尊に見事な敬礼をして見せた。目を血走らせながら第2射をいつでも放てるように婚姻届を構えている尊の姿を見て、ようやく身の危険を感じたらしい。

そう、尊はエプロンから婚姻届を取り出して、それを投げ、ガラスを切断して見せたのだ。コンクリートに突き刺さるほどの威力を秘めた一撃だ、窓ガラスなど屁でもないだろう。

…もう尊は、婚姻届を武器にしてアルティメギルと戦えばいいのではと総二は思ったが、その考えは心の中だけに留めておく。不用意な発言で、こつちに矛先が向けられるのは何としても避けたかった。

「実は慧理那様は、学業や生徒会長を頑張るといふ条件付きでこの掟を先延ばしにしてもらっているのだ。奥様も自分の経験を踏まえて、無理に掟に縛る必要もないのではと考えられていてな…」

「はあ…」

「だがここ最近の慧理那様の姿に、奥様はたるんできているらしい…次々に見合いの話を取りつけていてな、私は少し危機感を感じているのだ」

「あー…」

「私が結婚するよりも前に仕える主人に先を越されてしまいそうなのだよ…!!」

尊以外3人は、どうして尊が暗いトーンで話していたのかが分かった気がしたが、それでも信じられない気分だった。

「なんか怪物と戦っているよりも、非日常な感じがするわ…」

「俺もだ」

『事実は小説よりも奇』という言葉の意味がようやく分かったような気がした。僅かながら浮世離れた現実の方が、振り切った非日常よりも実感が薄いせいだろうか。

「まあ、その見合い話も一つくらい私に回してくれればいいのだが…まあ、君たちにはどうでもいい話だったな…!」

全然どうでもよくなさそうな顔でそう呟くと、尊は総括に入った。

「まあ、そういう訳なんだ。私はメイドという立場だが、慧理那お嬢様の悲しむ顔は見たくない。無理矢理された結婚ほど、虚しいものはないからな。だから君たちにも、慧理那様が早くこの生活に慣れるように協力して欲しいのだよ。奥様が手を引いてくれるその時までな」
あなたがそれを言うのか？　と思っってしまったが、一同は何も言わずに尊を見つめる。

「分かりました」

「同じツイントイルズだし、出来る範囲でなら協力くらいするわよ」

そして尊の視線がトゥアールへとロックオンされた。

「…お嬢様には手を出さないでくれよ？　結婚は『男子と』というのが決まりなのだからな」

尊の警告にトゥアールは無言の笑顔を返すだけだった。…どうして領かないのだろうか。

「…ほう？」

「あつ、勿論分かっていますよ!!」

尊が追加分だと云わんばかりに婚姻届を懐から数十枚取りだそうとしたその瞬間、トゥアールはようやく領いてくれた。

※

会長と俺は生徒会室へとたどり着いた。

「どうぞですわ」

「はあ…お邪魔します…」

誰もいない生徒会室の中に進み、勧められるままに適当に空いている席へと座る。会長も近くの席へと座り、椅子だけ方向をずらして互いに向き合った。

「……………」

俺たちの間には一切の会話が無く、ただただ無言のまま、時が過ぎていく。他の教室やら廊下の声が遠く聞こえるせいも、異様な空間が形成されている気がしてならない。

一体、何故会長は俺を呼び寄せたのだろう。放送とかではなく、面

と向かって。それが不思議でならなかった。

そもそも会長に間近で会ったのは2回だけなのに、声をかけられるほど接点はないはずなのに。

1回目は夕方の廊下で2人つきりで。ベルトを見られたというハプニングはあったものの、何とか誤魔化した。

2回目は総二と一緒に廊下での遭遇。何か俺に用事があったらしいが、それが何なのか分からないまままで終わってしまった。

こうして見ると、光太郎と慧理那の接点は驚くほどない。まだ総二の方があっているだろう。

すると、会長は決心したような顔で俺の目を見てきた。

「その……ですね。突然だと思おうのですが…一つ聞きたいことがあるのです」

「俺にですか？」

「ええ、あなたにです…」

そして会長は息を吸い込むと、逃がさまいと制服の袖を掴んできた。

「!?」

「丹羽くん…あなたはテイルファイヤーのベルトを持っていましたよね？」

「え、ええ…」

光太郎はギクリとした。まさかあの話を今更掘り返されるとは思っていないかったのだ。

「まるで本物みたいでしたわね…」

「…!」

会長の真剣な目に、俺の鼓動が早まる。

「教えて…くれませんか？」

まさか…会長は気づいているのかだろうか？ テイルファイヤーの正体が…俺だということ。

表情を悟られないように顔を強張らせて、手に汗が滲む。背中から汗が噴き出る感覚を感じつつ、汗まみれの手を強く握りこんで見られないのようにしたが、なんと次に会長が発した言葉は俺の予想を超え

るものだった。

「あのベルトを何処で手に入れたのか私に教えてくれませんか!？」

「…へ?」

「いえ、分かつてはいます! あれは丹羽君が苦勞して手に入れた大切な物:それをくれとは言いません! ですが、せめて:せめてあれが何処で手に入れたのかだけは私に教えてくれませんか!？」

「???」

そう力弁する会長だが、俺は話が一向に見えてこない。

「私、町中のおもちゃ屋を探したのですが一向に見つからなくて:終いには本当にあるのかと聞かれてしまったのです! ネットで見ても似たような商品の情報は出ても、あのベルトにはどうしてもたどり着くことが出来ずにいるのです!!」

「……………えーと、つまり:あのベルトの入手経路を知りたいってことなんですか?」

「!・ そうですね、そういうことなんです!! 生徒会長なるものがこんなくだらないことを聞くのに放送で呼び出すのはあまりにもマズイと思ひまして:こうしてここに来てもらったのです!!」

「ああ、そういうことだったんですか:」

ようやく話が見えてくると、光太郎はドツと疲労感を感じた。つまり会長は俺のベルトの入手先を知りたいってことなのか。確かにあの時、カバンから転がった本物のベルトを『限定品の玩具ベルト』として誤魔化したのが、まさかあれを覚えていたのか。

だからわざわざ生徒会室に俺を呼んだのか。確かに生徒会長が玩具の入手先を堂々と聞くのは恥ずかしいだろうし、ここならば誰にも聞かれる危険もないだろうし。

(けど:これはどうすればいいんだろう!?)

だが、本当に困ったことになった。確かにあのベルトは会長の言う通り、本物そっくり:というか本物なのだが、まさか『そうですね、俺がテイルファイヤーなんです! あのベルトも本物なんです!!』と言う訳にもいかない。そんなことしたら、俺はもう生きていけない。

それに何処で手に入れた、と聞かれてもあれはレイチエルが作った

ものだし、お金を出して買えるものではない。

ここで言わないという手段も取れるが、それに会長が怪しみ、万が自分の身边を調査されることになって正体が露見するようなことになれば…。

「……………」

「ど、どうしたのですか!? 確かに、言いづらいことではあると思うのですが…!!」

渋い顔をする俺は、会長はどんな印象を抱いているのだろうか。

（こっちは…一言わないより…!）

そして俺は一世一代の大勝負に打って出ることにした。普段はあまり信じない神様に本気をお願いをした。本気でどうにかしてくださいとお願ひした。嘘は苦手であったが、自分の身边の為にはやるしかなかった。

「その…まず、俺は会長に謝らなければなりません…」

「えっ?」

「嘘を、ついていたことをです…」

光太郎は渋い顔を崩さずにそう語るが、会長はそんなことよりも肝心なことを話せと、促していた。

「あのベルトは、本当は売ってなんかいないんです…俺の地元の友達が俺に作ってくれた物なんです…」

「丹羽君の…お友達がですか…」

「はい。そいつはそういった物を作るのが凄く上手くて…俺がテイルファイヤーのことが大好きで、そいつに作れるかって聞いたんです…」

俺は手を握り絞める力を強くしながら言った。

「そいつ、気難しい奴で。俺が何度も頼んで、ようやく腰を上げたほどの頑固者で…。作って渡された時も、売っているって言えっという程で…」

「…だから、あの時…」

「はい…俺は嘘をついたんです…」

俺は、会長の目を正視できなくなつて、視線を逸らした。

「あれは、テイルファイヤーのベルトは…！ どこにでも売っていないんです…！ 期待させるような事を思わせてしまって、申し訳ありません…!!」

俺は嘘をついた罪悪感を隠す為に、会長に頭を下げた。

「！ そ、そんなこと…ありませんわ！ 頭を上げて下さい!!」

会長の反応を見て、ますます強い罪悪感を感じるが、今となっては嘘を突き通すしかなかった。

「…そうですね、友人から貰った大切な物…そんなものが市販な訳がありませんわよね…」

「…」

俺は怒られるかもしれないと思った。嘘をついたことや会長に変な期待を持たせてしまったことだ。でもこれで嘘は完了した。まさか会長も地元の友達にまで調査を仕掛けたりはしないだろう。多少の罪悪感があったが、俺の身辺の為だ。致し方が無い。

(…と、とりあえずは…上手くいった…か?)

だが、会長の次の言葉はまたもや俺の予想を超えた。

「で、では丹羽君!! そのお友達にもう一つ、ベルトを作ってくれるか
お願いできますか!?!」

「?!?!」

「材料費や機材などはこちらでいくらでも用意いたしますわ!!」

俺が起こした嘘は、更なる嵐を巻き起こした。下から覗き込んでくる会長の顔は本気の顔であり、俺の嘘を完全に信じ込んでいる目をしていた。

「あ、あ、あ…」

「…駄目、ですか?」

くいつと会長は小首を傾げながら、俺を見てきた。その瞬間、会長のツイントールがふわあつと揺れた。

!!

その途端、俺の身体が急激に熱くなってきた。あんなすばらしいツイントールをしている会長に俺はお願いされている、上目でお願ひされている…!

その状況に俺の心のブレーキは正常に働かず、何を思ったのか反射的に首を縦に振ってしまった。

「！ 本当ですか!?!」

そして自分がやった行動に、あつ?! と背筋が冷たくなったがもう遅い。会長はすっかり、俺が友人にベルトの制作を頼んでくれると信じてしまっている。

(あいつ…本当にやってくれるかなあ?)

今夜、レイチエルに駄目元で頼んでみるつもりだが、果たして取り合ってくれるかどうか。頼んでくれるかもはつきりしていないのに、何故俺は軽々と引き受けてしまったんだ…。

「あ、あの〜」

「はい?」

「…もしかしたら断られてしまうかもしれないけれど…そこは覚悟していてくださいいね?」

「ええ、分かっていますわ」

ああ駄目だ。会長の満面の笑みの前では、あれは嘘でしたとはとても言えない。俺は、最低限の保険をかけることで精一杯だった。

「ではこちらが私の連絡先ですわ!」

そう言つて渡されたのは会長のメールアドレスと電話番号が記載されていたメモ用紙だった。本当ならば泣いて喜ぶべきなのだろうけれども、今の俺にとっては呪いのアイテムか何かのようにしか感じなかった。

「あ、ありがとうございます…ごいいます…」

そう言うのが、俺の精一杯の行動だった。

第42話 宴とツインテール

「この、バカッ!!」

「痛ってえええ!!」

夕食時、俺は今日の昼にあつた出来事をレイチェルに話すと、怒りの形相と共にスプーンを顔面に投げつけられた。

そしてキレ顔で詰め寄られると、今まで見たこともないような恐ろしい顔で俺の胸元を掴まれ、床に叩きつけられた。

「あんたが自分でトラブルの種を撒いて、どーするのよ!!」

「そりゃ…そうだけどさあ!! あれは半分事故みたいなものだったし、仕方ないだろ!!」

「ばれにくくするために直接装備しないタイプのベルトにしたのに…この、バカ、バカ!!」

「ぎゃああああああ!!」

落ちていたスプーンを拾うと、今度はスプーンを鈍器代わりにして、光太郎の頭へと振り落とす。小刻みに揺れるスプーンが地味に痛い。

「しっかりと隠しておかないと意味ないでしょ!」

「だ、だからごめんって…!」

「あたしに謝ったって意味ないでしょ!」

レイチェルが開発したテイルドライバーは、トゥアールが開発したテイルブレスとは違い、常に身に着けていなくてもいいタイプの変身アイテムだ。サイズも比較的小柄な為、通学カバンにも隠しやすいアイテムになっている。

…が、その『隠しやすさ』を念頭に置いている為か、ベルト事態に認識攪乱装置を搭載していないのだ。ギアの性能を極限まで引き出す為に、無駄な所はとことんそぎ落としているらしい。

元々、あのベルトは常日頃身に着ける訳でもないもので、しっかりと隠していれさえすれば問題はなかったのだろうが…あの時、つい光太郎は隠すことを怠ってしまった。そのせいでカバンからこぼれた時に、慧理那に見られるといったことが起きてしまったのだ。

「…で？ その子に頼まれちゃった訳？ ベルト作ってくれって」
「うん」

「何で断られないのかしらね、あんたは？ NOと言えない日本人だから？」

「しようがねえだろお！ あんな凄いツインテールに迫られたら…」
「…あんたツインテールだったら、ゴリラにでもお願いを聞くのかしら…？」

レイチエルは呆れた顔で俺を見つめると、ふうっと小馬鹿にしたようにため息をついた。というか、こんな小さな女の子に罵られたり、暴力を振るわれる俺って…。

そしてレイチエルはしばらく考えると、仕方ないわねとだけ呟いて、メモ帳に何かを書き始めた。

「…分かったわよ。正体がばれるにしろばれないにしろ…このままじゃ都合が悪くなる一方ね。未然に防ぐために仕事は引き受けるわー！」

「幸いにもばれたのは学校の生徒会長で、あんたとはそれほど接点はない子みたいだし…対策次第ではいくらでもカバ―は可能よ。あんた友達少なくてよかったわね〜」

「…うるせえよ」

意外だった。てつきり俺だけで何とかしろと言われるのかと思っただのに。

「ベルトの外装だけなら予備パーツで何とかなるし…後は電機部品や流用で問題ないわね」

「玩具にわざわざ予備パーツ使うのかよ」

「あたしに手抜き工事やれっていうの!? 頼まれたからには限りなくオリジナルへ近づけさせるわ!!」

「…分かったよ、お前の好きにやってくれ」

レイチエルはとんでもない！ といった表情で湯呑みを振りかぶる体勢をするが、俺のリアクションでそれをテーブルの上へと戻した。

どうやら、レイチエルは玩具制作にも己の本気を出すらしい。科学

者って皆そういう所があるのかな？

そしてどこから取り出したのか、空いている手で小型レンチをバトンのようにクルクルと弄びながら、更にペンを走らせる。

「勿論、道楽や正体バレ対策の為だけに作るつもりはないわ。これを機にテイルドライバーの予備パーツも作っておきたいの。この間の修復で、だいぶストックしていたパーツを消耗しちゃったから、その補充も兼ねて引き受けるって訳よ」

「…玩具に使うパーツがギアに使えんのか？」

「あら、使えるわよ。属性力なんかのオーバーテクノロジーを除けば、テイルギアって掃除機や冷蔵庫なんかの電化製品とそんなに変わらないんだから。この世界にある電機部品からパーツの制作は十分に可能よ」

疑いのまなざしを向けるが、レイチエルはあつけからんと言った為、ここは信じるしかないだろう。

ヒーローの変身アイテムを家電量販店にある商品と同じ括りにするのはどうかと思うのだが…。

するとようやくメモを書き終えたのか、レイチエルはまたもやメモ帳を俺へと投げつける。

俺はそれをしっかりとキャッチして内容を見てみると、何やら電機パーツの必要な量などが事細かに書かれていた。

「じゃ、善は急げよ。今から秋葉原に行って、このメモに書いたパーツ類全部買ってきて」

「…今からか!? もう8時回っているんだぞ!？」

壁掛け時計を指さしながら俺は叫ぶが、レイチエルはだからどうした? といった顔だ。

「あんたが捲いた種なんだから、あんたで責任取んなさい! あたしが作るんだから、あんたが材料くらい買いなさい! それがあんたの仕事よ!!」

「しかもこれ…何だよ? 電気コードとかスイッチとか、充電用クリップとか…」

理系教科はそこそこ得意でも自分には専門外の世界の用語にちん

ぶんかんぶんな俺。

恥ずかしい話だけど、俺は小中と電池や配線を使った電気実験は全部友達に丸投げしていたんだぜ？ こんな物分かる訳が…。

「分かんなかったらあたしに連絡しなさい！ さあ早く行くのよ、ハリーハリー!!」

光太郎は急かされるように靴を履いて秋葉原に転送しようとするが、レイチエルにちよつと待つてと呼び止められた。

「そういえばベルトを欲しがっている生徒会長のその…詳しい情報は分かる？」

「…何で？」

「ベルトの腰回り。あんまりその子が大きいのなら、それ用に調節しなきゃいけないもの」

「あー、そうか…」

確かにベルトの大きさは重要だ。サイズが違えばきちんと腰に巻きつけることができなくなってしまうものな。

「…背丈はそんなに大きくなかったかな…？ …うん、確かそうだ。背はお前より少し大きいくらいだったよ」

「…そう、分かったわ。じゃあ腰回りはそう設計するわ」

そうレイチエルは返すと、転送用のプログラムを立ち上げる。

「じゃ、さつきと帰って来てね。転送！」

「はいはい…」

せめて日が変わるころまでに帰ってきたいなと思いつつながら、俺は光の渦に飲まれていくのだった。

※

その頃、アルティメギルの秘密基地では、この基地にいる全員がホールへと集合していた。彼らには断る権限はない、何故ならこの集合はダークグラスパーによる強制命令なのだから。末端の戦士たちには断る権限なんて存在しない。

「…俺、帰ってえ」

「本当に帰ったら、何されるか分かんねえぞ…」

「殺されてしまうかもしれねえな…」

ホールに集まっている一同の顔は暗い。

当然だろう、前回あれだけダークグラスパーの機嫌を損ねてしまったのだから。何をされるか分かったものではない為、皆戦々恐々といった様子でホールを見渡す。

ホールには結婚式に使うような大型の丸テーブルがいくつも置かれており、各エレメリアンのネームプレートが置かれていた。

「…ここに座れてことなのか？」

「多分そうじゃねえのか？」

「爆弾とか仕掛けられていない？」

周りに何かトラップや仕掛けが無いか用心深く注意しながら、自分のネームプレートが置かれた席へと着くエレメリアン。

ダークグラスパーからの事前の命令は『そこで待っている』というものだけであり、不安はますます加速する。

…もしやフェンリルギルデイのように何かしらの処罰が執行されてしまうのでは？ と一同がいらぬ妄想をしたその時だった。

「待たせたな」

ガチャリと正面の入り口が開かれ、ダークグラスパーがガラガラと大きな滑車を押しながら入ってきた。滑車の上には箱状の何か山積みになっているが、残念ながらその上から黒色の布をかけられているせいで中身は見る事が出来ない。

「まあ皆の者、肩の力を抜くのじゃ」

「……………」

そうは言っても、座っているエレメリアン一同はガチガチに緊張してしまっている。ダークグラスパーは平然としているが、それが余計に恐怖となる。この間、アドレスの催促をされたことが未だにトラウマになっているエレメリアンも多いからだ。

が、ダークグラスパーは弾むような声と共に、皆が想像している事とは真逆のことを言い始めた。

「皆、わらわの着任、思うところはあはずじゃ。不服と思っている者

が多いのも重々承知。：故に、今日は腹を割り、ここで結団式でも一つ行おうと思つてな」

「け、結団式？」

「そのような御中を我らに？」

ざわざわとざわめきが大きくなつていき、満足そうにダークグラスパーの顔に笑顔が浮かぶ。

「今日は無礼講じゃ！ 今日互いの身分は関係なしに思う存分騒いで、英気を養い、明日からの侵略活動に励んでほしい！ わらわのとおつておきのコレクションであるエロゲーを皆に一つずつ振る舞うぞ!!」

バサツと滑車にかけられていた布を取ると、そこには多種多様のエロゲーが山のように積まれていた。

「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」」

闇の処刑人がやることとは思えない、思い切った催しに皆の緊張感が解け始めた。

確かにここ最近の基地内のムードはどんよりしている。ダークグラスパーの就任に始まり、同胞たちが倒されていく現状、雑用係に墮ちたフェンリルギルデイなど部隊の空気は決して良いとは言えなかった。

ダークグラスパーはこのどんよりした空気を変え、新たな門出を切ろうとでもしているのだろう。その気の利いた行動に、一同はほっとしていた。

更に自分のコレクションから一人にひとつずつ振る舞うとは、なんという太っ腹なのだ。その中には既に生産中止の物まであり、ダークグラスパーがどれだけこの宴へ心血を注いでいるのかが伺えた。

「ではこれより、名前を呼ばれた奴は前に来るのじゃ！ わらわが厳選したエロゲーを振る舞う！ では…！」

「は、はい！」

一人、また一人と前に出ては各エレミアンの好みをピンポイントで突いた、個々が好むエロゲーがダークグラスパーの手から渡されていく。

一体どこからそんな情報を手に入れたのかは分からないが皆、首領直属の戦士という遙か彼方にいる存在が、末端の自分たちのことを気にかけているということがたまらなく嬉しかった。この基地にいるエレメリアンたちにあれだけボロクソに罵ったのに、自らのコレクションを分けてくれるなんて。きつと俺たちのことを認めてくれたのだと、胸を踊らせる。

皆、半年以上早いクリスマスプレゼントの到着に大はしゃぎだ。中にはあれだけ対立していたリヴァイアギルデイとクラーケギルデイの部下たちが仲良く語り合っている光景も見られた。以前では絶対に考えられなかった行動だ。

彼らからダークグラスパーへの不信感はすっかりと消え失せていた。きつとこの司令官の下でなら、ツインテイルズを互角：いやそれ以上に戦えると、そう思っていた。

個々のテーブルから一斉にノートパソコンがせり上がってくるまでは…。

「「？」」

あれ？ とテーブルを見た誰もが思った時だった。ダークグラスパーはエロゲーの箱を杯のように掲げ、残酷な言葉をホール中に叫んだ。

「さあ、人数分のPCも用意した！ 遠慮はいらぬ、思う存分プレイしてくれ!!」

「「……………え？」」

空気が、凍った。ホワイトクリスマスのように穏やかだった空気は突如、凍死寸前の北極のような過酷な空気へと早変わりした。エレメリアンたちはさっきまでの喜びや躍らせていた感情が一気に氷点下まで下がる。

確かにエロゲーを貰えたことは嬉しかった。ダークグラスパーが腹を割ってくれたことも嬉しかった。けど、エロゲーという物はそもそも部屋でこっそりと一人でやるものであって、堂々と人前でやるものではないはず。

周りには見知った仲間や上司がいる。こんな環境で、果たして遠慮

などしないでプレイが出来るだろうか？ …無理だ、普通なら人前でエロゲーなど、絶対に出来ないなどしない。仮に出来てしまったら、そいつは生物として何か大切なものをどこかに置いてきてしまってるはずだ。

ホール内の空気が絶対零度に凍りついたのにも気付かずに、ダークグラスパーの視線は目の前に座っているクマ型エレメリアン、ベアギルデイを捉える。

「おい、そのクマ。わらわの前に座っているのじゃから先陣を切つてみせい」

「い、今この場でやるのでありますかあああああああああああああああああああ!?!」

ベアギルデイの頭には三日月のエンブレムをあしらわれた武士の兜が装備されており、まさに宴の先陣を切るのにはうつつつけの人材かもしれない。

…今から繰り広げられようとしている、魔界の宴には似つかわしいはずなどないが。

ベアギルデイはドヤ顔をしながら目の前でPCの設定をしているダークグラスパーが不気味な魔女に見えた。呪いの言葉を吐きながら、毒薬が煮えたぎる大釜をかき混ぜている不気味な魔女に。

「…さあ、お主のエロゲーに最適な設定は済んだぞ?」

「だ、ダークグラスパー様…」

「…分かっておる。わらわの眼鏡は全てを見通すからの。うぬの好みは、結ばれるその瞬間まで一切媚びぬ、病的なままでに加虐志向なヒロインであろう! そのゲームのヒロインは主の好みにあつた設定でな、キャラデザが気に入らぬかもしれぬがこれがやる内に味が出てきて…!!」

「………………!!」

「わ、わ…我がフェイバリットシチュエーションのご唱和、恐悦至極ツツ!!」

ベアギルデイは泣きそうな顔でそう叫んだ。というか、半分泣いている。

命を預ける友にすら喋っていない自分の好みやシチュエーションなど、洗いざらい全てをダークグラスパーに言いふらされた。同志たちもこんな状況でそんなこと聞きたくなかったとしよっぱい顔をする。『地獄への道は善意で舗装されている』なんて言葉があるが、まさしくその通りだ。

もはや宴はとつくの昔に公開処刑に変わっている。仲間や少女の前で嬉々としてエロゲーを嗜むには、ベアギルデイは早すぎたのかもしれない。…しないほうが正解なのではと思っではいけない。

「……………」

同志たちが見守る中で、インストール作業を強制されるベアギルデイ。それが終わるまでの時間が、まるで絞首台に昇るまでの長い階段を思わせる。

そしてインストールが完了した途端、メーカーのロゴが現れ、オーピングが流れ始める。

「さあ、主が好むヒロインはこの子じゃ」

「は、は、はい…!!」

「ほう、泣くほど嬉しいのか。わらわも心血を注いだ甲斐がある」

ベアギルデイは血の涙を流しながらダークグラスパーに感謝の言葉を述べたが、残念ながらダークグラスパーにはその涙の意味が分からないらしい。

プレイが始まるも、このエロゲーは濃いキャラデザとバリバリの萌え声で繰り広げられるまさにエロゲー中のエロゲー。皆が見ている中でプレイするものとしてはあまりにも不適切過ぎた。ヘタレ主人公の成長やバトル展開等の熱い要素があるエロゲーの方がまだマシだった。そういう物は大抵、家庭用ゲーム機への移植や小説・漫画とメディア展開しているので、そっち方面だと割り切ることも可能なのだ…。

『あたしの胸に顔をうずめないでくれない!?!』

「はあはあ…ぐほげほお!!」

「下を俯いては駄目じゃあ! このイベントは後の伏線となっていてな…!」

下を俯いてゲームを進行しようとしたベアギルデイの頭を掴み、無理矢理画面へと向けるダークグラスパー。ベアギルデイの首からゴキゴキと鳴ってはいけない音が聞こえたような気がしたがお構いなしだ。

その光景にベアギルデイだけでなく、周りで見守っている仲間たちもあまりの苦行に目を背きたくなる。それはじわじわと精神の一つ一つがすり鉢で擦られるような恐ろしい拷問だった。

「う……うわ……うわああああああああああああああああ!!」

遂に耐えられないとベアギルデイはたまらず、c t rキーを秘孔を突くかの勢いで押してしまった。だがあまりに力んだせいか、その一撃はc t rキーを壊すだけに留まらず、P Cを内部から破壊してしまった。イベントをスキップする為に押したのに、P Cごとゲームを強制終了させてしまった。

「ぬう!？」

「あ……あ……あ……」

そして一撃に全てを賭けたせいか、ベアギルデイは吐血し、ぼたりと力尽きてしまった。

「ううむ……まだまだこのゲームには驚く展開が多いのだがな……」

ダークグラスパーはベアギルデイが倒れたことを悪びもなくそう呟くと、壊れたP Cを分解して、ディスクだけを取り出した。

「お、おいベアギルデイー!」

「くそ、タンカを持ってこい!」

「分かった!」

「じゃあ俺は救急箱を……」

血を吐いたベアギルデイの安否を気遣ったのか、ほぼ全員のエレメリアンたちが立ち上がった。だが、逃げられるとでも思ったのか警告の合図ともいえる鞭が地面を撃つ。反射的に全員の動きが止まった。

「……タンカは要らぬ、そこで寝かせておけ」

「で、ですが……」

「心配なら医者をごくに呼ぶのじゃ。今日は無礼講じゃ……宴は始まったばかりじゃぞ……!!」

「ここから絶対に逃がさないといった表情で、エレミアンたちを睨むダークグラスパー。」

「さて…次は誰がプレイするのじゃ?」

ふつと目が動いた瞬間、倒れているベアギルデイ以外の全員が目線をダークグラスパーに合わせないように背けた。その行動に彼女は不機嫌になるが、それならばといった顔をする。

「…ここは奴を呼ぶか」

そしてダークグラスパーがパチンと指を鳴らすとほぼ同時に、そしてサササツと何かがちらに近づいてきた。

「お呼びでしょうか、ダークグラスパー様?」

「?!?!」

ダークグラスパーの前に跪いたのは、首に「雑用係」という札を下げた割烹着姿のフェンリルギルデイだった。よぼよぼのじいさんとは思えない程の身のこなしは、もう雑用の業務に板がついている証拠なのだろうか?

「おお、早かったのう」

「今日私に与えられた業務は基地全体のダクト掃除です。丁度、このホールのダクトを洗っていたものですから…」

「うむ、早いのは感心じゃ」

「恐縮です」

するとダークグラスパーは空いているPCを起動させ、とある一つのディスクをセットする。その中身は勿論エロゲーだ。

「実はエロゲーを振る舞ってプレイする環境を整えたのに、皆プレイしながらなくてな? 手本を見せて欲しいのじゃ」

「…かしこまりました」

フェンリルギルデイは一瞬だけ顔が強張ったが、承知するとそのまま椅子に座り、ゲームを開始する。そして先ほどと丸つきり同じような状況が始まった。

またあの地獄が繰り返されようとしているのか。

この場にいるエレミアンたちは、日が変わるまでホールを抜け出せなくなるかもしれないと半ば本気で思い始めた。

※

秋葉原での買い物は思ったよりも短時間で終わった。少なくとも日が変わるまでに帰ってこれたのは幸運という他ない。

光太郎が訪れたのは単価の安い電気機器を扱う店であり、レイチエルとしよっちゅう連絡を取り合いながら、細かな電子部品を一つ一つ選んでいった。後半あたりになってくると、何がどういった風な原理で動くのか、大まかであるが分かってしまった程だ。ちよつとした良い勉強にもなったかもしれない。

「じゃあ…俺、もう寝るぞ…?」

眠い目を擦りながら、レイチエルを一瞥すると、買ってきたパーツと今あるパーツを細かく分類していた。

そう、買ってきたからおしまいなのではない。ここから組み立てや加工などを行わなければならぬのだ。

残念ながらそれは光太郎の管轄外なので、それはレイチエルに丸投げするしかない。

「ええ、これが終わったら直ぐ電気消すから」

「うん、そうしてくれ…じゃあ、おやすみ…」

「おやすみなさい」

ベットに横たわり布団をかぶる光太郎を見ると、レイチエルは再び振り分け作業に戻る。

必要なパーツや加工が必要なパーツなど、袋や付箋などを使いながら事細かに分けること早1時間。もうとつくの昔に光太郎が寝入っている中で、レイチエルはとある重要な障害に悩まされていた。

技術的な問題ではなく、もっと別の問題…設備的な問題についてだ。

「こうして見ると…加工しなきゃ、使えないパーツが多いわね…」

最初はほんの数個位だろうと鷹を括っていたが、改めて所持しているパーツを整理整頓して見ると、きちんと加工しなければパーツとして使えなかったり、組み込めないものが多い。一応、持ち運んでい

る荷物の中には作業用のアームや加工用の工具などが入っている。が、それはあくまで小型化した物ばかりで、大がかりな加工や複雑な加工などには適していない。

テイルドライバーは内部のパーツ取り替えだけで簡単に修理できるようにはしているものの、パーツの加工となってしまうと話が別になってしまう。

「……どうしよう」

パーツはある。だが、それを加工する道具や工房がない。一度、ここに工房を作ってみようとは考えてみたが、この部屋は2階に位置している。トウアールの所みたい地下に造る訳にもいかないし、大きな工具なんかを置いたりしたらそこそこの築年数であるこのアパートの床が抜けてしまうし…。

「あいつに、頼むしかないか…」

しばらく考えてみたが、解決方法は一つしか思い浮かばなかった。頼めば、あいつは快く許可してくれるだろう。だが…やはりなるべくはその手段は取りたくはなかった。

身の危険も無くは無いし…なによりも、自分の精神状にも取りたくはない。

だけど、やるしかない。パーツの加工はここよりも設備が整っている、あいつの基地にある研究室を借りるしかない。

「やらなきゃ、駄目ってことよね…」

光太郎がやらかした一件に急かされたみたいな所はあるが、遅かれ早かれこれは確実にぶち当たる問題。だったら、それはなるべく早いうちに解決してしまった方がいい。

「よし…い…やるか…!!」

レイチエルはそう自分に鞭打つと、その目的の人物に連絡を始める。通信履歴に残っている、あいつの連絡先に。

『はい…』

ワンコール目ですぐ繋がった。

「…あ、起きてた?」

『ええ、ええ! 起きてますよ!! レイチエルからの連絡ならば、いつ

だってワンコール目で出てみますから!』

「……………うん、ありがとう」

つい最近、似たようなことを言った奴がいたような? という既視感デジャブを感じる。何故か眼鏡をかけた黒色ストーカー女がレイチエルの脳裏をよぎる。

『それでそ、れ、で! レイチエルはこの私、トゥアールにどういった用があつて連絡したのですか!?! もしかして…』

「デートのお誘いではないわね、残念ながら」

『ああん…』

そんな声を出すトゥアールにイラつと来たが、これがトゥアールの平常運転だったなと思ひ、心を落ち着かせる。

「あんたのこの研究室、ちよつとの間だけ貸してほしいのよ。あたしん所じゃ、大掛かりなパーツの加工なんてできないから…」

『ええ、ええ! そんなことなら、全然構いませんよ!!』

レイチエルの覚悟とは裏腹に異様なテンションの高さでそう言うトゥアール。時刻も深夜だし、変なテンションに入っているのかもしれない。

「…ありがとうね、トゥアール」

『いいですよお、いいですよ!! だって、私たち、親友じゃないですか!!』

「…親友、ね」

その言葉にレイチエルの顔が自然と強張ってしまう。画面の向こう側にいるトゥアールの笑みとはまるで対照的だ。

『はい! 何時だって私たちし』

「!」

プツン! レイチエルは何故か通信を強制終了させてしまった。

…気がつくつと、掌や背中には嫌な汗がべつとりと滲み出していた。

「親友…」

狂おしいにまでに動機は早くなってくる。

トゥアールのあの笑みが、とてつもなく恐ろしく見えてしまった。邪な目的などない、ただ普通の笑みなのに、まるで自分を責めている

かのように感じてしまった。

「……………」

レイチエルはギリツと歯を食いしばると、力任せにパソコンの蓋を閉めて、電気を消した。

そして布団を頭からかぶり、目を閉じた。ほんの僅かでも現実を忘れ、夢という優しい嘘で作られた世界へと逃避するために。

※

そして深夜をとくに周り、早朝と呼べる時刻になった頃、アルティメギル基地ではまだフェンリルギルデイによる公開エロゲープレイが繰り広げられていた。もう朝日が昇る時刻になっても、宴と称した拷問は続いていた。

「ほうー。そこでそう選ぶのか!!」
「ええ」

「ほほう…わらわがプレイした時は、そこはそうではなくな…」

時折ダークグラスパーの実況が入るそれは、完全に動画サイトなどにアップされている実況プレイと化している。

だがダークグラスパーは気づいていない。フェンリルギルデイはさつきから短い言葉でのやりとりをしていないことを。時々、片手をテーブルの下へと引っ込めて、血が出るのでは云わんばかりに拳をグーにしていることを。彼はこの状況を決して喜んでなどいないということ。

((……………あああ))

それを見てしまったエレメリアンたちはもう見ていられないといった顔をしながら、フェンリルギルデイに同情のまなざしを送る。そしてこの針のむしろのような拷問をいつまで見届けなければならぬのか、という苦しみが混じった表情をする。

そしてそんな時間が一体どれだけ経ったのか、遂にご褒美のシーンがやってきた。

画面上ではヒロインが眉をあげ、不機嫌そうにしながらも服を脱い

でいくイラストが展開される。

やれやれ：ようやくこの時が来たかと、皆は胸を撫で下ろした。

このエロゲーは会話が無駄に多いだけでなく、その展開も非常にスローだ。このシーンに入るまで、一体何時間耐え続けなければならなかったのだろうか。

それにもう少ししたらこの拷問も終わる。もう少ししたら、朝の業務が開始される時刻になって、この場から逃げられるからだ。：ゴールは直ぐそこだ、誰もがそう思った時だった。

しかし、次のイラストが変わった瞬間、メッセージウィンドウに表示されたのは、再生されているボイスとはかけ離れた、アルファベットの羅列だった。

「おっと、誤字かと思えば。不思議じゃのう、こんな所にわらわのアドレスが表示されておる」

「!!!!」

盛り上がりを見せるイベントシーンで、痛恨すぎるバグ。というか、こんなバグがあつたら、ネット炎上どころの騒ぎじゃなくなる。メーカーに殴り込みをかけられてもおかしくない程の度し難きバグだった。

考えたくないが、ダークグラスパーはこの一文を変えるためにプログラムごと書き換えたのだろう。

そんなダークグラスパーは一切合切の罪悪感もなく、フェンリルギルデイの肩を叩いた。

「実に不思議じゃのう」

「ははは、そうですね」

しかもヒロインの大事な部分が隠れているはずのモザイクが、何故かQRコードに変わっていた。皆それがどうしても気になったが、絶対にツッコまねえぞという顔をする。

「このモザイク部分がQRコードになっているであろう？ これを読み取ればわらわのアドレスが登録される仕組みになっていてな…」

「!!?!」

「ははは、なるほど」

まさかパートナーであるメガ・ネが『友達が出来るように』と作ったQRコードが、こんな所に使われているとはメガ・ネ自身も想像していないに違いない。QRコードの本来の使い方を完全無視したそれは、数百年先でも通じないであろう最先端のファクション過ぎた。「さてこれで気兼ねなく登録が…と、主はわらわとアドレス交換をしておったな…」

「一…」

まずい、矛先がこつちへと来る！ 誰もがそう思ったとき、遂に救世主は降臨した。

『おはようお兄ちゃん！朝だよ！ 今日も一日、頑張ろうね!! 早く起きてよお、早く早く!!』

「!!」

基地全体に流れたモーニングコールは、エロゲーの初回特典についできた目覚ましボイスだ。

起床の合図が鳴った、ということは今日の業務が始まったのだ。戦士たちの自由時間は終わり、今から仕事を始めなければならない。

「さて、わらわとアドレス交換タイムと…」

ダークグラスパーが振り返ると、そこには誰もいなかった。仕事の始まりの合図を受け、ほとんどのエレミアンが逃げ去ったのだ。この場に残っているのはフェンリルギルデイと彼女だけであった。

「……………」

「では、私も失礼します。仕事が始まるので…」

そんなフェンリルギルデイも一礼をすると、倒れているベアギルデイを背中に背負いながら、ホールを後にした。

…ちなみに今日、このホールで繰り広げられた宴でエレミアンたちは基地設立以来、初めて争いのない瞬間を、そして皆の考えが完全に一致するといった奇跡が起きた。奇しくもこれを通したことでエレミアンたちの団結は高まったのだ。

そして余談になるが、数日に渡ってフェンリルギルデイと思われる狼の泣き声が格納庫から聞こえてくるという現象が起こる。…彼のプライドはまたもやスタスタにされたのだった。

第43話 過去とツインテール

「え！ 席無いんですか…」

「ごめんなさいね。今、丁度満室になっちゃった所で…」

カウンター前で愕然とする俺に慰めの言葉をかける先生。図書室の席はずらりと大勢の生徒で溢れかえっていた。

「開くまで、待つ？ 結構時間かかると思うけど…」

「いや、いいです…諦めます…」

それだけを言うと、俺は図書室を後にし、廊下へと出た。

(…やっぱり、みんな考えることは同じって訳かあ)

授業が終わり、放課後を迎えた光太郎は騒がしい教室を抜け、図書室で勉強でもしようとしていた。中間テストが間近に迫っている今、そろそろテスト対策を本格的に始めなくてはマズイ時期に来ている。

…が、生憎同じ考えをしている奴はたくさんいたらしい。図書室の机は全席取られていた。しかも勉強机だけでなく、読書用の机に至るまで全席埋まっている状況だった。

一応、『図書室内の机の使用時間は2時間まで』という制限はあるものの、正直にそれを待っていたらその分の時間が無駄になる。

「市内の図書館も今日は閉まっているし、こんな天気の中、帰ってもなあ…」

外は強風が吹き荒れており、空模様も曇っている。午前中の雲一つない晴天が嘘みたいだった。

校庭にある木の枝がしなり、枯れ枝や木の葉が幾つも吹き荒れている。雨の勢いも激しく、バラバラと地面を打っていた。もしかしたら、この図書室で勉強している奴の大半が雨宿り目的じゃないのだろうか。

光太郎も傘を持ってきてなく、この土砂降りの中を何も差さずに走って帰る勇気は無かった。家に帰るころには風邪をひいてしまいうか。そうなほど、天候は悪い。

教室に戻ってそこで勉強するという手もあったが、図書室まで来てわざわざ教室に戻るのも面倒だし、勉強するにしたってあそこでやる

のは精神的にも避けたい。いくら慣れてきたとはいえ、あのカオスな空間で勉強をやるのはいい気がしないもの。避けられるものならば是非とも避けたい。

「ん？」

…すると光太郎は、ふといつかの言葉を思い出した。確か、そう：一月ほど前の話だ。ツインテール部の設立の際、俺の名前を貸した時に総二はこう言っていたはずだ。

『で、ここが部室だからな、暇な時があればいつでも来ていいぜ！』（もしあの約束がまだ生きているのなら…）

あ、そうだ。光太郎の頭にパチンと光が灯った。

「…総二んとこの部室に入れさせてくれないかな？」

そうだよ、俺にはその選択肢があつたじゃないか。仮にも幽霊部員とはいえ、俺もツインテール部の部員なのだから、部室を使わせてもらえばいいんだ。

幸いにも部員である総二や愛香さんとはそれなりに親しいし、上手くいけば二つ返事で入れてくれるかもしれない。それほどの仲ではないトウアールさんの存在が鬼門であつたが…行つてみる価値はありそうだ。

「うん、ツインテール部か…確か部室の場所は、部室棟の突き当たりだっけ？」

総二が作ったその部活に自分の名前を貸してから、思い出すのは…。

『さあ、出てきてくれ丹羽君。怖がらなくてもいいんだ、出てきてくれたまえ！ 私は君に婚姻届を渡したいだけなんだから!!』

『ほんつとに総二の馬鹿に付き合わせちゃってごめんなさい…』

俺の脳裏をよぎるのは尊先生の婚姻届と愛香さんの謝罪の言葉と…あれ、あんまりいい思い出が、ない？ 確かに、名前を貸したことでメリットよりもデメリットのほうが多く発生しているんだけど…。

「…まあ、メリットは…一つだけあつたな、うん」

俺は初めてツインテール部に入っていてよかつたかな？ と思いつつながら、部室棟目指して歩き始めるのだった。

※

ツインテール部の部室では、早めに生徒会の仕事が終わった慧理那がいつもより早めに合流していた。

「最近、アルティメギルが現れませんわね…」

「いいことじゃない」

「そ、それはそうなのですが…」

「平和が一番よ。あたしだって戦いたくて戦っている訳じゃないんだし」

慧理那は降りしきる雨を見ながら、歯切れが悪そうにしていた。

せっかく変身できるようになったのにその機会が訪れないことに嘆いているのか、それとも自分に付いてしまったネガティブなイメージを早く挽回したいのか、それとも戦場でしか愛しのテイルファイヤーに会えない現状に苦しんでいるのか。

どちらも気持ちは分からなくはないが、一般人が危険な目に晒されないのが一番いいことだという愛香の意見は、慧理那自身よく分かっている為、なんとも複雑な様子だ。

トウアールは熱心にパソコンのキーを叩いて、何か作業をしており、外の雨が地面を叩く音との調和が部室内に響き渡っていた。

総二たちも特にやる事がなかったため、新調したばかりのピカピカのテレビで夕方のバラエティーを見ていた。

『今日のゲストは知る人ぞ知る、地球一眼鏡を愛するアイドル、善沙闇子ちゃん!!』

『どうも〜！ 銀河を貫く眼鏡アイドル、善沙闇子です!!』

「あ、この子また出てる。最近よく見るわね」

「本当ですわね」

愛香と慧理那が目にしたテレビに映っているのは、眼鏡を売り込んでいる新人アイドル、善沙闇子だった。最近、随分とプッシュされているらしく、ここどころのテレビで見ない日はないと言っていい程のブレイクをかましている。

「……殴り合いつていうか、一方的に殴り合っているって感じなんだけど。しかも分かり合うつてよりは、より溝を深めているって感じが……」

そもそもその争いの発端が、『トウアールが総二の童貞を奪おうとしており、それを愛香が阻止する』といったどうしようもない時点で、友情も糞もないだろう。と、というか最近のトウアールは何かにつけて総二に下ネタを振るようになってる。…多分、未春に発破でもかけられて、焦っているのかもしれない。

そのとき、コンコンと部室のドアがノックされ、皆の視線がドアへと向かう。

「？ はーいー！」

一旦殴るのを止めた愛香は、その声と共に颯爽と立ったが、総二はこれを手で制し、「俺が出るよ」とだけ呟いて立ち上がった。愛香は「そう……」とだけ言うと、再び席に座り、総二がドアを開ける光景を守る。

「……あ、総二？」

「おまつ……光太郎？ どうしたんだ？」

扉の先にいた人物があまりに予想外過ぎた為か、総二はすつとんきよんな声を上げた。

「光太郎？ あんたどうしたの？ こんな所に来るなんて……」

「いや……少し、頼みがあつてき……」

愛香もいきなり現れた光太郎に驚いたのか、面食らったような顔をしていた。慧理那は2人とは別の意味で驚いた顔をしており、トウアールは相変わらずパソコンに視線を向かわせていた。

「あー、総二……この席、一つ貸してくれないかな？」

光太郎は部室内にある長テーブル席の一つを指さしてそう尋ねた。「図書室で勉強しなかったんだけど席が全部埋まってる。あの教室に戻って勉強するのも、あれだし。というか幽霊部員の俺が頼むのも凶々しいって感じなんだけど……駄目かな？」

「……………」

すると総二はきよんとした顔をした後、あははと軽く笑いながら

俺の肩を叩いた。

「なんだよ、そんなことか！ それくらいなら別にかまわないぜ!!」

総二は右手を中に動かし、入ってこいよと言うと、席を一つ開けてくれた。

「なんだって、光太郎は俺以外で唯一の男子部員なんだからさ、遠慮しなくたっていいんだぜ!」

総二は男が増えたことが嬉しいのか、鼻歌を歌いながらカップと電子ポッドを戸棚から取り出した。

「ほら、早く上がれよ。茶、出すからさ」

※

「…あ、美味しい」

「まあ、家んち喫茶店だし、臨時の時は俺が客に茶出したりしてるからな。慣れみたいなもんさ」

総二はやってきた俺に嫌な顔一つしないで紅茶を振る舞ってくれた。電気ポッドで注いだとはいえ、茶葉を使ったそれは雨で少し寒くなっている身体に温かみを与えてくれる。インスタント系で済ませってしまう自分では、決して味わうことが出来ない味だった。

(に、しても…)

俺がそんなことよりも気になるのは、この部室内にいる慧理那会長のことだった。どうして生徒会の慧理那さんがこんな謎の部活に顔を出しているんだ？ それに妙に総二たちと親しいようだし…。まあ、会長がツインテイルズのファンだし、ツインテールつながりで親しくなったのか？ それに会長にはベルトの件で伝えたいことがあるんだけど…総二たちがいるんじゃないや迂闊にも話せないなあ…。

『闇子ちゃんは眼鏡がチャームポイントなんだね！ でもコンタクトにしないの？ コンタクトにしたら、一層可愛くなるって僕は思うんだけどな』

『コンタクトしている奴なんて…皆死ねばいいのに♪』

つけっぱなしのテレビではMCのフリに笑顔で答える闇子の姿が

あった。

(ん……?)

『あんこ』という名前にどこか聞き覚えがあった俺は、ふと視線を慧理那会長からテレビへと向けた。

「あれ、この子……」

「ああ、善沙闇子ちゃん。最近人気のアイドルなんだって」

『はい！ 初シングルの『眼鏡プラネット』は絶賛発売中ですが、近いうちにセカンドシングルも出しますので、皆さん楽しみに待っていてくださいね!!』

「あ……こいつ……」

愛香さんが横から説明をしてくれたのと告知タイムになり、バツクで流れ出した電波ソングのおかげでようやく目の前のアイドルが誰なのかが分かった。

この子、ノブが言っていたアイドルの……?

「あれ? 知ってんの、あんた?」

「………うん、まあ……名前だけは知っているんだ」

目の前にいるあの子が、弟がガチで応援しているアイドルだったという事実は俺に軽いショックを与えていた。

どう見ても未成年っていうか……下手したらこの子、小学校高学年辺りの齡じゃないのか? 同年代辺りのアイドルでしかも軽く電波が入っているみたいなアイドルを応援している我が弟を俺は軽く心配しながら、茶を啜る。

隣にいた総二もまた、テレビに視線が向かっており、複雑そうな顔で闇子を見ていた。

「……ねえ、そーじ」

すると、愛香さんが自慢のツインテールの毛先を摘みながら、ちらりと総二の方を見た。

「やっぱり、ツインテールの子がツインテールを辞めたら……嫌、なの?」

「?」

「その……闇子ちゃんのこと、凄く残念そうにしているし……」

…どうやら、総二が先ほどから残念そうな顔をしていたのは、闇子がツイントールを辞めてしまったかららしい。

うーむ、しかし総二が落ち込むレベルのツイントールか。俺も見ておくべきだったな。

「…そりゃあ、似合う子にはいつまでもツイントールにして欲しいって思うけどさ、やっぱり、その子がしたいようにするのが一番だと思うよ。最近、無理にツイントールにしているような子が多いからさ」それはその通りだと光太郎も思う。

本当に大切なのは『どうすればいいか』じゃなく『どうしたいか』だと、俺のツイントールも語っていた。言われたからとかじゃなくて、自分に決めることの方が大切なのだ。その覚悟はきつと人を強くするだろうし、きつと同じようにツイントールをも美しくさせる。仮にその子がツイントールをやめても、それが本当にその子のしたいことならば、俺は止めない。それもまた、その子の覚悟なのだから。

「……あ、あたしは…嫌じゃないから、ね」

「え…」

なんと愛香さんは潤んだ瞳で、総二を見つめていた。そんな総二も突然の愛香さんの行動に面食らったのか、驚いていた。

そしてそんな2人を、顔を赤くしながら慧理那会長は見ていた。…ちなみに俺も顔を赤くしながら、総二たちを見ていた。

「…やっぱり観東君と津辺さんは幼馴染なんですよわね。お2人の何もかもが通じ合っているような空気…なんだか羨ましいですよ」

「そ、そうかな…羨ましい?」

「ええ、私もそんなお人と仲良くなれたら…どれだけ嬉しいことか…」
「まあ、ツイントールの気配やその時のコンディションを見れば、大体の感情は理解出来ますしね。愛香の考えは大体分かりますよ」

「……………」

なんか総二が最後に言ったことで全部が台無しになっている気がするけど、総二と愛香さんの間では凄く甘酸っぱい雰囲気を展開されている。どこのラブコメ? と誤解する程の甘い展開だ。

ちなみに、俺にはツイントールの気配なんてものは分からない。と

「どうか、そこまで足を突っ込んでしまったら、俺は人として何かを捨ててしまいそうだ。」

総二の並々ならぬツインテールへの愛に戦慄を抱いている俺だったが、トウアールさんは逆に怒りをみなぎらせながら立ち上がり、テールを叩いた。

「正気ですか慧理那さん!? 幼馴染なんて、かませ犬ヒロインの宇宙代表とも云えるべき存在ですよ!」 ただでさえ『何となくフツても後腐れない感』が半端ない存在なのに、よりによってあの愛香さんですよ!?! 愛香さんの幼馴染ポテンシャルなんてカスカスに絞られた雑巾の水滴みたいに無いに等しいのに、間違えても憧れを抱くだなんて…」

「あら、なんとなく殴つても後腐れない感ナンバーワンのトウアールさん、お覚悟はよろしくして!」

「あ、やめてください! 私、そんなに安い女じゃ…まだHPも回復してなあああああああああああああああああ!!」

ガシツと足首を掴まれて、部屋の隅に引きずられていくトウアールと、それを捕食せんとばかりに怒っている愛香さん。どうして、トウアールさんはああいう行動をしたら殴られるんだって学べないんだろう…。

と、そんな光景を見ながら、何故か慧理那会長は椅子に座りながら羨ましそうな視線を続けていた。

その視線の先にはモンスターパニック映画よろしくの捕食される一般人とモンスターが映っている。…どっちがどっちの役かは説明しなくても分かるだろう。

正直、どこをどう見れば羨ましいという感情を抱けるのか、今の俺には理解できない。

「…」

すると慧理那会長は突如立ち上がり、両手をメガホンのようにして、とんでもないことを口走った。

「——津辺さんって、胸が小さいですわね!」

「「……………」」

この部室内にいる全員の空気が、死んだ。俺と総二は呆然と慧理那会長を見て、愛香さんとトウアールさんも一時停止し、丸い目で慧理那会長の方を見た。

何故だか、慧理那会長が今度は喜んでいるように見えた。口元がふつと軽い笑みを浮かべていたし、頬が何だか赤くなっている。

…やっぱり今の俺には、最近の女の子事情を理解できない。

「あの…津辺さん？ 怒らないんですの？」

「いや…だって…ねえ…」

愛香さんは会長の胸元へと視線を向け…そして微かな勝利の笑みを浮かべていた。ああ、事実と違うから、怒るに怒れない、と…。そんな愛香さんの行動がまるでテイルブルーがついこの間まで見せていた行動に似ており、俺はどこかデジジャブを感じてしまった。

すると会長はこんな行動では満足できないと、2人の元へ歩み寄った。

「私も、津辺さんに叩いて欲しいのですわ!!」

「うえええええ!!」

…前言撤回だ。会長も別のベクトルでどこか変だった。

愛香さんは悲鳴に近い声を上げ、軽く尻餅をついた。流石の愛香さんでも、会長のその願いに二つ返事で承諾して顔面パンチを繰り出すほど、人間を辞めてはいないらしい。

「だって、津辺さんとトウアールさん、とても仲良く見えますもの！」

私も、友達として仲間としてそんなやりとりが出来るようになりたいんですの！ そうすればきつと…!」

ああ、慧理那会長には2人のあれが仲間の証みたいに思っているのか。でも友達とか仲間って単語はあんな風に一方的に殴り合う関係を表すんじゃない気がするんだけど…。

「代わってもらえるのなら代わってほしいのですが！ さすがにそれはできません！ ヒーロー番組でもよくテロップが流れませんか!?

これはヒーローだから可能であってよい子のみんなは絶対に真似しないでねって!!」

「そうよ！ 会長じゃ顎から上が全部吹っ飛んでなくなっちゃうわ

!？」

「愛香さん、あなた普段どんな力でトウアールさんを殴っているんですか!？」

「えーと、殺す一歩手前くらい…かな!」

「…頼むから殺人事件だけは起こさないでくれよ、愛香?」

俺たちのそんな流れるような流れに加われない慧理那会長は「うゝ」と唸りだした。

「だ、大丈夫ですわ! ヒーローは変身する前でも何トンも威力がある攻撃を食らってもピンピンしているじゃないですか!! 私だって同じように、愛香さんのパンチを食らっても大丈夫なはずですわ!!」
確かにヒーロー番組ではそういった展開は多々ある。ヒーローたちは物語の進行上死んではまずい為、身体がミンチになるような設定の敵に殴られてもピンピンしていることがあるし、鋼鉄をも斬り裂く剣で斬り付けられた壁や金網がどういった訳か傷一つなかったり…とかいう不文律は存在する。

でもね、会長。ここはフィクションじゃないの、現実なんだ。本当のバトルは一度つきりでポーズもリセットもできないんだ。現実是非情なんだ。

「さあ、私の左のほっぺを思いっきり叩いてください!」

「ご、ごめん…それはあたしでもちよつと…」

「叩いて問題を起こしてください!! そして私との友情を育みましよう!!」

今、生徒会長として絶対に言っちゃいけない言葉が飛び出したような気がしたのだが、気のせいだろうか? だがいくら愛香さんでも、無抵抗の常人に殺人パンチはできないようで、その拳が握られることはなかった。

「…分かりました。もういいですわ、っーん」

「ああ、なんて可愛いんでしょう…じゅーん」

意味不明な効果音を語尾につけ、トウアールさんは慧理那会長の子供っぽくて可愛い仕草に興奮している。

だが、愛香さんに断られたことで、その矛先は面倒くさい所へと向

けられた。

「では観東君に丹羽君…… 私を殴ってください!!」

「ええっ!!」

「お願いしますわ!!」

「またもや目を閉じて俺たちの前に無防備に立つ会長。」

「いや……これは流石に……会長のツインテールに対する冒瀆にもなるし……」

総二はいくら会長の頼みでも女の子を殴ることは出来ないといった反応を示すと、なんと会長は俺の方へとロックオンしてきた。

「では丹羽君! 私を思いっきり叩いて下さい!!」

「! いや、いや……いくらなんでも……不味いでしょうし……」

「さあどうしたのですか丹羽君! あなたはテイルファイヤーのファンなのでしょう!!? ここで私を殴らなければ、いつまでたってもテイルファイヤーみたいになれませんわ!!」

「……いや、でも、ええっ? ……そこでその話題は関係ないんじゃない?」

「おまつ……ファイヤー派だったのか!」

ツインテイルズの話題になった途端、これだ。総二の興味は会長からツインテールへと移ってしまったらしい。凄く真剣な目で俺の方を見てきた。

……うん、今そこは重要な所じゃない。この目の前の状況をなんとかすることの方が大切なんだ。それにテイルファイヤー本人が目の前にいる状況で、まさか本気で殴る訳にもいかないし。

「好きっていつても、人並みに好きってだけで、そこまで……」

「駄目ですわ! 丹羽君の愛はそこで終わっていいものではないはずですわ!!」

「……………」

もうこのままでは拉致が明かない。ここでいくらぐねても、いつまでも会長は納得しないだろう。それにこのまま放置しておけば、会長だけでなく総二たちにすら俺への疑いを招くことになるかもしれない。

……俺は蚊すら殺せないのではというほど充分に手加減をして、会長

「今度は私のほっぺにビンタをお願いしますわ!!」

もう部室内はカオスとしか言いようがない状態になっていた。俺はここで静かに勉強をするはずだったのに、何故かツインテール部の面々に振り回されている。

俺目がけて婚姻届を手裏剣代わりに投げる先生とそれをインターセプトして破り捨てる愛香さん。

総二に叩いてくれと懇願する慧理那会長となんとか避けようと交渉に励む総二。

…だが、俺たちは騒ぐだけ騒いでいたせいで、ここにいたはずの人物が消えてしまっていることに気付けなかった。

それに気付けたのは、総二は困った拳句にトウアールさんへ助け舟を出した時によく判明した。

「トウ、トウアール!! 頼む、会長をどうにか…トウアール?」

総二の視線の先には、さつきまでいたはずのトウアールさんの姿がなく、忽然と姿を消していた。彼女が愛用しているパソコンだけがぽつんとテーブルに置かれている。

「あれ…トウアール…さん?」

「居ません…わね?」

そこで俺と会長はさつきまでいたはずのトウアールさんが何故か部室から消えてしまっていることに気づき、きよとんとするのだった。

「ほらほらほらほらほらほらほら!!」

「だりやりやりやりやりやりやりやあああああ!!」

…残りの2人がこのことに気付くのは、当分時間がかかりそうだ。

※

同時刻、喫茶アドレシエンツア地下にある、秘密基地内のある廊下。

先ほど、光の渦と共にここへ降り立ったレイチエルは少し緊張したような顔で待っていると、同じように目の前に光の渦が現れる。

「レ〜イチエ〜〜ル!!」

そしてそこから見知った人物がこちら目がけて勢いよくダイブしてきたが、レイチエルはこれを紙一重のタイミングでかわした。…当然、目標を捕えることが出来なかったトウアールはそのまま壁へと激突した。

「…だ、大丈夫ですかレイチエル？ 怪我はありませんか!？」

「いや、あんたの方が大丈夫?」

2つの意味で大丈夫かとレイチエルはトウアールの心配をしていた。

結構なスピードで激突したはずなのに、何故彼女はピンピンしているのだろうか…。そもそもブルーのオーラピラーを生身で受けて五体満足な時点で色々とおかしいんだけど。もしかしたらテイルギアの装着者はちよつとしたことで死なない身体にでも改造されてしまうのかもしれない。

「…というか来るの早すぎない？ あたしもこんなに早く来るとは思っていなかったんだけど」

「レイチエルからの連絡ならば、いつだってワンコール目に出てみますと言ったではないですか!! 駆けつけるのだって同じです!!」

「……………うん」

レイチエルがトウアールに連絡をしてから2分くらいしか経っていないのに、もうやってくるとは完全に予想外であった。

(しかも『基地の中で待っていていい』だなんて…不用心にもほどがあるじゃない…)

当初は外で合流した後で基地に行こうとしたのに、まさかトウアール本人から中で待っているというメッセージが送られてくるとは思わなかった。それは自分のことを信頼しているという証拠なのか、それとも別の意図があるのか…それは分からないが、やはりトウアールの自分に対する気持ちは昔と変わらないみたいだ。

「…ところで、どうしてあんた制服なんて着てるの？ 新手的プレイ?」

「あっ気づきましたか! 私、今高校に通っているんですよ〜! あ

あなたのお友達トゥアールは、ピッカピカの高校一年生として元気に通学しているんですよ!!」

「こ、高校…?」

レイチエルの顔がほんの僅かだが引きつった。トゥアールが高校に入ろうが何をしようが自分には全く関係ないのだが、元居た世界でのトゥアールの振る舞いを知っているが故に、どうしてもギャップを感じざるを得ないのだ。

「…ピッカピカの1年生って、あなたの実年齢」

「青春はいつだって始められるんですから、問題はありません!!」

「…いや、まあ…別にいいんだけど。あなたが学校に通うとはねえ…」

それから2人は実質トゥアール専用と化しているスペースの研究室へと移動した。

「どーですか!? これくらい広ければ、なんだって作れますよ!!」
「そうね」

研究室を見て驚いたのは、その広さだった。研究室の一角だけでも、光太郎と住んでいる部屋の広さを軽く超えてしまっている。

研究室には巨大な作業机や大型の機材、スクラップや小型の冷蔵庫までもが置かれており、それぞれの設備だけでもレイチエルの持っている物を上回っていた。

机の上には何に使うのか、時空移動用の船艇の設計図が置きっぱなしにしてあり、部屋の隅には加工用の工具が山積みにあっただ。

「確かにここなら、加工も難しくはないでしょうね」

「あ、飲み物もありますよ! こっちの世界の飲み物も美味しいから、きつとレイチエルの口にも合うと思うのですがどれがいいですか?

ジュースにします、サイダーにします!? それ、と、も…」

「どれもいらない。それにあんたもいらない」

「ええつ、なんてノリが悪い…」

「あたしは遊びに来た訳じゃないの…きつと作業を終わらせて、さっさと帰るわ…!」

レイチエルは近くにあっただ機械を起動させ、どこからともなく部品を取り出すとそこにセットして作業に励む。ベルト全体の組み立て

は家に帰ってからでも行えるので、ここではこちらでしかできない部品の加工を主に行う。

その間にも、トウアールはさかんにレイチエルに話しかける。聞かれてもいないのに自分の学校のことや仲間のツインテイルズのことを話し、そしてレイチエルのことも盛んに聞いてきた。

今までどこにいたのか、そして今はどこで暮らしているのか。ちやんと3食食べれてお風呂に入れる環境で生活しているのか、誰かと一緒に暮らしてはいるのか、そしてファイヤーの変身者は幼女なのかなど。

レイチエルは変な質問の時だけは無視して、真面目な質問には短く答える。トウアールが一方的に話し、レイチエルが簡単に返事をするやり取りを幾度も繰り返した。

そしてどんなシャンプーを使っているのかという質問の時、レイチエルはあえてなんでもないような口調で質問を返した。

「ねえ、トウアール。あたしのこと、嫌い？」

「……」

トウアールは一瞬だけポカンとした後、笑いながら「嫌いなわけないじゃないですか」と言った。

「どうしたんですかレイチエル？　世界が変わっても、私たちの友情が色あせる訳が……」

「じゃあ……レッドとファイヤーが似ているのは、どうして？」

レイチエルは暗い顔で再度質問する。

「あれはあたしの嫌がらせかなにかなの……？」

レイチエルはまだ子供であったが、並みの大人以上の経験をしながら世の中を渡ってきた身だ。嫌がらせや妬みなど、汚い世界のこともそれなりに知っている。その為、親友の行動の理由を言葉で確認しておきたかった。……たとえば、それが自らの過去を掘り出すことになってもだ。

「だってレイチエル、あなたはあのスケッチブックを描いた張本人じゃないですか」

「……」

トゥアールの発言は不意打ちだった。彼女は自分と同じかそれ以上に、あれを覚えていたのだから。

※

レイチエルという少女の過去は、地味で堅実なものだった。というより、飛び級という特殊な境遇を考えればそうするしかなかったのだ。

2桁にも満たない年齢なのに大学教授の鼻をへし折るほどの知識を得ても、レイチエルはあえてそれを表ざたにするようなことはしなかった。目立たず騒がず…今以上に奇怪な目で見られたり、変人扱いされるのが嫌だったからだ。

でも自分の湧き出てくるアイデアや発明をそのまま埋もれさせたくはなく、ある頃からレイチエルはどこへ行くにも赤色のスケッチブックを持ち歩くようになった。そして暇な休み時間や退屈な授業の間、自分の溢れるアイデアをそこへ書き記すようになったのだ。…まあ、中身の大半が一刻も早く記憶の彼方へ消し去りたいような黒歴史だらけのスケッチブックなのだが。

そのスケッチブックにアイデアを描くという行為はレイチエルが大学を卒業し、とある研究所に就職した先でも続いていた。でも、それを決して人に見せるようなことはしなかった。

そしてそんなある日、レイチエルはふと自分のスケッチブックが手元がないことに気付く破目になる。そしてこのスケッチブックをトゥアールという少女が拾ったことで、レイチエルの人生は陽気で騒がしく、落ち着かない日々の幕が開くことになるのだった。

「落し物を届けに来ましたよ」

「…」

ツインテール姿のトゥアールはいかにも愉快そうな顔でそう言った。彼女の手にはレイチエルの赤いスケッチブックがある。

その頃のトゥアールとレイチエルは今のような関係ではなかった。名前は互いに知っているものの、特に親しくもなく、同じ職場で働い

ている人間くらいしか認識していなかった。

「…どこに落ちていたの？」

「自動販売機の隣のベンチの下に落ちてましたよ。名前が書いていなかったので文字の癖を確認しようとして、少し中身を検めさせてもらいました。それであなたのだつてわかつたんです」

勝手に見てごめんなさい、とトウアールはレイチエルにスケッチブックを返した。それをレイチエルはひったくるように手に取る。

「別に…大したことが書いてある訳じゃないから、いい。けど…このことは誰にも言わないで」

レイチエルは書いてある中身よりも、自分がこんなことをやっていることがばれたことの方が重要だったのだが、そんな言葉にトウアールは身を乗り出してきた。

「本当にそう思っているのですか？」

「…どういうこと？」

当時、トウアールは研究所の中でも頭一つや二つ分抜けていた存在であった為、レイチエルはいちやもんや嫌味でも言いたいのかという顔つきになる。

「使えるアイデア満載じゃないですか」

トウアールはちよつといいですか、と断つて一旦返してくれたスケッチブックを再び開いた。

「例えばここですよ。他者の意識の混合させて、一つの方角へと持つていくっていうアイデア！」

自分の書いたものを他人に読み上げられるというのが嫌なものだ。そんなことをされるのは不当に思えた。

「…そんなこと考えてる奴は頭がおかしいって言いたいの？」

レイチエルは吐き捨てるように言ったが、トウアールは真剣にかぶりを振る。

「とんでもない、その逆ですよ！ 確かに今の技術では不可能かもしれませんが。でもあなたはこのアイデアを真剣に考えて、仮に今の技術で実現させるにはどうすればできるかを本気で検討してますよね？」

もしそれができた場合、何に使え、何に應用できるか…このスケッ

チブックからでもその熱意は十分に分かります」

トウアールは言葉を一旦止めると、口元を緩ませた。

「不可能に挑戦するという熱意や思いを私は馬鹿になんてしませんよ。だって私は科学者！ 不可能に挑戦するのがお仕事なのですから!!」

「!」

「よかったらもう少し話しましょうよ。お昼、まだですよね?」

それが、トウアールとレイチエルが親しくなったきっかけだった。

トウアールという少女とつるむことになったレイチエルの生活は広がりを見せた。彼女は優秀な科学者としての顔だけでなく、他の研究所の仲間や時には他の若者を集めてはイベントなんかを行っており、それにレイチエルを誘ったりしてくれたりした。

そして、これが最も大切な事なのだが…トウアールは何をするのにも全力で楽しんでいた。

そんなトウアールに振り回されていく内に、レイチエルの方も段々と変化が見られ始める。

最初はうつとおしいと感じていたレイチエルであったものの、どこか真つ直ぐしたトウアールの性格やその生き方にどこか憧れみたいな感情を抱くようになっていたのだ。

『私は未来永劫、私として生きるのみ！ 誰に言われたって、これは譲れませんよ!!』

時たまトウアールは残念な所を見せるが、その我が道を行く生き方はレイチエルにとってまるで姉みたいな存在になっていく。そして時間と共にその関係は親友と断言できるまでに発展していった。

そんなある日のことだった。

丁度休憩時間の時、トウアールはレイチエルのスケッチブックのとおあるページを夢中に読んでいた。

「…なに見てんのよ、あんたあ!!」

「あ! いや、これは親友としてチェックを…!」

「人の物勝手に覗くな変態——!!」

レイチエルのビンタにトウアールは吹っ飛びながら、何故かあはは

と笑っていた。

トウアールが夢中に読んでいたページには、とあるツインテール女性のスケッチが描かれていた。

身長は170センチほどで赤色の甲冑を纏い、そのツインテールも甲冑と同じ赤色。凛々しい顔つきと共に、剣と籠手を構えており、ゲームのキャラクターや変身ヒーローみたいなイラストだった。

「レイチエルもこういうの好きなんですねぇ!」

「…うるさいわね」

軽い黒歴史と化しているそれを親友に見られるのは嫌なものだ。レイチエルはスケッチブックをひったくると、すぐさまそれを自分の机に戻した。

「レイチエル、私の目が確かなら、どうしてあのイラストは大人の女性だったんですか?」

「何よ?」

「いえいえ、深い意味はないですよ。ただ、どうしても気になっちゃってねぇ…!」

トウアールは面白いものを見つけたみたいな目をしながら、レイチエルの方を向いてきた。…このモードになってしまったトウアールは果てしなく面倒くさい女になる。正直に言った方がまだ傷は浅く済む。

「…早く、大人になりたいから。そうすれば、あんたみたいに…なれるんでしょ?」

この頃からレイチエルは一向に伸びない背丈を気にしており、早く大きな背や大人びたスタイルに成長したいという思いがあった。それがあのイラストにも反映されていたのだ。

「心配しなくても、レイチエルも背が伸びますよ…野菜嫌いが治りさえすれば! でも今のままじゃ絶対大きくはなれないでしょうね!!
というか大きくならないで!!」

「余計なお世話よー」

キー! と色々大きくなってきているトウアールをにらみつけるレイチエル。それを微笑ましく見つめるトウアールは、懐かしげに呟い

た。

「私は…レイチエルくらいの齢に戻りたいかなあ…」

「……………」

『嫌味か貴様』とでも言いたげな憎々しい目でトウアールをにらむレイチエルであったが、どうやらトウアールがいたいことは違うらしい。

「私…同じ年頃の子と遊んだことがないんですよ」

「え？」

「小さいころからあなたと同じように頭がよくって…そのせいで皆、普通に扱ってくれなくて。だから、一日だけでも子供に戻れたらいつでも思うんですよ！ そうすれば、合法的に幼女の写真も撮り放題で…!!」

「あー、はいはい」

少しシリアスなことを言ったと思ったら、次にはそれか。まともに聞いてしまって損しちゃったと、レイチエルは呆れた。

「悪いけど、あたしはあんたの考えは理解できないわ。あたしは早く大人になりたいの」

「きつとレイチエルも、大人になれば分かりますよ」

「ふーん、そう？」

残念ながらレイチエルがその言葉の意味を理解するには、まだまだ時間がかかりそうだった。

第44話 誕生とツインテール

そして部室内にいる全員が、トウアールさんが部室から消えてしまったことによく気付いたのはそれからしばらくしてからだった。

「あいつ、どこに消えちゃったのかしら。そーじ、知らない？」

「俺も知らないからこうして困っているんだろ…」

残されたのは彼女が愛用しているノートパソコンだけで、他には一切の痕跡がない。何か書き置きでもないものかと全員で部室中を探しているものの、それらしきものすら残っていないかった。

（部室から出ていったのなら、誰かが絶対に気付くはずなんだけどな…）

俺は長テーブル付近を懸命に探しながらも、別の考えの方に意識が向いていた。そう、彼女がどうやって部室から出ていったか、ということだ。

出入り口は一つだけ、しかもその付近には人が密集していた。普通、あそこから出入りしたのならば誰か一人くらいは気づいてもいいはずなのだが…。

窓から出入りしたという考えもなくはないが、外はあいにくの雨。こんな天候でわざわざ窓からの脱出を行おうとする方がおかしいだろう。

（ま、俺の腕にあるテイルリストみたいに瞬間移動や転送が出来るんなら話は別だけど…）

だがそれはあまりにもありえない話だ。いくら彼女が天才だからって、属性力といったオーバーテクノロジーを開発できるとは思っていない。

あれが出来るのはレイチエルやツインテイルズの面々しか所持していない技術なんだから。こんな高校のクラスメイトが持っている技術ではないだろう。

「丹羽君…ちよつといいですか？」

「？」

ちよいちよいと指でつつかれ、振り向くと後ろに慧理那会長が立っていた。教室の端では尊先生がどうにか総二に婚姻届を渡そうとあれこれやっており、まるで詐欺師が一般人を騙そうとしているみたいだった。…毎度のことながら、あれにつきあう愛香さんも大変そう
だ。

「あ、あの…例の件のことなのですが…」
「…ああ」

会長がなんとなく言いたいことは分かったので、俺はパクパクと金魚みたいに声を発せずに「べ、ル、ト」とだけ口を動かすと、慧理那会長はそのとおりとばかりに首を縦に振った。

「！ ええ、それなのですが…どうでしたか？」

不安そうな口調の会長の姿は、まるで迷子になった幼子のようにであり、こんな姿の会長もギャップがあつて可愛いかな？ と思つてしまつたが、可哀そうなので早く真実を教えてあげる。

「とりあえず…大丈夫です。作つてくれるとのことですよ」

「！ そ、それは本当ですよ!?!」

キラキラと目を輝かせて迫ってくる会長は、まるでプロ野球のホームランボールに撞れる野球少年のような瞳だった。よほど、レイチェルがベルトを作つてくれることが嬉しいのだろう。

「ええ。時間はかかるみたいですが、とりあえず完成させるとあいつも言っていました。材料や機材はあつちで準備するとのことですよ…会長はベルトが完成するのを待っているだけでいいよ」

「…そんな。遠慮しなくてもよろしいのに」

「い、いえ。材料や作り方も、あいつはもの凄くこだわるので…全部こつち任せでやりたいとのことですよ」

「はあ…そこまでこだわりがあるのですか」

「手抜き工事は出来ないって言っていましたし、誰かに手伝わせるのも嫌みたいなんです。頑固っていうのか…職人気質っていうのか…」

流星に本物のテイルドライバーのパーツを流用する以上、下手に会長に介入されるとそこから俺の正体がばれかねない。

そこまで本気出さなくてもいいのに、レイチェルは変な所で職人気

質というか、頑固というのか…。インテリって全員あんな感じなのだろうか？

会長はどこか不服そうではあったが、ベルト制作者の並々ならぬこだわりを感じたせいかな、それ以上踏み込んでこなかった。

「……………あの、一つ聞いていいですか？」

「？」

ここで俺は会長にとある質問をぶつけてみた。というのも、どうしても気になることがあるからだ。

「会長は総二や愛香さんとはどうやって親しくなつたんですか？」

それは俺がベルト云々よりも疑問に思っている事だった。学年が違えば身分も違う。接点なつてほとんどないはずの総二たちがどうして慧理那会長と親しくしているのか…それがずっと気になっていた。

「それは勿論、私たちがツイン…！」

すると会長はハツと何かを思い出したかのように言葉を切つて、口を閉ざしてしまった。

「…ツイン？」

「！…い、いえ！…何でも無いのです…」

俺の怪訝そうな態度に驚いたのか、会長は数歩下がった。

と、その時、コツンと会長の手が机の上に放置されているトゥアールさんのパソコンのマウスに当たってしまった。その途端、黙りこくっていたパソコンがうねりをあげて動き出す。

スリープ機能が解除されてしまったのだろう。パソコンが息を吹き返したのを会長はビツクリした様子でそれを見ていた。…何故かその顔も赤かった。

「あー…、あんまり気にしない方がいいと思いますよ」

俺は頭をかきながら、会長をフォローする。きつと会長は他人のパソコンを勝手に動かしてしまったことに罪悪感を感じているのだろう。でもあくまでもそれは事故。ばれないようにもう一度スリープにしておけば、事件はなかったことに…。

だが、俺はここでうっかり近づいて、トゥアールさんのパソコン画

面を見てしまったのがまずかった。

「い…!？」

その瞬間、俺の頭は混乱した。そして、会長がどうして顔を真っ赤にしてパソコンを見ていたのかも理解できた。

「…これ、その…ええ!？」

「こ、こんな破廉恥な…!」

何故なら、パソコンの画面には…トウアールさん似の少女が淫らな格好で映っていたのだから。…俗にいう『エロゲー』なるものがそこには映し出されていた。

※

レイチエルとトウアールの日常が変わったのは、スケッチブックのイラストを見られてから数か月後のことだった。

確かあれはトウアールとカラオケに行つて、その帰りに危うく『ラブから始まつてルで終わる所』に連れ込まされた翌日のことだった。2人はその日は珍しく仕事場に早く来たのだが、そこでトウアール宛に謎の封書が送られていることに気付いた。

「宛先は…書いてありませんね」

「ラブレターか何かなのかしら?」

「幼女のだったら万事OKなんですがね!」

「…警察行こうか?」

相方の相変わらずさに流れるように携帯を取り出したレイチエルであったが、もうそのことをツツコむ人間は残念ながらこの研究所にはいない。

「ええと、これは?」

「宝石…かしら?」

封筒から出てきたのは、2つの宝玉と一枚のディスクだった。ころん、と宝玉が机の上を転がる。

「わあ! こういうの欲しかったんですよね!」

「ちよつと! 悪戯かもしれないんだから、軽々しく持たないでよ!」

「でも凄く綺麗じゃないですか!？」

転がり落ちた宝玉の一つをさつと拾い上げ、見せびらかしてくるトウアールを注意しながらレイチェルは封筒を拾い上げてまじまじと観察する。

「…住所も名前も何も書いていない…書いてあるのは『世界一のツインテールの持ち主、トウアールさんへ』だけか」

どうやらこの封筒は直接ポストへ入れられたらしい。オシャレなやり方かもしれないが、無難で少し臆病さが滲み出てくる感じがする。

念には念をと指紋なども調べてみたが、自分たち以外の諮問は検出されなかった。封筒を閉じるテープの裏側からも指紋は検出されなかった。…単なる悪戯にしては手が込み過ぎている。

「これ見てくださーい! 何かプレゼントが入っていませんってね!!」

「トウアールちゃん、それ何?」

「へえ、宝石かあ…」

トウアールは一人はしやぎながら研究所中を走り回っている中、レイチェルは入っていたディスクをパソコンに差し込み、読み取らせた。

やがてレイチェルのパソコンには膨大なデータが現れる。そのデータの中身は、例の宝玉のデータが収められていた。

レイチェルはキーを操作し、次から次へとデータを切り替えている。そしてその度にぞわぞわとうずく感覚がしてくる。

「何、これ?」

エレメーラオーブ属性玉——その単語が、画面の中で光り輝いていた。その形は封筒に入っていた例の宝玉に似ている。そしてその宝玉に示された属性は「ツインテール属性」だった。

「…ツインテール、ね」

確かトウアールの髪型の名前だったかしら、とふと思った。でも名前はどうでもいい。問題はこの宝玉に込められた恐ろしいほどのエネルギーだった。

それは現在、レイチェルが確認できるどのエネルギーよりも出力が

上であり、これ一つでエネルギー問題を解決できる程であった。そしてこの宝玉で、今まで頓挫していた数多くの研究が進歩し、人類を新たな境地へと誘うことが出来るほどのものだった。

「――」
レイチエルは途端に封筒の持ち主に接触しなくなった。これを何処で見つけ、そしてどうやって手に入れたのか――それを聞きたくなかった。

そしてそのディスクにはまだおまけがあった。それは近い将来、この星に悪しき侵略者が訪れる。その2つの属性玉エレメーラオーブを使って何か兵器を作ってくれないかというメッセージだった。属性玉と君たちの持っている科学力を組み合わせれば、必ずや侵略者を倒せるはずだと。

『頼んだぞ、ツインテールを愛する女子よ…』

最後にあつた声付きのメッセージに色々ツツコミたい欲求に駆られたが、レイチエルは我慢する。

そして無言で手元に残った宝玉の解析を始めると、紛れもなくこれがディスクに示されていた属性玉の内の1つなのだと確信する。

(…まるでアニメみたいね)

どこか怪しいであつたが、この封筒の送り主を信じてみたくなつた。データだけでなく、実物を送つて来るなんて悪戯にしては手が込み過ぎている。…もしかしたら、ディスクに収められた話は全て本当のことなのかもしれない。

侵略者にオーバーテクノロジー…トウアールが喜びそうなシチュエーションだ。…というか、恥ずかしい話だがレイチエルもどこか胸を踊らせている。

確かにこれがあれば今まで技術的にはOKでも、エネルギーの問題で実現不可能だった数々の兵器が実現可能になる。侵略者の件は話半分に聞いていたが、仮にそいつが現れた時の為に何か武器の一つでも作っておいた方がいいだろう。

(とりあえずはロボット工学の奴らにも話をつけてくるか…それとあいつも捕まえておこ)

それには準備が必要だった。それにはまず、相棒のあいつを捕まえないければ。

…そしてその封筒を受け取ってから1週間後。メッセージの通りに奴らはやってきたのだった。侵略者、アルティメギルが。

※

「やあっ!!」

「ぬ…ぐうう!!」

それから数週間後、都会のとあるビルの屋上。

そこには青色の鎧を纏い、槍を振り回すツインテール姿のトウアールとボコボコにやられている怪人の姿があった。その様子は全世界に生中継されており、皆固唾を飲んで見守っている。

槍と怪人がぶつかり合うたびに青色の閃光が走り、怪人にダメージを与えていく。

「オーラピラー!!」

「ぬおっ!!」

そして青色の拘束ビームが怪人を捕えると、トウアールが持っている槍『ウエイブランス』の切っ先が開き、必殺技の体勢へと入った。

「エグゼキュート! ウエエエエイブ!!」

「無念だ——!!」

青色のエネルギーの刃が怪人を貫き、遂に戦いは終わった。そして戦いを見守っていたギャラリーから割れんばかりの喝采が巻き起こる。

「トウアールお姉さんカッコいい——!!」

「トウアールさん素敵だ——!!」

人々の声援を受け、トウアールは変身を解除し、生中継中のカメラに向かって微笑みを返した。

「小さな女の子の皆、私の為に応援してくれて、ありがとうごさいます!! あ、後他の皆も応援ありがとう!」

わあー!という歓声が巻き起こる。…主に語りかけていた対象が

幼女という時点で色々とあれなのだが、もう世界中の皆にそれは知れ渡っているので今更それにうるさく言う人はいない。

「今日の夜7時からのテレビには私が出演するので、皆さん見て下さいね！ ではまた次回お会いしましょう、とうっ!!」

再度変身すると、トウアールはビルの立間を横切っていく。その度に人々が眼下で叫ぶ。

「見ろ、あそこー!」

「トウアールさんだ!!」

その声にトウアールはひらひらと手を振って答える。そしてとある路地裏に着地すると、そこに待っていた親友と合流する。

「お待たせしました! 最近、妙に怪人の出現ペースが増えてきていて…」

「あんだ…また素顔でカメラに映ったのね?」

ジト目でパソコンを閉じ、トウアールに詰め寄ったのはレイチエルだった。わざわざこんな所で親友のオペレーターなんてしたくないのだが、こうでもしないとトウアールのファンに追いかけて回される羽目になる。

「え、えへへ…だって可愛い女の子たちはその方が喜んでくれますし…」

「正義の味方が軽々しく顔出ししないでよ!!」

ゲシツとトウアールの太もも目がけてローキックをかますと、トウアールはくごもった悲鳴をあげる。

「…何で、正体ばらしちゃったのかしら、あんたは?」

レイチエルは遠い目をしながらトウアールを見つめる。

そう、あれは侵略者アルティメギルが初めてやってきた時のことだった。

『全てのツインテールを我らの手中に収める!』

開口一番、大声で世迷言を叫びながら現れた侵略者アルティメギル。

あのメッセージはやはり本物だったのだ…レイチエルやトウアールが集めたメンバーの面々は確信に至った。警察も軍隊もまるであ

の怪人にはかなわない。ならば…。

『…だったら、私が戦うしかないでしょう！ 私のツインテールも奴らの侵略に怒っていますのが聞こえます!!』

そのメッセージを発した人物から託された1つの属性エレメント玉とレイチエルたちの世界の科学力を結集して出来た兵器——それがティルギアであった。

『いきますよ…大、変身!!』

そしてそのギアの適合者は、誰よりもツインテールを愛し、そして今もツインテールにしている銀髪の女科学者：トウアールだった。掛け声や決めポーズを何時の間にか考えたのか、ノリノリで初出撃をしていったトウアール。その銀髪のツインテールもまた、美しく輝いていた。

でもトウアールが言っていたツインテールの声って何なのだろうか？ 変な方向にねじ曲がっている親友の行く先を心配しながらも、事前に対策していたようにレイチエルはトウアールのオペレーターを担当した。

結果から言えば、トウアールは初戦を大勝利で飾った。…ティルギアは出そうと思えば100トンちよつとの力が発揮できるようなっているのだから、そりゃ負ける方が難しいのかもしれないのだけれども。

だが、問題はここからだった。

『こんにちはー 私、こういうものでして…』

『あんた何やってんの!?!』

近くで戦いの行方を見守っていたテレビ局のカメラにトウアールは自らの正体をばらしてしまったのだ。目の前で変身を解除し、しっかりとカメラ目線で映って、名刺を渡して。

勿論、このことで世界中が大騒ぎになった。連日連夜、研究所の電話は鳴りっぱなしだったし、レイチエルの自宅にもマスコミたちが押し寄せてくるし…。

まあ、本人曰く『下手に正体を隠すよりは公開して戦う方が、皆を元気づけられる』って言っていたし、それも一理あるとは思うのだが

…トウアールは既に科学者として有名なのに、ヒーローに変身しているというのが騒動に拍車をかけてしまっている。

ばらすのはもう少し日を置いてからでもよかったのでは？ …そうレイチエルは思っている。なんとたって今やトウアールは映画女優も顔負けの日々を送っているのだから。

「…ま、あんたも戦いにも慣れてきたようだし、あたしも楽できるってもんよ」

「もう！ そんなこと言って…！」

トウアールは自分のツインテールを弄りながら、レイチエルの隣へと座った。そして路地裏から街の様子を観察する。

「…増えましたね、ツインテールの子達」

「そうね」

そつと街を見渡せば、あつちもツインテールでこつちもツインテールと、見渡す限りのツインテール天国が広がっていた。

「レイチエルはしないんですか？ ツインテール！」

「怪人に狙われたくないから、しないわ。あいつらのツインテールにかける思いはあんた以上かもしれないもの」

「もったいない…せつかくきれいな髪をしているのに」

「あたしの勝手でしょ？」

トウアールは残念そうな顔をしたが、レイチエルは何食わぬ顔をしてトウアールに手を差し出す。

「…あんたのギア、預かるわ。よこして」

レイチエルはいつも戦闘が終わるたびにテイルギアを預かって、整備をしていた。良く分からないオーバーテクノロジーを扱う以上、戦闘ごとの整備やギアのアップデートはサポート役の大事な役目だった。良く分からない物を分からないままにしておくのは科学者として嫌だったのだ。

「いえいえ、今日の午後はまるまる空いてますから自分で整備しますよ」

「…オフなんだから、休める時に休んどいてよ。それくらいあたしがやるわ」

「えーでも…」

「でももへちまもないわ！ さっさとよこして！」

催促するように手を伸ばすと、しぶしぶトウアールは青色のプレス——テイルギアをレイチエルの掌に乗せる。

「夜までには返せると思うから、それまで休んでおいてよ」

「分かりました！ じゃあ…！」

「ただし！ 警察のご迷惑にはならないようにしてね。もうあたし嫌よ、あなたの身元引受人になるの」

じゃあね、とだけ言い残すとレイチエルは路地裏を歩き出した。そしてトウアールが完全に見えなくなる地点まで歩くと、ふうつと盛大なため息をする。

（ツインテールにしないのかった？ …余計なお世話よ）

決して親友に漏らさなかった本音を心の中に思い浮かべる。

自分の親友は今や世界中の人々にとって一番の有名人。世界最強クラスのツインテール属性の持ち主であり、世界を守る正義の味方。科学者としても優秀で、取得した特許の数も3桁目に昇ろうとしている超人。

そんな人物の近くにいる自分がツインテールになったことで、周りに何かを言われるのが怖かった。自分だけが馬鹿にされるのならはまだ我慢できる。でも、もしその矛先がトウアールに向けられたら？ 自分のせいで親友に不愉快な思いをさせてしまったら？ …考えるだけでも嫌になる。

（あたしのツインテールなんて、絶対に見せないわよ…！）

理由はもう一つあった。

——レイチエルには、ツインテール属性がなかった。それはレイチエルにはテイルギアを扱えないことを示していた。何度も確認して分かっていることだし、どうしようもない事実だった。

もう一つ託された属性玉から同じようなテイルギアは作れても、それをレイチエルには扱えない。せっかく作ったもう一つのギアも結局は日の目を見ることも無く、研究所で予備のギアとして保管されているだけになっている。

『自分はトゥアールみたいに戦えない』

ただそれだけなのに、親友との差が大きく開いてしまったような感覚に陥ってしまう。自分が劣っているような錯覚にかかってしまう。本当はあいつをもっと支えて上げたい。バックアップだけでなく、戦闘でも隣に立って、二人一緒に戦いたい。でもそれは不可能なことなのだ。自分にはただあいつが戦っているのを見ている事しかできない、それが嫌だった。…形だけのツインテールにしたところであいつみたいになれるわけでもない。ツインテール属性が得られるわけじゃない。ただ虚しくなるだけだった。

勿論、世界を牛耳ろうとするアルティメギルとの戦いに自分は関わっていることは、自分にとって大変な誇りだ。親友が活躍して、メデアで大々的に報道されるのも嬉しい。

でも、その気持ちに矛盾して、奴らが侵略を諦めるまで続くであろうこの戦いや親友と肩を並べて戦う日々を考えると、どこかそれが重たく感じてしまう。

『トゥアールさんは世界の平和を守る正義のヒーローなんでしょ?』

『そんな人の近くに居れて、羨ましいなあ』

『ねえ、レイチェルちゃん。サイン貰ってきてくれない?』

そんな風な声を聞くと、キリキリと耳の奥が鳴る。向こうも悪気があつて言っているのではないにしろ、それが余計にレイチェルを苛立たせる。

トゥアールの話題や彼女自身の言葉に、鬱々としてしまう日々が続いている。

「…やめよう、こういうこと考えるの」

自虐的になってしまった気分を無理矢理切り替える。有名人が近くに居るとこういうことは必然的に起きてしまうものだ。元々、そういう所はあつたじゃないか。

(…こいつのギアに組み込みたいものもあるし、まずは戻ってオーバーホールしなきゃ)

それに戻ったら、あの封筒の持ち主からの連絡が来ているかもしれない。

初めての戦いから時間は経ち、世界は劇的に変わっていった。トウアールが敵を倒すたびに手に入れていた属性玉は、この世界の科学の進歩やエネルギー問題に大いに役に立っている。そのことについて改めて、あの封筒の持ち主に接触をしたかった。

お礼も言いたいのだけれど、どうやってこれを手に入れたのかを問いただしてみたいのだ。

…でも、例の封筒の持ち主の行方は分からないままだった。

(トウアールがこの間出演したテレビで、その人のことをぼかしながら言っていたし、それに期待するしかないのよねえ…)

レイチエルたちはまだ知らない。

アルティメギルとトウアールの戦いは、アルティメギルにとって効率のいい作戦の一環であり、人間たちは掌で踊らされているだけであることも。

その封筒の送り主は他でもないアルティメギルであり、故意に技術流出させ、自分たちに対抗できる存在を意図的に「造り上げている」ことも。

…それに気付いたのは、全てが手遅れになった後だった。

※

それからまた数週間後のトウアールやレイチエルが働いている研究所では、レイチエルが新たに組み込んだ『同調システム』の起動テストが行われていた。

トウアールはいつものようにテイルギアを纏い、レイチエルは予備で組んだギアを腕に付けていた。

「どう？」

「特に変わった感じはしませんね。ギアの方もこれといって数値も変わりませんし」

「…そう」

レイチエルはため息をつきながら、ドカッと椅子に寄りかかった。そのせいで机の上のルーズリーフが数枚、床に落ちるが、どうでもよ

かった。

「…失敗ってこと？ でもシミュレーションでは上手くいつているんだけどなあ」

「属性玉変換機構エレメンタリーシジョンとは少し違った原理になりますし、そうなるのも無理はないんじゃないですか？」

「…まあ、あつちは属性玉を使って能力を発揮するけど、こっちは体内にある属性力をそのまま引き出すって原理だしね。更に意識のシンクロや共鳴となると…」

難しい顔でキーを叩くレイチエル。改良に改良を重ねたのだが、どうやら現実にはうまく機能しなかった。

「一応、この間手に入れた項後属性ネーティブで接続させることも可能なんだけど…それを使うにはあんたがもう一人いなきや意味ないしね…」

「そもそも私にそれを使ったら、引きずりながら戦うことになりましし…」

「…はあ」

頭をかきながらモニターを睨むレイチエルであつたが、変身を解除したトゥアールは励ますように肩を叩く。

「だ、大丈夫ですよ！ システムに頼らなくなつて私は強いんですから！」

「…あんた一人でいつまでも戦わせるわけにはいかないわよ」

隣で戦えないのなら、せめてあいつをもっと近くで支えてあげたい…それを目的にこれを開発したのに、上手くいかないなんて。レイチエルは歯噛みする思いだった。トゥアールには照れ隠しで『戦う技術を持たない人たちでも、これを使えば戦士を支えられる』と大義名分を言ってしまったが、本音は別だった。

「レイチエルは心配し過ぎなんです！ 最近はいつらも落ち着いていますし、きつと侵略を諦めたんですよ！ 私のツイントールとおっぱいの前に屈したんです!!」

「……………だと、いいんだけど」

「心配しなくてもいいんです！ レイチエルのことも皆のこと…私が全部守ってあげますから!!」

…ああ、まただ。また耳の奥がキリキリと鳴る感覚がする。

「だから、無理に新しいシステムを作らなくたって大丈夫なんです!!
レイチエルが後ろでオペレートしてくれるだけで私は戦えるんですから!!」

「……………」

トウアールの言葉がグサグサと心に刺さり、イライラとしてくる。確かにトウアールはそれでもいいのかもしれない、でも自分はそれでは嫌なのだ。

何時までも後ろに回って、もつと近くで何もしてあげられない自分が、ちつぽけで無力な自分が嫌なのだ。

「あー…もしよかったら、この同調システムシンクロ！ 私の方で改良…」

「!!」

その言葉が最後まで言い終わらない内に、レイチエルはダン！ と机の上を叩いていた。

「……………」あたしの仕事を、あんたが奪わないでよ」

苛立ち混じりにボソツとそれだけを言うと、レイチエルは部屋を飛び出した。携帯もパソコンも全部机に置きっぱなしにしているのも関わらず、レイチエルは研究所を出て、一人街の方へと走っていた。(あんたに…何が分かるっていうのよ！ 力が無くて、何も出来ない奴の気持ち…親友に守られている奴の気持ちが…後ろで見ることに出来ない惨めさが…)」

そして、ふと我に返ると、自分の腕に予備のテイルギアをつけっぱなしで飛び出してきてしまったことに気がついた。

戻らなきやと一瞬思ったが、良く考えれば今日は金曜日だった。土日は研究所も基本的に休みになって、行く必要がないのだ。

(……………)月曜日になったら返そう。そして、あいつにも謝ろう)今はあいつに会いたくなかった。幸いにも、ポケットには財布が入っていた。これさえあれば、どうとでもなる。明々後日になったら嫌でも会わなきやならないのだから、それまではどこか遠くに行つて、頭でも冷やそう。少しばかりの休暇を貰ったと思えばいいのだ。

最近エレミアンの出現率も落ちているし、仮に出たとしても

トウアールなら自分がいなくなつて倒せてしまふんだろうさ。…
だつてあいつは『正義の味方』なのだから。

しかめっ面をしながら、レイチエルは夜の街に姿を消していった。
…でも、その次の月曜日は永遠にやっつてはこなかった。何故なら、
その月曜日が来る前日、トウアールはドラグギルデイに負け、世界は
瞬く間に侵略されてしまったのだから。

レイチエルというパートナーを欠いたトウアールは負け、そしてレ
イチエルもまたあの時逃げてしまった罪悪感から彼女との再会をと
ことん拒んだ。

もし再会してしまつたら、何を言われるかが分からなかったから
だ。

※

そして今。

レイチエルとトウアールは平行世界である地球で再会し、こうやつ
て同じ部屋で会話している。一人は再会した喜びに歓喜し、もう一人
はあの時の罪悪感を胸に痛めて。

「そう…おほん。テイルレッドが使っているギアのモチーフは、あな
たのスケッチから拝見させてもらいました。あの外見だったら、もし
かしたらレイチエルも気付いてくれると思つて…!」

「…」

「もしあなたが生きていて、同じ世界に来ていたのなら…一目で分か
るようにつてしたんですよ」

奇しくもあのスケッチの1ページから、瓜二つのツインテール戦士
が生まれた。

一人はトウアールが作り出したギアと彼女自身のツインテール属
性の属性玉が込められた赤色の戦士、テイルレッドが。

もう一人はレイチエルが開発し、あの時持つてきてしまった予備の
テイルギアから拝借した属性玉が込められた焰色の戦士、テイルファ
イヤーが。

子供に憧れる少女と大人に憧れる少女が作り出した戦士は、奇妙な運命と共に同じツインテールを愛する男の手へと渡り、戦いの幕は開いたのだった。

「あの…：テイルファイヤーの武装や武器は…」

「あなたの負けた時のデータを元に改良し続けたの。一人でも戦えるように…：絶対に負けないようにって」

トウアールがかつて使つて、今は愛香が使っているギアは元々、スピード主体の設定のギアだった。確かに速さは戦いにおいては有利に運ぶ要因の一つではあるが、決め手に欠ける一因でもあった。

だからレイチエルは持つてきてしまった予備用のギアを改修し続けた。

トウアールのギアに足りなかった火力を主に置き、バリアやロケツトパンチといった武装を積み、武器を奪われたり壊されたりといった状況に左右されることがなく、一人でも戦い抜けられるギアに…：まるで炎のように爆発的な火力を生み出すことが出来るギアへと。形を変え、ギアの形状を変えてまでも、力を求め続けた結果、今のテイルファイヤーの姿がある。

「ねえ、本当に恨んでないの?」

「…?」

「あたしはつままない嫉妬や妬みであんたから逃げて、その結果、一つの世界を滅ぼした…。あの時、あたしがいれば、あんたは勝っていたかもしれないのに…」

全てがレイチエルのせいではなかったものの、敗北の原因の一因にレイチエルの不在があつたのは間違いないだろう。

だが、トウアールはあつけからんとした顔をしていた。

「レイチエルの不在を言い訳にするほど、私は堕ちていませんよ。あの時、現場にいた私が勝つていれば、全て解決していたんですから。私が悪いんです」

「でも…!」

「過去はどうにもなりません…：未来は変えれます。『もしも』なんていうのがありえるのは、未来だけなんですから。…：現にレッドは私が

倒せなかったエレメリアンを倒し、ブルーは私のギアを受け継いで……そしてあなたと再会できた！」

トウアールは嬉しそうに語る。それは天才科学者でも先代のツインテイルズでもない、唯の一人の少女の顔だった。

「……あたしに罰は与えないの?」

「ええ。罪はこれまでも、そしてこれからも背負っていかなければいけないんです。もう二度と、あんなことが繰り返されないようにね。あなたは勿論のこと、私だって償っていかねければなりませんから」

「……あんたって残酷なのね」

レイチエルの目には涙が浮かんでいた。でも、レイチエルにとってその涙は悲しみの涙ではなかった。

「それが大人なんですよ、失敗したら責任を取らなければならぬんですから。だから大人は自分の行動に責任を持たなければならぬんです。大人になるっていうのはそういう事なんです」

「……耳が痛くなるわ。DMだと思っていたら意外にSっ気もあったのね」

だが、トウアールはにんまりと笑って、またもや飛びかかって来た。

「と言うことで！ レイチエルにはその罰を身体で支払って——！」

「あぎゃん!?!」

これを察したレイチエルはまたもや紙一重でこれを回避する。

「……悪いけど、あたしはもっと真っ当なやり方で罪を償っていくわ……身売りはごめんよ」

せつかくいい話だったのに、最後の締めがそれでは全部台無しになった。さっきまで出ていた涙が引っ込んでしまったではないか。

「じゃ、じゃあ今日はホテルに泊まりましょうか!?!」

「あたしには帰る家があるから、外泊はしないわ」

そんな風に話す2人は少しではあったが、レイチエルの顔はどこか柔らかくなっていた。両者の間に出来ていた溝が埋まりつつあった。

※

そして時刻は7時を回った。作業を終えたレイチエルはそのまま帰宅し、トゥアールだけが一人残される。

「さーて！　そろそろ総二様が帰って来る頃ですし、今夜に向けて色々としこみを…！」

そう言いながらホールの扉が開かれると…トゥアールは絶句した。

「あら、お帰りなさいトゥアール」

「…お帰り、トゥアール」

椅子に座っているのは、不自然なまでに笑顔の愛香と下を俯きながらどんよりと落ち込んでいる総二。そして顔を真っ赤にしている慧理那と怒りのあまり婚姻届を構えている尊の姿があった。

「ど、どうしたんですか？　特に殴られるようなことをした覚えはないんですが…」

「どうしたもこうしたもないわ！　あんたなんて物をパソコンに入れてんの!？」

バンと自分のパソコンを見せられたトゥアールは何食わぬ顔をする。

「何って…私が作ったエロゲーじゃないですか!!」

「それがおかしいって言ってんのよ!!」

愛香までもが顔を真っ赤にしながら、トゥアールに詰め寄る。その両拳はグーになっており、何時でも殴れるんだぞという地味なアピールになっていた。

「おやあ愛香さん、これはただのゲームなんですよ？　何を照れる必要が…」

「身内だけにばれたのならまだいいわ！　それを光太郎に見られたのよ!？」

「こう…ああ、あの教室の隅のコケみたいなのモブですね？　モブのくせに総二様のお茶を貰うとは生意気な…！」

トゥアールから見た光太郎の評価はボロクソだったという事実には、トゥアール以外の全員が居た堪れない顔をする。本人がもしこの場に居たら泣いてしまうかもしれない。

「あたしたちが光太郎を説得するのに、どれだけ苦勞をしたか…！
しかもこのエロゲ、無駄に上手いのが腹立つのよね、なんで絵まで自
分で描いてんの!？」

「私くらい女子力が高ければ、自分で自分のCGから原画から彩色ま
でこなします！ 勿論シナリオ、音楽、ディレクターも全部私です！
攻略ヒロインも私だけ！ 最後のシーンは私のフルボイスでのH
シーンが…！」

「そんな女子力がこの世にあってたまるか——!!」

愛香は殴る体勢から瞬時に背負い投げの体勢に切り替え、トゥアー
ルを床の上にメンコのように叩きつけた。

「トウ…トウアールさん、どうしてこんないかがわしいものを…！」

「私の裸は全然いかがわしくありませんよ！ そういう慧理那さん
だってイエローに変身した時は脱いでいるじゃないですか！ あな
たの脱衣はよくて、何故私は駄目なんですか!？」

「私は全裸ではありませんもの!!」

…なんというレベルの低い争いなのだろうか。この争いを傍観す
るしかない総二は、今後の光太郎との人間関係をどうするかといつた
ことを必死に考えていた。

だが、総二が黙っている間に、話はとんでもない方向へと向かい始
めた。

「そもそも、これは総二様のためのゲームなんです」

「……………え？」

絶句する総二を尻目に、トゥアールは分かっていますから、とぼか
りに肩を叩いた。おい、何が分かっているんだ。

「総二様は変身すると幼女になってしまいます！ これは想像以上に
精神に負担がかかることなのです。そこでこうしてエロゲをプレ
イして、女の子の身体に慣れる必要があります!! テイルレツドに
とって、女の子に慣れることこそ、もっとも重要な特訓なんです!!」
「慣れ…」

「今日も総二様はあのモブに、しかも男にお茶を差し出しましたよね
? …もしかしたら総二様の思考は幼女のそれに近づきつつあるの

「かもしれません！」

「！ いや、確かにツイントールにしながらテレビを見たら、楽しいかな？ って思うことはあるけど、まさか……！」

「総二は信じられないような顔をするが、それは慧理那も同じだった。」

「で、でも！ 女性に慣れることが裸を見ることだなんていうのは……あまりにも短絡過ぎますわ!!」

「何故です!? 服を着た女性などそこらじゅうにいるではないですか！」

「で、でもでも……私たちはか、仮にも学生です……そんな淫らな事を……！」

「それが駄目なんですよ！」

「ひうっ!!」

トウアールは白衣を大きさに翻すと、まるで選挙に臨むかの如く、演説は激しさを増していく。

「男性が思春期に女性の身体に興味を持つことは当たり前なんです！」

それは決して罪などではありません、それを悪しき様に非難するところこそが罪なんです！ 世界の為に戦っている総二様に、無用な罪の意識を向けさせてしまうのです!!」

「そ、それは……！」

「男が女の裸を見ることが罪ならば、その裸そのものにも変わってしまったことはどれほどの罪になってしまっているのですか!!?!」

「!!?!」

慧理那はハッと何かに気づいたような顔をするが、残念ながらそこでする顔じゃない。

「総二様がモブの男にお茶を出すような血迷った行為に臨まぬように、一刻も早くこれはしておくべき特訓なのです!!」

「そ、そうよねえ！ きっとそうよね！ そーじ、あんたテイルレッドのせいで、男としておかしくなっているんじゃないかしら!」

何故か急に援護し始めた愛香ではあったが、総二はそれを違う意味で解釈してしまった。

「あの…俺は別にホモじゃないからな？ ノーマルだからな？」

「分かっているわよそんなことお!!」

「…勿論、私たちは学生です。こういった物を所持してはいけないという慧理那さんの言い分は正しいです。ですが、これはツインテール部やツインテイルズ…：しいては世界の為にどうしても必要なことなんです。どうか地球の為にエロゲーの一つや二つ、目を瞑っていただけないでしょうか!? いいですか慧理那さん!? 正義の為に！ エロゲーが必要なんです!!」

「正義…」

トウアールがやっていることが完全に詐欺師の常套手段なのだが、慧理那はそれに見事に嵌ってしまった。

「それとも慧理那さん…：男の子がエッチなことに興味を持つことはやだー！ とかそんな子供っぽいこと考えているんですか?!!」

「…！ し、失礼な！ 私だって、そういうことはしつかりと理解していますわ!!」

「そうですね、同級生の私たちならともかく、年上で！ お姉さんで！ 生徒会長である慧理那さんがそんなお子ちゃまみたいな騒いだりしませんよねー!」

「と、当然ですわー!」

そしてトウアールは最後にダメ押しの言葉を口走った。

「それ、に。慧理那さんがこういうことを許してくれたら、きっと愛しのテイルファイヤーさんも喜んでくれると思うんですよねー」

「!!」

『ああイエロー、君はなんて器の大きい女の子なんだ!』…：って言うってくれると思うんですけどねー!」

それはまさに慧理那にとつての殺し文句だった。見る見るうちに表情が変わっていく。

「ですから！…：どうか総二様に行く特訓の時だけはどうか席を外してくださいませんか！ 私も世界のためとはいえ、生徒会長に校則違反を堂々と見逃してくれというのは、ムシが良すぎる話ですから」

だが慧理那は首を振り、トウアールに真っ向から反論した。

「いいえ…私は生徒会長である以前に、テイルイエロー・神堂慧理那ですわ！ 仲間のピンチに高みの見物など出来ません！ 私も観束君の特訓に協力いたしますわ!!」

ここだけ切り取ればもの凄くカッコいいのに、ボソツと「お姉さまの為にも」と言ったのを総二は聞き逃さなかった。

…多分、そんなことをやられても、ファイヤーは困るだけじゃないかなあ。総二ですら戸惑うのに、常識人なあの人はずっと戸惑うに決まっているじゃないか。

当然、このことを黙って見ていられない尊は、ようやく傍観者であるのを辞め、トゥアールに向かって歩を進めた。

「おのれ貴様っ…さつきから黙って聞いていれば、お嬢様に何たることを！ 許せん！ この婚姻届に判を押させてやる!!」

激しい怒りをトゥアールへと向けながらも、何故かその両手はしっかりと総二へと向けていた。見事なまでに心と身体が一つになっていない。

「俺、何回婚姻届を貰えばいいんだ!？」

「…でも、尊が一人の男性に二回以上求婚するのは、珍しい事ですわね。光太郎君にも言えたことですけど…」

「いえお嬢様。あいつらは意志が弱そうなので、ぐいぐい押せばそのうち折れて判を押ししてくれるんじゃないかって気がしまして」

総二は自分の鼓膜を破ってでも聞きたくなかったことを、しかと聞いてしまったことを後悔してしまった。

「ところでトゥアールさん！ 仲間のピンチを救うには私はどうすればいいのでしょうか!! エロゲとやらを作ればいいのでしょうか!？」

「そうですねえ…慧理那さんをエロゲーに出演されると色々ヤバそうですね…」

トゥアールにも良識というものが1グラムでも残っていたそうので、慧理那に説得を試みている。

「…とりあえず、慧理那さんはエロ本でも買ってきてくれませんかね?」

前言撤回。彼女には良識なんて一欠けらも残っていなかった。

「そ、そのエロ本があれば、観束君の特訓に役立つのですのね！」
「ええ立ちますとも！ 言わばこれは修行回における重要なフアクター！ 慧理那さんは突破口となる重要なアイテムを買わなければならぬのです！」

「立たねえよ!？」

エロ本は何一つ役に立たないということを知り、慧理那が理解するには頭を冷やす必要があるのだが、ここまで熱くなってしまった慧理那に冷水をかけてもただ蒸発するだけだった。

すると愛香はトウアールの首根つこを掴みながら、部屋の隅の方に移動し始めた。そんな幼馴染が何をしているのかが気になったのだが、総二はそれよりも慧理那と尊が早速エロ本の調達について相談し始めているのが不安だった。

「…エロ本というのはいつも行くモールに売っている物なのですか?？」

「いえ、ああいう所のテナントは家族連れに配慮していますし…まず置いていないでしょうね。ここは通販で取り寄せてみてはいかがでしょう」

「いえ、この手で直に購入して初めて、観束君の特訓に誠心誠意助力が出来るのですから通販は無いですわ!! …ところで殿方はどういったエロ本を好むのか、尊は知っていますか?？」

「えっ!?! …おっぱいがいっぱい出ているやつとかじゃありませんか?？」

「そういう本なら普通はいっぱい出ているのだと思うのですが…違いますの?？」

「……………いや、あの…俺本当に知らないから…」

「! 駄目ですわ観束君!!」

やんわりと止めようとしたが、慧理那はグツと拳を握って総二に宣言する。

「大丈夫ですわ! 新参者の私が真に仲間となって打ち解けるには、こういった小さなエピソードが必要不可欠ですわ! 追加戦士が加入した翌週のエピソードみたいです!!」

そう微笑む会長と共に、ツインテールがふわりと舞い、総二の顔が強張る。

確かに断るのは簡単だ。しかし、それは会長だけでなく、この美しいツインテールをも否定してしまうのではないか…というジレンマに悩まされる。

「…あんだ会長にあんなこと吹き込んで大丈夫なの？」

「…これは千載一遇のチャンスなんですよ、愛香さん」

「はあ？」

「私や愛香さんが総二様にエロ本を渡したところで警戒して読んでくれません。ですが比較的新参者であり、総二様が憧れている慧理那さんであればこの条件はクリアできます。総二様は義理堅い性格ですので、エロ本を読んでもらう確率が高いです。とにかく、エロ本を見てもらう…もつと言ってしまったえば、女体そのものに関心を持つてもらうことが大切なんです」

「…一理、あるわね。あいつ、性欲とかそういった物は全部ツインテールに向かっているし」

「ええ。この際、エロ本を読んでもらわなくても構いません。とにかくこの一件を通して、総二様にツインテール以外で女の子に関心を持つてもらえればそれでいいんです。そうすれば私や愛香さんのことももつと違った目線で見てくれるかもしれませんよ」

「！」

「しかも…慧理那さんがこのことを通して性に関心を持って、周りからも目に見えてエロくなれば縁談なんて全部吹っ飛びますよ。家の風習を重んじる親御さんが、そんな娘を相手方に顔見せできるはずがありませんからね」

「…あんだこういうことに関してだけは頭の回転早いわね」

「ふふ…ここは一時休戦といきましょう。総二様も愛香さんや私、さらには慧理那さん。皆が皆幸せになれる、完璧な作戦です！」

「オツケー、つかの間の握手といきましょうか」

2人の会話は総二には聞こえないものの、何かを企んでいる事だけは理解できた。

何だか総二の知らない所でとんでもない展開になってきていると
感じつつ、総二はそつとホールを抜け出すのだった…。

第45話 布石とツインテール

エレミアンの秘密基地の朝は早い。特に雑用係であるフェンリルギルデイの朝はなお早い。彼には早朝分の雑用が控えているからだ。

「モケー！」

「…ああ、分かっています。今日は清掃ですね」

一匹の戦闘員が指差した先にはタオルやシーツ、枕カバーといった大量の洗濯物が詰まっていた。全てこの基地内に暮らしている戦士たちのものであり、先日回収されたものである。

その隣にはバケツやモップが置かれており、掃除も雑用の内に入っているのだろうと察する。

「モケー！」

「はい分かっております。ピカピカに洗っておきます。それに清掃もですね」

「モケモケ!!」

素直に直立不動して答えたフェンリルギルデイの姿勢に満足したのか、戦闘員はそれ以上何も言わずにデツキを後にする。

「…くそー！」

そしてデツキ内に人がなくなつた途端、フェンリルギルデイは苛立ちをぶつけるが如くバケツを蹴っ飛ばした。

「くそー！ くそくそ!!」

ガンガンと何度もバケツを蹴飛ばし、その度に蹴飛ばした音が辺りに響く。そして周囲のものを手当たりしだいに、殴り、蹴り、投げ飛ばした。メチャクチャに暴れまわり怒気をブチ撒けるフェンリルギルデイの姿は恐ろしくもあり、同時に哀れにも見えた。

フェンリルギルデイの本来の力ならば、バケツを蹴っ飛ばした途端に粉みじんに粉碎するくらい訳がない。だが、蹴飛ばしているバケツは破損どころかへこみの一つも見られない。

己の力の源である属性力の大半を奪われ、そして今もなお衰えているフェンリルギルデイの現状は、年老いた老人そのものだった。戦え

るだけの力どころか、今や戦闘員以下の身体能力しかフェンリルギルデイは有していないのだ。

…やがて疲れたのか、それとも自分のしていることが馬鹿らしくなったのか、転がったバケツを起こすと項垂れるようにその上に座った。

「くそ…」

そしてすぐさま自己嫌悪に陥り、頭を抱えた。

確かに戦闘員にデカイ顔をされて、腹が立ったのは事実だ。だがそれ以上に腹が立つ人物がおり、その人物のことを頭に思い浮かべるだけで苛立ちが募っていく。

それは己のプライドを傷つけたスワンギルデイでも、ツインテール属性ばかりを贖するアルティメギルの首領でも、ましてや己に粛清を下したダークグラスパーでもなかった。

フェンリルギルデイは己自身に腹が立っていた。あの時、何故自分は刀を抜いてしまったのだろうか…。あれさえなければ、自分はこうしていないのではないか…。そういつた悔恨ばかりが頭を去来する。

フェンリルギルデイはたびたび、現在のような状況にならなかった場合について、繰り返し夢想していた。アルティメギルが侵略してきた世界は、同じ人間が住んではいるものの全く違った進展を見せていた。そんな風に、何かのほんの些細な行き違いで何もかもが冗談ですまされるようなIFを想像する。

ダークグラスパーは何らかの都合でここへはこなかった。あるいは来たとしても数日でここを去ってしまう。そもそもこの基地に寄らずに直接地球に降り立ち、自分たちと違う第3勢力として活躍する。

そもそも自分はまだ暗躍などしていなかった。気を熟すまでじっくりと待ち、リヴァイアギルデイとクラーケギルデイが殉職したのを一気に行動を開始する。隊長を失い、どうすればいいのかわからないであろう連中を引き入れ、組織の中で発言力を得ていく…。

またはクラーケギルデイの忠告を素直に受け入れ、己の属性力を高めることに集中する。そうしていく内に暗躍やくだらな野心が薄

れていき、アルティメギルの掟を思い出ししていく。

あるいはダークグラスパーとの対談の際に手出しをしないで、じつと耐えている。そうすることで今の身分は失ったものの、力だけは奪われずにすむ。自分は落ち込むが、スワンギルデイを始め、同僚たちが慰めにやってくる。最初は迷惑そうに思うが、人恋しさからか、しばしば自分も同僚たちと相手をするようになる。そしてその内に…。

だが現実は何一つ変わりなどしなかった。戦士フェンリルギルデイは死に、戦闘員にペコペコ頭を下げる雑用係のフェンリルギルデイだけが残った。

「私は…雑用をするためにここにいる訳ではない…!!」

では何をするためにここにいるのか？ そう問われると、何も言い返せなくなるのが現状だった。

戦士として戦える訳でもなく、戦士として死ぬるわけでもない。戦う力すらない今の自分にとって、普通に出撃し、己の属性力について自由に熱く語れる同胞がハリウッドのセレブのように感じてしまう。

いつそのこと、ツインテイルズに殺される為に接触でも試みようか…そんな自棄気味な考えまでもが頭に浮かぶ。

「…仕事を、しなければな」

そんなことを呟きながらも、フェンリルギルデイはばら撒いてあちこちに散った洗濯物を一つずつ拾う。

そんな堂々巡りの思考をしていく内にも時間は過ぎていく。もし時間内に仕事が終わらなければ始末書が待っている。最悪、雑用期間が延びて今以上に立場が危うくなるかもしれない。

「くそ……………」

小走り気味で基地内を歩くフェンリルギルデイの足音で、アルティメギルの朝は始まるのだった。

※

「いちごとうさま…じゃ、行ってくる」

朝食をすぐさま食べ終えた光太郎は食器をシンクへと置き、通学カ

バンの中にテイルドライバーを放り込んで靴を履く。

「なあレイチエル、今日は遅くなるのか？」

「今日はずっと家に居るわ。昨日は心配かけさせてごめんなさい」

レイチエルは朝食をテーブルの上に乗せたまま、こちらを見向きもしないで答える。

「…帰りが遅くなるんだったら、連絡の一つでも入れてくれよ。こっちだって心配するからさ」

「…分かったわ」

思い出すのは昨夜のことだ。

学校から帰ってきたら、家にレイチエルの姿がなかった。この事は別に珍しくもなんともないのだが、いつもなら絶対に帰ってくる7時を過ぎても、一向に帰って来る気配がない。

光太郎も流石に心配だった。レイチエルは並行世界の住人だし、それが原因でアルティメギルの毒牙にでもかかってしまったのではなにか…と要らぬ妄想までしてしまった。天才的な頭脳を持つあいつがアルティメギルに狙われてしまう要因なんていくらでも想像がつかし…。

心配で居ても経ってもいられずに部屋をうろちよるとし、時刻は8時に差し掛かろうとしたその時にレイチエルはようやく帰って来た。

思わず連絡の一つでもよこせ！ という言葉が口から出かけたが、レイチエルの顔を見た瞬間に引っ込んでしまった。

『遅くなって、ごめん、なさい』

…何故ならレイチエルは目をパンパンに腫らしていたからだ。真っ赤な目でヒックヒックとしているレイチエルの姿は、家に帰って来る前にどこかで泣いていたのだということが光太郎には一目で分かった。

なにかあったのか、アルティメギルにでも襲われたのか、もしかしてダークグラスパーか？と問いたしたがレイチエルは無視を決め込んで、何も語らずに夕飯を食べまくっていたのでこれ以上聞くのはマズイと判断し、今に至る。

結局、聞きだせないまま朝になってしまい、昨日レイチエルがどこ

に行っていたのか、何で泣いていたのかも分からないままだ。

無理矢理でも聞けば話してくれるかもしれないが、あの泣き具合はただ事じゃない。俺が傷ついたレベルの出来事があったのだろうと俺は勝手に想像する。

「じゃ、行ってくる」

「はい、行つてらっしゃい」

レイチェルの見送りを受けて、俺はアパートの階段を下りる。

とりあえず、今日の晩にでももう一度聞いてみるとするかなあとぼんやりと考えながら、外の空気を胸に吸い込む。

「…涼しいなあ」

季節は6月。今日から衣替えが始まり、俺の制服も夏服へと変わった。

ブレザーを脱ぎ、半袖シャツとなった上半身は少し軽いものの、まだ少しだけ肌寒く、ぶると身震いしてしまう。

そして、俺たちのツイントールを守る戦いも、早くも二カ月目に突入した。相変わらずアルティメギルの侵略は終わる気配がないし、ダークグラスパーの目的も分からずじまい。

俺としては一刻も早く、戦いが終わって平凡な日々が過ごせればいいんだけど…。

「やっぱり女たるもの、肌は出せば出すほどいいですよね！ 水着で登校してもいいかも」

「ふーん」

「！」

すると背後から大変聴き覚えがある声が入ってきた。思わず、さっと近くの電柱の陰に身を隠す。

「とうかさ、あんたなんで夏服の上に白衣羽織ってんの？ 暑苦しいわ」

「ふふん、分かっているじゃないですか〜！ この白衣は自動温度調節機能がついているんですよ!! 夏は涼しく冬は暖かい! そう、この天才少女トウアール様にかかればこんな白衣の一つや二つ!! 総二様もお一ついかが!? というか、むしろ私の物をプレゼント…」

「…あー、俺はいいや、うん」

数メートル先にいるのは、昨日エロゲなるものを学校に持ち込んだトウアールさんとそのことについて必死の弁明をしてくれた総二と愛香さんだった。

(…まあ、昨日の事件は…嫌な、事件だったね、うん)

昨日の部室内のアクシデントは、まるで超大型台風の直撃の如く俺に多大な被害を出した。

人様のパソコンを勝手に見てしまった挙句、しかもよりによって起動中のエロゲを拝見してしまうという、常人ならばもう学校に来れないであろう即死クラスのコンボをかましてしまった。

これがまだ本人にばれるのならまだしも、彼女の親友である総二や愛香さんにばれてしまったのがまた気まずい。あまり接点のないトウアールさんにやられるよりも、知り合いの総二や愛香さんといった友達にばれたことこそが変な空気を醸し出していた。俺がこうやって物陰に隠れてしまうのもそのせいだ。

昨日は総二や愛香さんといったトウアールさんを良く知る面子からの長時間にわたる説得と『このことは絶対、他言無用よ!』と悲しいほどまでの念押しを受け、帰宅を許された。…こんなこと俺だって話したくないし、きつと話す機会もないのだろうけど。

まあ：昨日の総二たちの説明によると昨日の事件のそもそもの原因は『トウアールさんが妙な知識が豊富なのもそうだったことに多大な興味をしめすのも、性教育が発達している外国で育ったせい』という説得力があるんだかないんだか分からない原因があるのだが。

パソコンのエロゲも日本なら即アウト物なのだが、トウアールさんが暮らしていた地域はエロゲなどの性的なアイテムに対しての規制が緩く、日本でいう携帯ゲーム機感覚で普通に持ち運びしているらしいのだ。

更に日本の文化が外人に人気があるのと同様に、日本産のエロゲも大変人気があるらしく、トウアールさんもそうだった日本産エロゲをコレクションしており、昨日はそのゲームディスクが偶々パソコンに入ったまま、学校に持ってきてしまった。

そして慧理那会長が彼女のパソコンにぶつかった際、偶然にも中断していたエロゲが再開されてしまつて…といった数々の偶然が重なり合つた結果、昨日の事件が発生してしまつたというのが総二たちからの話を総括した事の真相だ。

まあ、確かに日本産の商品は外人受けもいいし、誰かに悪気があつた訳じゃない。幸いにも本人がいないので何も見ないことにした方が互いの為だし、俺だつてこんなこと人様に話したくもない…と、このことはあの部室にいた全員だけの秘密ということで事件は一応の解決となつた。

(でも、知らなかつたとはいえ、人前でエロゲをプレイしたパソコンを放置つて…なんちゆう精神力の強さなんだ…)

もし彼女がツインテイルズの一員だつたならば、かなりいい線をいくと俺は思っている。なんせ、自分の知られたくない秘密が入っているパンドラの箱を宙ぶらりんのまま放置とは、中々度胸が据わつた子だと思う。やっぱり人種の違いつていうのもあるのかな？ 彼女がツインテールに興味を持たないことが実に悔やまれる…。

秘密をばれることを恐れる俺にとつて、今回のことは良い教訓になつたと思う…とりあえず、テイルドライバーの徹底的な管理をこれから行おう、うん。会長の件についても、なるべく水際で済ませるようになければ。

と、ここでトウアールさんはハイテンションな声がこちらまで聞こえてきた。

「うわー、テンション低いですね愛香さん！ わーい、愛香さんの頭が私のおっぱい乗せちゃえ——!!」

「おのれが高すぎるんじやクソボケエエエエエエエ!!」

ああまたいつもの光景が…と思つたが、今日は違つた。

「!？」

「あ、あたしの拳が…!？」

なんと愛香さんの拳が空を切り、トウアールさんは悠々と無防備になつたその頭を胸に乗せたのだ。

「あんだ、また変な発明使つたわね!？」

「ふっ…ミルクチョコレート並みに甘い発想ですな愛香さん。今までの愛香さんの攻撃に慣れた私にそんな雑なパンチなんて通じる訳がないじゃないですか」

「…!!」

怒りで我を忘れている訳でもないのに、あの愛香さんの拳が鈍ったとでもいうのだろうか？

「ふふ、教えましょうか？ 何故愛香さんのパンチを見切れたか…！
…愛香さん、あなたは夏服で胸を張ることを極端に恐れていますね？ 汚れなき新雪のような夏服は胸部部分が目立ってしまう分、あなたのフォームは崩れてしまった。自らの貧乳をさらけ出すことを恐れてね…。つまり『ブレザー』という加護に守られていたあなたの拳は、衣替えによって半減したのです!!」

…全然、大した理由じゃなかった。むしろ愛香さんの怒りの炎に油をぶち込んだ。

「何憐れんだ目で見てんのよ！ ミンチにするわよ!!」

「ふふ…出来るものなら、やってみてください！ 貴方の貧乳をさらけ出してもいいのならばね…！」

「ぐ、ぐぐ…！」

愛香さんが怒りの形相で凄んでも、トゥアールさんは余裕を崩さない。むしろますます余裕に拍車がかかっている。

まるで虚勢を張る子供みたいに愛香さんは悔しそうに歯を食いしばっている。

そしてトゥアールさんのターゲットが愛香さんから総二へと移った。

「さあ総二様！ 改めて見てください、この夏版トゥアールを!!」

「あ、あ…：トゥアール、お前意地でも白衣を脱がないんだな…」

さあ、と言われても総二にはトゥアールの衣替えにそれほど劇的な変化を感じ取れなかった。

いくらブレザーを脱いだところで上から同じ白衣を羽織っているせいでほぼ変わっていないと言いたいのだろう。

「んもう！ 全然違うんですよ！ 白衣の透明度も3倍上がっていま

ルーみたいだ。だがあの時のブルーと違うのは、その顔は怒りに染まっておらず、決然としていることだ。

まるで獲物をしとめた猟師の如く、白衣で縛ったトゥアールさんを引きずる最中、一陣の風が吹いた。

「なあ光太郎…」

「ん？」

ふと総二はそんな愛香さんを見ながら、俺に感情深く呟いた。

「愛香のツインテールさ、また一段と凛々しいじゃねえか…」

夏風にそよぐ青色のツインテールは、まるで愛香さんを代弁するが如く激しくそよいでいた。

ああそうだな、と俺は心の中だけで総二に同意した。

※

「お、おはようございませすわ、皆さん…」

「おはようございっす!?!」

光太郎たちは共に校門の近くまで来たところで慧理那会長と会った。丁度生徒会によるあいさつ運動を行っているらしい。だが、驚いたのはそれが原因ではなかった。

「え、えり…会長?!」

「す、凄いクマですぬ…」

総二は他の生徒もいる中で名前呼びはマズイと判断したらしく、会長と言い直した。

「ええ、インターネットで調べ物をしていて…少し寝るのが遅く…あふう」

慧理那会長の目の下には化粧でも隠せないのではというほどのスーパリーなクマがあり、若干やつれている。思わず出てしまった欠伸と共に揺れるツインテールにメロメロになりかけるが、光太郎はグツと堪える。

「ですが…結局、家のパソコンではフィルターがかけられていて…どんなに検索方法を変えても、えろほんには辿りつけませんでしたわ

…」

…ん？ 今変なワードが飛び出したような…エロ本？

「そんなことあたしたちに言ってくれればいくらでも…」

「も、もがが…たかが電気屋のファイルターなんて私が解除して…！」

頼もしい発言であったが、捕獲された宇宙人でももう少し丁寧な扱いを受けるだろう…といった状態で引きずられているトウアールさんとそれを持つ愛香さんが言っても説得力が皆無だ。

「ええ…確かにそれも思いました…ですが！ これは私に与えられた試練！ 必ずや自分の力だけでえろほんを手に入れ、観束君の役に立ちますわ!!」

「……………」

そう健気な笑顔で返す会長であったが、光太郎は訳が分からなかった。まるでパピヨンギルデイ戦でイエローの変貌に付いていけなくなった時の光景とダブるな、とデジャブを感じていると総二はこそつと真相を囁いた。

「…どういう訳か、俺にエロ本をプレゼントすると仲良くなれるって思っているらしくって」

「なんでそうなったんだ!？」

「俺も知らないっていつているんだけど、どういう訳かだな…！」

「…ウー、ワンワン!!」

「—— きゃあ!!」

「!!」

すると突然、慧理那会長目がけて走って来る影に2人は気づき、咄嗟に前へ出る。大型犬が飼い主の手を振り切って、こちら側に近づいてくるせいだ。

総二は前方に躍り出て迫りくる犬をガードする壁の役割を、そして光太郎は慧理那会長を安全な場所まで離れさせる役目を僅かコマ数秒の間に決める。位置的にも、愛香さんから一通りの武術を習っている総二の方が壁の役割は適任だろう。

前方で犬と格闘を繰り広げる総二に心の中で詫びながらも、光太郎は会長のツインテールを庇うように犬から離れて校門近くまで会長

を避難させる。

賑わう生徒たちの隙間を縫いながら入っていたせいか、短い距離を走っていたにも関わらず、随分長い事走っている気がした。

「ふう……ここまでくれば……」

ワンワンという犬の声からだいぶ遠ざかったことから、結構離れた場所まで来てしまったなと思っていると、俺はふと大変なことに気付いてしまった。

「あ……」

なんと会長の小さな手をぎゅつと握りしめていたのだ。逃げる時に無意識の内に掴んでしまったのだろう、会長の手は俺に握られたせいで真っ赤になっていた。

「す、すいません！ 不可抗力とはいえ……!!」

「い、いえ……気にしていませんわ……」

慌てて手を引つ込めたが、会長は初めて会った時のように大丈夫だというデイスチャーをしながらクスクスと笑った。

「それにしても……丹羽君は随分と慣れていましたね、なにかそういうた習い事でもやっていたのですか?」

「あ、はは……いや、まあ、慣れといいますか少しだけ……」

「慣れ……?」

ツインテイルズを初めて2か月ちよつと。どうしても避難させなきゃならないときはこうやった避難活動も行うため、自然と上達してしまつたらしい。

……にしても、さっきの総二との連携はまるでレッドと組んでいるみたいだったなあ、何でなんだろう?

「……?」

すると不意に視線を感じた。

登校中の生徒が足を止めて、俺たちを見ている。というか、ほとんどが好奇心ではなく、憎しみがこもった目だ。

「あいつ、会長と親しげだが何者だ!」

「一年の丹羽って奴だ! あいつ、会長に呼び出されたって後輩から聞いたぞ!!」

「畜生、なんであんな地味で根暗な草食系が慧理那会長と…!!」

ダラダラと嫌な汗が流れてくるのを感じ、俺はとっさにその場から逃げた。

「『あの一年をひっ捕らえろおおおおお!!』」

「じゃ、じゃあ! 会長、お元気で!!」

光太郎は生涯で一番早い身のこなしでその場を離れると、全速力で校舎へと向かった。

「この野郎! 喋るだけでなくお触りもしやがって!!」

「羨ましいぞ畜生!!」

「うわああああああああああああああああああ!!」

そんな絶叫のせいか、光太郎は慧理那がポツリと呟いた一言を聞き逃していた。

「…丹羽君、私を助けてくれたあなたはまるで…お姉さまみたいでしたわね」

※

一方アルティメギルの秘密基地の一室。足の踏み場もないほどの段ボールで埋め尽くされているその部屋の主の名はオウルギルデイ。「…やはり、身内から広めようとしたことは間違いであつたか…?」文学属性をこよなく愛する彼は、同士たちにこの属性の素晴らしさを広めようとしたが、一向に上手くいかない現実に嘆いていた。

昨今、活字離れが社会問題と化しているが、その波の被害はアルティメギルも例外ではないらしい。オウルギルデイも食いつきが悪い同胞に嘆き、自作のポエム集の普及を諦めてしまっていた。

曰く『文学は死んだ』『今はデジタル時代だ、アナログは廃れる運命なのだ』『古いものばかりすがつていては老人のままだ』らしい。「ダークグラスパー様は侵略作戦である眼鏡属性の拡散を成し遂げておられるようだ…:…さすが首領様の直属戦士。仕事の腕もエリートか…」

しかし、この程度で諦めるのならば、オウルギルデイは再び決起す

ることはなかったであろう。

オウルギルデイは今朝、一つの希望を見出した。

「……」

彼は正座をしながら一冊のノートを眺める。その黒色のノートはゴミ出しの際に偶然、ゴミ捨て場から拾ったものである。

「……ふむ」

それは誰かが書いた自作のポエムノートであった。オウルギルデイはまるで聖書を読むが如く、熱心にそれを読みふける。そして、最後のページの一文一語まで読み終えると、満足げにノートを閉じた。

「……やはり……文学^{フツ}属性^クは滅んでなどいなかったのだ!!」

感無量とばかりに叫ぶオウルギルデイは、嬉しさのあまりに涙を流してしまった。それほど感動がこのノートには詰まっていた。

「そうだ……これが文学^{フツ}だ……これこそが文学^{フツ}属性^クだ……書き手の文字がまるで私の胸に染みわたっていくかの如く……」

決してデジタルでは感じられないであろう紙とインクの匂い、そして書き手の想いや癖がそのまま反映される文字……時代遅れと一喝するには惜しい魅力がその属性力には込められていた。

自分に今一度火をともしてくれたポエムに報いる為に、オウルギルデイは次の行動に出ることにした。

「……ツインテールを奪うという命題さえ成せば、己の愛する道は許されるということ」

オウルギルデイは厚い布を糸で繋ぎ、丁寧に針で縫っていく。

雑用にまで格下げになったフェンリルギルデイはツインテール属性を軽んじたせいで堕ちた。ならば、ツインテールを奪うという使命さえ果たせば、後は各自の自由ということになる。

「より多くの者にこのポエムを見せ、今一度文学^{フツ}属性^クを復権させてみせる……!!」

男、オウルギルデイ。命令を待たずに彼は、一世一代の作戦を成功させるための行動を始めていた。

※

一方同じ基地内にあるダークグラスパーの自室では。

「ない！　ないないどこにもない!!」

ダークグラスパーが部屋中にある机や棚をひっくり返していた。その度にボロボロと紙束やディスクが散らばる。

「おいメ・ガネ!!　わらわのノートを何処へやった!?!」

「ノート?」

「A4サイズで黒色の奴じゃ!」

キツチンで朝食を作っているメ・ガネは面倒くさそうにチラツとだけ顔を出す。鋼鉄の身体にエプロン姿というその光景は実にシュールな光景だった。

「知らんわそんなこと…掃除した時に色々捨ててしもうたからなあ…」

「!　わらわの物には触れるなど言っているではないか!!」

「何度言っても散らかしたまんまのイースナちゃんが悪いんやないか…ウチは何度も言うたで!　片付けない物は捨てるって!床に放り投げられたノートなんかゴミと思って当然やる!!」

「おかんか貴様あああああああ!?　あれは要らないんじゃなくて、テイルファイヤー用のエロゲ厳選でスペースが無くなって、置き場所がないから偶々あそこに…!」

「全く…変身ばかりしているから悪い子になるんやでえ…?」

甲高いが母性を感じる声で呟くメガ・ネプチューン。そんなメ・ガネの対応にいつもの威厳はどこへやら、おろおろと慌て始める。

「完全に捨てたのならばまだいい!　もしあれが人目にでも晒されることがあってみよ!!　あれはわらわの乙女の純情を書き示した淫心の書物、ここの馬鹿どもが目にした途端に果ててしまうぞ!」

「…それはないわ、絶対!」

「なんじゃとう!?!」

「純情な乙女はエロゲなんかせーへんもん」

ゴミ捨てが完璧でなかったおかんロボットののおかげで、一人の戦士

を果てさせるどころが回春させてしまったのだが、それを2人は知る由もないのだった。

第46話 擦り傷とツインテール

その日の昼休み、総二は何故か尊に呼び出された。

総二はてつきりまた婚姻届でも渡されるのではと警戒していたのだが、どうやら違うらしい。…そもそも尊は婚姻届をこっそり渡すなどといった常識的な行動はまず取らないだろうし、彼女もそんな考えには至らないだろう。

なんせ尊は、婚姻届でガラスを切り裂いたり、コンクリートを貫通させたりできる人なのだから。総二は最近、婚姻届の定義が分からなくなっている気がする。普通、婚姻届ってそこまでの強度じゃない気がするのだが…。

そして職員室の一角で、尊からとんでもないことを言われた。

「今日の放課後、遂にお嬢様がエロ本を買いに行かれることになった」
「……………」

どうリアクションをしていいか分からない総二は、渋い顔でただ沈黙するしかなかった。

もの凄いシリアスな顔でエロ本というワードを述べるのが場違いな気がしてならない。そしてそれが自分の為に買おうとしているのがまた…。

「そこでだ、お嬢様の護衛を頼まれてくれんか、観束」
「ぐ、護衛?」

「ああそうだ。校内中で聞き込みをして、遂にお嬢様はエロ本の品ぞろえのいい書店を知ったそうだな…」

ああ、だから…と、総二は一人納得する。

というのも、総二はここに来る間に『慧理那が男子生徒にエロ本のことであるいろいろ聞き込みをしている』という情報を小耳に挟んだのだ。好みは何だとか、値段やサイズ、絵柄といった、生徒会長が聞き込むには明らかに間違っていることを真面目に聞きまわっている…という半ば信じられないことであったが、あれは事実だったのか。

何故か、そんな慧理那の奇行には一年の丹羽という男子生徒が一枚噛んでいるという噂もあるのだが…まあ、これはガセだろう。まさか

あの真面目を絵に描いたような男の光太郎がエロ本の件で関わっているとは到底思えない。

「本来ならば私がついていくべきなのだが、お嬢様からついてこないで欲しいと言われてしまったな」

「…でも、俺、護衛なんてできませんよ」

総二の護衛のイメージはどうしても黒服を着たSP的な何かであったが、残念ながら総二は普通の男子高校生。多少の格闘技の嗜みはあるものの、それ以外に関してはずぶの素人もいい所だ。

「難しいことは頼まん、ただこつそりで見張るくらいでいい。いざとなったら観束には変身という切り札があるではないか」

「わざわざ護衛に使うには過ぎた力だとは思うんですけれど…」

元々是对エレメリアン用の武装であるテイルブレスを護衛に使うのは過剰防衛になるのではと総二は思ったが、一応、誘拐などの最悪の展開に対しての選択肢の一つに加えておくことにした。

「そもそも、俺が護衛している間、先生は何してるんですか？　せめて遠くからナビゲートの的なことをして欲しいんですけど…」

「私には部下のメイドと一緒に、近い縁談の妨害工作をしなければならぬのだ。前にも話しただろう？　お嬢様の奥様が次々と縁談を取りつけているという」

「ああ、あれですか……」

確かに今後のツインテイルズの活動にも支障をきたすかもしれない縁談の妨害の方が重要な問題だろう。総二は今更ながら、護衛を仲間に任せざるを得ない程、問題が切迫していたことに驚きを隠せなかった。

「それでも大丈夫なんですか？　もし暗躍していることがばれたらクビにされたりとか…」

「なあに、その時はお前にでも貰ってもらおうさ」

セリフはハードボイルドっぽくてかっこいいのだが、机の引き出しからチラシと顔を出している『婚姻届』と書かれた書類の存在が全てを台無しにしてしまっている。しかも確認できるだけでも、その全てに先生の名前がキツチリと書かれている。固ゆで卵どころかコン

ニヤクゼリーよりも柔らかそうに見えるほど、残念すぎた。

だが裏を返せば、総二に護衛役を任せたことということは、尊は総二のことを信用しているという証でもある。そうでなければこんな大役を総二に託すわけがない。

そして尊もまた、慧理那の為に身体を張っている。自分の首が飛ぶリスクを背負いながら、自分が出れることを行っている。…ならば、男として取るべき行動は一つしかないだろう。

「…分かりました。護衛役、俺が引き受けます」

総二は凜とした表情で、尊にそう宣言した。

「すまない。お嬢様と仲が良いであろうお前が適任なんだ。護衛役、任せたぞ」

「任せて下さい」

グツとサムズアップをし、作戦成功を誓う総二。まるで出撃前のパイロットの気分だ。

もしかしたら上手くいかないかもしれない、慧理那にもばれてしまうかもしれない。でも、せめて、エロ本を買って距離を縮めるという、会長のささやかな願いだけは叶えさせてあげたかった。

「…ああ、そうだ」

すると尊はそういえば、とポンと手を叩いた。

「妨害工作チームの鉄砲玉として、津辺君を借りていくぞ。もし荒事になった時には、私の部下以上に役立ってくれるかもしれないからな」

一瞬、総二は普段のトゥアールとのやり取りをする愛香の姿がフラッシュバックする。ボコボコに殴られるトゥアールと殴るごときにキレを増していく愛香。

…もし、愛香がそのような役目を果たさなければならなくなってしまった時、相手は生きて帰れますように、と心の中で総二は祈りをささげた。

※

そして迎えた放課後。

授業が終わった途端、総二は大急ぎで家に帰ると、極力目立たなそうな格好に着替えた。白いシャツとチノパンに着替え、念のために黒色のキャップを目深く被ると、また大急ぎで学校へと戻った。

いつも慧理那は授業が終わると生徒会の仕事がある為、そうそう早く校門から出ることは無いと思うのだが…。

(…来た!!)

校門前で待つこと数分、さっと総二は近くの電柱へと身を隠した。校門から見慣れたツインテール姿の少女、慧理那が出てきたのだ。何とか間に合つてよかつたとホッと息をつくが、護衛はまだまだこれからが始まりなのだ。ここからはばれないようにしなければ、とますます帽子を深くかぶった。

「……………」

幸いなことに慧理那は隠れている総二に気付くことなく、いつもと同じように歩いていく。総二もまた、電柱から電柱へ渡り歩き、素人丸出しの身のこなしで尾行していった。

(……結構な所まで行くんだな)

慧理那の足は、総二たちが普段通るような大通りからどんどん遠ざかり、裏通りへと向かっていった。

長年この町に住んでいる総二ですら迂闊に足を踏み入れないような裏道を慧理那は不安そうな足取りで歩いていく。そんな慧理那の姿を見逃さないように、総二もまた細心の注意を払いながら後をつけていた。確かにこんな道を通る必要があるのなら、護衛の一つや二つは必要だろう。もういかにも怪しい匂いがプンプンする。

幸いにもその道中は総二が想定していたようなトラブルも無く、比較的にあっさりとしていた。

慧理那のその凄まじいほどのツインテールのせいでもしかしたらエレミアンとエンカウントし、道中で変身をしなければならぬかも知れない。そして半ば覚悟していたのだがその心配は余計なものだったらしい。

そしてやっとの思いで到着した目的の書店は、年季の入った個人店だった。総二は自分の身体を十分に隠せる立て看板の後ろに隠れ、店内へと入る慧理那を見て、まずはほつと息をする。

(まずは折り返しまで来たか…！)

引き戸の向こうでは、棚を一つ一つ丁寧に見ている慧理那の姿があった。

しかし油断はできない。いつドラマのように、黒塗りの怪しい車が店前で止まるか分からない。心臓をバクバクさせながら、総二は慧理那が買い物を終わらせるのを固唾を呑んで見守る。

(…お、お。店員が近づいてきた途端に、エロ本コーナーから児童書コーナーに移動した！ 『あれ、来週のボランティアで使う本はどこかしら？』みたいな空気を全身で発している！ そしてその動きに合わせてツインテールも揺れた!!)

…忘れそうになるが、現在総二は『エロ本を買う上級生を離れた所から見張っている』という一歩間違えれば変態の道へ足を踏み入れるほどの特異な行為に励んでいる。

ふと我に返ると、自らの行いに疑問や羞恥を抱きそうになるが、そんな慧理那もまた、総二の為にあそこまでしてくれているのだ。ならば総二がするべき行動は恥ずかしがることではなく、慧理那がエロ本を買うのを固唾を呑んで見守ることだろう。

「…ん？ 何だあれ？」

そう思った総二であったが、ふと書店と反対側に位置している歩道で、当地ゆるキャラのような着ぐるみフクロウの姿が目に入った。どうやら下校中の女子小学生に何かを配ろうとしているみたいだ。

「詩集だよ、とっても素敵な詩集だよ」

「ねえ、詩集って何？」

「あ！ 私知ってるよ！ 針と糸で色々作ることだよね!!」

「いや、それは刺繍…私が言いたいのはこの詩集で…」

複数の女子小学生に絡まれてたじろのフクロウを可哀そうな目で見る総二。あの年頃の女の子の扱いは難しいからな、と数年前の愛香を思い出しながらゆるキャラに同情する。

そんなことよりも総二にとっては、あの女子小学生たちがツインテール姿である事の方がよっぽど関心があったし、もつと言えば今は書店にいる慧理那を見張る事の方が大切であった。

だが慧理那の方へ向き直ろうとした総二はここでとんでもないものを目撃してしまった。

「あはは、何だこれきったねー字!!」

「ほんとだー!!」

「う、うむむ…ぬわあああああ!?!」

身体にしがみついたり跨ったりするやんちゃな女子小学生のせいでバランスを崩したフクロウは、転んだ際の衝撃のせいで着ぐるみの頭部分が外れてしまったのだ。…いや、それだけならまだ子供の夢が壊れてしまうだけだった。中の人がいるという厳しい現実を突きつけるだけだった。

なんと、中から更にフクロウの頭が現れたのだ。どう見ても人間の顔ではないそれに、女子小学生の悲鳴が聞こえてくる。

「キヤーー!」

「こ、これって…!」

「——エレメリアン?!」

電柱の陰に隠れていた総二も女子小学生と同じように、いきなり現れたエレメリアンに面食らってしまった。まさかこんな時に怪人と遭遇してしまうとは…!」

「ううむ…ばれてしまったのならば仕方ない。そう、いかにも! 私は文学を愛する戦士、オウルギルデイ! 幼子たちよ、私は君たちに暴力を振るう気はない! ただこの詩集を君たちに受け取って欲しいのとその見事なツインテールが欲しいだけなのだ!!」

端から見れば凄まじい要求だが、無論、こんなことを許す女子小学生ではない。

「やだー!」

「きもーい!!」

「しかしだな…私はエレメリアンの戦士。ツインテールを奪う行為を行わなければ、文学も広められんのだよ…!」

「詩集なんて見たくないよー!」

「私たちは漫画でいいしー!」

「そ、そんなこと言わずに…そのツインテールをわが手に!」

数歩下がりがりながら狼狽する小学生とにじりにじりと近寄るオウルギルデイ。だが、ここで誰かが両者の間に割り込んできた。

「や、やめろー!!」

「!?」

その掛け声と共にバツとオウルギルデイと女子小学生の間に入り込んだその人物の声と姿に、総二は再び驚いてしまった

「何だ貴様は!？」

「さ…さっさと離れろ!!」

なんとそこに立っていたのは他でもない、真面目を絵に描いたような男子生徒、丹羽光太郎だったのだから。

※

さて、何故ここに光太郎がいるのか？ それを説明するには時間を少しだけ遡らなければならない。

光太郎は下校時刻になった途端、総二と同じように大急ぎで学校から逃げようとしたが、ここでトラブルが発生してしまう。

(う、うわ、上級生が校門でうろついている…)

今朝の事件をまだ根に持っているのか、はたまた会長のエロ本事件に自分が関与しているという全くの濡れ衣を彼らは信じているのか：真相は分からないが、尋常でないような雰囲気で待機している先輩たちの姿を目撃してしまった。もの凄く怖い顔をした先輩たちの手には竹刀やバットが握られていたような気がしたが、それは自分の気のせいだと思いたい。21世紀の世の中であんなものを持つて校門前に待機している生徒の姿が見えるとは…。

とにかく家に帰る為には校門を使つてはまずいと判断した光太郎は、大急ぎで裏門から飛び出すと下校中に先輩に遭遇しないようにと、裏道に次ぐ裏道で裏道を通つての帰宅になつてしまった。

(あーあ、確かにあれは迂闊だと思つたけどさ…)

学園のアイドルの慧理那会長と何のとりえもない俺との握手が、認められるわけないもんな。いくら不可抗力だったからって、俺と会長

じや月とスッポンもいいところだ。俺よりも頭が良くて、顔もよくて、運動ができる男子なんていくらでもいるし、彼らだって会長の隣に立つのがふさわしいに決まってるって思っているはずだし……鳴呼、何だか自分で言っていて悲しくなってきた。

光太郎にだってツインテイルズの一員であるテイルファイヤーの正体であるという、他の男子とは一線を画する大きな特徴があるが、こんなことおっぴらにしたら火に油を注ぐだけだ。というか光太郎自身もまずいことになってしまう。

(…ま、俺なんてどこにでもいるような男子だし、先輩たちが気に食わないのも当然だろうし…)

やっぱり、慧理那会長と釣り合うにはそれなりのスペックがなきゃ駄目ってことなのかな。

会長はツインテイルズ好きだから、俺もそっち方面のイベントにも参加して色々な知識を深めたりとかするべきだろうか？ 現場では分からない声を聞いて、色々と理解を進めたりとか……いや、あの世界に飛び込んだら自分で自分が嫌いになりそうで怖い。

「あれ…？ ーこー、どこだ？」

ふと光太郎は足を止めると、自分がいつの間にか見覚えのない地点に突っ立っていたことに気がついてしまった。近くにはいかにも古そうな書店があつたが、個人で経営している店なのか聞いたことも無い名前だった。

「まいったなどうも…」

先輩たちに会わないように裏道を使っていたのがどうも裏目に出してしまったようだ。来た道を引き返そうと思つたが、うわの空で歩いていたせいか、自分でも来た道が分からなくなっていた。ポリポリと頭をかきながら、最悪レイチエルの転送を使って帰宅すればいいかと無理矢理樂觀的に考えを戻す。

「…ん？ なんだありやあ？」

目の前に広がっていたのは、数メートル先でツインテールの女子小学生相手に何かを配っているフクロウ姿の着ぐるみだったが、残念ながら光太郎の興味を引いたのはそこから更に数メートル後にある立

て看板の陰に隠れている人物だった。

白いシャツとチノパン姿で帽子を目深く被っているその男の姿は大変奇妙であったが、光太郎は見覚えがあった。

(…あれ…総二か?)

思わず二度見してしまったが、その特徴的な癖毛と赤い髪色が決め手となり、間違いなく総二だと見破る。

今の光太郎の心情は、こんな裏道で総二に会えた喜びよりも疑問の方が圧倒的なウェイトを占めていた。だって今の総二はどつからどう見ても不審者にしか見えないからだ。

その目はなにやらもの凄く真剣そうであり、その不審者じみたルックスと行動でますます怪しさに磨きがかかっている。

(まさか…)

ほんの一瞬だが、光太郎は総二のツインテール好きが加速したせいで、遂には幼女を観察対象にしているのではないかとあらぬ妄想をしてしまったが、いやいや、それはあり得ないだろうと考えを改める。

いくらツインテール好きな総二でもやっていいことと駄目な事の区別はつくはずだし、まさか小さな女の子をストーカーだなんてそんなアルティメギルでもないような行動を取る訳が…。

「あはは、何だこれきつたねー字!!」

「ほんとだー!!」

「う、うむむ…ぬわあああああ!」

と、ここで小学生サイドに動きがあった。

絡んでいた小学生のせいでフクロウがバランスを崩し、大きく転倒してしまったのだ。あーあ、可哀そうに…とフクロウに同情したのもつかの間、光太郎は度肝を抜かれた。

フクロウの着ぐるみの頭がコロンと取れ、なんと中から更にフクロウの頭が現れたのだ。

(エレミアン!?)

フクロウ頭の中の人を見た光太郎はとっさに通学カバンにあるテイルドライバーを取り出そうとしたが、あることに気付いてしまい、動きが止まる。

(しまった……ここで変身は出来ない!!)

この裏通り、光太郎が立っている歩道には電柱以外に身を隠す場所がない。しかも電柱の陰に隠れてもその全身を隠せる訳じゃない。身体の半分を隠すことが精一杯だ。これでは変身時に起こる光を隠せず、変身しているということが筒抜けになってしまう。

そして……目の前には女子小学生やエレメリアン、何よりも総二がいる。彼らが光太郎の存在に気付いている可能性もゼロではない以上、ここでの変身はいくらなんでもリスクが高すぎた。

(どうする……!? このままじゃ……!)

目の前では数歩後ずさる小学生と数歩近寄るエレメリアンといういつもの光景があった。だが、光太郎にとっては爆弾の導火線のように思えた。早く答えを出さなければ彼女らはフクロウにやられてしまう。

正直、ここで逃げるといふ選択肢を取るのも一つの手段だ。踵を返して、彼らから見えない位置まで移動し、変身して今度はテイルファイヤーとしてもう一度この場に駆けつける。それも悪くは無いだらう。

だが、その手段を取るのを光太郎は躊躇ってしまふ。

もし、もしもだ。もし、自分が離れた間に女の子に危ない目に遭わせてしまったら？ それに関係のない総二まで巻き込んでしまったら？

仮に属性力を奪われても、短時間であれば取り戻すことは可能だ。だが、その間に体験した恐怖は取り除けない。彼女らに暴力は振るわないと思うのだが、万が一のこともある。

「や、やめろー!!」

そして光太郎が取った行動は、最も勇敢で、尚且つ最も愚かな行動だった。

「何だ貴様は?」

いきなり少女たちの前に躍り出た光太郎に、フクロウは大いに驚いていた。そして光太郎もまた、汗を噴出しながら、腕を大きく広げていた。

「さ…さっさと離れろ!!」

そう、光太郎が取ってしまった行動は『エレメリアンの前に現れ、少女たちを守る』といった死亡フラグバリバリの行動だったのだ。

「ええい、さっさとそこをどかんか! あいにくだが男には何も渡すものは無い!」

「はい、と言ってどく奴がどこにいるんだよ!」

フクロウと喋っている間にも、早くツインテイルズの誰かが駆けつけてくれないものかと願っていたが、その祈りは天に聞き届けられなかつたらしい。待てども待てども、彼女らが駆けつけてくる様子が無い。まだ現れて数分も経っていない為か、敵の索敵が遅れているのかもしれない。

(くっそ…)

変身前でこうやってエレメリアンと対面するのがこんなに怖いものとは思わなかった。普段の言動で忘れそうになるが、こいつらは普通の戦闘員クラスですら人間を軽くあしらえるほどの戦闘力を持っている。

変身中でなら、ギアの力で多少の攻撃など屁でもないのだが、生身の今ではデコピン一つ受けただけで敗北してしまいそうだ。

「とにかく! 嫌がっているのに無理矢理そんなもん押し付けるのは良くないことだぞ!!」

だが、その光太郎の正論がフクロウ型のエレメリアンの怒りに火をつけてしまった。

「ぬう…男が私の邪魔をするなあ!!」

「!」

フクロウは光太郎目がけて配っていた詩集の一つをウチワのように仰いだ。それはエレメリアンにとってはそよ風並みの風力なのかもしれないが、人間にとつては突風にも等しい。

「うおおおおおおおおお!」

光太郎は絶叫と共に突風に煽られ、近くにあるゴミ捨て場まで吹き飛ばされる。そしてそこに勢いよく叩きつけられた。その衝撃でゴミ捨て場のゴミが舞い上がり、光太郎の身体はそれに埋まった。

「くそっ…痛ってえ…！」

光太郎は自分がゴミ捨て場に叩きつけられたのに気がつくまでしばらくかかった。

光太郎は自分の身体に乗っかっているゴミ袋をどけながら、忌々しく唸る。

やはりあんな行動取るべきではなかったと後悔したが、ゴミ山から顔を出した際に女の子たちがフクロウから離れて全速力でその場から逃げる光景を一瞬が見ることが出来たため、結果オーライかと思うことにした。看板の陰から顔を出していた総二の姿も見当たらない。もしかしたらこの騒ぎに便乗して逃げてくれたのかもしれない。

そしてまた、フクロウ型のエレミアンの姿も無く、もしかしたら撤退してしまったのだろうかという淡い期待がよぎったが、無情にも左腕のテイルリストから鳴り響いた甲高い音でそれはありえないなと思うことにする。

『光太郎!? あんたがいるすぐ側でエレミアンが出現したわ!』

「あー…そうかい」

『…? あんた、どうかしたの?』

「なんでもない…」

『なら、いいんだけど…』

もうレッドとエレミアンが対峙しているわ、というレイチエルの声を聞か聞かないかの内に通信を切る。

「おちおち…寝ても…いられないか……」

ちつと舌打ちをすると光太郎はゴミ山から這い出て、道の向かいにある立て看板へと向かった。

そしてその陰に素早く隠れると、急いでカバンからベルトを取り出し、慣れた手つきで腰に当てると、いつものように構える。

「変身…！」

そしてテイルファイヤーに変身すると、ギアの情報を読み取り、急いで現場まで駆けつけることにした。どうやら近くの路地裏で戦いを繰り返しているらしい。

だが、光太郎は気づいていなかった。ゴミ捨て場に突っ込んだ時に

自分の右腕を大きく擦りむいていることに、そしてテイルファイヤーに変身した今でもその擦り傷は健在だということに…。

※

路地裏ではテイルレッドに変身を遂げた総二とフクロウ型エレメリアンのオウルギルデイの戦いが始まろうとしていた。

「我が属性力…滅びゆく文学^{ブック}属性の未来の為に、あの書店のようなツインテールな文学少女が必要なのだ!!」

「だからって、そのために誰かを傷つけていいはずがない…誰かの邪魔をしていいはずがない!」

総二の中には二人の人物が渦巻いていた。一人は慧理那、もう一人は光太郎だ。

光太郎が飛び出てきたことは総二にとって衝撃的であったが、オウルギルデイによって吹き飛ばされてゴミ捨て場に叩きつけられたということが尚のことショックであった。そして、あの右腕の擦り傷…思い出だけで悔しくなる。自分がもつと早く変身して飛び出していればあのような事態になっていなかったのでは、と思わざるを得ない。

そしてオウルギルデイは次なるターゲットを書店にいる慧理那へと定めた。その見事なまでのツインテールに惹かれるようにふらふらと近づいていた。

その光景に総二は震えた。友に手をかけながらも、尚ツインテールを欲するのかと。恐ろしいほどまでに頭の中が鮮明になっていくのが自分でも分かっていた。

そしてすぐさまレッドへと変身を遂げると、そのままオウルギルデイに掴みかかり、路地裏へと転がり込んだ。

全ては傷つけられた友の為に…そして、慧理那が安心してエロ本を買えるために。ただそれだけの為にテイルレッドはオウルギルデイの前に立ちはだかった。

レッドはリボンを弾き、ブレイザーブレイドを出現させ、オウルギ

ルデイは懐に忍ばせておいた詩集のページを破り取ると、まるで金属製の刃物のように硬質化を果たした。

「……！」

そして二つの刃が交差し、激しい剣術戦の幕が開けた。

「ぐっ……！」

「このお!!！」

数度のぶつかり合いの後、レッドのブレイザーブレイドの一太刀はオウルギルデイの紙のナイフを容易く切り裂くが、すぐさまオウルギルデイは詩集の数ページを破り、破り取ったページを投擲する。ページはその手から離れると、即席の手裏剣となってレッドへと襲い掛かる。

咄嗟にレッドは回避したものの、オウルギルデイはこれを好機と睨んで果敢に接近戦を試みる。そして突如、肩にあるバズーカのような砲塔をレッドへとむけ、零距离で弾丸を放つ。

「!」

この突然の攻撃をレッドは腰のブースターを吹かせることで無理矢理回避するが、弾丸は右腕に着弾し、大きく餅状に伸びる。そしてその腕を絡め捕り、近くの壁へと拘束してしまう。

「鳥だからトリモチを使うってか!？」

もの凄い粘着力で右腕を拘束するが、レッドはこの事態を貼り付けられた壁ごと引き抜くといった荒技で対処する。小さな身体にくっついたブロック塀といった光景は実にシニールといえる。

「ぬう、なんとというダイナミックな幼女だ!」

腕にブロックをつけたままオウルギルデイに斬りかかるが、オウルギルデイもまた素早い身のこなしでこれを回避する。

「ティルレッドよ、分かっってはくれぬか! 世界にはただ滅びを待つだけの悲しき属性が数多く存在する! 文学^{フック}属性もその一つなのだ!!」

オウルギルデイは足のかぎ爪を使つての攻撃を繰り返すが、レッドはこれを右腕にくっついたブロック塀でガードする。

「今ならばわかる! ダークグラスパー様もまた、私と同じ思いでこ

の世界に参られたのだと！ 私はただそれを守りたいだけなのだ!!」
「結局は奪うくせによく言うぜ!! 文学が滅ぶ!? 現代人の本離れに
嘆いているのかよ!? 悪いけど本を読む心は現代人からは失われて
いないぜ!!」

「いいや違う！ 質の問題だ！ どの世界に置いても、文明の進歩と
共に消えゆくものがある!! 純なる文学を愛する心もその一つだ!!」
「純然たる…!?!」

今度は腕の爪で攻撃が繰り出されるが、レッドもまた剣でそれを受
け止める。

「ああそうだ！ 今や小説といえは、なっていない文法や無駄なイラ
ストが入っている邪な物ばかり!!これを文学と呼べるとでも思うの
か!!」

「それはお前が思っていることだろ！ 文学はお前が中心で回ってい
る訳じゃない！ そこに存在する以上、それは誰かに必要とされてい
るんだ!! 俺だつてパッケージにツインテールが描かれている漫画
や小説ばかり読んでいるぞ!!」

「それはテイルレッド、貴様がまだ幼いからだ！ 私は子供が文学に
触れる入り口としての絵本までは否定せぬ！ だがそれだけでは豊
かな想像力は生まれない！ いっしかお前も文字を通して頭に見え
るツインテールの素晴らしさに気付く時が来るはずだ!!」

「それが余計なお世話だつて言っているんだ!!」
「黙れえ!!」

オウルギルデイは詩集を繋ぎとめている糸を解くと、幾何物のペー
ジが宙を舞う。

「これが…純然たる文学^{フツ}属性^クを愛した私の奥義だ!!」

そして硬質化を果たした紙たちは雨あられのようにレッドへと降
り注ぐ。レッドは剣を構えるが、この量の攻撃を防ぐのはあまりにも
厳し過ぎた。

「ぐ…!」

レッドの装甲に細かな切り傷が刻まれていく。あまりの猛攻に
レッドも対処できなくなっているのだ。

「ふふ…これぞ紙の力なり…決して電子書籍などでは味わえない紙特有の…!?」

だが次の瞬間、その紙の刀は突如として現れた紅色の壁に阻まれる。

「そうやって小さな子に自分の考えを押し付けるのは感心しねえな!!」

「テイルファイヤー! 貴様…!」

オウルギルデイは救援に現れたテイルファイヤーの声を耳にすると思わしそうな視線で見つめる。

「来てくれたんだな、ファイヤー!!」

「悪いなレッド! 野暮用で少しばかり遅れてしまった!!」

申し訳なさそうに話すファイヤーだったが、レッドはそんなことで怒るほど小さくはない。

「構わねえ! おかげで…気合が戻った!!」

レッドは猛る心と共に剣を振るうと、剣から迸った炎で舞い上がる紙たちを一刀両断にする。

「ぬおおおおおお! 聖典が灰に!?」

「燃えるのが嫌なら初めから武器として使うな! オーラピラー!!」

レッドは剣を完全開放して、必殺技の体勢に入る。だが拘束されてもオウルギルデイは最後の悪あがきとして、まだ燃えていない紙でレッドを攻撃しようと、背後にある紙を操る。

「… 危ない!!」

だが咄嗟にファイヤーがそれに気付き、レッドの後ろに回ってこれを右腕で弾く。

「…ぐー!」

だが、当たり所が悪かったのか、あるいはオウルギルデイがその一撃に込めた想いが重いせいなのか…ファイヤーの右腕部分のアンダースーツがすっぱりと切れてしまった。

「ファイヤー!?!」

「大丈夫、大したことじゃない! 構わず…突っ込めえええ!」

「…分かった!」

そしてレッドもまた、剣を構えたまま、腰のブースターで加速する。
「グラントブレイザアアアアアア——!!」

「うおおああああああああああああああ!!」

伸長したブレイザーブレイドに斬り付けられ、オウルギルデイの身体からは炎が発火する。

「お前のこだわりは良く分かった…!　だが、それを決めるのはお前じゃない、この世界に住む人々なんだ!!　ただ押し付ける愛は、愛とは言わないんだよ!!」

「さ、さすがだテイルレッド……よもや幼子に説教される日が来るとは……む、無念だあ!」

そしてその言葉を最後に、オウルギルデイは爆発四散した。

※

属性玉・文学属性^{フッ}を回収したレッドは、ファイヤーと共にオウルギルデイが残っていた本の一冊を手を取った。

「…コピーした紙で作った詩集みたいだな」

「何が書いているんだ?」

2人は何気ない好奇心からページをめくるが、書かれている内容に面食らってしまった。

「……………なんだ、これ?」

「落書きか?」

最初はミミズがのたくったような絵だなと思ったそれは、よくよく見れば文章のようであった。子供が書いた文章であるのだろうか?　と思ってしまうが、それは違うと確信する。

この墨汁が和紙に滲んでいくような文字は、どう見ても子供が描ける文字ではない。どことなくどす黒い怨念を感じてしまうこれは、すぐさま神社でお祓いを頼むレベルの気持ち悪さを感じてしまう。

「……とりあえず、これはもう見ない方がいいな」

パターンと詩集を閉じ、何も見なかったことにするファイヤーであったが、レッドの興味は既に詩集には無く、オウルギルデイに破られた

右腕部分のアンダーシャツをジッと見ていた。

「…どうしたんだ、レッド?」

「いや…これ…」

まるで驚いたような視線でその擦り傷を凝視している。

「なあ…ファイヤー、この擦り傷、どこで怪我したんだ?」

「え? ああ…」

ファイヤーが何かを喋ろうとしたその時、誰かがこの路地に近づいてくる足音が聞こえてきた。

「…すまない。この話はまた後で話すよ」

それだけをレッドに言うと、ファイヤーは書店の屋根にジャンプし、姿を消してしまった。急いで後を追おうとしたレッドであったが、ここで予想外の人物に足止めされてしまう。

「…観束君?」

「うおわっ!? え、慧理那会長…ぐ、偶然ですね」

路地の入口には慧理那が不思議そうな目でレッドを見ていた。総二もまさかずっと尾行していたとは言えない為、何食わぬ顔をして挨拶を交わす。

「もしかして、エレメリアンが現れたんですか?」

変身している総二の姿から、慧理那はこの近くでエレメリアンとの戦いが繰り広げられていたのだと察したらしい。

「…ん、まあね。さっきまでこの路地で戦いを繰り広げていたんだ。でも安心してくれ、敵は倒したから」

ほら、とオウルギルデイが残っていた属性玉を慧理那へと見せる。興味深そうに属性玉に触れる慧理那を尻目に変身を解除した総二は一人、物思いに耽っていた。

(あの傷…丁度、このくらいの長さで…)

ファイヤーのあの傷をどこかで見たような気がするのだ。思い違いかもしれないが、ほんの数分前に見た傷にどこかそっくりだった…まるであの時ゴミ捨て場から出ていた手みたいにな…。

(…まさか、まさか、光太郎がテイルファイヤーだなんてことは…)

ほんの一瞬、思ってしまったことだったが、総二はいくらなんでも

あり得ないことだな、と苦笑した。自分の立てた空中楼阁の仮説は、あまりにも信憑性に欠いていた。

いくらなんでも腕の傷だけ正体を決めつけるのは明らかに証拠不足だ。もしかしたらあの傷は元々あった物かもしれないし、腕の傷一つだけで決めつけてしまったら、いくらなんでも光太郎に失礼すぎる。

(それに、俺以外に女になるヒーローがいてたまるかって話だよな)

あはは…と空笑いをしながら自分の仮説を脳内のゴミ箱に放り込むと、慧理那は突然悲しそうにうつむき、無念だと云わんばかりにツインテールを震わせた。

「ど、どうしたんだ会長!？」

突然の行動に総二は驚き、慌てふためく。

「…観束君、私、あなたに謝らなければいけないことがありますの」

「あ…謝りたいこと?」

「……えろほんを、買えませんでしたわ。18歳以上でないと販売することが出来ないと言われちゃいましたわ……」

「え」

涙目で震える慧理那に面食らってしまう総二。そして、この当たり前といえは当たり前な結末に、一気に脱力する羽目になってしまったのだった。

第47話 疑惑とツインテール

オウルギルデイとの戦いを勝利に収め、迎えた次の日。

光太郎はいつもと同じように、徒歩通学の集団に紛れ込みながら一人歩いていった。ただいつもと違うのは、その右腕に包帯が巻かれていることだった。

「うーん…どうも調子が狂うな…」

光太郎はそう言うのと、そつと包帯が巻かれている部分を擦る。その包帯の下には昨日、オウルギルデイに吹き飛ばされた時に出来てしまった傷がある。

幸いにもそれほどひどい怪我でもなく、大した痛みも無い為、レイチエルには特に何も言っていない。妙な心配をかけたくなかったので、昨日は怪我した右腕を巧妙に隠しながら生活をした。が、流石にそれでは限界がある為、今日、レイチエルが目覚めるよりも前に起きて、傷を隠す為にこっそりと包帯を巻いたのだ。

今朝、レイチエルは俺の腕に包帯が巻かれているのを不思議そうな目で見ていたが、『朝食の準備の時、包丁が手元から滑ってうっかり切ってしまった』という根も葉もない嘘で適当に誤魔化した。

(包帯はやりすぎだったか…？ でもこうでもしないと、俺も気にしちゃうしなあ)

どうも包帯の感覚は慣れない。だが、こうでもしないと傷口をかきむしって、うっかりカサブタを剥いてしまいそうだから、傷が治る数日は我慢するしかないだろう。この傷は出来るだけ早いうちに直しておきたかった。

(…それにしてもテイルファイヤーに変身した時でも、身体の傷までは誤魔化せないというのは盲点だったなあ)

性転換するのだから、変身さえしてしまったら身体の傷も消えてしまうのではないかという仮説は覆ってしまった。いくらテイルギアがオーバーテクノロジーで出来ているとはいえ、所詮は機械。性別は変えられても、四肢の損傷や身体の異常を誤魔化せるほどではなかったのだ。

それに、レッドにあの傷口を見られたのは今となってはまずかったと思うし、言い訳に困ってしまつて咄嗟に逃げてしまつたことも尚のことまづかった。レッドにあらぬ心配をかけてしまつたかもしれないし、正体バレに繋がる事にはならないが、レッドには自分とファイヤーを結びつける一つの情報を与えてしまつたことになる。

(まあ、ファイヤーに変身している間は実の親でも見抜けないらしいから大丈夫なんだろうけどさ……)

だからこそ、テイルギアには変身者を特定できなくするという認識攪乱装置が備え付けられている訳であつて、それは光太郎もレッドも同じだ。

光太郎がレッドの正体を見抜けないのと同じように、向こうもまさかファイヤーの正体が男などいつた発想には辿りつかないはずだ。

…大丈夫、大丈夫。レッドは俺の正体には絶対にたどり着けない。第一、右腕に傷がある人間なんてこの世に何人いると思つているんだ？ そのヒントだけでは絶対に俺は該当しないはず、恐らく……

(でもなあ……)

そう安堵しつつも思い浮かべてしまうのは、昨日の去り際に見たレッドの戸惑いと驚き、悲しみのようなあの表情。逃げる時、光太郎も思わず罪悪感に駆られてしまつた。

…もしかしたらレッドは、何時までも正体を明かさないでいる俺に、不信任を抱きつつあるのかもしれない。戦いが始まつて早2か月。自分の正体どころか、戦いでしか彼女らとは接していないのだ。いい加減あちら側でも、テイルファイヤーについて疑つたり、懐疑的な目で見られてもおかしくはないのかもしれない。

(…もう、正体を誤魔化せられなくなつてきているのかもしれないな) 戦いは激化の一途をたどっている。

出現するエレメリアンも雑魚クラスであつてもどんどん強くなつているし、後ろにはダークグラスパーも控えている。今まで以上にツインテイルズは力を合わせて立ち向かわなければならぬのに、自分の正体を隠したままにいる今の関係でいるのも限界が近づいているのかもしれない。

いつか、正体を明かさなければならぬ。少なくとも、今以上にばらしづらくなる前に。

しかし、そう覚悟しているのにも関わらず、もし自分の正体が知られたことで拒絶されてしまったら……という恐れをどうしても拭いきれない自分が心のどこかにはいる。

特に、自分を『お姉さま』と慕ってくれているイエローの存在が尚のこと正体バレに関して、その一步を踏み出せないでいるのだ。あれだけファイヤーのことを慕ってくれている子がその正体が男だと知った日には、反動でショック死してしまうかもしれない……。

(……………俺って情けねえ)

はあ……と、憂鬱そうなため息をついていると、丁度玄関で靴を履きかえている総二の姿が見えた。その隣には愛香さんやトウアールさんも一緒だった。光太郎は駆け寄り、後ろから総二の肩を叩いた。

「よ、おはよう」

「！ よ、よう……おはよう………」

「？ ……ああ、おはよう総二」

肩を叩かれた総二だけは大げさとも言えるくらい驚いた顔で光太郎を見ていた。肩を叩いたのは流石に驚かせてしまったかな？ と思ったが、何はともあれ無事そうだったので光太郎は安堵していた。昨日は自分が吹き飛ばされた後、無事に逃げ出せたらしい。

「あらおはよう、光太郎」

「ああ、愛香さんもおはようございます。それと……トウアールさんも……」

「……………おはようございます」

いつものメンバーといつも通りの挨拶を交わすが、自分に対するトウアールさんの冷めたようなりアクションはいつも通りなので、もう光太郎は気にはしない。

「その……腕……大丈夫、なのか？」

総二は心配そうに光太郎の右腕を指さした。それを機に、愛香さんも心配そうな目で見ってくるが、光太郎はさりげない声で答えた。

「……ああ。ちよつと軽く切っちゃってな。包帯は巻いているけれど、

心配する程じゃないよ」

ほら、と光太郎は何にも気にしていないようにグルグルと腕を回した。

「ちよつと光太郎、これ何の怪我なの？ 熱湯でも被っちゃったの？」

「あはは、うっかり腕、切っちゃったんですよ。でも、気にするほどの怪我じゃないから安心してください」

「そうなの？」

「ええ」

光太郎はわざと何でもないような雰囲気話した。怪我をしたことは話したが、エレメリアンによつて負わされたということは一言も発さなかった。周りに変な心配をかけさせたくなかったし、総二にも変な責任を背負わせたくなかったからだ。光太郎自身も、あの怪我は飛び出してしまった自分の責任だと思っているし、総二が悪いだなんて微塵も思っていないかった。

「あんまり大袈裟にならなくても大丈夫ですよ。本当に軽い怪我なんですから」

「なーんだ、そうなんだ。あたしはてつきり、火傷でもしたのかと……」
「やっぱり、刃物って扱いには注意しなきゃ駄目ですね」

あれは事故であり、決して誰かが悪いわけじゃないんだぞという口調で話を進める。だが総二はそれでも光太郎の右腕が気になるようで、ジツと光太郎の腕を見つめていた。

「それよりも早く行こうぜ、総二。そろそろチャイムが鳴るぞ」

「お、おう……そうだな」

連れ立って階段を上がる光太郎であったが、総二の目は相変わらず光太郎の右腕を見つめていた。

「……………」

そしてトウアールもまた、別の意味で光太郎をじつと見つめていた。

※

そしてその日の放課後。ツインテール部の部室では、慧理那が申し訳なさそうに部のメンバー全員に謝罪の言葉を述べていた。

「面目ありませんわ…私が幼いばかりに、年齢制限に引つかかってしまつて」

「ちよ、ちよつと！ 頭上げてよ会長！」

「でも………」

頭を下げる慧理那に何とか頭を上げて貰うが、納得していないようであった。

「…私、いつも守つてばかりで、その次はただ力を与えて貰つただけですわ。戦える時に戦えなくて、皆さんの足を引つ張つてばかりですし…」

慧理那は下を俯きながらテイルブレスをジツと見つめている。

「だからせめて、エロ本だけとは思つたのに…不甲斐ないですわ…！」

「そんなことないぜ、慧理那！」

重苦しい空気の中、総二は勢いよく立ち上がると慧理那のツインテールを掌で掬い上げた。

「俺は、いや俺たちは十分、慧理那のことは認めているよ。エロ本のことはその…確かに残念だったけど、その心だけで俺は満足だよ」

「で、ですが…お姉さまにも喜んでもらいたくてやったのに…これでは意味がありませんわ！」

「テイルファイヤーだつてレイチエルちゃんだつてきつと分かつてくれるさ。あの人たちも、会長がそんな行動に出てくれたつてだけで嬉しいはずだよ」

そう励ます総二であつたが、どういう訳か脳裏には光太郎が現れては邪魔をする。さらに、昨日の切り傷のことが頭をよぎりそうになつたため、慌てて打ち消した。

「…俺たちだつてそうさ。今まで慧理那が、テイルイエローが邪魔だつて一度でも言ったことがあつたか？ 俺たちは会長のその心意気だけでお腹いっぱいだよ」

それでも、と総二は言葉を繋げる。

「それでも距離を感じているなら、ツインテールを思い出してくれ。

「これがいつも、俺たちを繋いでいるじゃないか！」

「つ…ツインテールが…」

「ああ！ それ俺たちと会長の絆を繋いでいるんだからさ！」

「み、観東君……………」

「会長———！！」

なにやら甘い空気がプンプン匂ってくるが、そうはさせるかと叫び声と共に総二を押しつけ、愛香が会長に抱き着いた。

「きゃあ!? つ、津辺さん!？」

「ワタシたち、トモダチ！ ダカラ、ナカヨシ!! ネット!？」

目の前でハグをしている幼馴染はどうとう野生に返りすぎて、喋る言葉も片言になってしまったのかと総二は一瞬だけでも疑ってしまった。

「そーじばかりに頼らなくなつていいんだからねっ！ あたしだっているんだからね！」

「は、はあ」

「それに！ 困ったときは愛しのテイルファイヤーにもつと頼ったほうがいいとあたしは思うわ！」

「で、でも…お姉さま方にあまり迷惑はかけたくは…」

「それが駄目だと思ふのよっ！」

ずいっと愛香が慧理那に詰め寄った。

「そうやって変に壁を作ったって、あの子達と親しくはなれないと思うわ！ 会長が今まで以上に親しくするには、下手に敬うことをやめて、もつとフレンドリーになるべきだってあたしは思うわ、ええ!!」

「そ、そうでしょうか…?」

「そうよ！ 総二だけに頼らなくなつて、あたし達仲間でしょう!？」

だから、そーじだけでなく、もつとあたし達を頼つてよ！」

「な、仲間……。そ、そうですわよね！ ありがとうございますわ、津辺さん！」

最後の言葉だけ聞けばもの凄くいい言葉なのだが、その過程がどうも怪しい。片言もそうだし、さっきの総二と慧理那のやりとりも面白くなそうな目で見えていたことだし、そのことを総二は気づいていな

かった。そしてそれはトウアールも同じようであった。

それは愛香達の目論見であった、『エロ本を通して女性に興味を持ってもらおう』作戦は完全に失敗に終わってしまったことを悟ったからかもしれない。さつきまで総二の手はしきりに慧理那のツイントールばかり触っていたし、話す言葉は相変わらずツイントールのことばかり。総二お得意の本人しか理解できないツイントール理論も飛び出してしまったし、事態は結局、何も変わらなかったのかもしれない。

「慧理那さん。渡したいものがあるんですよ」

だが、トウアールは慧理那の元へ近寄ると、白衣のポケットから何かを取り出し、そつと手の上へと乗せた。

「これは…?」

「私たちが使っている多機能通信デバイス、トウアルフォンです。慧理那さんの分が完成いたしましたので、お渡しします」

それは慧理那専用で作られたトウアルフォンであった。今まで慧理那への通信はテイルギアを通して行われていたものの、やはり通信機器用のデバイスはあった方がいいとのことらしい。

「仲間の証として受け取っていただけますね?」

これをトウアールが渡す、ということとは慧理那を仲間だと完全に認めているというなによりの証拠に他ならないだろう。なんせこのトウアルフォンを持っているのはツイントールズに密接にかかわっている総二と愛香、それと開発者であるトウアール本人だけなのだから。

「…トウアールさん…! それに皆さん、ありがとうございますわ!!」
一つだけ、変わったことがあった。エロ本は買えず、総二は女の子に興味を持たなかった。が、今まで以上に皆の絆が深まった。それも慧理那がエロ本を買おうと、努力してくれたおかげで。

まあ、とりあえずは一件落着かな…と総二は思った瞬間であった。いきなり部室のドアが開け放たれ、一人の生徒が転がり込んできたのは。

「「?」」

部室の中にいる全員の目がひん剥かれている中、唯一まともに反応出来たのは総二だけだった。そして部室に転がり込んで、肩で息をしている生徒——光太郎に真っ先に駆け寄る。

「あ……」

だが、ほんの一瞬、総二は躊躇いのような顔を浮かべた。昨日思い浮かべてしまった疑惑——目の前にいる光太郎が、あのテイルファイヤーなのでは？ という疑惑のせいだった。

「…大丈夫か？ 光太郎？」

何とかその疑惑を打ち消すと、すつと手を差し伸べ、光太郎を立ち上がらせた。…何故かトゥアールは「どうしてあのモブが総二様と握手をぐぬぬ」といった顔で光太郎を睨んでいたが、それに気付くものはこの場にはいない。光太郎の登場のインパクトで全てが吹き飛んでしまったからだ。

「どうしたんだよ、そんなに慌てて…」

「その…匿ってくれないか？」

「はあ？」

「頼む」

心底疲れていそうな顔でそう語る光太郎に、並々ならぬ事態を感じる総二。そのとき、ふいに部室のドアの奥から誰かの声が聞こえてきた。

「おい、そっちにはいたか？」

「いや、いないぞ」

「くっそう、昨日は裏門から逃げたらしいが…」

「今日は逃がさないからな！」

「そうよ！ 会長に近寄る悪い虫は一刻も早く追っ払わなきゃ！」

「ふひひ」

さつきまでゆつたりとしていた部室の空気が一気に凍りついた。その影響は凄まじく、普段は顔をしかめないトゥアールですら、生理的嫌悪なのか顔を強張らせている。

「……」

ドアの向こうでは聞き取れないが、不機嫌そうな会話が聞こえてお

り、光太郎だけでなく総二や愛香も居た堪れない表情となった。

こんな光太郎の顔は、尊に婚姻届を投げつけられたりしている時にしか見た事がない。…つまり、事態はそれほどまでに深刻と化しているという事を表していた。

「…頼む。ほんの少しの間だけでいいんだよ」

そんな雨の中で佇んでいる子犬のような声で頼まれては、流石の総二も断る訳にはいかなかった。最近、エレメリアンよりも人間の方が怖くなっていると感じながらも、数日前と同じように光太郎を部屋へと招き入れるのだった。

※

それからしばらくの後、光太郎はぐったりとしながら、出されたお茶を力なく飲んでいた。そして数十分後、ようやく廊下が静かになると、盛大にため息を吐いた。

「その…大丈夫か…？」

「全然大丈夫じゃねえ」

「…ごめん」

「いや…いいんだよ、うん。大丈夫だからさ…」

「…！」

光太郎は泣きだしそうな声と共に総二を見るが、またもや総二は一瞬、戸惑いを見せてしまう。

「…どうしたんだよ総二？ お前、今日ずっと変だぞ？」

「！ い、いや…そんなことないけど…」

「…でも、なんか変じゃないか？」

「いや、俺は別に…！ だ、大丈夫だからさ、うん！」

「……………」

きよとんとしている光太郎から慌てて視線を外す総二。何だか変にぎこちない総二に対して、光太郎も違和感を感じ始めている。

「……そ、そうだ！ 会長からの差し入れがあるんだ、食ってけよ！」
「…いいのか？」

「いいってー」

そう言いながら、テーブルの上にある茶菓子を薦める総二は、目の前にいる友人のことを注意深く観察し始めた。

(腕の傷だけでは判断できないって昨日決めていたけど…こう見ると…いや、でも…?)

いくら、昨日の件で『光太郎Ⅱテイルファイヤー説』がにわかには信じられないとしても、一度意識し始めると芋蔓式に次々と疑惑が思い浮かんでしまう。

いくら腕の傷だけで判断してはいけないとしても、言葉づかいや振る舞い、リアクションや仕草。そんな細かなことですら、総二は怪しく見てしまう。考えれば考えるたびに思考の海にのめり込んでいく。

本当なら昨日の傷を改めて確かめたかったのだが、その傷はすっかり包帯で隠れている為、見ることは出来ないでいる。

(まさか…?)

まさか自分以外に、しかもクラスメイトがテイルファイヤーの正体…半ば信じられないどころか暴論もいい所だが、それが成り立ってしまうかもしれないのが恐ろしい。

なんせ総二たちがいるクラスは、他のクラスと比べても奇人変人の巣窟とかしているし、ツインテイルズの関係者のほとんどが集結してしまっている。そこにもう一人くらいいてもおかしくないんじゃないかな? とも思えてしまう。

(…仮に…仮にだ。もし、本当に、光太郎がテイルファイヤーだとしたら…俺たちの正体を知っているんだらうか?)

それは総二が一番気にしている所だった。

仮に光太郎がテイルファイヤーだとして、この場にいるメンバーの正体を知っているのだらうか? この部に身を置いているのも単なる親切心だけでなく、何か他の意図があつて…例えば、総二たちの行動の監視をしやすくするためなのだらうか?

マネージャーであるレイチェルは『テイルファイヤーは自分の正体を自分の意志で明かそうとしている』と言っていた。…それは何か、

正体を明かせない理由でもあるのだろうか？

自分たちが成長するまで、待っているからか？ レイチエルとトウアールは旧知の仲であるから、もしかしたら彼女らも何かを隠しているのか？ …いや、もしかしたら、ダークグラスパーとグルで、実は敵のスパイなのでは…？

(…そうじゃないだろ！)

ぶんぶんと首を振って、浮かんでしまった考えを拭い取る。いくらなんでもそれはありえない。彼女は最初から自分たちを助けてくれている、共に戦ってくれている。見返りを求める訳でもなく、自分たちと同じでツインテールを守る為に。

「…なあ、光太郎」

「？」

そして総二は真偽を確かめるために、ある質問をすることにした。この際、テイルファイヤーの目的は保留しておく。今は目の前にいる人物がテイルファイヤーなのか否なのかを確かめたかった。

「俺の…右腕を見てくれないか？」

「…右腕？」

「ああ、右腕だ。この辺を見てくれないか？」

「?!?!」

女性陣の顔色が変わったのにも気付かず、総二と光太郎は会話に没頭する。総二が空いている手でトントンと触れている部分には、テイルレッドになる為のアイテム―テイルブレスがある。勿論、認識攪乱装置は正常に働いている為、総二たち以外の人間には見えないようになっている。

「見てくれ。こいつをどう思う？」

「どう思うって…」

「何かが、見えないか？」

「何かって言われてもな……………」

光太郎はじつと総二の右腕を見ている。そんな光太郎を総二は注意深く観察する。

(…どうだ…?)

そして全神経を集中させ、光太郎にツインテールの気配があるのかを探る。

これは一種の賭けであった。光太郎は本当にテイルファイヤーなのか、ツインテイルズに変身できるだけの属性力はあるのか、そして自分たちの正体に気付いているのか。：それらを証明するには、かつて慧理那に総二のブレスを見破られたあの状況を再現する必要があったのだ。

このブレスが見えていれば、光太郎は何らかのリアクションを起さずである。その時に感じる気配——所謂、ツインテールの気配を探る。今までは直接ツインテールにしてなければ気配は探れなかったものの、ツインテイルズとして活動していく中でその感覚は鋭さを増しており、今では直接ツインテールにしていなくてもその気配を探れるまでになっていた。

その気配で、光太郎とテイルファイヤーのツインテールの気配が一致するのかを調べる。見えていれば、光太郎はクロ——仮にテイルファイヤーでなくても、何らかの形で総二たちがツインテイルズであることを知っている可能性がある。

仮に見えなくても問題は無い。光太郎の正体を確かめる対策はいくつか考えてはある。だが、ここは多くの情報を引き出せるであろう前者の方を総二は行った。

「……………」

一歩間違えれば、テイルレッドの正体がばれるかもしれないこの状況、女性陣は戦々恐々な雰囲気で見守っていたが、光太郎が行ったりアクションは女性陣の予想とは違ったものであった。

「何だよそれ？　心理テストかなんかか？」

「…見えて、いないのか？」

「何にも見えないよ。だって総二の腕には何にもないじゃないか」

そう半笑いを浮かべながら、光太郎はカップに残っているお茶をすすった。総二は目を離さずに光太郎を観察していたが、嘘をついているようにも見えなかった。表情は相変わらず同じであったし、何かを察したような様子もなかった。更には光太郎からはツインテールの

気配も感じなかった。

つまりは——シロ。光太郎は本当に総二たちの正体に気付いていない。テイルブレスが見えていないということは、総二たちがツインテイルズであることを検討もついでいていないことを表していた。

「じゃ、じゃあさ。もう一つ質問していいか？」

「ん？ まあ、いいけど…」

「そ、そうか…」

少し拍子抜けしてしまった総二は保険にかけていたもう一つの質問をすることにした。心なしか、総二の身体は身を乗り出している。

「こ、光太郎はさ、ツイン…」

「それ以上は駄目ですよ総二様——！！」

「!？」

次に総二が何を言おうとしたのかは、トゥアールが割り込んできたことで分からなくなってしまった。

そしてトゥアールは光太郎を親の仇でも見るような視線で睨みつけると、こう吐き捨てた。

「ど、同性だからって何でも許されると思ったら大間違いなんですからね!!」

「…同性？」

「とぼけないでください！ あなたが何を思っているのかは分かりませんがねえ、総二様の始めては私が貰うんですからね!!」

そう言うとトゥアールは愛香と共に部室の隅でコソコソと会話を始めた。

「ちよつと、何あれ!? あたし、あんな反応のそーじ見たことないんだけど!？」

「…愛香さん、事態は想像以上に重くなっているかもしれません。もしかしたら総二様はその…あっち側の世界に足を踏み入れているのかもしれない…」

「あっち?」

「…BLの世界というのか…男の世界というのか…」

「はあ!?! いやいやそれは絶対ありえないわよ! あたしこー見えて

もそーじとかなり長い付き合いなのよ!? そんなそぶり一度も見せてなかったわよ!」

「だってあんな反応、私たちに一度だって見せたことあります!? あんなぎこちない反応、あのモブの前でしか見せていませんよ! この間のお茶の時だって、今回の時だって!」

「い、いや…でも、思い返してみれば、確かに…」

「でしょう!! いくらアプローチをかけても反応が薄いわけですよ。総二様の本命は女の子じゃなくてガチムチだったんですから」

「どどど…どうしよう!? あたしどうしたら…」

「とりあえず落ち着きましょう…今からでも遅くはありません、総二様をアブノーマルからノーマルへと更生させましょう! とりあえずはエロ本だけでなく、そういった知識の方から攻めていけば…」

…そんな会話をひそひそしているのだが、残念ながら当の総二と光太郎には聞こえない。

どうしても気になったのか、2人はトゥアールたちの会話をどうにか聞くために近寄ろうとするが、慧理那に止められてしまう。

「あつ! 2人とも気にしなくてもいいですから! お茶のおかわりはいかがですか!」

「あの…会長、お茶はもういいんですけれど…」

「いえいえ! まだ茶菓子がありますので、どうぞお食べになつて…!」

そして無理矢理椅子に座らせると、いらぬのに追加分のお茶がそれぞれのカップに注がれる。

「え、えええ…なあ、総二? お前さつき何話そうとしていたんだ?」

「え…ああ、そう! お前…」

「あつ丹羽君! その…私、携帯の機種変しましたのよ!」

露骨に会話を妨害してくる慧理那の顔が何故か真つ赤だったのがとても気になったが、結局、2人が何を話しているのか、そして総二が何を話したかったのかが分からずじまいのままであった。

「ちなみに、私は男の友情までは否定しない。だが、それ以上の関係は大反対だ。私の婚姻相手が減る」

「…尊先生、いたんですね」

「最初からいたが？」

「…気づきませんでした」

「ほう？…ところで婚姻届はいるか？」

「間に合っていますから、勘弁してください…」

そして、椅子に座ったままの尊の存在に、今更ながら気付いた光太郎であった。

第48話 理事長とツインテール

光太郎が何故、総二がそわそわしていたのかがどうしても理解できずに数日が過ぎた。その数日の間に光太郎の腕の傷も癒え、まだ少しだけ跡があるがすっかり塞がっていた。煩わしかった包帯もようやく取ることができて、光太郎の胸は大変晴れやかだった。

：だが、嬉しい事ばかりではない。今日を以って、遂に中間テスト開始まで一週間を切ってしまったのだ。そんなこともあつてか、今日の一時間目は体育館を使つての全校集会となつている。

その連絡事項も先生から生徒たちへの連絡はテストに向けて勉強をしろだの、節度ある学園生活をどうたらこうたらなどと、堅苦しくつまらないものばかりだ。光太郎は欠伸をかみ殺しながら周りを見ると、光太郎と同じように暇そうにしている生徒で溢れかえつていた。

こんなことの為にわざわざ体育館に来て立たされるのかと思うと、底知れぬ虚無感に襲われるのだが、多くの生徒は暇そうにしながらも、何かを待ち遠しそうにそわそわとしていた。

隣にいる総二も嬉しそうな顔をしながら待機しているし、少し離れた所では光太郎を追っかけまわしていたあの連中達も直立不動で待機している。：実を言うと、光太郎も楽しみにしているのだが。

：何故ならば、今日の全校集会では慧理那会長のスピーチがあるからだ。凛々しく演説する彼女の姿を見たいがために一同は退屈な集会を何とか乗り切ろうとしているし、入学式以来の慧理那のスピーチを楽しみにしている生徒は星の数ほどいる。それも男女問わずだ。

そうになると、会長の電話番号まで知つていふという自分の存在が何だか凄く奇妙に思えてくる。

彼女に憧れを抱いている生徒は大勢いるが、果たして連絡先まで知つている生徒は何人いるのだろうか？　：まあ、慧理那から見れば、あくまでも自分は知人の一人でしかないのだろうか。

光太郎が並み居る生徒たちを出し抜けて、慧理那の特別な人間になれる可能性は限りなくゼロに等しいのだろうか、変に親しくなりすぎて例のおっかけの被害をこれ以上増やしたくもなかった。：ここ数

日の間、光太郎はFBIの魔の手から逃げるスパイのような逃亡劇（総二たちの救援有りで）を幾度と無く繰り広げているため、これ以上人数が増えてしまったら、流石に対処ができなくなってしまう。

昨日は校庭のフェンスを登つての下校となったが、これ以上の難易度の帰宅が光太郎には想像できない。お次はターザンでもやらなければならぬのだろうか？ それか、ヘリコプターでもチャーターして、校庭から脱出でもするのだろうか？

（きつと、例のベルトの件が終わってしまったら、自然と接点も無くなって、そのまま…つて感じに違いなだろうな。後は部室で少しくらい顔を合わせるくらいだけれど…テスト期間が終われば、あそこを使うってこともないだろうし）

もしそれが覆されるようならば、余程のことが起こらなければならぬと思うのだが――。

「――生徒諸君、おはよう。さて、衣替えの時期を過ぎた今ともなれば、結婚したいと思う者も出てくることだろう。どうだ、ここらで私の婚姻届が欲しい輩はいないか？」

「メイド長、そろそろ！ 慧理那樣のご講話が始まりますので!!」

「おい、ちよつと待て！ そろそろって私は十秒も喋っていないのだぞ！ あ、こら離せお前ら、私はまだ」

「いいから下がりましたよう！ いやむしろ下がってくださいお願いしますから!!」

「いや待てお前ら！ 数秒、数秒だけでいいから時間をくれ！ それさえあれば10人くらいには渡せるから――」

…先生たちから『節度ある学園生活を』という注意があつたばかりなのに、まさかその先生そのものが節度を大気圏外まで遠投するのは。

誰が、とは今更問わない。部下のメイド数人がかりでフェードアウトしていった尊先生の奇行は今に始まったことじゃないもの。

さて、気を改めて慧理那会長の番だ。皆と同じようにワクワクしながらも待っていたのだが…：会長の姿が壇上に現れた瞬間、光太郎はバツドに殴られたような驚きを感じた。それと同時に、幻でも見えてい

るのかと瞬きを数度したが、目の前の現実是不変ならない。

「……………?!?!?」

それは隣にいる総二も例外ではない。総二は『神は死んだ』とばかりに啞然と目を見開き、壇上の慧理那をまじまじと見つめていた。

そのリアクションも無理はないだろう……今現在、慧理那会長の髪型は、いつもみたいなツインテールではなく、見事なストレートロングへと変わっていたのだから。

いかなる時も美しく佇んでいたあのツインテールが解かれたことは、人類最高クラスのツインテール愛を持つ男子にはあまりにも残酷すぎる光景だったのかもしれない。

「あ、あの……何か、おかしいでしょうか……?」

呆然としている総二と驚いている光太郎が目にとまったのか、不思議そうに掌で髪を掬い上げる。

「そ、そんな……」

髪の毛のフワツと舞い、その一つ一つがパラパラと落ちる動きに光太郎は思わず見とれてしまったが、それを見た総二は更にショックを受けてしまったのか、全校生徒がいる中でも構わずに膝から崩れ落ちてしまった。そして力の限り、体育館の床にその拳を叩きつける。

「くっそおおおおおおお……！ 俺は、俺は大切な髪型ひとを守る
ことが出来なかったああああああああ……!!」

…ルビがなんかおかしいぞとか、別に総二がそこまで責任を感じる必要はないだろうとか、全校生徒がいる中でその奇行だけは辞めておけ、など色々親友にツッコみたくなったが、あまりの落ち込み様に光太郎も声をかけられなかった。

…もし、光太郎が総二の正体をテイルレッドだと知っていたのならば、その理由も十分に理解できたのだが。

数ある激闘を通して総二は、自分はツインテールにふさわしい男になれたと信じていた。せめて心だけはツインテールを名乗るにふさわしい人間になれたと思っていた。この前のエロ本の一件を通して、絆が深まったと思っていた。

だが、目の前の現実はどうだ。自分は近くに居た会長のツインテール

ルを守ることが出来なかった：ツイントールを守れなくて、何がツイントールズなんだ：！　といった悲しみに打ちひしがれていたのだ。自分は変身しなければ、仮初めのツイントールにならないければ、あまりにも無力な存在なのだ——と、いった絶望を味わっていたのだ。（でも、なんで会長はツイントールをやめてしまったんだろう？）

：だが、そんな総二の事情を露ほども知らない光太郎は、友人の奇行よりもどうして慧理那がツイントールを解いてしまったのか、という方向への興味へと移ってしまった。

光太郎は、昨日の内に慧理那の属性力が奪われてしまったのか：？と考えたが、そうであったならば昨日の内に自分はアルティメギルと戦っているはずだ、とその可能性を否定する。自分が戦っていないくても、その動きが何らかのメディアに露見してははずだ。だが、そのような動きはなかった。ニュースどころか、学校でもその手の話題を耳にすることはなかった。

（：まあ、確かに会長はアルティメギルに狙われまくっているし、いつそのこと解いちまうっていうのも、身の安全の為なのかもしれないけれど……）

第一に考えられるのは、会長自身の身の安全の為に辞めてしまった、ということだ。

アルティメギルのターゲットはツイントール。今やツイントールはメジャーな髪型へとようになってきてはいるものの、奴らはより素晴らしツイントールを、純度が高い属性力を奪おうと躍起になっている。

会長は普段から見事なツイントールをしているせいで、恐らくは相当純度が高い属性力をその身に宿しているはずだ。：それ故か、慧理那はアルティメギルのターゲットにされやすい。

初めての戦いの時も狙われていたと語っていたし、クラブビルディ戦の時だってあわやといった所まで追い込まれていた。これまでは何とか会長を救出できていたが、それが今後も続くとは限らない。

だから奴らとの接触を避ける方法として、一番手っ取り早い対策法の一つがツイントールを解いてしまう：すなわち、人前でツイントールをすることを辞めてしまうことだ。こうすれば、少なくとも今まで

よりは狙われる確率は下げられるだろう。

「くそお！ くそおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

この件に関して、総二ほどではないが光太郎自身もショックを受けていたが：それも仕方あるまいと思ってしまう。一番大切なのは慧理那自身の身の安全だ。こればかりは背に腹は変えられない。

(…それに、今の会長も可愛いと、思うし)

ツインテール姿の慧理那しか見てこなかったせいも、壇上に上がっている今の姿が新鮮に見えてくる。

そのギャップのせいなのか、心の中で「これはこれで」といった感情が芽生えつつあった。

普段は目にするのではないストレートの髪を掬い上げる動作。あの動作は光太郎にとって、札付きの不良が子犬を救い出すくらいのギャップを感じていた。ツインテールの会長は勿論可愛いが、今の慧理那もまた、普段とは違った感じで可愛く見えてくる。

いつもの会長はツインテールだからこそ、また違った世界が見えてくる。

…それにこの仮説が間違っていて、他の理由の為にツインテールを辞めたとしても、俺たちにそれを止める権利はない。それは会長が自分で決めたことなんだから。そう、大切なのは『どうしたいか』なのだから。

だって、ツインテール好きな人間が他の髪型にしてはいけないといった法律などこの世には存在しないのだから。例えば、ツインテールな女の子がたまにはポニーテールになったりしても構わないはずだ。自由とはそういうものなのだから。

(……………総二には悪いけど、俺は今の会長も悪くないと思うよ)

床に蹲って放心寸前の総二を尻目に、そう言えば最近、会長がアルティメギルと遭遇するのを見ていないな…とぼんやり思ったその矢先。

「慧理那」

「！」

体育館中に響いたその穏やかな美声に、光太郎は何とも言えないよ

うな鋭い感覚を味わった。先ほどのショックとは違う、まるで強力な電流が身体を駆け巡るかのような強力な感覚だった。

…その感覚の正体を、総二は『ツインテールの気配』と呼んでいることを光太郎が知るのには、もう少し先の未来の話だ。

「下がりなさい、慧理那」

コツコツ、と壇の床の上を歩く音が聞こえるたびにその感覚は鋭さを増していき、遂には光太郎の身体は甲高い警報を発した。あまりにも強力すぎる刺激で、身体が悲鳴をあげているのだ。

「今のあなたに、生徒の長として説する資格などありません」

「…お母様!!」

——その人物の名は、神堂慧夢^{えむ}。

慧理那が母と呼ぶ人物にして、この学園の理事長でもある人物だった。

慧夢は、幼い慧理那の姿をそのまま成長させたような風格を漂わせており、勿論その髪型もツインテール。

…だがそのレベルは、娘である慧理那を圧倒的に上回っていた。ツヤ、滑らかさ、髪質や長さ…それら全てが理事長と完全に調和している。理事長が掲げる信念までもが具現化されたかのような凄まじきツインテールだった。

まるで熟成されたワインが年代を重ねることに味を深めていくのと同じように、そのツインテールも決してにわか仕込みでは辿りつけない領域まで到達していた。

「……………」

光太郎は玉のように浮かぶ汗を拭いながら震えていた。そして、自分を必死で押さえつけていた。ツインテールという自分を暴走させる本能を、理性という鎖で縛り付ける。

…それでもしなければ、きつと理事長のツインテールのせいで俺はとんでもない行動を起こしかねないから。

「はあああああ……!」

例えば、隣の総二なんかは突如立ち上がって静かに闘志を漲らせている。

…お前、つい数秒前まで地面に蹲っていなかったか？ 何、しれつと何事も無かったかのように立ち上がって、壇上を眺めながら気合貯めなんかしているんだよ？ 叫んだかと思えば喜んだりと…今日はいつもより増して、俺の友人は情緒不安定だ。

「ああ…あたしが、あたしがもつとしつかりしていれば、そーじもあんな行動をとらなかつただろうに…」

「ちよ、ちよつと愛香どうしたのー!？」

…そんな総二を見ながら、愛香さんは泣いていた。勿論それは感激の涙ではない、己の行動を悔やんでの涙だった。

だが騒いでいるのは総二たちのほんの一部で、体育館は咎める理事長とそれを見据えている慧理那に支配され、皆一様に押し黙っている。

「何故、ツインテールを解いたのです、慧理那？」

「私は何度も怪物に狙われています。解いたのは、ツインテイルズに迷惑をかけないためですわ」

「それらしいことを！ 母の目は節穴ではありませんよ、慧理那！」

「お母様…！」

がなり立てている訳ではないのだが、理事長が言葉を発するたびにビリビリと空気が震える感覚がする。これも、理事長のツインテールが巻き起こしているのだろうか。

「…百歩譲って、怪物の驚異に怯えツインテールをやめるのならば…母として、娘の安全を願うのは当然です…多くは言いません。ですが慧理那、あなたがツインテールをやめたのは、それだけではないはずです!! ツインテールを守り戦う少女たちを心の限り応援したいと願ったあなたの気勢はどこへ行ってしまったのですか!？」

そう言われた慧理那の顔が強張り、何故か総二や愛香さん、トゥールさんも同じように強張っていた。

「…家の事情を皆様の前でお話するわけにはいきません。お母様、二人つきりでお話がしたいですわ。理事長室は空いていますか?？」

「…いいでしょう。そこでじっくりと家族会議を行いましょう」

そう言うとう理事長は言葉短く「娘が失礼をいたしました」と明るく

述べ、そのまま壇上を降りていった。慧理那も手短かにスピーチを終えると、後に続くように壇上を降りていった。

「……………」

残された生徒たちはただ黙っていることしかできなく、嵐が過ぎ去ったかのように呆然としているしかなかった。

数少ない例外として悔しそうに顔を歪ませているのは総二たちであつたが、そんな総二たちですら、光太郎が歯を食いしばり、拳を固く握りしめていたことには気付いていなかった。…そしてそれは、光太郎自身も恐らく気付いていなかっただろう。

※

「一時間目の体育は自習だ」

全校集会が終わった途端に尊の口から発表された突然の命令に戸惑うものの、クラスメイト達が律儀にグラウンドで適当な授業を行う中、光太郎を含んだツインテール部の面々は部室へと集合していた。幽霊部員である光太郎も例外なく蒐集されたということは、今回の慧理那の件は相当な危機であることを示していた。

「その…光太郎、ごめんな。こんな形でツインテール部の活動に関わらせるなんて…」

「いや…曰ごろから世話になつているから、これくらいは別にいいんだけど…」

「そ、そうか」

「おう…」

光太郎は別に休学など今後の学生生活に支障が出ない範囲であれば、総二たちの手助けはしてもいいと思つている。特にここ数日は総二たちには口だけでは返せない恩があるし、ここらでそれを返してもいいと思つたのだ。…それに、あの理事長のことも少し気になつていたことだし。何故、ツインテールを辞めただけで怒るのか…それをどうしても確かめたかった。

「さっきのあれ、何があつたんです？ どうしてお母さんがでてる

んですか？ 会長の縁談の妨害は失敗したんですか!？」

「縁談？」

「…ああ、そういえば、光太郎は知らなかったな。なんでも会長は…」
すると、総二の口から神堂家の家庭事情を手短に説明された。婚約のことや掟のこと、そして慧理那のツインテールのことも。

「……………漫画みたいだ」

端折れる所は端折つての説明だったが、それだけでも神堂家は色々
と面倒な家庭なのだ、と感じる。一般家庭で育った身分から見れば、遠い世界の話みたいだ。

本人がいない中で勝手にこんな話を聞いてしまつていいものかと思つたが、そうでもしなければこの話についていけなくなる為、これは不可抗力なのだ、と無理矢理納得させることにする。また、後で慧理那本人にも謝つておこうと心の中でそう誓つた。

「この前の縁談はな、密偵に調査をさせたら相手がロリコンだったのだ。奥様に報告するだけでその縁談は破談になったよ」

「ええつ、なんでもつたいな」

「…」

「あつ、すみません…」

トウアールさんのその発言を、尊は婚姻届をちらつかせることで黙らせた。

…もう尊先生の婚姻届は、婚姻届という名の伝説の武具と化しているのかもしれない。ちらつかせるだけで相手を威嚇させるだなんて。彼女ならばこの間戦つたオウルギルデイといい勝負が出来るかもしれない。

「しかし、慧理那様がエロ本を買いたがつてアドバイスを求めているのが耳にも入ってしまったようだな。半信半疑だったらしいのだが一昨日、慧理那様のパソコンの検索履歴を見られてしまったようだな…そこから事態は急変した」

「うわあ……………」

愛香さんがすっぱい顔をしながら頭を抱えたが、それは光太郎も同じだった。

パソコンの検索履歴を見られる、この行為は『されたら嫌な精神攻撃』では常にベスト10入りする程のものだろう。他人に自分の趣味や性癖が見られるのが気持ちいい奴がいるはずがない。ましてや、その趣味が一般受けしないものだった場合なんかが特にだ。内容が内容ならば、不登校になつてもおかしくない代物だ。

確か少し前に慧理那さんと校門前で会った時、パソコンにフィルターが…などといった話題が上っていた。フィルターにひっからないようにと、あれこれ検索した履歴を全て見られてしまったのだろう。…やべえ、考えただけでも死にたくなってきた。

「その件につきましては私にも責任がありますし、よかつたら理事長に『あなたが慧理那さんの同じ年頃にエロ本を見たことがありますか』どうかを聞いただけさせてみますか？」

トウアールさん、あなたなんてことを言うんですか。トウアールさん的には理事長に目くそ鼻くそを…といった行為をやりたいらしいのだが、そのお題がエロ本って…。

その恐ろしいまでの提案を尊はやんわりと断り、話を続ける。

「…いや、奥様は怒ってはいないのだ。少なくとも、エロ本の件に関してはな」

「え？」

「むしろ喜んでいた。ヒーローのことばかり夢中になつて性教育が遅れていた娘が、ようやくそういつたことに興味を持ち始めてくれたのだと」

「…そんな理解度があるのに、どうしてパソコンにフィルターをかけるんですか？ 別にいらぬ気が…」

「いや、それはお館様が…つまりはお嬢様の父君である、神堂栄華様の希望なのだよ。これがまた子煩悩がスーツを着ているような人でない一人娘である慧理那様に悪影響を与えたくないパソコンなどにも観覧制限を…」

気持ちちは分からんでもないのだが、慧理那さんはもう高校2年生だ。あと数年でお酒が飲める齢になるのだ。いくらなんでもそこまではやりすぎな気が…。

でもそうになると、不可解なのはあの体育館のやりとりだ。

「じゃ、じゃあさつきあんなに怒っていたのは…」

「慧理那お嬢様が怒って、ツイントールを解いてしまったからだろうな…神堂家では親の顔を殴る事よりも、意味も無くツイントールを解く方が重罪なのだ」

「お金持ちのお家って難しいんですねえ」

「…あんたさ、ツッコむところはそこなの？」

呑気な発言をするトゥアールを呆れたような顔で対応する愛香。

「慧理那が言っていた家訓でツイントールにしているって話、本当だったんですか!？」

「お、おう…しかし観束、お前なんでそんなことを知っているんだ？」

「え、いや…その件に関しては相談されたことがありまして…」

…もう訳が分からないと、光太郎は頭を抱え始めた。

ツイントールって…髪型の一つだよな？ 掟がどうこうとか、殴る事よりも重罪とか…ツイントールってもっと…こう…そんな意味じゃないような…。

「縁談話は私たちが水際で防いでいたが、それでもお嬢様はかなり前から悩んでいたそう。それで昨日、奥様がエロ本の件を持ち出してな。性に興味が湧いたのなら、結婚して子供を作ればいい、と。それでお嬢様の堪忍袋も限界に達したらしい」

…なるほど。ようやく理由が分かった。慧理那さんは母親である理事長に刃向う為にツイントールを解いたのか。

あの真面目な慧理那が怒るということは、相当なまでの怒りだったのだろう。しかも、慧理那には愛しの存在であるティルファイヤーがいるのだから、その怒りも尋常ではないのだろうが…当の光太郎はそのことを微塵も気付いていないのが悔やまれる。

「もつと、俺が会長と相談をしていれば…」

「いや、これは私たちの責任だ。お前らと出会う遙か前よりお嬢様に仕えていたのに、その悩みから救ってやる事が出来なかったのだからな…」

尊はそう言うと項垂れてしまうが、愛香が慌てて支える。

「…なあ、光太郎。2人は理事長室にいるんだよな？」

「ああ、確か…会長がそう言っていた。理事長室で話し合いたいつて…お前、まさか…」

総二の決意に満ちた顔を見ながら、光太郎はどこか嫌な予感があった。そして、それはものの見事に的中することになる。

「…ああ、そのまさかき。そこへ乗り込む…！」

このままここでもぼやぼやしていると、手遅れになるかもしれない。総二たちツインテール部一同は、残り一人の部員を救う為に理事長室へと走るのだった。

※

まだ授業中ということもあつてか、廊下は物音一つない。校舎とは反対方向に位置し、特別さを分かりやすく示したような理事長室の豪華な扉の前で光太郎たちはたどり着いた。

「…何であなたもついてきちゃったんですか？」

「えっ？…いや、ノリというのかなんというのか。」

「…まあ、私はあなたが総二様とふれあわなければ、別にどうでもいいんですけどね」

「あ、はは…そうですか…」

「ええ。総二様の初めてはあなたなんかには渡しませんからね」
「……………はい」

トウアールさんから言わしてみれば、光太郎は戦力にも値しないのだろう。確かにこの場にいる面子で、一番頼りなさそうな人物の筆頭には上がるが…そのきつい言い方に光太郎の心は早くも壊れそうだった。

すると頑丈そうな扉の向こう側から、2人の激しい言い争いの一部始終が漏れてきた。

『私の態度が悪いから結婚を早めようなど相手方にも失礼ですわ！』

私は決められた相手との結婚したいだなんて微塵も思っていない
!! それにお母様は結婚の件は反故にしてもいいと言っていたでは

ありませんか!!』

『あれも駄目でこれも駄目が通ると思いますか！ 結婚の件を反故にしたのは、2年間しつかりと生徒会の仕事を勤め上げるという前提があつてのことです！ 学生の自分を全うするという約束すらも守れない今のあなたにそんな言い訳は通じません!!』

『ですから私には他にやる事が…!』

『ではあなたがたびたび門限を破つたり、夜間、無断で外出することについて説明は出来まして?』

『そ、それは…だから…やることがあるのですわ…:…:…』

どうも、慧理那さんの歯切れはよくないようだ。

『…それに性交のことに興味が出てきたのなら丁度いい機会ではありませんか』

『なっ…:…酷いですわお母様！ 実の娘をそんな風に見ていましたの!?!』

『あなたのパソコンの検索履歴を見てしまったら、他にどう見ろというのですか!?!』

…そりゃあ、エロ本関連の情報まみれの検索履歴を見てしまったら、そう思わざるを得ないだろう。

『いいから素直に母の言う事を聞きなさい！ 殿方との結婚は絶対！ 断じて覆しは出来ません！ ツインテールを解いたのは許されざることですが、母は少し安堵しています。今のあなたの未熟なツインテールでは、ご先祖様に顔向けが出来ませんから!!』

…その言葉を聞いて、光太郎は無意識の内に握り拳を固めた。そして総二もまた、覚悟を決めた。2人とも、もう我慢の限界だった。『いいか皆。これから俺は理事長室へと乗り込む』

言つていい事と悪い事があるが、理事長のあの発言は間違いなく後者に当たる。そしてそれを聞き逃すことは、光太郎にとっては出来なかつた。まるで最初の変身時のような不思議な感覚と共に、光太郎の心は怒りに燃えていた。

「皆は絶対に入つてこないでくれ。理事長に刃向うのは俺一人でない、最悪、退学になるかもしれないからな…!」

「そーじ、あんた…！」

そして自分の身体に、怒りという名の燃料が注ぎ込まれる感覚を光太郎はしっかりと感じていた。そのせいか、総二が皆に向けて言っていた注意を光太郎はすっかりと聞き逃してしまっていた。

「…いいか、絶対だぞ!!」

そして総二は突き倒すがの如き勢いで理事長室のドアを開け放った。討ち入りでもするかのような決死の表情で中に踏み込んだのだが…ここで予想外の事態が起こってしまう。

「!?」

「ちよ、光太郎?!」

なんと光太郎が飛び込んだ総二につられて、共に理事長室の中へ入ってしまったのだ。

慌てて愛香達が止めようとしたが、扉が閉められる寸前に身体をねじ込むかのような勢いで入ってしまった為、それを止めることも叶わなかった。

「何やっているんですかあのモブはく〜!!」

「テンパっちゃって、飛び出しちゃったのかしら…いや、光太郎ならあり得るかも…! どうする!?! 今すぐこの扉を蹴り飛ばしてでも侵入する!?!」

「いや、ここは鋼鉄をも溶かす毒薬で扉を溶かして殴り込みを…」

「いいから落ち着け貴様ら!」

慌てふためく愛香とトウアールを尊が一喝させ、事態を落ち着かせる。

「…入ってしまったのならば、もうどうしようもない。私たちに出来ることは、あいつらを信じて待つことだけだ。これ以上の侵入は観束も望まんだらう」

「で、でも…! そーじならともかく、光太郎は何にも関係がないのに…!」

「あのモブがこれ以上しやしやりでたら、ますます総二様がBLの世界に足を…!」

「何、あいつらなら大丈夫さ…この私が、何が何でも婚姻届を渡すと決

めた男たちなのだぞ？」

説得力があるのかないのか分からない言葉を聞きながら、残された面子はただただ閉ざされた扉を眺めるしかできなかった。せめて、大事にはならないようにと祈るしかなかった。

※

「慧理那!!」

「失礼します!!」

「:誰ですか、ノックもせず!!」

いきなり雪崩のように入り込んで来た2人を理事長は糾弾するが、総二も光太郎もそれで止まるほどの男ではない。

「ふ、2人とも:」

乱入してきた総二と光太郎を見ながら、慧理那はうつすらと涙を浮かべていた。その光景に総二は拳を握りしめた。

「馬鹿、来るなって言ったのに」

「悪い:我慢できなくて:」

忠告を無視して乗り込んでしまった光太郎に総二は苦い顔をするが、乗りかかった船だ。こうなってしまったら、最後までやるしかないだろう。それが例え、他人の家の事情に首を突っ込むとしてもだ。

「お:」

「1年の観束総二です!娘さんのツイントールの件のことで話があります!!」

「:ほう?」

無礼を承知での殴り込みにも、意外にも理事長は耳を傾けてくれた。「すみません。さっきの話、聞いてしまいました。ですが、理事長が慧理那のツイントールを未熟だと言ったことがどうしても納得がいかなくて!」

そう言う総二は理事長に面と向かって話しているが、光太郎は黙ったまま下を俯いていた。総二が先に話してしまったため、話すタイミングを完全に逃してしまったためだ。意気揚々と乗り込んできた割

には何とも情けなく、気まずいことこの上ない。もしかしたら総二は光太郎は何の関係も無い事を証明するために、わざと話すタイミングを奪ったのかもしれないが真実は定かではない。

「…観束君に丹羽君。あなたが来てくれたことは大変嬉しいですが、さすが観束君、神堂家の女はツイントールにするのは家訓だと前にも話したはずですよ。こうすることが一番の意思表示なのですわ」

「…」

総二が悔しそうな顔をする中、俯いていた光太郎もまた、眉間にしわを寄せる。

「…ふむ、慧理那。彼らは家の事情を話すほどに信用している人物なのですね？」

「え…いや…」

「ええ、結構です。そうでなければ、彼らはここまで乗り込んで来ませんものね」

慧理那は自分のツイントールの事情は光太郎には話していないのだが、理事長はそれを勘違いしてしまったようだ。慧理那が訂正しようとするが、そのまま遮られてしまう。

「ふむ…」

値踏みをするような目で総二と光太郎を見るが、それもほんの一瞬。

「ですが、あなたたちに言われるまでもありません」

「…」

底冷えがするほどの声と共に理事長は椅子から立ち上がり、更に強い視線を2人に浴びせる。そこから感じる、恐るべきほどの気配にガクガクと膝が震えた。

ワイバーンギルデイヤリヴァイアギルデイクラスの幹部級エレメリアンと対峙した時と同じ感覚がする。属性力が肌を突き刺し、心臓を握り絞められたような感覚がする。

改めて、この理事長はとんでもない人間だと思ふ。いや、本当に人間なのだろうか？ ツイントールを極めると、人はここまでの領域にまで達することが出来るのだろうか…？

「無論、親ならば娘のツインテールは誰よりもよく見、よく知っています。私が未熟と言ったならば、慧理那のツインテールは未熟なのです！」

「〜！ それは!!」

もう我慢の限界だと総二は口を開きかけるが、それよりも早く光太郎の中で何かが弾けた。

自分の理性を縛る鎖が1本、また1本と千切れていく感覚がした。押さえつけていた反動で、何かが弾きだされる感覚がしてくる。まるで地表に出てこようとするマグマみたいに、普段は押さえつけている並々ならぬツインテールへの想いが解き放たれようとしている。

「…!!」

光太郎は自身のそれを慌てて止めようとするが——間に合わなかった。そしてそのまま腕を振るい——。

——ドン!!

「?!?!」

今まで黙っていた光太郎が力任せに壁を殴ったことに、理事長室にいる誰もが驚いた。普段は温和な性格である光太郎をよく知る総二と慧理那は勿論のことだが、あれだけの威圧感を発していた理事長ですら丸い目で光太郎を見つめる。

「……………それは、違いますよ…それはあまりにも傲慢すぎますよ…！」

まるで野生動物が唸るような声と共に光太郎は顔を上げた。

「…に、丹羽君…?」

「お、おい…」

慧理那は顔を上げた光太郎を見て、驚愕していた。

——何故ならば、光太郎の目は、まるで火が点いたかのように燃えていたからだ。普段とはまるで様子が違う光太郎に、総二も黙るしかなかった。

「——傲慢、とは?」

だが、いち早く体勢を立て直した理事長は冷たい目線で光太郎を睨む。

「…！」

光太郎の倍近い年月を生きている理事長が発する威圧は、もろに光太郎一人を襲う。

ターゲツトを一人に絞り込んだせいで膝だけではない、更にカチカチと小刻みに奥歯が震え始めた。夏場なのに、歯が合わない…この恐怖に、光太郎の心の気温は数度下がった。

…だが、ここで屈するほど、今の光太郎は臆病ではない。ここ数か月押さえつけてきたツインテールへの想いは簡単には治まらない。燃えるような炎は消せない。

「…その前に一つ、聞いていいですか？」

「何か？」

「あなたは会長のお母さんだと聞いています。では、あなたのツインテールも掟というものに従ってやっていただけのですか？」

「そうですね。私も慧理那と同じように、掟に従ってツインテールにしていますわ。神堂家の女がツインテールになることは、雨の中で傘をさすくらいに当たり前な行動ですから」

「そうですねか…」

何をしようとしているのかと総二は光太郎を見ていたが、ここで何かをはつきりと感じ始めていた。

「それが何か？」

「…身内でもない他人が、しかもただの生徒が口を挟むのはおこがましいとは思いますが…一つ言わせてください」

すう、と一呼吸置いて、光太郎はこう発した。

「ツインテールとは、掟に従ってやるものじゃあない!!! ツインテールはもつと自由に救われてなきや駄目なんですよ!!!」

「!!!」

ビリビリイ！ と空気が震えた。光太郎が発した言葉は、理事長が起こす威圧とぶつかり合い、相殺された。

「…う…お前…？」

それを総二は驚愕の表情で見守る。光太郎の言葉を、片時も聞き逃すまいと耳を傾けた。…本当に、光太郎の正体を見極めたいと思った

のだ。

「理事長さん、あなたは今でもツインテールを愛していますか？ …いや、聞くまでもないでしょうね。そのツインテールは素人目から見ても、とんでもないほどの思いが見て取れますから」

「……………」

「きつと、それは掟に従うという他に、何かあなたの中で並々ならぬこだわりがあるんでしょう。だって、嫌々やつてるだけじゃ絶対にそんなにきれいにはなれませんから。もしかしたら、俺たちには分からない、あなただけが理解できる理由があるのかもしれないね」

「…何が言いたいのですか？」

「…慧理那さんにもその時が来たかもしれないということですよ。彼女自身、掟などではない、本当にツインテールになりたいという、彼女だけのこだわりが…！」

負けじと光太郎も理事長を睨みつける。

「慧理那さんの行動はあなたから見れば、許されざることなのかもしれない…ですが今回の件は慧理那さんにとって『掟』だけではない、ツインテールを愛することが出来る新たな一步を踏み出せるきっかけになるかもしれないって言いたいです…！」

まあ婚約や家訓とかはいった事は俺には分かりませんがね、と付け加える。

ここで光太郎が言いたいのは、婚約の件ではなく、ツインテールを解いたことに対する発言なのだから。

結婚の件については光太郎たちの手で変えることは難しいかもしれないが、せめてツインテールだけはどうかしたい。これでも、俺はツインテールズの一員、テイルファイヤーなのだから。

「今日、慧理那さんは誰に言われるまでも無く、自分の意志でツインテールを解いた！ ですが解いたことで、もつとツインテールのことを理解できるかもしれない！ 言われるままではない、自分の意志で行った行動で何かを知るかもしれない！ 他の髪型になろうとしたことでより一層、自分のことを好きになってくれるかもしれない！ もつと他の理由でツインテールを愛してくれるかもしれない！ あ

あなたのやろうとしている事は、ツインテールを解いただけで怒るという行為は、そういう可能性の一切合切を根こそぎ奪う事だ!!」

燃えるような瞳で、理事長の目を捕える光太郎に、微塵の迷いも無かった。ありのままの本心とその目に宿っていた。それは人一倍ツインテール愛を隠して来たからこそその想いが込められていた。

：確かにそれはあくまでも可能性なのかもしれない。もしかしたら、慧理那さんはツインテールを辞め、他の髪型に浮気してしまうかもしれない。

：だが、それらは歩み出さなければ分からないことだ。結果は出るまで勝負は分からないし、やってみなければ全ては分からない。

ツインテールの本質は前へと進むこと。今までとは違う世界で何かを学び、それを糧として進むことも可能はずだ。それが例え、ツインテールを解き、教えに背くことだとしてもだ。踏み込んだ世界でしか分からないことがあるはずだ。それはきつと無駄にはならないはずだ。

「…それと、あなたはさつきこう言いましたね。ツインテールにするのは、雨の中で傘をさすくらいに当たり前な行動だと…ならば、俺はこう返します。雨の中、傘をささずにいる人間がいてもいい…傘ではなく、他の道具で雨を凌ぐ人間がいてもいい…自由とは、そしてツインテールとはそういうことだ!!! 例え、あなたがどんなに素晴らしきツインテールをしていても…掟だからと、娘だからと押し付けるそれはあまりにも傲慢すぎる!! 第一! ツインテールを押し付ける行為こそがツインテールそのものを冒瀆している!!! ツインテールは、命じられて行う物じゃないでしょうが!!!」

ツインテールにしない人間がいたっていい、好きになる理由が違ってたっていい、動機だつてどれでもいい、男でもツインテールを好きになつたっていい。だって、ツインテールはそれらにきつと寛大なはずだから。

二つに分かれ、それらが個別に宙を舞う髪型、それがツインテール…まるで自由を象徴しているみたいではないか。

例え、慧理那がツインテールを辞めたとしても、それが慧理那の全

てではないはずだ。押し付けられるだけじゃなく、本人が真に納得してツイントールを結ぶほうが、本人にもツイントールにも幸せなはずだ。慧理那のツイントールは他でもない慧理那自身の物。決して誰の物でもない。ツイントールの物でも、アルティメギルの物でも、ましてやお母さんの物でもない。

「…だって、大切なのは『どうすればいいか』じゃない：『どうしたいか』っていうことでしょう…？ ツイントールにしたい思いも、ツイントールを解く思いも…」

「…………その言葉…!？」

慧理那は光太郎が最後に呟くように言った言葉に過敏に反応した。その言葉は、レイチェルが慧理那を奮い立たせたあの言葉と非常に似ていたからだ。

「…ああ、そうだよな、そうだよな光太郎!!」

長々と聞き入っていた総二もまた、悪友と馬鹿をするような嬉しそうな顔つきになり、前へと出る。

「俺も言いたいことがあるから言うぜ：俺は、慧理那のツイントールをあなたよりも知っています！」

「…!？」

畳みかけるような反撃に、理事長は初めて動揺が見えた。それに感づいたのか、総二は畳みかけるように追加攻撃をかける。

「誰よりもツイントールを見ているというのなら、この一月でどれだけ慧理那のツイントールが輝きを増したかよく分かるはずだ！ だけどあなたは、些細な生活態度ばかりに目が言つて、娘さんの本当の成長を見て上げなかった！ それじゃあただの口先じゃないか!!」

娘の生活態度を思い、しつつけをするのは当たり前。だが、理事長が叱責したのは慧理那のツイントールだ：ならば、より間近で見続けたきた総二に分がある。

「理事長、あなたは慧理那のツイントールをこれっぽっちも理解してはいない!!!」

「…!」

更に追加。理事長が一步後ろへ下がった。

「今、慧理那はとても大切なことをしています！ 確かにそのために学業や生徒会の仕事は疎かになるかもしれませんが！ けど、それは慧理那の人生の中でも、本当にかげがえのないものになると断言できる！」

「観束君……」

この一か月、慧理那はエロ本を自力で買おうとしたり、本当の自分をさらけ出している。それと同じように、ツイントールの魅力も増している。

ならば総二に出来ることは、ツイントールズに出来ることは、友として応援し、仲間として支えるだけだ。

「だから……今は、今だけは少しでも目を瞑ってくれませんか。慧理那ならきつと、それすらも自分の物にして、またいつもの……いや、以前よりも凄くなって帰ってきますから」

総二は、それだけを言うと、黙った。光太郎も、慧理那も黙った。理事長も黙っている。

「……………」

言いたいことは言ってしまった。もうどうしようもない、どんな処分が下ろうと文句は言えない、引き金は引いてしまった。ここまで来てしまったら、後は理事長が寛大な処分を下してくれることを祈るしかない。

「……………」少し、休憩を挟みましょうか」

「ー」

「慧理那、続きは昼休みからです。3人とも、授業へ戻りなさい。乗り込んで来たあなたたちの処分も後に決めます、今は授業中のはずでしょう?」

「……お」

「ですが!!」

総二の口から出かけた言葉を理事長が遮る。

「その時は……会議のお題を、少し変えましょうか」

「……はい、お母様」

その顔は、どこか毒気が抜けていたような気がした。

※

理事長室を抜けた光太郎を待ち受けていたのは、婚姻届を構えていた尊と怒りのあまり震えている愛香とトゥアールだった。

「この…馬鹿——!!」

「ホモ野郎は地獄に堕ちろー!!」

「ひいつ!？」

愛香さんのビンタとトゥアールさんのグーパンを紙一重でかわした光太郎は、逃げるように慌てて階段を駆け下りた。

早い所、授業に戻らなければ他の生徒に怪しまれてしまう。これはここにいる面子以外は誰も知らない、秘密の体験、誰も経験のしたことのない特殊な想い出だ。色々とはっちゃけすぎて後悔はしているが、それはここから逃げてからにすることにしよう。

「…！ ちよつと待て、光太郎!!」

踊り場に降り立つた光太郎を、総二は慌てて呼び止める。話を聞く為に、後を追おうとする愛香達を手で静止する。

「…どうしたんだ？」

光太郎はなるだけ平静を装った。確かにあの場でははっちゃけすぎたが、それでも自分の心の奥深くにある領域にだけは足を踏み入れないようと、理性を鎖で縛りつける。

総二のようにぶっ飛んだ発言はしていないと思うが、それでも今後の生活に支障が出ないようにと防壁を張る。

「光太郎、お前さ…：やっぱり、ツインテール、好きなのか？」

「…！」

遂に問われたその問いに、一瞬だけ、ほんの一瞬だけ、顔が歪んだが、光太郎は顔を戻してそのまま答えた。

「…：人並みにつてくらいには好きだよ。でも、お前には負けるよ」
乾いたような笑みを浮かべながら、そのまま総二を見る。

「あの時、俺が言えたのは当たり前のことぐらいだよ。お前のようなぶっ飛んだ発言をする勇氣も度胸も無い。ただ、俺ははっちゃけすぎ

ちやっただけさ…。俺が時々、椅子から転げ落ちちやう時があるだろう？ それと同じさ」

「でも、お前——」

「…それよりもさ、俺、早く着替えなきや。一限目にはちやんと出たいからさ」

これ以上追及されるよりも前に光太郎は話を切り上げると、そのまま階段を下り、駈け出した。それ以上この場において、総二たちに自分の心を読まれるのが嫌だったからだ。そして、総二と自分を比べてしまふことが嫌だったからだ。ツインテールを真つ直ぐ愛せる心を見るのが嫌だった。

…だって、きつと、自分の心は総二と違って、ツインテールに飢えている酷く醜いものだろうから——。

第49話 三つ首とツインテール

そしてその日の放課後、総二と光太郎は理事長に呼び出され、処分の結果が伝えられることとなった。光太郎と総二は椅子に座り、今朝と同じように理事長と対面する。

「では、今回のあなた達が犯した件につきましては……不問といたします」

…その結果は、お咎めなし。

反省文やゴミ拾いなどの罰則を覚悟していた光太郎としては、今回の件が不問となったことに対して喜んでいいのか戸惑っているのか分からない複雑な心境だったが、その動揺を表に表わさないように、努めてポーカーフェイスを保っていた。

「これはあなたたちが新入生であることを配慮した結果です。確かに私にも不甲斐ない部分はあったとはいえ、生徒が無断で理事長室に入ってくることは好ましい事ではありません。今回は知らなかったという言い訳も通じますが、さすがに2回目ともなると体面上、何らかの罰を与えない訳にはいきません。次回からはくれぐれも注意するように」

「はあ…」

総二が困ったようなリアクションをするが、それは光太郎も同じだ。理事長はまるで親戚の子供をあやすような穏やかな表情でいたからだ。何か、期待を込めたまなざしで2人を見つめているような気がする。朝のあの恐ろしいまでの空気が嘘みたいだ。

「あれから慧理那とも長い間話しましてね…」

理事長の話によると、慧理那さんと昼休みが終わるギリギリまで二人つきりで相当長い間話し込んでいたらしい。でも、慧理那さんともう泣いたりはしなかったとのことだ。

それを聞いて、光太郎は少しだけ安心した。

婚姻の件などがどうなったかとかは分からないが、これを機に神堂家のツインテールに関する掟が多少はマシになれば、と光太郎は切実に願う。オシャレはどんな女の子にも与えられた権利なのだから。

そして、それら全てをひっくり返したうえで慧理那がツイントールを好きになってくれた方が光太郎も嬉しい。

「…しかし、驚きでした。大和男子は絶えて等しいと思っていたのですが…：知らぬばかりでいるものなのですね」

「！」

ちらりと理事長の視線が光太郎を捕えると、光太郎はつい反射的に目を逸らしてしまった。

光太郎は大和魂がどうだこうだであの長つたらしい文句を言ったのではない。

あれはただ、自分が怒りをため込んだ末の、胸の中に溜まっていた鬱憤や本音が飛び出してきてしまっただけだ。しかもそれは自分の意志で解き放ったのではない、ただ怒りに身を任せ、無意識の内になんか言ってしまっただけだ。だからあれは決して勇気を出して言ったのではない、半ば暴走した故の現象なのだ。

…そう、結局の所、あれは光太郎が時たまにやってしまうツイントールの暴走の延長線に過ぎないのだ。確かにツイントールを愛しているが、それを言えない鬱憤やストレスが歪んだ形となって出てしまっただけだ。

（…俺は、総二とは、違うんだよ…）

朝の一件を終え、光太郎を待っていたのは激しい自己嫌悪と後悔の嵐だった。総二たちから逃げた後、体育の授業に出るふりをして男子トイレの個室の中に逃げ込んで何度後悔した事か。…それからの間、光太郎のテンションはずっと下降を辿っている。ここまで落ち込んだのは、ツイントールズ関連のトラブルを除けば初めてのことであった。

（…いつも、いつもそうじゃないか。一時のテンションに身を任せた結果、いつも後悔して…今まで、それで碌なことがなかったらどろ？）

だから、光太郎は己の行為を褒められてもそれを素直に認めることができなかった。普段からツイントール好きであることを隠しながら生活し続けてきた自分としては、それを褒められたり、受け入れられることにどうしても慣れていない。これは総二とは違い、光太郎の

周りには若い頃からツインテールを肯定してくれるような人物が：愛香のような人物がいなかったことも関係しているのだろう。

パートナーのレイチェルですらこの件をからかわれると少々のダメージがあるのに、ほぼ初対面の理事長から言われるとものにダメージとなつて光太郎の心を扶る。

「ツインテールを愛する心：男性として一番大切ともいえる心を2人の男子が持つているとは…この神堂慧夢、まさに感無量でしたわ」

今度は総二に向けてたおやかな笑みを向けると、総二は光太郎とは対照的に、嬉しくて堪らないような顔をしていた。

「…じゃあ、慧理那のお父さんたちも：ツインテールを愛しているのですか？」

「ええ勿論。神堂の女は代々、ツインテールを愛する男性を夫として迎えてきましたのよ」

「へえ…」

「ただ、ツインテールを好きというだけならば誰でもできます。事実、私があなたたちと同じ年の頃、口先だけでツインテール好きを豪語する男性は星の数ほどいましたわ。だからこそ、分かるのです。見えるのです。まるで太陽が輝くかの如く、ツインテールを愛するあなたたちの心が」

「……………」

理事長の言葉に表情こそ出さないものの、純粋に喜ぶ総二とは対照的に苦い感情を味わう光太郎。光太郎にとって、総二と同等に扱われるのがとても耐えられない。

何故なら、光太郎は総二ほどツインテールのことを純粋に愛することができない。胸の中にあるツインテール愛をこそそと他人にばれないようにしている自分と、当たり前のようにツインテールのことを語る総二と同じとはどうしても思えない。

…だつて光太郎は正体がばれる心配のないテイルファイヤーの姿ですら、はつきりと自分の口から「ツインテールが好きだ」と一度でも言ったことが無かつたのだから。自分の正体を隠さずに、まるで当たり前のように愛を叫べる総二が、光太郎にとっては雲の上のような

存在に思えてしまう。

(それに、俺はどう思われているんだろう…?)

更に言えば、今朝の件で総二たちが目の前にいるのに不覚にもツインテールのことを叫んでしまったことも悔やまれる。あの場にいた面々には自分が思っている感情の叫びを聞かれてしまった。目の前にいる理事長にも、隣にいる総二にも、あの時扉の向こう側にいた愛香さんやトウアールさん、しいては尊先生にもだ。

…皆は、そして総二はそのことをどう思っているのだろうか？ ツインテール馬鹿として受け入れてくれるのだろうか？ それとも、これからは気持ち悪い存在として認識するのだろうか？ それとも、別に何とも思っていないのだろうか？

…そんな葛藤もあつてか、今朝から総二との関係がどこかぎくしゃくし始めている。

急に逃げ出してしまった光太郎を敬遠してか、あまり話しかけてこなくなったのだ。事実、隣にいる総二とは理事長室に入ってから一言も口を交わしていない。

ちなみに尊先生は心配そうに「いつもより多めだからな」と、婚姻届を十束くらい一気にプレゼントしてきたが、光太郎はそれを職員室のシュレッダーでまとめて粉碎させてもらった。

「それにしても、観束…ですか」

「？ 俺の苗字に何か？」

理事長の何かを懐かしむような目に、総二は首を傾げた。

「ああいえ。少しばかり学生時代を思い出してしまいましたね」

「学生…？」

「ふふ、私とて人ですから。あなた達と同じように甘酸っぱい思い出や青春を経験して、親になっていますのよ」

…しかし、理事長の語りはどこか変な方向へと歪みだした。

「…しかし、観束…観束ですか…珍しい名字だと感じていましたがこのような偶然が…いや、まさか…あの方は『自分の子供に命天男やアルティメット有帝滅人という厳格な名前を付けるんだ』と言っていましたものね…あなたの名前は総二…優しい名前ですものね…きつと偶然が…」

「……………」

総二が何か嫌な予感を感じたのか、はたまた戸惑いを覚えたのか、光太郎と同じような顔へと変貌していく。

…その人は、一体何年先の未来を見据えて、そんな名前を付けようと考えていたのだろうか…総二もきつとそんなことでも考えているのだろうか。

「……………」

「!! は、はい!」

急にシリアスモードに戻った理事長に緊張してしまい、両者のトーンが半オクターブ上がる。

「お二人は、若いうちからの結婚をどう思いますか?」

「?」

…どうということなのだろうか? 慧理那さんの結婚に関しての質問なのだろうか?

「慧理那の婚約者たちにもツインテールが好きかどうかは十分に調べましたのですが…聞けば聞くほどにその他に難がある相手ばかりで母も悩んでおりましたのですが…:…渡りに船とはまさにこの事…!

お二人とも、娘の慧理那とけ」

だが理事長が最後まで言い切る前に、神がかり的なタイミングで2つのデバイスの音が鳴り響いた。

「!!」

制服のポケットにあるトゥアルフォンの音に驚いて立ち上がる総二と、自分の腕にあるテイルリストの音に驚いて転げ落ちる光太郎。両者の奇行に驚く理事長を置いてけぼりに、パートナーの声が伝わってくる。

『光太郎! エレミアンが来たわよ!!』

「ツインツインツインテール、ツイツイツイン、ツインテーツイン!!」

「……………は?」

…エレミアン襲来という緊張感、総二が突然発した古代ツインテール語に完全に霞んでしまった。あまりのショックで思わずレイチエルとの通信を切ってしまった光太郎は、信じられないものを見る

ような目で総二を眺める。

「ツイン、ツイツイツイン！」

総二は二言三言とツインテール語を発すると、そのまま何食わぬ顔で携帯を切る。

「理事長！ すみませんが急用ができました、失礼します!!」

それだけを言い、総二は大急ぎで理事長室を出ていった。取り残された光太郎も、早くこの場を離れなければと思います。

「お…俺も、バイトの時間が近づいていましてですね…これにて失礼します…」

短くそれだけを言うと、ぼつと立ち上がって理事長室から退散した。

「…まさか…まさか、古代ツインテール語を喋る人間が、実在したとは…ますますあなたたちに興味が湧いてきましたわ…」

あれ、実在する言語だったの？

ドアを開ける際に理事長がようやく発した言葉に猛烈にツツコミを入れたかったが、光太郎はグツと我慢して、廊下に飛び出す。このまま留まっていれば、とんでもないトラブルが飛び火してしまいそうだ。あなたもツインテール語が話せるのですか、などの超展開には光太郎もついてはいけない。

「！」

「ぎゃあ!!」

どうやら理事長室の会話を盗み聞きでもしていたのであろう、扉の近くに居たトゥアルさんや愛香さんと危うくぶつかりそうになりながらも全力で廊下を駆けだす。

(…総二って、ツインテール語で話せる友人がいるのか…)

自分とは違い、ツインテールのことを思いっきり話せる相手がいるということに、驚く光太郎。

…実際は、トゥアルフォンの音声変換機能で、ツインテイルズ関連の会話内容を一般人にばれないようにしているだけなのだが、そうと知らない光太郎は勘違いをしたまま、テイルドライバーが入っている通学カバンを持ってくるために猛ダッシュで教室へと向かうのだっ

た。

※

今回のエレミアンの出現現場は他県のイベントホール。どうやら、何かの大掛かりなイベントが行われているらしい。周囲への被害が広がらないように、また俺たちへの精神的な被害が出ない内に倒さなければ。

いきなりイベント会場にツインテイルズが現れるという混乱を避けるために、少し離れた地点に転送し、そこから自らの足で向かうこととなった。ビルからビルの間をテイルファイヤーに変身した光太郎が猛スピードで駆け抜けていく。

「……くそ」

理事長室を出てからまだ5分も経っていない内での出撃とあつてか、光太郎のテンションは憂鬱気味だ。そんな光太郎を把握しているのか、レイチエルがしきりに心配そうに通信を送ってくる。

『…あんた、大丈夫なの?』

「…何がだ?」

『ギアのコンディションが、少し調子が悪いのよ…何かあったでしょ?』

「…別に、なんでもない」

テイルギアは精神力である属性力がエネルギーとなつている。つまり、ローテンションの精神コンディションではギアの性能を十分に引き出すことはできないのだ。その為、レイチエルは心配しているのだろう。

『本当に? 学校で何かあったんじゃないの?』

「お前は母親かなんかか?」

つい、きつめな口調でツツコミを入れたが、レイチエルは笑わなかった。

『別に…そんなんじゃないけど…』

「……悪い、戦闘になったら、すぐに切り替えるさ」

少しばかり言い過ぎた、とレイチエルに謝罪して通信を切った。

(…レッドやブルーの前で、こんなテンションじゃ心配される…)

パチンと顔をひっぱたいて、無理矢理にでも気分を切り替える。そう、総二たちとの気まずさをツインテイルズの活動にまで引きずってはいけない。彼女たちまで心配をかけさせてはいけない。

今の自分はツインテールを守る戦士、テイルファイヤーなのだ。私情を挟まずに、エレメリアン退治と行かなければ…。

トン、とイベント会場付近の電柱に着地すると、大勢の群集で一杯の駐車場では何やら騒いでいる声が聞こえてくる。

「CDの初回特典の三つ編み券よ〜！ 交流者全員漏れなく三つ編みにしてあげるっ!!」

「だあああああああああああああああああ!?!」

眼下の暴言にショックを受けたのか、丁度この場にやってきたレッドとブルーが頭から地面へと突き刺さった。リヴァイアギルデイとクラーケギルデイの焼き増しみたいな光景だ。

「何、空からツインテールが降って来るとは…この世界、そこまでツインテールが飽和しているのか!?!」

とんちんかんなりアクションもさながら、立ち上がりざまにブルーに蹴りを入れられ、吹き飛ばされるエレメリアン。

…あのエレメリアンのキャラがさつきと変わっていないか？ という疑問はあったが、戦闘の幕開けにファイヤーも電柱から飛び降りて、戦闘へと参戦する。

「ほう！ つられて新たな戦士がやって来たか！ やはり地球はツインテールの星とはよく言ったものだ!!」

一人盛り上がるエレメリアンを無視し、辺りを見渡したがイエローがないのが気がかりだったが、ここにいないのなら仕方ない。3人だけで戦うしかないだろう。

「あつ、ファイヤー…」

「レッド。久しぶりだな」

レッドと偶然目が合ってしまった、何となくあいさつを交わす。

「その…腕、大丈夫、なのか?」

心配そうに右腕を指さすレッドに、ファイヤーは右腕部分のアンダースーツをまくりながら答える。

「ああ、もうすっかり大丈夫さ」

「……………そう、か」

レッドとはこの前の戦闘終了後以来、久しぶりの再会だったからか、どこか気まずさがあった。オウルギルデイ戦であの場に留まらず、変に逃げたことが影響しているのだろうか。

(ああっ、くそ…最近の俺、逃げることしかしていない…)

男としての自分とテイルファイヤーとしての自分が重なってしまい、苛立ち混じりでガシガシと頭をかきながらブルーを一瞥すると、どこかブルーの機嫌も悪そうだった。

「全くあいつら…ほんつと悩みが無くて人生楽しそーよね!!」

「…そうとも、限らぬぞ」

「!」

吹き飛ばされたエレミアンは攻撃を受けながらも両腕でしっかりとガードをしており、ダメージをさほど受けていなかった。とつさの判断であれをやれたのならば…只者ではない。

そして、肩口から生えた三つの首と六つの瞳が一斉にツインテイルズを捕える。その頭部は地獄の番犬を彷彿とさせるほど厳つく、巨大なナイフのような牙、カギ爪のような禍々しい爪がギラリと光る。そして、その身体から立ち上り、視覚出来るほどの強大な属性力。

「この感じ…幹部エレミアンか!? 最近とんと現れなくなったと思っただが、やっぱり戦力を立て直してただけか!?!」

「我が名はケルベロスギルデイ。貴様がバツファローギルデイを素手だけで血祭りにあげたという鬼神、テイルブルーだな。名乗りもせず蹴つてくるとは…胸の薄さは常識の薄さという事か」

「あんだとごらあああああああああああああああああああああああああああああああ!?!」

「落ち着けブルー! ほら、ツインテイルも乱れているぞ!」

「! あ、ありがと…」

レッドは手榴でブルーのツインテイルを整えると、地獄の番犬顔負

けの形相となっていたブルーが見る見るうちに大人しくなっていく。動物とブリーダーの関係みたいだ：どっちが動物かは言うまでもないが。

『何戦闘中に女のツラになってるんですかいかわしい!! ラブコメっているんじゃないやありませんよ!!』

『あんたうっさいのよこの馬鹿!!』

『だって私がない間に好感度を上げようとしているんですよ、あの蛮族は!!』

『戦闘中なんだから、あんたもオペレーターに徹しなさい!! あたしだって見たい教育テレビの番組をすっぽかして専念しているんだから!! ウチのテレビは安物で録画機能がないんだから!!』

：オーブンチャンネルでギャーギャーと繰り広げられるレイチエルと謎の人物との口論をバックに、改めて俺たちは周りを見てみると、多数の女性が地面にへたり込んでいた。見渡せば駐車場だけでなくイベントホールの入り口付近にまで、そのような光景が続いていた。

「ううっ：気づいたら、無理矢理三つ編みに：三つ編み券なんて入っていないかったのに：」

「せっかくツインテールに伸ばした髪なのに：」

大小様々：ツインテールであろうとなかろうと、女性の髪型が三つ編みに変わっていた。特にツインテールの女性の髪が悲惨な事へとなっており、本来は自由に揺れるツインテールがまるでしめ縄のようにガチガチに縛られてしまっている。

「むう：何故拒むか。むしろ、我が絶技にてお主らの髪型は輝きを得たのだぞ」

「：：」

その悪びも無いような言い分にファイヤーは怒りを覚えたが：それを何とか沈めて、ケルベロスギルディを睨みつける。そのおかげかどうかは分からないが、ローだったテンションが上がり始めた。

「：どうせ、またおかしな機械で無理矢理三つ編みにしたんでしょ？ だったらそれを探してぶっ壊してやるわよ。そうすれば皆元に戻

るんでしよう?」

「無粋な! 機械に頼るのは二流の仕事よ! 私はこの二本の腕だけで髪を編み、螺旋を描く!! それが我が属性力:三つ編みトライプライド属性だ!!」
颯爽と槍を構えるブルーを前に、高らかに述べるケルベロスギルデイ。

(:俺たちが駆けつける僅かな時間の中に、これだけの女性の髪型を三つ編みにしたのか)

その技術は確かに称賛に値するが、本人の同意も無しに三つ編みにする行為は見逃せない。それは光太郎の信念に反する物だ。事実、三つ編みにされた女性のほとんどは悲しみに打ちひしがれているのではないか。オシヤレは人を笑顔にさせるものであり、決して悲しませることがあつてはならない。

それにしても三つ編みか:ツインテール奪取が最優先事項のアルティメギルが、別の髪型にこだわるとは珍しい。何か、作戦でもあるのか:??

「相変わらずはた迷惑な奴らだぜ:せつかくのツインテールを無理矢理三つ編みに変えやがって:!!」

「ティルレットよ、随分と視野が狭いな。三つ編みは、ツインテールの朋友とも呼ぶべき存在なのだぞ! おさげにしろ:」

「:だからって、詐欺まがいの行為で三つ編みにしていい言い訳にはならないぞ。あんたは満足かもしれないけれど、他人から見ればそれは余計なお世話だろ? そんな凄い技術を持ちながら、無理矢理にしかできないってというのが悲しいぜ」

「:ふん、お前には分からんだろうさ:!!」

一斉に六つの眼で睨みつけるが、ファイヤーもまた底冷えのするよくなトーンで反論する。

「そういうお前だって、随分と視野が広そうじゃねーか。あれか、顔が3つだから視野も3倍ってか?」

「舐めた口を:!!」

レットも剣を取り出し、ファイヤーも拳を構える。そして、3人でぐるりとケルベロスギルデイを包囲し、戦闘のゴングがなる瞬間を待

つ。

「それにしても…ふーむ…」

ケルベロスギルデイは、今度はテイルブルーにターゲットを切り替え、頭から足までじっくりと見ると、業界人じみた残酷な宣告を下した。

「…………残念だがテイルブルーよ、お前は私の腕をもつてしてもプロデュース不可能だ。特に胸のオーラのなさがアイドルとして致命的だ。ノーフューチャーなのだ」

ブレイクレリース
「完全開放!!」

周囲に人がいるというのに、ブルーは間髪入れずに武装を完全開放し、必殺技の体勢に入った。

「落ち着けブルー!!」

「あら、何を熱くなっているの？ 私は冷静よ、とてもね…!!」

そう言っているものの、目は完全に笑っていない。そして、そのセリフを吐く人間の大半は怒っているということにブルーも気付いていないらしい。

「こんな所で必殺技を撃ったら周りにまで被害がー!」

「大丈夫、あいつだけを狙い撃つから…!」

冷静という言葉を犬にでも食わせたらしく、マグマのような怒りを滾らせ、ブルーはケルベロスギルデイをオーラピラーで拘束する。その精密さはまるで針に糸を通すかのごとくであり、周囲に倒れている女性一人にも傷つけず負わせていない。

「エグゼキュート…ウエイブ!!」

そして解き放たれた一撃は、ケルベロスギルデイを貫き、オーラピラー内で大爆発が巻き起こる。

「やったか!」

ブルーの勝率9割強を誇る即死コンボの成功に思わずレッドが声を上げるが、舞い上がった煙が晴れた時、そこに立っていたのは無傷のケルベロスギルデイの姿だった。

「嘘っ!? 直撃したのに!」

「人質を取っているのと同じような状況なのに、躊躇なく攻撃とは…

！ やはり、皆の読みは正しかったようだ。テイルブルーは冷徹な戦士、目の前の敵を倒すための犠牲はいとわかない、とな…」

簡単にそうできる状況でも、今までアルティメギルが人質を取るようなことなんてなかったのだが…向こうが勝手にそう誤解してしまっているのならば、都合はいいかもしれない。

「いいわ、一回で駄目なら何度だってぶつけるまで…！」

「そもそも、私はお前たちと争う理由がないのだが…今日は営業活動がメインで、ツインテールを奪いに来た訳でもないのだが…」

「うるっさい！ あたしの槍に、理由なんていらぬのよ！」

…燃え上がるブルーは置いといて、オーラピラーからの拘束から解除されたケルベロスギルデイの身体にはチリ一つついていなかった。

(…おかしい)

確かに幹部級ともなれば、必殺技の一つや二つ屁でもないかもしれないが、流石に無傷はおかしすぎる。攻撃は確かに奴を貫いた。何か、攻撃をやり過ぎたカラクリがあるはず…。

「…!? 待て、お前…首が!?!」

「フツ、気づいたか…」

レッドがハツとして、ケルベロスギルデイの首を指さす。その先には、地獄の番犬の名を表する特徴的な3つの顔——ではなく、中央の一つだけが不敵に笑っていた。左右にあったはずの、2つの頭が消えている。

「嘘っ!?!」

驚きはそれだけではない。不敵に佇むケルベロスギルデイの後ろから、同じ姿のエレミアンが姿を現した。更にその後ろから、ボロボロ姿の三体目が倒れている。その全てが、頭が一つ意外な事を除けば、ケルベロスギルデイと全く同じ風貌だ。

『姿形も全く同じ奴が三体…しかも、一体がダメージを負っている…!?!』

「!」

レイチエルの声を聞いたのと同時に、堂々と立っているケルベロスギルデイの一体目がけて走り出した。何をしでかすか分からない上

に、敵は分裂して人数の差を互角にした。ならば、ここは動けない内に……もう一体も倒す！

「うおおおおおおおおおおお!!」

最大のモーシヨンで繰り出す、テイルファイヤー渾身の一撃。しかし、拳が当たる数瞬間に、残りの二体が佇んでいる一体に吸い込まれるように合体。元の三つ首へと再生を遂げた。

「!?」

そして、ファイヤーの拳をむんずと掴んだ。先ほどまでダメージを負っていたとは思えないほどの力で、拳を押し返す。

「三つ編みへの愛より生まれた私は、三つの命を編んだ存在……左も右も中心も、全てが本物の私であり、全てが分身……!」

つまり、奴の属性力である三つ編み^{トライフレイド}属性の能力は……分裂能力! しかも、分身が合体したら、ダメージも全回復というオマケつき!

「更に私は……分身能力を抜きにしても、強い!!」

「ぐ……!!」

ケルベロスギルデイに押され、ズルズルと足を引きずりながら後退するテイルファイヤー。そして、右手のガントレットが徐々にヒビが入り始める。レッドもブルーも、密着しているファイヤーがいては迂闊に攻撃を行うことも出来ない。

「そこまでですわ——!!」

「[G:]」

突如、高らかなお嬢様言葉と共にフルオート状態の銃がコンクリートの地面を抉り、その内の数発がケルベロスギルデイの足の甲を貫通した。ファイヤーにも何発か当たったのだが、フォトンアブゾーバーがしっかりと働いてくれたおかげでダメージを負わなくて済んだ。

「ぬう……!!」

「!」

足の甲を貫いた痛みで生じた僅かな隙を活かし、急いで距離を取るファイヤー。

「分身できるのがご自慢のようですが……これで形勢逆転ですわね。私たちツインテイルズは4人いるのですのよ!!」

「イエロー!!」

「お姉さま、生徒会の仕事が…ゲフンゲフン!! いえ、所用が済みましたので、テイルイエロー、ここに参戦しますわ!!」

咳き込みが気になったが嬉しそうに駆け寄ってくるのは、先ほどまで姿を見なかったテイルイエローだ。絶好のタイミングでの登場に感謝するが、ブルーが無情なツツコミを入れた。

「…でもあんた、数分くらい前から建物の陰に隠れていなかった？」

何か貧乏ゆすりしてたし…出るタイミングを伺っていたでしょ？」

「!、いえ…そんなことは…!」

「ごまかさなくてもいいわ…その度に揺れる胸が目に入っちゃったから…! ああ、胸が、胸が揺れて…」

…そんな裏事情は聞きたくなかった。ヒーローによくある『仲間のピンチにドンピシャのタイミングで駆けつける』シチュエーションを意図的にやられても困る。

「あつ、ちじよだ、ちじよー! お母さん、あれってちじよっていうんでしょー?」

「しっ、見ちゃいけません!!」

「「「……………」」」

更に駄目だしのクリティカルヒットが炸裂。幼子と母親の残酷な声援に、ツインテイルズ全員が居た堪れない顔となる。

頼む、イエロー、今は耐えてくれ。こんな密集空間で重火器をぶっぱなされたら、危ないにもほどがある。ハワイの一件のような事態になったら、とてつもない被害者が出てしまう恐れがあるから。

「ほう…ツインテイルズ全員勢揃いか。テイルイエロー…中々の素材だが、その不自然なまでに大きい胸は頂けぬ。その胸は作り物だな? 生のままの素材を活かすのが我々の仕事…下手に手を付けてしまつては台無しだ…」

「なっ! これは変身の賜ですわっ!!」

ケルベロスギルデイに品定めされたイエローは、猛烈に反発する。

「あいつ、強敵だけどなかなか見どころがあるじゃない。良い事言うわね!」

「どっちの味方なんですかブルー？」

ファイヤーである光太郎は知る由もないが、イエローの変身者である慧理那は普段は幼い体型ではあるが、変身後はグラマラスな体系へと変化を遂げる。最初からスタイル抜群なトゥアールとは違い、変身前と変身後で大きく姿を変える慧理那の存在が、テイルブルーである愛香にとっては憧れと嫉妬の板挟みなのだろう。

「イエロー…むやみやたらに重火器は撃たないでくれ…周りには人がいるんだから…！」

とりあえずファイヤーは、レッドがブルーを落ち着かせたようにイエローの手綱を握ろうとした。この警告を素直に聞き入れてもらえなかったのなら苦勞はしないのだが…。

「ええ分かっていますわ…敵は強敵…同じ戦法では太刀打ちできませんわ…！ お姉さま！ 私にリヴァイアギルデイの属性玉を渡してくださいませんか!? 私にいい考えがあるのです!!」

「?」 ラージバスト 巨乳属性の属性玉のことか? 別にいいけど…

ファイヤーは滅多に使わない属性玉変換機構エレメントリジョンを使い、リヴァイアギルデイが残っていた属性玉である巨乳属性ラージバストを召還した。

レッド達が使っているテイルブレスとファイヤーが使っているテイルドライバー同士の互換性はない。当然、それぞれが所有している属性玉も違い、レッド達がファイヤーの持っている属性玉を使いたければ、こうして手渡しでやらなければならないのだ。

「まさか…ちよつとファイヤー! それを渡さないで!!」

「え?」

何かを察したブルーだったが一步遅く、既に属性玉はイエローの手に渡してしまった。

「イエロー! それを使ったら駄目よ! 温厚な私でも怒るわよ!!」

もう既に怒っているんじゃない? とはツツコンじゃいけないんだろ
うな、これは。

「属性玉—— ラージバスト 巨乳属性!!」

「駄目って言うってんでしょ!! これ以上大きくなったら、あんたのその胸、引き千切るわよ!!」

属性玉変換機構が作動し、イエローの左腕が発光し始めた瞬間、ブルーが全速力でイエロー目がけて飛び込んだ。胸にコンプレックスを抱えるブルーは、何が何でも巨乳属性ラージバストの効果を発動してはならないと感じているのだろうか。

「…え？」

だが、ブルーは見えない壁に沈むかのように、ぐりやりと空間にめり込んだ。イエローとブルーの間には、まるで巨大なトランポリンがあるようにも見える。

そして、沈んだ反動で、ブルーは一気に跳ね飛ばされてしまった。

「ギャ——————ッ!」

勢いよく飛び込んだせいでその反発力も凄まじく、ブルーは空の彼方まで吹っ飛んでいき、小さな光となって消えてしまった。まさか、巨乳属性ラージバストの効果がこんなものなのかと、全員が茫然としてみると、ケルベロスギルデイが呆れたようにこちらは一瞥した。

「…同士討ちとは愚かな…だが、好都合だ。私は次の準備があるのでな、今日は失礼させてもらう」

ケルベロスギルデイは軽やかに光のゲートを中へと消えていった。どうやら戦闘が終わったらしい。とりあえず、これだけ多くの人がいるのにもかかわらず、属性力を奪われずに済んだのは幸運なのかもしれない。ファイヤーは、へたり込んでいる女性を一人一人立たせながらそう思う。

「大丈夫？」

「う、うん」

無理矢理三つ編みにされた女の子の髪を元に戻す作業を手伝いながらも、その思考は別のことへと集中していた。

(…何故、奴はここを襲った？ ツインテールを奪う気がない？ …今までのエレミアンとは、どこか違う…?)

アルティメギルとは関係のないエレミアンなのか？ 今までのとは違ったパターンに困惑しながらも、ふと、床に散らばったイベントのチラシが目にとまった。

どうやら、今日行われていたイベントは、アイドルの音楽フェスら

しい。会場の規模から、比較的大きめのイベントらしかった。

その出演者一覧の名前に、見知った名前があるのに気がついた。

「善沙……………闇子……………」

そういえば、最近人気急上昇中のアイドルの名前だっただろうか？
チラシに映し出されている写真には、見事な三つ編み姿で映っていた。

「三つ編み…………？ 奴の属性力も確か…………三つ編み属性…………」

「わあ、お姉ちゃん、痛いよお!!」

「! ああ、ごめんごめん!」

「んもう! 女の髪はデリケートなのよ!!」

「そうだよねえ…………女の子だもんねえ…………ごめんね…………」

どうやら考えに没頭してしまったせいで、うっかり髪を引つ張ってしまったらしい。慌てて謝罪しながら、丁寧に編まれた三つ編みを一つ一つ解いていく。

…………今日現れたケルベロスギルデイと三つ編みが似合うアイドル、善沙闇子。本来ならば接点などどこにもない、何の関係もないはずの組み合わせなのに、ファイヤーはどこか言い知れぬ不安を感じ始めていた。

第50話 露見とツインテール

「分身能力…本当に3つに分かれてる…」

「これが三つ編みトライブライド属性の能力ですか…」

地下基地に戻った総二たちは、トウアールが記録していた戦闘データを再生することにした。

モニター上では先ほどの戦闘シーンがコンマ数秒程のスロー映像で再生されている。そして、それを読み取る事でケルベロスギルデイがどうやってブルーの即死コンボから逃れたのか、そのカラクリがハッキリと分かったのだ。

「オーラピラーで拘束される寸前に3体に分離し、そのうち1体だけを囮にして2体は拘束から免れていますね。直撃を受けたのは拘束された1体のみ…しかも、再合体した際には今までのダメージも帳消しという回復能力も備えています」

「面倒な敵だな…」

トウアールはモニターに様々なシーンの映像を再生させながら、総二たちに解説を進める。

「結論を述べると、面倒臭さだけで言えばこれまで以上の敵ですね。今まで戦ってきた幹部級エレミアンは真正面から戦う力押しタイプが主流でしたが、こいつはこの能力も込みで同じ戦法を行っているんですからね。ゲームのボスキャラが全回復呪文を使っているようなものですよ、これは」

再合体時にボロボロの傷が見る見るうちに癒えていくその光景は、ケルベロスギルデイが単なる力押し戦法では絶対に勝てないことを物語っていた。更にファイヤーのパンチをあっさりを受け止めるその力は、ケルベロスギルデイは能力に頼った戦い方をしていないという、何よりの証明だった。

向こうは分身の内1体でも生き残っていれば体力を全回復できる手段を持っており、持久戦になればなるほどツインテイルズ側が不利な状況へと追い込まれていく。向こうは回復手段を持っているにもかかわらず、こちら側にはそれが無い…これだけでツインテイルズ

がどれだけ不利な状況に陥っているかは一目瞭然だろう。

「幸いなのは、相手が分身したとしても人数の上ではこちら側が多いということですね。あつちは3体、こっちは4人。つまり、奴を倒すにはツインテイルズ全員での協力が不可欠となります」

普段以上に真面目なトーンでの作戦会議に、総二たち一同は新鮮な気分だった。何故ならば敵の倒し方についての会議など、ただの一度だっけ行った事がない。相手がどれだけ強くても、ほぼぶっつけ本番で勝利を収めてきたが、遂にそれだけでは勝てないという壁にぶち当たった。

「こいつがでてきたのは偶然…じゃないよな。俺たちツインテールに対しての三つ編み能力…まるでツインテイルズに合わせて選出されたみたいだ」

「流石は観東君!! 素晴らしい着眼点ですわ! 敵も私たちを倒すべく、同じカテゴリーの属性力をぶつけてきているという事実気付くだなんて!!」

「えっ? ああ、そうですか…」

「三つ編み対ツインテール!! まるで大怪獣決戦のような気分ですわ!!」

慧理那に褒められて少し照れくさいリアクションをする総二だったが、愛香は逆に面白くなさそうにジト目で総二を睨む。

「…? 何で愛香は機嫌悪そうにしてんだ?」

「べっつに〜?」

するとトウアールも機嫌が悪そうな顔を押さえながら、慧理那の気を引かせようと必死にモニターを指さす。

「あー、ほらほら慧理那さん! テイルレッドが女の子にもみくちやにされていますよ! 可愛い光景ですわー!! ほら、あの子なんて自分の制服の中に手突っ込ませてすぐに逃げていきましたよ、業師ですわー!!」

戦闘シーンが映し出されていたモニターは、いつしか中高生に絡まれて困惑するテイルレッドの映像で埋まっていた。総二は明日以降もこの映像をどこかで見る羽目になることに気が滅入り、しかめっ面

になる。あの制服の子も隠し撮りの写真か映像なんかをネットに公開するんだろうなー、と容易に想像できるため、総二は必要以上に驚くことはしなかった。

「ええ、とつても可愛いですわね。それに隣にいるお姉さまも子供たちと絡めて羨ましい：私も加わりたいのですが、どういう訳か子供たちが逃げて行って…」

モニターのとある映像には、ケルベロスギルデイに無理矢理三つ編みにされた人の髪を解こうと懸命に作業をしているティルファイヤーとそれに群がる幼子の姿があった。そこだけ見ると大変微笑ましいのだがその輪にイエローが加わりうとすると、子供たちが逃げるようにイエローと距離を取るのだ。

：やはり、『露出Ⅱティルイエロー』という嫌な図式が成り立ってしまった今、子供たちもイエローを危ない人のような認識でいるらしい。

「ああ、これもまだ私が世間に受け入れてくれないという何よりも証拠：私も早く、人々に認められるヒーローになりたいですわ！ とりあえず、ケルベロスギルデイとの再戦時には露出を今までの3割増しにしますわ!!」

「いや…そうじゃないと思うんだが…」
「え？」

きよとんとした顔をする慧理那だったが、そのリアクションをするべきなのは総二の方だ。

「とりあえず、脱げば脱ぐほど人気がでるという考えは間違っているんじゃない…」

「観東君の方こそ間違っていますわ!! 私はありのままの自分だけでいいのですから!!」

露出はイエローの人気を落とす要因にしか成りえないのだが、イエローの戦闘スタイルは今や露出ありきになってしまっている。総二はなんとか露出は控えないかと慧理那に説得を試みるのだが、これにますます愛香とトゥアールを不機嫌にさせていく。

「事態を悪化させてどーすんのよ！ そーじも最近は光太郎と会長く

らしいか絡まないし、当の会長はファイヤーとレイチエルちゃんラブだし!! そーじがそろそろ取り返しがつかない地点まで来始めているわよ!! このままじゃ本当にガチホ…」

「愛香さんの方が怒ってどうするんですか! 私だって一生懸命頑張っているのにいつつも事態が想定外の方へ行くんですよ!!」

「あんた頭いいんだからそれを予想した上で行動しなさいよ!」

…作戦会議の体を為していたのは最初だけで、あつという間に皆好きなきことを言い始めて脱線してしまう。

そんな中、特にやる事がなく、一人テーブルに座りながら書類にペンを走らせている尊の姿があった。総二はそんな尊に助けを求めようとしたが、書いてある書類をよく見るまでもなく、それが婚姻届であることに気付き、行動を取り辞める。

尊は芸能人が長年書き慣れたサインレベルの速さで、婚姻届の妻の欄に自分の名を書いていくが…ここまで婚姻届を極める前に、もつと様々な道があったのではないだろうかと思わざるを得ない。

「今度こそ…今度こそ…受け取つてもらおう為に…!」

怖いことをブツブツと呟き、目を血走らせながら婚姻届を書いていく尊に関わってはいけないと察した総二はもう一人の大人である母、未春に助けを求めるが、未春はさつきからモニターに表示されたままの映像を見ながらうーんと唸ったままだ。相変わらずの悪の女幹部コス姿の母は、残念なことに今の思案顔が非常に絵になってしまう。「ケルベロスねえ…どこかで聞いたことがあるわ…」

「そりゃ俺だって知っているよ。知らない人の方が珍しいだろ?」

意外にもまともそうな未春に、総二は淡い期待を抱く。ケルベロスは地獄の番犬の異名を持つ神話上の生物であり、亡者を喰らうとして知られている、比較的ポピュラーなモンスターだ。小説やゲームでもちよくちよく出演しており、その名前を聞かない方が難しいかもしれない。

「そうじゃなくてねえ…うーん、あ!」

ポン、と手を叩き、何かを思い出したようなりアクションをする未春に、総二は嫌な予感がした。

「そうだそうだ、思い出したわ。母さん高校生の頃、後輩の女の子を犬にして飼っていた時期があつてね」

「フアミレストーク感覚でとんでもねえこと言っているじゃねええええええええええええええええええ!!」

「やあねえ総ちゃん、犬つて言つてもちやんと人間の下僕のことよ?」
「余計に駄目だよこんちくしよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

総二は、一瞬でも母をまともだと思つてしまった自分に喝を入れたかった。最近、次から次へと知りたくない母の黒歴史が明らかになるが、今度の黒歴史は核兵器どころかゾンビウイルスを内包した細菌兵器クラスの代物だった。

「いやね、私というマスターに忠誠を誓っていた可愛い下僕…もとい、ワンちゃんがいてね? その子がもうすんごいドMでしかも忠犬で…地獄の番犬にちなんでケルベロスつて呼んでいたのよ。あー、どこかで聞き覚えがあると思つたらこれだったのねー」

一言一句逃さずに聞いているのだが、総二はまるで理解が及ばない。本来なら思い出というものは微笑ましいはずなのに、まるで微笑みの欠片のないそれに総二は戦慄を覚える。

「ちなみに母さんはその頃、オプスキュリイレイヌ真なる闇の女王つて名乗つていて、神魔超越神なる異名を持つた父さんと昼休みの度に死闘を繰り広げて…」

「聞いてもいないことを喋るんじゃねええええええええええええええええええ!!」

今すぐ父の遺影をミキサーにかけて海にばら撒きたいという衝動を必死で堪える総二は母を静止させようと頑張るが、無駄な努力で終わってしまう。

「その子、高校卒業してすぐ結婚しちゃったから、トンと音沙汰が無くなっちゃつて。風の噂では子宝にも恵まれて幸せに暮らしているらしいけれども…今どうしているのかしら? 結構いい所のお嬢さんだったみたいだけど、ドMだったおかげで距離感なく接していたのよねえ〜」

家柄以前にドMつて時点で最強最長の距離感が発生していると思

うのだが…。

(あれ…?)

ふと、総二の脳内に嫌な電流が走った。こんな時に限って、総二の頭はフル稼働を始める。

(卒業後すぐに結婚、そして子供を妊娠…ならば年齢は19歳前後…？そして母さんの後輩で…知り合いが中二病…いい所のお嬢さん…)

簡単な年齢の逆算と、記憶の海から掘り起こされる会話。そして頭に引つかかるものがあつた。総二はごく最近、これと非常によく似た話を聞いている――。

「え、えっと母さん。何だっけ、その人…すんごいドMって言ったっけ？」

「そうなのよ、この哀れな犬をぶって下さいとか、首輪をつけてとか言われてねえ！ 下僕感が増すと思って、母さんもついついやりすぎちゃってね〜！ あの子は喜んでいたけれど、流石にやりすぎちゃったかしら？」

「!!」

いやー、あの頃は若かった！ といい感じな言葉で締める母だったが、総二は背中の中の冷や汗が尋常でないほど流れていた。

そんなに直感は冴える方ではないのだが…今日の総二は気持ち悪いほどに冴え、頭の中でピースがはまっていってしまう。

(…俺も、俺も似たようなことをされた!! 慧理那にぶってとかひっぱたいてとか――言われた!! 母さん程酷くはないけど、ベクトルはすんごく似ている!!!)

観束という苗字にデジャヴを覚え、妙な名前を付けたがる人物にして、頭が痛くなるような思い出を甘酸っぱいとして昇華している人物――総二はこの人物に心当たりがあつた。

『あの方は『自分の子供に命天男メテオや有帝滅人アルティメットという厳格な名前を付けるんだ』と言って――』

『ちなみに母さんはその頃、真なる闇の女王オブスキュリイレイヌって名乗っていて――』
(に、似てる!! 厳格な名前となると、中二病チックになる…うちの母

親に似ていやがる——!!!)

…そう、慧理那の母である理事長が未春の下僕ではないかという驚愕の仮説にたどり着いてしまった総二は頭を抱えて、テーブルに突っ伏した。

(もしそれが事実だとしたら…親子二代に渡って…知り合いつてことに…?)

そう言えば、理事長も総二と光太郎に言い寄られている間、驚きと共にやけに変なりアクションをしていたが——もしかしたら、あれは言葉攻めで快感を覚えていたのかもしれない。そうなると、理事長はドMだという確固たる証拠が完成してしまう。娘の慧理那がドMで、その母もドM…何と分かりやすい血の繋がりのだろうか。

(…そう言えば、母さんと理事長つて年齢が近い感じもしたし…俺と会長の年齢は一つ違い…。母さんも卒業後、父さんと結婚したけれどすぐには妊娠しなかったらしいから、1年ちよつとの誤差が生じてもおかしくはない…)

考えれば考えるほどに仮説は信憑を帯びていく。そして、奇跡とも思えるとんでもないニアミスで、総二以外誰一人気付かないでいるこの不思議な因縁に、一人戦慄していた。

総二は世の中は狭いと感じつつ、絶対にこの事を慧理那自身に知られる訳にはいかないと心の中で決心した。慧理那のツインテールを絶望に染めない為に、そして他の人にばれて、この恐るべき黒歴史が明らかにならない為に。

「トウアールさん、私もこのモニターを操作してみてもよろしいかしら？」

当の慧理那はトウアールに設備の操作方法を教えて貰っていた。トウアールも満更ではなさそうな顔で操作方法をレクチャーしている。

…なんやかんや言いつつも、トウアールも前向きな姿勢で色々な事を知りたがる慧理那にはどこか甘い所があり、総二はそんな慧理那の好奇心に満ち溢れた姿とツインテールを見て、不思議な気分を味わっていた。

親が血反吐ものの過去を持つという共通項はあるものの、よく考えれば、因縁…というよりも運命的な何かを感じていた。

ツインテールが導いた関係という以前に、2人は出会うべくして出会うことが定められていた——というような考えもできるのだろうか。らしくない、とんだロマンチストな発想であったが。

「人工衛星——『ようじよ』？ これでエレミアンの出現をキャッチしていますの？」

「地表全てをカバーするためにサブ三基を含め、全4基ありますが、基本的にはこのメインでまかっています。総二様と出会う前にこっそりと打ち上げておいたんです」

「凄いですわね！」

「ええ凄いですでしょう？ トウアルフォンなんかの中継もこれでもかかっていまして、なんと『ようじよ』では衛星写真もとれてですね！」

確かにすごい性能を誇ることは理解できたが、ラジコン感覚で人工衛星は打ち上げるものではないはずだが…。

「更に更に!! ここにはあらゆるデータが保存されておりまして、今までの戦闘データが最高画質と音質で…！」

トウアールはピツと再生ボタンを押すと一般には出回っていない戦いの内の一つである、テイルレッドVSドラグギルデイとの死闘が映し出された。剣と剣がぶつかり合う

「まあ!!」

「ふふふ…どうですか？ この人口衛星『ようじよ』に出来ない事は何も無いのです!!」

「凄いのは分かったんだけど、その撃墜したくなるようなネーミングはどうにかならなかったの…?」

空から地球を見守るトウアールの分身としてこれ以上ないストレートすぎるネーミングに嫌悪感があるのか、愛香は呆れ顔になっていた。

「す、凄いですわ…! あ、あの! もっと他に映像は…」

「ふふふ…まだまだありますからどうかご安心を!!」

おだてられてすっかり調子に乗ったトゥアールはモニター上に次々と衛星に保存していた映像を再生し、ツインテイルズ限定のストライドショーが開幕となる。

「あつ、これクラーケギルデイ戦での愛香ちゃんじゃない」

「あたしこんな風に撮られていたんだ…しかも、無駄に良いアングルで…」

「白目をむいたところも最高画質になってるな…」

「まあ！ これはワイバーンギルデイ戦でのお姉さまですわ!! こんな角度で見られるとは…!」

「やっぱりこの戦いは迫力があるわね」

その鑑賞会に自然とメンバー全員の視線がモニターへと移動し、ワイイと盛り上がる。そしてトゥアールが次の映像を再生した矢先だった。

『きやははは』

『わーいわーい』

「!!!」

…本来ならばモニターにはツインテイルズが映るはずなのだが、何故か見知らぬ幼女たちの通学光景の映像が映り込んでいた。しかも盗み撮りのレベルを遥かに超えた代物であり、明らかに幼女たちを被写体として映していた。

「…あつー」

トゥアールが軽い悲鳴と共に慌ててモニターの電源を落としたが、覆水盆に返らず。こぼれた水を盆に戻す事などできはしない。事が起こってしまったからでは、何もかもが遅すぎた。

「!!!」

これまでの賑わいが嘘のようにピタリと止み、全員の視線がモニターからトゥアールへと集中する。電源が落とされる僅か数秒の間であったが、あのとんでもない映像はこの場にいる全員の脳裏に深く刻み込まれてしまった。

「…さーて、みなさん。ケルベロスギルデイについて、話し合いを再会しましょうか。トリツキーな力を使うとはいえ、これは強敵ですから

ね」

「それよりもつと危険な奴がここにいるようね!!」

何事も無かったかのようには会議を再会させようとするトウアールに颯爽と掴みかかった愛香は、ぐるんと回転投げを決めてモニターに叩きつけた。：地味に叩きつけられるまでのスピードがじわじわと速くなっている事もまた恐ろしい。

「あんだねえあんだねえ：：人類の英知を使って、なに盗撮にしやれ込んでいるのよ!?!」

「ああああああああああ！ 人はまた過ちを繰り返す!!」

「あんたは繰り返し過ぎだバカヤロー！！！！！」

そして愛香はむんずと白衣を掴むと、ロケットを射出するかのようにはトウアールをブン投げた。だが、トウアールはロケットと同じように大気圏突入には至らず、天井という物理の壁に阻まれてしまい、ついに宇宙に旅立つことは無かった。

※

その頃、アルティメギルの基地にある格納庫では、作業着を着たフェンリルギルデイが翌朝に控えてある飛空艇の清掃作業の準備に取りかかっていた。

「エンジン部のオイル、ワックスも充分な量がある。こっちが床用でこっちが装甲用：：外部装甲が多少傷ついている船が何隻かあるから、そこは溶接と研磨で補修して：：ああ、大型バッテリーの予備もあつた方がいいな」

ぶつぶつと手元にある書類と睨めっこしながら作業を進めていくフェンリルギルデイの姿はすっかり板についていた。

雑用を初めて1ヶ月。様々な仕事で働くこととなったが、身のこなしやまるで整備士が本職かと思えるほど洗練していた。

「モケ!!」

「：：ああ、どうも。お疲れ様です」

途中、退職時間になり定時に退社する戦闘員に愛想よく振る舞うそ

ぶりをさせるが、フェンリルギルデイの内心は穏やかではない。ダークグラスパーが近くにいないこといいように心の中では周囲の不満を思いつきりぶちまけていた。

（たかが戦闘員の癖にデカイ顔してるんじゃねーよ！ しかも道具を片付けないで帰りやがって…私はお手伝いさんじゃないんだぞ!!）

どれだけ作業の腕が上がったとしても、地位は相変わらず基地内ワーストワンの雑用係。模範的な行動を取ってはいるもの一向に雑用係から解かれる様子はない。そのことにフェンリルギルデイの苛立ちは募るばかりだ。全く、ダークグラスパーに肅清されてから碌なことがない。

（ああくそ…私はいつまであの下っ端に頭を下げ続けなければならぬのだ!! そもそもこんな仕事、雑用に押し付けなくとも…）

戦闘員ですら定時で上がれるのに対して、雑用係である自分は作業が完了するまで仕事を上がることは許されない。例え深夜になろうと作業が終わるまで眠ることも許されないのだ。

（第一…ダークグラスパーが来たからといって何か変わったか？ 地球侵略は一向に進む兆しは見えないし、連戦連勝のツインテイルズは調子に乗るばかり…そもそも、偉そうにしているダークグラスパーはただ部屋でエロゲーを嗜んで、私に仕事とエロゲーを押し付けているだけではないか…！ 偶に外出することはあるが、何処で何をしているのだか…!!）

そんな中、相変わらずおせっかい焼のスワングルデイだけがたまに様子を見に来てくれるが、フェンリルギルデイにとってはそれが冷やかしのようにはか思えない。

…どうせ、老いたエレメリアンである自分の情けない姿を見ることで優越感に浸っているのだろう。向こうは隊長直属の地位にいるからこそ、雑用係の哀れな姿はさぞかし滑稽に見えているのだろう――。戦闘員ですら調子に乗っている現状だ、上から数えた方が早い地位にいる貴様にやれない道理はないものな――。

「失礼する」

「！」

いきなり聞いたことがない声が格納庫中に響き渡って、フェンリルギルデイは驚きのあまり飛び上がった。はつと振り返ると、見知らぬ一匹のエレミアンがずかずかと中に入り込んでいた。奥を見ると、いつの間にか小型の飛空艇が一隻、ハンガー内にあった。

「まずい、と思った。許可のないものは通してはいけない決まりになってるし、もしこのことが上にばれば、更に雑用の期間が延びてしまうかもしれない。フェンリルギルデイは面倒なことにならないことを祈りつつ、慌てて整備台から降りていく。来客は無遠慮にずかずか奥まで歩いてくるが、フェンリルギルデイを見るなり、首の下に下げたあるタグを見せてきた。

「ああ失礼。私はこういう者だが」

『外部来客者』——そうタグに書かれていることを理解した瞬間、条件反射で目の前のエレミアンに敬礼をした。関係者にも礼儀を尽くせ——これも雑用の仕事をこなしていく内に染み付いてしまった行動の一つだ。

「ふむ、そう畏まらなくてもいい」

目の前にいる三つ首のエレミアンは、白い牙を見せながら笑う。「わざわざ作業の手を止めて済まなかった。だが私はこの上層部に用があつて、一応関係者だ。今後の作戦の為に届け物があつてな」

そう言つて、トランクケースを見せる三つ首のエレミアンの姿に、フェンリルギルデイはあつ、と何かに気がついた。目の前のエレミアンの存在はデータ上でしか見たことのない顔であったが、フェンリルギルデイは確かにその人物のことを知っていた。

「もしかして…あなたは…ケルベロスギルデイ…!?!」

「…ほう。こんな引退済みの老兵のことを覚えてくれるのがいるだなんて、まだまだ捨てたものではないかもしれないな」

ケルベロスギルデイ——自らの属性力を示す為にあらゆる戦場で戦い続け、己の実力だけで幹部クラスの実力を手に入れたとされているアルティメギル屈指のたたき上げとして有名な戦士だった。フェンリルギルデイも一時期、彼に近づいてどうにかそのおこぼれを貰えないか策を練っていたほどだが、数年前に突如として引退…その

後、誰にも連絡先を教えないまま世間から姿を消してしまい、一時期は死亡説が流れていたほどであったのだが…。

「…引退した、と伺っておりますが」

「ああ。つい先日にも復帰してな。今は地球侵略の為に色々と裏でプロデュースしているところなのだよ」

そう言うと、ケルベロスギルディは基地内に通じている通路に歩みを向けた。

「あの…！」

「む？」

しかし、フェンリルギルディは何故かケルベロスギルディを呼び止めていた。まさか逆に呼び止められるだなんて思ってもいなかったのか、驚いたように足を止めた。

「あなたの属性力は…三つ編み属性です…よね？」

「…ああそうだ。今も昔も私はこの髪型のみを愛している。生まれてからこれ一筋で貫き通しているさ」

「それはツインテールよりも…ですか？」

フェンリルギルディは恐る恐るだが、冗談めかしてそう言うと、ケルベロスギルディは茶化す様に笑った。

「ああそうさ。組織が何よりも欲しているツインテールよりも私は三つ編み属性を愛している」

「……………アルティメギルを引退したのも…それが原因なのですか？ あなたのその心は、アルティメギルの掟と反して…！」

「痛い所を突くな、君は」

ケルベロスギルディは自傷気味に笑うと、こちらを振り返ってきた。

「君の言う通りだ。ツインテールを愛するアルティメギルにとって、ツインテール以外の髪型の属性力は存在そのものが禁忌とされている。君は知らぬかもしれないがその昔、ツインテール属性と双壁を為す髪型のエレミアンが存在そのものを危険視されたことがあってな…首領様直々に牢獄に閉じ込められたという話がある」

「……………」

「巨乳や貧乳などといった他の属性力ではツインテールと共存できるかもしれないが、同じ髪型の属性力は共存など出来ない。ツインテールとポニーテールは同時に存在することは出来ないし、サイドテールやシニヨンも同じだ。ツインテールの良さを殺してしまう厄病神：我々、髪型の属性力を持つ者はあつという間に日陰者にされた」

フェンリルギルデイはそれを聞いて内にもやるせない気分になった。自分とは違う境遇だが、ツインテールという存在のせいで自分自身の全てを否定されるのはどんなに苦しい事なのだろうか。

「私はその全てを、自らの三つ編み属性を証明することのみにかけてきた。文字通り人生を投げ打って……。ゴールが見えないうちはまだそれに没頭する事が出来たが、やがて気づいてしまった。どれだけ戦っても自分を満たすことなど出来ないということにな……」

「戦果を挙げさえすれば己の存在こそ否定はされない。だが、組織は己の愛する属性力は必要以上に求めてなどいないという現実を知ってしまったからは……心の支えを失ってしまったよ」

それはアルティメギルの陰、とも言えるのかもしれない。ツインテールを信仰していれば必ずその割を食う属性力もまた必ず現れてしまう。そして、それに苦しんでいるのはケルベロスギルデイだけではないはずだ。きっと、その牢獄に閉じ込められたエレミアンも苦しんだはずだ。

「なら……何故あなたは、現場へと戻ってきたのですか？ 自分の愛する存在など求められていないと知ってしまったのですよね？ 自分のやりたいことができないのに……どうして……？」

「……ふふ、どこぞの小童に私が得た知識や経験を求められていてな。軽い先生の真似事をしているのだよ。愛している三つ編み属性の普及は出来ないが、それでも自分が何かの役に立っているということとは嬉しいものでな」

すると、ケルベロスギルデイはフェンリルギルデイの胸にぶら下がっている『雑用係』のタグを指さし、その痩せた身体をチラリと見た。

「君も…まあ、いろいろ苦勞しているみたいだな。若いのに雑用まで転落など、一体何をやらかしたのだから…」

「ああ、いや、その…」

フエンリルギルデイが何かを言おうとすると、ケルベロスギルデイはそれ以上何も言うな、と手で制してきた。

「君も組織の在り方に不満を持っているのかもしれないし、今の境遇に納得がいかないかもしれない。だが、こんな厄病神でも誰かの役に立てるのだ。君にも、ちっぽけかもしれないがやりたいことがきつと、そのうちに見つかると思う。だから、それが見つかるまでは腐らずに働いてみてはどうかな？ 何かを1つ失ってしまったからといって、残り全てを失うような愚かな真似だけはしないでくれよ」

まあ、今の仕事の半分くらいは私も趣味でやっていることが多いのだけれどな、とケルベロスギルデイは豪快に笑うと、地面に置いてあったトランクケースを持ち上げ、「ではこれから仕事の打ち合わせがあるので、失礼するよ」と言うと、ケルベロスギルデイは格納庫から去っていった。

「あれが…ケルベロスギルデイ…」

自分以外誰もいなくなった格納庫で、フエンリルギルデイは信じられない感じがした。伝説の老兵と会話を交わして、しかもアドバイスまでくれた——まるでドラマの始まりのような気分だった。

「自分の、やりたいこと…やりたいこと…？ 私が、やりたいこと…やりたいこと…」

そしてフエンリルギルデイはぶつぶつ…と、うわ言のようにその言葉だけを呟いていた。まるでその言葉を自分自身に刻みつけるように…。

※

「おーい、イースナちゃん。明日のライブ衣装の最終調節版が出来—

—あれ？」

「…遅い」

「お、遅い言うてもやな…これでも最速最大のスピードでケルベロスギルデイが仕立ててくれて…」

「そ、そうじゃない。衣装のことは…どうでもいい」

着古したジャージ姿でソファに座るダークグラスパー…もとい、イースナは、先日のライブ映像を見ながら不満げにぼやいていた。熱狂的な固有ファンが増えてはいるものの、大人気というにはまだまだの人数だ。

「わ、私の見込みでは…も、もっとファンがどかんと増えているはずなのに…遅い…遅すぎる…！」

作戦の進みの遅さに、イースナは苛立つように貧乏ゆすりをするが、その相棒のメガ・ネプチューン…通称メガ・ネは呑気そうに返答する。

「焦りすぎやイースナちゃん。この短期間の間に、ほぼ無名の状態から人気って所まで来ただけでも凄い事やで！ やっぱリツイートンタールが愛されている世界は手強いんやなあ」

「あ、ありがとう…メガ・ネ。でも、何かが変、なの。この世界…眼鏡が、かなり蔑ろにされている…眼鏡の魅力を浸透させることだけでも、大変…でも、それだけじゃない…」

イースナは、この世界が何か違和感が、異質な何かが根ざしているようなそんな感覚がした。

イースナはソファから立ち上がると、メ・ガネにずっと手を差し出した。

「メガ・ネ…預けておいたあれを出して…」

「あれ？」

「ここに来る前にあなたに預けたものがあるでしょ…？」

「まさか…あのアルバムか？ あんた、夢が叶うまでトウアールはんの写真は見ないって…トウアールさん断ちするって言ってたやんけ」

母親のように諭してくるメガ・ネにイースナは駄々っ子のように催促する。

「う、うるさい…トウアールさんに巡り会えたんだし、頑張った自分へのご褒美だから…見せて！」

「……こういう願掛けは中途半端に破ると意味あらへんのやけどなあ……まあ、頑張ったのは確かやしな！ イースナちゃんも好きなだけ見いや!!」

メガ・ネはポンと右腰を叩くと、腹部から引き出しのようにアルバムがせり出してきた。

イースナは待ちきれないとばかりの笑顔で今まで盗撮……もとい、思いつきで収めたアルバムをひったくるが、アルバムのページを捲るたびにその笑顔が曇り、そして陰鬱な表情へと変わっていった。

「何……これ？」

「ん、どーしたん？」

アルバムの写真が、奇妙なことになっていた。その豊満なバストが強調され、凛々しくテイルギアを纏っている先代のテイルブルー……トウアール。全ページに渡って、様々なアングルの写真で彩られているのだが——そのトウアールが……全て、ツインタールを解いているのだ。

「ど、どうなっているの……？」

風呂上りや就寝時の写真ならばまだ分かるが、テイルギアを纏って戦っている時の写真もまた、例外なくツインタールを解いている。ツインタール属性を持つ者にしか纏えないテイルギアを、ツインタールでないトウアールが纏っている……この果てしなく奇妙な矛盾に、イースナはどうとう気づいてしまった。

「トウアールさん、ツインタール属性を……失ったんだ……!!」

「な、何やてえ!？」

写真という、記憶や情景を形に収められる数少ない手段ですら容赦なく干渉し、属性力の消失は、文字通り世界の条理を変えてしまう程に強力だということはイースナも理解していたが、改めて突きつけられると驚くほかなかった。しかも、崇拜しきっていたトウアールのツインタールがその被害にあったとなると、その驚きも一入だ。

「で、でもどーいう事なん？ トウアールはんはテイルレッドに生まれ変わったってこの間言うてたやん！ テイルレッドはきちんとツインタールやったで!？」

「…そ、そのはずなんだよね…分かってるの…。ティルレッドはトウアールさんな、の、に…」

その時、イースナの頭の中で白い閃光が爆発した。そして理解に至った。そもその前提が間違っていたことを。思い違いをしたまま、すっかり嘘を信じ込んでしまったことを。

「…待てども待てども、メールをくれないと思っていた。あんなに綺麗になったのに、トウアールさんが振り向いてくれないなんて、おかしいって思っていた…！」

「いや、トウアールはんは筋金入りの腐れロリコン野郎だから、今のイースナちゃんは多分ストライクゾーンでは…」

「おっぱいもトウアールさんに匹敵するくらいに成長したのに…おかしいと思っていた!!」

「あの、イースナちゃん!? トウアールはんはロリが好みであって、決してロリ巨乳が好みじゃ…!!」

メガ・ネの冷静な説得にも耳を貸さずに、イースナは震える指で眼鏡のブリッジを上げ——戦士、ダークグラスパーへと変身した。

「ティルレッド…奴は、トウアールではない…トウアールの名を騙った、偽物だ!!」

※

『…はい、明日のライブでは初披露の3rdシングルもありますので楽しみに待っていてくださいね!! 当日のライブも勿論、とっておきの眼鏡姿で現れますから!!』

『頑張ってる閨子ちゃん! 今度のライブは大型ドームだから、たくさんファンによる眼鏡がドーム中を埋めつくすんだね!!』

『はい! 皆のレンズの光を想像するだけで、私立ちくらみしてしまいます!!』

『私も行きたいんだけど、どうしても生の仕事が入っちゃって〜』

総二はパジャマ姿で歯磨きを口に突っ込みながら、居間にあるテレビを見ていた。テレビでは丁度終わりに差し掛かった深夜番組のゲ

ストに呼ばれていたアイドル、善沙闇子がライブの宣伝を行っている最中だった。今やテレビだけでなく、ネットのバナーやポスター、CMなど、彼女を見ない日がないほど露出しており、猛烈なプッシュは笑えないレベルまで来ていた。

「……………」

そのあまりにも早すぎる人気っぷりに何か違和感が感じられると共に、闇子の活動内容にも疑問が見られる。

「それにこの子は、自分を売り込むっていうよりも眼鏡ばかり目立たせているよな…?」

スポンサーは全て眼鏡販売店、トーク番組でもツカミからオチまで全て眼鏡を絡ませている。

(…逆に言えば、本当に眼鏡を愛しているという何よりの証拠になっているんだよな。普通だったら、ここまで出来ないって…。俺も、ここまでやるべきなのかな?)

総二は歯ブラシを動かしながら明日あるというライブの宣伝をじつと見つつ、半笑いを浮かべた。確かに露出の多さや多少のうっとおしさはあるものの、眼鏡一筋を訴えてくるその熱意は、総二の心をも動かしていた。自分もツイントールに熱意を注いでいるが、ここまできると天晴れとしか言えない。

(いつそ清々しいものがあるな。…しっかし、彼女を真似して眼鏡女子が急増中かあ。眼鏡女子拡散中…ね。まるでツイントールズがデビューした時と同じみたいじゃ…!?)

瞬間、総二はパチンと脳内になる電球が灯り、あつと叫びそうになった。口から歯ブラシが落ち、ゲホゲホとむせてカーペットに歯磨き粉が落ちるのにも気付かずに、総二は立ち上がっていた。

(そうだ…彼女の人気の爆発ぶりはツイントールズとほぼ同じ…いや、そのまんまじゃないか!)

改めてみると、彼女の強すぎる属性力はテレビ越しでもはっきりと感じることができた。総二の心の中にあるツイントールが感度ピンピンで反応している。

ツイントールズはアルティメギルと初戦から数日と経たない内に

爆発的な人気を得た後、ツインテールにする人達で世間は溢れた。そして善沙閨子もまた、一月弱という僅かな時間にここまで人気を伸ばし、世間には眼鏡をするファンで溢れている。この2つのケースに共通しているのは…主役である人物が尋常でない程の属性力の持ち主であることだ。

そう——それこそティルギアを起動できるほどの強大な属性力持ちの人間であることだ。

ツインテイルズが戦えば戦う程、活躍すればするほどにツインテール属性が拡散し、世間のツインテールの人気上がるように、彼女もアイドルという活動を通して眼鏡属性を浸透させている。仕事をすればするほどに、『芸能界』という名の戦場に立つたびに彼女の名声は面白いように広まっていく。

そうになると、彼女がここまで急速に人気になったのも納得だ。彼女はツインテイルズと同じ要領で人気を得ていたのだから。そのカラクリは総二自身が一番体感している。

そして、ほんの僅かの間だが、対峙した時に感じた属性力と今テレビの画面越しで感じている属性力——それらが完全に一致する人物が、総二の記憶の中でたった一人だけ存在した。

「そうか…君は…アイドル、善沙閨子は…ダーク、グラスパーなのか…！」

頭の中でこの考えが浮かんだ瞬間、アイドル『善沙閨子』と戦士『ダークグラスパー』がイコールでつながった。ダークグラスパーはティルギアの複製であるグラスギアを所有しているといっていた…すなわち、彼女もまたとんでもない属性力の持ち主であることの証拠となる。

そして、一つの問題が片付くと次々と謎が解けていく。ダークグラスパーは最初の対峙の際、去り際にこう言ってきたはずだ。

『わらわは、人間に仇なす存在としてアルティメギルの軍門に下った訳ではない。わらわは、わらわの守るものの為、戦いを選んだのじゃ』
彼女は彼女の目的があつて、活動している。そして真の目的は——

「眼鏡属性の浸透と…その奪取…！」

守るものの為に戦っている。あの言葉の真意に、総二はようやく気が付いた。

（彼女は人間の属性力を守ろうとしているんじゃない…アルティメギルから守ろうとしているんだ!! 自分の愛する属性力を、自分の手で支配するために…!）

アルティメギルの手になど触れさせてなるものか、という思いがあるのだろう。自分の愛する属性力をアルティメギルに奪われるのを避ける為、自らの手で奪う。そして眼鏡属性を全て奪った時…彼女の支配は完了する。

その手口はまさに、グラスパー支配者だ。

「けれどよ…それは、そのやり方は間違っているぞ…ダークグラスパー…! 属性力は…お前だけの物じゃないんだ…!!」

総二はグツと顔を食いしばりながら、画面の中の闇子を睨んだ。そして、テロップで表示されている明日のライブ会場を克明に記憶することにした。

今ならまだ間に合う…止められるという、一つの願いにすぎるように。

第51話 ライブとツインテール

夢を見ていた。

光太郎の頭の中ではグルグルと色々な映像が断片的に回っていた。まるでメドレーのように次々と映像が切り替わっては流れを繰り返している。まるで映画館のスクリーンで一度に別々の映画を見ているようだな、と光太郎は他人事のように感じていた。

今日の全校集会の時のひと騒動、部室での相談、理事長室への殴り込み、逃げ出した自分、放課後のケルベロスギルデイとの戦い、幼女の三つ編みをツインテールへと戻した時の光景…実に濃密な回想だった。

やっぱり女の子の髪は年によって色々勝手に違うんだな、などという無駄な知識を噛みしめっていると、突然場面が変わった。

光太郎は、何も見えない暗闇を全力で走っていた。目的地は分からず、手元にはしっかりと焰色のツインテールを握りしめている。

そして走りながら、光太郎は背後から何かの気配を感じていた。それは誰かの視線だったのか、それとも誰かが自分を追いかけているのかも定かではなかったが、確実に何かがいるということだけは感じ取れた。立ち止まって振り向きたいと思ったが、何故かその行動に移ることができない。確認したいのに、それを見ることだけはどうしてもできないでいる。只々前に進むことだけを強いられていた。

光太郎は悲鳴をあげたが、声がかくでない。そんな後ろからはじりじりと何かが近づいてくるような感覚がし、何かが恐るべき警告をしている…。必死で逃げているのにも関わらずその距離は広がらず、むしろ狭まっているようだ。

すると後ろの何かは光太郎に近づき、何かを話しかけてくる。誰の声だかは分からず、頭の中にガンガンと鳴り響くが、その殆どは意味不明だ。何とか聞き取れたのは、この単語だけだった。

『ツインテール、ツインテール、ツインテール…』

だが光太郎はそんなことを言われることよりも、一刻も早く目を覚ましたかった。ツインテールは分かっているんだ。そんなことより

も目を、覚まさせてくれ：目を、目を、目を！

「！」

その瞬間、光太郎の目はカツと開かれたのと同時に、ばねに弾かれたように飛び起きた。どこか遠い場所から駆け戻ってきたかのようにその動悸は激しかった。

「夢…？」

焦点が合わない目を数回瞬きしてから、再度目を開いてみた。

テスト対策用のノートやプリントと共に、愛用の財布とすっきり型が古くなつた二つ折りタイプの携帯：所謂、ガラケーが置かれているテーブル、数か月使い込んだためか少し汚れてきた座布団、部屋の隅にある小さめの本棚には辞典や参考書が並んでおり、その奥にはゲームの攻略本や愛読のコミックと一緒に、同居人には内緒で買っている『週刊ツインテール』なる雑誌がこっそりと隠してある。そして、そのすぐそばにはノートパソコンの前でネコのように丸まって寝ているレイチェルの姿が、カーテンから漏れてくる朝日に照らされていた。

間違いない、ここは自分の家であり、現実だ。さっきの訳の分からない光景はただの夢だったんだ。

それを確認できると、少しだけ冷静になれたが、快適な目覚めには程遠かった。一晩中どころか、数日にも渡って悪夢を見続けてきたような気がする。目を覚まして、まだその悪夢の一部が継続しているみたいな気分だった。

枕元にある目覚まし時計を見てみると、時刻は午前8時22分：平日ならば学校にいる時刻だが、今日は休日。もう少しだけ居眠りをしてもいい時刻だった。

だが、あの悪夢のせいで完全に目が冴えてしまっており、2度寝をする気にもなれなかった。そして何よりもぐう、とお腹がなることで空腹を思い出し、睡眠どころではなくなってしまうた。

(そういうえば、ケルベロスギルデイ対策用の会議とテスト勉強のせいで夕飯をともに食べていなかったんだっけか…)

昨日の記憶が確かならば、夜は間食用に買い込んでおいたスナック菓子しか食べていなかった気がする。ここ数日の間、ケルベロスギル

デイ対策の会議とテスト勉強に追われる毎日のせいで、食欲が湧かないでいたのだ。

レイチエルには冷凍しておいたおかずとご飯をしっかりと食べさせたが、夕飯も適当にすませてしまっており、飯らしい飯は口にはしていなかった。どうりで腹が減る訳だ。

レイチエルを起こさないようにゆつくりと立ち上がると、何か軽うつまもうと冷蔵庫へと向かうが、現実には残酷だった。

「……………飯が、ない……………」

なんと冷蔵庫はおろか、冷凍庫にまで食材が見当たらなかった。いざという時の為に冷凍しておいたご飯も一人分しかなく、戸棚を探っても食べられるものは存在せず、麦茶と氷しか目立つ物が見つからなかった。後はご飯にかけるふりかけくらいか。

（……………そういえば、最近、買い出しに全くといっていいほど行っていないかった……………）

最後に食材を買ったのは……………確か、2、3週間前ほどだっただろうか？ いつかは行かなければならないと思っただけなのだが、それがずるずると引きずったまま……………今朝を迎えてしまったのだ。確か昨日レイチエルに出したのが最後のおかずだったはず……………。

「買い出し、行かないきやな……………」

ぽつりと呟き、所持金の確認の為に冷蔵庫脇の戸棚にある通帳の残高を確かめようと立ち上がった時、テーブルに置いていた携帯電話が、チカチカと点灯していることに気がついた。

「……………」

ランプの点灯具合からメールの受信だろうか……………？ など思いつつ、光太郎はテーブルまで近づいて、携帯を掴んだ。二つ折りの機体を開くと、メールの送信相手は光太郎がよく知る相手からだった。

「ノブ……………」

そのメールの送り主は、弟の信彦だった。弟がメールだなんて珍しいもんだな、と光太郎は思いつつ、画面を見つめる。受信した時間は昨日の夜10時ごろであり、その頃はバリバリテスト勉強対策に追われていたため、携帯など見ている暇がなかった。

「……」

画面を見つめる光太郎の目が、ゆっくりと見開き——そして、呆れた色へと変わった。

「…なんで、なんでこんなことをわざわざ俺に教えるかなあこの弟は…？」

…メールの内容はあまりにもくだらなく、馬鹿馬鹿しかった。

それはノブのお気に入りアイドル、善沙闇子の大規模なライブに行く為に、現在深夜バスに乗って移動していることが綴られていた。人生初の深夜バスに浮かれ、はしゃいでいるらしく、その様子をメールで兄に伝えたかったらしい。

それに関しては別に何にも問題はない。初めての深夜バスで寝れるかどうかなど不安そうな弟の内容は大変微笑ましいのだが…P.S. (追伸) と書かれたその続きに問題があった。

『P. S. そういえば兄さんは闇子ちゃんのことをどれくらい知っている？ まさか名前くらいは聞いたことあるよね？ 闇子ちゃんの魅力は…そう、何と言つても眼鏡なんだ！ レンズという文明の利器の素晴らしさを改めて僕に教えてくれたのは何を隠そう、闇子ちゃんな訳であつて、そのきっかけは深夜1時にやっている深夜番組の…』

…あまりにも長々しいそれは追伸の意味を成しておらず、むしろこつちがメインに思えてくる。

(一度でも俺が『この子に興味がある』って話題に出したことがあつたか？テスト期間も近いし、ケルベロスギルデイに頭を悩ませている自分の身にもなつてくれよ…)

液晶画面の中では『深夜バスなう』という説明文と共にやけにはっちゃけた服装で映り込んでいるし、足元にあるカバンからはサイリウムが何本も確認できた。その顔は大変生き生きとしており、その顔には当然の如く眼鏡がかけられていた。

『決戦は明日のライブ』と意気込んでいるその姿は、まるで戦に赴く武士か、あるいは戦場で行進をする兵士を彷彿とさせる…そう思うと、弟がもの凄く頼もしい奴に見えてきた。

「…やつぱり、ノブのお気に入りアイドルはライブ開くくらいに売れてんだなあ…」

本で行われるライブの会場は、電車を乗り継いでいけば1時間足らずで辿りつける所にある為、あいつが日帰りでなければノブに会うことも出来たかもしれない…と頭の片隅で思いつつ、携帯をテーブルに置くと、戸棚にある通帳を取り出すためにキツチンへと戻った。

今の光太郎にとっては興味の薄いアイドルの話題よりも、通帳の残高とどうやってこの空腹を満たそうとする方が重要だった。

——その弟が、数時間後にとんでもない事態に巻き込まれるとも知らずに。

※

「闇子ちゃーん!!」

「こつち見てー!!」

今巷を騒がせている人気アイドル、善沙闇子初の大規模なライブ：野外会場には数万人もの人間が詰め寄せており、数万分の一、その中の一人として総二はこのライブに参加していた。

「みんなー！ 今日ハライブに来てくれて、ありがとー!!」

「ウオオオオオオオオオ!!」

興奮の坩堝に包まれる会場内だったが、総二の顔は複雑だった。目の前にいる闇子の髪は総二が何よりも好むツインテールであり、本来なら飛んで喜ぶはずなのだが、それが敵では素直には喜べない。

自分だけがアイドル善沙闇子の正体に気がついてるのはいい気がしないものだ。この熱気も、歓声も、笑顔も全てがまがい物に見えてしまう。

（何か裏があるんじゃないか…？ こんなに大規模な会場でのイベント。何かをやらかすような気がしてならないんだよな…）

わざわざ本来あった予定を蹴ってまでこのライブに参加したのは、大規模なイベントで何かアクションを起こすのではないかという疑惑があったからだ。

当日券が比較的取りやすかったのも、余っていたのではなく、出来るだけ多くの観客を集める必要があるからではないか。野外会場にしているのは自分の声や周囲の動きがドームなどで行うよりも伝わりやすいからではないか？　など、状況に嫌な予感がしてくる。全てが自分の思い過ごしであればそれでいいのだが…。

「…あの」
「？」

ちよんちよんと肩を叩かれ、思わず横を向くと、隣に立っていた数歳下のような少年が心配そうな顔をしていた。

「次、曲始まりますよ？　パフォーマンスの準備はしないんですか？」

「え？　あ、いや、俺は…」

…困ったことになった。

総二はアイドルやタレントなどを好きになったことは無い。勿論、コンサートやライブの経験など皆無であり、振り付けはおろか小道具の準備すらしてきていない。会場内にあった物販には色々なアイテムが売ってはいたが、当日券を買うだけで精一杯だった総二にそんなものを買う余裕などない。

もしかしたら、一人だけ浮いている自分にいちやもんをつけようとしているんじゃないか。会場内では変に目立ちたくはないのに。

「…あの、もしかして今日が初めてですか？　眼鏡、かけていませんし」

「え？　ええ、いや、その…：…まあ、はい」

返答に困って適当に返したのだが、その途端に少年は嬉しそうな顔になった。

「ああ、やっぱり！　僕の初めの頃と感じが似てましたから!!」

慣れ親しんだ感じと眼鏡の柄が印刷されたTシャツを着ているその風貌から、ライブの常連らしい。その顔には当然の如く眼鏡があった。

少年はバッグをこそごと漁ると、応援用の照明器具——所謂、サイリウムを数本、総二に手渡した。

「よかったらこれ、使ってください。あつ、曲が始まる前にあらかじめ

折っていた方がいいですよ、始まってからだと折る暇なんてないですから」

「いや、俺は…」

「遠慮なんてしなくてもいいですよ。僕は予備も含めて20本以上のストックがありますから。こういうライブでは、騒いだ方が楽しめますよ」

「あの、そうじゃなくて…」

「あつ、振り付けのことですか？ 知らなくたって大丈夫ですよ、適当に合わせるだけでもオーケーですから。本当に完璧にやつてる人なんて、一部だけですよ」

「いや、だから…」

「あつ、もう始まりますよ!!」

次の曲のイントロが流れ始めると隣の少年は訓練されたような動きでスタンバイを始めた。そして、闇子が歌いだすとウオー！ と雄叫びを上げ、サイリウムと身体を動かしていく。

(…ツインテールを見たり、語ったりするときの俺って、周りから見ればこんな感じに見えるんだろうか?)

周りの熱狂に全くついていけない総二は、まるで言葉の通じない原住民の群れの中に迷い込んでしまった気分だった。

受け取ったサイリウムもどう使えばいいのか分からず、とりあえずマラカスを振る要領で適当に振りながら、隣の少年の踊りを真似、見よう見まねの振り付けを行う。

「…?」

そんな少年をよく見ていると、どこかで見たことがある気がした。どこかの誰かに似ている、そんな感じがする。

『コンタクトも、レーシックも、全宇宙から消し去る♪』

「消し去るー!!!」

コーラスにも率先と応える隣の少年。一層と激しい動きをしたせいか、かけた眼鏡がずり落ち、ちらりと素顔が見えた。

(そうだ…眼鏡をとって、数センチ背を伸ばして、髪型を変えて、ちよつと目つきを変えれば——光太郎にそっくりじゃないか)

珍しいことがあるもんだ——初めて来たライブでクラスメイトにそっくりなファンと会うだなんて。でも、性格は光太郎とは似ても似つかないな。あいつは普段は真面目だから、こういう所に来たら何をしていたか分からずにうろたえるに違いない。…いや、案外吹っ切れると大騒ぎするかもしれないな、あの理事長室の時みたいに。

『許せるのは眼鏡だけ♪ それ以外は、許さない♪』

「「許せないー！！」」

振り付けの中に眼鏡とツインテールを強調する仕草に周りの観客はメロメロだ。まるで洗脳しているみたいに歓声が激しくなっていく。幸いにも光太郎とツインテールのことで頭が一杯な総二には周囲の興奮に飲まれることなく、一人冷静だった。

（最近、避けられている気がするし…：やっぱり、俺がツインテール部なんて物に誘ったから落ち込んでいるのか…？ あれ以来、慧理那の家庭事情にも巻き込んだし、変な追っかけには振り回されるし…それに、光太郎はツインテールのことを話題に出してほしくないみたいだし…）

総二の心境とは裏腹に、会場の熱が最高潮に達した、その時だった。

「きゃ——！！？」

突然空から何かか猛スピードで降って来て、そのままステージに直撃した。ステージで歌っていた闇子の悲鳴と粉みじんになった木材が紙吹雪のように観客席に降り注ぐ。

何かの演出だろうか？ と、どよめきだす観客であったが、粉みじんのの中から現れた三つ首の怪人の姿が白日の下にさらされた。

「エ、エレミアン!?」

「きゃ——！！ 誰か助けて——！！」

いかに世間でのエレミアンの危機感がお気楽状態でも、いきなり至近距離で敵つい怪人が現れれば、パニックは起きてしまう。しかも、アイドルの悲鳴というオマケ付きであれば、その効果も一入だ。

先ほどまで闇子に対する歓声で包まれていた会場が、一転、飛び交う悲鳴で埋め尽くされていった。観客は我先にと逃げ出し、ステージの周りにはあつという間に無人となった。

総二も人ごみの中を縫う様に移動してステージを離れると、ポケッ
トからトウアルフォンを出し、早速トウアールへと連絡をかける。

「トウアール！ 俺の目の前でケルベロスギルデイが現れた!! 直ぐ
に愛香と慧理那にも連絡を!! 場所はアイドルの屋外ステージだ!!」
『こつちでも感知していますが…総二様、何故その場に現れると分
かったのですか!?! やっぱ、私との勉強会を蹴ったのも、何か理由
が…!!』

「悪い…独断専行してしまって…後で全部話す!!」

話すだけ話して通話を切ると、隣にいた30代ぐらいの男性が心配
そうにこちらを見ていた。

「…君、気を確かに持ちなさい！ 延々とツインテールツインテール
と連呼していたが…心配ない！ テイルレツドとテイルファイヤー
がもうすぐ来てくれるから!!」

「あ…はは、そうですね…」

一応そこはツインテイルズが、と言って欲しかったところだが。そ
してやはり総二が持つトウアルフォンには早急な改良が必要だと思
われた。愛香が持っている野獣語変換も嫌だが、かといって総二のツ
インテール語変換がいいという訳ではない。

「じゃ、じゃ俺は失礼しますね」

総二はそそくさとその場を離れると、人ごみがあまりない場所を探
すと共に、隣にいた光太郎似の少年を探していた。彼の無事を確認し
たいのと、折らずに振っていたサイリウムも彼へと返したかったのだ
が、結局見つけられずに、売店近くの手ごろな大型パネルの後ろへと
身を隠した。そして、悪あがきに看板から身を乗り出して人ごみを見
渡してみたが、それでも見つからない。

…見つからないのならばしょうがない。彼が無事に逃げたこと
を心の中で祈りつつ、総二は左腕のブレスを構えた。周りの視線がス
テージに集中している今こそが絶好の変身チャンスだった。

「…テイルオン！」

念のために普段よりも声のボリュームを下げながら変身を完了す
ると、天高くジャンプ。そのままの勢いでケルベロスギルデイのいる

ステージへと着地する。

「現れたな、ケルベロスギルデイ！」

「むう、今日はやけに早い到着だな、テイルレッドよ！」

闇子Ⅱダークグラスパーだとすれば、ここからが作戦の肝だったはず。ケルベロスギルデイが何か目立ったアクションを起こす前に駆けつけることが出来たのは不幸中の幸いだった。

「これで手間暇かけたダークグラスパーの作戦もおじゃんって訳だ。ライブで何かやらかそうとしているらしいが、そうはさせねえぞ！」
「…確かにその通りだ。今日、ここに貴様が現れる前に、私の作戦は失敗に終わってしまった。このライブが開幕した時点で、作戦は水泡に帰っていたよ」

ケルベロスギルデイは三つの頭全てを垂れ、しょんぼりと打ちひしがれていた。地獄の番犬というよりは打ちひしがれた子犬のようだった。

「お前の…？」

「欲目をかきすぎたのだ。彼女なら眼鏡だけでなく、三つ編みも拡散してくれると期待して夢を託したのだが、それが原因で路線がぶれてしまった…初めから眼鏡を最大限に引き出す演出に徹しなかった、私の落ち度だ」

「…ちよつと待て。まさか、善沙闇子のプロデューサーってお前だったのか!？」

「そういえば善沙闇子も途中で三つ編みに路線変更していたが…まさかこいつが一枚噛んでいたとは予想できなかった。」

「〜！ 本当なら、10代女子のファンの比率が圧倒的に高くなるはずだったのだ！ 眼鏡だけでなく三つ編みも広まるはずだったのだ！ しかし、2つの属性力のぶつかり合いで変に路線がぶれてしまい、本来のターゲットとは程遠い男性ファンばかりが増えてしまうといった結果に…!!」

確かに、今日のライブで盛り上がっていたのは男ばかりで、女性ファンはそんなにいなかった記憶がある。

「ダークグラスパー様には合わせる顔がない…この未熟者の腕を信

じ、一分の狂いも無くその要求に応えてくれた彼女の仕事を、私自身が台無しにしてしまった」

遂に善沙閨子がダークグラスパーだという証言を得たものの、あまりの落ち込み様にレッドはつい同情心が芽生えてしまう。

「で、でもよ、ダークグラスパーは眼鏡属性グラスなんだろう？ ほら、観客は皆眼鏡をかけていたぞ!! 三つ編みの拡散は無理だったけど、眼鏡は充分拡散には成功しているじゃないか!」

「あのような、愛無き紛い物の眼鏡を見ても、ダークグラスパー様は喜びにはならない」

「…ええつと、伊達眼鏡じゃ駄目ってことか？ 別にいいじゃないかよ、アクセサリーの眼鏡だったとしても」

「ではレッドよ。ツインテールを愛する貴様は、ウィッグのツインテールが広まっても嬉しいか?」

「ど、どうだろう、似合えばいいと思うけど…」

確かに言っている事も分かるが、それとこれとは別の問題だろう。あくまでもウィッグのツインテールは、髪の毛の短い女の子が触れるきつかけとしての役割としては、必要だとは思わが…。

「それでは属性力は育たないのだ…あくまでも一過性の移り気、紛い物の心。そんなことでは例え、広まったとしても属性力を宿してなどいない」

「うっ…」

ツインテール一筋なレッドには耳が痛い話題だった。確かにそのような心配事も分かる気がする。いくら広まったとしても、そこに愛が無ければツインテールは単なる髪型にしかならない。それでは真に広まったとは言い難い。

「いつか大人になる日が来る以上、限りある少女時代を無碍にしないで欲しいのだ。三つ編みは…三つ編みは…そう、三つ編みはね! 女の子を女の子たらしめる聖なる髪型なのよ! 教科書に乗せて指導を徹底しない、この世界の教育方針はあまりにずさんよ!!」

ケルベロスギルディは急にヒートアップし、熱く語りながら身体をくねくねと動かし始めた。

「この世界はね、もうツインテールの独壇場なのよ！ アルティメギルにとつては、それでいいのかもしれないわ。でもね、それじゃあ刺激が足りないって思わない!? 普段はツインテールでいいかもしれないけれど、偶には色々な髪型を楽しんだっていいと思わない!?」

「そ、そうかもな…」

以前、慧理那がツインテールを解いた時、光太郎は『これはこれでアリなんじゃないか』みたいなリアクションをしていた。あの時は『友よ、お前は悪魔に魂を売ったのか!?』と叫びたかったが、ケルベロスギルデイの必死の主張を聞いてみれば、なんとなくだがその気持ちも分かるかもしれない。

「はっ!? ち、違うの……あ、いや、違うのだ。これは、本当の私ではなくてだな…」

と、ヒートアップしていたケルベロスギルデイは突如我に返り、慌てて口調を取り繕い始めた。やっぱり、奴は三つ編みのことに関するとなると口調が変になる……いや、もしかしたらそっちの方が素なのかもしれない。

「…口調なんて気にするなよ。無理に他の奴に合わせなくたって」

「そうもいかないのよお！ 色々と肩書きが出来るよね、いくら優秀でもオカマ口調じゃ威厳がないだとか、周りの士気に関わるとかで上層部から苦言ばかり…」

「そ、そんなことないって！ ありのままのお前も結構いいぜ!」

遂には体育座りでいじけ始めてしまった。そんな雰囲気にも飲まれてしまい、レッドも隣で体育座りをして空を見上げる。

「三つ編みは……このまま世界から廃れてしまおうのかしら……?」

「まあ、中々広まらないっていう気持ちはわかるけどさ……今は大人になってもツインテールを続ける人も増えてきているみたいだし、三つ編みだってもうちよつと頑張ってみようぜ」

「頑張れるかしら…」

「大丈夫だからさ、泣くなよ」

レギュラー争いに負けてしまったスポーツ少年を励ますマネージャーみたいな絵面の光景だ。いつの間にかケルベロスギルデイは

体育座りのままレッドを見つめてみた。すると照れくさくなったのか、えへへと鼻をかいている。

…なんだこのカオスな光景？ と一人、心の中でツツコむレッドであったが、こんなものはまだまだ序の口であった。

「————ユニットだわ」

「はっ。」

何をぼつりと呟いたのかと思えば、ケルベロスギルデイはおもむろに立ち上がり、その豪腕でレッドの肩を強く掴んだ。

「そうよ、まだその手があったわ！ あなたとダーちゃんがユニットを組めばいいのよ!! ああ、なんで気がつかなかったのかしら、あなたってすごーくすーごく三つ編み映えしそうなツインテールじゃない!!」

「お前それ、本末転倒じゃねーか!!」

「恥ずかしいかもしれないけれど大丈夫よ！ 何ならお母さんのファイヤーも混じってやってみる!? 親子同士の競演、この手もあるわよ!!」

「絶対嫌だ————!!」

一体全体、どうして対立している者同士でアイドルユニットを組ませようという発想が思い浮かぶのだろうか理解できない。

「あ…でも、それは無理だったわねえ、残念ながら…」

「? …おい、どういうことだ」

ファイヤーの話題が上がった途端に、しゅんと首を垂れるケルベロスギルデイ。そんな気遣わしげな空気に、レッドは嫌な予感がした。「…その、ね？ ダーちゃんはツインファイヤーのことをよく思っていないらしいのよ…ほら、あの子のマネージャーにこっぴどく虐められていたみたいだし、ツインテールズ内でも結構実力があるから…だからね？」

ケルベロスギルデイは消えそうな声で続きを言った。

「もしかしたら…今日がツインファイヤー最後の日になるかもしれないのよ…」

※

時刻は少しばかり遡る。

光太郎は市内にある大型ショッピングモール（クラブギルデイの戦いを繰り広げた）に、バスを乗り継いでやって来ていた。適当にフードコートで朝食を済ませると、食材売り場まで足を運び、特売品を中心に回り始める。

（低脂肪牛乳が特売：でも、この牛乳、レイチエルは嫌がるんだよなあ。とりあえず、俺用に1パックだけ購入して、少しだけ高いのをもう一つ…）

羽織ってきたパーカーのポケットに突っ込んであるメモを取り出し、必要な食材だけをカゴの中へと入れていく。確認した通帳の残高は多少の余裕はあったものの、考えなしで買ってしまっただけであつという間に赤字になってしまふ。2人での同居というものは意外に金がかかるものなのだが、それが最も反映されるのが食費だろう。

（…鶏肉が安いのか。肉系は最近食っていないし、2パックくらいは買って…後は鉄分不足を補う為に牛レバーと魚と。あつ、もやしも特売か…）

食材を選んでいる最中でも、快適な気分には程遠い。まるで悪夢の一部がタールのようになってとりと光太郎の心の中を犯しているような、そんな気分だった。

「ありがとうございますー」

数分後、大量の特売品をカゴに入れ、レジを通過した時も光太郎の心は晴れないままだった。こういうどうでもいい時に限って、レジを打ったバイトの子が妙に可愛くて、髪型がツインテールであった。いつもなら心の中で歓声を叫んだり、喜びの舞いの一つでも踊りたい気分だが、今日に限ってはツインテールのことはあまり考えたくなかった。

家から持ってきたエコバッグに戦利品を突っ込みながらも、頭の中を支配しているのは、今朝見ていた夢だった。

夢の中では、手にはツインテールだけを持ち、真つ暗闇を全力で駆

け抜けていた。後ろからは誰かが自分のことを猛烈な勢いで追いかけていた。あと少し目が覚めるのが遅ければ、光太郎は後ろの何かに捕まっていただろう。

（俺は、何から逃げていたのだろうか？　そして、どこへ向かおうとしていたのだろうか？）

そう思うと、猛烈な悲しみが襲ってきた。そして、それを考えないようにと、顔を叩いて無理矢理頭の奥へと押しやる。

総二たちとも、あれ以来どこかぎくしゃくした関係が続いている。自分が悩んでいる原因についてしっかりと説明することが出来ないでいる以上、変に近づくのは藪蛇になる可能性もあって、難しい状況だった。

戦利品を詰め終えたエコバッグを持ち上げ、使ったカゴを戻すと、光太郎はさつきと立ち去ろうとした。

「…おお、丹羽ではないか!!」
「？」

突然、背後から見知ったような声がかげられ、ふと振り返る。

「…なんだ、尊先生ですか」

「なんだとはなんだ。一応臨時ではあるが、私は貴様の担任なのだぞ？」

光太郎の後ろには、相も変らぬメイド服姿の尊が立っていた。その後ろには付き添いなのか、何名かのメイドがいた。

「お知り合いですか？」

「私の教え子だ。少し話がしたいので、一人にさせてくれないか？」

「…手を出すのであれば、私たちが立ちはだかりますよ？」

「ここではやらん。この店長に『次、騒ぎを起こしたら出禁にする』と言われている。そうなると本業の方にも影響が出る」

「……………分かりました」

後ろのメイドは疑心暗鬼な視線でその場を去っていった。…つまり裏を返せば、『このモール内でなければ、何かしらの問題行動は起こす』ということでもあるのか。

「さて久しいな、丹羽！　こんな所であったのも何かの縁だから、一つ

婚姻届でも…と言いたいのだが、ここでは騒ぎを起こせないのだから、勘弁してくれ」

一体尊は過去にここで何をやらかしたのだろうか、聞いてみたいという好奇心がほんのちよっぴり湧き出たが、では教えてあげようと言われても面倒なことになるだけなので、黙ったままにしておく。

「…先生はどうして、ここにいますか？」

「む？ 私の本業を忘れた訳ではあるまい。私は教師である以前にメイドだぞ？ 今日メイド全員を引き連れての買い出しだ。いくら勤めている職場が金持ちでも、こういう特売の日で少しでも金銭を浮かせるのが私たちの仕事だからな」

「はあ」

「丹羽も買い出し…らしいが、随分と量が多いな？ 一人暮らしらしいが、そんなに買い込んで食品は大丈夫か？」

「…兄弟、みたいな奴がいるんで、その分多いんですよ」

「従妹みたいなものか？」

「そんな感じですよ」

「ふむ…」

光太郎は根掘り葉掘りと聞いてくる尊の観察眼を舐めていた。買物の量で一人暮らしではないことを察するとは…。それが即、怪しいことに繋がるとは限らないが、万が一に光太郎の家を確認することにならなければいいのだが…。あそこにはレイチェルもいるし、あいつの体臭なんかも部屋に混じっているし。

「まあ、意外にしっかりとっているみたいで安心したぞ。ここ数日、お嬢様や津辺が貴様を心配していたのだからな」

「はあ」

そういえば、尊は急に逃げ出した光太郎のことを見ていた一人だったか。

「週明けにはしっかりと顔を出してやれ。何も言っていないが、観束もお前を気にかけているのだぞ？」

「……………」

「ま、私が言いたいのとはそれだけだ」

尊の声に呼応するように、ぴよこんとツインテールが揺れる。そんな尊のツインテールに光太郎は目を奪われそうになったが、反射的に目を逸らした。

(悩んでいる日に限って、どうしてツインテールばかり…！)

無性に苛立ちが募っていく。あの理事長の一件以来、自分の周りにある何もかも調子が落ちてきているような、そんな気さえしてくる。

すると、家電売り場でバラエティ番組を垂れ流していたテレビの映像が、突然切り替わった。

『えー、番組の途中ですが、ここで臨時ニュースをお伝えします』

? そんな導入から始まった臨時ニュースに、自然と光太郎の視線がテレビへと映った。

『本日未明、××市にある野外ライブ会場に、エレメリアンが姿を現しました。更に会場に続くありとあらゆる交通網が封鎖されており、警察はアルティメギルと呼ばれている組織が何かしらの妨害を行ったと見て…』

画面の中では線路上に立って進路を妨害している戦闘員や高速道路の料金所でやってくる車を外へ出さないようにしているエレメリアンの姿があった。

『本日、ライブ会場ではアイドル、善沙闇子の大型ライブが企画されており、この妨害で生じる金銭損失は軽く——』

女性アナウンサーが発したある一つの単語に、光太郎はフリーズしてしまった。

「善沙……闇子……?」

確か、ノブが好きなアイドルだったはずだ。そこで今日ライブがあると、ノブもアナウンサーも言っていた。そこで楽しんでくると、ノブはメールを送ってくれた。そこがエレメリアンに占拠された?

何のために? 目的は?

分からないことだらけだ。

「お、おい丹羽……テレビに釘付けになるのは構わないが、その距離では目に悪いぞ……」

アナウンサーが言っている言葉が半分も理解できず、酷く間抜けな

面でテレビを眺めている光太郎に、尊は的外れな言葉をかける。

だが、光太郎はただ一つだけ理解できた——弟が、戦闘に巻き込まれているかもしれない。その考えに至った時、光太郎の行動は早かった。

「…これ、預かっていてください」

「はっ」

「お願いします。後で必ず取りにきますから」

エコバッグを差し出され、目を白黒させている尊に無理矢理押し付け、出口まで走り出した。

「取りにつて…おい！ これ生物も入っているじゃないか!? それにどこに行…!」

尊の反論にも聞く耳を持たず、駆け足で屋外駐車場へと飛び出した。辺りに人がいないことだけを確認すると、パークのポケットからテイルドライバーを取り出して、テイルファイヤーへの変身を完了させる。

「…くっそおおおおおおおおおおお!!」

腹の底から飛び出した怒りの叫びと共に、テイルファイヤーは駆けだした。

よりによって…なんでノブが巻き込まれるんだ！ それも画面に映っていたのはケルベロスギルデイ！ あいつが何かやらかしたのか!?! あのアイドルは俺に災厄しか齎さないんだな!!

交通網が封鎖？ それが何だ、ハイジャックしても俺は会場へと行くぞ。地下しかルートがないのなら、穴を掘ってでも行くぞ、弟が巻き込まれるかもしれないんだ、地を這ってでも行くぞ!!

近くの電柱を足場に、看板を伝って、時には走るトラックの上に乗って…まるで宙をかける獣のように光太郎はギアが示す最速ルートを駆ける。信じられない程のスピードで走るその姿を捕えられる人がはたして存在しただろうか。

本当ならレイチエルの転送を使えば良いのだが、そんな簡単なことすら頭の中から抜け落ちていた。今すぐ自分が駆けつけなくては、弟は二度と帰ってこないかもしれない…そう思ってしまった、ますます怖

くなる。

「！」

僅か5分足らずでたどり着いた高速道路脇の大型ビル。その屋上にある看板を蹴りだし、猛烈な勢いのままガードレールの上へと着地した。着地時の衝撃でベキツと凹んだような嫌な音が聞こえ、ごめんさいとだけ呟き、走りを再開する。

(まだか、まだか……！)

馬鹿正直に高速道路を走っては絶対にたどり着けない。車の合間を縫って走るのも時間がかかる。ならば、車もない、人も通らないこのガードレール上を走るのが最短距離だ。

道路沿いに一直線に伸びているガードレールは、テイルファイヤーが駆け抜けるには絶好の舞台だった。

「はやく、早く、速く……！」

自分でも何を言っているのかよく分かっていなかった。ファイヤーの耳には、周りの声や雑音などは一切入ってこない。聞こえるのは自分が走ることで生じる、ブーツがガードレールを叩く音、そしてギアが導き出す最短ルートの案内だけだった。

このままの勢いのまま走れば、あと10分ちよつとで会場につけるだろう。高速道路脇にある電線を伝い、その上を走ればあつという間だ。

…そう、余計なトラブルさえなければ、の話だが。

「……？」

走りながらファイヤーの背後…上空数メートルの上から、何かがチカツと光る感じと何者かの気配を感じた

最初はただの太陽光か？　と思っただが、何かが違う。その煌めきは複数確認できたし、何よりも徐々に徐々に近づいてくる。

「！！」

そしてそれが自分の進行ルートに当たる、と直感で感じたファイヤーは猛烈な勢いで急ブレーキをかけ、そのままガードレールから道路へと飛び出した。

瞬間、ガードレールは白い閃光に包まれ、爆ぜた。爆音と空気がビ

リビリと振動する感覚を転がりながらもはつきりと感じ、遅れて近くに居た人たちの悲鳴と怒号が聞こえてきた。

幸いにも被害はガードレールだけであり、死傷者はいなそうだった。

「ミサイル!?!」

そのままガードレールを走っていれば、間違いなく自分に当たっていたことを想像して、ゾツと青い顔をする。まさか、エレメリアンがいきなりぶっ放してくるとは思わなかったのだ。しかも、重火器などといった近代兵器をいきなり使うだなんて。

「…くそつたれ」

うつすらとした粉塵の向こう、ちょうどガードレールを挟んで反対車線側に、巨大な影が見え、忌々しく睨んだ。

奴が、ミサイルを撃ち込んできた犯人だ。そして、立ちふさがる番犬という訳か。速く、急がなければならないのに…!

白銀の装甲、排熱の音と着地の軋み、そして粉塵の中から光らせる瞳と共に、その姿を現したロボット——メガ・ネプチューンⅡ Mk.ⅠⅠもまた、見定めるかのような視線でジツとテイルファイヤーを見つめるのだった。

第52話 有線とツインテール

「最後って…?」

「ええ、言葉の通りよ。皆のヒーローのテイルファイヤーは今日、この会場に来ることはないわ。永遠にね」

レッドは信じられないような顔でケルベロスギルデイを見る。今、彼が発した言葉が間違いであればいいのに、と祈りながら。

だが、その祈りは直後に返された言葉によつて、無残にも否定された。ケルベロスギルデイはバツが悪そうな顔を浮かべながら、言葉を続ける。

「本当はね、私だって反対したかったわよ。テイルファイヤーは倒すにはあまりにも惜しい子だし、生かせる魅力がいくらでもあったもの。でもね、ダーちゃんは私よりも地位が上だし、作戦の直接的権限も持っているし…それに、長い目で見たら今のうちに倒しておいたほうがいいって意見もあるらしいし…話によれば、あなたとファイヤーは別の派閥にいるらしいじゃない?」

「……………」

レッドは黙って頷いた

「じゃあ、レッドちゃんはテイルファイヤーがどうして戦っているかは知っている?」

「それは、俺たちと同じでツインテールを守るために…」

レッドが何を当たり前なことを…といった顔をしたのと同時に、ケルベロスギルデイの6つの目が一斉に細ばった。

「テイルファイヤーがツインテールを守るために戦っているのは誰だって知っているわ。それを抜きにして、本当に彼女を信用できるのかって聞いているのよ」

「!」

「今までずっと一緒に戦っていて、みんなすっかりファイヤーを信頼しているみたいだけれど…本当に味方なのかしらねえ? …ファイヤーのバックアップをしている子ですら、あなたたちは最近知つたって話じゃない? どうしてそこまで頑なに正体を隠そうつてす

るのかしら？ 何かファイヤーにも後ろめたいことがあるからなんじゃない？」

ケルベロスギルデイの表情がいじめられっこを追いつめるみたいな嫌らしいものへと変わっていく。下を向き、何かを考えているレツドに徹底的な揺さぶりをかけていくかののように言葉を続ける。

「レツドちゃんだって、心のどこかでは本当は味方なんかじゃないって思っているんじゃないの？ あなたのなかにある信頼も『テイルファイヤーは正しい』っていう思考停止に近い前提に基づいた物なんじゃないの？」

「……………」

突然問われたその問いに、レツドは黙るしかなかった。

確かにファイヤーはツインテールを守るために戦っている。ワイバーンギルデイ戦でもそのことは大声で発しており、今や世界中の間がその事実を知る所となっている。ピンチの時には颯爽と駆けつけて助けてもらったこともあるし、周囲が奇人変人のオンパレード状態な中でも比較的普通とも言える振る舞いもしており、常識的な思考をしていることも分かっている。

…だが、分かっていることと言えばこれだけなのだ。最も長くファイヤーと接しているレツドですら、世間一般の人々が周知として知っている事実とほとんど変わらないことしか知らないでいる。その正体や出身地、ましてや変身前の性別ですら。一般人が知らない情報とさえば、その変身者のバックボーンにはトゥアールの親友であるレイチエルという少女が絡んでいる事くらいだ。レイチエルの話から察するに、そこまで悪い人間ではないののだが…これはあくまでもレイチエルの意見なので、直接見たことのないレツドにとっては裏付けの取りようがない。

ファイヤーという少女は『信頼』できるのは確かなのだ。今まで何度も助けてくれたし、自分の身が傷つこうとも庇ってくれたこともある。一緒に怖がってくれたことも、抱き着いてくれたこともある。

しかし、ケルベロスギルデイの言う通りに絶対に『信用』できるとは必ずしも断言できないのもまた事実であり、見逃せないような怪し

い点もいくつかある。例えば、オウルギルデイ戦で腕の擦り傷を指摘された時、不自然に逃げた時だ。あれは、何か都合が悪いから逃げたのではないのか？ あの傷は、自分の正体に繋がると感じたから逃げたのではないのか？ 彼女が正体を隠し続けるのは後ろめたい何かがあるからではないのか？ だが…。

『あ、ええと、その、君！ 大丈夫!!』

『ええと、テイルレッド、ちゃん?』

『俺は今からあいつと戦う。…テイルレッド、君はどうするんだ?』

『だから君は…好きなだけ撃つてくれ!!』

しかし、レッドは…いや、観束総二はテイルファイヤーの言動を嘘や演技だと思いたくなかった。人として、そして何よりも同じツインテール属性を持つ者として。

あのレインボーブリッジでの叫びは映像越しでもツインテールへの想いや力を感じることはできた。ツインテールを愛していなければ、あのような事を発することは出来などしない。

そして、レッドと同じかそれ以上にツインテールを愛しており、互いの立場の違いから戦わざるを得なかったドラッグギルデイもまた、こう言っていた。『ツインテール好きに悪い奴などいない』と。

『限られた時間の中で、本当に自分が納得できるまで悩みに悩んで、そこで決断を出せばいいと思うよ』

——悩まずとも、答えなど最初から出ていた。このことは、最初から解決していたことではないか。

千の言葉より一のツインテール。ツインテールを見るだけでなく、その輝きを感じ、その声を聞くだけで、ツインテールへの想いを理解するだけで、良いか悪いかは判別することができる。ならば、本当に信じるべきなのは自分の想い、ただそれだけ。信じるべきは目の前にいるケルベロスギルデイの言葉などではなく…。

「…落ち込んでいる所悪いけど、私にもツインテイルズを足止めするっていうお仕事があるから、戦ってもら——」

「そーいうことに耳をかしちや…駄目よっ——!!」

「!?」

「かまーお!!」

ステージは空から降り注いだ衝撃波で爆裂し、ケルベロスギルディは空高く舞い上げられ、そのまま奇妙な悲鳴と共に地面へと強烈に叩きつけられた。それと同時に、ブルーとイエローも空から着地する。

「ごめんなさいですわ、レッド! 先ほどからここら一体で通信妨害が発生してて…そのせいで遅れましたわ!!」

「…?」

レッドはのろのろとギアを操作してトウアールへと通信を送ろうとするが、ザーザーとノイズが混じり、まともに通信が取れなくなっていた。どうやらアルティメギルサイドも通信を妨害して徹底的にファイヤーを隔離しようとしているらしい。

「とりあえず、通信の方はトウアールが急ピッチで対策をやってくれて…:ねえ、聞いているの!?!」

「ど、どうしたのですか!?! お腹でも痛いのですか!?!」

イエローとブルーの説明も耳に入らないのか、ブツブツとレッドは下を向いて何かを呟いているだけだ。不審に思い、2人が聞き耳を立ててみるとようやくその声が聞こえてきた。

「…怪しいのは、確かなんだ。でも、俺に気を遣っているのか分かんないけど、たびたび子ども扱いするし、突っ込んで怪我ばかり追うし…!」

「!?!」

何のことを言っているのだ? 話が見えてこないブルーとイエローの2人は頭を?マーク全開に首を傾げる。

「あら、やつぱり…?」

「それになー!」

「!?!」

レッドの声のトーンが1オクターブ高くなり、ビクツとケルベロスギルディの身体を震わせた。

「どこの誰かなんか俺は全然気にしないのにいつまでも正体を明かさないし、パンチの打ち方も受け身の取り方も危なっかしいし、いつも他人のことばかり考えて自分のことは二の次で! 俺の気持ちも、

少しは考えろよなコノヤロ——!!」

息継ぎなしで一氣にファイヤーへの不満を叫びに叫んだレッドはゼーゼーと息をむさぼる。

「え、えと…」

「色々、溜まっているかしら…? もしかして、レッドって今日は女の子の月に一度は来るあの日…?」

全員が呆氣にとられて中レッドは剣を取り出すと、切っ先をケルベロスギルデイへと向け、ニヤツと笑った。

「…これが俺の本音だよ。けど、俺はそれでもファイヤーを信じるって決めてんだ! どの誰だろうが、あんたが何を言おうが関係ない! 俺が信じないで、誰があいつを信じるっていうんだよっ!!」

大声で啖呵を切ったレッドは、ブン! と剣を薙ぎ払う。

「むこうで何が起こっているのか分かんないけど…さっさと片付けて、ファイヤーを連れ戻す!! お前なんかには負けねえ!!」

※

そして、高速道路のど真ん中ではファイヤーとメガ・ネの両者が睨みあっていた。背後にはミサイル発射の際に生じた火柱がゴウゴウと燃え、高速道路から脱出できない一般人は車を降りて、睨みあっている2人を遠巻きに見守っている。

「レイチエル? おい、レイチエル?」

ファイヤーは小声で何とか通信を繋いで、目の前にいるロボットの情報を少しでも得たかったのだが、一向に反応がない。返ってくるのは耳をつんざくノイズばかりだ。

「くそっ! さっさと会場に行かなきゃならないのに…!!」

これ以上通信しても無駄だと悟り通信を切ると、再度ロボットの方を見ようと視線を上げた瞬間、メガ・ネプチューンⅡ Mk. I I——メガ・ネは足のスラスターを吹かし、殴る体勢のまま、一氣に距離を詰めてきた。

「っ! 踏み込みなしで!」

これまで戦ってきたどの敵にも当てはまらない奇妙な動きに面食らってしまう。

当たり前と言えば当たり前だ。敵は生物ではなくロボット。人間ともエレメリアンとも当てはまらないカテゴリーに当てはまる以上、予備動作なしで接近することなど朝飯前なのだろう。

「この……！」

ファイヤーも数瞬遅れて拳を構えるが、メガ・ネの右手首がギギギツ！ と軋みを上げると、ガシヤンと手首部分だけが高速回転を始める。まるで巨大なハンドミキサーのようなそれは、奇しくもテイルファイヤー十八番の右手ドリルに類似している。

「ドリル!？」

それを見たファイヤーもまた右手のアーマーを展開し、すつかりお馴染みとなったドリル形態へと移行する。

そして、白銀のドリルと紅色のドリルが空でぶつかり合った。ギャリギャリと火花を散らして、激しく激突する両者に、観衆は大いに盛り上がる。

「おおー！」

「ドリル対ドリル!!」

激しい攻防が始まった。メガ・ネは鋭い攻撃を正確に繰り出し、ファイヤーは敵のドリルの直撃を避けるようにガードし続ける。

ギャリギャリと火花を散らして、激しく激突する2つのドリル。

ぶつかり、弾かれ、薙ぎ払われ、ガードしたかと思うとすぐさま貫こうとする互いのドリルの動きは早すぎて、素人目からは互角に見えるだろう。

「くそっ……こいつ!!」

「……………」

だが、戦っているファイヤーからすると互角とは言えない。最初こそ上手くガードできていたのだが、それを察したメガ・ネはすぐさま作戦を変更。ファイヤーが決定的な隙を見せるようにと、揺さぶりをかけてきたのだ。

一回一回ぶつかり合うごとに、メガ・ネはドリルの回転数を上げ、

ファイヤーが嫌がるかのような攻撃へと修正してくる。まるで心を見透かしているように攻撃の合間もただじつとファイヤーの顔を見つめるメガ・ネにどんどん追い込まれていく。

「っ！」

十回ほどのぶつかり合いの後に、遂に拮抗は破られた。ドリル同士の真つ向勝負に負け、螺旋の大波に弾かれたファイヤーは後方へと押しやられる。ドリル同士の対決に負けた右手装甲は刃こぼれが起きたかのようにパキンとヒビが入った。

その隙を見逃さないメガ・ネは左手を殴るように突き出した途端、左手は有線式のロケットパンチになって射出される。

「っ！ ブレイクッ……！」

後方へと押しやられるファイヤーは避ける動作に移行することができず、吹き飛ばされながらも急いで迎撃しようと右手装甲を喰らせる。

「シュートオオ!!」

右手から放たれた無線式の拳と、左手から放たれた有線式のロケットパンチが空中でぶつかり合い、ビリビリと生じた衝撃の末に互いの拳は弾かれた。

ファイヤーの右手装甲は弾かれながらも途中で静止し、元あった場所へと戻ろうとするが、メガ・ネの伸びきった左手のワイヤーはぶつかった衝撃のせいでたるみが生じていた。

「っ！」

それを見たファイヤーは咄嗟にワイヤーへと手を伸ばし、そのまま掴む。そしてそれを一本釣りの要領で手繰り寄せて、空いている左手でメガ・ネの顔をぶん殴ろうとする。右手のドリルは起動まで僅かに時間がかかることは先ほどの動きから情報を得ている。大火力のミサイルも近接さえしてしまえば、自分をも巻き込むために使えないはずだ。

(まずは一発、ぶん殴って——!?)

カウンターパンチの体制に入ったファイヤーは、ふいに何かを感じた。手繰り寄せられ、もうすぐ殴られるはずのメガ・ネの視線は相変

わらずファイヤーの方を向いている。すると、チカツとメガ・ネの瞳が光った。まるで太陽に反射して煌めく、眼鏡のように――。
(やばいっ!?!?)

と、焼け付くような感触が背筋を走り、ファイヤーは反射的にワイヤーを手放して後ろへ下がる。と、次の瞬間、先ほどまで自分がいた空間が、目から放たれたビームが貫通していた。一体どこまで貫いているのか、なるべくは考えたくなかった。

まるで小学校の理科の授業で習った虫眼鏡で太陽光を集めるような光景だった。ただし、威力はあれの数百倍以上はあるだろうが……。が、それを意識する間もなく、メガ・ネの胸部部分が開き、中から大量の何かが射出され、ファイヤーの周囲を囲む。

「なんだこれ…!?!」

見た目は少し大きめの鏡みたいに見えた。特徴とえば、その表面が大きめな眼鏡のレンズにも見えることだったが――。

そのレンズの分析を終える前に、メガ・ネが目からビーム射撃を再開してきた。

「! くっそ、レイチエルに分析して…」

動きは早い、ビーム攻撃の軌道は直線。ファイヤーは軽くステップを踏んで射線から逃れた――はずであった。

「もらわなっ…!?!」

なんと、直線に進むはずのビームがいきなり鋭利な角度で軌道を変え、ファイヤーの背後にぶち当たった。まさかの出来事に、ファイヤーも顔を歪ませる。

「何が起こって…!?!」

今度は背後の方で何かが光ったと思った瞬間、いきなり額にビームが直撃し、前髪が少しだけ焦げた。

(ビームが、曲がった…!?!)

だが、今度はかろうじて空中で突然軌道が変わったのを目撃できた。そして、そのカラクリも大雑把だが理解できた。

(レンズを経由して、鏡のようにビームを反射させているのか…!?!)

だが、そうしている間にも、メガ・ネはビームを反射してきた。そ

の一撃、一撃がレンズに反射して複雑な軌道を描き、ファイヤーウォールを張る間もなく四方八方から襲い掛かる。そのどれもが決定的な一撃には成りえないものの、じわじわとファイヤーを傷つけていく。

「あがつ…!?!」

そして遂にメガ・ネのビームが、ファイヤーの脚部を一閃。右脚部の装甲を剥がし、その内部の機器を引火させて爆発。その衝撃から膝をつくという決定的な隙をさらしてしまふ。

「……………」

動きが鈍ったファイヤーにメガ・ネは渾身の力を込めたビームを一直線に放ってきた。

「……こだつ！ ファイヤーウォール!!」

ファイヤーは熱線による痛みには耐えながら、渾身の力を込めて左手を突き出し、正面にバリアを展開させた。

（やっぱりそうだ……!）

今の攻撃を反射させなかった理由。それはビームをレンズに経由させて反射させる都合上、あまりにも威力が高い攻撃ではレンズごと壊してしまう危険性があるからだ。そのリスクを避けるためにも、高出力のビームは反射させずに直接打ち込まなければならぬのだ。——そしてそういう攻撃にこそ、この技は役割を果たしてくれる。

炎の壁にぶち当たったビームはズンツという重い衝撃に軋みを上げるが、何とかその熱量を吸収し、巨大な円形状の塊へと変化。

「このおおおおおおおおおおおおおお!!」

そのまま押し出すようにして吸収した熱量の塊を射出した。放たれたビーム以上のスピードで迫りくる熱量に、あの眼メガ・ネもただでは済まないはずだ。たとえ避けたとしても熱量そのものが迫りくるのだから、かすりさえすればどこかしらのダメージは追うはず——。

「……………」

メガ・ネは反射された熱弾をなんともないように眺めていると、突然奇妙な動きと共に、見る間にその姿を変えていく。

人間には不可能な角度での手足の可動を行い、頭部を胴体へ収納、各パーツの収納及びに伸長をコンマ数秒で終わらせ、ファイターフォーム人型形態からメガネウインガーと呼ばれる戦闘機形態への変形を完了した。フォームチェンジ

(変形した!?)

ここに来ての新たな戦法に、状況はさらに悪化の一途をたどった。こんな戦い方をする奴の相手など、想定外すぎた。豊富な武装とビーム反射だけでも厄介なのに、更に変形機能まで持っているだなんて。メガ・ネは迫りくる熱量が届かない大空までヒラリと急上昇すると、足に収納されていたブースターに火をつけて、これまでに以上のスピードでファイヤーめがけて急加速してくる。

「速っ……!」

ファイヤーウォールを張る間も与えないほどの急加速を得た戦闘機型のメガ・ネが、流れるような動きで再び人型へとチェンジ。ブースターの加速とその重量を活かしたドロップキックが、とつさに構えたファイヤーの右腕へと直撃する。

(右手、が……!?)

バキバキとヒビが広がる嫌な音の末に、ファイヤーの右手装甲はあっけなく砕け散った。

その衝撃を完全に受け止めきれずにその身体は後方へと弾き飛ばされ、受け身も取れずにごろごろと地面を転がる。

「……」

しかし、メガ・ネは追撃の手を休めない。

身体に装備されているサブスラスタを数度噴射して加速の勢いを殺して姿勢を安定させると、肩に装備されたランチャーでロックオンし、吹き飛ばされるファイヤーめがけてミサイルを全弾解き放った。

それぞれが白い尾を引きながら、まっすぐ接近してくるミサイルに、転がり続けるファイヤーはどうすることもできずに……。

「……………」

次の瞬間、最初のミサイルが爆発し、放たれたミサイルは次々と誘爆を起こし、その大爆発に驚いた市民は蜘蛛の子を散らしたように逃

げ惑う。ミサイルの影響で火の海で横たわっているファイヤーをメガ・ネはただただジツと見つめていた。

※

(…あかん！ やりすぎてもーた……)

全弾打ち尽くしたミサイルポッドをパージし、赤々と燃える高速道路をジツと構えている冷徹な風貌とは裏腹に、メガ・ネの心情は穏やかではなかった。

(手加減できる相手じゃないことは分かっていたんやけど、やっぱり遠距離攻撃は使用するの駄目やなあ…女の子の肌を傷つけてしまふもん…。うっかり変^{フォームチェンジ}形したのもアカンかったし…そもそも、うちが何で戦っているんやろ…？ 怪我させたら、やっぱり慰謝料とか払わなあかんのかなあ…?)

どうしてこうなってしまったのか。話は昨日の深夜まで遡る。

自分の主であるイースナ——ダークグラスパーから与えられた命令は『テイルファイヤーの見極め』であった。

テイルレッドはトゥアールではなかった…この事実を知ったイースナは悲しむことはなかったものの、幸か不幸か、次の標的とされてしまったのはテイルファイヤーだった。

『この一件、裏でテイルファイヤーとレイチエルが何らかの糸を引いているのではないか?』

イースナの疑問は最もだった。それはかつてのトゥアールのパートナーにして、現在はツインテイルズのマネージャーを担当しているレイチエルの存在が大きく関係していた。

彼女は直接姿を現し、トゥアールの現状を知りつつも、それを隠す嘘をイースナに伝えた。

『つまりは…わらわを騙すためにあやつらは口裏を合わせたのじゃ!! わらわはただトゥアールとちよつとおしゃべりをしていただけなのにな!』

『う、うくん。向こうはイースナちゃんのおしゃべりの頻度がとんで

もないほど多いから嫌がつているだけやと思うんやけど…』

『あの幼女好きなたウアールに限ってあり得ぬ！ きつとたウアールはあの女狐に何か弱みを握られているに違いない！ きつとたウアール本人もわらわとメールや電話をしたがつているに違いないのじゃ！』

『いや、だからな、イスナちゃんはもうとつくにストライクゾーンから外れているからそれはありえな…』

ほぼ…というか完全にストーカーの領域に足を突っ込んでいるイスナにメガ・ネの説得は届かない。普段は引きこもりのエロゲーマニアなのだが、一度エンジンに火がついてしまうと保護者のメガ・ネですらどうすることもできはしない。

『それに！ あの女狐と手を組んでいるテイルファイヤーも怪しい！ あのレイチエルに最も近いツインテイルズはあやつらしいではないか！』

『まあ…確認できる通信のやり取りなんかでも、ファイヤーがレイチエルはんとパートナー関係であうことは明確な事実らしいけど…うちはそんなに悪い奴に見えへんけどなあ…』

『姿勢が嘘をついていたレッドに似ている！ これだけで怪しいという証拠は十分すぎるわ!!』

『う、うくん…』

『あの極悪レイチエルのパートナーのことじゃ！ きつとんでもない尻軽ビッチが変身者に違いない！』

…こうしてイスナは『普段からレイチエルに一番近いテイルファイヤーもまた、事の真相を知っているに違いない』という結論に至り、メガ・ネにファイヤーの事の真相の見極めを依頼したのだ。そして次第によっては倒してもかまわないと命じられ、最後には人前では決して喋るなど念押しされて。何でも『お前の声と喋り方はシリアスな空気を台無しにする』とのことらしい。

(…ま、ファイヤーの手の内も明かしておきたいっていうのもあるし、他でもないイスナちゃんの頼みやからな…)

このためにライブ会場に繋がる交通網を手中に収め、直接会場に来

たならば、他のツインテイルズと孤立させる作戦だった。レイチエルからの横槍でまた嘘を言われないようにと、テイルファイヤーの周囲数百メートルには通信妨害用のジャマーも用意するという徹底ぶりだ。万が一会場内に直接転送してきたのならば、ケルベロスギルデイに頼んでファイヤーだけをこちらへと転送させる準備も万全だった。

しかし、いぎ拳を交えてみると、メガ・ネは面食らった。ファイヤーの戦い方や振舞い方…そのどれを取ってみても、イースナが語っていた尻軽だの、極悪だのという言葉とは程遠い。メディアで見ると、テイルファイヤーの姿があった。

(…やっぱり、嘘をつくような子じゃない気がするんやけどなあ)
ロボットであるメガ・ネには、イースナと同じ属性力である眼鏡属性グラスがその体内に存在している。

そのせいか、イースナまでとは言わなくても、ある程度ではあるが人の心を読むなどの能力が備わっている。それで裏付けてみても、やはり人を貶めたりなどといった言動は見られないでいるのだ。

(…でもなあ、少し気になることがあるんやけど…)
それはあの時、ブレイクシュートを左手のロケットパンチがぶつかり合った時に、ファイヤーの心の奥底から聞こえてきた声の原因だった。

その声は2種類あった。一つは『早くいかなきゃ』という焦りの感情の声、そしてもう一つはラジオのノイズのようにざわめく『ツインテール』というどこか屈託とした感情の叫び。

(あの時は驚いてしもーた…)
あのうめき声をなんと例えればいいのかは分からない。

あの声は——ただ怒りや憎しみの感情だけでなく、どこか屈託した好意の感情も入り交じったような——そう、愛憎一体の叫びと言えばいいのだろうか？ 相反する2つの感情がコンクリートミキサーで交じり合っ**て**ぶちまけたような感覚は、メガ・ネにとって感じたことのない感情だったのだ。

(やっぱり、人間って色々複雑なんやなあ…って!?)
ゆらり、と炎の中で動く影にメガ・ネが気付いた瞬間、テイルファ

イヤーは地を蹴り、炎の中から姿を現した。

(やつぱり、打たれ強いのは本当だったんやな…！　まだ、勝負は続行かい！)

姿を現すと同時に、メガ・ネは左手を構え、有線式ロケットパンチを放つ。

「！」

迫りくる拳を大きく屈んで回避すると、ブースターを吹かしてファイヤーは加速した。背後のタンクローリーに拳がめり込むのを尻目に、ファイヤーは見る見るうちに距離を詰めてくる。

(それは…読んでいたでえ！)

ピン、と張って巻き戻されるワイヤーとトラックはファイヤーごと巻き込もうと見る見るうちに距離を縮めていく。『火気厳禁』と書かれた大型タンクごと、ファイヤーにぶつけようという魂胆だった。「手繰り、寄せた!」

万が一衝突して火花でも散らせて最後、タンク内に入っているガソリンに引火、周囲一帯は火の海へと変わる。メガ・ネやファイヤーだけならばどうにかなるかもしれないが周りにはまだ取り残されている一般人もおり、その人たちまでも巻き添えにしてしまう。

「くっせ!!」

ファイヤーは後ろを一瞥すると、走っている勢いを利用して前方へとジャンプした。このまま走っていれば衝突は避けられないと思ったらしく、空中に逃げようという考えらしい。

(そうやな…そういう行動を取るハズやな…！)

だがメガ・ネの方程式は狂わない。ファイヤーの性格を考えれば、周囲を火の海に変えるリスクを背負ってまでも前進するとは考えられなかった。だからこそ、メガ・ネは爆発などさせる気など毛頭ないのに関わらず、タンカーごと引張るという無茶をやらかしたのだ。

テイルギアに備え付けられているブースターも加速と姿勢安定が主な用途であり、空中飛行するには向いていないこともイースナの持っているグラスギアの解析から知っている。つまり、宙に逃げれば逃れようがない——テイルファイヤーはメガ・ネの戦術にまんまと

はまってしまったのだ。

(これで——終いや)

そしてメガ・ネは空いている右手を構え、左手と同じように射出した。

「右手も…伸びるのかっ!?!」

ここに来て、ダメ押し of 隠し玉にファイヤーは驚愕した。まさか、右手も同じような構造になっているとは思っていなかったらしい。

伸ばされた腕はファイヤーの足を掴み、その自由を奪い、装甲から飛び出したクローが文字通り爪を立てて固定した。そして、伸びきったワイヤーが収縮すると同時に肉薄する間合いまでファイヤーは引つ張られる。

「…まだまだああああああああああつ!」

「つつ!」

だが、この状況下でもなお反撃を諦めないファイヤーに、メガ・ネは悪寒が走るような衝撃を受けた。その目は絶体絶命の危機でありながらもその目は諦めの色を映してはいない。

一体、何がファイヤーの背中を押し、奮い立たせているのだろうか？
メガ・ネは混乱する頭でそれを考えるが、答えは出てこない。

「ブースト…全開っ!!」

片足を巻き取られながらも腰のブースターを最大に吹かし、空中でバック転の体制に入った。空いている片足を構え、メガ・ネの頭部を狙いに定める。そう——この土壇場でサマーソルトキックを繰り出そうとしていたのだ。

「あ、足技あ!?!」

拳ではなく、足。拳がメイン武器のファイヤーのとっさの行動に思わず声が出てしまう。

(…アカンっ!!)

メガ・ネが苦し紛れに放ったビームがファイヤーの身体を紙一重で外したとその頭部に強烈な蹴りが入ったのはほぼ、同時だった。

そして外れたビームはメガ・ネが出しっぱなしにしてあったレンズに数回反射し、そのまま接近してくるタンカーを突き破り——。

「…あつ!?!」

両者の背筋が凍ったのとはほぼ同時にタンカーに積まれているガソリンに引火——メガ・ネとファイヤーの周囲は大爆発に飲まれた。

第53話 火傷とツインテール

「あいつ、どこいっちゃったのかしら…」

テイルファイヤーとメガ・ネが大爆発に巻き込まれてからほどなく。その相方がピンチに巻き込まれているなど、微塵も気付かないでいるレイチエルは朝から姿が見えない光太郎を心配していた。それもそのはず。朝起きたら、隣のベッドはもぬけの殻であり、玄関からは光太郎が普段履いているスニーカーだけが忽然と姿を消していたのだから。

一応、テイルリストには何度も通信を送っているのだが一向に返信してこないし、もう一つの連絡手段である携帯電話もテーブルの上に置きっぱなしのままだ。

外出する際はいつも持ち歩いているはずなのに、どうやら今日はそれを忘れてしまったらしい。さつきからメール受信を示すランプがついたり消えたりを繰り返しており、そんな些細なことですら、レイチエルは苛立ってしまう。

「勝手にどっか行くなって奴じゃないはずなんだけどね…それにしても携帯を忘れるだなんて…」

用意されていた朝食を食べ終え、食器を流しに運びながら、ぶつぶつと文句を言っていると、ふと、変な感覚を味わっていた。

（もうすぐ3か月経つちゃうのよね…何だかあつという間というか…）

この世界に来てから2か月以上が経過している。自分の世界がアルティメギルに侵略されてから、数々の並行世界を旅し続けてきたレイチエルにとって、これほど長い期間の滞在は経験がなく、最近では、レイチエルは自分でも、この世界にずっと住んでいるかのような気さえしてくるのだ。どこか頼りなさげなあの光太郎も、自分の親戚かなんかじゃなかったっけ？　とうっかり錯覚してしまうようなこともある。

天才が故に幼くして親元を離れざるを得なくなり、人生の半分以上の時間を一人で生活してきたレイチエルにとって、まるで家族みたい

な存在がごく近くにいるというのは新鮮なことだった。もしかしたら、自分の人生の中で何かがほんのちよつとだけ違っていたらありえたかもしれない、当たり前前の幸せがここにはあった。

(……考えてみれば、初めてまともにも接する男と同居している私……)

なんだかとっても奇妙ね……と思いつつ、食器に水を張り終わると、最近でつきりつけていなかったテレビのスイッチを押した。

そのままテレビから流れる音をBGMに、今日はアップデート用のデータでもまとめあげようかしら……と思った矢先、どこかの局のアナウンサーの切羽詰った声が聞こえてきた。

『えー、今速報が入りました。テイルファイヤーと謎のロボットが戦っていた高速道路が突如大爆発を起こし、周囲に甚大な被害が発生しているとのことです！ 高速道路の周囲には森林地帯が広がっており、山火事などの二次災害が引き起こされる可能性があります！ 付近にお住いの皆さんは決して近づかないでください！』

テレビの画面には、アルティメギルが占拠した高速道路の一部分が火の海に包まれていることを伝えるニュースが映し出されていた。敵の攻撃がタンカーに積まれていたガソリンへと引火し、大規模の爆発事故を引き起こしたらしい。テレビをよく見ると、高速道路に取り残された市民が蟻の子を散らせたかのように逃げ惑い、何とか脱出をしようとしているがそれを戦闘員が阻止している映像が見えた。

「……どういふこと!？」

レイチェルの表情も切羽詰ったものへと変わるのにそれほどの間はいらなかった。そのまま、床に置いてある愛用のノートパソコンを起動させるが、そこにはアルティメギルの出現の反応が一切関知されないでいた。

「……何が起……っているの……?」

アルティメギルの反応は無い。しかし、現にアルティメギルの戦闘員は高速道路に姿を現しており、一般市民の逃亡を阻止している。と、いうことはいつものように何らかの反応が現れてなければおかしいはずなのだ。しかし、レーダーやセンサーは一切の反応を示さな

い。

映し出された映像には、高速道路のあちこちにファイヤーのギアの欠片が転がっているのが確認でき、つい先ほどまであの場所で戦闘が繰り返されてきたという何よりの証拠なのだ…。

「…光太郎は無事なの…!?!」

しかし、肝心のファイヤー本人の姿が見えない。もしかしたら、爆発の衝撃で森林地帯に吹き飛ばされてしまったのだろうか…? 変身が解除されていなければ軽症ですむかもしれないが、万が一一生身のまま地面に叩きつけられたりしたら…。

最悪の展開にゾツと背筋が寒くなったレイチエルは、一刻も早くファイヤーの安否を確かめようと通信を送るが、何故か一向に繋がらない。他のツインテイルズとの連絡はおろか、トウアールにすら連絡がとれなくなっている。緊急用に作っておいた別の回線でも試してみたが、全て全滅。一切の連絡が出来なくなっていた。

(それでも駄目なの…!?! まるでこっちの全てが見透かされているみたいに妨害されている…!)

レイチエルはこの状況にデジャヴを感じていた。頭にひっかかるものがあるのだ。昔、こんな状況と凄く似ているシチュエーションを、どこかで経験したことがあるはず。まるでこちらの手の内を読んでいるかのようにありとあらゆる対策が無効化されているような感覚が――。

『そしてこの爆発の付近にあるライブ会場では、テイルレッド以下3名と先日出現した三つ首の怪人が戦闘を繰り返してきます!』

するとテレビの映像が切り替わり、高速道路の数キロ先にあるライブ会場の空撮映像へと切り替わった。ギリギリまでズームされたその映像から、ステージ上でレッドとケルベロスギルデイが激しくぶつかり合っているのが辛うじて分かった。

『この会場では本日、アイドルの単独ライブが行われており、集まった観客の安否が――』

「…!?! これって…イースナ!?!」

そして、善沙閨子という名前と共に出た少女の顔写真を見た瞬間、

今までの疑問の全てが氷解した。

アイドルとして変装をし、更には認識攪乱を使って本人とはばれないように対策をしているらしいが…かつての世界で、奴とは嫌という程絡んでいたせいで、レイチエルは真つ先にその正体に気付いてしまった。

(あいつ…いやけにおとなしいと思っていたら…こんなことやっていたなんて…！)

今回の作戦には奴が一枚噛んでいるのはどう考えても間違いないかった。

イースナは属性力を抜きにしても、トゥアールとレイチエルの2人で仕掛けたメール対策にも難なく対応できる程の素質を持った人間なのだ。あいつだったら、こちらの通信を解析して、それ専用の妨害を行うなど朝飯前に違いない。この通信妨害も、何らかの手段で奴が行っているに違いない。通信履歴を…自慢の属性力で解析でもしたのだろうか…。

…そして、ファイヤーが戦っていたという謎のロボットという情報も気になった。恐らくこれはイースナが放った刺客と考えるのが自然なのだろう…が、詳しいデータが分からない以上、あれこれ考えても仕方のないこと。まずは、なんとしても光太郎の安否を確かめなければならぬ。その為に行うことはただ一つ。

「ふ、ふふ…い… ストーカーのくせに…やけに手の込んだことをやってくれるじゃない…！ ならね、こっちも本気でいくわ…！」

かつて自分やトゥアールを散々苦しめた女に一本取られたという現実、レイチエルに多大な屈辱をもたらした。口元は歪み、目は血走り…本気である腐れストーカーを叩きのめさなければという決意が湧き出てくる。

「屈辱だわ…い… あんな…あんなクソアマに…！」

ぶつぶつと普段は人前で喋らないような単語を口走り、光太郎の前では絶対に見せないような顔つきでキーを叩き、連絡を取ろうとブールのギアへとアクセスを開始するが…数秒も経たずに、画面には通信エラーを示すマークが現れた。

だが、レイチエルはこれを気にする素振りを全く見せずに、ある一つのプログラムを立ち上げた。

「裏コード…承認…」

——その声が認識された瞬間、イースナの妨害をもすり抜ける悪魔のプログラムは起動された。非常用に備え、本人の意志や他者からの妨害などを無視し、レイチエルの意のままにギアへと命令を下す最恐にして禁断の合図が、ついに承認されたのだ。

その命令はただ一つ。『ブルーのギアへの強制介入』、ただそれだけのみ。

「通れ、通れ…！」

僅か数秒の時間の間、祈るような思いだった。この裏コードまでイースナに読まれていたら、突破口は開けない。いけ、いけ、いけ——

「…っ！ よし！ 繋がった!!」

『…嘘っ!』

遂にレイチエルの通信がブルーの元へと届いたのを確認すると、小さなガッツポーズをとる。ブルーもまさかレイチエルからいきなり通信が来るなど思っていなかったのか、悲鳴に近い声をあげる。

かつて、変態トウアールの暴走を止める為に仕組んだこの裏コードが、奇しくも同じ穴の虫である変態イースナの妨害を突破する切り札になろうとは。

『レイチエルちゃん! あなた何でこんな状況で通信なんか出来るの!?!』

「ちよつとした裏技を使わせてもらったのよ…それよりもブルー！」

そつちにファイヤーはいないの!?!」

『…いないわ。あたし達も心配なんだけど、あケルペロスギルデイいつが邪魔をしていて…! あつちはあつちでヤバいんでしょ!?!』

「…あいつから、そつちに連絡は?」

『ないわ…』

悔しそうに話すブルーの顔が歪む。

「なら、トウアールを経由して搜索は出来ない? あいつ人工衛星持っているんだから、空からでも…」

『それが無理なのよ！ さつきから一向に繋がらなくて！ おかげであたし達も…ああ——！ 痛い痛い痛い！』

『あ、あまり動かないでくださいまし、ブルー!!』

『だって、そうでもしなきゃ動けないじゃない!』

『そ、そうは言いましたも…』

『うあ…ツインテール同士で…三つ編み…!?!』

『ふふふ…! アタシの力を込めて編んだ三つ編みはどう!? 簡単に振りほどくだなんて出来ないわよ!? ましてや、ツインテールの戦士が自分でツインテールを切り落とすだなんて出来るはずがないわ!! これで形勢は逆転したわね!』

「……………何がどうなってるの?」

ようやく音声だけでなく映像も映し出されたが、レイチエルは自分が少し見えない間に何が起こったのかが理解できないでいた。

ブルーとイエローは互いのツインテールを編み物のように編み込まれ、背中合わせで縛られたような珍妙な格好で束縛されているし、レッドは2人のツインテールが絡み合い、縄跳びのように交互に揺れている光景に顔を真っ赤にして見入っているし、ケルベロスギルデイは愉悦そうな顔でレッドを誘惑している。さつきまでのシリラスムードが一気に吹っ飛んだ。

この場にトウアールがなくて本当に良かったとレイチエルは思う。もしいたら、『えええええ!! 私のおっぱいはスルーするのに、そんなので興奮するんですか!?!』みたいなセリフが飛び出すに違いない。『あつという間に3対3じゃなくて3対2…いーえ、3対1ね!! ファイヤーがないせいで人数の差もすっかり逆転しちゃったわね!』

『くそっ…また別れやがって…! さつきとファイヤーを助けに行かなきゃならねえっていうのに!!』

ペースがすっかり崩れてしまったレッドを、ケルベロスギルデイは自慢の分身能力で3体に分身して襲い掛かった。

自分自身と息を合わせることなど造作もないのか、縦横無尽な連携でレッドを追いつめていく。

『ブルー！私にお任せください！　そして見ていてください、お姉さま！！』

「……………お姉さま呼ばわりはやめてくれないかしら？」

『多分、レイチエルちゃんが何を言っても無駄だと思うわ…』

イエローは闇雲に動くよりもこの場に留まり、アウトレンジからの援護に徹した方がいいと判断したらしい。肩のバルカンを分身したケルベロスギルデイ目がけて乱射、その内の1体がそれをまともに食らって吹っ飛ばされ、敵の連携が一時的に乱れる。

『イエロー！　助かった！！』

『レッドは目の前の1体にだけ集中してください！　残りは私が！！』

畳みかけるように全身の火器で攻撃するが、ここで肩に装備されているバルカンを撃ちつくしてしまい、とても嬉しそうな表情で肩パーツごと脱ぎ捨てるイエロー。しかし、それが運悪くブルーの後頭部へと直撃してしまった。

『痛い！　…ちよつと！　脱ぐの我慢しなさいよ！』

『けれど、援護射撃はやめる訳にはいきません！　その為には脱衣は致し方ないことですわ！』

『それをイコールで繋げんなって言っているのよ！　子供が見てんのよ！！』

『だからこそこの状況を見て貰わなければ…』

『あなたの脱衣は教育に悪いって言うてるのよ！　もーいいわ！　後はあたしがやる！　髪紐属性！』

ブルーは背部に装備されているリボンを翼（ウイング）に変形させようと、髪紐属性を使って、飛行しようとするのだが…。

『お待ちください、ツインテールに引っ張られて…！！』

『うわ、バランスが崩れ……………あ————！！』

髪に重りを括りつけてあるような状況下で、飛行しようなどあまりにも無謀すぎた。当然体勢を維持できずに、すぐに2人はまとめて墜落。ますます珍妙な体勢へとなってしまおう。

「2人とも何やって…うわあっ！！」

墜落した2人に気を取られてしまったレッドは、3体に分身したケ

ルベロスギルデイの口から放たれた火球を防ぎきれずにモロに食らってしまふ。大きく吹き飛ばれ、ステージの残骸に叩きつけられるレッド。

(…まずい。みんな冷静な判断が出来なくなってる…！)

通信妨害を行ったのはこの為でもあるのかもしれない。

敵は連携に重きを置き、今までの敵とは違う戦法で戦うケルベロスギルデイ。3人が共に協力し、冷静な判断が出来なければ、敵いっこない相手だ。

いつもは漫才的なノリでオペレートしてくれるトウアールがいるが、今日は通信妨害の影響でそれが出来ない。舵を取ってくれる者がいない為、この崩れてしまった状況に対応できないでいるのだ。

(…どうする？　まずはブルーとイエローが自由にならなきゃ人数の差が埋まらない…！　項後属性ネーで三つ編みトライプを解こうにも、三つ編み属性が邪魔して無理でしょうし…レッドも遠距離攻撃でやられたらアウト…。せめて弱点でも分かれば突破口が開けるのに…それに早く、早く光太郎の無事を確かめなければならぬのに…！)　そして、一番落ち着いてなければならぬレイチエルも焦りと不安から、いつもの冷静な判断ができないでいた。光太郎の存在が頭を支配して、カチカチと身体が震える。

(どうしよう、どうしよう——あいつがいなくなったら、どうしよう…)

『は、早くしてよイエロー…この体勢は色々…キツイわ…！』

『もう少しだけ、我慢してくださいまし…！　属性玉——文学属性！』
そんな中、イエローはまるでツイスターゲームの真つただ中のような体勢から無理矢理立ち上がると、属性玉変換機構エレメントを起動させ、今まで使っていなかった属性玉を発動させた。

すると、イエローの顔の前に小さなスクリーンが形成され、そこに簡素なケルベロスギルデイの全体像が映し出され、無数の文字列が表示される。

『…分かりましたわ、ケルベロスギルデイの弱点が……!!』

『え!?』

『敵は1体の時に攻撃しても瞬間分離してダメージを拡散してしまします…3体に分離している時に間髪入れずに全てを攻撃して撃破する！ これしかありませんわ!!』

どうやら文学属性^{ブック}の属性玉は、敵の弱点や能力をスクリーンへと映す解析型の能力を備えているらしい。文字列をあつという間に速読したイエローはケルベロスギルデイを倒す策を2人へと伝える。

『つまり、俺たち3人でピツタリ息を合わせろってことか!!』

『でも、倒し方が分かったところでどうすんよ、レッドの援護だつて満足にできないこんな状況で!?!』

現在のブルーとイエローの体勢では蟹歩きすら出来るか怪しい。そんな状態で息を合わせろなど無理難題とでも言いたいのだろう。

だが、イエローは心配無用だという顔で自信満々の態度を崩さない。い。

『私にいい考えがありますわ！ ですからここは私たちにまかせて、お姉さまは早くファイヤーお姉さまの元へと駆けつけて下さい!!』

「…え？」

まさかの返答に、レイチエルは面食らう。まさかイエローからそんなことを言われるとは思わなかったのだ。

『ブルーとの話を聞いたところ…今、お姉さまはピンチなのでしよう!?! ならば、お姉さまがいるべき場所はここではありませんわ！ レイチエルお姉さまが今することは、ファイヤーお姉さまの元へと駆けつけてあげることですわ！ こんなピンチ私たちだけで切り抜けますわ!!』

「イエロー…」

ツインテイルズの中でも1、2を争う程変態なイエローに言われるとは変な気分だったが、おかげで混乱気味だった頭が少しだけ冷静になれたような気がする。

『後、お姉さまが持っている属性玉をこちらに転送してくれませんか？ それがあれば、あの敵を倒せる技が発動できるのです!』

「…ええ、分かったわ」

レイチエルの指が素早くキーボード上を動くと、プログラムの書き

換えは終わっていた。

レイチエルたちが所有している属性玉を保管しているネットワークに、ブルーのギアが接続できるようになったのだ。これでもう、いちいちファイヤーから手渡しで属性玉を受け取らなくても済むようになる。

『あら、本当にいいの？　せっかくのチャンスを棒に振っちゃって？　そんなことをしたら…』

『分かっているのはあなたですわ！　私たち人間は一人一人では単なる火…それが無数にもなれば、炎となる！　そして、それは私たちも同じ!! 私たち3人は炎となって…あなたという敵を燃やし尽くしますわ!!』

ケルベロスギルデイの挑発にもイエローは揺るがない。

『そしてこれだけは伝えて下さい！　私やブルーもレツドも…!!　みんな…みんながお姉さまたちを信じていますから!!　ツインテイルズとしてではなく、一人の人間として大好きなんですから!!』

「…ええ、伝えておくわ!」

レイチエルはイエローの言葉が終わると共にパソコンを勢いよく折り畳み、とりあえずテレビで流れていた森林付近へと転送しようとして、ふと何かの鳴り響く音が聞こえた。

「……………」

その音源はテーブルの上から鳴っていた。バイブレーションで揺れる携帯と背面の小さな液晶に、新たなメールの受信を知らせる表示が出たのだ。近づいてみると、そこにはレイチエルにも聞き覚えのある人物からのメールだった。

…そしてレイチエルは少し考え、光太郎の携帯を手にとって白衣のポケットに入れると、そのまま姿を消した。

※

頭上の高速道路では火が激しく燃えていた。タンカーの中だけでなく、トラック本体や近くの車の燃料にも引火したのだろうか。だか

ら、あれだけ凄まじい爆発となったとかもしれない。

「くっ……」

悪態を付きながらも、テイルファイヤーは若干傾斜気味になっている森林を駆け下りていた。いや、駆け下りるといふよりはほとんど這っているといつていいかもしれない。滑るたびに乾いた土が身体にかかり、汚れた身体をますます汚していく。

(あのままやられてくれればいいんだけど……)

頭に浮かぶのはあの忌々しいロボットだった。

冷酷無慈悲な攻撃をするのに、変な所で誤射しやがって、爆発に巻き込みやがって……いや、ひよつとしたらあれも計算済みだったのかもしれない。向こうは『まだまだ殺すな、いつでも殺せる。ゆっくり殺せ、楽しく殺そう』的な考えを持っているのかもしれない。だからロボットって嫌いなんだ。こっちは疲れていく一方なのに、向こうは平然としているんだから。

あのロボットの誤射ビームのせいでタンカーは大爆発し、その爆風でテイルファイヤーは高速道路下にある森林へと吹き飛ばされてしまった。幸いにもこの森林にある葉っぱや枝がクツションの役割を果たしてくれたおかげで五体満足にはいられた。そして、下手に留まる事は危険すぎると判断し、斜面をずるずると這い降りはじめたのだ。

しかし、五体満足とは言っても怪我が無い訳ではない。身体のあちこちは切り傷や擦り傷でいっぱいだし、青タンや打撲している箇所もいくつかあった。

……さらにまずいのは、爆発の影響で装甲が覆われていない右手足に火傷を負ってしまったことだ。肌が焼けるように痛く、普通に走るどころか立っていることさえもツライ。だからこうやって、火傷部分が無傷なようにみつももない体勢で撤退に及んでいるのだ。半分、身体ごと引きずりながら距離を取るヒーローなんて前代未聞だろう。

(ちつくししょう……また怪我しちゃった……！)

そつと火傷跡に手を当てると、ずきつと痺れるような痛みが走り、

やっぱり触らなければよかったと後悔する。この間のオウルギルデイ戦の時もそうだが、ここ最近ほんの些細な事でも怪我を負っているような気さえする。

「いや、それだけでない。何故かテイルギアも壊れやすくなっていくような気もするのだ。最初の頃は力任せにぶん殴っても攻撃を受け止めてもびくともしなかったのに、今ではまともな攻撃を受け止めるだけでヒビが入ってしまう。勿論、戦っている敵のランクが一般兵ではなく隊長クラスばかりなのもその原因の一つかもしれないが…。(ああつくそ。またレイチエルに迷惑かけちゃうな)

またレイチエルにギアの修理を頼むことになると思うと、嫌な気分になる。この前に修理してもらったばかりなのに、また壊してしまうだなんて…。

そのまま更に2、3分ばかり進み続けて、ファイヤーはようやく動きを止めた。そつと後ろを見ると、あの燃えている高速道路がずいぶん遠くに見えた。近くには何の動きも無い。耳をすましても、何の物音もしない。

(もしかしたら、逃げ切ったのか?俺、助かったのか?)

ほつと安堵したその時、ファイヤーの問いに応えるようなタイミングで、ぐつと腕に何かが絡みついた。

「!?」

まさか、もう追いついて来たのか!? 突然の事態に混乱し、口から小さな悲鳴が漏れた。すると、「バカ!」と耳元でささやく声と共に腕に加わっていた力が消え、代わりに口を生暖かい手が塞ぐ。そして、ズルズルと少し離れた茂みの中まで身体を引っ張られた。

そこでようやく冷静になれた。あのロボットの腕はこんなに暖かくはなかった。口を塞いでいる手はこんなにも小さくなかった。

「危ないじゃない、光太郎…」

「レイチエル…?」

辛うじて喋った声に反応するように、ファイヤーの口を塞いでいた手がゆつくりと離れた。ようやく辺りを見渡す余裕ができ、ようやく目の前にいるのが…レイチエル本人だということを確認できた。

「悪い…またギアぶっ壊しちゃった…」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！ あんた腕が」

「ちよつと、痛いだけだから…」

「ちよつとじゃないじゃない！」

馬鹿な事を言うな、とも言いたげな口調でレイチエルはファイヤーを叱った。そして、肌に刻まれた火傷や打撲を見て涙目になりつつも、レイチエルは事の一部始終を説明してくれた。

今、ツインテイルズ全体の通信機能が妨害を受けている事、自分が孤立されてしまったこと、向こうは向こうでケルベロスギルデイとの戦闘で苦戦しているということ。

「…それで、お前、なんで俺がここにいるって分かったんだ？」

「森の中をあちこち探し回っていたら、人が引きずられたような跡を見つけたの。後をつけたらあちこちにテイルギアの部品が落ちていたから、多分、あんたじゃないかって思って…」

「ごめん」

「なんであたしに謝るのよ！ とりあえず、火傷の治療をするから、一旦変身を解除して。服を脱がしてから薬を塗るわ」

「…分かった」

ファイヤーの変身を解除すると、身体が一瞬光った後に、パーカー姿の光太郎へと戻った。そつとパーカーの袖をまくってみると、元の身体にもくつきりと火傷の跡が残っている。

「染みるけど、我慢して」

パーカーを脱がされ、あの塗り薬が肌に塗られると、声にならない悲鳴が出た。思わず暴れたくなったりもしたが、グツと歯を食いしばりながら堪える。

下に着ていたシャツも脱がされると、レイチエルはそのシャツを歯で細く裂き、包帯代わりに腕に巻きつけた。

「ちよつと不恰好だけど我慢してね」

「ああ」

光太郎は、自分が泣きだしそうになっているのに気がついた。勿論、傷が痛いというのもあったけれど、大部分を占めるのは物理的な

痛みではなく、心の痛みだった。

「…なあ、レイチエル」

「？」

レイチエルの手がピタリと止まった。

「…俺みたいな奴がさ、ティルファイヤーなんかやっていいのかな？」

気がつくくと、光太郎はそんなことを口走っていた。

——最近の光太郎は失敗や、手をこまねく状況が非常に多かった。

慧理那会長にはティルドライバーを見られるし、理事長の前でツインテールのことを大声で口走ってしまうし、直してもらったギアもすぐに壊してしまって、おまけに怪我までしてレイチエルを半泣きさせてしまっている。

ツインテイルズの皆は確実に成長している。最初は頼りないと思っていたあのイエローですら成長し、すっかり戦えるようになっていく。ただし、成長のベクトルは正しいのかどうかは分からないが…。

それなのにファイヤーだけは、丹羽光太郎だけが成長しているどころかむしろ退化しているような気さえするのだ。今まで出来ていたはずのギアのスペックを引き出せず、あのロボットに一方的にやられて、怪我を負い無様に地を這い、パートナーのレイチエルも泣かせてしまつて。

自分なんかよりもティルファイヤーに相応しい人物が他にいるのではないか？ 例えば、自他ともに認めるツインテール一筋男の総二。自分よりも凄まじいツインテール愛を持っている総二にこのベルトを託した方がいいのではないか——？

「バカ」

「！」

弱音を吐いた光太郎の腕に軽くデコピンをするレイチエル。もつとも、軽くと言つても今の光太郎には数十倍の痛みにも感じられるのだが…。

「あんた、言つてたじゃない。俺、テイルファイヤーだからって…言つたあんた自身が、それを否定してどうすんのよ」

「…俺、そんなこと言つたか?」

「言つたわよ、このバカ」

レイチエルは涙を引つ込めて、怒り心頭の様子だ。忘れてんじやないわよ、このアホンダラといった目をしていた。

「だつてあんた、ツインテール好きなんですよ? 消えて欲しくないんですよ? だから、戦っているんですよ?」

光太郎は何も答えない。いつもなら、何かしら返答するのだが、その気力もないのだろうか。…あるいはその気持ちですら、光太郎の中で揺らぎ始めているのかもしれない。

「…あのね、光太郎。あたしはね、あんた以外のテイルファイヤーは認めないわ。あたしだけじゃない、多分ツインテイルズのみんなだつて認めないでしょうね」

「……………」

「だつて…みんな、あんたが好きなんだもん。強いからとか綺麗だからとかじゃなくて…あんたがあんただから、好きなの。そりゃあ、時々過度な期待で見られることもあるかもしれないし、あんただつてそれが苦しいかもしれない。…だからって、そんなこと言わないで」

「……………」

「あんたが変身するから、テイルファイヤーなのよ。あんただから、あたしも協力しているんだから」

光太郎は黙つたまま、下を俯く。すると、彼女は白衣のポケットから持つてきた携帯電話を取り出し、その画面を見せつけてきた。

「これ、なんだか分かる?」

光太郎の画面を見つめる目がゆっくりと見開かれる。痛む腕など気にせずに、慌てて携帯をひったくつた。

「あなたの弟さんからのメールよ。信彦…だつたけ? それが何通も届いていたわ」

画面をスクロールしていくと、信彦から光太郎宛てのメールが確認できた。避難が完了したよとか、今ツインテイルズがピンチかも…な

どのタイトルの物が何件も。なんと、数分前に送られてきたのもあった。

「あんたの弟さんはすごく几帳面なのね。さつきから携帯が震えてばかりだったわ。そういう所はやっぱり、血が繋がっている兄弟なのかしら？」

：弟は、ノブは無事なのか。少なくとも今のところは、メールを打てるような場所に避難しているのか。

几帳面な弟の性格が幸いし、その安否が確認できたことで、光太郎は少しだけ落ち着きを取り戻していた。

「会場にはあのケルベロスギルデイがいるわ。あんたを襲ったっていうロボットも来るかもしれないし、一人じゃ敵わないかもしれない。あんたはツイントイルズで一番弱いしれない。けれど、たった一人の弟さんくらいは守ってあげられるような、そんな男であって。そんなお兄さんであって」

次の戦いはあたしもサポートに回るわ、これでいくらかはマシンになるわよ：と、レイチエルは笑った。

「そして、戦いが終わったら：弟さんに自分の姿を見せてあげなさい。

元氣：：とまでは言えないかもしれないけど、きつと喜ぶはずよ」

「ああ」

「家族ってそういうものだもんね」

「ああ：」

光太郎は地面に落ちていたテイルドライバーを力いっぱい掴んだ。

さつきの弱音は撤回しなければならなかった。

たった一人の弟の無事をこの目で確かめるまでは、まだテイルファイヤーをやめる訳にはいかない：：そう心に誓いながら、光太郎は塗り薬の痛みを耐える。今は、この火傷をどうにかすることが最優先事項だった。